九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

# 撰分遺跡

1987年3月

佐賀県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

# 撰分遺跡

1987年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第87集
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

# 撰分遺跡

山の上古墳群
中村谷遺跡
出口A遺跡
西出口遺跡
鴻ノ巣遺跡
原田遺跡
今出川A遺跡
今出川B遺跡
大工田古墳群
十井手遺跡
撰分遺跡

1987年3月

佐賀県教育委員会

# 序

この報告書は、佐賀県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて、昭和51年度から実施した九州横断自動車道建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は、昭和54年度から昭和58年度までに発掘調査を実施した、多久市所在の山の上古墳群・中村谷遺跡・出口A遺跡・西出口遺跡・原田遺跡・今出川A遺跡・今出川B遺跡・大工田古墳群・十井手遺跡・撰分遺跡のものです。本遺跡は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代および中・近世にわたる学術上極めて貴重な価値を有するものであります。

発掘調査の記録としては、満足のゆくものではないかもしれませんが、本報告書を通して埋蔵文化財に対してなお一層のご理解をいただくとともに、今後の学術研究に少しでも寄与できることを願うものであります。

なお、発刊にあたり、調査にご協力をいただきました地元の方々を始め、関係各位に対して心から感謝申し上げます。

昭和62年3月

佐賀県教育委員会

教育長　志岐常文

# 例　　言

1．本書は九州横断自動車道建設に伴う事前調査として昭和55年度から昭和58年度にかけて発掘調査した多久市所在の山の上古墳群・中村谷遺跡・出口A遺跡・西出口遺跡・鴻ノ巣遺跡・原田遺跡・今出川A遺跡・今出川B遺跡・大工田古墳群・十井手遺跡・撰分遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は、日本道路公団の委託事業として佐賀県教育委員会が実施した。

3．発掘調査にあたっては、多久市・多久市教育委員会、および地元の方々の御協力を得た。

4．本書の執筆は西村隆司が担当した。

5．遺構の実測は調査員並びに調査補助員と多久発掘事務所の花田悦子・西村明美他が行い、遺物の実測は土器を島孝子・藤原倫子・平川朋子・馬場美奈子・山口成子・鹿子知美・神田浩子・末吉由紀子・野口百合子・久米寿美子・松永節子・吉田雅子が行い、石器を久米・加藤洋子・坪上章子・山田百合子・山口邦子が行い、鉄器を藤原・吉田・末吉・岩井祥子が行い、玉類を吉田が行った。

製図は花田・帆士美智子・西村が行った。

拓本は末吉・帆士・西村による。

復元作業は谷崎美代子・江藤敦子・広瀬伸子ほかが行った。

遺構写真撮影は各調査員が、遺物写真撮影は原口定が行い、写真の現像・焼付は古賀栄子が行った。

6．本書の作成・編集は西村隆司が行った。

# 凡　　例

1．遺構については各遺構ごとに一連番号を付し、その前にＳＢ：建物・住居跡、ＳＴ：甕棺墓、ＳＫ：土壙・貯蔵穴、ＳＲ：祭祀遺構、Ｐ：穴、ＳＥ：井戸跡、ＳＤ：溝、ＳＴ：古墳、ＳＰ：土壙墓・木棺墓、ＳＸ：土器溜・その他の遺構の分類記号を標記する。

2．遺構の寸法数字はm単位、遺物の寸法数字はcm単位を原則とした。

3．遺物番号は各遺跡ごとに一連番号を付した。

4．実測図基準は国土座標による。

# 本　文　目　次


**Ⅰ．調査の概要**…… 1

1．調査に至る経過…… 2

2．調査組織…… 4

**Ⅱ．多久市の地理的・歴史的環境**…… 7

1．地理的環境…… 8

2．歴史的環境……10

**Ⅲ．山の上古墳群**……17

1．遺跡の概要……19

2．遺構……23

3．遺物……32

4．小結……44

**Ⅳ．中村谷遺跡**……45

1．遺跡の概要……46

2．遺構……47

3．遺物……48

4．小結……50

**Ⅴ．出口Ａ遺跡**……51

1．遺跡の概要……52

2．遺構……53

3．遺物……53

4．小結……55

**Ⅵ．西出口遺跡**……57

1．遺跡の概要……58

2．遺構……59

3．遺物……62

4．小結……62

**Ⅶ．鴻ノ巣遺跡**……63

1．遺跡の概要……64

2．遺構……66

3．遺物……71
4．小結……76
Ⅷ．原田遺跡……77
1．遺跡の概要……78
2．遺構……79
3．遺物……85
4．小結……87
Ⅸ．今出川Ａ遺跡……89
1．遺跡の概要……90
2．遺構……91
3．遺物……93
4．小結……96
Ⅹ．今出川Ｂ遺跡……97
1．遺跡の概要……98
2．遺構……99
3．遺物……100
4．小結……105
Ⅺ．大工田古墳群……107
1．遺跡の概要……108
2．遺構……109
3．遺物……113
4．小結……128
Ⅻ．十井手遺跡……129
1．遺跡の概要……130
2．遺物……132
3．小結……136
ⅩⅢ．撰分遺跡……137
1．遺跡の概要……138
2．遺構……145
3．遺物……194
4．小結……222

# 挿　図　目　次


Fig. 1　多久市の位置 …… 8
Fig. 2　多久市の地形図および調査遺跡位置図 …… 9
Fig. 3　茶園原東ノ原遺跡のサヌカイト原石露頭写真 …… 10
Fig. 4　茶園原西畑遺跡石器出土状態写真 …… 11
Fig. 5　長尾開拓遺跡出土縦長石核・剝片 …… 11
Fig. 6　多久市の主要遺跡分布図 …… 12
Fig. 7　東多久町別府の条里制地割航空写真 …… 14
Fig. 8　山の上古墳群周辺遺跡分布図（1/50000） …… 18
Fig. 9　山の上古墳群地形図及び遺構配置図 …… 21～22
Fig. 10　山の上古墳群ＳＴ001古墳石室実測図 …… 24
Fig. 11　山の上古墳群ＳＴ001古墳墳丘土層図 …… 25
Fig. 12　山の上古墳群ＳＴ002古墳石室実測図 …… 26
Fig. 13　山の上古墳群ＳＴ003古墳石室実測図 …… 27
Fig. 14　山の上古墳群ＳＴ004古墳石室実測図 …… 28
Fig. 15　山の上古墳群ＳＴ005古墳石室実測図 …… 29
Fig. 16　山の上古墳群ＳＴ006古墳石室実測図 …… 30
Fig. 17　山の上古墳群ＳＴ007古墳石室実測図 …… 31
Fig. 18　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器実測図 …… 33
Fig. 19　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器実測図 …… 34
Fig. 20　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器実測図 …… 35
Fig. 21　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器実測図 …… 36
Fig. 22　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土土師器実測図 …… 36
Fig. 23　山の上古墳群ＳＴ002古墳出土須恵器・土師器実測図 …… 37
Fig. 24　山の上古墳群ＳＴ003古墳出土須恵器・土師器実測図 …… 38
Fig. 25　山の上古墳群ＳＴ005古墳出土須恵器実測図 …… 38
Fig. 26　山の上古墳群ＳＴ007古墳出土須恵器実測図 …… 38
Fig. 27　山の上古墳群古墳出土須恵器ヘラ記号拓影（1/1） …… 39
Fig. 28　山の上古墳群古墳出土須恵器ヘラ記号拓影（1/1） …… 40
Fig. 29　山の上古墳群古墳出土須恵器ヘラ記号拓影（1/1） …… 41

Fig. 30　山の上古墳群古墳出土須恵器・土師器ヘラ記号拓影（1/1）……42
Fig. 31　中村谷遺跡周辺地形図……46
Fig. 32　中村谷遺跡ＳＴ001古墳周溝平面図……47
Fig. 33　中村谷遺跡ＳＴ001古墳周溝・墳丘土層図……47
Fig. 34　中村谷遺跡ＳＴ001古墳石室実測図……48
Fig. 35　中村谷遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器・土師器実測図……49
Fig. 36　中村谷遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器ヘラ記号拓影（1/1）……50
Fig. 37　出口Ａ遺跡周辺地形図……52
Fig. 38　出口Ａ遺跡遺構配置図……53
Fig. 39　出口Ａ遺跡ＳＸ005土器溜実測図……53
Fig. 40　出口Ａ遺跡出土弥生土器実測図……54
Fig. 41　西出口遺跡周辺地形図……58
Fig. 42　西出口遺跡遺構配置図……59
Fig. 43　西出口遺跡ＳＫ002土壙実測図……60
Fig. 44　西出口遺跡ＳＢ004掘立柱建物跡実測図……61
Fig. 45　西出口遺跡ＳＢ005住居跡実測図……61
Fig. 46　西出口遺跡ＳＫ002土壙出土土師器実測図……62
Fig. 47　鴻ノ巣遺跡周辺地形図……64
Fig. 48　鴻ノ巣遺跡遺構配置図……65
Fig. 49　鴻ノ巣遺跡ＳＴ001古墳実測図……66
Fig. 50　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳墳丘土層図……67
Fig. 51　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳石室実測図……68
Fig. 52　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳羨道部実測図……69
Fig. 53　鴻ノ巣遺跡ＳＴ003古墳石室実測図……70
Fig. 54　鴻ノ巣遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器実測図……71
Fig. 55　鴻ノ巣遺跡ＳＴ001古墳出土玉類実測図……71
Fig. 56　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳出土玉類実測図……72
Fig. 57　鴻ノ巣遺跡ＳＴ003古墳出土玉類実測図……73
Fig. 58　原田遺跡周辺地形図……78
Fig. 59　原田遺跡遺構配置図……79
Fig. 60　原田遺跡ＳＪ001甕棺墓実測図……80
Fig. 61　原田遺跡ＳＪ002甕棺墓実測図……81
Fig. 62　原田遺跡土壙墓・祭祀遺構・土壙実測図……82

Fig. 63　原田遺跡土壙実測図 …… 83
Fig. 64　原田遺跡出土甕棺実測図 …… 85
Fig. 65　原田遺跡出土弥生土器実測図 …… 86
Fig. 66　今出川A遺跡周辺地形図 …… 90
Fig. 67　今出川A遺跡遺構配置図 …… 91
Fig. 68　今出川A遺跡ＳＢ001・ＳＢ002住居跡実測図 …… 92
Fig. 69　今出川A遺跡ＳＢ003住居跡実測図 …… 93
Fig. 70　今出川A遺跡出土土師器実測図 …… 94
Fig. 71　今出川A遺跡出土石匙実測図 …… 95
Fig. 72　今出川A遺跡出土砥石実測図 …… 95
Fig. 73　今出川B遺跡周辺地形図 …… 98
Fig. 74　今出川B遺跡遺構配置図 …… 99
Fig. 75　今出川B遺跡出土弥生土器実測図 …… 100
Fig. 76　今出川B遺跡出土須恵器実測図 …… 101
Fig. 77　今出川B遺跡出土須恵器実測図 …… 102
Fig. 78　今出川B遺跡出土土師器実測図 …… 103
Fig. 79　今出川B遺跡出土ふいご羽口・円筒形土器実測図 …… 104
Fig. 80　今出川B遺跡出土円筒形土器拓影 …… 104
Fig. 81　今出川B遺跡出土紡錘車実測図 …… 104
Fig. 82　大工田古墳群周辺地形図 …… 108
Fig. 83　大工田古墳群遺構配置図 …… 109
Fig. 84　大工田古墳群ＳＴ001古墳石室実測図 …… 110
Fig. 85　大工田古墳群ＳＴ001古墳石室前面祭祀遺構実測図 …… 111
Fig. 86　大工田古墳群ＳＴ002古墳石室実測図 …… 112
Fig. 87　大工田古墳群ＳＴ003古墳石室実測図 …… 114
Fig. 88　大工田古墳群ＳＴ001古墳遺物出土状態実測図 …… 114
Fig. 89　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器実測図 …… 115
Fig. 90　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土土師器実測図 …… 116
Fig. 91　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土鉄鏃実測図 …… 117
Fig. 92　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土鉄器実測図 …… 118
Fig. 93　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土装身具実測図 …… 119
Fig. 94　大工田古墳群ＳＴ002古墳出土須恵器・白磁・土師器実測図 …… 120
Fig. 95　大工田古墳群ＳＴ002古墳出土鉄器実測図 …… 121

Fig. 96　大工田古墳群ＳＴ002古墳出土鉄器実測図 …… 122
Fig. 97　大工田古墳群ＳＴ005古墳出土須恵器・土師器実測図 …… 124
Fig. 98　大工田古墳群ＳＴ005古墳出土鉄器実測図 …… 125
Fig. 99　大工田古墳群古墳出土須恵器ヘラ記号拓影（1/1） …… 126
Fig. 100　大工田古墳群古墳出土須恵器ヘラ記号拓影（1/1） …… 127
Fig. 101　十井手遺跡周辺地形図 …… 130
Fig. 102　十井手遺跡調査区位置図 …… 131
Fig. 103　十井手遺跡３区東側土層図 …… 131
Fig. 104　十井手遺跡４区西側土層図 …… 131
Fig. 105　十井手遺跡出土石器実測図 …… 132
Fig. 106　十井手遺跡出土石器実測図 …… 133
Fig. 107　十井手遺跡出土石鏃実測図 …… 134
Fig. 108　十井手遺跡出土石器実測図 …… 134
Fig. 109　十井手遺跡出土縄文土器実測図 …… 135
Fig. 110　撰分遺跡周辺遺跡分布図 …… 139
Fig. 111　撰分遺跡周辺地形図 …… 140
Fig. 112　撰分遺跡遺構配置図 …… 141～144
Fig. 113　撰分遺跡ＳＢ003住居跡実測図 …… 145
Fig. 114　撰分遺跡ＳＢ004・ＳＢ005住居跡実測図 …… 146
Fig. 115　撰分遺跡ＳＢ006住居跡実測図 …… 147
Fig. 116　撰分遺跡ＳＢ007住居跡実測図 …… 148
Fig. 117　撰分遺跡ＳＢ010・ＳＢ002・ＳＢ023住居跡実測図 …… 149
Fig. 118　撰分遺跡ＳＢ012住居跡実測図 …… 150
Fig. 119　撰分遺跡ＳＢ015住居跡実測図 …… 151
Fig. 120　撰分遺跡ＳＢ020住居跡実測図 …… 152
Fig. 121　撰分遺跡ＳＢ027住居跡実測図 …… 153
Fig. 122　撰分遺跡ＳＢ028住居跡実測図 …… 154
Fig. 123　撰分遺跡ＳＢ029住居跡実測図 …… 155
Fig. 124　撰分遺跡ＳＢ059住居跡実測図 …… 156
Fig. 125　撰分遺跡ＳＢ060住居跡実測図 …… 157
Fig. 126　撰分遺跡ＳＢ061住居跡実測図 …… 158
Fig. 127　撰分遺跡ＳＢ073住居跡実測図 …… 159
Fig. 128　撰分遺跡ＳＢ074住居跡実測図 …… 160

Fig. 129　撰分遺跡ＳＢ075住居跡実測図……161
Fig. 130　撰分遺跡ＳＢ079住居跡実測図……162
Fig. 131　撰分遺跡ＳＢ080住居跡実測図……163
Fig. 132　撰分遺跡ＳＢ092住居跡実測図……164
Fig. 133　撰分遺跡ＳＢ093住居跡実測図……165
Fig. 134　撰分遺跡ＳＢ030掘立柱建物跡実測図……167
Fig. 135　撰分遺跡ＳＢ052掘立柱建物跡実測図……168
Fig. 136　撰分遺跡ＳＢ053掘立柱建物跡実測図……169
Fig. 137　撰分遺跡ＳＢ083掘立柱建物跡実測図……170
Fig. 138　撰分遺跡ＳＢ084掘立柱建物跡実測図……171
Fig. 139　撰分遺跡ＳＢ091掘立柱建物跡実測図……172
Fig. 140　撰分遺跡ＳＢ111掘立柱建物跡実測図……173
Fig. 141　撰分遺跡土壙実測図 …… 175
Fig. 142　撰分遺跡土壙実測図 …… 176
Fig. 143　撰分遺跡土壙実測図 …… 177
Fig. 144　撰分遺跡土壙実測図 …… 178
Fig. 145　撰分遺跡不明遺構実測図 …… 180
Fig. 146　撰分遺跡不明遺構実測図 …… 181
Fig. 147　撰分遺跡不明遺構実測図 …… 182
Fig. 148　撰分遺跡井戸跡実測図 …… 184
Fig. 149　撰分遺跡ＳＤ001溝断面実測図……185
Fig. 150　撰分遺跡ＳＤ033大溝断面実測図……186
Fig. 151　撰分遺跡ＳＤ056溝断面実測図……186
Fig. 152　撰分遺跡ＳＪ050甕棺墓実測図……188
Fig. 153　撰分遺跡ＳＪ052甕棺墓実測図……188
Fig. 154　撰分遺跡ＳＪ053甕棺墓実測図……188
Fig. 155　撰分遺跡ＳＪ054甕棺墓実測図……189
Fig. 156　撰分遺跡ＳＪ055甕棺墓実測図……189
Fig. 157　撰分遺跡ＳＪ056・ＳＪ057甕棺墓実測図 …… 190
Fig. 158　撰分遺跡ＳＪ058甕棺墓実測図……191
Fig. 159　撰分遺跡ＳＪ059甕棺墓実測図……191
Fig. 160　撰分遺跡ＳＰ082木棺墓実測図……192
Fig. 161　撰分遺跡ＳＰ094土壙墓実測図……193

Fig. 162　撰分遺跡ＳＰ097土壙墓実測図……193
Fig. 163　撰分遺跡出土石器実測図……194
Fig. 164　撰分遺跡出土石器実測図……195
Fig. 165　撰分遺跡出土石器実測図……195
Fig. 166　撰分遺跡出土縄文土器実測図・拓影……196
Fig. 167　撰分遺跡出土石器実測図……197
Fig. 168　撰分遺跡出土石器実測図……198
Fig. 169　撰分遺跡出土弥生土器実測図……200
Fig. 170　撰分遺跡出土弥生土器実測図……201
Fig. 171　撰分遺跡出土弥生土器実測図……202
Fig. 172　撰分遺跡出土甕棺実測図……203
Fig. 173　撰分遺跡出土甕棺実測図……204
Fig. 174　撰分遺跡出土土師器実測図……206
Fig. 175　撰分遺跡出土土師器実測図……207
Fig. 176　撰分遺跡出土土師器実測図……208
Fig. 177　撰分遺跡出土土師器実測図……209
Fig. 178　撰分遺跡出土土師器実測図……210
Fig. 179　撰分遺跡出土土師器実測図……211
Fig. 180　撰分遺跡出土土師器実測図……212
Fig. 181　撰分遺跡出土瓦器・青磁・白磁実測図……213
Fig. 182　撰分遺跡出土輸入磁器実測図……214
Fig. 183　撰分遺跡出土陶器実測図……215
Fig. 184　撰分遺跡出土磁器実測図……217
Fig. 185　撰分遺跡出土磁器実測図……218
Fig. 186　撰分遺跡出土磁器実測図……219
Fig. 187　撰分遺跡出土磁器実測図……220
Fig. 188　撰分遺跡出土磁器実測図……221
Fig. 189　撰分遺跡出土瓦器実測図……221

# 表　目　次

Tab. 1　九州横断自動車道関係文化財調査一覧表……3
Tab. 2　山の上古墳群古墳一覧表 …… 43
Tab. 3　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳出土玉類計測表……74～75
Tab. 4　鴻ノ巣遺跡ＳＴ003古墳出土玉類計測表……75
Tab. 5　十井手遺跡・土層土質表 ……131
Tab. 6　撰分遺跡住居跡一覧表……166
Tab. 7　撰分遺跡掘立柱建物跡一覧表……173
Tab. 8　撰分遺跡溝一覧表……187

# 図　版　目　次

（山の上古墳群）

PL. 1　山の上古墳群遠景、同航空写真
PL. 2　山の上古墳群ＳＴ001古墳全景
PL. 3　山の上古墳群ＳＴ001古墳葺石状態、同遺物出土状態
PL. 4　山の上古墳群ＳＴ002古墳石室、同ＳＴ003古墳石室
PL. 5　山の上古墳群ＳＴ004古墳石室、同ＳＴ005古墳石室
PL. 6　山の上古墳群ＳＴ006古墳石室、同ＳＴ007古墳石室
PL. 7　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器
PL. 8　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器
PL. 9　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器
PL. 10　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器
PL. 11　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器
PL. 12　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器、同土師器
PL. 13　山の上古墳群ＳＴ002古墳出土須恵器、同土師器
PL. 14　山の上古墳群ＳＴ003古墳出土須恵器、同土師器
PL. 15　山の上古墳群ＳＴ005古墳出土須恵器、同ＳＴ007古墳出土須恵器

（中村谷遺跡）
PL. 16　中村谷遺跡ＳＴ001古墳墳丘、同石室
PL. 17　中村谷遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器、同土師器
（出口Ａ遺跡）
PL. 18　出口Ａ遺跡全景（航空写真）、同ＳＸ005土壙遺物出土状態
PL. 19　出口Ａ遺跡出土弥生土器
（西出口遺跡）
PL. 20　西出口遺跡全景、同ＳＫ002土壙
PL. 21　西出口遺跡ＳＢ004掘立柱建物跡、同ＳＫ002土壙出土土師器
（鴻ノ巣遺跡）
PL. 22　鴻ノ巣遺跡遠景、同ＳＴ001古墳
PL. 23　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳墳丘、同墳丘土層
PL. 24　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳石室、同ＳＴ003古墳石室
PL. 25　鴻ノ巣遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器
PL. 26　鴻ノ巣遺跡古墳出土玉類
（原田遺跡）
PL. 27　原田遺跡全景、同遺構出土状態
PL. 28　原田遺跡ＳＪ001甕棺墓、同ＳＪ002甕棺墓
PL. 29　原田遺跡ＳＲ004祭祀遺構、同ＳＲ005祭祀遺構
PL. 30　原田遺跡出土弥生土器、同甕棺
（今出川Ａ遺跡）
PL. 31　今出川Ａ遺跡遠景、同ＳＢ001・ＳＢ002住居跡
PL. 32　今出川Ａ遺跡ＳＢ003住居跡、同ＳＢ001住居跡遺物出土状態
PL. 33　今出川Ａ遺跡ＳＢ001・ＳＢ002住居跡出土土師器
PL. 34　今出川Ａ遺跡ＳＢ003住居跡出土土師器、同遺跡出土石器
（今出川Ｂ遺跡）
PL. 35　今出川Ｂ遺跡全景（航空写真）、同遺物出土状態
PL. 36　今出川Ｂ遺跡出土弥生土器
PL. 37　今出川Ｂ遺跡出土須恵器
PL. 38　今出川Ｂ遺跡出土須恵器
PL. 39　今出川Ｂ遺跡出土須恵器
PL. 40　今出川Ｂ遺跡出土須恵器
PL. 41　今出川Ｂ遺跡出土土師器

PL. 42　今出川Ｂ遺跡出土土師器、同須恵器、同ふいご羽口、同円筒形土器
（大工田古墳群）
PL. 43　大工田古墳群遠景、同ＳＴ001古墳石室
PL. 44　大工田古墳群ＳＴ001古墳石室遺物出土状態、同石室前面遺物出土状態
PL. 45　大工田古墳群ＳＴ002古墳石室、同ＳＴ005古墳石室
PL. 46　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器
PL. 47　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器
PL. 48　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土土師器、同ＳＴ002古墳出土須恵器、同土師器
PL. 49　大工田古墳群ＳＴ005古墳出土須恵器、同土師器
PL. 50　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土鉄器
PL. 51　大工田古墳群ＳＴ002古墳出土鉄器
PL. 52　大工田古墳群ＳＴ005古墳出土鉄器、同ＳＴ001古墳出土装身具
（十井手遺跡）
PL. 53　十井手遺跡遠景、同調査区全景
PL. 54　十井手遺跡第３区遺物出土状態、同第４区土層
PL. 55　十井手遺跡出土遺物
（撰分遺跡）
PL. 56　撰分遺跡遠景、同全景（東から、航空写真）
PL. 57　撰分遺跡全景（西から、航空写真）、同ＳＢ004・ＳＢ005住居跡
PL. 58　撰分遺跡ＳＢ006住居跡、同ＳＢ007・ＳＢ028住居跡
PL. 59　撰分遺跡ＳＢ010・ＳＢ022・ＳＢ023住居跡、同ＳＢ012住居跡
PL. 60　撰分遺跡ＳＢ015住居跡、同ＳＢ020住居跡
PL. 61　撰分遺跡ＳＢ027住居跡、同ＳＢ005・ＳＢ029住居跡
PL. 62　撰分遺跡ＳＢ059住居跡、同ＳＢ060住居跡
PL. 63　撰分遺跡ＳＢ061住居跡、同ＳＢ073住居跡
PL. 64　撰分遺跡ＳＢ074住居跡、同ＳＢ079住居跡
PL. 65　撰分遺跡ＳＢ080住居跡、同ＳＢ092住居跡
PL. 66　撰分遺跡ＳＢ093住居跡、同ＳＢ030掘立柱建物跡
PL. 67　撰分遺跡ＳＢ052掘立柱建物跡、同ＳＢ053掘立柱建物跡
PL. 68　撰分遺跡ＳＢ083掘立柱建物跡、同ＳＢ084掘立柱建物跡
PL. 69　撰分遺跡ＳＢ091掘立柱建物跡、同ＳＫ002土壙、同ＳＫ019土壙
PL. 70　撰分遺跡ＳＫ025土壙、同ＳＫ035土壙、同ＳＫ036土壙
PL. 71　撰分遺跡ＳＫ037土壙、同ＳＫ038土壙、同ＳＫ039土壙

PL. 72　撰分遺跡ＳＫ069土壙、同ＳＸ057不明遺構、同ＳＥ112井戸跡
PL. 73　撰分遺跡ＳＤ001溝、同遺物出土状態、同ＳＤ033大溝
PL. 74　撰分遺跡ＳＪ050～ＳＪ057甕棺墓
PL. 75　撰分遺跡ＳＪ058、ＳＪ059甕棺墓、ＳＰ082木棺墓、ＳＰ097土壙墓
PL. 76　撰分遺跡出土ナイフ形石器、石核、細石核、細石刃、尖頭器、打製石斧、磨製石斧
PL. 77　撰分遺跡出土磨製石器、石包丁、紡錘車、砥石、縄文土器
PL. 78　撰分遺跡出土弥生土器
PL. 79　撰分遺跡出土弥生土器
PL. 80　撰分遺跡出土弥生土器
PL. 81　撰分遺跡出土弥生土器
PL. 82　撰分遺跡出土甕棺
PL. 83　撰分遺跡出土甕棺
PL. 84　撰分遺跡出土復合口縁土師器
PL. 85　撰分遺跡出土土師器
PL. 86　撰分遺跡出土土師器
PL. 87　撰分遺跡出土土師器
PL. 88　撰分遺跡出土土師器
PL. 89　撰分遺跡出土土師器
PL. 90　撰分遺跡出土土師器
PL. 91　撰分遺跡出土土師器
PL. 92　撰分遺跡出土土師器
PL. 93　撰分遺跡出土土師器、瓦器
PL. 94　撰分遺跡出土青磁、白磁、輸入磁器
PL. 95　撰分遺跡出土陶器
PL. 96　撰分遺跡出土陶器
PL. 97　撰分遺跡出土陶器
PL. 98　撰分遺跡出土陶器、赤絵磁器
PL. 99　撰分遺跡出土赤絵磁器、染付磁器
PL. 100　撰分遺跡出土染付磁器
PL. 101　撰分遺跡出土染付磁器
PL. 102　撰分遺跡出土染付磁器
PL. 103　撰分遺跡出土染付磁器、青磁、
PL. 104　撰分遺跡出土染付磁器

PL. 105　撰分遺跡出土染付磁器、白磁
PL. 106　撰分遺跡出土瓦器

# Ⅰ　調査の概要

# I　調査の概要

## 1．調査に至る経過

九州横断自動車道の建設計画に伴う遺跡の分布調査は昭和44年６月を始めに、昭和45年度・昭和48年度と数回にわたり実施し、昭和51年度、道路幅の決定によって鳥栖～佐賀間27.2kmを踏査、97ヵ所、約563,300㎡の遺跡を確認した。昭和52年度は佐賀～武雄間26.9kmを踏査、98ヵ所、約537,000㎡の遺跡を確認した。このうち多久市内の工事区間に分布する遺跡は32ヵ所、約133,170㎡におよんだ。

多久市内の工事区間は11.3kmと県内最長の距離で、インターチェンジや二ヵ所のパーキングエリヤが建設されるため、工事期間の長期化と供用時期の問題から大和町以西で最初に工事が着工されることになり、文化財の調査も昭和54年度に開始した。昭和54年11月、南多久町大字下多久字三本松の三本松遺跡、多久町字西田、字松瀬の松瀬遺跡、南多久町大字長尾字米満の米満遺跡（現在の長尾開拓遺跡）に掘削機を投入し、遺構検出のため確認調査を実施した。

昭和55年度は４月からインターチェンジ付近の北多久町大字多久原字大工田の今出川Ａ遺跡、６月に字千里地の両ノ原遺跡、南多久町大字下多久字十井手の十井手遺跡、８月に東多久町大字別府字池ノ平の池ノ平遺跡、字池ノ平、字大平、字堤口の山の上古墳群の調査を実施、今出川Ａ遺跡では縄文時代の包含層と古墳時代住居跡３棟を検出した。十井手遺跡では旧石器時代のナイフ形石器、三稜尖頭器、尖頭器や縄文時代中期の土器片、石鏃、石斧などが出土した。池ノ平遺跡では縄文時代晩期の土器片や石器類、弥生時代の甕形土器片などを検出したが遺構は存在しなかった。山の上古墳群では７基の古墳が調査の対象となり、須恵器・土師器が多量に出土した。

昭和56年度は４月から多久町字向鶴の向鶴遺跡の確認調査、山の上古墳群の遺構実測、５月に東多久町大字別府字石亀谷の石亀谷遺跡、字射場谷の射場谷遺跡、北多久町大字多久原字大工田の今出川Ｂ遺跡、字建長寺の建長寺遺跡、６月には字大工田の大工田古墳群、８月から多久町字山王の山王遺跡、１月に北多久町大字多久原字原田の原田遺跡、多久町字湯町の撰分遺跡、東多久町大字別府字出口の出口Ｂ遺跡、字通原の宝蔵寺Ｂ遺跡、２月に字茂手の仁位所遺跡と調査を続けた。石亀谷遺跡と射場谷遺跡では縄文時代の石鏃や剝片が出土したが遺構は存在しなかった。今出川Ｂ遺跡では縄文時代の土器片のほか奈良時代～平安時代の須恵器や土師器が遺構から出土、ふいごの羽口や円筒形土器は特質される。大工田古墳群では３基の古墳を調査、市内初の片袖式の横穴式石室を検出、鉄器、装身具、須恵器、土師器などの副葬品が出土した。山王遺跡は旧石器時代のナイフ形石器、台形様石器、尖頭器などが出土、茶園原遺跡で特徴的に出土する圭頭形尖頭器も多く含まれ、黒耀石製石器と多久型の尖頭器の層位的な関

Tab. 1　九州横断自動車道関係文化財調査一覧表

| 調査年度 | 遺跡名 | 調査期間 | 調査面積（㎡） |
|---|---|---|---|
| 54 | 三本松遺跡 | 昭和54年11月26日～12月4日 | 3,000 |
| | 松瀬遺跡 | 昭和54年12月5日～55年1月19日 | 21,900 |
| | 米満遺跡 | 昭和55年1月21日～3月31日 | 2,100 |
| 55 | 今出川A遺跡 | 昭和55年4月2日～6月15日 | 5,000 |
| | 両ノ原遺跡 | 昭和55年6月16日 | 1,000 |
| | 十井手遺跡 | 昭和55年6月17日～8月22日 | 10,500 |
| | 池ノ平遺跡 | 昭和55年8月23日～9月8日 | 1,640 |
| | 山の上古墳群 | 昭和55年9月9日～56年3月31日 | 4,000 |
| 56 | 向鶴遺跡 | 昭和56年4月1日～4月11日 | 4,200 |
| | 山の上遺跡 | 昭和56年4月12日～4月30日 | 910 |
| | 石亀谷遺跡 | 昭和56年5月1日～5月16日 | 2,540 |
| | 射場谷遺跡 | 昭和56年5月18日～5月21日 | 3,730 |
| | 今出川B遺跡 | 昭和56年5月6日～8月7日 | 2,200 |
| | 建長寺遺跡 | 昭和56年5月23日～5月29日 | 1,600 |
| | 大工田古墳群 | 昭和56年6月10日～9月22日 | 600 |
| | 山王遺跡 | 昭和56年8月17日～57年3月31日 | 1,400 |
| | 原田遺跡 | 昭和57年1月6日～1月29日 | 3,000 |
| | 撰分A遺跡 | 昭和57年1月11日～3月31日 | 6,300 |
| | 出口B遺跡 | 昭和57年1月11日～1月25日 | 5,930 |
| | 宝蔵寺B遺跡 | 昭和57年1月26日～2月10日 | 7,460 |
| | 仁位所遺跡 | 昭和57年2月12日～2月27日 | 3,230 |
| 57 | 島田遺跡 | 昭和57年4月1日～4月15日 | 2,900 |
| | 山王遺跡 | 昭和57年4月22日～58年3月31日 | 3,000 |
| | 撰分A遺跡 | 昭和57年4月1日～58年3月31日 | 3,000 |
| | 山崎遺跡 | 昭和57年12月13日～58年1月20日 | 15,000 |
| | 仁位所遺跡 | 昭和58年1月17日～1月29日 | 6,800 |
| | 出口A遺跡 | 昭和58年1月31日～2月24日 | 5,000 |
| | 西出口遺跡 | 昭和58年2月25日～3月26日 | 800 |
| 58 | 撰分B遺跡 | 昭和58年4月2日～6月28日 | 13,300 |
| | 中村谷遺跡 | 昭和58年6月8日～7月10日 | 8,200 |
| | 鴻ノ巣遺跡 | 昭和58年6月29日～11月21日 | 7,600 |
| | 野入遺跡 | 昭和58年7月10日～7月25日 | ( 7,600)<br>3,000 |
| | 倉富遺跡 | 昭和58年9月5日～9月10日 | 11,000 |
| | 長尾開拓遺跡 | 昭和58年10月24日～11月21日 | (13,000)<br>6,500 |
| 59 | 野入遺跡 | 昭和59年7月1日～7月3日 | ( 7,600)<br>4,600 |
| | 長尾開拓遺跡 | 昭和59年4月16日～60年3月30日 | (13,000)<br>6,500 |

係が注目された。原田遺跡では縄文時代の土壙と弥生時代後期の甕棺墓が出土、甕棺の下に礫を敷く埋葬法が注目された。撰分遺跡は調査区全体に遺構が広がり、旧石器時代から江戸時代までの各時期の遺構が復合し、遺物の種類、量とも豊富であった。西側の台地付近には旧石器時代の石器や縄文時代の石鏃が散布し、調査区の東側に弥生時代～古墳時代の住居跡や溝状遺構があり、中央部には歴史時代の遺構が集中した。江戸時代の遺構は西側の台地下の微高地上に立地し、多量の陶磁器が出土した。

昭和57年度は4月から多久町字島田の島田遺跡で掘削機による確認調査を実施すると共に、前年度に引き続き撰分遺跡、山王遺跡の調査を続けた。12月に多久町字外鶴、字井手山の山崎遺跡の確認調査、1月に東多久町字茂手の仁位所遺跡、字出口の出口A遺跡、2月には字西出口、字岡本、字七ッ枝の西出口遺跡の調査を実施した。撰分遺跡、山王遺跡以外では出口A遺跡で弥生時代の遺物が出土しただけであった。

昭和58年度は4月から多久町字環町の撰分B遺跡、6月に東多久町大字別府字弥平ヶ谷の中村谷遺跡、字野入と北多久町大字多久原字鴻ノ巣の両町に跨がる鴻ノ巣遺跡、7月に字野入の野入遺跡、9月に南多久町大字長尾字松ノ内、字倉富の倉富遺跡の確認調査を実施、10月には字米満の長尾開拓遺跡の調査を始めた。撰分B遺跡では旧石器時代～縄文時代の石器が散布し、縄文時代の網目文様の土器底部が出土した。中村谷遺跡は1基の古墳だけで遺物も少量であった。鴻ノ巣遺跡では3基の古墳と弥生時代の土壙を検出した。長尾開拓遺跡では調査区全域にサヌカイトの剝片や石核、石器が堆積、石器製作の工房跡という状態であった。

昭和59年度は4月から長尾開拓遺跡の調査を続行し、7月に野入遺跡の残り部分の確認調査を終了。3月末日、長尾開拓遺跡を最後に6年間の長期におよぶ多久市内での全遺跡の調査が完了した。

昭和60年、61年度は遺物整理、図面整理、遺物実測など報告書作成のため室内の作業となった。

## 2．調査組織

多久市内の九州横断自動車道における発掘調査の関係者は下記のとおりである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 総括 | 佐賀県教育委員会教育長 | 古藤　浩（昭和54～59年度） | 志岐常文（昭和59～61年度） |
| | 教育次長 | 小西　亘（昭和54年度） | 大坪　実（昭和54年度） |
| | | 川副道夫（昭和54年度） | 野村綱明（昭和55年度） |
| | | 宇田川勝之（昭和55～57年度） | 村岡　昭（昭和56年度） |
| | | 大塚正道（昭和57・58年度） | 高橋一之（昭和57～60年度） |
| | | 釈　憲正（昭和59年度） | 堤　清行（昭和60年度） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | 古賀信夫（昭和60・61年度） | 野角計宏（昭和61年度） |
| | 文化課課長 | 田中寿義雄（昭和54・55年度） | 藤山　厳（昭和56・57年度） |
| | | 中島信行（昭和58年度） | 北村一義（昭和59～61年度） |
| | 文化課参事 | 古賀礼三（昭和54年度） | 藤山　厳（昭和55年度） |
| | | 高島忠平（昭和60年度） | |
| | 文化課課長補佐 | 川久保松広（昭和54～56年度） | 高島忠平（昭和56～59年度） |
| | | 山田陸三（昭和57～59年度） | 尾形善郎（昭和60・61年度） |
| | | 宮原義幸（昭和60・61年度） | |
| 庶務 | 文化課専門員 | 広川　昇（昭和55年度） | |
| | 文化課庶務係長 | 片渕正美（昭和54年度） | 広川　昇（昭和55年度） |
| | | 中野安正（昭和56～58年度） | 菊池文夫（昭和59～61年度） |
| | 文化課主査 | 北島和男（昭和55年度） | 山下行夫（昭和59～61年度） |
| | 文化課庶務 | 森由紀子（昭和54～56年度） | 野口茂美（昭和54～56年度） |
| | | 伊崎憲二（昭和54年度） | 山口　勝（昭和56～58年度） |
| | | 山下行夫（昭和57・58年度） | 東　英明（昭和57～60年度） |
| | | 井原裕子（昭和57～59年度） | 鶴田明美（昭和60年度） |
| | | 西岡真一（昭和61年度） | |
| 調査担当 | 文化課参事 | 高島忠平（昭和60年度） | |
| | 調査第1係長 | 樋渡敏暲（昭和56・57年度） | 中牟田賢治（昭和58～61年度） |
| | 文化財主査 | 田平徳栄（昭和59年度） | 天本洋一（昭和60・61年度） |
| | 嘱託 | 後中筋正徳（昭和55年度） | |
| | | 堤　安信（昭和56・57年度）（現千代田町教育委員会） | |
| | | 南島敏浩（昭和59年度） | |
| | 多久市教育委員会 | 西村隆司（昭和54～61年度） | |
| | 調査補助員 | 山口　弘、釘本堅太、松尾直子、朝原良寛、熊手達夫、藤木弁昇 | |
| 整理担当 | 文化財保護主事 | 東中川忠美、松尾吉高、高瀬哲郎 | |
| | 指導主事 | 多々良友博（現佐賀県立佐賀北高等学校） | |
| | 嘱託 | 堤　圭子、原　葉子 | |
| | 多久市教育委員会 | 西村隆司 | |

〔参考文献〕

「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報」　佐賀県教育委員会　1979
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第3集」　佐賀県教育委員会　1981
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第4集」　佐賀県教育委員会　1981
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第5集」　佐賀県教育委員会　1983
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第6集」　佐賀県教育委員会　1983
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第7集」　佐賀県教育委員会　1984
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第8集」　佐賀県教育委員会　1985

# II　多久市の地理的・歴史的環境

# II　多久市の地理的・歴史的環境

## 1．地理的環境

多久市は佐賀県のほぼ中央に位置し、四方を山に囲まれた盆地で、東は小城町、富士町、北は厳木町、相知町、西は伊万里市、武雄市、南は北方町、大町町、江北町、牛津町と接し、盆地を形成する山々の尾根が境界となっている。

多久盆地は北面に天山（標高1046m）、西に船山（標高685m）、八幡岳（標高763m）、南に徳連岳（標高444m）、鬼の鼻山（標高476m）、両子山（標高361m）、東に鏡山（標高140m）、峰山（標高161m）が連なり、両子山と鏡山の間の東南部が僅かに開け、佐賀平野の北西端へ広がっている。

八幡岳、徳連岳を源流とする牛津川は盆地を西から東に横断し、天山を源流とする今出川などの支流を合わせ、東南の平坦部から牛津町に抜け、杵島郡の六角川と合流し、有明海に流下する。

盆地中央部には山崎山（標高212m）、陣ノ辻山（標高193m）、すぐ東に坊山（標高102m）が

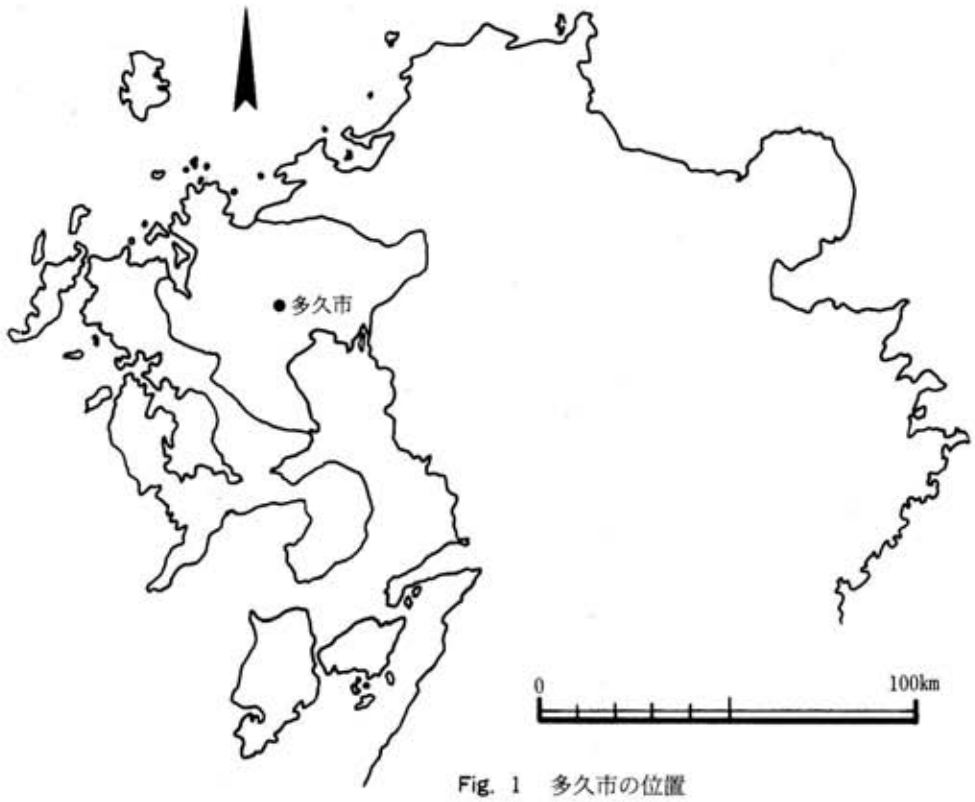



Fig. 1　多久市の位置

位置し、平坦部は山崎山の北部と西部から牛津川流域に開け、東部の沖積平野に広がるだけで、標高50m以下の平坦地および低丘陵地は市内の総面積の四分の一にすぎず、100m以上の丘陵地や山地の割合が大半を占める。

多久市の地質は花崗岩からなる脊振・天山地区と第三紀層からなる松浦丘陵地区の接点にあたり、北部は花崗岩、中部は第三紀層、南部は安山岩、北西、南西部は玄武岩によって形成されている。昭和30年代後半まで多久市の基幹産業であった石炭層は第三紀層の厳木層・芳谷層に含まれ、植物や魚貝類の化石は佐里・行合野砂岩層で多く発見されている。南部の安山岩地帯では良質のサヌカイト原石が転石の状態で深さ１mの層をなし、旧石器時代～縄文・弥生時

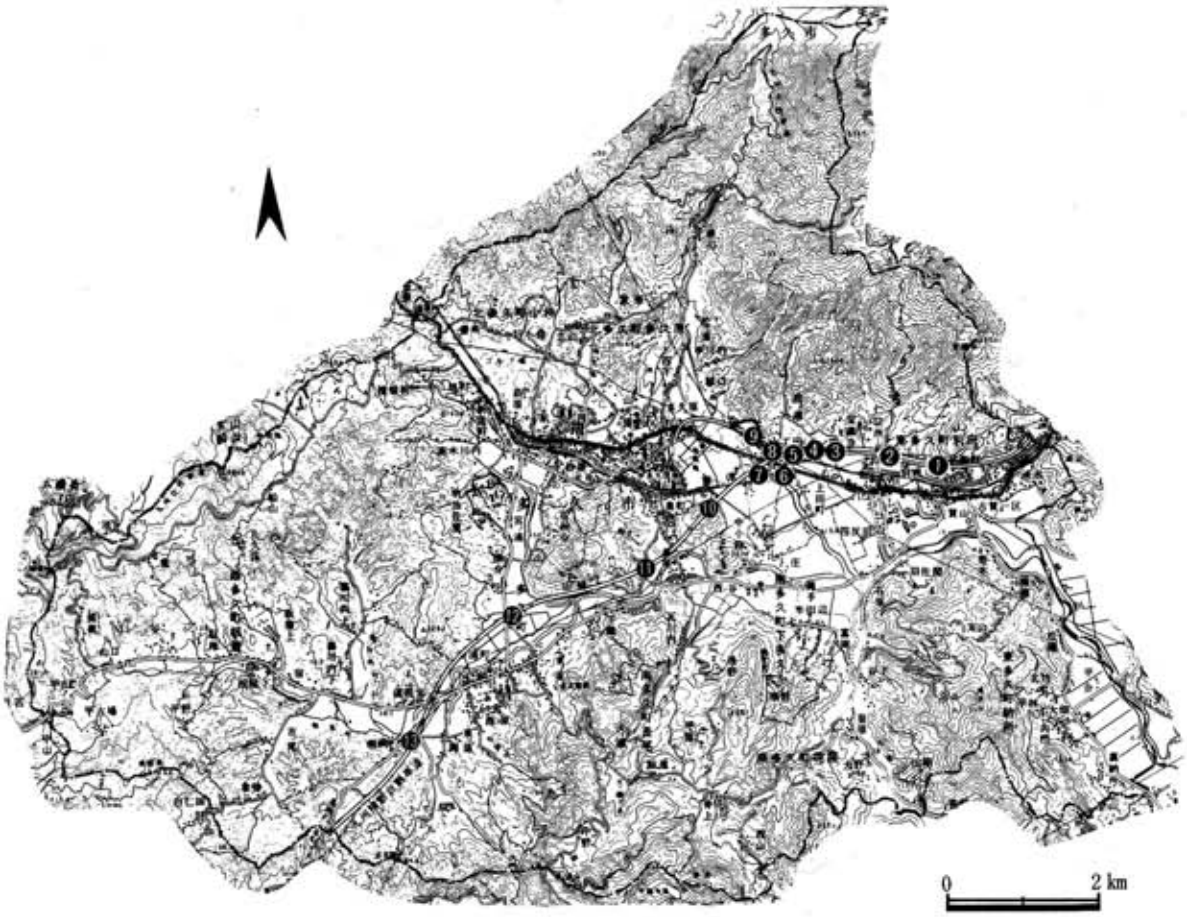



Fig. 2　多久市の地形図および調査遺跡位置図

1. 山の上古墳群
2. 中村谷遺跡
3. 出口A遺跡
4. 西出口遺跡
5. 鴻ノ巣遺跡
6. 原田遺跡
7. 今出川A遺跡
8. 今出川B遺跡
9. 大工田古墳群
10. 十井手遺跡
11. 長尾開拓遺跡
12. 撰分遺跡
13. 山王遺跡

代の石器素材の供給地となっていた。

火山灰の堆積は中央部～南部の低丘陵地で乳白色・灰白色の軽石を含む粘土層が１～３mの層をなしている。この粘土層は鳥栖ローム層、八女粘土層と称せられるものと同一で阿蘇外輪山を形成した噴火で噴出した阿蘇４火砕流堆積物（Aso－4）と呼ばれている。また近年、姶良Tn火山灰層（AT）と呼ばれる姶良カルデラから噴出した広域火山灰特有の火山ガラスも検出されている。

気候は盆地特有の内陸的で、夏は熱く、冬は寒い。年間平均の気温は15.5度、最低気温氷点下の冬型気象が年平均51日と冬日が多い。降雨量は夏に多く、冬は極端に少ない。その他の気象では台風銀座九州と呼ばれる例にもれず大きな被害を受けてきた。霜は11月初旬～３月中旬までと長い。降雪は12月中旬～３月上旬だが積雪の回数は年に２～５日と僅かである。

## ２．歴史的環境

九州は中国大陸や朝鮮半島に近い地の利から大陸文化流入の窓口として、遺跡分布の密度は高く、佐賀県は全国でも有数の遺跡の宝庫である。多久市も県内では遺跡数の多い地区で、遺跡の立地も自然的環境に大きな影響を受けている。旧石器時代～江戸時代まで、その歴史は途絶えることなく続き、丘陵地や河川流域に多くの遺跡が集中している。ここで歴史的環境について時代別に整理をしてみたい。

### 旧石器時代

県内の旧石器時代の遺跡は県北西部の東松浦半島を中心に唐津・伊万里地方に集中する黒耀石を素材とした石器群と中央部の多久・小城地区で集中的に出土するサヌカイト製の石器群に大別できる。両地区とも石器の素材となる原石の産地に接する地質的特徴をもつ。

多久盆地の南壁にあたる鬼の鼻山や中央に位置する山崎山一帯は安山岩地帯で、良質のサヌカイト原産地として知られている。この地域ではサヌカイトの持つ金属音からかな石と呼ばれ金石原の地名も残っている。

昭和35年に日本考古学協会の西北九州総合調査特別委員会によって調査された三年山遺跡・茶園原遺跡は鬼の鼻山の北麓にあり、両遺跡とも旧石器時代の遺跡として九州で最初に学術調査が実施された学史的な遺跡として著名である。鬼の鼻山北麓一帯にはサヌカイト製の大形尖頭器が出土する遺跡は40ヵ所を越す。鬼の鼻山遺跡・柳谷遺跡・下鶴遺跡なども多量の尖頭器が出土、これらの遺跡を総称して多久石器遺跡群と呼び、これまでの

Fig.3　茶園原東ノ原遺跡のサヌカイト原石露頭

調査や表面採集による尖頭器の数は10万点以上になっている。山崎山周辺にも大形の尖頭器が出土する長尾開拓遺跡、長尾松隈遺跡、陣ノ辻遺跡などの大規模な遺跡が立地する。

Fig. 4　茶園原西畑遺跡石器出土状態

これまで多久で出土するサヌカイト製の石器は尖頭器に限られ、他の遺物との共伴関係も認められず、多久盆地から持ち出されていないことなどから編年上の位置づけもできなかった。ところが、最近の調査や開発によって尖頭器に先行する遺物が出土しはじめた。三年山遺跡と茶園原遺跡の中間に位置する東ノ原1630番地遺跡で尖頭器を含む文化層の下部に無遺物層をはさんで縦長剝片を主体とする文化層を確認した。遺物はおびただしい縦長剝片と半円錘形石核で製品は含まれていない。これらの遺物は小城郡三日月町岡本遺跡出土の縦長剝片や石核と酷似し、岡本遺跡では縦長剝片を素材としたナイフ形石器、剝片尖頭器などが出土している。昭和58～59年に調査を実施した長尾開拓遺跡でも多量の縦長剝片や石核が出土、尖頭器文化に先行する石器群の存在が明らかになった。

尖頭器が出土する遺跡のなかに、黒耀石製のナイフ形石器や台形様石器、細石核、細石刃が共伴する遺跡も序々に数を増し、綿打遺跡、経ノ峰遺跡、八天山遺跡などが明らかとなった。昭和56～58年に調査した山王遺跡は、その代表的な遺跡であるが、層位的な関係を解決する結果を得ることはできなかった。今後、同種の遺跡や資料が追加されることによって、日本最大の規模を持つ多久石器遺跡群の編年上の位置づけも明らかとなろう。

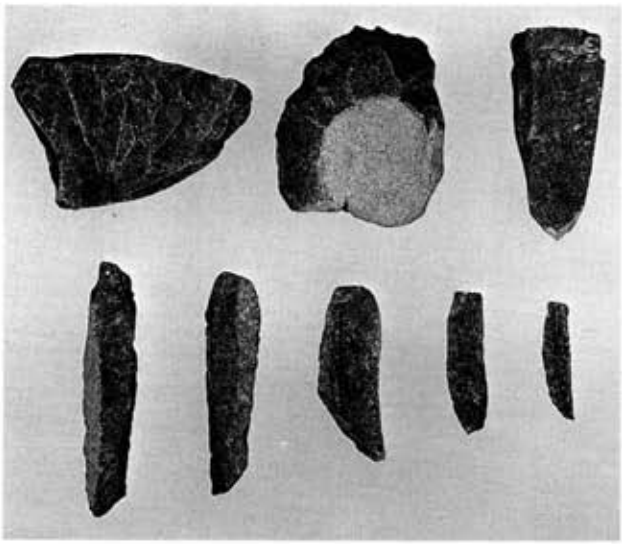


Fig. 5　長尾開拓遺跡出土縦長石核・剝片

**縄文時代**

県内での縄文時代の遺跡は唐津海底遺跡や戦場ヶ谷遺跡、千束遺跡など学界で早くから知られているものの、遺構の存在は明らかではなかった。しかし、近年の大規模な調査によって遺跡の数も増加し、遺構の実態も明らかにされつつある。市内でも押型文が出土した綿打遺跡以

外、文献で報告、発表された遺跡はない。最近の調査でも断片的に遺物は出土するが遺構は検出されていない。そんな中で、地元の熱心な研究者による遺跡の分布調査や表面採集などの活動で良好な遺跡が次々と発見されている。時代順に紹介すると、中期の阿高式土器が出土した西ノ原遺跡、十井手遺跡、南福寺式土器や後期の磨消縄文が出土する大工田遺跡、晩期の黒川式土器が採集された赤子谷遺跡、山の寺式土器や多量の磨製石斧、扁平打製石斧が出土し、縄文農耕とのかかわりが注目される天山遺跡など有望な遺跡が多く、今後の調査が期待される。

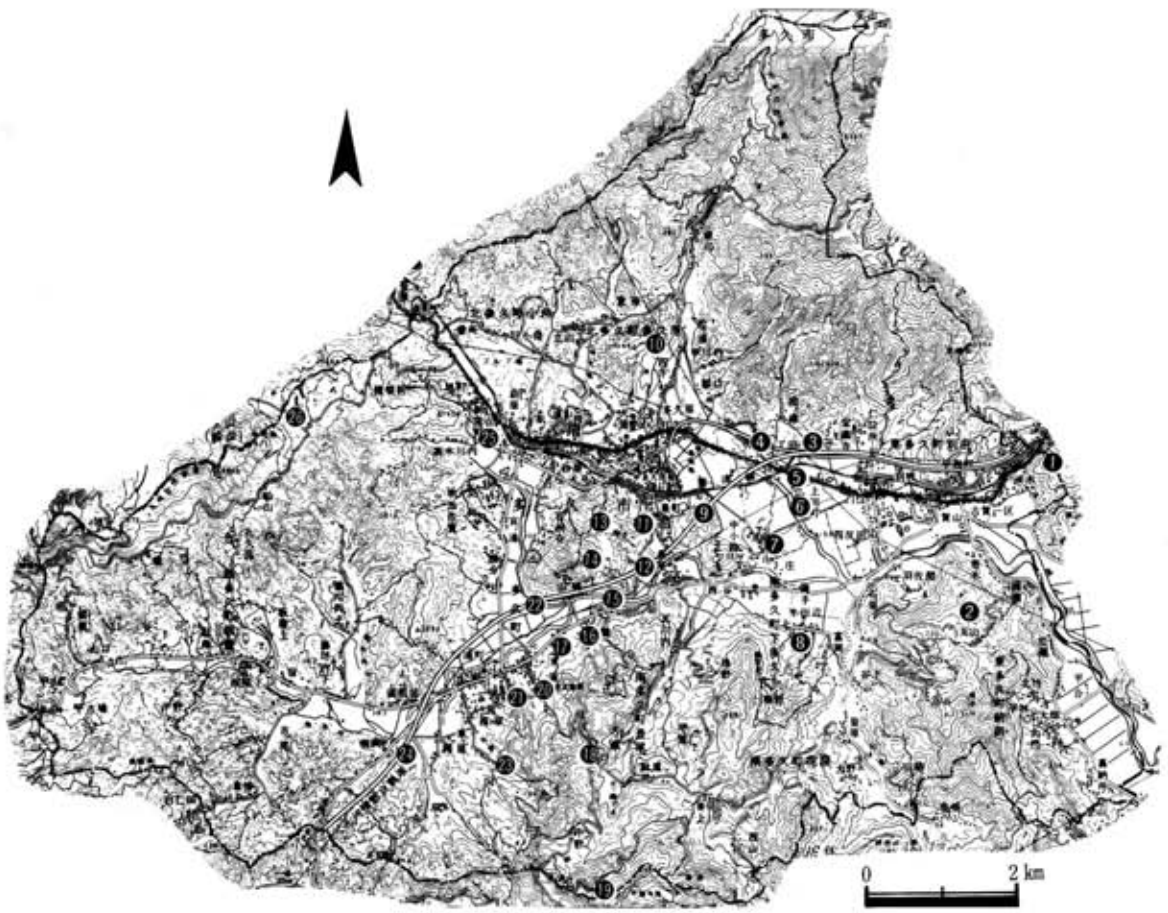



Fig. 6　多久市の主要遺跡分布図

1．赤子谷遺跡
2．天山遺跡
3．鴻ノ巣遺跡
4．大工田古墳群
5．大工田遺跡
6．上田町遺跡
7．中小路増富遺跡
8．牟田辺遺跡
9．十井手遺跡
10．八天山遺跡
11．長尾松隈遺跡
12．長尾開拓遺跡
13．陣ノ辻遺跡
14．山崎古墳群
15．長尾玉ヶ渕遺跡
16．下鶴遺跡
17．茶園原遺跡
18．柳谷遺跡
19．鬼の鼻山遺跡
20．東ノ原1630番地遺跡
21．三年山遺跡
22．撰分遺跡
23．西ノ原遺跡
24．山王遺跡
25．経ノ峰遺跡
26．綿打遺跡

**弥生時代**

県内では弥生時代の大規模な遺跡が次々と調査され、今や甕棺墓の出土数は弥生銀座と呼ばれる福岡県を上回ったといわれている。県東部の弥生文化は佐賀平野に広がり、唐津を中心とする松浦地方の文化は松浦川流域に広がる。この二つの文化から多久は最も距離的に遠く、盆地、狭い平地面積という悪条件が重なり、大規模な集落の形成はなされなかった。このような条件の中で牟田辺遺跡は住居跡69棟、甕棺墓230基、墓域と住居域を区切るＶ字状の大溝などが出土。弥生時代中期の一つの遺跡での住居や墓地など集落の単位を示す標準的な遺跡として知られている。最近の調査で住居跡と甕棺墓が出土した撰分遺跡、増富遺跡、茶園原遺跡、住居跡が出土した鴻ノ巣遺跡、後期の甕棺墓が出土した原田遺跡などがあり、遺構は不明であるが、約20年前に開発によって多量の甕棺墓が出土した長尾玉ヶ渕遺跡や上田町遺跡がある。これらの遺跡での遺物は土器類と石器類がほとんどで、牟田辺遺跡の230基の甕棺墓のうち副葬品を持った甕棺墓は１基だけであり、その内容も勾玉１、管玉76だけで、青銅器の副葬品はなく、このことが多久の弥生文化を物語っている。

**古墳時代**

弥生時代同様に県東部地区から佐賀平野にかけて古墳時代前期の集落が形成され、巨大古墳が出現し、時を同じく唐津地方においても古墳文化への移行がスムーズになされたようであるが、多久でも近年、布留式土器を伴う住居跡が相次いで出土した。撰分遺跡、増富遺跡、大工田遺跡、今出川Ａ遺跡の発掘は、それまで空白であった古墳時代前期を一気に埋める資料を提供し、さらに遺跡の範囲は広がりそうである。

古墳の分布は東部から南部に開けた平野部の先端に突き出た丘陵部に集中する。築造された古墳の総数は500基とも1000基ともいわれ、1847年（弘化四年）に書かれた丹邱邑誌の中にも古墳の記載が見られる。しかし、東部丘陵地への炭坑住宅の建設、果樹園の開墾、採石、土取りを原因とする開発によって破壊され、現存する古墳は100基にも満たず、その大部分は破壊古墳である。現存する古墳の中で最も規模が大きいものは前方後円墳といわれている富岡古墳で墳丘の主軸は20m、最大幅８m、墳丘高５mを測る双円型である。中小路古墳や古賀山１号古墳は直径20m前後の墳丘を持つ円墳であるが、大畑古墳群、平林古墳群、松瀬古墳群、皆木古墳群、渋木古墳群、山の上古墳群、向野古墳群、大工田古墳群、牟田辺古墳群、山崎古墳群など古墳時代後期～終末期に築造された５～20基の小円墳群が多く、そのほとんどが横穴式石室を有するものである。穴大師古墳、古賀山１号古墳、山の上14号古墳は線刻の平行線文、格子文などが刻まれ、隣接する杵島郡や小城郡の線刻文様を持つ古墳との比較は興味深い。

**歴史時代**

山の上古墳群出土の須恵器の中に７世紀末～８世紀初頭のものがあり、歴史時代にも古墳の築造が地域によって見られるようだが、多久に関する記録は「肥前風土記」によれば、小城郡

は7郷20里とされている。郷名は不明であるが「和名抄」に4郷が記され、その中の高来郷があり、現在の多久に比定されていることから、肥前風土記の7郷の一つで、当時は小城郡に属していたとの説が有力である。同書の中に「駅壱所」と記されたのは「延喜式」兵部省に記されている高来駅と解釈され、条理地割が分布する東多久町別府付近との説と古墳群や経筒が出土した多久町山崎付近との説があるが、その比定はむづかしい。

条里制の地割は多久市税務課保管の字図によれば、別府地区に一の坪、二ノ坪、ハタチ、三十六などの字名が残り、別府地区に方六町の大区画が6区画存在していたようである。昭和61年度の圃場整備事業によって消滅した羽佐間四反田地区は条里制の区割がほぼ完全な形で残っていた唯一の地区である。

Fig. 7　東多久町別府の条里制地割

奈良時代から平安時代にかけての遺跡や遺物は近年の調査でその実態が明らかになりつつある。今出川B遺跡では須恵器・土師器のほかに製塩土器といわれる円筒形土器・ふいごの羽口などが出土し注目され、撰分遺跡・中小路増富遺跡では平安時代の土師器類が出土している。県重要文化財の山崎山出土の銅製経筒には天治元年（1124）の銘があり、天山遺跡出土の陶製経筒や多数の須恵質蔵骨器とともにこの時代を代表する遺物である。

文献から見ると「太宰府政所牒写」の康和3年（1101）の項に高来別府が宇佐八幡宮領であり、翌康和4年、大江匡房が寄進した高来別府は田数130町と記載されている。「河上宮造営用途支配惣田数注文」によれば、正応5年（1292）、公田分として高来東郷254町、高来西郷83町の東西2つに区分されていたことが伺える。高来東郷は別府を中心とした現在の東多久町、高来西郷は現在の多久町と推定されている。

鎌倉時代になると源頼朝の御家人、多久太郎宗直が建久4年（1193）摂津から下向し、南多久町下多久に居館（陣内城）を構え、武士による支配が始まったと伝えられている。陣内城跡といわれる延寿寺では道路工事中に青磁碗が二個出土、出土状態から土壙墓のようである。延寿寺の東北約200mの増富遺跡では平安時代末から鎌倉時代初期にかけての遺構群を調査、白磁や青磁のほかに多量の土師器小皿やふいごの羽口などが出土し、注目されている。その後、多久氏は本拠地を多久町梶峰城に移し、政治の舞台は明治時代になるまで多久町を中心に進められていくが、多久氏の本拠地の移転とつじつまが合うかのように茶園原遺跡や撰分遺跡で青磁碗を副葬品とする土壙墓が出土している。

〔参考文献〕

「佐賀県史」上巻　佐賀県史編纂委員会　1968
「多久の歴史」　多久市史編纂委員会　1964
「日本の第四紀研究」　日本第四紀学会　1977
「茶園原遺跡Ⅰ」　多久市教育委員会　1979
「茶園原遺跡Ⅱ」　多久市教育委員会　1980
「牟田辺遺跡」　多久市教育委員会　1975
「牟田辺遺跡Ⅱ」　多久市教育委員会　1977
「牟田辺遺跡Ⅲ」　多久市教育委員会　1978
「佐賀県の歴史と文化論攷」　木下之治　1977

# Ⅲ　山の上古墳群

遺跡名：山の上古墳群（略号ＹＭＵ）

遺跡所在地：多久市東多久町大字別府字池ノ平、字大平、字堤口

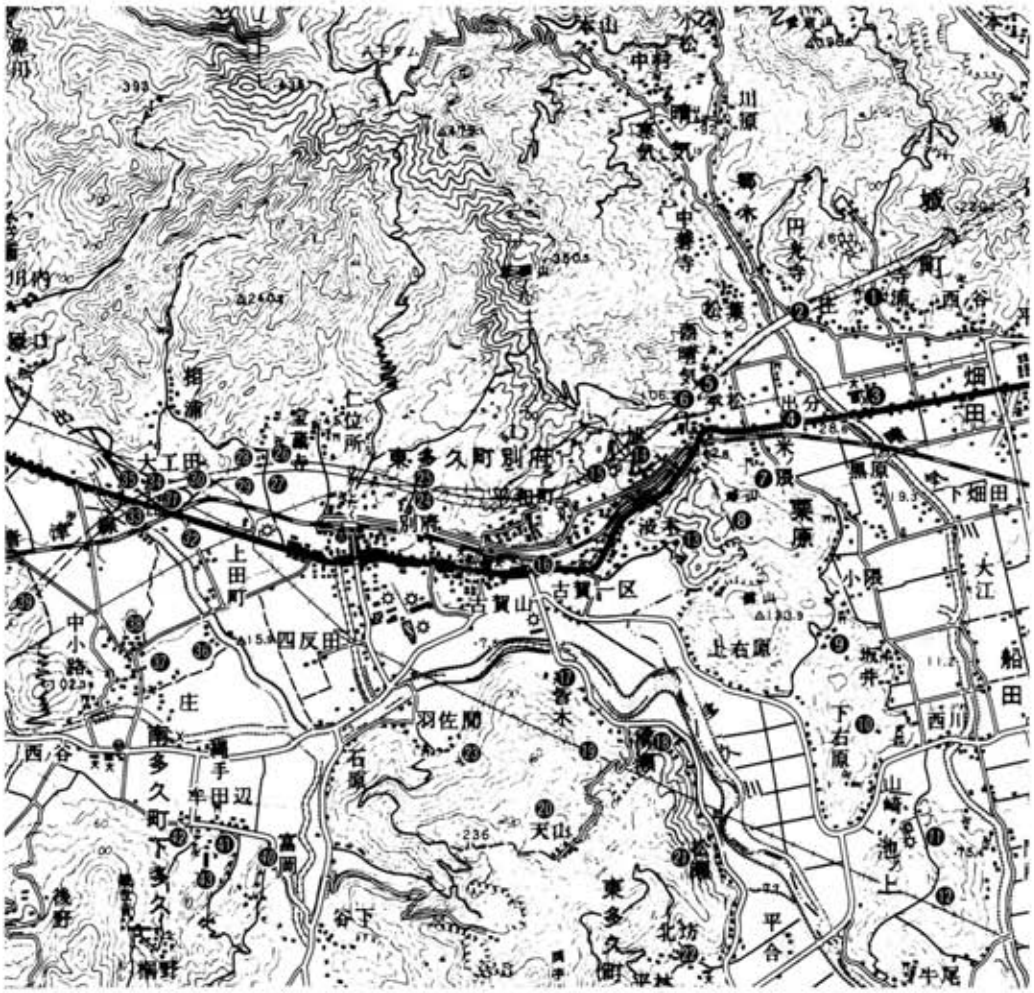



Fig. 8　山の上古墳群周辺遺跡分布図(1/50,000)

1. 寺浦廃寺跡
2. 寺浦１号古墳
3. 晴田小学校遺跡
4. 晴田宿遺跡
5. 寄居遺跡
6. 一本松古墳群
7. 米ノ隈古墳群
8. 姫御前古墳
9. 弁財天古墳
10. 丹坂峠古墳
11. 秋葉神社裏遺跡
12. 牛ノ尾山古墳群
13. 渋木古墳群
14. 小城炭坑跡古墳
15. 山の上古墳群
16. 古賀山１号古墳
17. 皆木古墳群
18. 柳瀬古墳群
19. 穴大師古墳
20. 天山遺跡
21. 松瀬古墳群
22. 北ノ森古墳
23. 羽佐間古墳群
24. 中村谷遺跡
25. 向野古墳群
26. 宝蔵寺遺跡
27. 出口Ａ遺跡
28. 宝蔵寺溜池遺跡
29. 西出口遺跡
30. 鴻ノ巣遺跡
31. 原田遺跡
32. 大工田遺跡
33. 今出川Ａ遺跡
34. 今出川Ｂ遺跡
35. 大工田古墳群
36. 摺ヶ本遺跡
37. 中小路増富遺跡
38. 中小路古墳
39. 十井手遺跡
40. 富岡前方後円墳
41. 牟田辺遺跡
42. 牟田辺古墳群
43. 牟田辺古墳群

# Ⅲ　山の上古墳群

## 1．遺跡の概要

山の上古墳群は多久盆地の東北の壁になる天山山系の笠頭山（標高337m）の南に張り出す通称「上り山」の南麓に位置し、正確には多久市東多久町大字別府字池ノ平、字大平、字堤口に所在する。遺跡周辺には縄文時代から古墳時代までの遺跡が分布し、これまで数次におよぶ発掘調査が実施されている。渋木１号古墳（昭和33年）、古墳山１号古墳、赤子谷古墳（昭和40年）、向野古墳群（昭和42年）、山の上古墳群（昭和55年）、小城炭坑跡古墳（昭和56年）、中村谷遺跡（昭和58年）などがその主なもので、隣接する小城町の米ノ隈古墳、一本松古墳群、寄居遺跡、寺浦１号古墳なども近年発掘調査が実施された。これらの古墳は山の上古墳群と同系の笠頭山山麓に所在する。池ノ平遺跡、別府開拓遺跡、石亀谷遺跡、宝蔵寺遺跡など縄文時代晩期の遺物が散布する遺跡が標高50m前後の台地上に連なる。南部の狭い平野部と牛津川を挟んで対峙する両子山山麓には縄文時代晩期の農耕論の火種となった天山遺跡、手捏土製品が出土した天山祭祀遺跡、線刻装飾が施された穴大師古墳、松瀬古墳群などがあり、山裾には柳瀬古墳群、皆木古墳群、北ノ森古墳、平林古墳、大畑古墳群が立地し、市内でもっとも古墳の分布密度が高い地域である。

山の上古墳群が立地する丘陵の南側一帯は小城炭坑の社宅や貯炭場、工場建物などの宅地として利用され、北側の山手は笠頭山まで一部を残し、大部分は橘柑園に開墾されている。住宅地に利用された山の上区、池ノ平区では宅地造成のため、相当数の古墳が破壊されたといわれている。またボタ山になる以前に約10基の古墳があり、現在ボタ山の下になっているとのことで、炭坑操業前は大規模な古墳群だったようだ。

山の上古墳群は笠頭山から南に派生する通称「上り山」の南に面する標高60～100mの急傾斜面に部分的に形成された緩斜面の狭い台地上に築造された16基から成る古墳群で、これまで地元の一部の人が数基の古墳について知る程度で、市および県教育委員会も古墳の存在を知らず、遺跡台帳や遺跡分布地図には未登録であった。古墳群周辺は明治時代中頃まで採石場になっていたため、古墳の石室や天井石などの石材も採石の対象となったようで、原形をとどめる古墳は皆無であった。付近一帯には石室の石材として使用可能な巨石が集められ、何カ所もの石塚が築かれ、古墳と間違うものもあり、16基以外に相当数の古墳が存在していたと予想される。16基の古墳のうち14基が九州横断自動車道および東多久バイパス建設用地内にあり、調査の対象となったが、残る２基は東多久バイパス南側の雑木林の中にあり、今回の開発からは免れた。

古墳の名称は東側に築造された古墳から順に西側へ、九州横断自動車道建設用地内の古墳を

優先させＳＴ001古墳～ＳＴ007古墳とし、東多久バイパス建設用地内の７基をＳＴ008古墳～ＳＴ014古墳とした。雑木林内に残る２基にも東からＳＴ015古墳、ＳＴ016古墳の名を用いた。

山の上古墳群の性質を知るために16基の古墳群のうち、未調査の２基を除いた九州横断自動車道関係の７基については本書で報告するが、既に報告書を刊行した東多久バイパス関係の７基の古墳について簡単にその概要を紹介する。

ＳＴ008古墳は東多久バイパスに係る古墳の中で、もっとも東に位置し、ＳＴ001古墳の南西に約80m、標高73mの僅かな緩斜面に築造された破壊古墳で、盛土の大部分は失われ、石室の腰石、天井石も一部取り除かれていたが、東西に残存する墳丘から直径4.6mの円墳であったようだ。内部主体は南に開口する横穴式石室を有し、石室の法量は長さ1.5m、幅1.6m、羨道部の長さ1.1m、幅0.9mを測る。地山整形はほとんど行われておらず、自然地形を利用しているため、敷石は羨道部にやや勾配を持つ。遺物は出土しなかった。

ＳＴ009古墳はＳＴ008古墳の西13mにあり、同じ条件の地形上に築造された破壊古墳である。残存する墳丘は直径4.8mを測る円墳で、内部主体は南に開口する横穴式石室を有し、石室の法量は長さ1.6m、幅1.5m、羨道部は長さ1.6m、幅0.7mを測る。地山整形も奥壁腰石部と袖石部分以外は行われておらず、敷石は羨道部に勾配を持つ。遺物は土師器杯・須恵器杯・杯蓋・盤が出土している。

ＳＴ010古墳はＳＴ009古墳の西方55m、標高83mの傾斜面に築造された小古墳で、残存する墳丘から直径4.2mの円墳である。内部主体はほぼ南に開口する横穴式石室を有し、石室の法量は長さ1.2m、幅1.2～1.5m、羨道部は長さ0.8m、幅0.7mと推定される。地山整形はほとんど行われていない。石室前面で須恵器杯が出土した。

ＳＴ011古墳はＳＴ010古墳の西13m、標高82mの傾斜面に築造された小古墳で、残存する墳丘の直径は5.1mを測る円墳である。内部主体は南に開口する横穴式石室を有し、石室の法量は長さ1.4m、幅1.0m、羨道部の長さ1.1m、幅0.5mを測る。腰石は幅0.4～1.0m、高さ0.4～0.7mと小さい。地山整形もほとんど行われていない。石室前面で須恵器杯蓋が出土した。

ＳＴ012古墳はＳＴ011古墳の西10m、標高82mの傾斜面に築造された小円墳で、残存する墳丘は3.5mと小さい。内部主体は南に開口する横穴式石室を有し、石室の法量は小規模で、長さ、幅とも1.0m、羨道部は造られていない。袖石間の幅は0.4mと狭く、石室の高さも最高0.7～0.8mと低く、腰石は0.5m内外の高さで、横穴式石室の持つ本来の用途は失われている。遺物は須恵器杯・杯蓋の破片が石室前面で出土している。

ＳＴ013古墳はＳＴ010古墳の南に20m、標高78mの緩傾斜面に位置する円墳で、残存する墳丘の直径は8.1mを測る。ＳＴ013古墳を除く15基の古墳はほぼ南に開口しているが、このＳＴ013古墳は西に開口している。石室の石材も他の15基は遺跡一帯で産出する玄武岩を用いているが、奥壁左腰石と右側壁奥の腰石には花崗岩を用いている。遺跡周辺には花崗岩は産出しない。

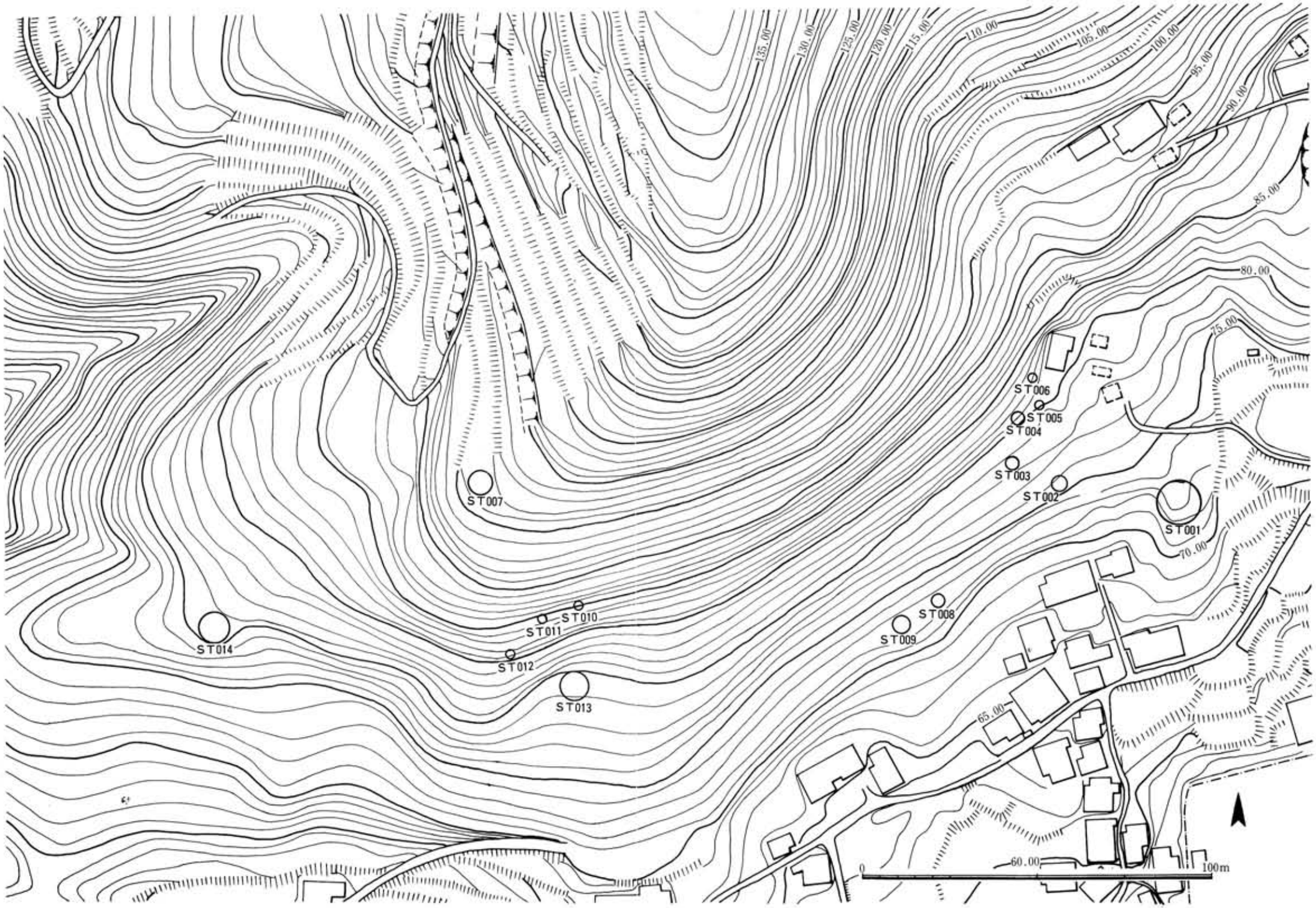



Fig. 9　山の上古墳群地形図及び遺構配置図

石室の法量は長さ2.2m、幅は袖石の内側で1.9m、奥壁部で2.2mと奥が広い。羨道部は長さ0.9m、幅0.8mを測る。地山整形は石室主軸部で1.2mの深さの平坦部を造っている。石室の左奥壁付近でガラス製小玉が約350個出土している。

ＳＴ014古墳は山の上古墳群の最西端、ＳＴ012古墳から西130mの距離にあり、上り山の南西に延びた緩傾斜面に張り出す標高79mの小台地に立地する。残存する墳丘は直径8.0mを残す円墳で、内部主体は南に開口する横穴式石室を有し、石室は長さ、幅とも2.3mの正方形で、羨道部は長さ1.5m、幅0.7～0.8mを測る。石室奥壁腰石３個のうち、中央と左側の石の全面に格子文が刻まれ、袖石など４カ所にも斜平行線文、縦平行線文などの線刻文様が施されている。遺物は鉄鏃や弓付属金具、刀子などの鉄器類とガラス製小玉、中玉、水晶製切子玉、そろばん玉、碧玉製管玉、ヒスイ製の勾玉などの玉類が400個以上も出土している。奥壁に人骨１体分が残っていたが骨の組織は失われていた。石室の羨道部に近い敷石に赤色の顔料が残り、玉類の出土状態などからみて３～４体の埋葬または追葬が行われたようだ。

以上、東多久バイパスに係る７基の古墳の概要を紹介したが、年代を決定する土器類の出土が少なく、７基の築造順を決めることは容易ではないが、ＳＴ014古墳は古賀山１号古墳と同類の線刻の文様構成を持ち、古賀山１号古墳出土の須恵器高杯・平瓶は６世紀末～７世紀初頭に編年されることから、同時期の築造であろう。ＳＴ013古墳はＳＴ014古墳と同規模の石室を有し、山の上古墳群の中で類似するＳＴ001古墳出土の須恵器からＳＴ014古墳に次ぐ７世紀初頭の築造と考えられる。ＳＴ008古墳、ＳＴ009古墳は同一規模の古墳で、同一地形に立地し、ＳＴ009古墳の須恵器から２基とも７世紀末に編年される。７世紀末～８世紀初頭の須恵器杯蓋が出土したＳＴ011古墳・ＳＴ012古墳はＳＴ010古墳とともに小石室を有する終末期の古墳であろう。

## ２．遺　構

**ＳＴ001古墳**（Fig. 10・11, PL. 2－1・2, 3－1・2）

ＳＴ001古墳は上り山の南東傾斜面から緩やかに延びた標高71～73mの台地上に築造され、古墳群の中ではもっとも東に位置する。古墳の規模は残存する墳丘の直径15mを測り16基中、最大である。墳丘は削平され、橘柑園に開墾されていた。石室の一部は露出し、周辺の畑地から集められた小石や廃材の捨て場となっていた。羨道の両側の葺石がほぼ垂直な石垣状に積まれ、玄室右側の側壁が約１mほど陥没していた。遺物は墓道、閉塞部、羨道、玄室から須恵器や土師器、鉄鏃が出土した。出土遺物から７世紀初頭の築造と思われる。

**墳丘**　墳丘は平坦に削平され、正確な法量は確認できないが、残存する墳丘の直径は15.0mを測る円墳である。墳丘の最大高は2.35mあり、部分的に版築による盛土が認められた。葺石

は墳丘全体に施され、羨道部両側の葺石は石垣状に垂直に積まれていた。墳丘の裾部は削平によって段がつき周溝の有無は不明である。玄室右側の側壁の陥没については、常識的ではないが、傾斜面での古墳築造という立地から、傾斜面の高い部分を平坦に削平し、その残土を低い部分に埋めて平坦な面を造り出す地山整形で、その上部に古墳を築造したため、長期間のうちに右側の埋立て部分上部の側壁が陥没したのであろうか。

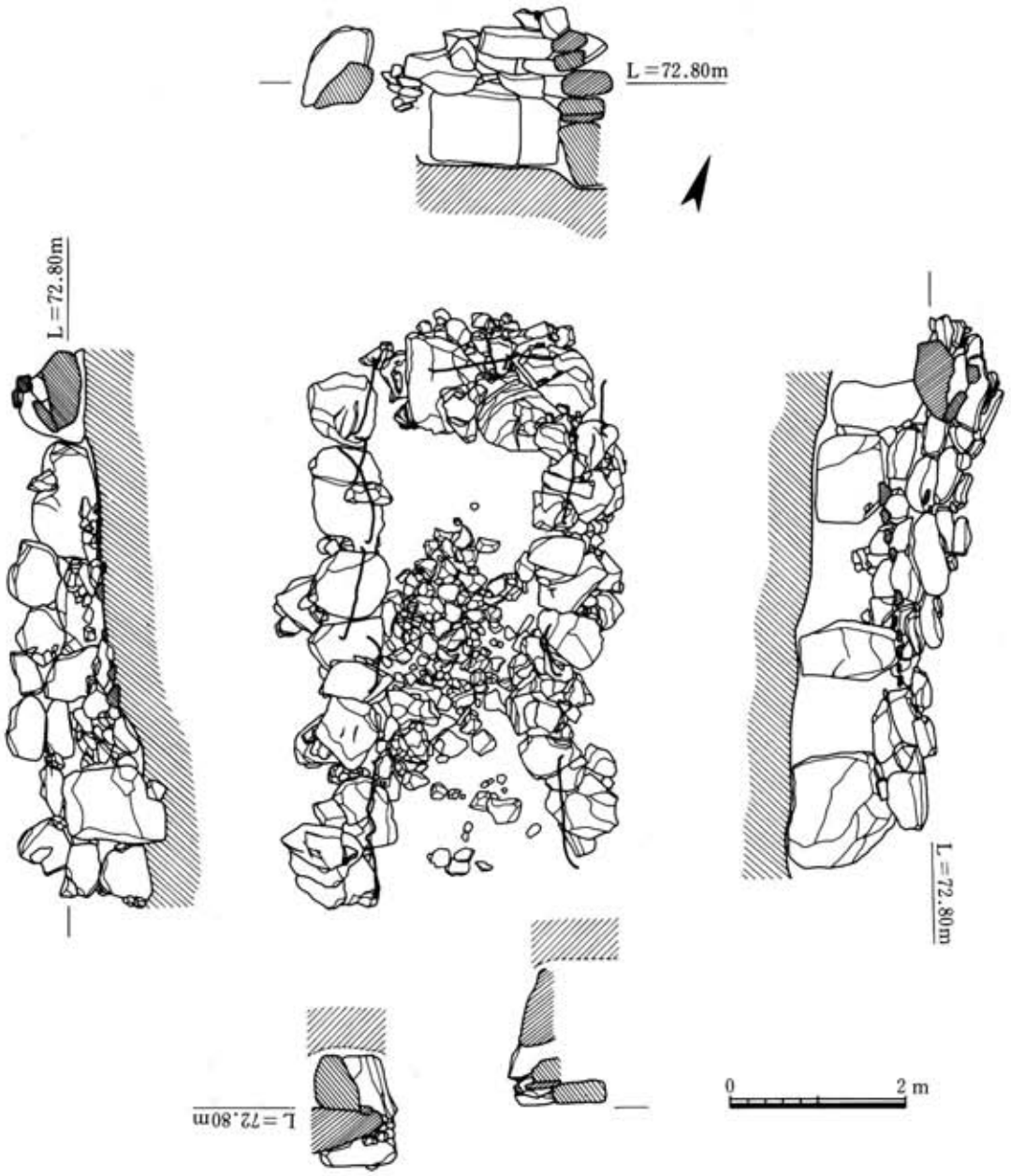



Fig. 10　山の上古墳群ＳＴ001古墳石室実測図

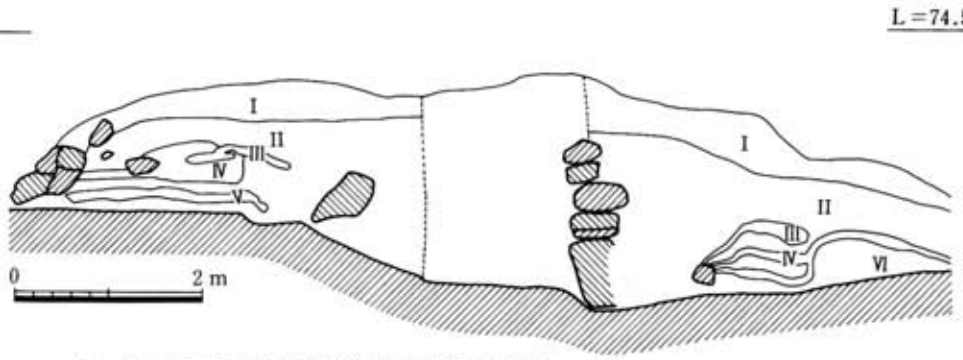



Fig. 11　山の上古墳群ＳＴ001古墳墳丘土層図

**内部主体**　単室両袖型の横穴式石室で、主軸方向をN21°Eにとり、ほぼ南に開口する。石室は右側壁が陥没しているため左側壁や天井石を陥没方向に引き込んだ状態で傾き原形をとどめていない。玄室の平面形は左側壁の腰石の一部が陥没移動し存在せず、奥壁の腰石もずれているため正確な計測はできないが、中央長3.0m、幅2.3mの長方形である。羨道は長さ2.0m、幅は袖石部で1.4m、閉塞部で2.0mと外に向かって広がり、前室の退化とも思われる。閉塞部には0.2～0.4m前後の礫と小礫が混入し閉塞石に用いられていた。敷石は玄室奥では失われていたが、玄室中央部から羨道部にかけて0.1～0.3mのやや扁平な礫を敷き詰めていたので、石室全面に敷石が施されていたと思われる。石材のほとんどが遺跡周辺に産出する玄武岩を用いている。

**ＳＴ002古墳**（Fig. 12, PL. 4－1）

ＳＴ002古墳はＳＴ001古墳の西方約40m、標高76m前後の狭い緩傾斜面に位置する。ＳＴ003～ＳＴ006古墳とは５～15mの距離にあり５基が集中する。果樹園開墾後の石捨場となった石塚の下に腰石だけを残す破壊古墳である。玄室から須恵器の高台付杯、杯蓋、土師器の杯、杯蓋が出土。遺物から７世紀中頃の築造と思われる。

**墳丘**　墳丘は削平され、盛土が全く残っておらず、周溝も検出できなかったため、墳形、規模とも不明である。

**内部主体**　両袖型の横穴式石室であるが、袖石から外側の石室が前室か羨道なのかは判断できなかった。主軸方向をN22°Eにとり、ほぼ南に開口する。玄室の平面形は中央長1.5m、幅1.9mの横長の長方形である。前室または羨道の残存する長さは3.0m、幅は袖石部で1.4m、石室入口部で2.0mと外に広がりを持つ。奥壁は２石の腰石が残り、左側の腰石の幅1.4m、高さ0.85mを除いて、用いられた石材は全て小さい。敷石は0.2～0.4mの角礫を石室全面に敷き詰めている。石材のほとんどが玄武岩を用いている。

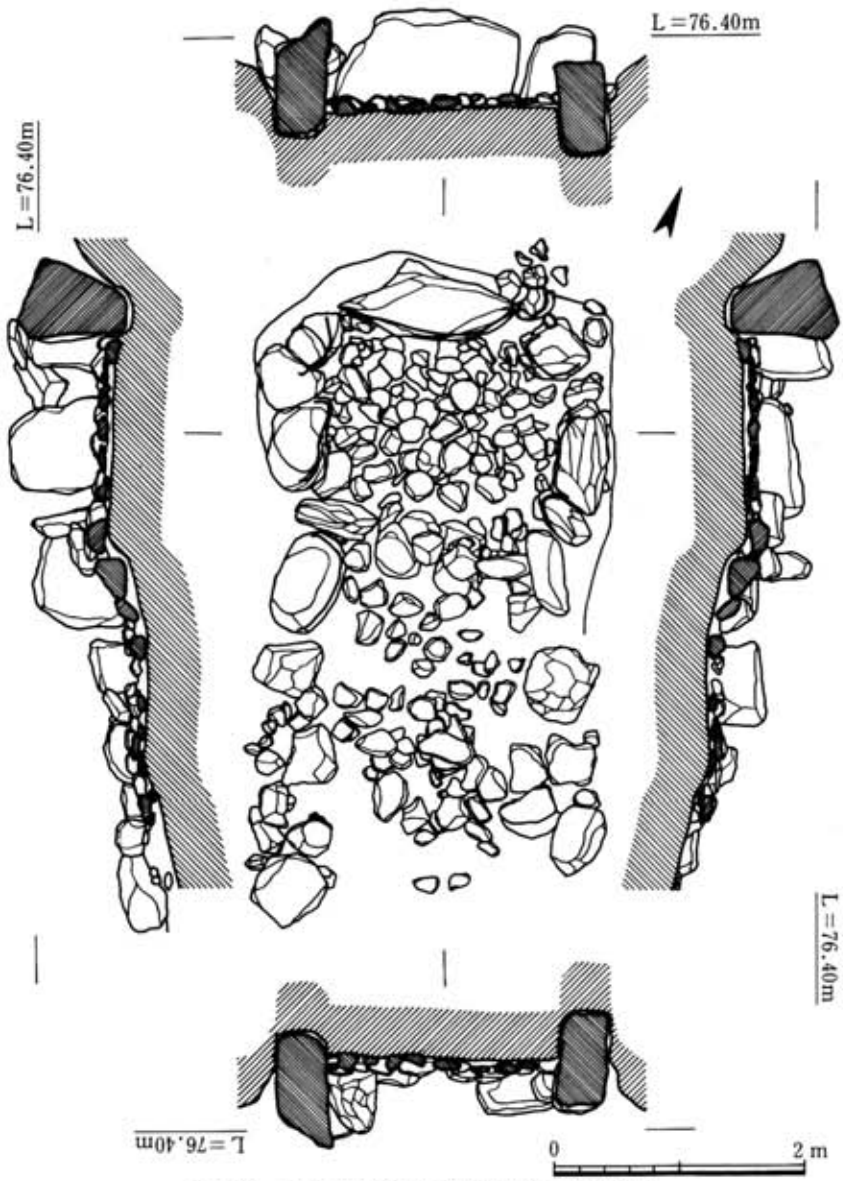



Fig. 12　山の上古墳群ＳＴ002古墳石室実測図

**ＳＴ003古墳**（Fig. 13, PL. 4－2）

ＳＴ003古墳はＳＴ002古墳の北西12m、標高78m前後の狭い緩傾斜面に立地する。天井石は玄室内に落ち込み、羨道部から袖石までは閉塞石で閉鎖されていたが、石室前面は切り取られ段がついていた。玄室から須恵器杯、杯蓋、土師器皿が出土した。遺物から７世紀前半の築造と思われる。

**墳丘**　墳丘は石室前面が切り取られているため正確ではないが、残存する墳丘の直径は5.0mを測る円墳である。墳丘の前半分に0.2～0.6mの葺石が施されていた。周溝はなかった。

**内部主体**　単室両袖型の横穴式石室を有し、主軸方向をN23°Eにとり、ほぼ南に開口する。石室堀り方は中央長で3.0m、幅3.0mの隅丸方形に掘られ、奥壁側で深さ1.3mあり、羨道部の旧地形地山の傾斜面と同一の高さになる。玄室の平面形は中央長1.7m、幅1.6mと正方形に近い。羨道部は右側が袖石と直線に並ぶが左側は失われている。羨道の前面は削平され、残存長1.3m、幅1.0mを測る。玄室と羨道部を区切る梱石は長さ0.7m、幅0.6m、厚さ0.4mあり、古墳の規模の割に大きい。閉塞部は羨道から袖石まで0.2～0.4mの礫を積み込み閉鎖していた。敷石は石室全面に0.1～0.3mの角礫を敷き詰めていたようである。古墳の石材はほとんどが玄武岩である。

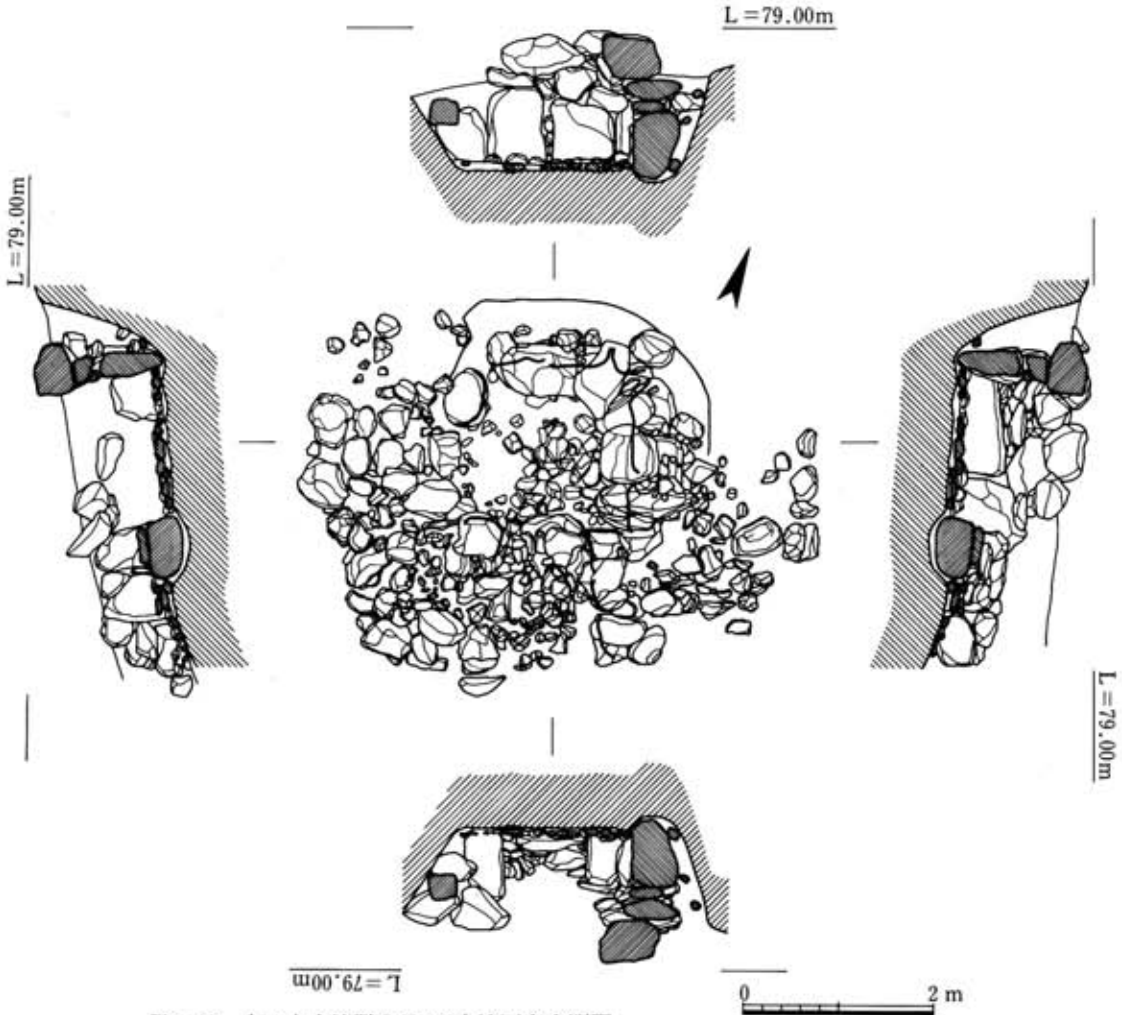



Fig. 13　山の上古墳群ＳＴ003古墳石室実測図

**ＳＴ004古墳**（Fig. 14, PL. 5－1）

ＳＴ004古墳はＳＴ003古墳の北方約12m、標高80mの傾斜面に位置し、ＳＴ005古墳とは西に

4mの距離にある。墳丘や天井石などの上部構造は削平され失われているが、石室の平面形状は古墳群の中では良好である。遺物は出土しなかったがＳＴ003古墳と同時期であろう。

**墳丘**　墳丘は削平され、残存する墳丘の直径は5.1mを測る円墳である。葺石は羨道部の左側の墳丘の一部に0.2～0.4mの礫で施されている。周溝は存在しない。

**内部主体**　単室両袖型の横穴式石室を有し、主軸方向をN27°Wにとり、ほぼ南に開口する。石室堀り方は中央長で2.5m、幅3.0mの隅丸方形で、奥壁側の深さは0.4～0.5mあり、袖石付近で旧地形の地山の傾斜面と同一の高さになる。玄室の平面形は中央長で1.9m、幅1.4mの長方形である。羨道部は0.3m角の礫で積まれ、長さ1.0m、幅0.6mと狭い。閉塞部は0.2～0.5mの礫で閉鎖されていた。敷石は0.1～0.4mの厚みのある角礫で敷かれていた。石室の石材は玄武岩を用いている。

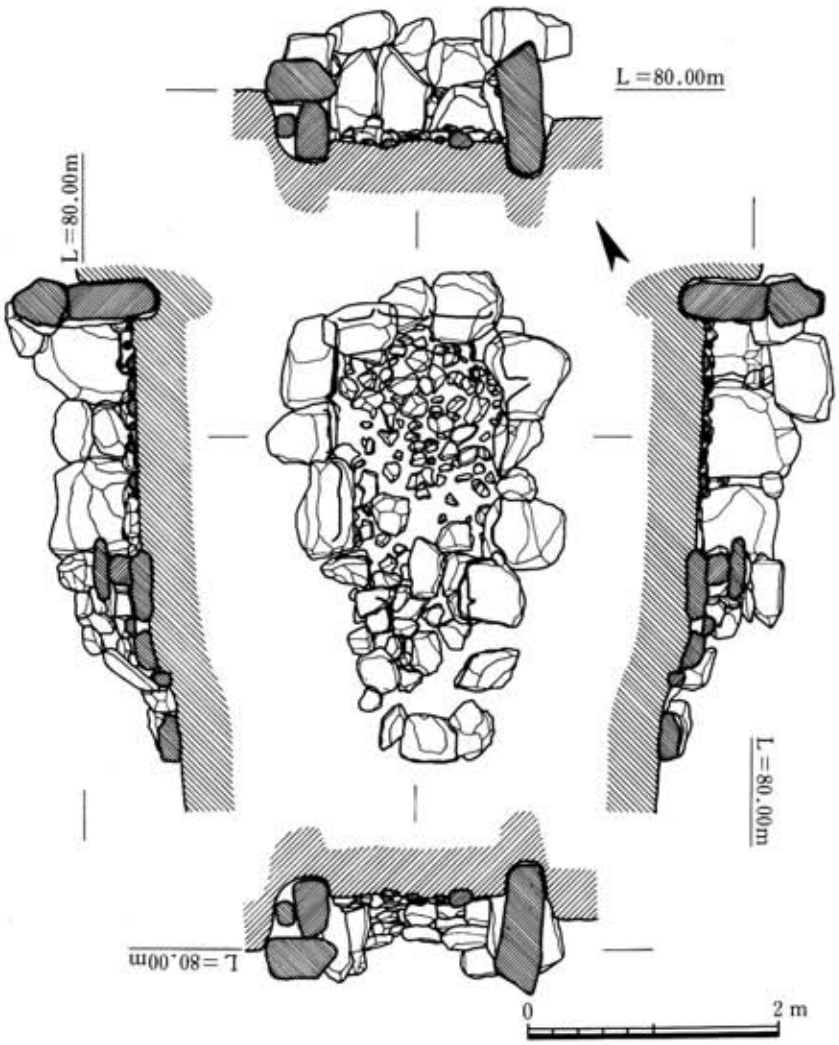



Fig. 14　山の上古墳群ＳＴ004古墳石室実測図

**ＳＴ005古墳**（Fig. 15, PL. 5－2）

ＳＴ005古墳はＳＴ004古墳の東４ｍ、標高80mの傾斜面に並び、石室は凹地にあり、石室の大部分は破壊され、奥壁と側壁の腰石と左側の袖石と羨道部の一部を残すだけであった。玄室の敷石上から須恵器杯蓋が出土し、遺物から７世紀中頃の築造と思われる。

**墳丘**　傾斜面の凹地の中に腰石だけを残す古墳であるため墳形や墳丘の規模は不明である。葺石・周溝とも不明である。

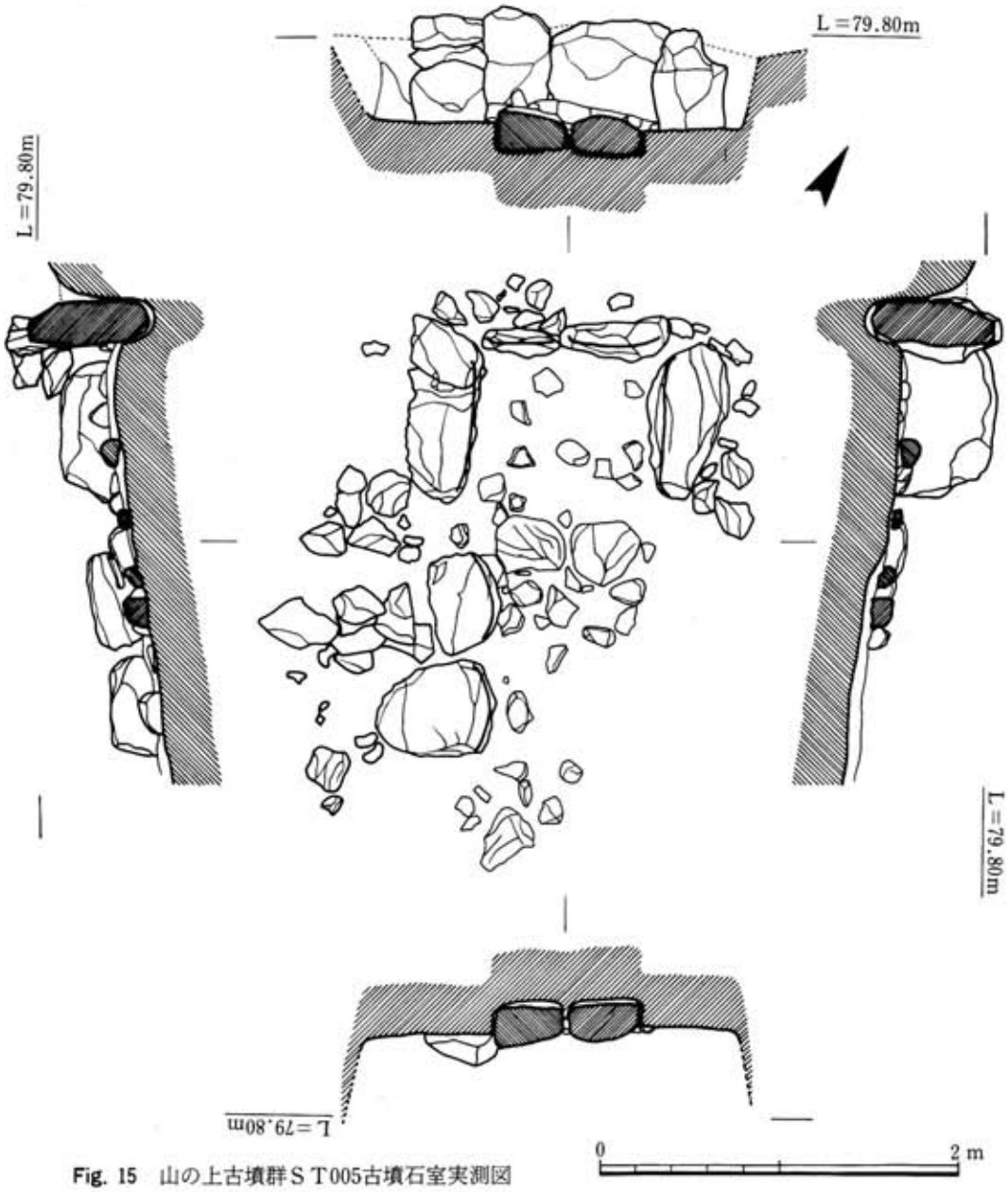



Fig. 15　山の上古墳群ＳＴ005古墳石室実測図

**内部主体**　残存する石の配置から単室両袖型の横穴式石室と思われる。主軸方向をN31°Eにとり、ほぼ南に開口する。石室堀り方は中央長で約1.0m、幅2.4mあり、奥壁腰石部の深さは0.6mあり、袖石の玄室側で旧地形の傾斜面と同一の高さになる。玄室の主軸長は約1.0m、幅1.1mと小規模である。奥壁の腰石の2石は床面から0.65mと0.6m、右側壁は0.55m、左側壁は0.3mと低く、東多久バイパス調査区のＳＴ012古墳と同じく横穴式石室の持つ本来の用途は失われている。梱石は2石が用いられている。羨道は左側だけに残り1.0mを測る。敷石は玄室内に一部残っていることから全面に敷かれていたようである。閉塞部は不明である。石室の石材は玄武岩が用いられている。

**ＳＴ006古墳**（Fig. 16, PL. 6－1）

ＳＴ006古墳はＳＴ005古墳の北方5m、標高83m前後の急傾斜面に築造された玄室の奥壁と左側壁の腰石を残すだけの破壊古墳である。

**墳丘**　石室の一部を残すだけに破壊されているため墳形、墳丘の規模は全く不明で、葺石、周溝も不明である。

**内部主体**　残存する石の配置から単室両袖型の横穴式石室であろう。主軸方向はN22°Eにとり、ほぼ南に開口する。石室堀り方は急傾斜面という立地であるため奥壁部は幅1.6m、深さ0.7mを掘っているが中央長は破壊が著しく不明である。玄室の床面は奥壁腰石から傾斜を持つ。玄室の中央長、幅とも正確でないが、1.3mと1.0mの縦長の長方形であろう。ＳＴ005古墳と同じく横穴式石室の用途を失っている。玄室内には敷石と思われる礫が数個残っていることから敷石は全面に敷かれていたようである。石室の石材に玄武岩を用いている。

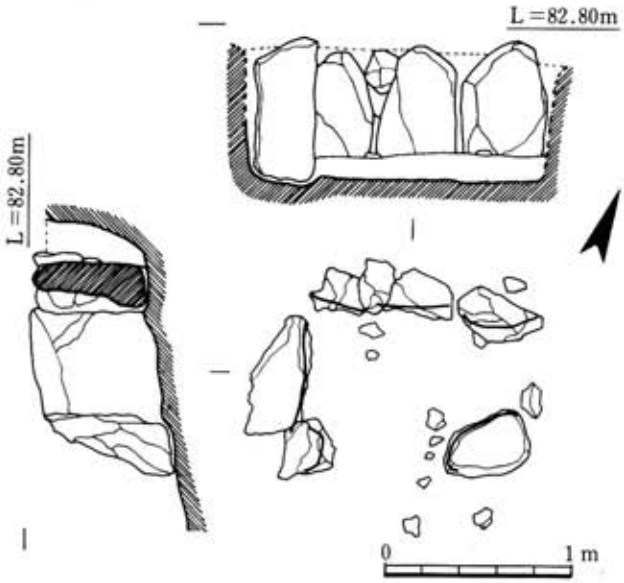


Fig. 16　山の上古墳群ＳＴ006古墳石室実測図

**ＳＴ007古墳**（Fig. 17, PL. 6－2）

ＳＴ007古墳はＳＴ002古墳など5基の古墳群から西に約160m、ＳＴ001古墳からは西に200mの距離にあり、上り山南西急傾斜面から延びた標高102m前後の緩やかな勾配を持つ小台地の突端に立地する。山の上古墳群の最西端で、標高ももっとも高く、他の古墳との立地は全く異な

る。石室前面で須恵器杯・杯蓋が出土。須恵器は県内でも古式に属し、５世紀後半から６世紀初頭の築造と思われる。

**墳丘**　墳丘および石室の上部構造は削平され、残存する墳丘の直径8.2mの円墳である。葺石、周溝は存在しなかった。

**内部主体**　単室両袖型の横穴式石室を有し、主軸方向をN38°Eにとり、やや南に開口する。石室堀り方は中央長4.2m、幅は玄室部で3.3m、羨道部で2.5mあり、腰石に沿って平行に掘っている。奥壁部での深さは約1.0mを残している。玄室は中央長2.2m、幅は2.0～2.2mを測り、ほぼ正方形である。玄室の側壁、奥壁の腰石や袖石は古墳群中、最大の石材を用いている。羨道部は袖石と直線的に並び、長さ1.5m、幅0.9mの長方形で、玄室の幅の割に狭い。閉塞部は0.3～0.4mの円礫を多く用いて閉鎖していた。敷石は0.1～0.4mの角礫を平坦に敷き詰めていた。石室の石材は玄武岩を用いていた。

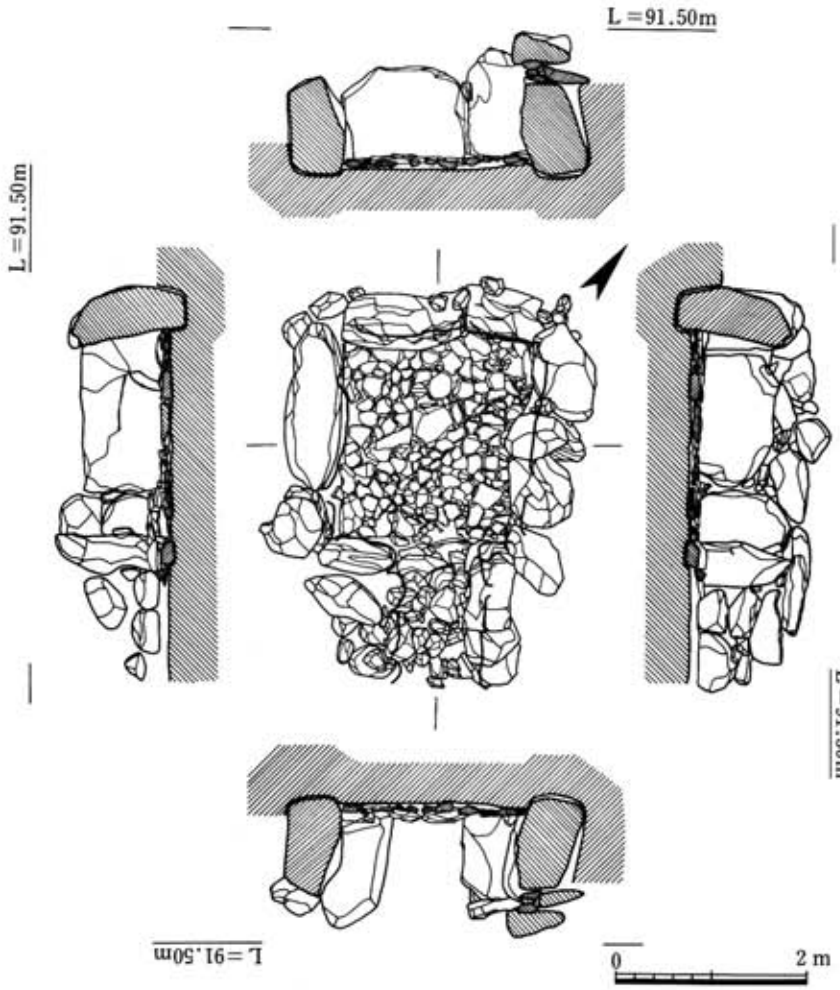



Fig. 17　山の上古墳群ＳＴ007古墳石室実測図

## 3．遺　物

山の上古墳群の14基の古墳から出土した遺物は大きく三つに分類できる。須恵器・土師器などの土器類、鉄鏃・刀子などの鉄器類、勾玉・ガラス玉などの装身具類の三種類で、土器はＳＴ004古墳、ＳＴ006古墳、ＳＴ014古墳を除く11基で出土している。鉄器はＳＴ001古墳、ＳＴ002古墳、ＳＴ007古墳、ＳＴ014古墳の４基で出土。装身具はＳＴ013古墳、ＳＴ014古墳の２基で出土している。東多久バイパスに係る７基の古墳の遺物については、既に報告書を刊行し報告しているので省略するが、九州横断自動車道関係の７基について出土状態などの概略は次のとおりである。

遺物が全く出土しなかった古墳はＳＴ004古墳とＳＴ006古墳の２基である。ＳＴ001古墳、ＳＴ002古墳、ＳＴ007古墳の玄室内で出土した鉄器は鉄鏃の破片で、２～３点の小破片であるため図化を控えた。土器がもっとも多く出土した古墳はＳＴ001古墳で、玄室、羨道の床面上と閉塞部の石の間から100個体分以上の須恵器が出土、閉塞部付近の石の間からの出土量が多い。器種も多い。ＳＴ002古墳では玄室の中央部～奥壁付近と右側壁中央部の敷石上で須恵器と土師器が出土。ＳＴ003古墳では玄室の右袖石付近～右側壁付近の敷石上で須恵器、土師器が出土。ＳＴ005古墳では玄室内敷石上で須恵器杯蓋１点が出土した。ＳＴ007古墳では右石室前面の埋土中から須恵器が出土した。出土遺物については古墳別に図版を組んだ。

**ＳＴ001古墳**

**須恵器**（Fig. 18～21, PL. 7～11，12－68～71）

**杯蓋**　杯蓋は約50個体分あり、復元できたのは35個体である。大部分は天井部に擬宝珠状・乳頭状つまみを持ち、口縁部内側に短かいかえりを持つ。１～３・９・28は天井部に擬宝珠状のつまみを持ち、平坦な天井部から体部が内湾気味に開き、口縁部内側にわずかなかえりを持つ。４～８・10は天井部に乳頭状つまみを有し、体部は丸味を持ち、口縁部はやや外反し、口縁部内側に短かいかえりがある。11は天井部に乳頭状つまみを有し、体部はやや丸味を持ち、内湾気味に開き、口縁部内側にかえりを持つ。12・13・19・25は天井部に擬宝珠状つまみを有し、天井部から体部は緩やかな丸味を持ち、口縁部はやや開き、内側に短かいかえりを持つ。14・20・21は天井部に擬宝珠状のつまみを有し、体部は丸味を持ち、内湾気味に開き、口縁部内側にわずかなかえりを持つ。15～18・22は擬宝珠状つまみを有し、体部は丸味を持ち、口縁部は直線的に開き、内側に短かいかえりを持つ。23・30は天井部が欠けつまみの有無は不明で、体部は丸味を持ち、内湾気味に開き、口縁部内側に短かいかえりを持つ。24は中央が窪んだボタン状つまみを有し、天井部から体部にかけて平坦で、体部から内湾気味に開き、内側にかえりを持つ。27は天井部に擬宝珠状つまみを有し、天井部から体部にかけて平坦だが、体部から直線的に開き、口縁部内側に短いかりを持つ。器高が高い。26・29は天井部は平坦で、つまみ

を持たない。体部からやや外反気味に開き、短いかえりを持つ。31～33・35は天井部がやや丸味を持ち、体部は外反する。34・36・37は天井部が平坦で、体部との境は屈曲が強く、口縁部は直線的に開く。38・39は天井部がやや丸味を持ち、体部は内湾気味に開く。

**杯**　杯は約50個体分出土したが復元できたのは30個体分である。口縁部に受部を有するもの

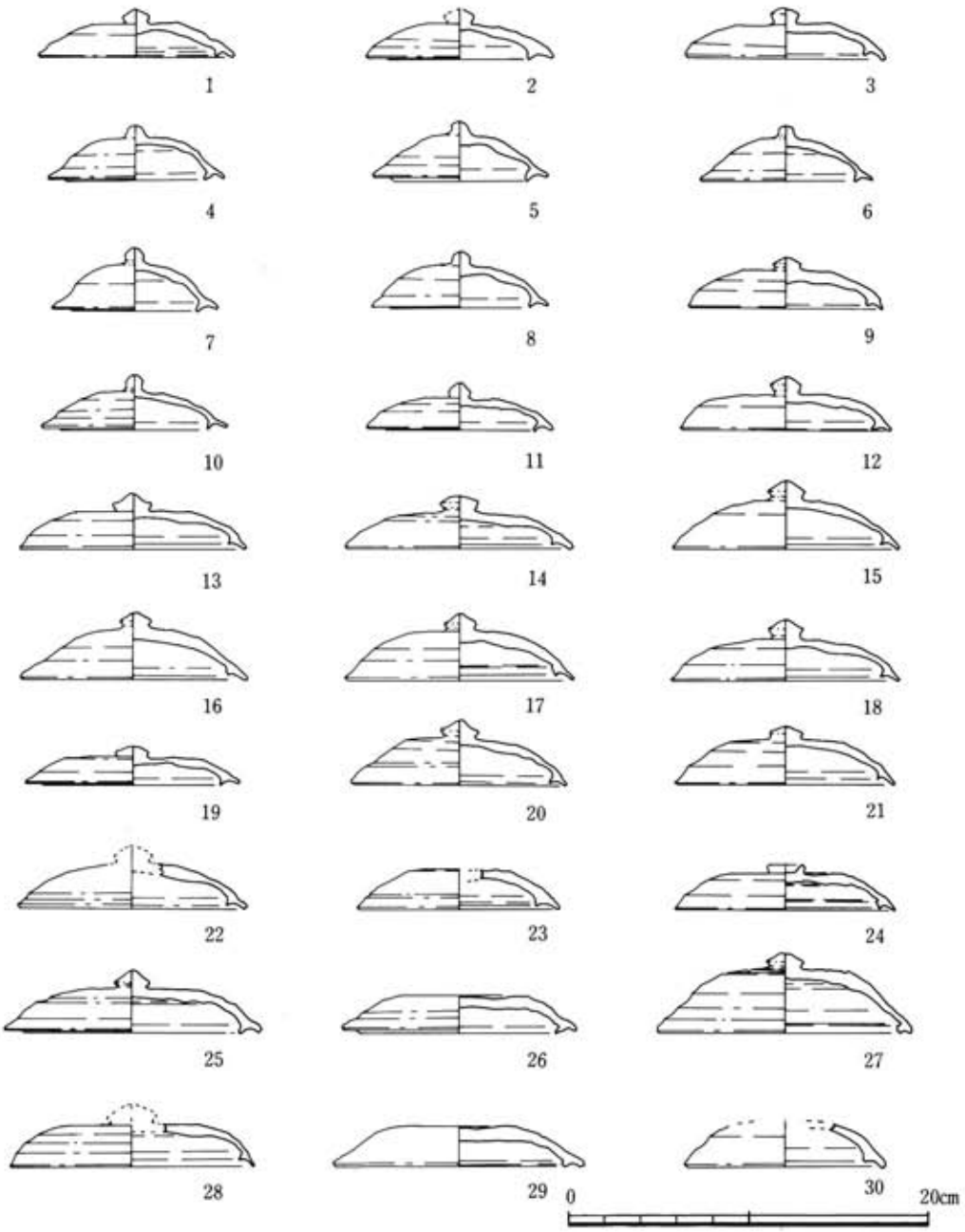



Fig. 18　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器実測図

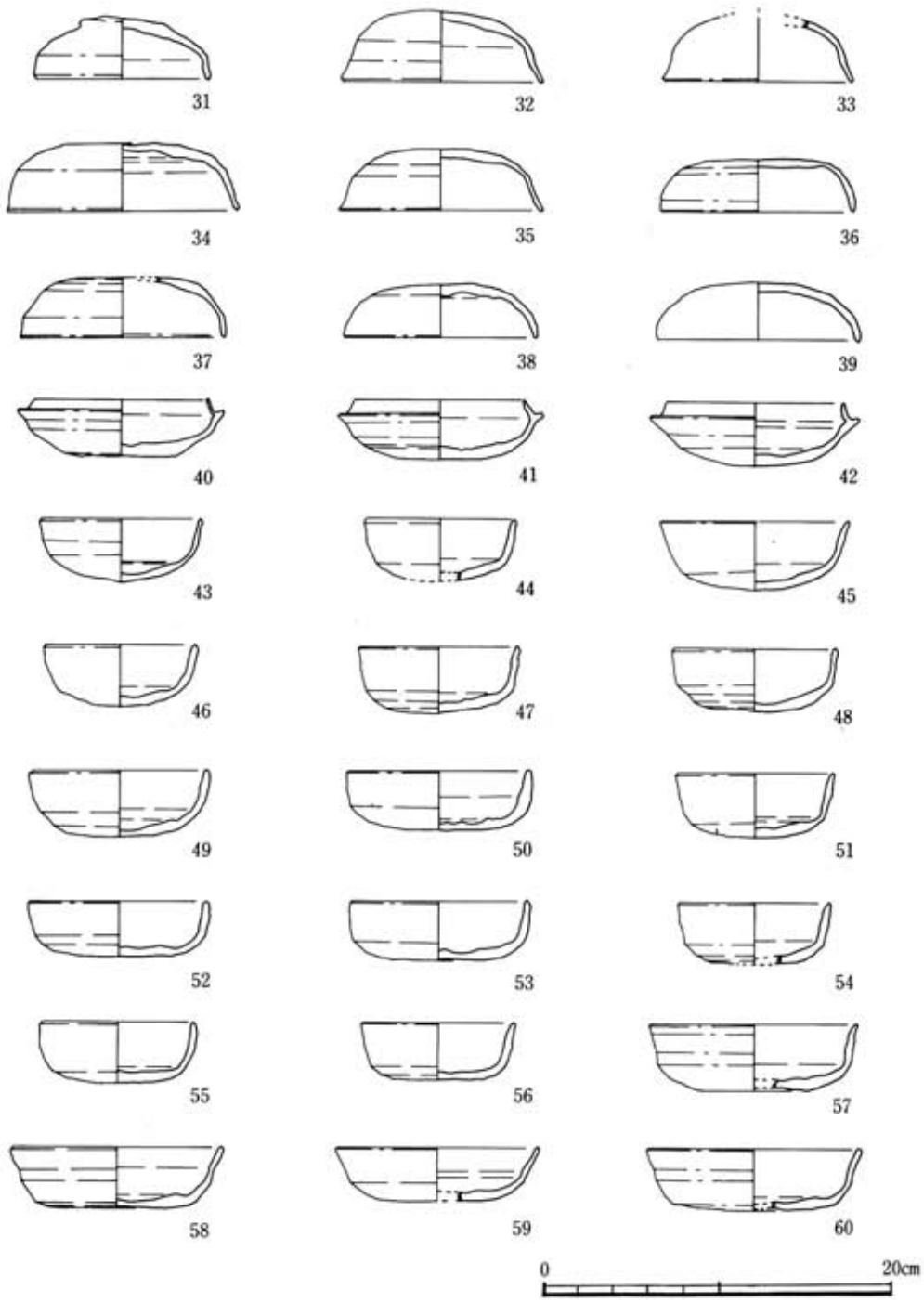



**Fig. 19**　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器実測図

は3個だけである。40～42は受部を有し、わずかに丸味を帯びた底部から体部が内湾しながら開き、内傾するたちあがりを持つ。43・44・46～48・51は底部がやや丸味を持ち、体部は内湾し、やや開きながらたちあがる。口径は約9㎝。45・49は底部が丸味を持ち、体部は内湾し、やや開きながらたちあがる。口径は11㎝前後。54～56は底部がやや平坦で、体部は内湾し、やや開きながらたちあがる。口径約9㎝。50・52・53は底部が平坦で、体部は内湾し、やや開きながらたちあがる。口径は約10㎝。57・59・60は底部がやや丸味を持ち、体部は内湾し、口縁部はやや外反し、開きながらたちあがる。器高に対し口径が広い。58・61～65は底部が平坦で体部は直線的に開きながらたちあがる。器高に対し口径が広い。66は底部が平坦で、体部は内湾気味に開きながらたちあがる。67は底部と体部の境が屈曲し、体部は直線的に開きたちあがる。底部に高台を有する。

**高杯**　68は杯部に対し脚部は小さく、低い。杯部は直線的に開きながらたちあがる。

**壺蓋**　69は70の短頸壺の蓋。天井部はやや丸味を帯び、内湾気味にやや開く。

**短頸壺**　口縁部が短かく内傾。69の蓋をかぶせて焼成した形が残る。肩部に自然釉がかかっている。

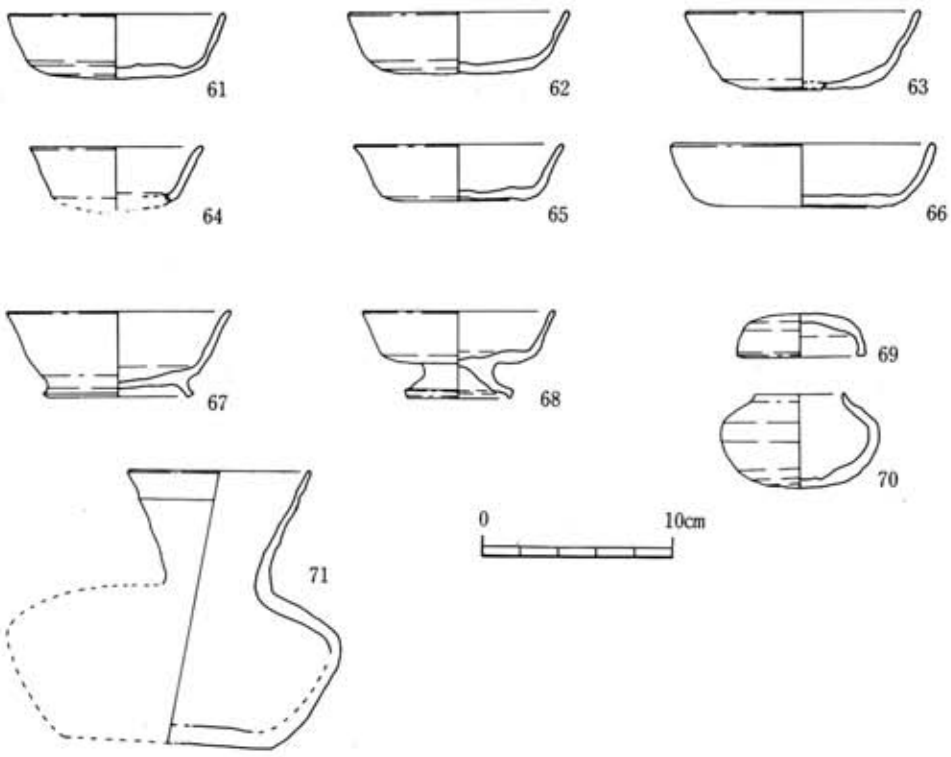



Fig. 20　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器実測図

**平瓶**　71は底部がほぼ平坦で、体部は肩が張り、上面はやや丸味を持つ。口頸部は直線的に外に開く。口頸部に１条の凹線を巡らす。

**甕**　72は口頸部が短かく外反し、肩部はやや張り、胴部の上部で大きく膨らむ。底部は平底となり中央部が窪む。肩部から底部まで平行文のタタキ調整を施し、その上からハケ目調整を施している。内面肩部から底部まで同心円文タタキ調整を施している。

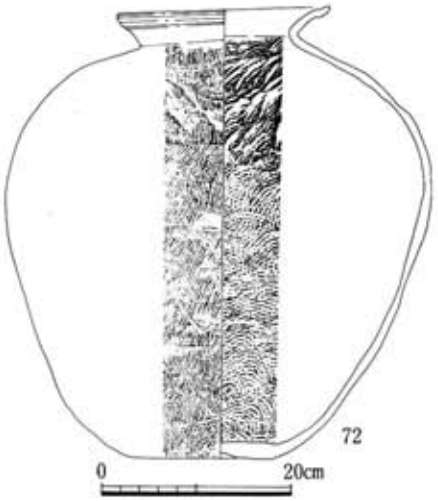



Fig. 21　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器実測図

**土師器**（Fig. 22, PL. 12－79）

**杯**　73は底部が平坦で、体部はやや内湾気味に開きながらたちあがる。

**盤**　盤は約10個体分出土しているが復元できたものは５個だけである。74・76は底部がやや丸味を持ち、口縁部はやや外反する。外面に赤色顔料が施されている。75は底部がやや丸味を持ち、体部は内湾しながら開く。77は底部がやや平坦で、緩やかに内湾しながら開く。内外面に赤色顔料が施されている。78は底部がやや平坦で、体部は内湾気味に開きたちあがる。

**高杯**　79は杯部が丸味を持ち、体部は内湾する。脚部は短く、脚裾部は緩く屈曲する。

**瓦器**　80の椀は高台が低く、全体的に丸味を持ち、体部から内湾気味に広がる。

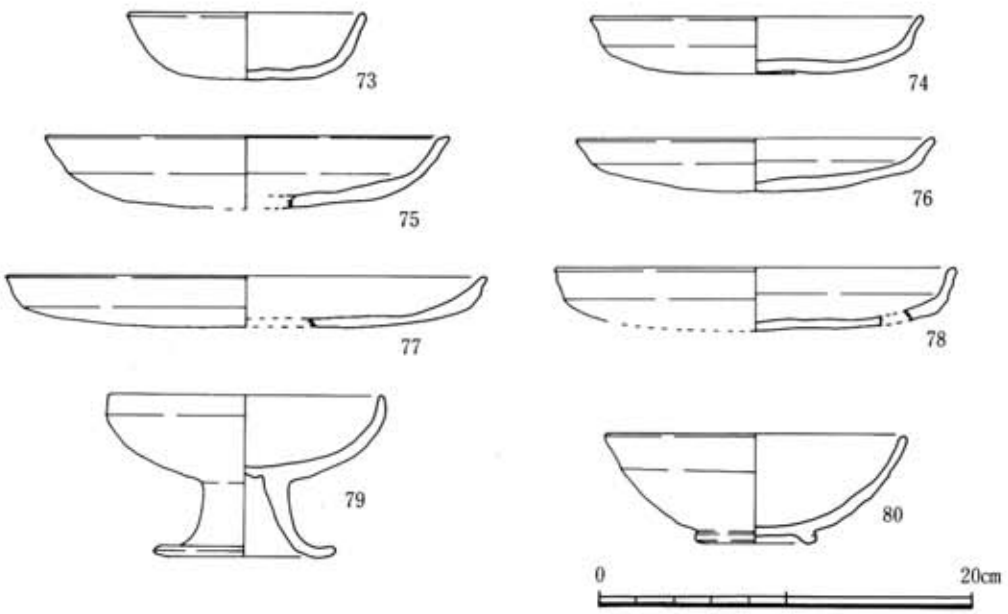



Fig. 22　山の上古墳群ＳＴ001古墳出土土師器実測図

**ＳＴ002古墳**

**須恵器**（Fig. 23－81～86, PL. 13－81・82・84・85）

**杯蓋**　81は天井部に乳頭状つまみを持ち、平坦な天井部から体部はやや外反する。口縁部内側にかえりを持つ。天井部から体部にかけてカキ目がみられる。82は天井部に乳頭状つまみを持ち、平坦な天井部から体部は内湾気味に開く。口縁部内側にかえりを持つ。天井部から体部にかけてカキ目がみられる。全体的に肥厚である。

**杯**　83～86は底部が丸味を帯び、体部は内湾気味に開き、口縁部へたちあがる。底部に裾広がりの高台を持つ。4点とも高台内側で接地する。

**土師器**（Fig. 23－87～89, PL. 13－87～89）

**杯蓋**　87・88は天井部に擬宝珠状のつまみを持ち、天井部から体部までは平坦で、体部から口縁部へ外反し、口縁端部は外傾する。赤色顔料が施されていた。

**盤**　89は底部が平坦で、体部から内湾し、口縁部にたちあがる。

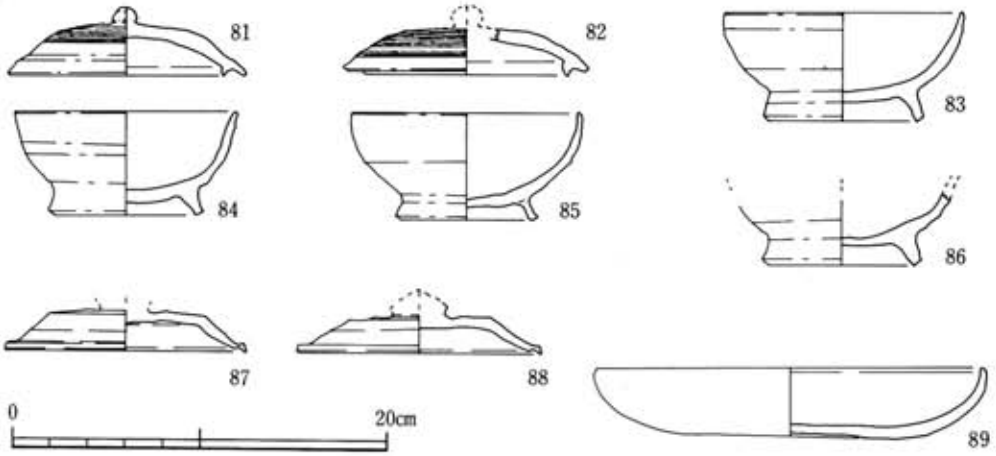



Fig. 23　山の上古墳群ＳＴ002古墳出土須恵器・土師器実測図

**ＳＴ003古墳**

**須恵器**（Fig. 24－90～96, PL. 14－90・92～96）

**杯蓋**　90・91は天井部に擬宝珠状つまみを有し、天井部、体部とも丸味を持つ。口縁部内側にわずかなかえりを持つ。92は天井部に平坦な擬宝珠状つまみを有し、天井部は平坦で、体部は内湾気味に開く。口縁部内側に短いかえりを持つ。

**杯**　93は底部が丸味を持ち。体部は屈曲し、直線的に開きながらたちあがる。94・95は底部が平坦で、体部は屈曲し、直線的にたちあがる。96は底部が丸く、体部は内湾気味に開く。

**土師器**（Fig. 24－97・98, PL. 14－97・98）

**盤**　97は底部がやや平坦で、体部は屈曲し、直線的に開きたちあがる。98は底部が丸味を帯び、体部は内湾気味に開く。外面に赤色顔料が施されている。

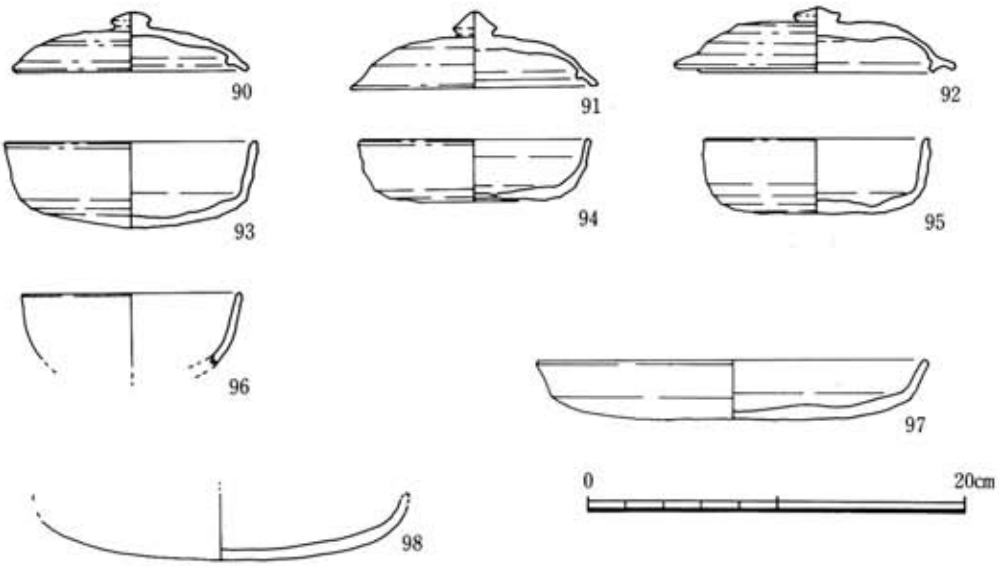



Fig. 24　山の上古墳群ＳＴ003古墳出土須恵器・土師器実測図

**ＳＴ005古墳**

**須恵器**（Fig. 25, PL. 15－99）

**杯蓋**　99は天井部に擬宝珠状つまみを有し、天井部、体部とも丸味を持ち、内湾気味に開き、口縁部内側にわずかなかえりを持つ。

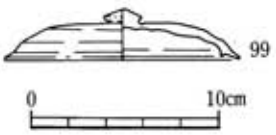



Fig. 25　山の上古墳群ＳＴ005古墳出土須恵器実測図

**ＳＴ007古墳**

**須恵器**（Fig. 26, PL. 15－100・102）

**杯蓋**　100・101は天井部と体部の境に明瞭な段がつき、口縁端部内面にも段がつく。口縁部はほぼ垂直である。

**杯**　102～104はたちあがりは長く内傾し、受部は水平になる。底部は丸味を持ち、内湾しながら開き、受部端にいたる。

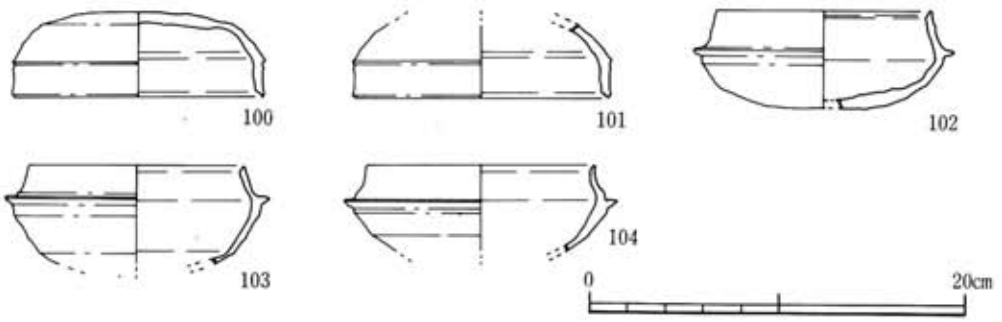



Fig. 26　山の上古墳群ＳＴ007古墳出土須恵器実測図

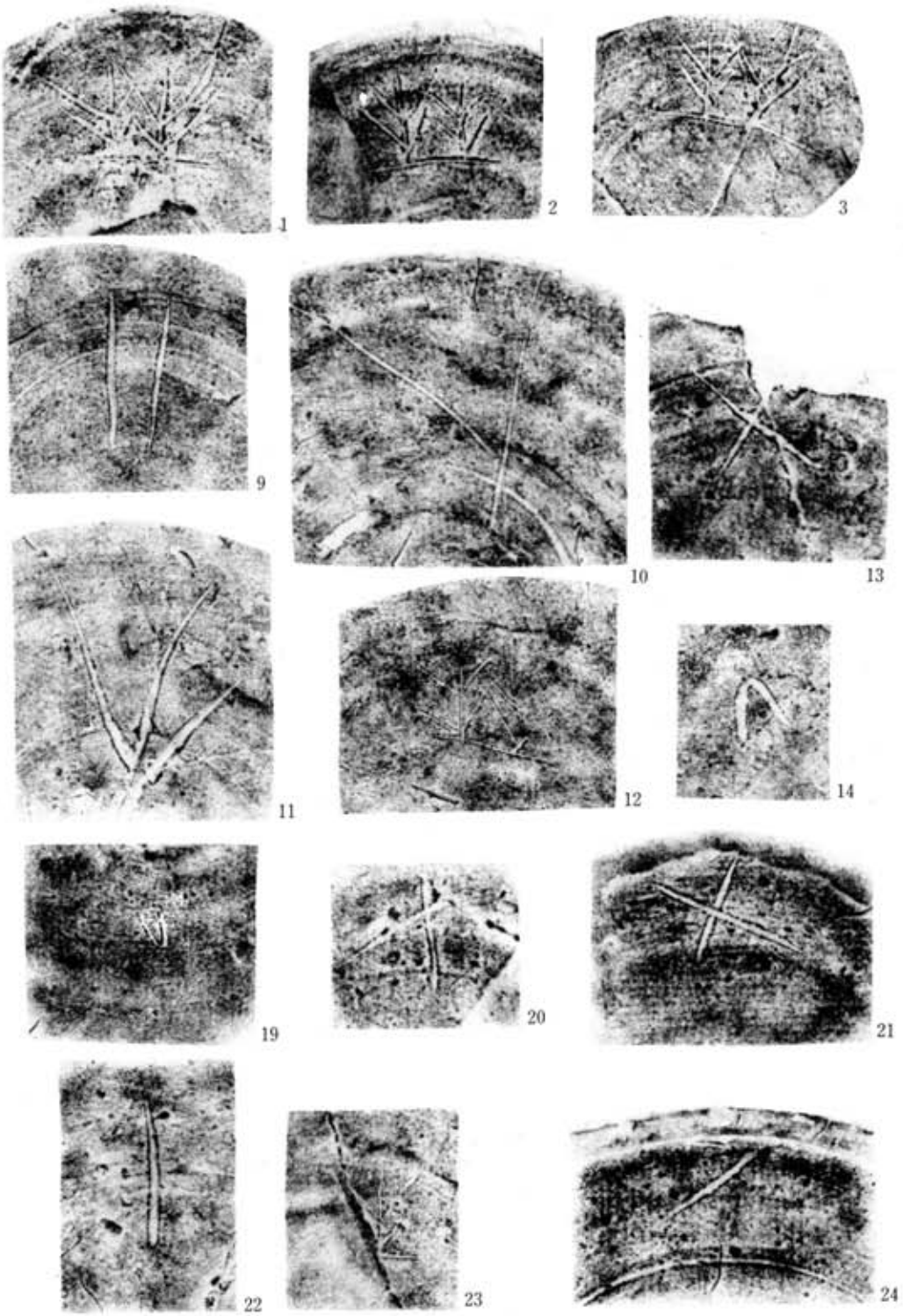



Fig. 27　山の上古墳群古墳出土須恵器ヘラ記号拓影(1/1)

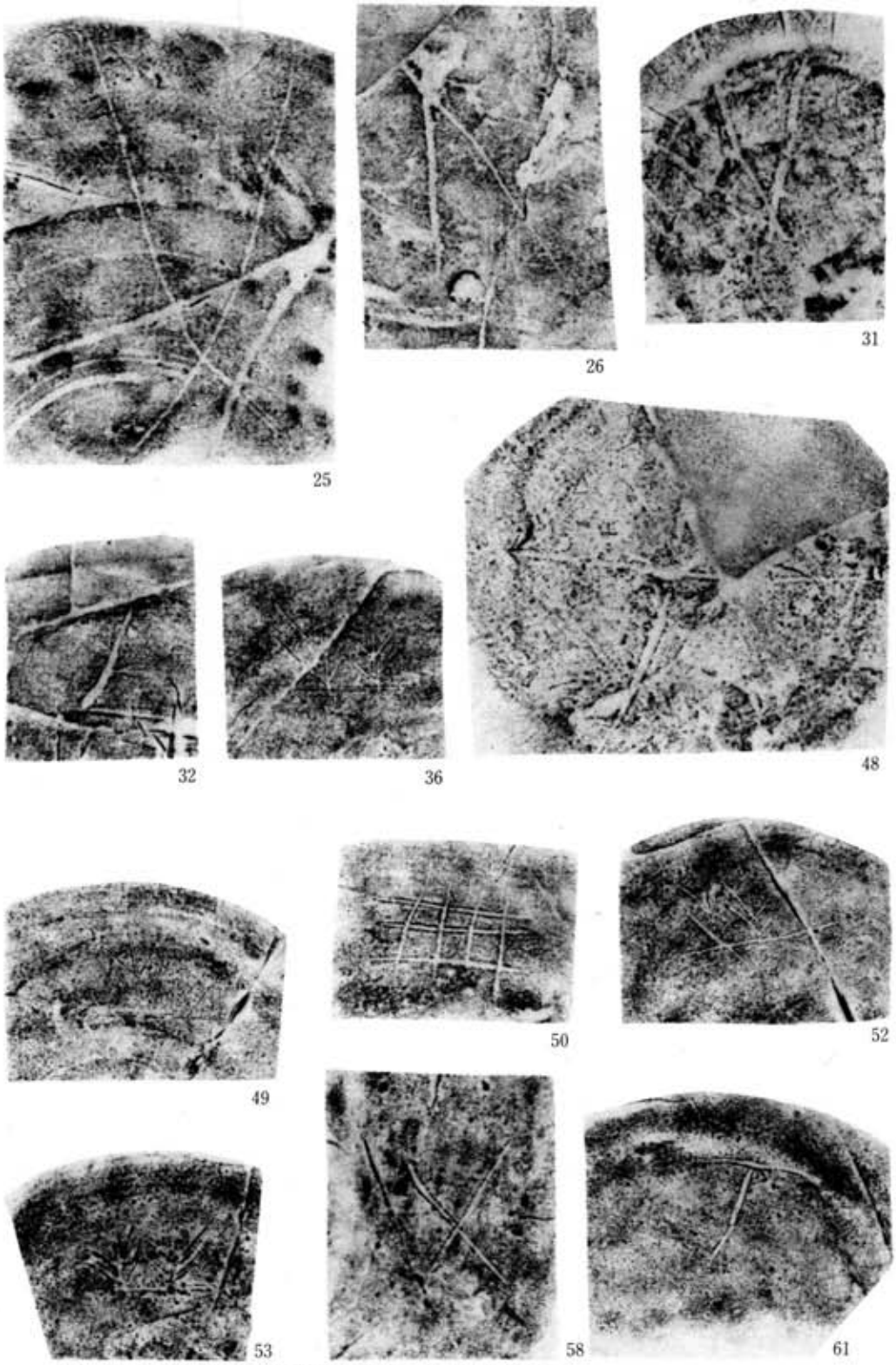



Fig. 28　山の上古墳群古墳出土須恵器ヘラ記号拓影(1/1)

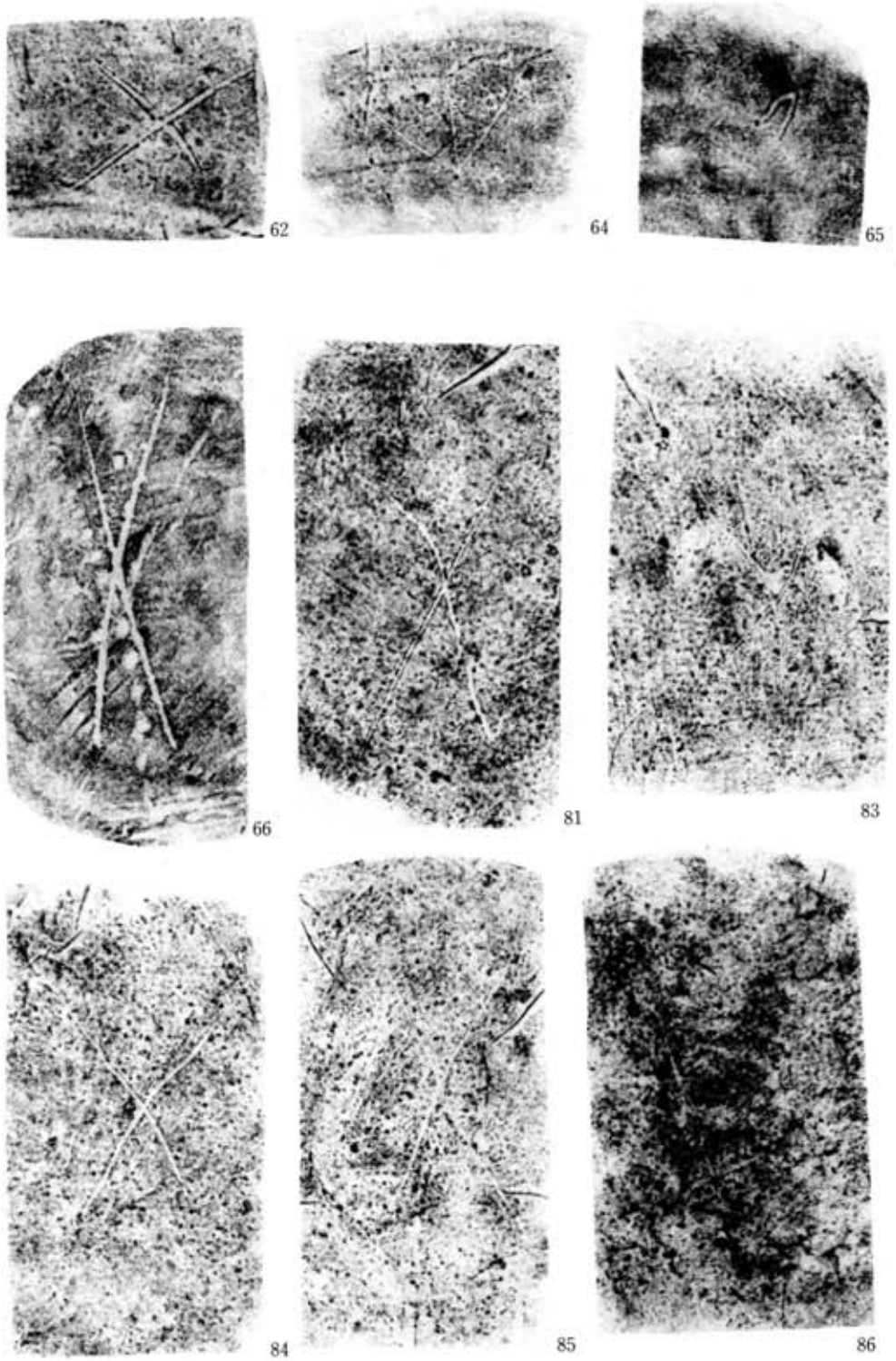
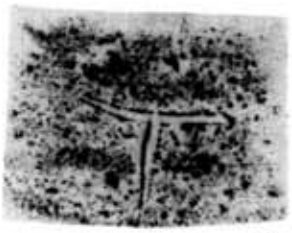


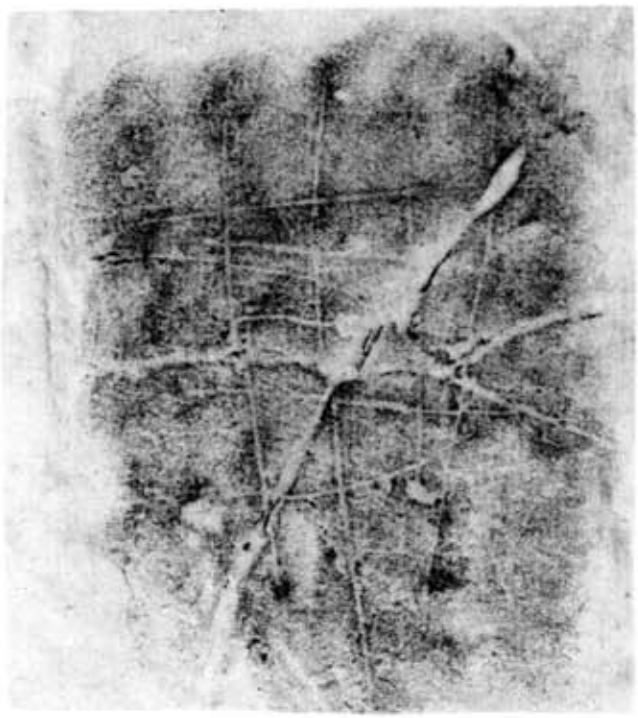

Fig. 29　山の上古墳群古墳出土須恵器ヘラ記号拓影(1/1)

90

93



94



97

Fig. 30　山の上古墳群古墳出土須恵器・土師器ヘラ記号拓影(1/1)

Tab. 2　山の上古墳群古墳一覧表

| 遺構番号 | 墳丘 | | | 葺石 | 内部主体 | 開口方向 | 内部主体法量 | | 出土遺物 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 形状 | 径 (m) | 周溝 | | | | 長 (m) | 幅 (m) | 石室前面 | 石室内 | |
| ST 001 | 円 | 15.0 | 無 | 有 | 横穴式石室（単） | 南 | 3.0 | 2.3 | 土師器高杯<br>須恵器甕・杯<br>横瓶 | 須恵器杯<br>鉄鏃 | 東側壁陥没 |
| ST 002 | — | — | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 南 | 1.5 | 1.9 | 須恵器杯 | 須恵器杯<br>鉄鏃 | |
| ST 003 | 円 | 5.0 | 無 | 有 | 横穴式石室（単） | 南 | 1.8 | 1.7 | | 土師器杯<br>須恵器杯 | |
| ST 004 | 円 | 5.1 | 無 | 有 | 横穴式石室（単） | 南 | 1.9 | 1.4 | | | |
| ST 005 | — | — | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 南 | 1.2 | 1.1 | | 須恵器蓋 | |
| ST 006 | — | — | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 南 | 1.3 | 1.0 | | | |
| ST 007 | 円 | 8.2 | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 南 | 2.2 | 2.0 | 須恵器甕・杯 | 鉄鏃 | |
| ST 008 | 円 | 4.6 | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 南 | 1.7 | 1.6 | | | |
| ST 009 | 円 | 4.8 | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 南 | 2.1 | 1.5 | | 須恵器蓋・杯<br>須恵器盤<br>土師器杯 | |
| ST 010 | 円 | 4.2 | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 南 | 1.2 | 1.5 | | | |
| ST 011 | 円 | 5.1 | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 南 | 1.4 | 1.1 | 須恵器蓋 | | |
| ST 012 | 円 | 3.5 | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 南 | 1.1 | 1.0 | 須恵器蓋 | | |
| ST 013 | 円 | 8.1 | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 西 | 2.0 | 1.8 | | | |
| ST 014 | 円 | 8.0 | 無 | 無 | 横穴式石室（単） | 南 | 2.3 | 2.3 | | 勾玉・管玉・丸玉・ソロバン玉・小玉・刀子・鉄鏃・弓付属金具 | 人骨<br>敷石に河原石使用<br>線刻文様 |
| ST 015 | 円 | 8.4 | | | 横穴式石室（単） | 南 | | | | | |
| ST 016 | 円 | 10.0 | | | 横穴式石室（単） | 南 | 1.7 | 1.4 | | | |

## 4．小　結

山の上古墳群は多久市内最大規模の古墳群であった。東多久バイパス関係の7基を含め16基のうち14基を発掘調査した。古墳はすべて横穴式石室を有する古墳時代後期に築造されたものであった。築造時期について、編年がほぼ確立されている須恵器や、石室の内部構造、古墳の立地などから考察を加えることができた。このことは山の上古墳群の14基のみならず、これまで発掘調査された周辺の古墳や、開口した石室を持つ古墳の尺度にもなりうるものである。山の上古墳群の14基の古墳について、簡単にまとめてみることにする。山の上古墳群のうちもっとも築造時期が早い古墳はＳＴ007古墳である。石室前面で出土した須恵器杯・杯蓋は佐賀県下でも古いグループに属し、5世紀末～6世紀初頭に位置づけられている。市内では鴻ノ巣遺跡ＳＴ001古墳で出土し、多久市内の古墳の起源を約1世紀もさかのぼらせる結果となった。ＳＴ014古墳は石室の腰石などに線刻の装飾が施されていた。同種の古墳は古賀山1号古墳や穴大師古墳に見られ、古賀山1号古墳の文様構成と共通することから古賀山1号古墳出土の須恵器をもとにＳＴ014古墳の築造時期を6世紀後半の時期とした。ＳＴ013古墳も同一規模の石室を有することからＳＴ014古墳と同時期であろう。ＳＴ001古墳出土の須恵器は7世紀前半～中頃に編年され、ＳＴ005古墳、ＳＴ006古墳がこれに続く。ＳＴ002古墳の須恵器杯・杯蓋は7世紀中頃、ＳＴ003古墳は7世紀後半の須恵器が出土した。ＳＴ004古墳も同時期の築造と思われる。ＳＴ008古墳、ＳＴ009古墳は同時期の古墳と思われ、ＳＴ009古墳出土の須恵器から7世紀末の築造である。7世紀末～8世紀初頭の須恵器蓋が出土したＳＴ011古墳、ＳＴ012古墳はＳＴ010古墳とともに小石室化する終末期の古墳である。

山の上古墳群の調査によって、多久市における古墳時代後期、特に多久に於ける古墳築造の時期が5世紀末に始まり、8世紀初頭に姿を消すことが明らかになった。

〔参考文献〕

「東多久バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」　佐賀県教育委員会　1984
「牟田辺遺跡」　多久市教育委員会　1975
「金立開拓遺跡」　佐賀県教育委員会　1984
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第4集」　佐賀県教育委員会　1981

# Ⅳ　中村谷遺跡

遺跡名：中村谷遺跡（略号ＮＫＤ）
遺跡所在地：多久市東多久町大字別府字弥平ヶ谷

# Ⅳ　中村谷遺跡

## 1．遺跡の概要

中村谷遺跡は天山山系から南に延びた荒平山（標高298m）から派生する舌状台地の中ほどにある古墳群で、正確には多久市東多久町大字別府字弥平ヶ谷に位置する。周辺には縄文時代や古墳時代の遺跡が数多く立地する。山の上古墳群は三つの谷を挟んで東に700mに位置する。縄文時代の遺物が散布する石亀谷遺跡は東に400mの２番目の台地にあり、射場谷古墳群は東隣の台地、約150mに位置する。縄文時代の石鏃や黒耀石剝片が散布する別府開拓遺跡は北東約500mの距離にある。昭和42年に発掘調査され消滅した向野古墳群の７基の古墳は同じ舌状台地上にあり、北100mに位置した。遺跡の西には九州横断自動車道に係る発掘調査を実施した遺跡が東から出口A遺跡・出口Ｂ遺跡・西出口遺跡・鴻ノ巣遺跡が700～1000mの距離内にある。遺跡が立地する台地上には、果樹園造成や宅地の造成によって破壊されたと思われる古墳の石材が散在し、中村谷遺跡は10基前後の古墳群であったと考えられる。

今回調査を実施したのは果樹園の中にあるＳＴ001古墳１基だけで、大きな樹木が墳丘に植わっていたため、開墾による削平は受けていないが、墳丘および石室の上部は破壊されていた。

Fig. 31　中村谷遺跡周辺地形図

## 2．遺　構

**ＳＴ001古墳**（Fig. 32～34, PL. 16－1・2）

墳丘は伐採後の樹木の根に覆われ、石室の一部は露出し、墳丘も変形していた。天井石は既に取り除かれ、石室内は土砂と礫で埋まっていた。玄室内から平瓶が出土し、周溝、および閉塞部、石室前面で須恵器杯、杯蓋などが出土した。遺物から７世紀中頃の築造と思われる。

**墳丘**　墳丘の上部は破壊されていた。墳丘は直径約9.0mを測る円墳である。墳丘の左後方を除いて0.1～0.7mの礫を用いて葺石が施されていた。周溝は幅1.3～1.8m、深さ0.2～0.3mあり、玄室後方から左回りに石室前面左側まで掘られ、石室前面付近で地山と同じ高さになり消滅する。墳丘の右側は傾斜面で、地山が周溝より低い。盛土は暗褐色土と赤褐色土、褐色土を交互に積み重ねた版築法を用いている。

**内部主体**　単室両袖型の横穴式石室を有し、主軸方向をＮ９°Ｅにとり、南に開口する。奥壁腰石を据えるだけの掘り方と玄室の床面を平坦にする削平だけの地山整形が行われている。玄室の主軸長は1.6m、幅1.4mの長方形である。右側の袖石は右側壁に寄っている。羨道は長さ1.7m、幅0.8～0.9mを測る。玄室内には0.1～

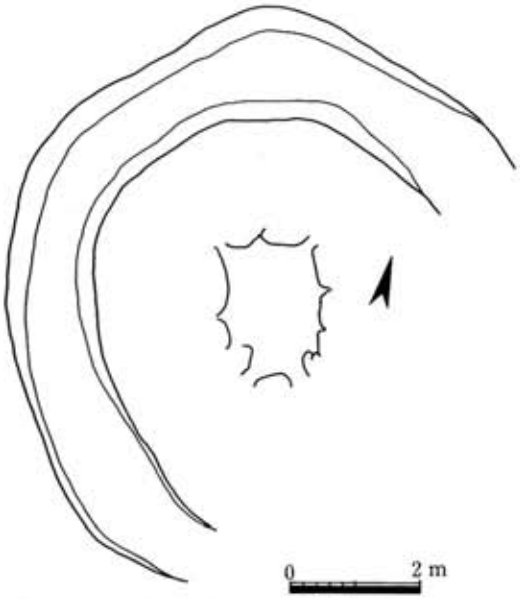



Fig. 32　中村谷遺跡ＳＴ001古墳周溝平面図

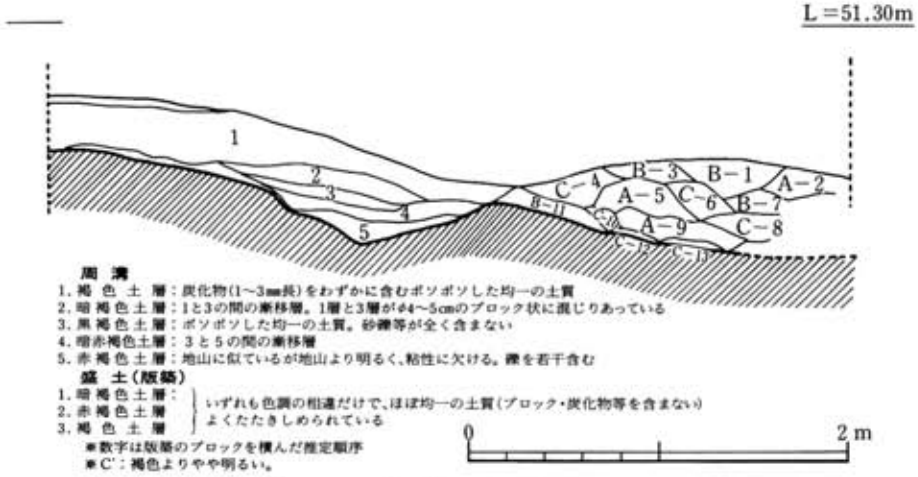



Fig. 33　中村谷遺跡ＳＴ001古墳周溝・墳丘土層図

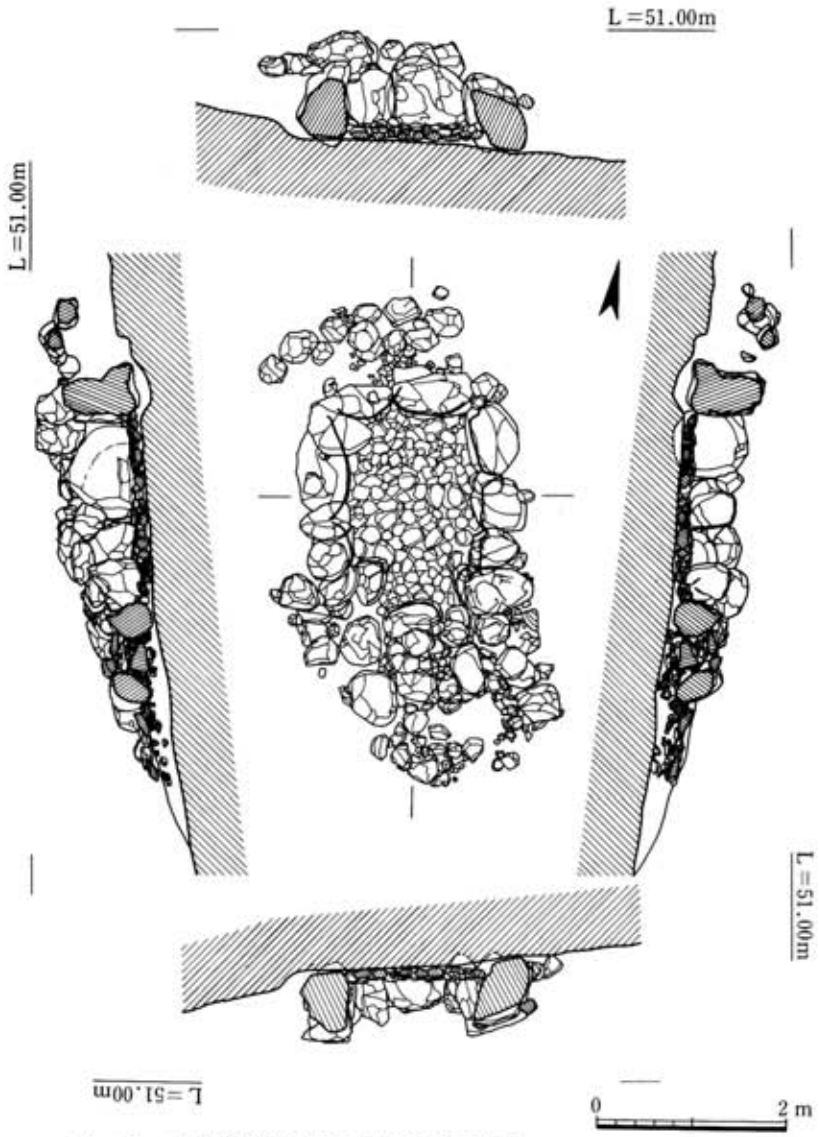



Fig. 34　中村谷遺跡ＳＴ001古墳石室実測図

0.2mの角礫を敷き詰め平坦な床面を造っている。梱石は袖石より１石分だけ羨道側に寄っている。閉塞部は0.2～0.4mの礫を積みあげ閉鎖している。石室の規模に対し、用いられた石は小さい。石室に用いられた石材は付近一帯に産出する玄武岩がほとんどである。

## 3．遺　物（Fig. 35, PL. 17）

遺物は玄室内で須恵器の平瓶が１点と、周溝、閉塞部、石室前面で須恵器杯、杯蓋、高杯と土師器皿が出土している。土師器皿は糸切り離しのあとが残り後世に混入したものである。

**須恵器**

**杯蓋**　杯蓋は4点出土している。1は天井部に擬宝珠状つまみを有し、天井部から体部まではやや平坦であるが、体部から内湾気味に開き、口縁端部は丸味を持ち、口縁部内面に鈍いかえりを有する。2・4は天井部に擬宝珠状つまみを有し、全体的に丸味を持つ。口縁部内面にわずかなかえりを有する。3は天井部を欠くが擬宝珠状つまみのあとが残る。天井部はやや平坦で、体部から口縁端部にかけてやや外反する。口縁部内面にかえりを有する。

**杯**　杯は4点出土し、3点は高台付である。5は底部が平坦で、体部は屈曲し、直線的にたちがある。6は底部が平坦で、体部は内湾気味に開く。底部に高台を持ち、高台内側で接地する。7は底部が平坦で、体部はやや屈曲し、直線的にたちあがる。口縁端部は鋭り。口縁部外面に直にたつ。底部に高台を有す。8は小形の杯で底部は平坦で、体部は直角に屈曲し、口縁部はやや外反する。底部に高い高台を持つ。

**高杯**　9・10とも杯部に対し脚部が低い。杯部の底部は平坦で、体部は屈曲し、やや外反しながら開く。裾部は平坦で、円盤状になり裾部内面全体で接地する。

**平瓶**　11は底部が平坦で、体部は内湾し上部で内側に直線的に屈曲し、肩部は平坦となる。口頸部は外反しながら開く。口縁部はひずみ、左右対称ではない。底部全体に削痕であろうか、平行線状の沈線が残る。

**土師器**

**杯**　小形の杯で器形に対し器高が高い。底部は平坦で、直線的に外に開く。底部外面に糸切

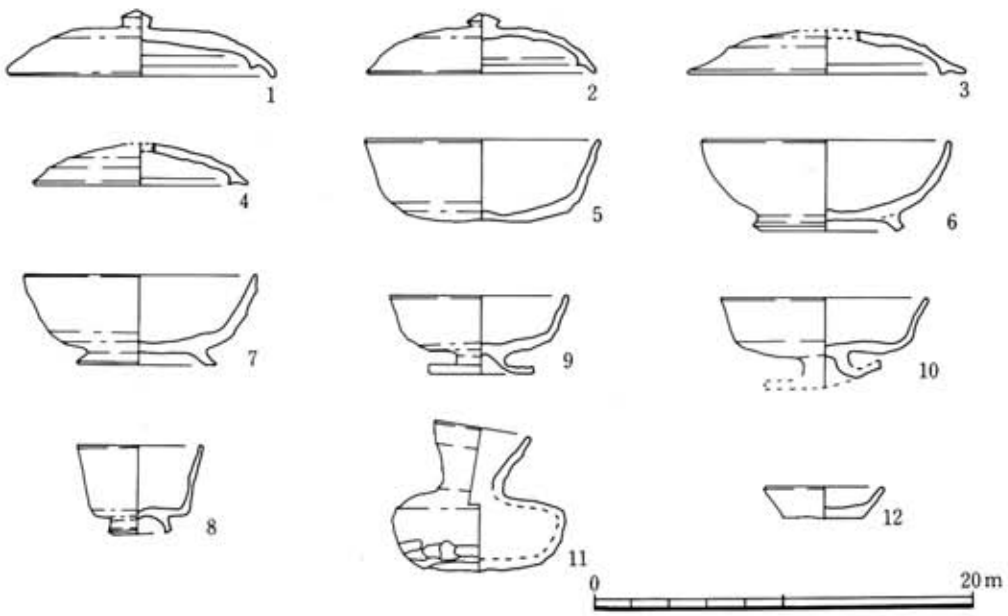



Fig. 35　中村谷遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器・土師器実測図

り離しのあとが残る。

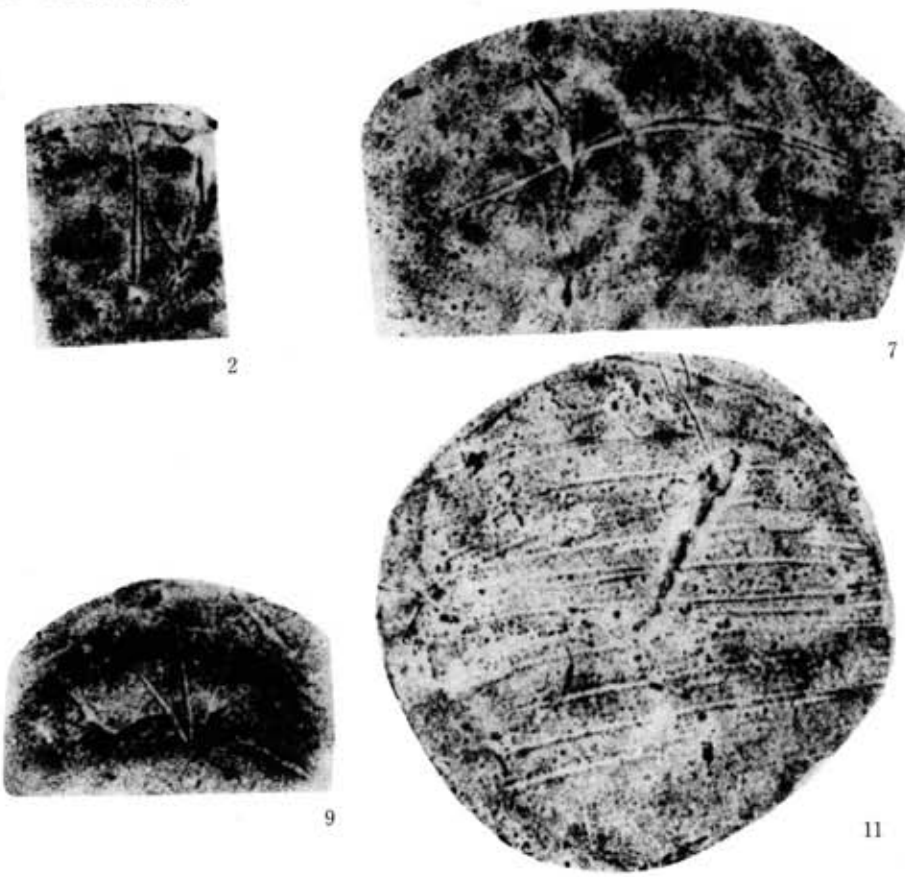



Fig. 36　中村谷遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器ヘラ記号拓影(1/1)

## 4．小　結

中村谷遺跡は昭和42年に調査された向野古墳群に含まれる古墳である。ＳＴ001古墳の調査で中村谷遺跡が立地する舌状台地の古墳はすべて消滅したことになる。向野古墳群の報告書が刊行されていない現在、古墳群に関する記録は残っていない。今回の調査で古墳群の性格の一端を知ることができた。ＳＴ001古墳出土の須恵器の杯・杯蓋は７世紀後半に編年され、向野古墳群が同時期に築造されたことを物語るものであろう。今後の遺物の整理によって向野古墳群および中村谷遺跡ＳＴ001古墳の性格は明らかになるものと思われる。

〔参考文献〕

「金立開拓遺跡」　佐賀県教育委員会　1984

# Ⅴ　出口Ａ遺跡

遺跡名：出口Ａ遺跡（略号ＤＧＡ）
遺跡所在地：多久市東多久町大字別府字出口

# V　出口A遺跡

## 1．遺跡の概要

出口A遺跡は天山山系の南に延びた高取山（標高186m）南の山裾に広がる舌状台地端部、標高25m前後の水田に位置する。遺跡周辺の丘陵地には旧石器時代～古墳時代の遺跡が分布する。西方200mの宝蔵寺溜池遺跡ではナイフ形石器や細石核、弥生土器、須恵器、土師器が採集されている。北150mの宝蔵寺遺跡は縄文時代晩期の網痕文土器や石器が出土。九州横断自動車道関係の調査を実施した西出口遺跡は西に200m、鴻ノ巣遺跡は西に400mの距離にあり、弥生時代後期の住居跡7棟と溝状遺構、土壙、小穴群、古墳3基を検出した。

出口A遺跡は東多久バイパスの調査区と隣接し、同時に調査を実施したが、遺構のほとんどは東多久バイパス用地内に集中した。その概要は次の通りである。遺構の分布範囲は狭く、不規則なものが多い。特に注目される遺構はなかったが、調査区南隅で弥生時代の甕棺墓1基と、北側で須恵器や土師器が出土する土壙があり、中央部に性格不明の土壙や小穴群が集中し、弥生時代～平安時代の遺物が断片的に出土する程度であった。

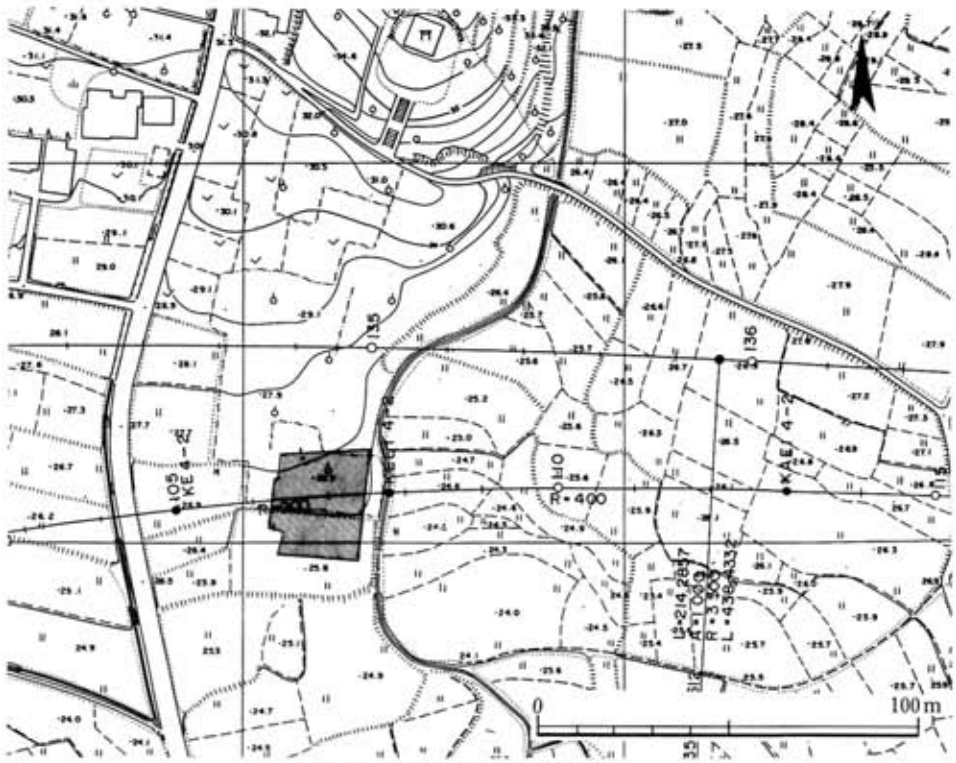



Fig. 37　出口A遺跡周辺地形図

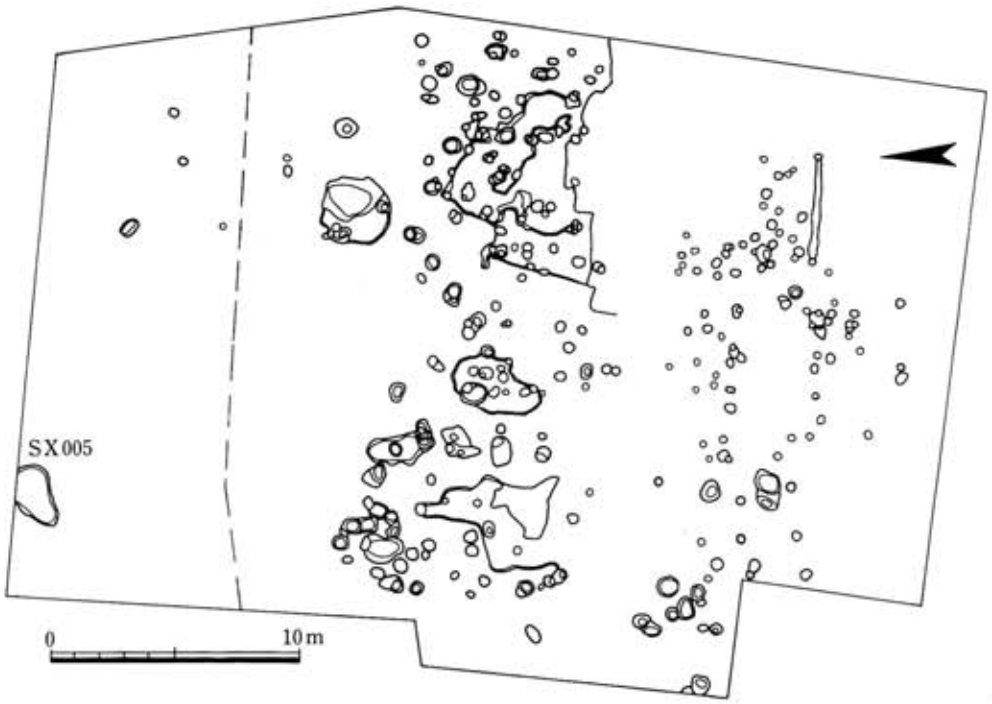



Fig. 38　出口A遺跡遺溝配置図

## 2．遺　構

**ＳＸ005土壙**（Fig. 39, PL. 18−2）

調査区最北側にある長軸2.65m、短軸1.15～1.18m、深さ0.35mの不定形土壙である。弥生時代の甕の破片が数個体分出土。同時代の土器溜である。

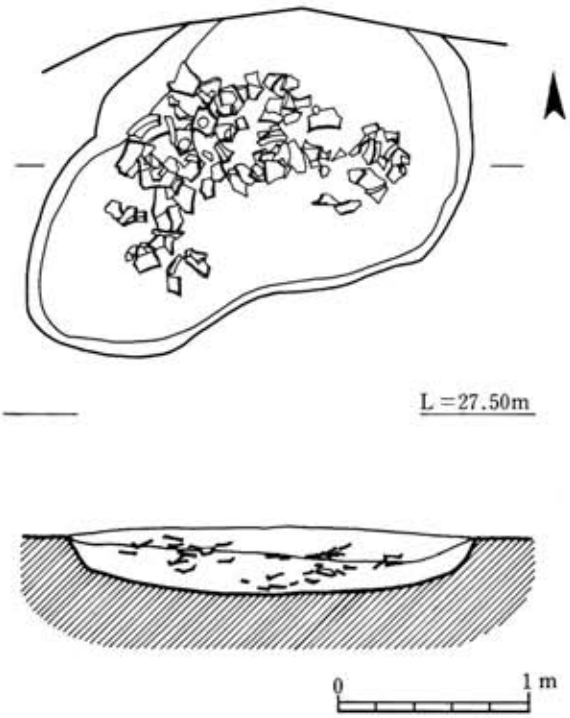



Fig. 39　出口A遺跡ＳＸ005土壙実測図

## 3．遺　物

**弥生時代**（Fig. 40, PL. 19−1～3）

**甕**　甕形土器は4個体分あり、うち1個だけは口縁部と底部が同一個体であったが、残り3点は底部だけである。1は口縁部の一部と底部から体部の下部が残っていた。口縁部は逆Ｌ字形で外端がやや下がる。口縁部下に断面三角形突帯2条を持つ。いちじく形であ

るが上部が内傾する。底部はやや上げ底気味である。外面に赤色顔料が施されている。口縁部と突帯の間に暗文がある。2は底部外端が直角にたち、上げ底気味であるが、外端から段を有する。体部下位から膨らむ。外面はハケ目調整である。3・4も底部外端が直角にたつが、平底である。3の体部はやや膨らみ気味であるが、4の体部はやや直線的に開く。外面はハケ目調整、内面はナデ調整である。

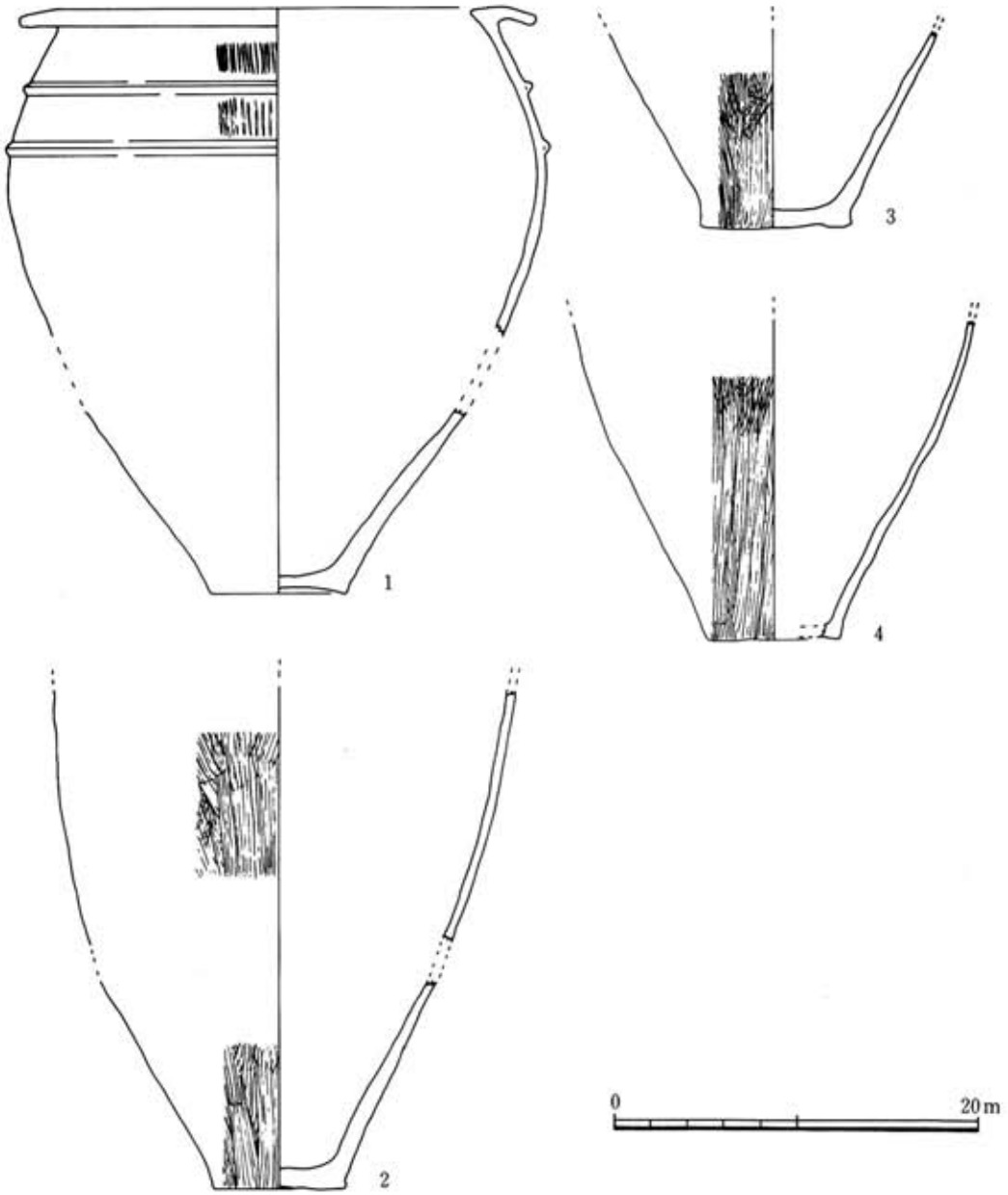



Fig. 40　出口A遺跡出土弥生土器実測図

## 4．小　結

出口A遺跡周辺には旧石器時代～歴史時代の遺跡が立地し、東多久バイパス関係の調査では奈良～平安時代の遺構も検出されていたので、その広がりを期待していた。出口A遺跡の遺構のあり方は規模の小さな遺構が断片的に存在するものであった。このような遺構の存在は、低地の水田部における遺構の一例となるものであり、東多久バイパス関係の調査と合わせ、弥生時代の遺構が集落とは別に小単位で存在することを提供した。

〔参考文献〕

「東多久バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」　佐賀県教育委員会　1984

# Ⅵ　西出口遺跡

遺跡名：西出口遺跡（略号ＮＤＴ）
遺跡所在地：多久市東多久町大字別府字岡本、字七ッ枝

# VI　西出口遺跡

## 1．遺跡の概要

西出口遺跡は出口A遺跡の西に約230m、天山山系の高取山（標高186m）から派生する舌状台地と飯盛山（標高184m）から延びた丘陵地に挟まれた標高26m前後の低地、多久市東多久町大字別府字岡本、字七ッ枝に所在する。周辺には旧石器時代～歴史時代の遺跡が数多く立地し、その主なものには北に60mの宝蔵寺溜池遺跡、西に180mの鴻ノ巣遺跡、東に240mの宝蔵寺遺跡などがある。

西出口遺跡は九州横断自動車道と東多久バイパスが並行するため、遺跡の調査も同時に実施したが、東多久バイパス用地は南側の低地にあり。遺構面は削平されたのであろう、遺構の検出はできなかった。九州横断自動車道用地内での遺構検出作業中、耕作土と遺構面の間の堆積土層からは石鏃や弥生式土器、須恵器、土師器、白磁、青磁などの破片が多量に出土し、長期間にわたる生活の場であったことが伺えた。遺構は溝や不定形土壙、掘立柱建物跡、不定形住居跡、小穴群などを検出したが、ほどんどの遺構が削平されていた。

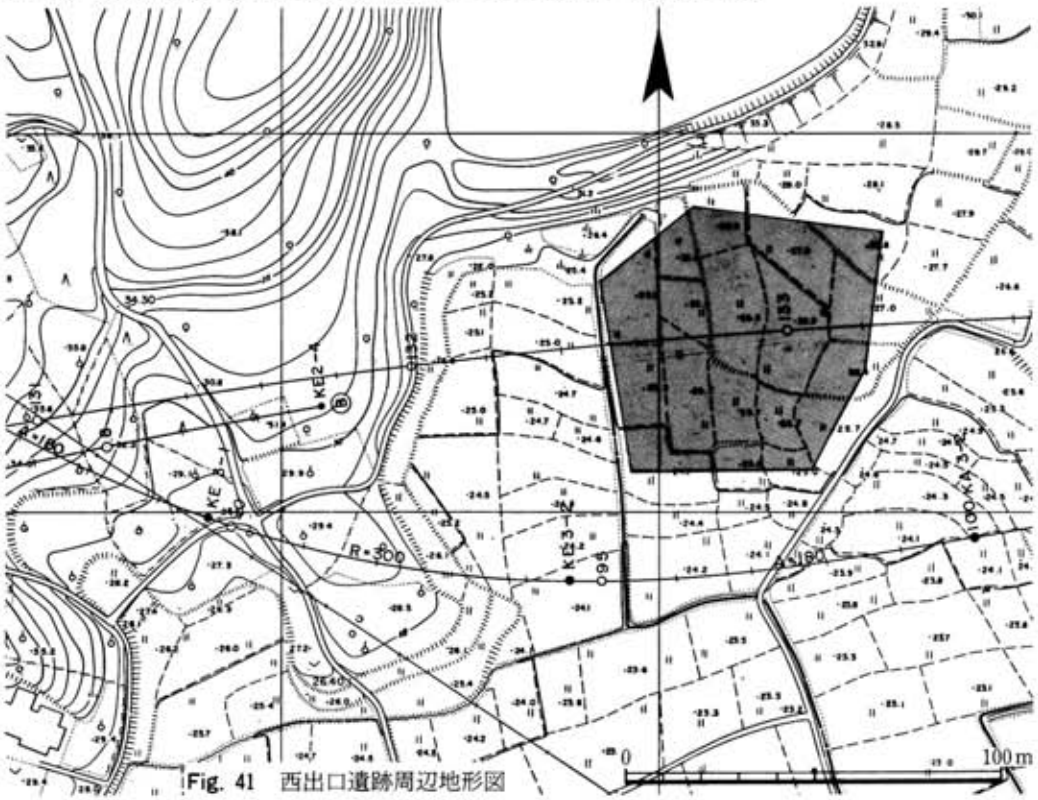



Fig. 41　西出口遺跡周辺地形図

## 2．遺　構

西出口遺跡で検出した遺構は調査区の中央部から南西の低地に集中し、北西部は削平され、遺構は消滅したと思われる。

### ＳＤ001溝

ＳＤ001溝は幅0.5m、長さ22.5m、深さ0.4mの細長い溝である。土師器の壺や瓦質土器の小破片やサヌカイト、黒耀石の剝片など僅かな遺物が出土しているが、時期を決めることはできなかった。

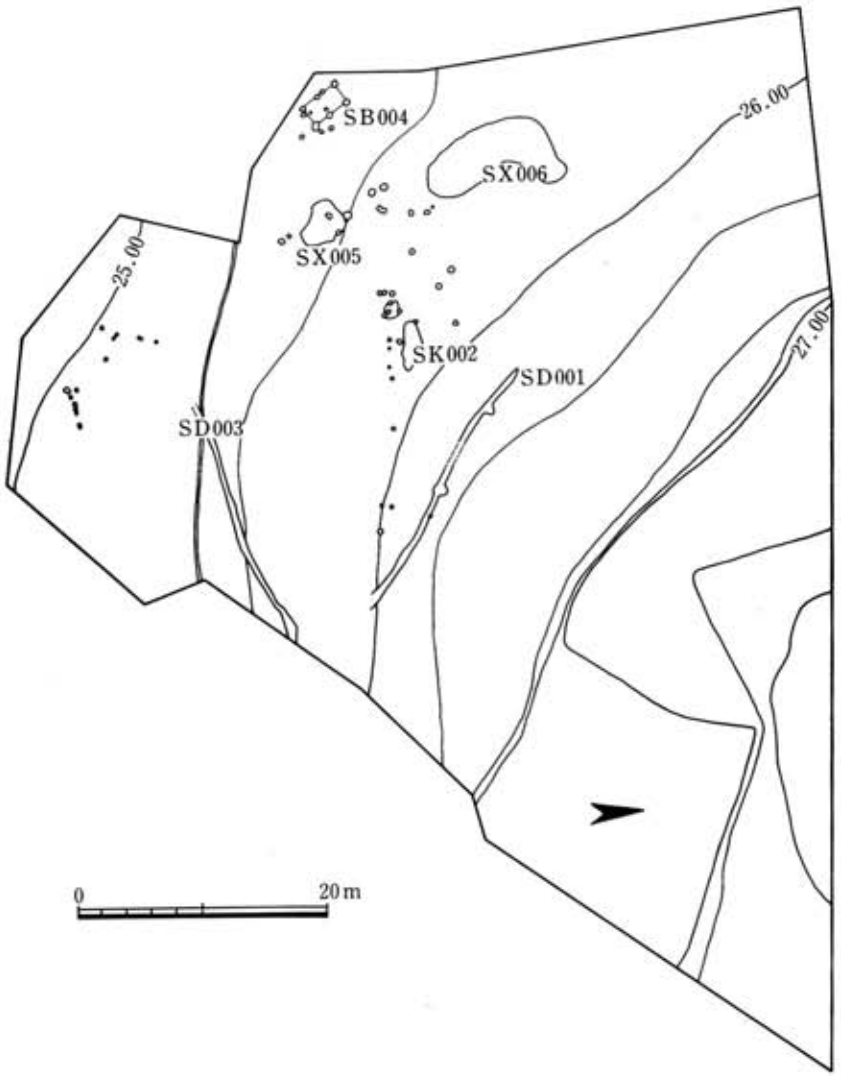



Fig. 42　西出口遺跡遺溝配置図

**ＳＫ002土壙**（Fig. 43, PL. 20－2）

ＳＫ002土壙は長軸3.2m、短軸1.6m、深さ0.25mの不定形土壙である。遺構の西半分は削平されている。土師器の高杯３個体分、須恵器杯、杯蓋、甕などの破片が出土している。土師器高杯破片に赤色顔料が施されている。遺物が混入しているので正確な時期は不明であるが古墳時代後期であろう。

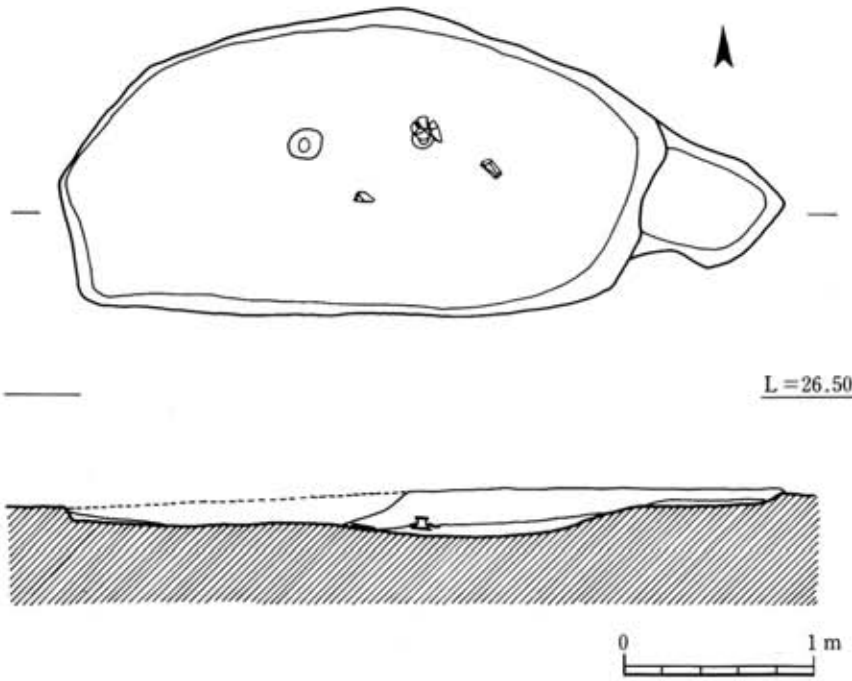



Fig. 43　西出口遺跡ＳＫ002土壙実測図

**ＳＤ003溝**

ＳＤ003溝は幅0.4～0.9m、長さ19.5m、深さ0.3～0.5mの溝で南側は削平され消滅している。埋土から、弥生時代の甕形土器底部の小破片、土師器の牛角把手２点、壺、須恵器杯、杯蓋の破片、サヌカイト、黒耀石の剝片が出土。遺物が混入しているため時期は不明である。

**ＳＢ004掘立柱建物跡**（Fig. 44, PL. 21－1）

調査区最南西端に位置する２間×１間の小規模の掘立柱建物跡である。棟方向をN47°Wにとり、桁行3.0m、梁行1.8mを測る。柱穴は0.35～0.6m、深さ0.35～0.40mを測る。総面積5.4㎡である。柱穴から土師器の壺、甕の一部の小破片とサヌカイト剝片が出土している。古墳時代前期の時期と思われる。

**ＳＢ005住居跡**（Fig. 45）

ＳＢ005住居跡は長軸3.6m、短軸3.0mの不定形の土壙である。北東の壁ぎわに焼土穴があり、炉跡とみて住居跡とした。残存する床面までの深さは約0.2m。遺物は床面付近で土師器壺の破

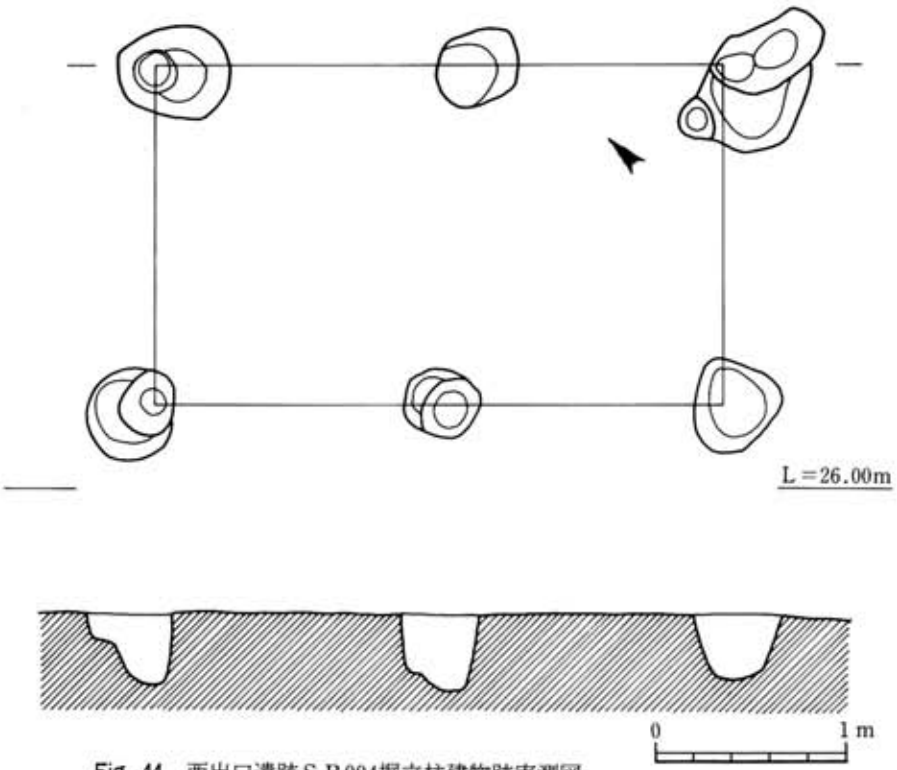



Fig. 44　西出口遺跡ＳＢ004掘立柱建物跡実測図

片が出土している。遺物から古墳時代前期の住居跡と思われる。

**ＳＸ006土壙**

ＳＸ006土壙は調査区の西端にあり、長軸10.5m、短軸2.2～3.8mの不定形の土壙である。遺構全体が黒色土に覆われていたが、削平を受けたのであろう、0.1mの深さを残すだけであった。黒色土内から土師器壺、高台付杯、須恵器甕などの小破片が出土した。遺物に若干時期の差があるが、古墳時代後期と思われる。

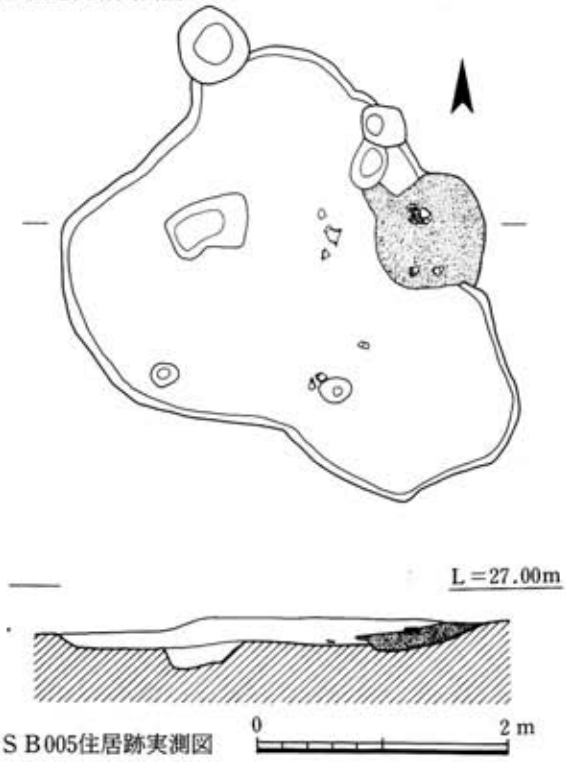



Fig. 45　西出口遺跡ＳＢ005住居跡実測図

## 3．遺　物 (Fig. 46, PL. 21－2)

**土師器**　西出口遺跡では古墳時代後期の土師器壺や高杯、平安時代～鎌倉時代にかけての土師器杯・白磁椀・青磁椀の破片が出土したが、小破片であるため、復元や図示することも困難であった。高杯を1点だけ図示することにとどめた。

**高杯**　1はＳＫ002土壙から出土した高杯である。杯部の体部から上を欠くが、杯部内底はやや丸味を持つ。脚部は大きく外反しながら裾部に広がる。磨耗が著しく調整は不明である。

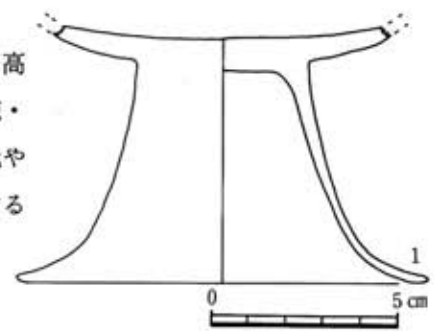



Fig. 46　西出口遺跡ＳＫ002土壙出土土師器実測図

## 4．小　結

西出口遺跡の北側にある宝蔵寺溜池遺跡では旧石器時代の石器や古墳時代の土器が多量に出土し、周辺にも縄文～歴史時代の遺跡が立地し、西出口遺跡でもそれらの遺跡と関連する遺構の検出に期待した。結果的には遺構は断片的に検出できただけであった。遺構が削平されていたのも原因の一つであろうが、遺跡の規模、個々の遺構の関連性がなかったことに原因すると考えられる。掘立柱建物跡や不定形住居跡の存在はこれまで予想されていなかったもので、今後、この地区での調査によって遺跡の範囲は広がるものと思われる。

〔参考文献〕

「東多久バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」佐賀県教育委員会　1984

# Ⅶ　鴻ノ巣遺跡

遺跡名：鴻の巣遺跡（略号、ＫＵＳ）

遺跡所在地：多久市東多久町大字別府字野入
多久市北多久町大字多久原字鴻ノ巣

# Ⅶ　鴻ノ巣遺跡

## 1．遺跡の概要

鴻ノ遺跡は天山山系の南、仏坊山（標高435m）から南に派生する飯盛山（標高184m）の最南端に帯状に延びた標高41mの小高い丘陵、通称「隈山（くまやま）」の鞍部に位置し、正確には多久市東多久町大字別府字野入と北多久町大字多久原字鴻ノ巣に所在する。この地点で九州横断自動車道と東多久バイパスが交差する。丘陵の西350mは多久インターが建設されている。遺跡周辺には九州横断自動車道に係る発掘調査を実施した遺跡が数多く立地する。西300mには弥生時代後期の甕棺墓が出土した原田遺跡、約430mに今出川Ｂ遺跡、約500mに古墳時代住居跡を発掘した今出川Ａ遺跡、約600mに３基の古墳を調査した大工田古墳群がある。遺跡の南西350mには縄文時代中期～後期の土器片が出土する大工田遺跡や上田町遺跡が立地する。北400mには相の浦古墳が所在する。東側180mに出口Ａ遺跡、宝蔵寺溜池遺跡があり、約400mに出口Ａ遺跡、宝蔵寺遺跡などが立地する。

鴻ノ巣遺跡は東多久バイパスと交差するため、遺跡の調査も同時に実施し、東多久バイパス

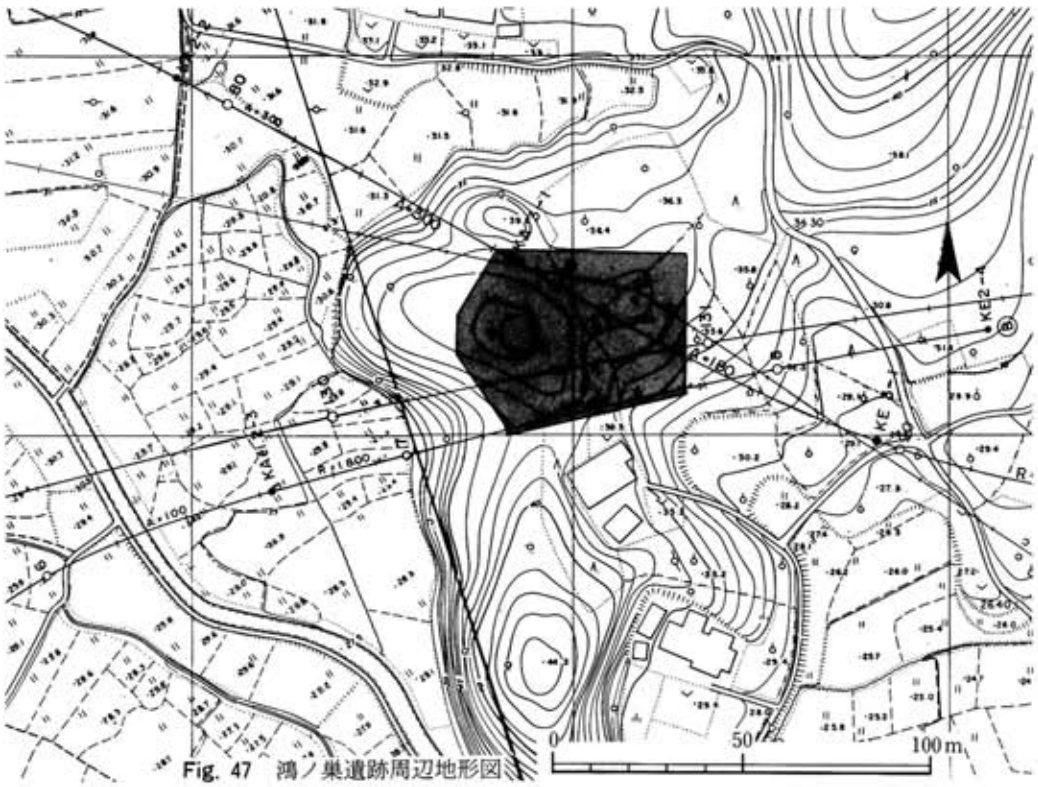



Fig. 47　鴻ノ巣遺跡周辺地形図

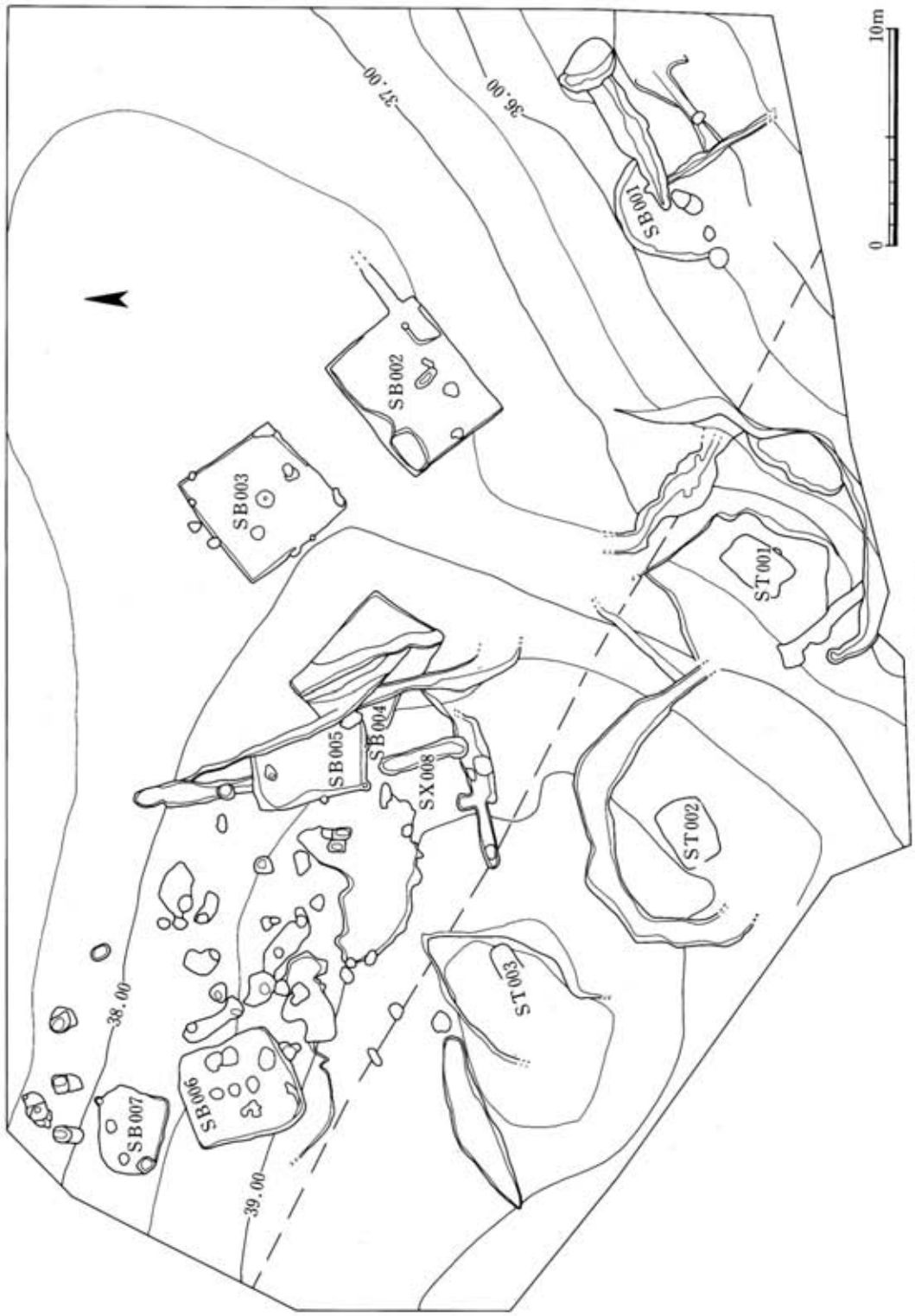



Fig. 48　鴻ノ巣遺跡遺構配置図

用地で弥生時代後期の住居跡7棟と貯蔵穴などを検出した。九州横断自動車道建設用地では3基の古墳を検出した。

## 2．遺　構

### ＳＴ001古墳（Fig. 49, PL. 22－2）

ＳＴ001古墳は台地の東傾斜面の頂上部、標高38.5mに築造された古墳であるが、墳丘と見ていた盛土には大きな石材は存在しなかった。古墳の石材は全部取り除かれ、古墳と判明したのは、僅かに残っていた敷石と石室の腰石を据えるための掘り方、墳丘西側に残った周溝からの遺物などによるものである。周溝から須恵器杯、杯蓋、壺が出土、敷石の間から勾玉、管玉、切子玉、丸玉が出土した。須恵器は県内でも古式のもので、5世紀末の築造と考えられる。

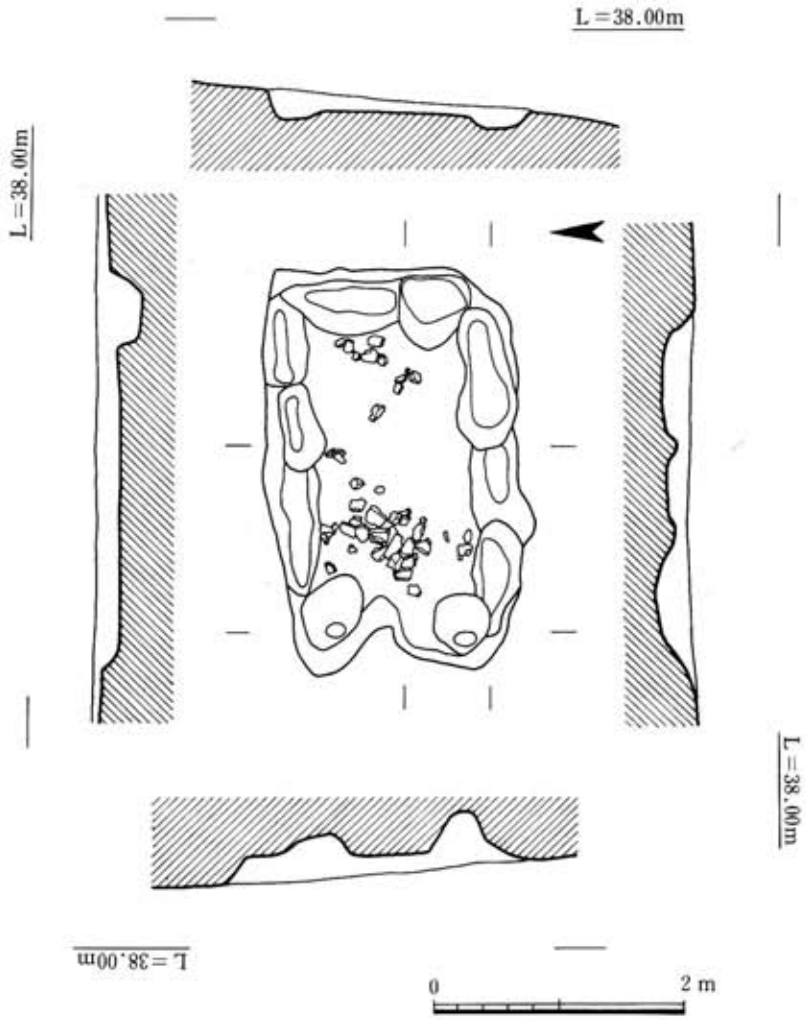



Fig. 49　鴻ノ巣遺跡ＳＴ001古墳実測図

**墳丘**　墳丘はほとんど削平されているので墳形や規模は不明であるが、西側に残る周溝は延長すると直径約８ｍの孤を描くので円墳であろう。周溝の幅は0.5～0.9m、深さ0.1～0.15mを残す。

**内部主体**　すべての石材が取り除かれていたが、腰石、袖石下部の掘り方から、単室両袖型の横穴式石室で、主軸方向をＳ35°Ｗにとり、玄室の主軸長1.8m、幅1.5mの長方形であったようだ。羨道部の有無は不明である。玄室内床面は平坦に整形され、敷石も全面に敷かれていたようである。

**ＳＴ002古墳**（Fig. 50～52, PL. 23－1・2, 24－1）

ＳＴ002古墳はＳＴ001古墳の西にあり、台地の鞍部中央部、標高40mに築造されている。墳丘の中央部に石室の一部の石材が露出していたが、外見上は保存が良好な古墳と思われた。玄室の入口付近の敷石上で管玉、丸玉、小玉、などの装身具が出土、西側の周溝で須恵器甕の破片が出土したが量が少なく復元できなかった。築造時期を決定づける遺物は出土していないが、ＳＴ001古墳との切り合いからＳＴ001古墳築造後の６世紀前半と思われる。

**墳丘**　台地頂上部～東側の傾斜面に築造されている直径9.0mの円墳で、台地頂上部にあたる墳丘西側で高さ1.0m、東側傾斜面の墳丘東側で1.5mの高さを測る。葺石は墳丘東側に一部施されていた。周溝は石室の前面から右回りに約３分の２、玄室の右後方まで施され、周溝の直径は13.0mを測る。周溝の幅は石室前面で1.6m、北側で1.2～1.8m、石室後方で1.0～2.1m、末端の玄室右後方で0.5mを測る。0.1～0.3mの深さを残している。

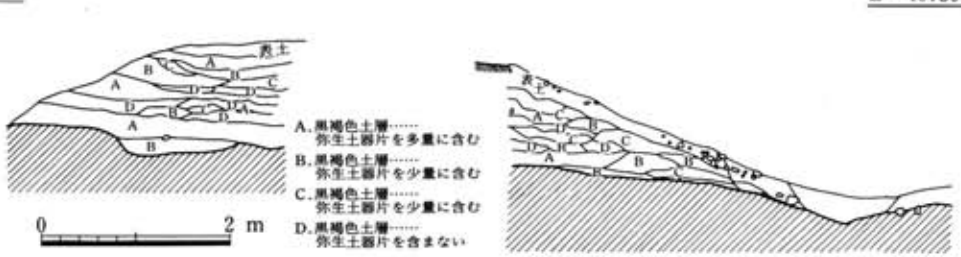



Fig. 50　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳墳丘土層図

**内部主体**　玄室の天井部は破壊されていたが石室の残存は良好であった。単室両袖型の横穴式石室を有し、主軸方向をＳ60°Ｗにとり、南西に開口している。玄室の主軸長は2.4m、幅は1.45～1.5mの長方形である。石材に相の浦石と呼ばれている長方形の角礫を用いているので、玄室の側壁や奥壁は腰石から天井部まで垂直に立つ。左側壁上部の天井部は持ち送りにの状態をとどめる。羨道は長さ1.1m、幅0.7～0.95mと外にやや開く。閉塞部は主に0.5～0.8mの長方形の角礫を用いて完全に閉鎖していた。敷石には0.1～0.3mの扁平な角礫を敷き詰めている。

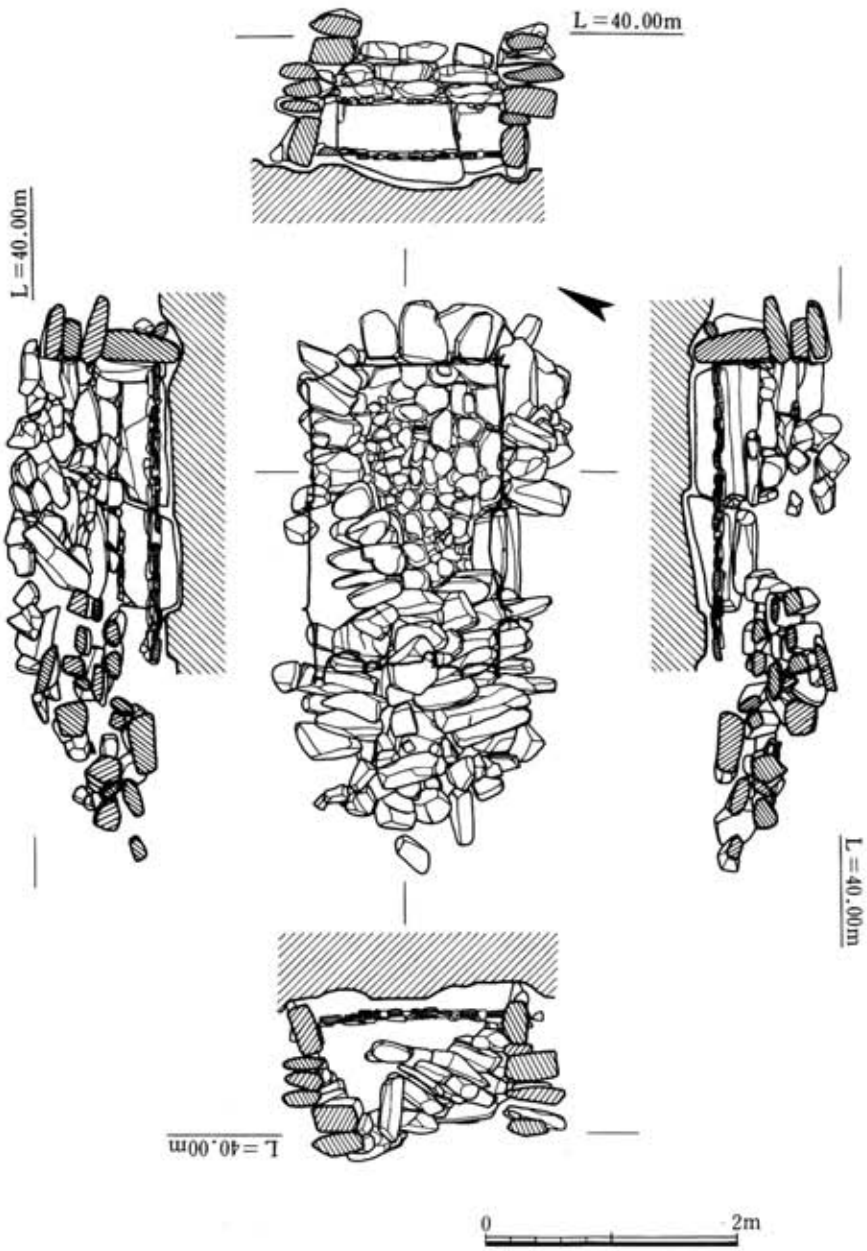



Fig. 51　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳石室実測図

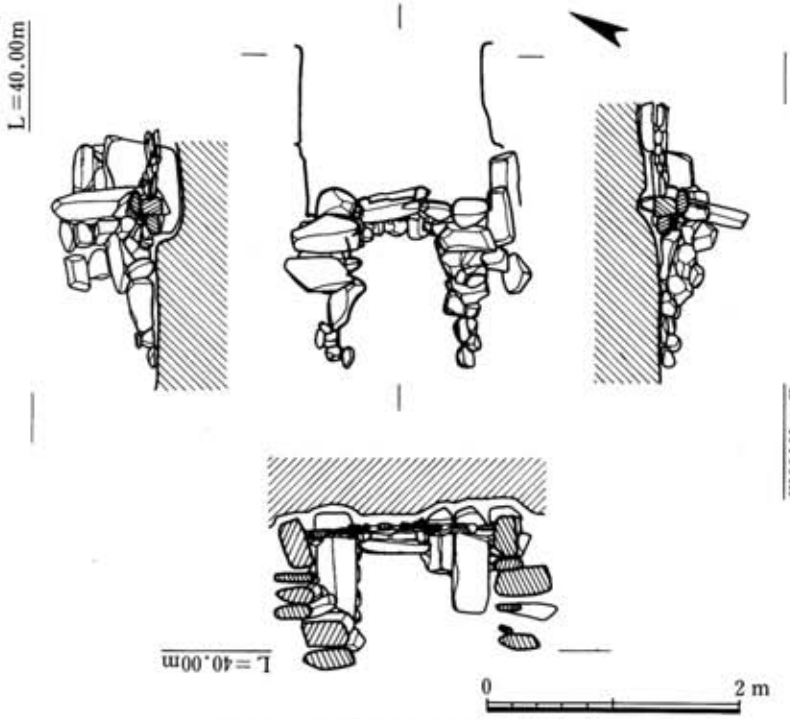



Fig. 52　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳羨道部実測図

**ＳＴ003古墳**（Fig. 53, PL. 24－2）

ＳＴ003古墳はＳＴ002古墳の北西5.5m、台地中央部の平坦地、標高39mに立地する。周辺の畑地が開墾された時の石捨場にされ、集石遺構を思わせる状態であった。石室内から勾玉、管玉、小玉などの装身具が出土した。築造の時期を決める遺物は出土していないが、ＳＴ002古墳出土のガラス製小玉と同じ赤褐色の管玉状の小玉が出土、６世紀前半の築造であろう。

**墳丘**　古墳の上部構造は既に破壊され、墳形や墳丘の規模は全く不明であるが、石室の規模から見て、大きな墳丘は持っていなかったようである。周溝は検出できなかった。

**内部主体**　石室は0.3～0.5mの礫を用いて、細長い石室を作っている。石室の主軸長1.6m、幅0.6～0.7mを測り、主軸方向はＳ62°Ｗにとっている。石室内の石組は北東側に腰石らしい２石が据えられているのに対し、南西側は、0.2m前後の石が積まれ、腰石の状態とは明らかに異なり、閉塞施設と見るべきであろう。このような石室の構造から南西に開口する竪穴系横口式石室であろう。側壁、奥壁とも0.5m前後の礫を腰石上部に１～２段に組み、上段の石が外側に開き気味に乗っている。石室内部は0.15m角のやや厚味を持つ礫を敷き詰め敷石を施し、その下に0.1～0.15mの扁平な礫で敷石を施し、上部の敷石は追葬によるものと考えられる。両腰石の下部～石室部までの1.2m幅を0.15m掘り込んでいる。

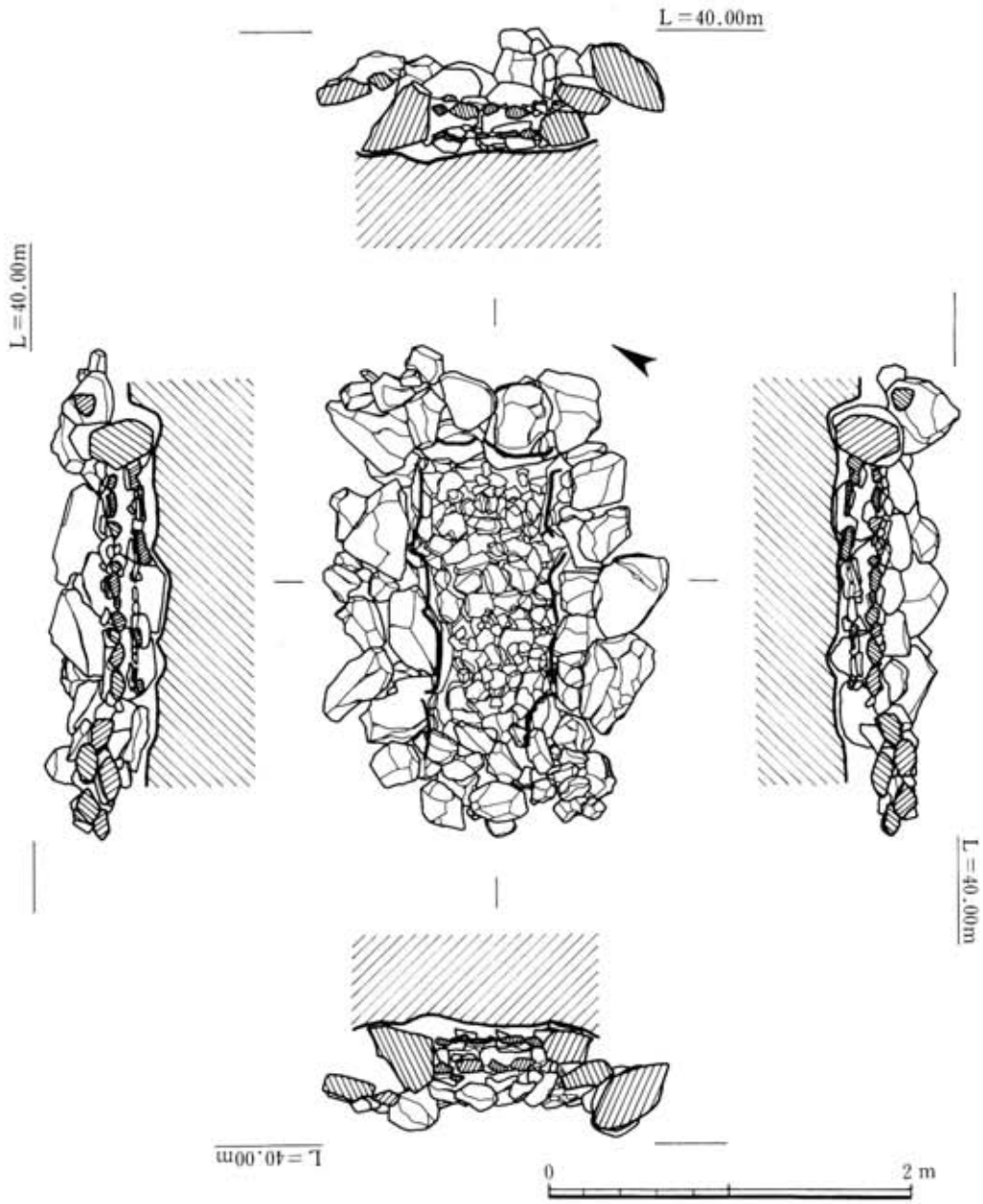



Fig. 53　鴻ノ巣遺跡ＳＴ003古墳石室実測図

## 3．遺　物

鴻ノ巣遺跡の古墳から出土した遺物はＳＴ001古墳周溝からの須恵器と３基の古墳からそれぞれ玉類が出土している。

**ＳＴ001古墳**（Fig. 54・55, PL. 25・26－１）

**須恵器**　杯蓋５個、杯４個、壺１個が西側周溝より出土した。

**杯蓋**　１・３・５・７は天井部と体部の境に明瞭な段がつく。口縁部はほぼ垂直で、口縁端部内面にも段を持つ。天井部がやや平坦なものと丸味をもつものがある。９は天井部が平坦で、体部は外反しながら開く。口縁端部内面に段を持つ。体部に２条の沈線を持つ。

**杯**　２・４・６・８は杯蓋１・３・５・７とセットになるもので底部は丸味を持ち、内湾しながら開き、受部は水平となる。たちあがりは長く、内傾している。

**壺**　10は口縁部がほぼ垂直にたち、胴部最大径がやや上位にある。胴部下位にタタキ調整が残る。底部は欠損しているが、尖り気味の丸味を持つようである。

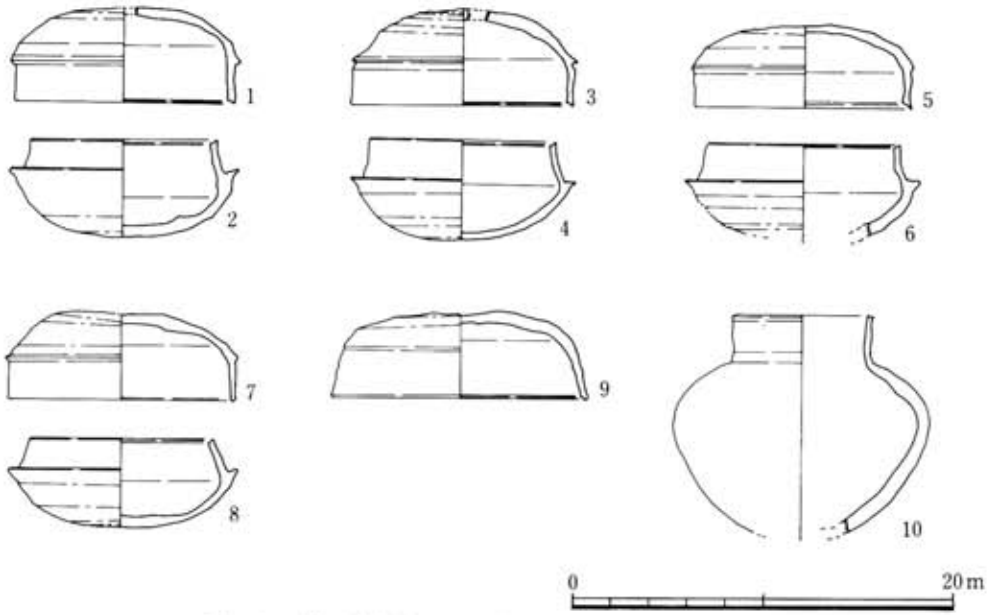



Fig. 54　鴻ノ巣遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器実測図

**玉類**　玉類は５個が敷石の間から出土している。

**勾玉**　１は扁平で、石質は軟かい石材を用い、装身具としての実用性に欠ける。２は最大長2.4cm、最大幅1.45cm、最大厚1.2cmで丸味を持つ。

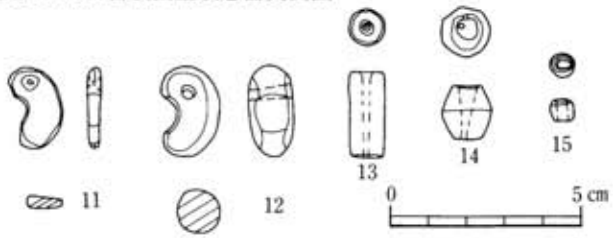



Fig. 55　鴻ノ巣遺跡ＳＴ001古墳出土玉類実測図

片面から穿孔している。乳白色に薄い緑色が混る。ヒスイ系の石であろう。硬質である。

**管玉**　3は長さ2.3cm、幅0.91cm。片面から穿孔している。碧玉製である。

**切子玉**　4は水晶製で最大長1.4cm、最大幅1.3cm、片面より穿孔している。磨耗が激しい。

**小玉**　5はガラス製、色は淡青である。

**ＳＴ002古墳**（Fig. 56, PL. 26－2）

**玉類**　玉類は管玉1個とガラス製丸玉9個、小玉約150個が出土し、小玉のうち約20個分は割れ、実測できたのは136個である。

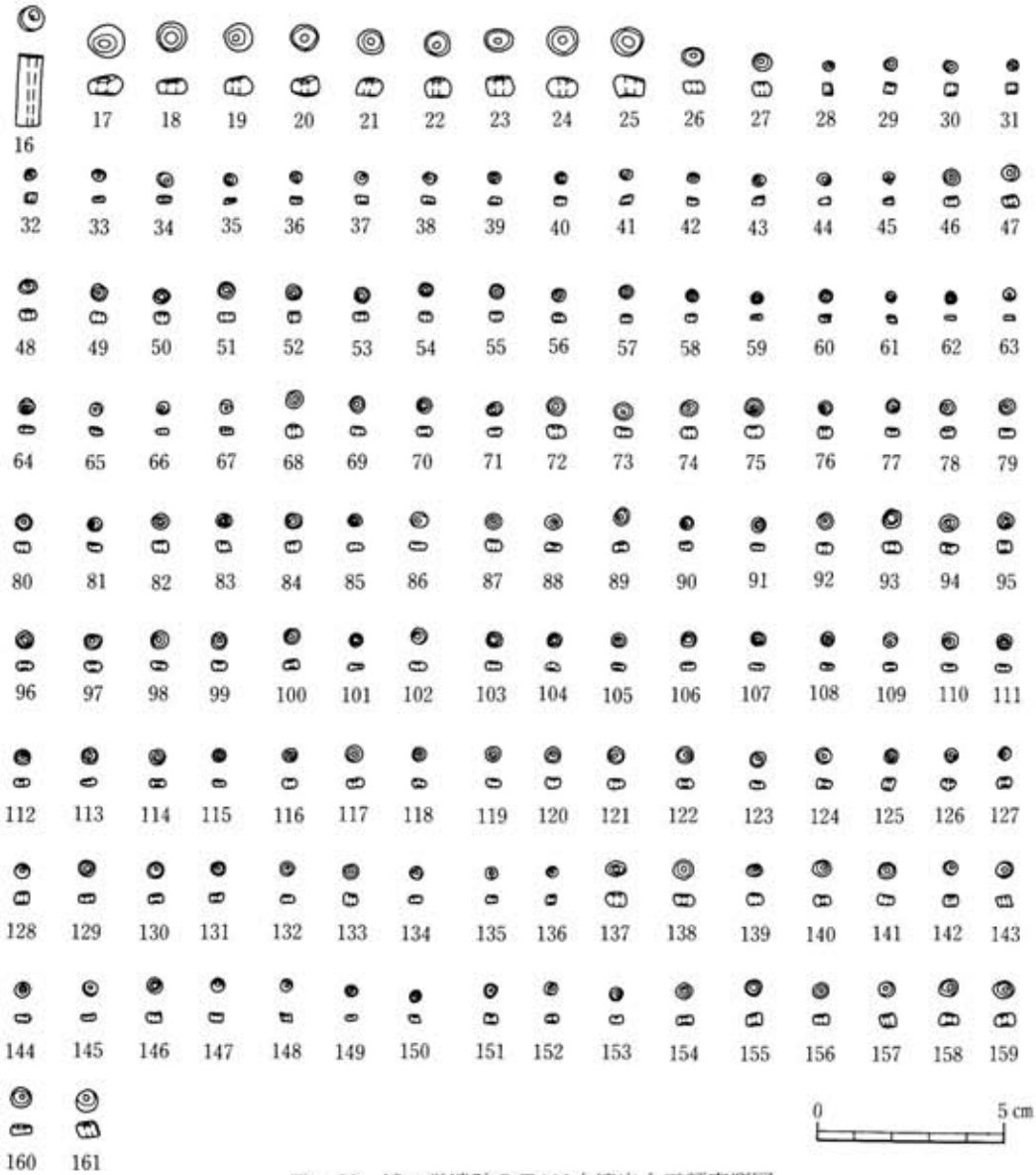



Fig. 56　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳出土玉類実測図

**管玉**　最大長1.9cm、最大幅0.65cm、古墳出土の管玉としては細身である。片面から穿孔している。碧玉製。

**丸玉**　17～25は最大長0.58～0.4cm、径0.92～0.7cm、紺、青系の色である。ガラス製。

**小玉**　26～161はガラス製の小玉である。色は青緑色56個、紺色38個、赤褐色18個、黄緑色10個、水色6個、黄色4個、青紫4個となる。紺色の玉は丸味を持ち、やや大きいものがある。赤褐色のものは径が小さく管玉状である。

**ＳＴ003古墳**（Fig. 57, PL. 26－3）

**玉類**　玉類は勾玉1個、管玉7個、小玉57個が石室内で出土した。

**勾玉**　162は水晶製である。最大長は2.25cm、最大幅1.3cm、最大厚0.8cmを測る。穿孔は片面からである。

**管玉**　163～169の7個が出土している。163～166・168・169は碧玉製で、最大長2.38～1.85cm、最大幅0.78～0.65cmを測る。片面から穿孔している。167は最大長2.15cm、最大幅0.85cm、孔径0.4cmを測り、両面から穿孔している。ヒスイ製であるが磨耗が激しい。

**小玉**　175～178・200・201・217の7個は赤褐色で細く、管玉状である。170～172は群青色・紺色でやや大きく、丸味を持つ。色別には淡緑色15個、群青色11個、深緑色8個、赤褐色7個、黄色4個、青緑色・水色3個、黄緑色・紺色2個、薄緑色・青緑色1個となる。緑色系は小粒のものが多い。

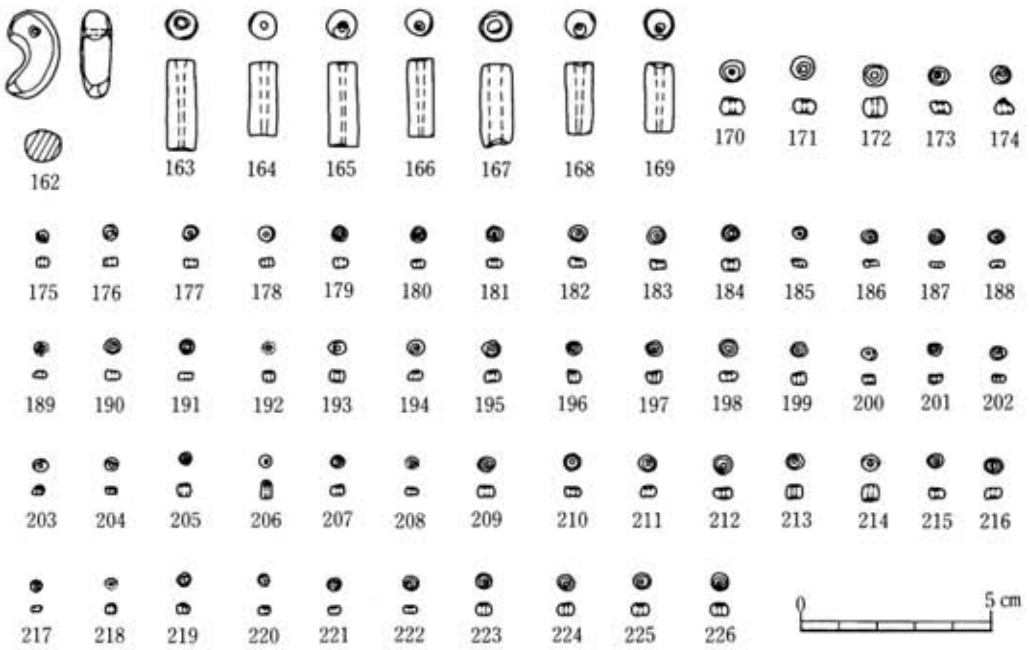



Fig. 57　鴻ノ巣遺跡ＳＴ003古墳出土玉類実測図

**Tab. 3**　鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳出土玉類計測表

| NO | 種　類 | 材　質 | 高さ | 径 | 孔　径 | 色 | 備考 | NO | 種　類 | 材　質 | 高さ | 径 | 孔　径 | 色 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 管　玉 | 碧　玉 | 1.90 | 0.65 | 0.15～0.30 | 暗　緑 | | 61 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.35 | 0.09 | 黄　緑 | |
| 2 | 小　玉 | ガラス | 0.51 | 0.92 | 0.20～0.28 | 群　青 | | 62 | 小　玉 | ガラス | 0.22 | 0.35 | 0.10 | 黄　緑 | |
| 3 | 小　玉 | ガラス | 0.40 | 0.80 | 0.30 | 群　青 | | 63 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.38～0.40 | 0.10～0.12 | 黄　緑 | |
| 4 | 小　玉 | ガラス | 0.42 | 0.70 | 0.15 | 群　青 | | 64 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.40 | 0.11 | 黄　緑 | |
| 5 | 小　玉 | ガラス | 0.45 | 0.75 | 0.20 | 群　青 | | 65 | 小　玉 | ガラス | 0.28 | 0.40～0.41 | 0.13 | 黄　緑 | |
| 6 | 小　玉 | ガラス | 0.50 | 0.70 | 0.18 | 群　青 | | 66 | 小　玉 | ガラス | 0.26 | 0.35～0.40 | 0.10 | 黄　緑 | |
| 7 | 小　玉 | ガラス | 0.50 | 0.70 | 0.18 | 群　青 | | 67 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.40 | 0.10～0.12 | 水 | |
| 8 | 小　玉 | ガラス | 0.50 | 0.60～0.75 | 0.18～0.20 | 明るい紺 | | 68 | 小　玉 | ガラス | 0.28 | 0.38 | 0.10 | 水 | |
| 9 | 小　玉 | ガラス | 0.50 | 0.75～0.80 | 0.20 | 紺 | | 69 | 小　玉 | ガラス | 0.28 | 0.40～0.43 | 0.15 | 水 | |
| 10 | 小　玉 | ガラス | 0.58 | 0.78 | 0.28～0.30 | 紺 | | 70 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.35～0.40 | 0.10～0.12 | 水 | |
| 11 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.50～0.58 | 0.13～0.15 | 紺 | | 71 | 小　玉 | ガラス | 0.18 | 0.38～0.45 | 0.15 | 水 | |
| 12 | 小　玉 | ガラス | 0.40 | 0.45 | 0.15 | 紺 | | 72 | 小　玉 | ガラス | 0.31 | 0.38～0.42 | 0.15 | 水 | |
| 13 | 小　玉 | ガラス | 0.31 | 0.25 | 0.10 | 赤　褐 | | 73 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.37～0.40 | 0.08～0.10 | 青　緑 | |
| 14 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.30 | 0.15 | 赤　褐 | | 74 | 小　玉 | ガラス | 0.27 | 0.42 | 0.11 | 青　緑 | |
| 15 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.30 | 0.12 | 赤　褐 | | 75 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.31～0.35 | 0.10 | 青　緑 | |
| 16 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.30 | 0.10～0.13 | 赤　褐 | | 76 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.35 | 0.10～0.12 | 青　緑 | |
| 17 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.30 | 0.10 | 赤　褐 | | 77 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.41～0.43 | 0.10 | 青　緑 | |
| 18 | 小　玉 | ガラス | 0.18 | 0.31 | 0.10～0.15 | 赤　褐 | | 78 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.48～0.50 | 0.20 | 青　緑 | |
| 19 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.40 | 0.15～0.20 | 赤　褐 | | 79 | 小　玉 | ガラス | 0.28 | 0.40～0.47 | 0.12 | 青　緑 | |
| 20 | 小　玉 | ガラス | 0.18 | 0.35 | 0.18 | 赤　褐 | | 80 | 小　玉 | ガラス | 0.31 | 0.37～0.41 | 0.12 | 青　緑 | |
| 21 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.31 | 0.10～0.12 | 赤　褐 | | 81 | 小　玉 | ガラス | 0.22 | 0.41～0.46 | 0.16 | 青　緑 | |
| 22 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.35 | 0.10～0.12 | 赤　褐 | | 82 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.40～0.45 | 0.13 | 青　緑 | |
| 23 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.35 | 0.13 | 赤　褐 | | 83 | 小　玉 | ガラス | 0.22 | 0.42～0.45 | 0.15 | 青　緑 | |
| 24 | 小　玉 | ガラス | 0.22 | 0.35 | 0.15 | 赤　褐 | | 84 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.40 | 0.10 | 青　緑 | |
| 25 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.30 | 0.15 | 赤　褐 | | 85 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.40～0.42 | 0.12 | 青　緑 | |
| 26 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.31 | 0.10 | 赤　褐 | | 86 | 小　玉 | ガラス | 0.17 | 0.35～0.37 | 0.13 | 青　緑 | |
| 27 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.30 | 0.10 | 赤　褐 | | 87 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.38～0.45 | 0.12 | 青　緑 | |
| 28 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.31 | 0.10～0.15 | 赤　褐 | | 88 | 小　玉 | ガラス | 0.22 | 0.40 | 0.18 | 青　緑 | |
| 29 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.32 | 0.15 | 赤　褐 | | 89 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.35 | 0.10 | 青　緑 | |
| 30 | 小　玉 | ガラス | 0.18 | 0.30 | 0.10 | 赤　褐 | | 90 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.38～0.40 | 0.10 | 青　緑 | |
| 31 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.41～0.45 | 0.10～0.12 | 赤　褐 | | 91 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.40～0.41 | 0.15 | 青　緑 | |
| 32 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.40～0.42 | 0.15 | 赤　褐 | | 92 | 小　玉 | ガラス | 0.19 | 0.35～0.40 | 0.15 | 青　緑 | |
| 33 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.38～0.45 | 0.12 | 赤　褐 | | 93 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.35 | 0.10 | 青　緑 | |
| 34 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.41 | 0.11 | 赤　褐 | | 94 | 小　玉 | ガラス | 0.23 | 0.35～0.40 | 0.10 | 青　緑 | |
| 35 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.40 | 0.12～0.18 | 赤　褐 | | 95 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.40 | 0.10 | 青　緑 | |
| 36 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.45 | 0.18 | 赤　褐 | | 96 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.38～0.40 | 0.12 | 青　緑 | |
| 37 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.38 | 0.16 | 赤　褐 | | 97 | 小　玉 | ガラス | 0.21 | 0.40 | 0.10 | 青　緑 | |
| 38 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.42 | 0.13 | 赤　褐 | | 98 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.40～0.42 | 0.15 | 青　緑 | |
| 39 | 小　玉 | ガラス | 0.28 | 0.33～0.38 | 0.11 | 赤　褐 | | 99 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.40 | 0.15 | 青　緑 | |
| 40 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.38 | 0.12 | 赤　褐 | | 100 | 小　玉 | ガラス | 0.21 | 0.40～0.43 | 0.15 | 青　緑 | |
| 41 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.31～0.35 | 0.12 | 赤　褐 | | 101 | 小　玉 | ガラス | 0.18 | 0.35 | 0.12 | 青　緑 | |
| 42 | 小　玉 | ガラス | 0.22 | 0.32～0.35 | 0.10 | 赤　褐 | | 102 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.35～0.38 | 0.10 | 青　緑 | |
| 43 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.30 | 0.10 | 赤　褐 | | 103 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.40～0.42 | 0.11 | 青　緑 | |
| 44 | 小　玉 | ガラス | 0.18 | 0.31 | 0.10 | 赤　褐 | | 104 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.35 | 0.10 | 青　緑 | |
| 45 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.32 | 0.10 | 赤　褐 | | 105 | 小　玉 | ガラス | 0.23 | 0.40 | 0.10 | 青　緑 | |
| 46 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.25 | 0.10～0.12 | 赤　褐 | | 106 | 小　玉 | ガラス | 0.29 | 0.40 | 0.10 | 青　緑 | |
| 47 | 小　玉 | ガラス | 0.12 | 0.30 | 0.10 | 赤　褐 | | 107 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.40～0.45 | 0.12 | 青　緑 | |
| 48 | 小　玉 | ガラス | 0.18 | 0.32 | 0.10 | 赤　褐 | | 108 | 小　玉 | ガラス | 0.22 | 0.40 | 0.12 | 青　緑 | |
| 49 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.40 | 0.10～0.15 | 青　紫 | | 109 | 小　玉 | ガラス | 0.28 | 0.38～0.40 | 0.11 | 青　緑 | |
| 50 | 小　玉 | ガラス | 0.21 | 0.35 | 0.12 | 青　紫 | | 110 | 小　玉 | ガラス | 0.31 | 0.35 | 0.10 | 青　緑 | |
| 51 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.32 | 0.10 | 青　紫 | | 111 | 小　玉 | ガラス | 0.27 | 0.35 | 0.10 | 青　緑 | |
| 52 | 小　玉 | ガラス | 0.21 | 0.35 | 0.11 | 青　紫 | | 112 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.35 | 0.10 | 青　緑 | |
| 53 | 小　玉 | ガラス | 0.37 | 0.42 | 0.11 | 黄 | | 113 | 小　玉 | ガラス | 0.33 | 0.35 | 0.15 | 青　緑 | |
| 54 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.40 | 0.15 | 黄 | | 114 | 小　玉 | ガラス | 0.21 | 0.42～0.45 | 0.12 | 青　緑 | |
| 55 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.40 | 0.12 | 黄 | | 115 | 小　玉 | ガラス | 0.22 | 0.42 | 0.12 | 青　緑 | |
| 56 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.35～0.40 | 0.10 | 黄 | | 116 | 小　玉 | ガラス | 0.25 | 0.35～0.38 | 0.12 | 青　緑 | |
| 57 | 小　玉 | ガラス | 0.45 | 0.48 | 0.15 | 黄　緑 | | 117 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.35～0.37 | 0.10 | 青　緑 | |
| 58 | 小　玉 | ガラス | 0.28 | 0.45～0.48 | 0.10 | 黄　緑 | | 118 | 小　玉 | ガラス | 0.30 | 0.35～0.40 | 0.10 | 青　緑 | |
| 59 | 小　玉 | ガラス | 0.41 | 0.41～0.45 | 0.10 | 黄　緑 | | 119 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.32～0.35 | 0.10 | 青　緑 | |
| 60 | 小　玉 | ガラス | 0.35 | 0.45～0.49 | 0.12 | 黄　緑 | | 120 | 小　玉 | ガラス | 0.20 | 0.31 | 0.12 | 青　緑 | |

| NO | 種類 | 材質 | 高さ | 径 | 孔径 | 色 | 備考 | NO | 種類 | 材質 | 高さ | 径 | 孔径 | 色 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 121 | 小玉 | ガラス | 0.26 | 0.30 | 0.10 | 青緑 | | 134 | 小玉 | ガラス | 0.19 | 0.30 | 0.10 | 青紫 | |
| 122 | 小玉 | ガラス | 0.38 | 0.41～0.52 | 0.12～0.18 | 青緑 | | 135 | 小玉 | ガラス | 0.20 | 0.30 | 0.10 | 紺 | |
| 123 | 小玉 | ガラス | 0.31 | 0.55 | 0.15 | 青緑 | | 136 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.35 | 0.10 | 紺 | |
| 124 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.35～0.42 | 0.11 | 青緑 | | 137 | 小玉 | ガラス | 0.23 | 0.32 | 0.12 | 紺 | |
| 125 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.41～0.47 | 0.15 | 青緑 | | 138 | 小玉 | ガラス | 0.23 | 0.32 | 0.10 | 紺 | |
| 126 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.42 | 0.12 | 青緑 | | 139 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.40～0.45 | 0.15 | 紺 | |
| 127 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.35～0.38 | 0.10 | 青緑 | | 140 | 小玉 | ガラス | 0.35 | 0.41 | 0.15 | 紺 | |
| 128 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.40 | 0.12 | 青緑 | | 141 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.40～0.42 | 0.12 | 紺 | |
| 129 | 小玉 | ガラス | 0.21 | 0.40 | 0.11 | 青緑 | | 142 | 小玉 | ガラス | 0.38 | 0.35～0.40 | 0.10 | 紺 | |
| 130 | 小玉 | ガラス | 0.20 | 0.37～0.40 | 0.12 | 青緑 | | 143 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.45～0.50 | 0.11 | 紺 | |
| 131 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.40 | 0.12～0.15 | 青緑 | | 144 | 小玉 | ガラス | 0.32 | 0.45～0.55 | 0.18 | 紺 | |
| 132 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.35 | 0.10 | 青紫 | | 145 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.50～0.55 | 0.11 | 紺 | |
| 133 | 小玉 | ガラス | 0.21 | 0.30 | 0.10 | 青紫 | | 146 | 小玉 | ガラス | 0.41 | 0.65 | 0.15 | 紺 | |

Tab. 4　鴻ノ巣遺跡ＳＴ003古墳出土玉類計測表

| NO | 種類 | 材質 | 高さ | 径 | 孔径 | 色 | 備考 | NO | 種類 | 材質 | 高さ | 径 | 孔径 | 色 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 管玉 | 碧玉 | 2.25 | 1.30 | 0.15～0.28 | 半透明 | | 34 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.45 | 0.12 | 淡緑 | |
| 2 | 管玉 | 碧玉 | 2.38 | 0.78 | (大) 0.28<br>(小) 0.10 | 深緑 | | 35 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.32～0.35 | 0.10 | 淡緑 | |
| 3 | 管玉 | 碧玉 | 1.90 | 0.70 | (大) 0.27<br>(小) 0.15 | 深緑 | | 36 | 小玉 | ガラス | 0.32 | 0.35～0.40 | 0.10 | 淡緑 | |
| 4 | 管玉 | 碧玉 | 2.30 | 0.78 | (大) 0.20～0.25<br>(小) 0.10 | 淡緑 | | 37 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.45 | 0.12 | 淡緑 | |
| 5 | 管玉 | 碧玉 | 2.08 | 0.65 | (大) 0.22<br>(小) 0.10 | 淡緑 | | 38 | 小玉 | ガラス | 0.32 | 0.38～0.40 | 0.11 | 淡緑 | |
| 6 | 管玉 | 碧玉 | 2.15 | 0.85 | 0.40 | 淡緑 | | 39 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.32～0.35 | 0.10 | 赤褐 | |
| 7 | 管玉 | 碧玉 | 1.90 | 0.75 | (大) 0.25<br>(小) 0.10 | 淡緑 | | 40 | 小玉 | ガラス | 0.22 | 0.35 | 0.11 | 赤褐 | |
| 8 | 管玉 | 碧玉 | 1.85 | 0.78 | (大) 0.20<br>(小) 0.12 | 淡緑 | | 41 | 小玉 | ガラス | 0.21 | 0.35～0.38 | 0.11 | 青紫 | |
| 9 | 小玉 | ガラス | 0.45 | 0.59～0.62 | 0.12 | 群青 | | 42 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.32～0.36 | 0.12 | 青紫 | |
| 10 | 小玉 | ガラス | 0.39 | 0.50～0.52 | 0.13 | 群青 | | 43 | 小玉 | ガラス | 0.20 | 0.35 | 0.10 | 青紫 | |
| 11 | 小玉 | ガラス | 0.50 | 0.55～0.62 | 0.12～0.18 | 紺 | | 44 | 小玉 | ガラス | 0.35 | 0.32 | 0.10 | 青緑 | |
| 12 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.47～0.51 | 0.18 | 淡緑 | | 45 | 小玉 | ガラス | 0.49 | 0.30 | 0.10 | 深緑 | |
| 13 | 小玉 | ガラス | 0.38 | 0.46～0.50 | 0.15 | 淡緑 | | 46 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.30～0.32 | 0.11 | 深緑 | |
| 14 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.31 | 0.10 | 赤褐 | | 47 | 小玉 | ガラス | 0.20 | 0.32 | 0.10 | 水 | |
| 15 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.40 | 0.10～0.15 | 赤褐 | | 48 | 小玉 | ガラス | 0.31 | 0.35～0.40 | 0.10～0.15 | 深緑 | |
| 16 | 小玉 | ガラス | 0.22 | 0.35～0.40 | 0.11 | 赤褐 | | 49 | 小玉 | ガラス | 0.27 | 0.42 | 0.15 | 深緑 | |
| 17 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.40 | 0.12 | 赤褐 | | 50 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.45 | 0.12 | 深緑 | |
| 18 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.40 | 0.10 | 黄 | | 51 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.50 | 0.15 | 深緑 | |
| 19 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.40 | 0.11 | 黄 | | 52 | 小玉 | ガラス | 0.35 | 0.40～0.42 | 0.11 | 深緑 | |
| 20 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.40 | 0.10 | 黄 | | 53 | 小玉 | ガラス | 0.40 | 0.38～0.40 | 0.10 | 深緑 | |
| 21 | 小玉 | ガラス | 0.22 | 0.40～0.45 | 0.10 | 黄 | | 54 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.40 | 0.12 | 水 | |
| 22 | 小玉 | ガラス | 0.26 | 0.40～0.45 | 0.10 | 黄緑 | | 55 | 小玉 | ガラス | 0.29 | 0.40～0.45 | 0.10～0.15 | 紺 | |
| 23 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.45 | 0.18 | 黄緑 | | 56 | 小玉 | ガラス | 0.18 | 0.30 | 0.10 | 赤褐 | |
| 24 | 小玉 | ガラス | 0.20 | 0.32～0.38 | 0.12 | 薄緑 | | 57 | 小玉 | ガラス | 0.26 | 0.25～0.27 | 0.80 | 群青 | |
| 25 | 小玉 | ガラス | 0.20 | 0.35～0.40 | 0.12 | 水 | | 58 | 小玉 | ガラス | 0.28 | 0.32 | 0.10 | 群青 | |
| 26 | 小玉 | ガラス | 0.18 | 0.36～0.39 | 0.12 | 淡緑 | | 59 | 小玉 | ガラス | 0.22 | 0.28～0.30 | 0.10 | 群青 | |
| 27 | 小玉 | ガラス | 0.20 | 0.35～0.40 | 0.10 | 淡緑 | | 60 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.32～0.35 | 0.10 | 群青 | |
| 28 | 小玉 | ガラス | 0.20 | 0.38～0.40 | 0.10 | 淡緑 | | 61 | 小玉 | ガラス | 0.20 | 0.35～0.38 | 0.12 | 群青 | |
| 29 | 小玉 | ガラス | 0.25 | 0.37 | 0.11 | 淡緑 | | 62 | 小玉 | ガラス | 0.31 | 0.40 | 0.12 | 群青 | |
| 30 | 小玉 | ガラス | 0.21 | 0.40 | 0.12 | 淡緑 | | 63 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.42 | 0.12 | 群青 | |
| 31 | 小玉 | ガラス | 0.39 | 0.30 | 0.10 | 淡緑 | | 64 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.40～0.42 | 0.12 | 群青 | |
| 32 | 小玉 | ガラス | 0.29 | 0.40 | 0.12 | 淡緑 | | 65 | 小玉 | ガラス | 0.35 | 0.45 | 0.15 | 群青 | |
| 33 | 小玉 | ガラス | 0.30 | 0.41 | 0.10 | 淡緑 | | | | | | | | | |

## 4．小　結

鴻ノ巣遺跡では3基の古墳を検出したが、東多久バイパス関係の調査で7棟の弥生時代後期の住居跡を検出し、狭い範囲ではあったが規模の大きな遺跡となった。なかでも特質されるのは完全に破壊されたＳＴ001古墳の周溝から5世紀末～6世紀初頭の須恵器杯・杯蓋が出土したことである。これまで多久市内の古墳から出土した須恵器は6世紀末　～7世紀後半がほとんどで、多久に於ける古墳築造の起源は6世紀末と考えられていた。約1世紀も多久の古墳築造の歴史はさかのぼったわけである。またＳＴ003古墳の石室についても、竪穴系横口式の石室とも考えられ、これまで例のない石室であるため、新たに問題を提起することになった。玉類についても再検討を要するものである。

〔参考文献〕

「東多久バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」　佐賀県教育委員会　1984
「金立開拓遺跡」　佐賀県教育委員会　1984
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第7集」　佐賀県教育委員会　1984

# Ⅷ　原田遺跡

遺跡名：原田遺跡（略号ＨＲＤ）

遺跡所在地：多久市北多久町大字多久原字原田

# Ⅷ　原田遺跡

## 1．遺跡の概要

原田遺跡は天山山系の南、仏坊山（標高435m）から南に派生する飯盛山（標高184m）を水源とする西郷川と大工田川に狭まれた扇状地の先端、標高30mの水田に位置し、正確には多久市北多久町大字多久原字原田に所在する。多久インターでの降り口にあたり、すぐ南に国鉄唐津線が走り、大工田踏切までは60mの距離にあたる。遺跡周辺には早くから知られていた遺跡や九州横断自動車道に係る発掘調査を実施した遺跡も多い。東300mには弥生時代後期の住居跡7棟と古墳3基を調査した鴻ノ巣遺跡があり、南東120mには縄文時代後期の土器片や弥生土器が出土する大工田遺跡、西220mに今出川B遺跡、今出川A遺跡があり、370mには大工田古墳群が立地する。

原田遺跡では縄文時代後期の土壙と弥生時代後期の甕棺墓などの遺構を検出し、縄文時代後期～古墳時代の遺物包含層を確認した。遺物は包含層から縄文時代後期の土器片、弥生土器片、須恵器・土師器片、黒耀石剝片などが出土した。

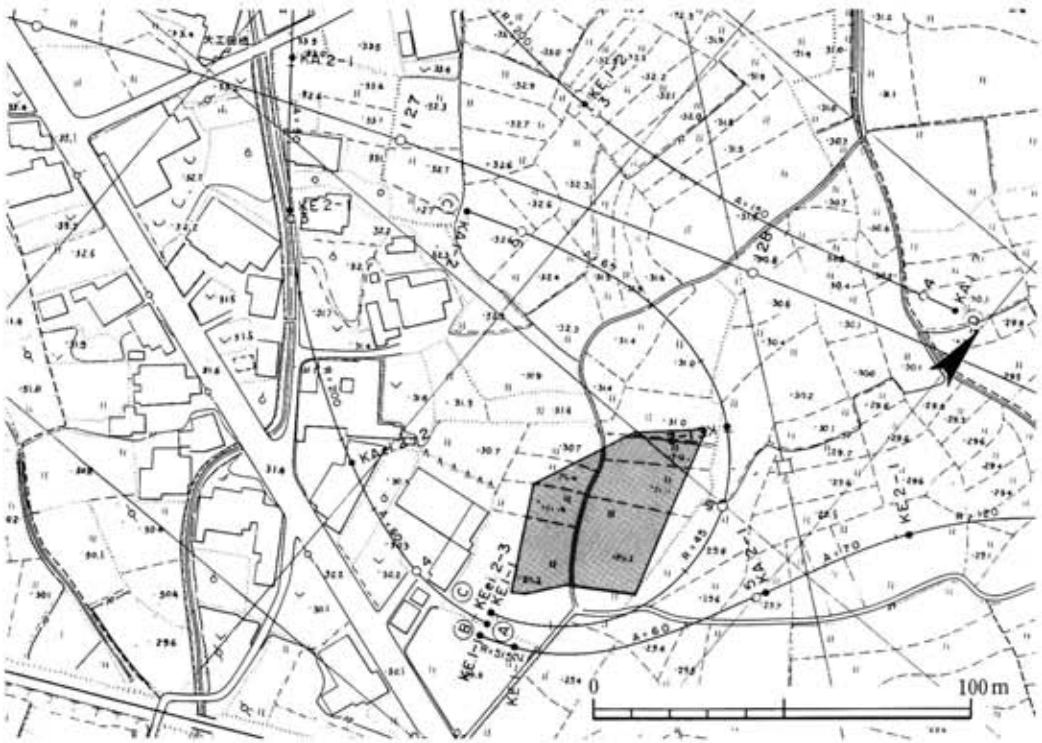



Fig. 58　原田遺跡周辺地形図

## 2．遺　構

### 縄文時代

原田遺跡での縄文時代の遺構は土壙１基を検出した。遺物は土壙内より滑石粉末を混入した

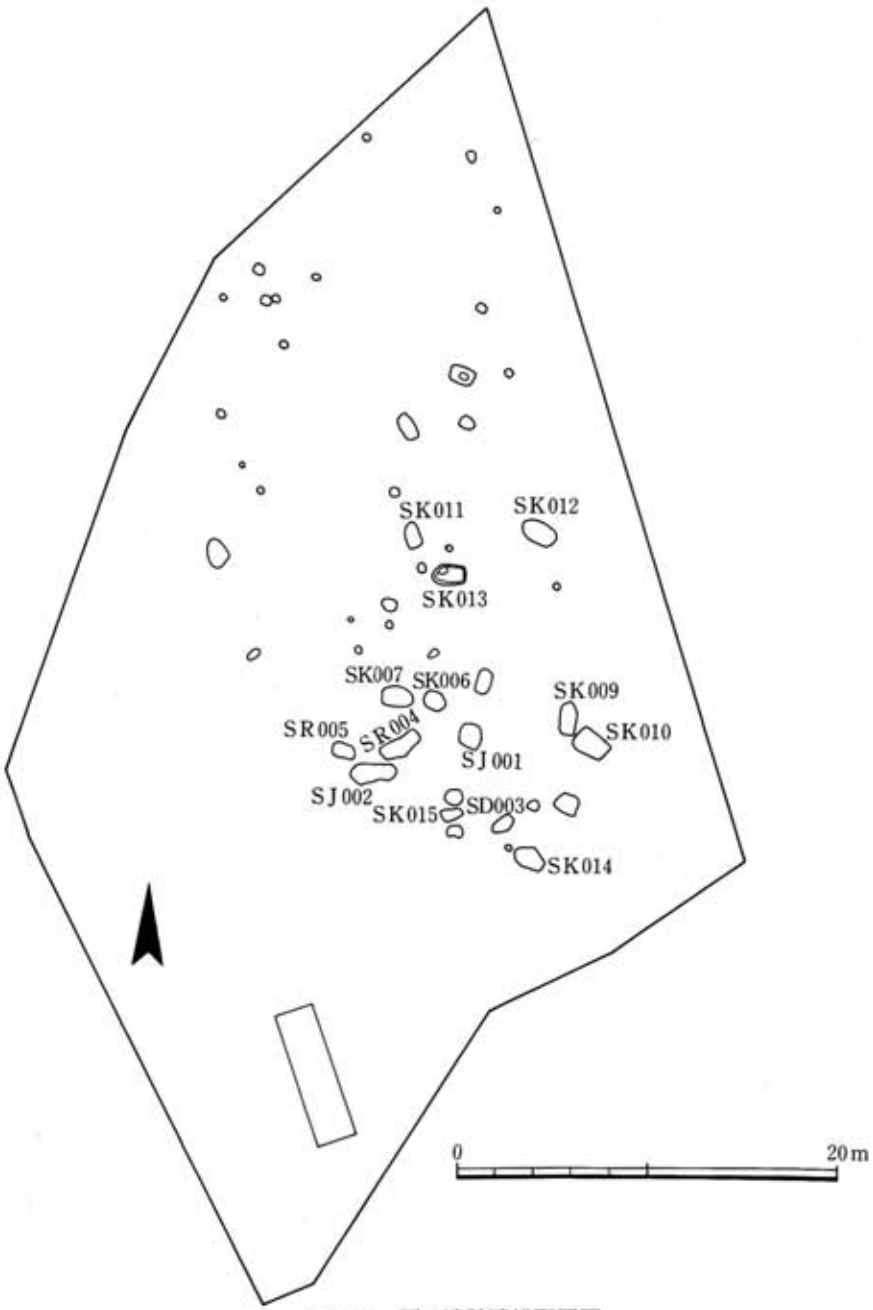



Fig. 59　原田遺跡遺構配置図

深鉢の破片が出土した。無文土器であるが、南東120mの大工田遺跡では円形や楕円形の凹点文や平行線文などの土器片が出土していることから縄文時代中期末～後期の土壙であろう。

**ＳＫ012土壙**

ＳＫ012土壙の平面は四隅に丸味を持つ楕円形で、長径1.7m、短径0.95m、深さ0.6m、壁は垂直に近い。土壙墓とも考えられる。

**弥生時代**

原田遺跡の遺構はＳＫ012土壙と遺物が出土しなかった遺構を除くと全て弥生時代の遺構である。甕棺墓２基、祭祀遺構２、土壙８が検出された。

**ＳＪ001甕棺墓**（Fig. 60, PL. 28－1）

ＳＪ001甕棺墓は遺跡のほぼ中央部に位置する。甕棺の上部は押し潰された状態で出土した。墓壙の平面は長径1.4m、短径1.2mの不整楕円形で、深さ0.45mの横穴を掘り込み下甕を埋置している。上甕の口縁部を打ち欠いて下甕の中に入れる挿入式である。下甕の体部の中央より

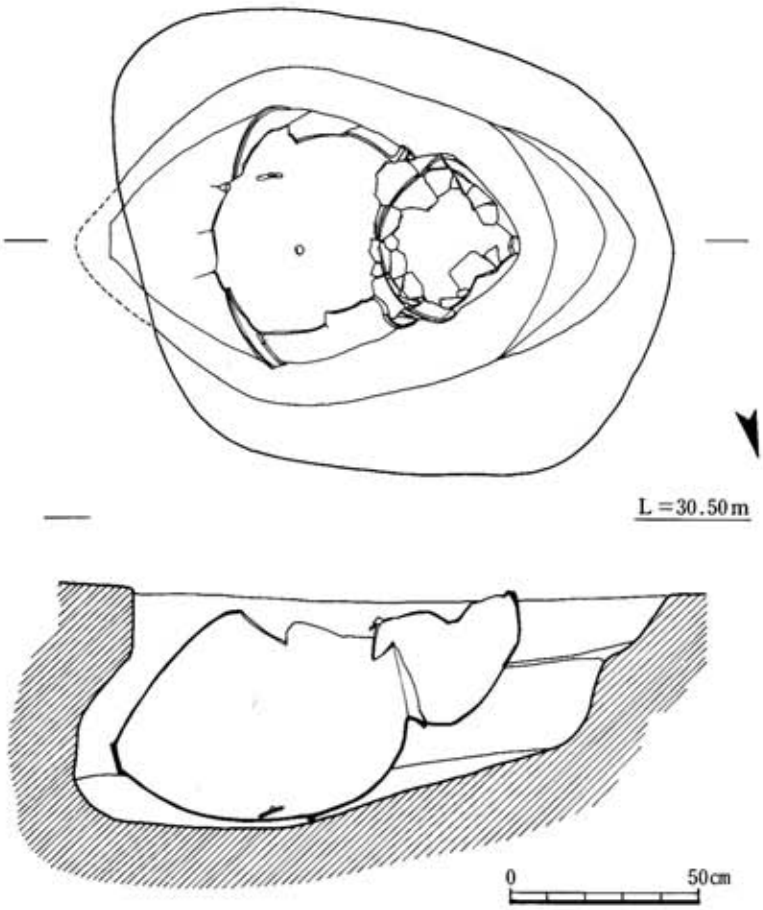



Fig. 60　原田遺跡ＳＪ001甕棺墓実測図

やや下に穿孔している。主軸方向をN75°Wにとり、傾斜角15°を測る。弥生時代後期前半の所産であろう。

**ＳＪ002甕棺墓**（Fig. 61, PL. 28－2）

ＳＪ002甕棺墓はＳＪ001甕棺墓の西５ｍに位置する。甕棺は押し潰された状態で出土した。墓壙の一部は後世の攪乱を受けているが、推定すると平面は長径1.8m、短径0.9mの長楕円形である。上甕の口縁部を打ち欠いて下甕の中に挿入した挿入式である。上甕、下甕とも棺底に大小の河原石を敷き棺を支える埋葬方法である。主軸方向をＳ82°Ｅにとる。ほぼ水平に埋葬している。弥生時代中期末～後期初頭の所産であろう。

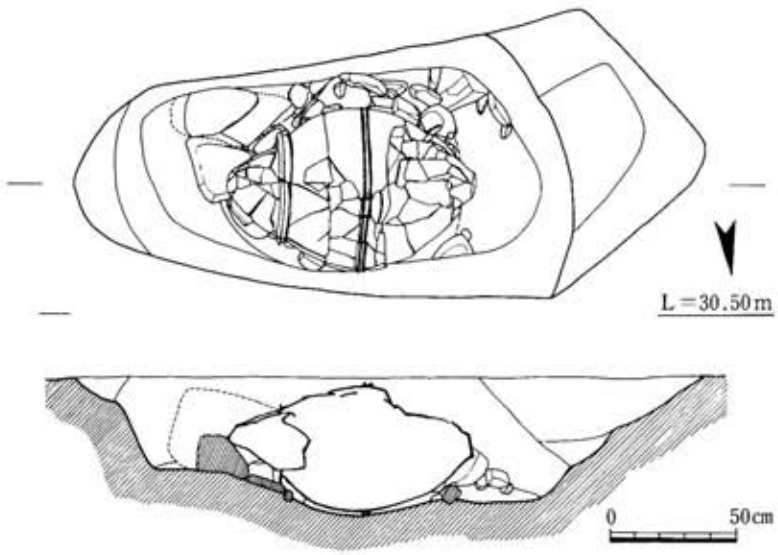



Fig. 61　原田遺跡ＳＪ002甕棺墓実測図

**ＳＰ003土壙墓**（Fig. 62）

ＳＰ003土壙墓はＳＪ001甕棺墓の南５ｍに位置する。平面は長径1.3m、短径0.65mの不整楕円形で深さ0.5mを測る。土壙壁は垂直である。埋土より赤色顔料を施し、暗文がある高杯の口縁部破片が出土している。弥生時代中期中葉の時期であろう。

**ＳＲ004祭祀遺構**（Fig. 62, PL. 29－１）

ＳＲ004祭祀遺構はＳＪ001甕棺墓の東３ｍに位置する。平面は長径2.3m、短径1.1mの不整楕円形で深さ0.55mを測る。土壙の壁は西側が垂直に近く、東側壁は55°の傾斜を持つ。埋土から甕の口縁部、鉢、赤色顔料を施す高杯の裾部が出土した。弥生時代中期後半の時期であろう。

**ＳＲ005祭祀遺構**（Fig. 62, PL. 29－２）

ＳＲ005祭祀遺構はＳＲ004祭祀遺構の西３ｍに位置する。平面は長径1.2m、短径0.65mの不整楕円形である。深さ0.25mで壁は垂直に近い。赤色顔料を施した高杯や甕の破片が出土、遺物から弥生時代中期後半の時期であろう。

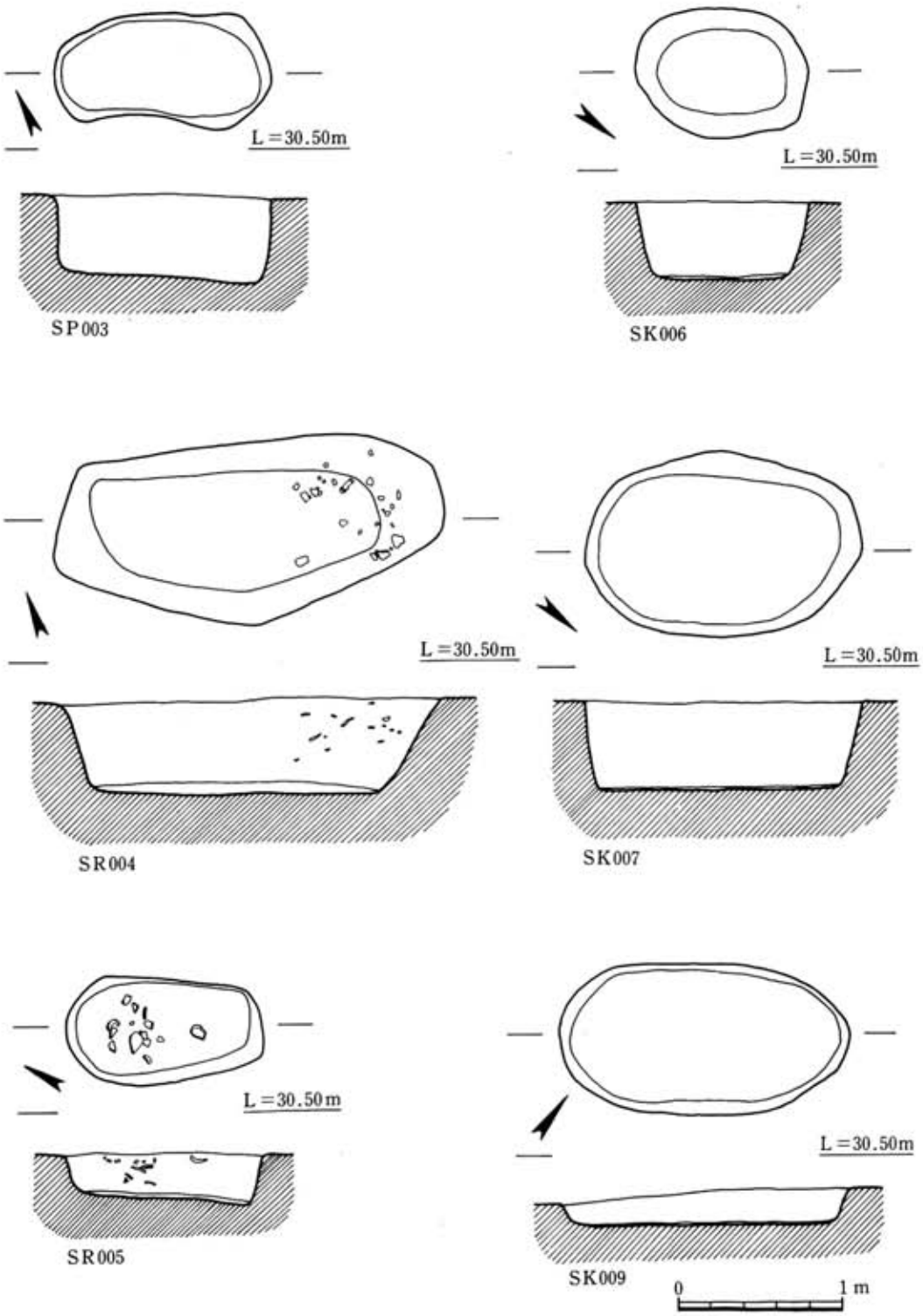



Fig. 62　原田遺跡土壙墓・祭祀遺構・土壙実測図

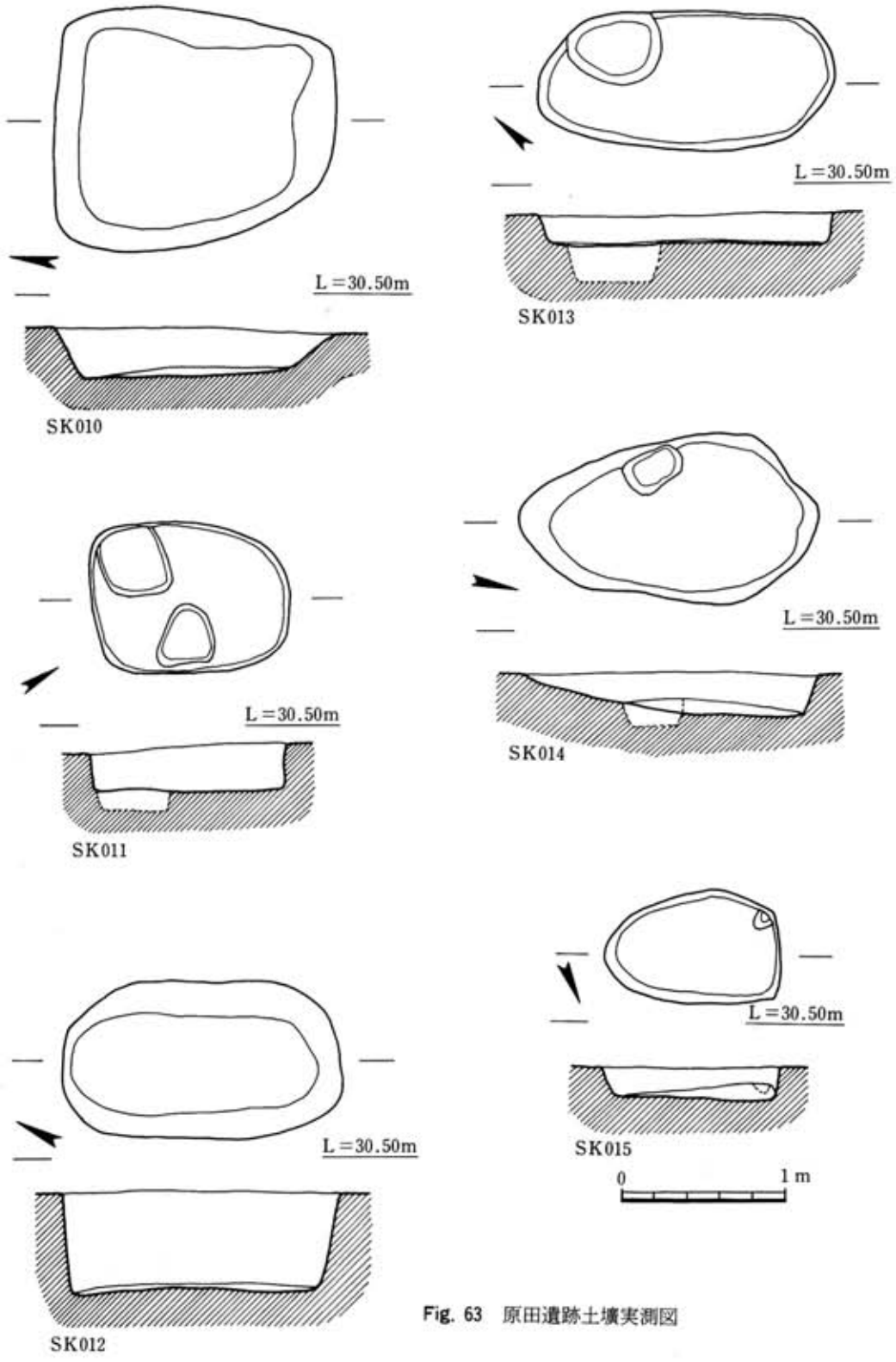



Fig. 63　原田遺跡土壙実測図

**ＳＫ006土壙**（Fig. 62）

ＳＫ006土壙はＳＪ001甕棺墓の北東２ｍに位置する。平面は長径1.05m、短径0.8mの楕円形で深さ0.45mを測る。壁はやや垂直に近い。赤色顔料を施した甕の破片が出土している。弥生時代中期の時期であろう。

**ＳＫ007土壙**（Fig. 62）

ＳＫ007土壙はＳＫ006土壙の西２ｍに並ぶ。平面は長径1.7m、短径1.1mの楕円形で深さ0.5mを測る。壁は垂直に近い。甕、壺の破片が出土している。遺物から弥生時代中期の時期であろう。

**ＳＫ009土壙**（Fig. 62）

ＳＫ009土壙はＳＪ001甕棺墓の東５ｍに位置する。平面は長径1.8m、短径0.9mの楕円形で深さ0.2mと浅い。弥生時代の高杯の脚部が出土した。

**ＳＫ010土壙**（Fig. 63）

ＳＫ010土壙はＳＫ009土壙の東に隣接する。平面はやや歪んだ隅丸長方形で長辺1.7m、短辺1.5ｍを測る。深さ0.3mで壁は勾配を持つ。赤色顔料を施した高杯の杯部が出土している。弥生時代中期の時期であろう。

**ＳＫ011土壙**（Fig. 63）

ＳＫ011土壙は遺構群の中では北側に位置する。平面は隅丸方形に近い楕円形で長径1.2m、短径0.9mを測る。深さ0.3mの床面に２個の小穴を持つ。壁は垂直にたつ。赤色顔料を施した弥生時代の高杯裾部の破片が出土している。

**ＳＫ013土壙**（Fig. 63）

ＳＫ013土壙はＳＫ011土壙の南東３ｍに位置する。平面は長径1.8m、短径0.85mの長楕円形で深さ0.15mと浅い。東壁に小穴がある。壁はほぼ垂直に近い。遺物は器台の体部の透し部分と思われる土器片が出土。弥生時代後期の時期であろう。

**ＳＫ014土壙**（Fig. 63）

ＳＫ014土壙は遺構群の最南に位置する。平面は不整楕円形で長径1.8m、短径1.0mを測る。西壁側に小穴を持つ。壁面は南側がレンズ状の断面で、北側はやや垂直気味にたつ。遺物は弥生時代の甕の小破片が出土している。

**ＳＫ015土壙**（Fig. 63）

ＳＫ015土壙はＳＰ003土壙墓の西３ｍに位置する。長径1.1m、短径0.7mの不整楕円形で深さは0.2mと浅い。弥生時代の甕の小破片が出土している。

## 3．遺　物（Fig. 64・65, PL. 30）

原田遺跡では縄文時代～古墳時代の遺物が出土しているが、包含層からの出土や小破片が多く、実測できた遺物は僅かである。

**ＳＪ001甕棺**（Fig. 64, PL. 30－4・5）

上甕は口縁部が打ち欠かれている。器体の最大径は胴部のやや上位にある。器体中位に刻み目を施す三角形の突帯を１条めぐらしている。器面調整は内外面ともハケ目調整である。下甕は逆Ｌ字形の外反する口縁部を持つ。器体最大径は胴部のやや上位にある。胴部中央部にコ字形の突帯を１条めぐらしている。底部は平底である。器面調整は外面に縦ハケ目、内面は横ハケ目、部分的にナデが施されている。

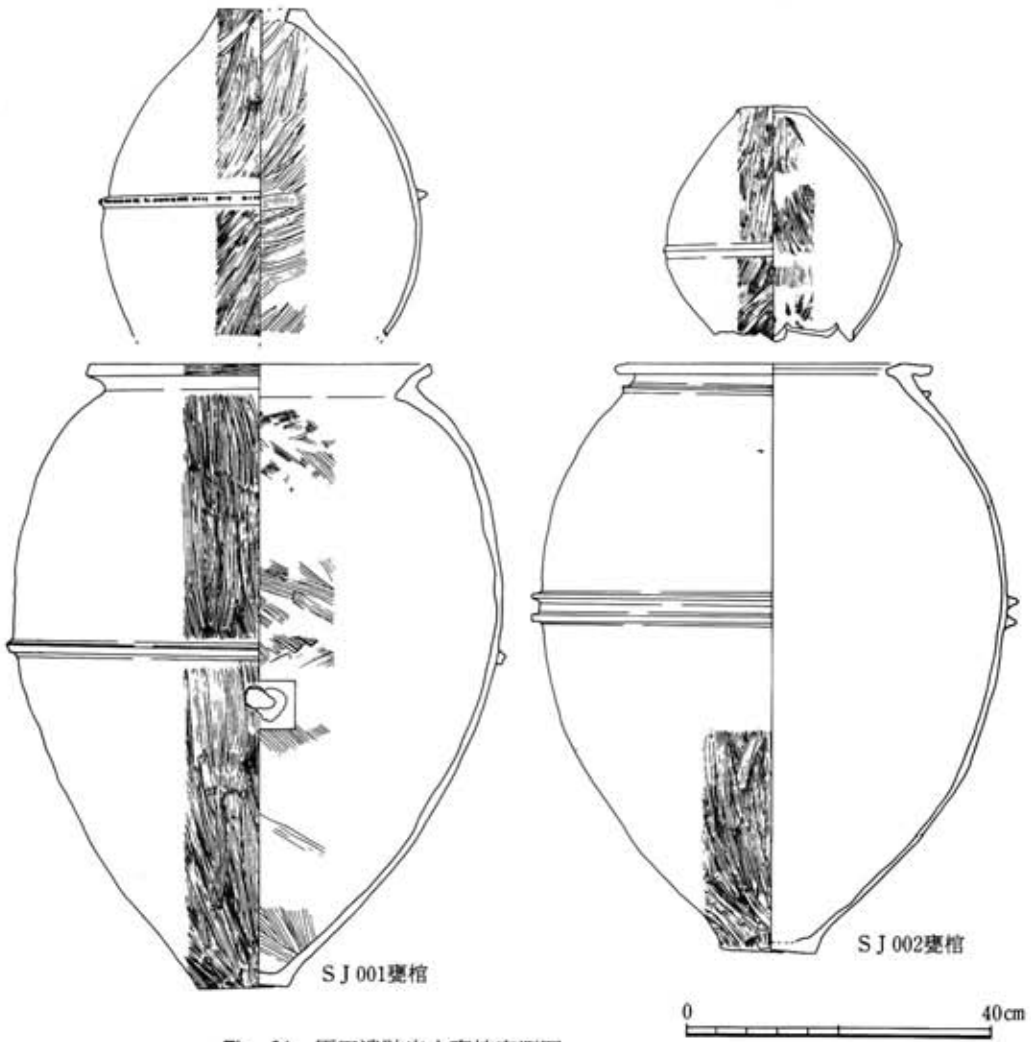



Fig. 64　原田遺跡出土甕棺実測図

**ＳＪ002甕棺墓**（Fig. 64, PL. 30－6･7）

上甕は口縁部が打ち欠かれている。胴部最大径は中央部にあり、断面三角形突帯を１条めぐらしている。底部は平底である。器面調整は外面、内面ともハケ目調整である。下甕は口縁内端がやや内傾するＴ字形である。器体は丸味を持ち、器体の中央部よりやや上位に胴部最大径がある。口縁部下位に１条と胴部最大径に２条のコ字形突帯をめぐらしている。底部は平底。器面調整は外面上部～胴部まではナデ調整、下部はハケ目調整を施している。

**甕**　口縁部１・２、底部４はＳＲ004祭祀遺構、５はＳＲ005祭祀遺構から出土した。

**鉢**　３はＳＲ004祭祀遺構から出土した。

**高杯**　６・９はＳＲ005祭祀遺構、７はＳＫ010土壙、９はＳＫ009土壙から出土した。

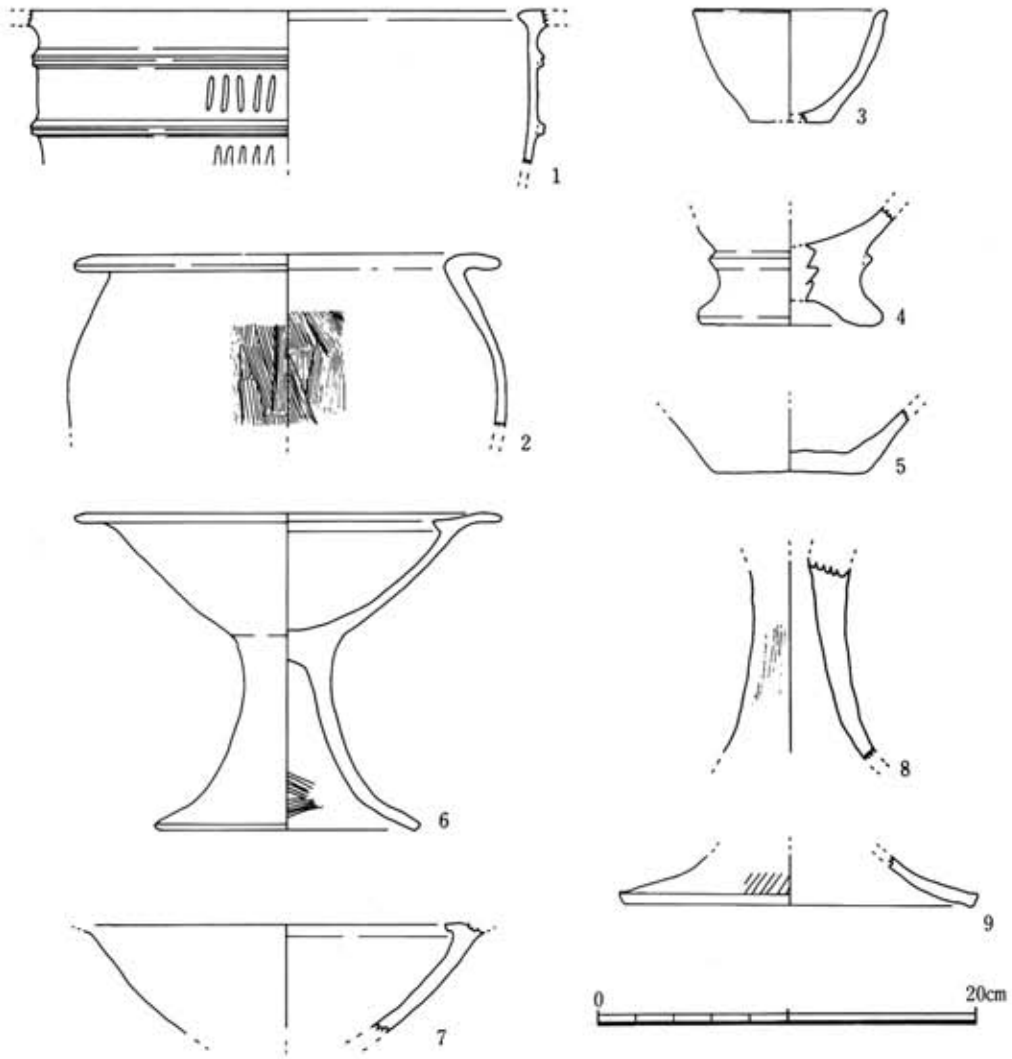



Fig. 65　原田遺跡出土弥生土器実測図

## 4．小　結

多久市内で縄文時代の遺構が検出されたのは原田遺跡が初めてである。遺跡の南東120mにある大工田遺跡では滑石粉末を混入した土器片が多量に出土しているが遺跡の広がりや遺構の性格は不明であった。原田遺跡のＳＫ012土壙の検出によって大工田遺跡の広がりを確認することができた。また弥生時代は牟田辺遺跡に代表されるように中期の遺構や遺物はかなり資料を増しているが、後期の遺跡はほとんど知られていなかった。原田遺跡をはじめ鴻ノ巣遺跡、撰分遺跡など九州横断自動車道および東多久バイパス関係の調査によって歴史の空白部を埋めることができた。

〔参考文献〕

「東多久バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」　佐賀県教育委員会　1984
「二塚山」　佐賀県教育委員会　1979
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第５集」　佐賀県教育委員会　1983

# Ⅸ　今出川Ａ遺跡

遺跡名：今出川Ａ遺跡（略号ＩＭＤ）

遺跡所在地：多久市北多久町大字多久原字大工田

# Ⅸ　今出川A遺跡

## 1．遺跡の概要

今出川A遺跡は天山山系の南、飯盛山（標高184m）山裾から延びた微高地上、標高33m前後の水田に位置する。遺跡周辺には早くから確認されていた遺跡や九州横断自動車道に係る発掘調査で明らかになった遺跡も多い。遺跡の北200mには大工田古墳群があり、北100mには今出川B遺跡、東200mに原田遺跡が存在していた。遺跡の南東300mには縄文時代中期～後期の土器片が出土する大工田遺跡があり、西400mに野田姫古墳が存在する。

遺跡は今出川の東、国道203号の南側にあり、今出川の氾濫によって大小の礫が流れ込み、僅かに残った微高地上に縄文時代の遺物包含層と古墳時代の住居跡が存在した。縄文時代の遺物は胴部に刻み目突帯が施された夜臼式土器の深鉢の小破片と思われ、石器は石鏃・石匙が出土、付近に縄文時代晩期の遺跡があったようだ。古墳時代の住居は3棟を検出したがSB001住居跡とSB002住居跡は複合住居跡であった。SB003住居跡は遺構の半分以上は削平を受けていた。

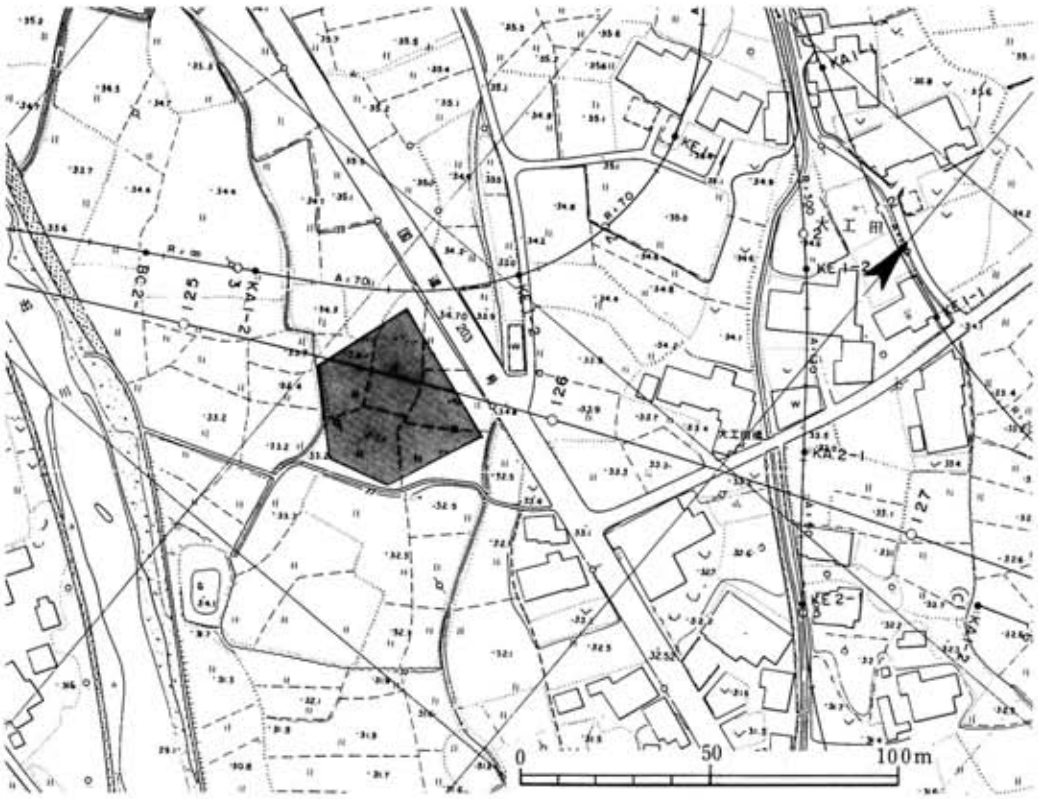



Fig. 66　今出川A遺跡周辺地形図

## 2．遺　構

古墳時代の住居跡3棟のうちSB001住居跡、SB002住居跡は複合住居跡で、SB002住居跡の中にSB001住居跡がすっぽり入った状態であった。SB001住居跡とSB002住居跡の床面の比高は約0.2mありSB001住居跡が低い。SB001住居跡の床面は全体に焼土と炭化木材が広がり、明らかに火災を受けていた。SB002住居跡はSB001住居跡を拡張し、埋土によって床面を造っていた。SB003住居跡は住居跡の大部分が削平され、全体の形態は不明でるあが、4m前後の方形住居跡と考えられる。遺物はSB001住居跡で土師器の壺、杯、器台が出土、5世紀初頭の所産と思われる。SB002住居跡では土師器高杯が出土、同時期であろう。SB003住居跡では土師器の壺と須恵器の破片が出土、6世紀の住居跡であろう。

**SB001住居跡**（Fig. 68, PL. 31－2）

SB001住居跡はSB002住居跡によって拡張されているため床面を残すのみである。床面の平面は長軸4.8m、短軸4.4mを測り正方形に近い。壁に沿って幅0.1～0.15m、深さ0.1mの溝をめぐらしている。北西壁の中央部と北東壁の中央部付近に2個ずつの小穴があり、深さ0.3mを測る。柱穴であろう。中央部から南東部側に4個の小穴があるが柱穴との関係は不明である。SB002住居跡が拡張される以前は約0.6mの深さを残していたようである。床面積は21.12㎡

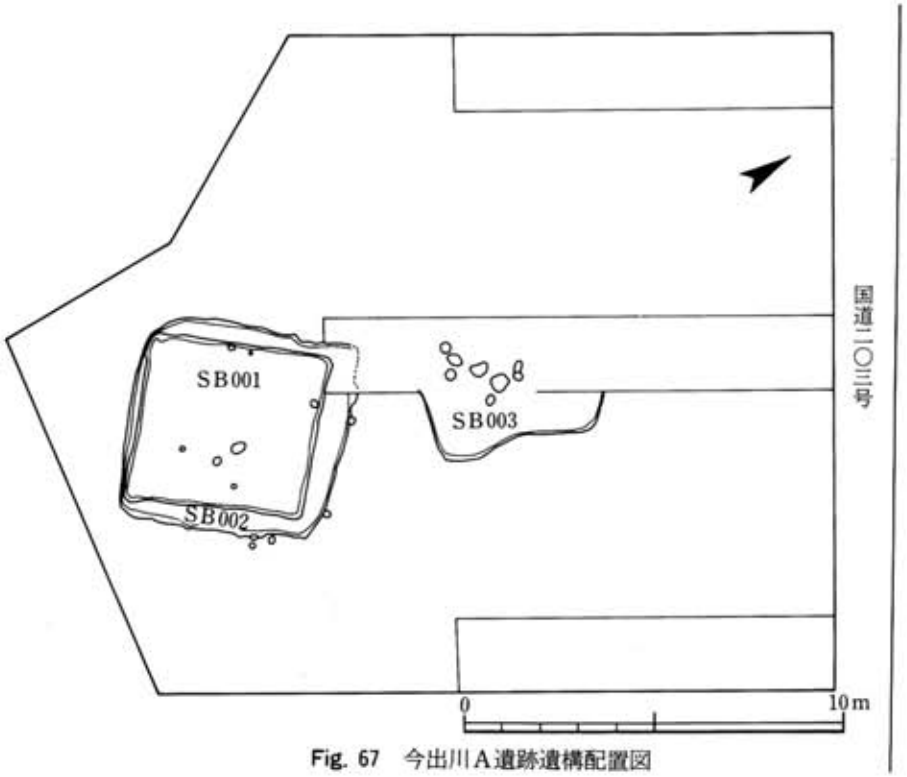



Fig. 67　今出川A遺跡遺構配置図

になる。

**ＳＢ002住居跡**（Fig. 68, PL. 31－2）

ＳＢ001住居跡が火災で焼失後、壁側を拡張して造った住居跡である。平面は長軸5.7m、短軸5.5mのほぼ正方形である。北東部で0.7m、北西部、南東部は0.5m、南西部は0.2m拡張している。ＳＢ001住居跡上部での床面は埋土と同じ土質であったため検出できなかった。床面が残る拡張部での壁高は0.2mを残す。推定される床面の深さは中央部で0.4mと思われる。北東と南東の壁外側に２個ずつの小穴があり柱穴であろう。床面積は31.35㎡である。

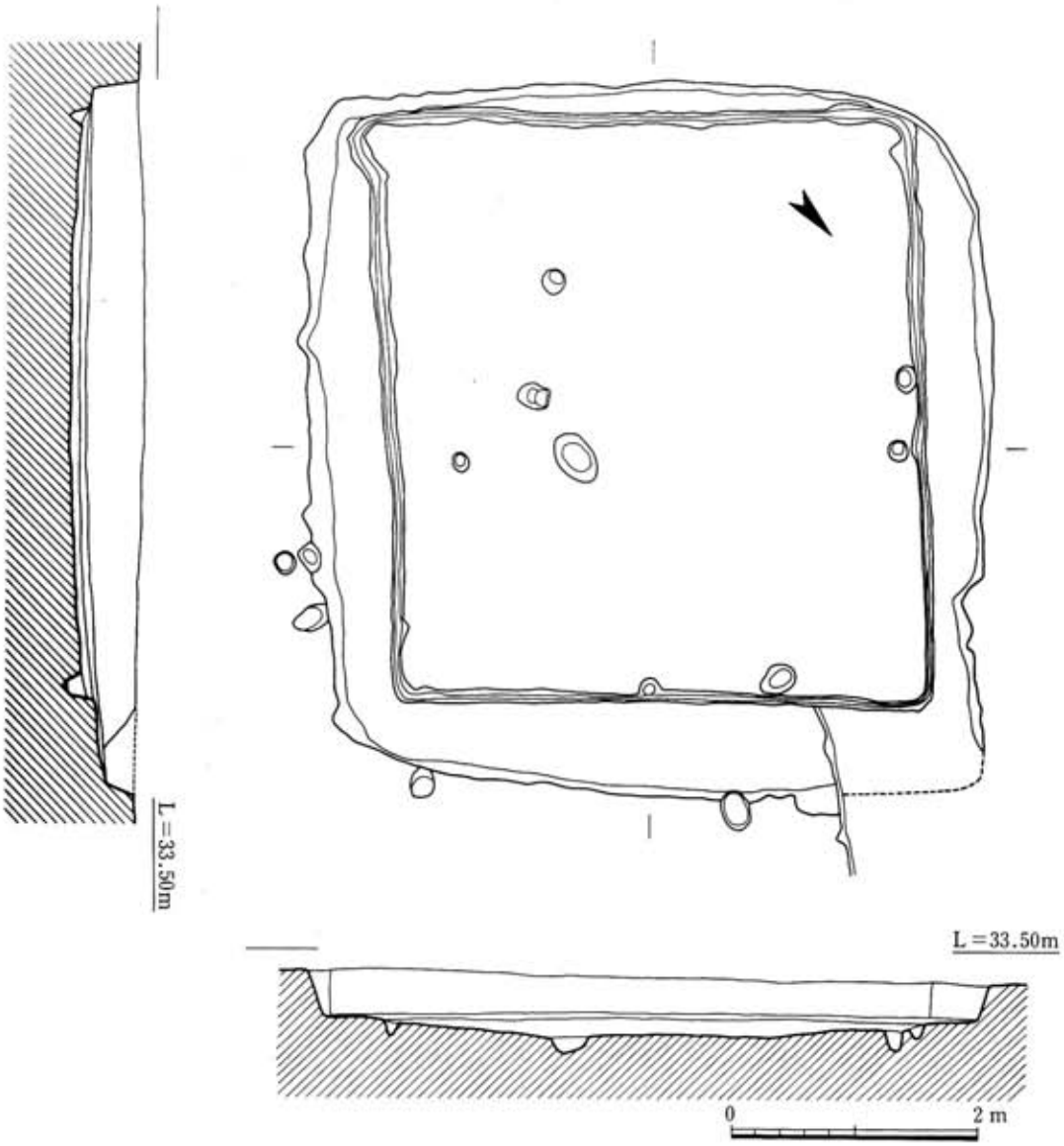



Fig. 68　今出川A遺跡ＳＢ001・ＳＢ002住居跡実測図

**SB003住居跡**（Fig. 69, PL. 32－1）

SB003住居跡はSB002住居跡の北5mに位置する。住居跡西側の大部分は削平され、東と南の壁と7個の小穴を残すだけである。住居跡の平面形は不明であるが、残存する壁から方形と思われる。東側に残る壁高は0.25mを測る。7個の小穴から柱穴を特定することはできない。

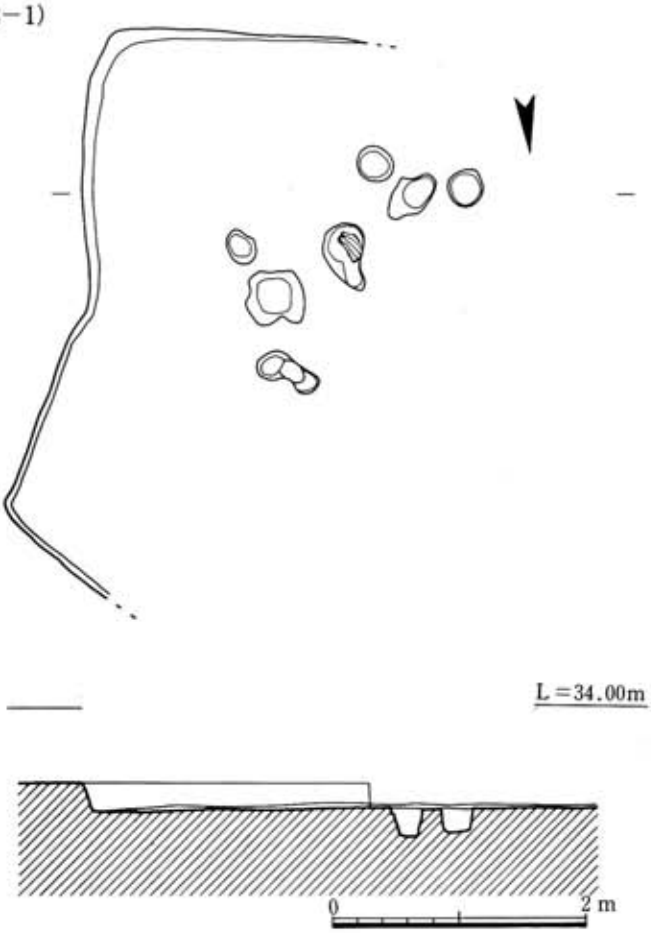



Fig. 69　今出川A遺跡SB003住居跡実測図

## 3．遺　物

今出川A遺跡から出土した遺物は黒色土が堆積した包含層から縄文時代晩期の夜臼式土器や条痕文土器の破片と石器がある。古墳時代の住居跡からは砥石や土師器の壺などが出土している。縄文時代の土器は小破片であるため図を省いた。

**土器**

**土師器**（Fig. 70, PL. 33, 34－1）

**壺**　1～3はSB001住居跡床面から出土した。6はSB002住居跡埋土中で出土、8はSB003住居跡床面からの出土である。3は球状の体部にく字形の口縁部を持つ。底部はやや尖り気味の丸底である。肩は張り、口縁部径より胴部最大径が大きい。口縁部はしまり気味に外反する。器面調整は口縁部外面は横ナデ、体部は縦ハケ目、下位は斜めハケ目。内面はナデ調整である。2は体部がやや偏平な球状で口縁部は外反し広がる。底部は丸底である。口縁部径が胴部最大径よりも大きい。外面はヘラミガキ調整。内面は横ナデ、底部はナデ調整。3は体部が球状でやや肩が張りく字形に外反する口縁を持つ。底部は丸底。口縁部径が胴部最大径よりやや大きい。体部にススが付帯している。6は体部が扁平な球状で口縁部は外反し大きく開く。底部は緩やかな曲線の丸底である。胴部最大径より口縁部径が大きく浅鉢状である。調整は外面がヘラミガキ、内面は口縁部が横ナデ、体部は横ハケ目、底部はナデ調整である。8は短く外湾気味に開く口縁部と、底部がやや尖り気味で球状の体部を持つ。胴部最大径が口縁部径よ

りも大きい。頸部と底部が厚い。調整は外面の口縁部が横ナデ、体部は縦ハケ目、内面は口縁部がハケ目、体部～底部はヘラケズリ調整である。

**杯**　4はＳＢ001住居跡床面で出土。底部は丸味を持ち、内湾しながら開く。磨耗が激しく調整は不明である。

**器台**　5はＳＢ001住居跡床面で出土。杯部は直線的に外反する。脚部も直線的に裾端部まで外反する。くびれ部の穿孔は垂直である。

**高杯**　7はＳＢ002住居跡埋土から出土した。杯底部は平坦で、体部はやや内湾気味に外反する。柱状部は中空で、裾部はく字形に開く。脚部下位に3孔を穿つ。

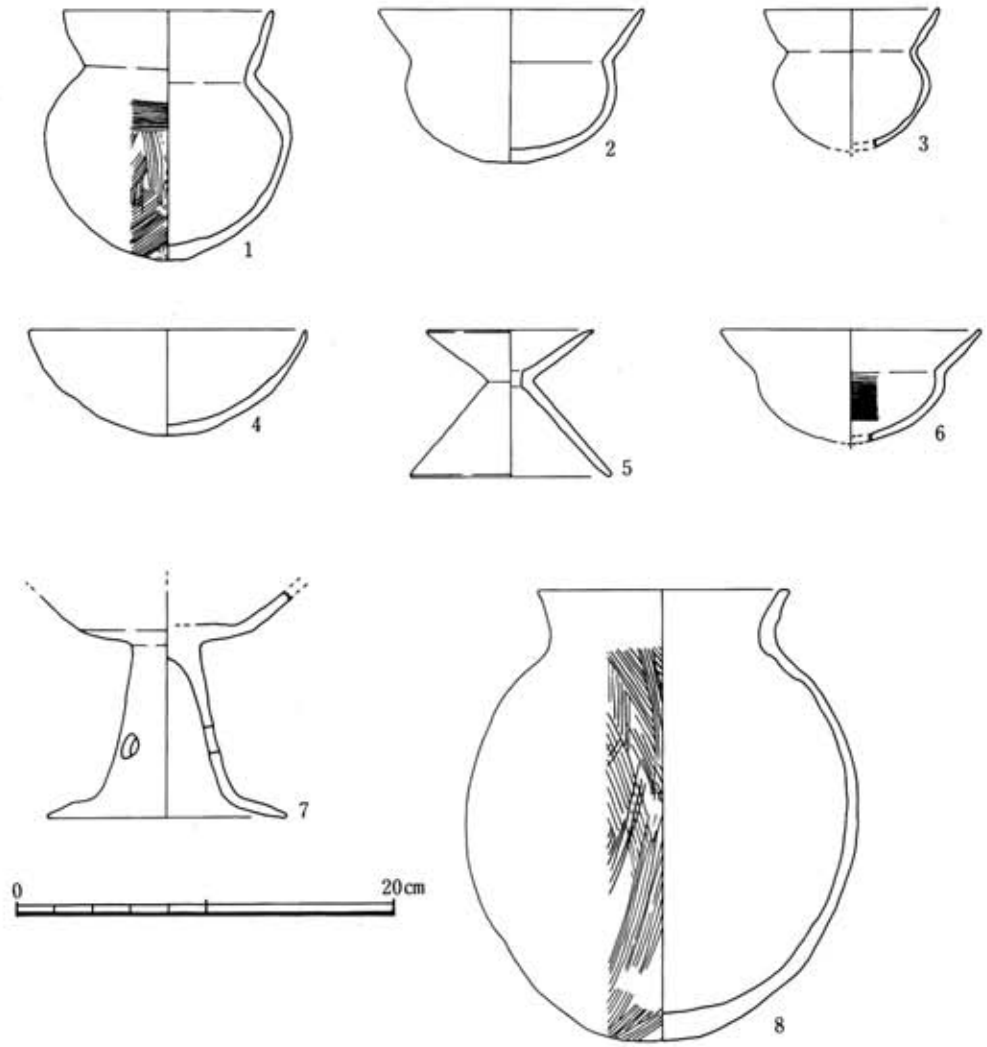



Fig. 70　今出川A遺跡出土土師器実測図

**石器**（Fig. 71・72, PL. 34－2・3）

今出川Ａ遺跡から出土した石器は包含層で石匙が1点とＳＢ002住居跡埋土から砥石がある。

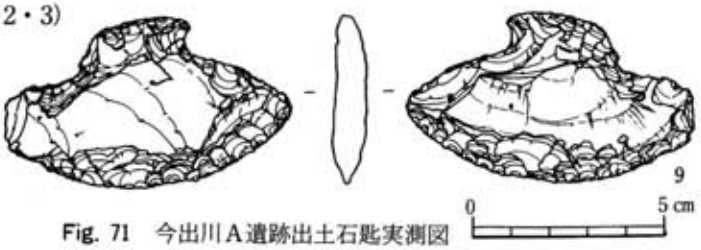



Fig. 71　今出川Ａ遺跡出土石匙実測図

**石匙**　9は横長の剝片を素材とし、主要剝離面を残す。刃部の背にある大きなつまみが打瘤痕を除去している。つまみにも刃部と同じ剝離を加え、全面が刃部のように丁寧に剝離されている。石材に良質のサヌカイトを用いている。縄文時代後期の石匙であろう。

**砥石**　10は遺構検出中に2点に折損した。4面を使用したため中央部は細く擦り減っている。使用面以外に稜線部は角を取るためか擦られている。使用時の擦痕は縦上下使用が主であるが、部分的に斜めに使用の痕も残る。使用時に一部が剝がれているが、剝がれた部分にも擦痕が残る。粘板岩を用いている。表面に砂と鉄分が付着している。

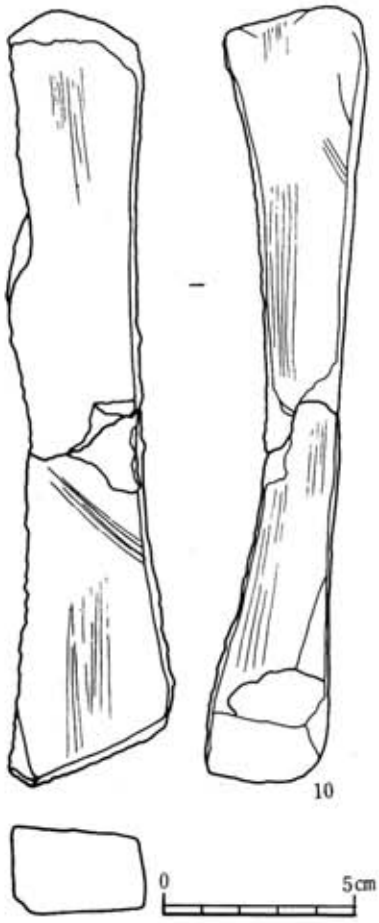



Fig. 72　今出川Ａ遺跡出土砥石実測図

## 4．小　結

今出川A遺跡は今出川の氾濫を幾度となく受けた水害の常習地帯であり、遺跡の立地条件はかならずしも良いとはいえない。調査の結果、僅かに残った微高地を選び古墳時代前期の住居を建てていた。古墳時代の住居跡は市内ではこれまで知られていなかった。今出川A遺跡の調査以降、撰分遺跡、摺ケ本遺跡などで同時期の住居跡の発掘が続き、膨大な資料を得る結果となった。ＳＢ001住居跡は火災住居跡であり、火災住居跡を拡張してＳＢ002住居跡を建てたことなど興味深いものである。

〔参考文献〕

「塚堂遺跡Ⅰ」　福岡県教育委員会　1983
「塚堂遺跡Ⅱ」　福岡県教育委員会　1984
「塚堂遺跡Ⅲ」　福岡県教育委員会　1984
「西原遺跡」　佐賀県教育委員会　1983
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第４集」　佐賀県教育委員会　1981

# X　今出川Ｂ遺跡

遺跡名：今出川Ｂ遺跡（略号ＩＭＤ－Ｂ）
遺跡所在地：多久市北多久町大字多久原字柳原

# X　今出川B遺跡

## 1．遺跡の概要

今出川B遺跡は天山山系の南、飯盛山（標高184m）山裾から延びた微高地、標高35m前後の畑地と宅地に所在し、正確には多久市北多久町大字多久原字柳原にある。遺跡周辺には九州横断自動車道に係る発掘調査を実施した遺跡も多い。南東220mに原田遺跡、南100mに今出川A遺跡、北西150mに大工田古墳群などの遺跡が立地する。

今出川B遺跡は周辺の水田よりやや高い宅地と畑地の地下約1mで検出した。調査区一帯は今出川の上流からの氾濫を受け0.3～0.5mの円礫と土砂で埋っていた。遺構は不整形土壙と小穴群であるが掘立柱建物跡や土壙墓、井戸などの遺構は検出できなかった。遺物は弥生時代の甕の口縁部や底部、須恵器の杯、杯蓋、土師器杯、杯蓋などが主であったが、注目される遺物として製塩土器といわれる内面に布痕がつく円筒形土器やふいごの羽口が出土した。遺物から8～9世紀の遺跡と思われる。

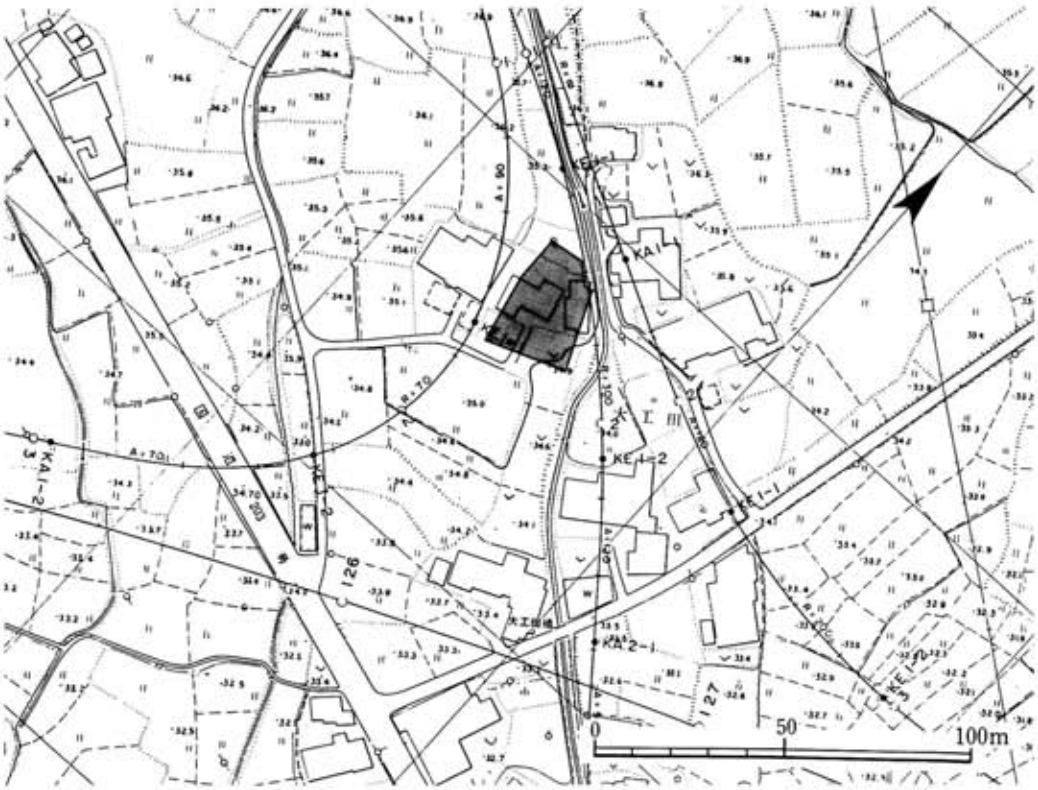



Fig. 73　今出川B遺跡周辺地形図

## 2．遺　構

今出川B遺跡での遺構はほとんどが小穴と不整形土壙であった。広い面積を持つ土壙は浅く、小穴群も不整形で、遺構の性格を明らかにすることができなかった。

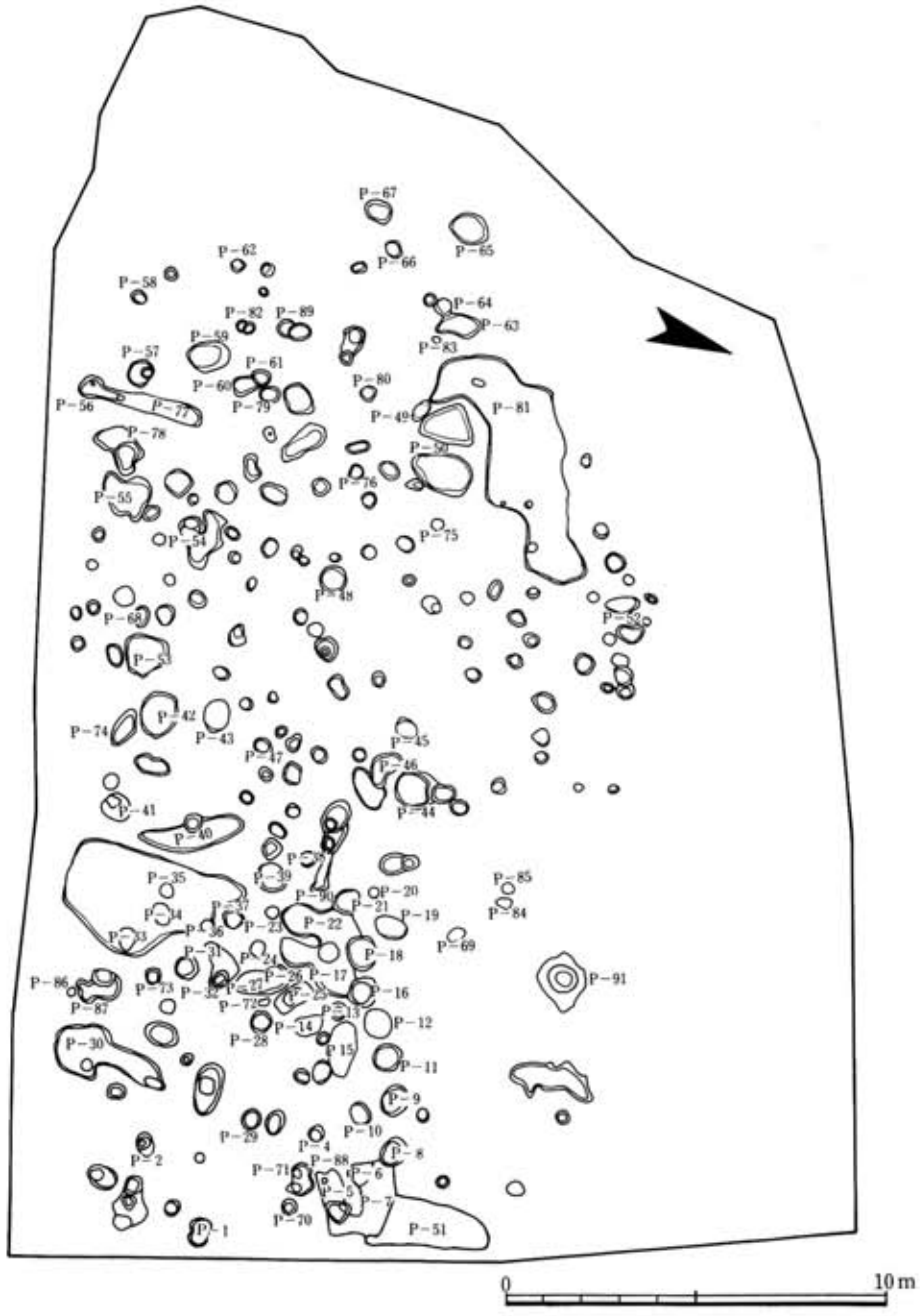



Fig. 74　今出川B遺跡遺構配置図

## 3．遺　物

今出川B遺跡で出土した遺物は弥生時代の甕や須恵器の杯蓋・杯・皿・土師器の杯・皿などでほとんどが土壙や小穴群から出土した。石器は紡錘車が1点出土している。

**土器**

**弥生土器**（Fig. 75, PL. 36）

**甕**　1・2は逆L字形の口縁部を持つ。1は口縁部の外側がやや下る。体部は内側にしぼみ気味である。外面は縦ハケ目、内面はナデ調整である。2は口縁部が平坦で、体部はやや外に張る。外面は縦ハケ目、内面はナデ調整である。3～9は平坦な底部からやや外反しながら体部に開く。3～5・7・9は外面縦ハケ目、内面ナデ調整、6・8は内外面ともナデ調整である。

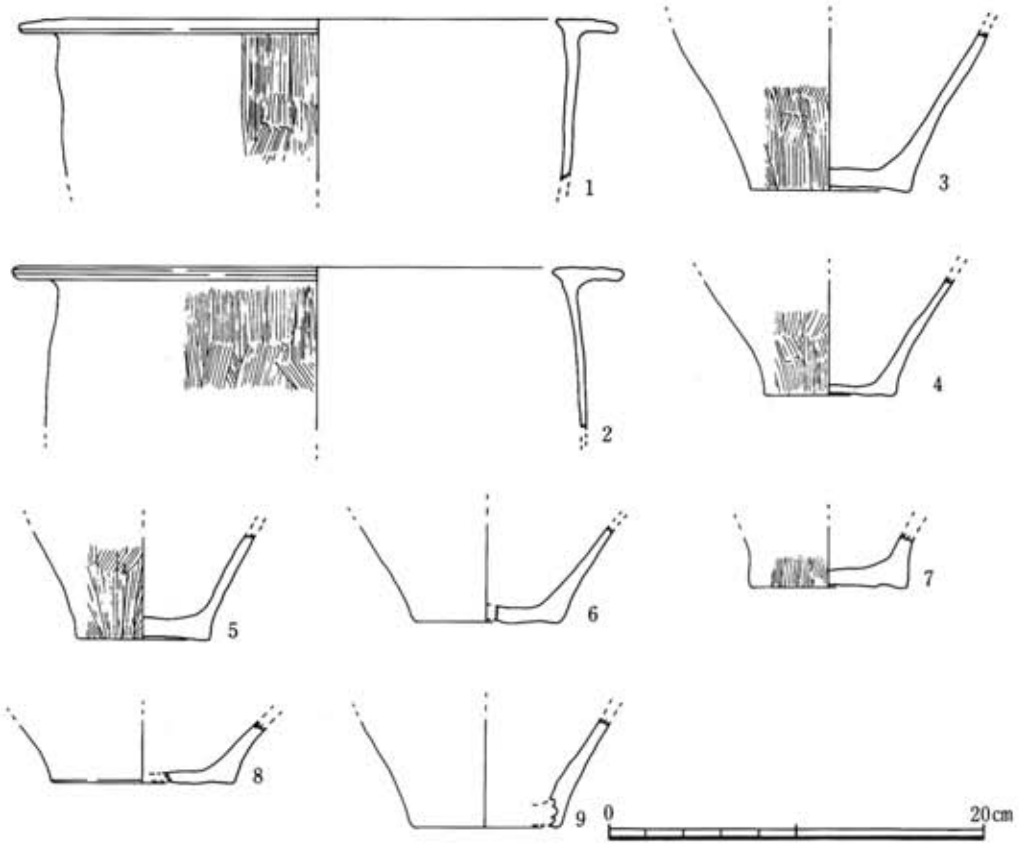



Fig. 75　今出川B遺跡出土弥生土器実測図

**須恵器**（Fig. 76・77，PL.37～40・42－53）

**杯蓋**　復元口径13.0～18.6cmを測る17個のうち12～14・19・25の5点は天井中央部を欠損しているがすべてつまみを持つものと思われる。10～15・25は体部がやや丸味を持ち、内湾気味

に開く。10・14は口縁端部がく字形、11～13・15・25は「嘴」状になる。天井部に平らな擬宝珠状つまみを有する。16・17は天井部に擬宝珠状つまみを持ち、体部はやや丸味がある。口縁端部は「嘴」状である。18～20・22・26は天井部が平坦で体部はやや外反気味に開く。22以外は口縁端部が「嘴」状である。天井部に擬宝珠状つまみを有する。21・23は天井部が平坦で、体部は緩やかに口縁部まで延びる。器高は2㎝内外である。天井部に小さなつまみを持つ。24は天井部が平坦で体部は段がつき、口縁部はく字形になる。天井部に擬宝珠状つまみを有する。11・13・16・17・22はナデ調整。他はヘラ切りとナデ調整、内面はすべてナデ調整である。

**杯**　27～36は高台を持つ杯である。底部は平坦で、体部は外反気味に開く。29～31は体部下位にヘラ切りがみられるが、内外面ともナデ調整が施されている。38～46は高台を持たない杯である。底部は平坦で体部外面下位に丸味を持ち外反しながら開く。底部にヘラ切り離しが残る。

**皿**　37は高台を持ち、47～52は高台がない。37は底部が平坦で体部は屈曲し外反しながら開く。底部に高台を持つ。47は平坦な底部が体部下位で下がり、外反して開く。48～51は平坦な底部で体部下位は丸味を持ち外反気味に開く。52は平坦な底部で、体部下位は角を持ち外反気味に開く。48を除き、底部はヘラ切り離し後、ナデ調整を施している。

**壺**　53は長頸壺で蔵骨器に使用されたと思われる。肩部が張り体部との境は断面三角形に尖る。肩部中央に断面三角形の貼り付け突帯が施され、頸部を除き、叩きの後、ナデ調整をしている。底部に高台をつくり出している。頸部や体部に自然釉が残る。

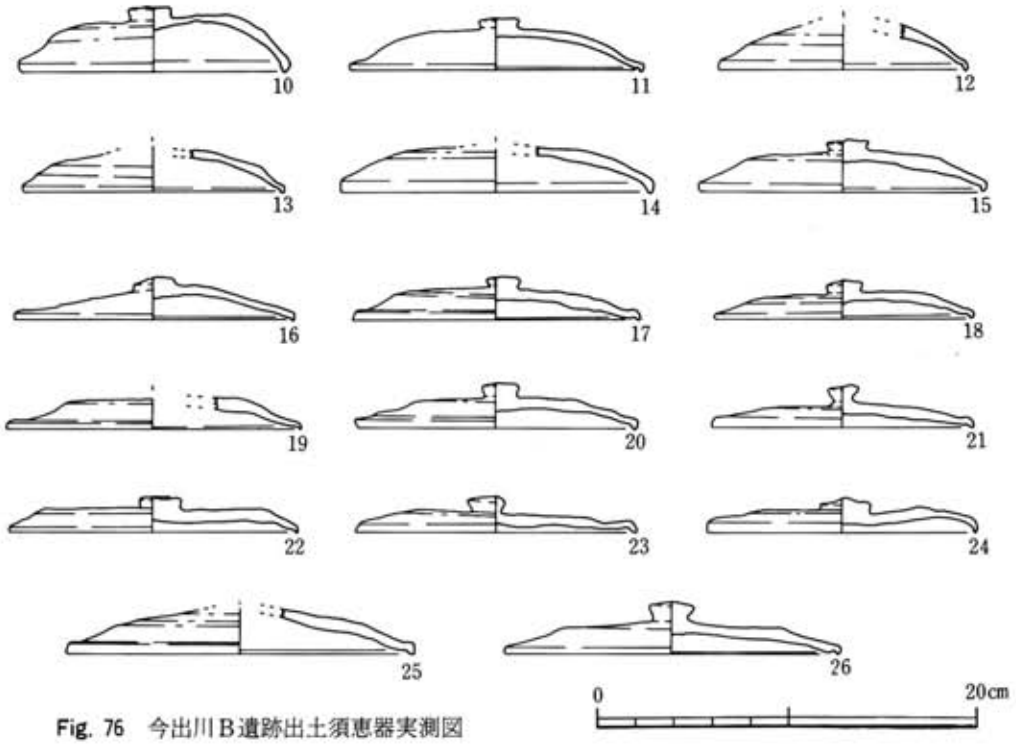



Fig. 76　今出川B遺跡出土須恵器実測図

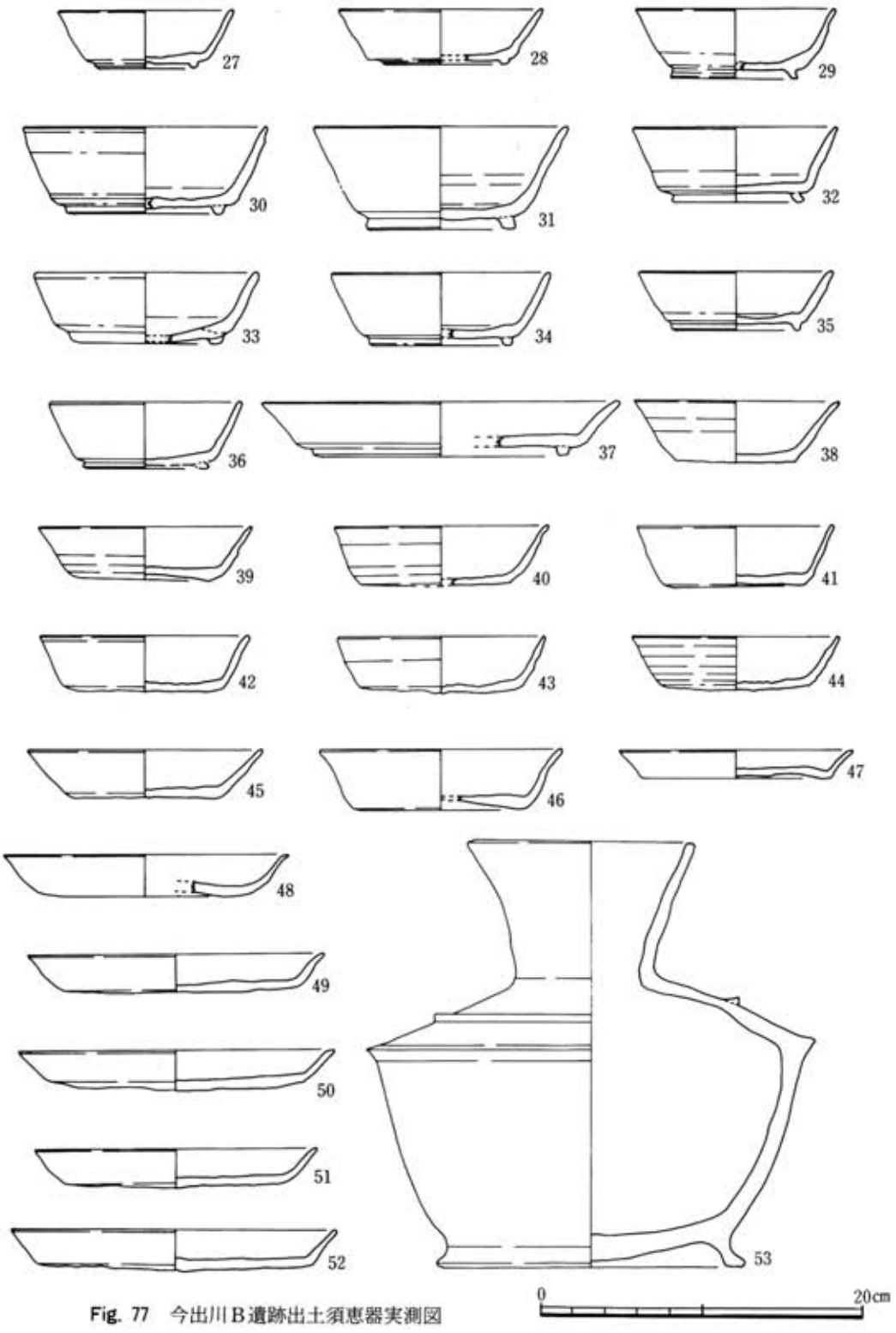



Fig. 77　今出川B遺跡出土須恵器実測図

**土師器**（Fig. 78・79, PL. 41・42－59・63・65・67）

**杯**　54～58・61は高台を持つ。59・60・62は高台を持たない。54～56は平坦な底部から体部下位は丸味を持ちやや外反気味に開く。底部に高台を持つ。57・58・61は大形で器高も5.4～6.1cmと高い。底部は平坦で体部下位は丸味を持ち、外反して開く。底部に高台を持つ。ヘラ切り離しが底部に残る。器内外面ともヨコナデ調整である。椀と呼ばれるものと同じである。59・60は底部は平底で体部は丸味を持ち、外反しながら開く。外面は底部から体部下位までヘラケズリ、体部～口縁部と内面は横ナデ調整。62は底部が平底、体部は外反し外に開く。底部はヘラ切り離し。内外面とも横ナデ調整である。

**皿**　63は平坦な底部を持ち、体部下位は丸味がありやや外に開く。底部はヘラ切り離し。体部下位の丸味はヘラケズリ。上位と内面は横ナデ調整をしている。64は平坦な底部から体部は外反し、外に開く。底部はヘラ切り離し。内外面とも横ナデ調整をしている。

**ふいご羽口**　2点が出土したが、高温を受けているため破損が著しい。65は復元すると外径は長径6.3cm、短径5.9cm、内孔の長径3.5cm、短径2.7cmを測る。66は外径7.1～7.6cm、内孔4.5cmと丸い。

**円筒形土器**　67は内面に布目痕を持つ円筒形で約3分の1が残存した。製塩土器として使用されたといわれている。復元すると口縁部下の最大直径は12.8cmを測る。下部は細まり尖底状になると思われる。芯を抜き取ったあと口縁部を内側に押さえている。外面体部は指による押圧のあとが残る。

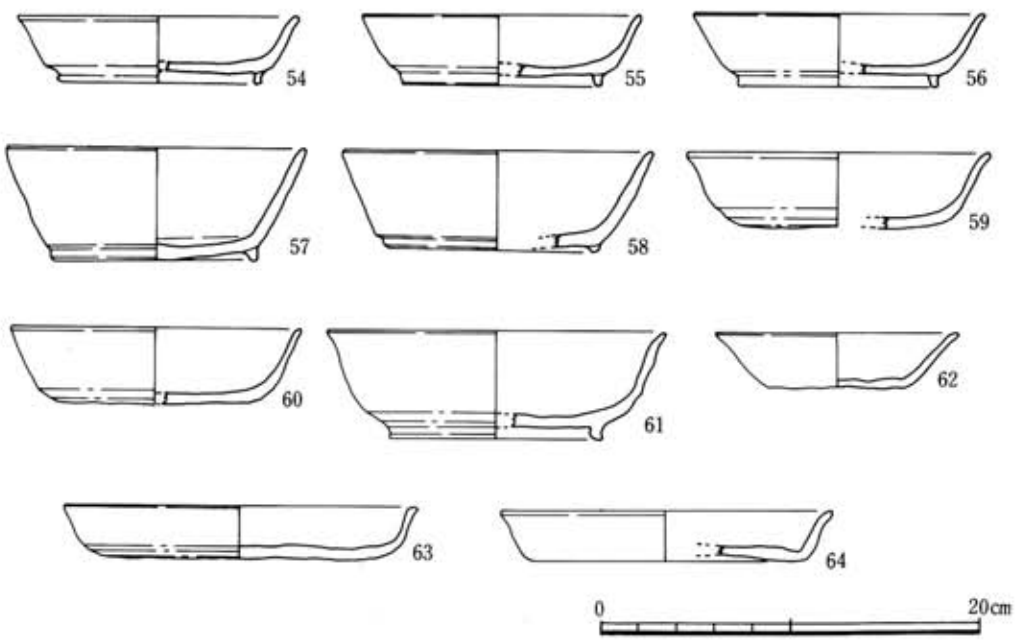



Fig. 78　今出川B遺跡出土土師器実測図

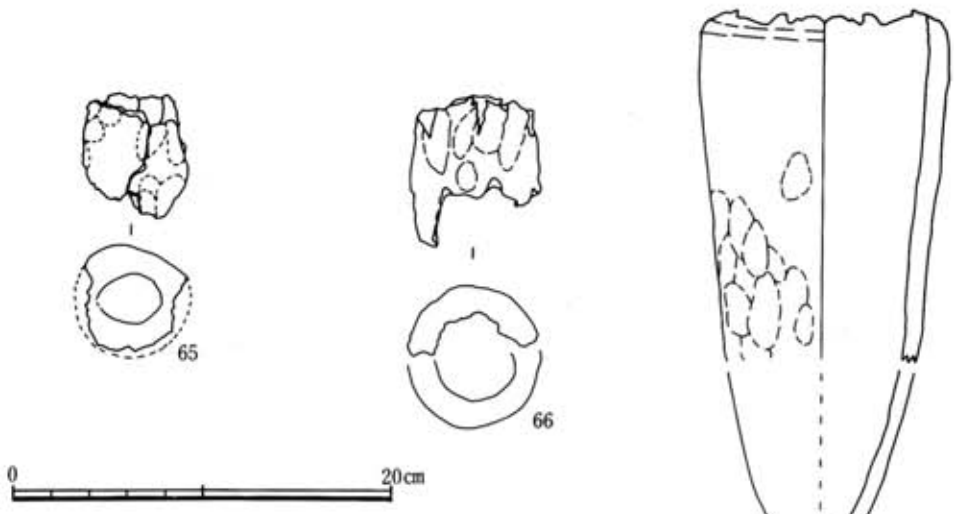



Fig. 79　今出川B遺跡出土ふいご羽口・円筒形土器実測図

Fig. 80　今出川B遺跡出土円筒形土器拓影

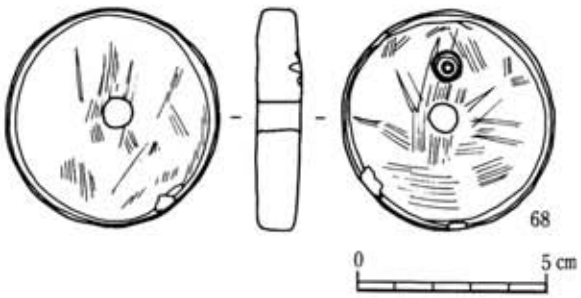



Fig. 81　今出川B遺跡出土紡錘車実測図

**石器**（Fig. 81）

**紡錘車**　直径5.5～5.7cm、厚さ1.2cm、孔径0.8cmを測る。縦、横、斜めの擦痕が残る。穿孔は両面からである。片面に穿孔中途の跡が残る。

## 4．小　結

今出川B遺跡は今出川の氾濫を幾度も受け、遺跡の立地条件は悪いと考えていた。遺跡の範囲は狭かったが、割とまとまりを持つ遺跡であった。8～9世紀の須恵器や土師器は、これまで市内で出土した例はなく、今出川B遺跡の発掘によって膨大な資料を得た。特に内面に布目痕を有する円筒形土器は製塩土器といわれ注目される。またふいごの羽口が2個出土し鍛冶が行われていた事を立証した。今出川B遺跡の性格は個的な遺跡ではなく公的な性格を持つ遺跡との見方ができよう。

〔参考文献〕

「みやこ遺跡」　武雄市教育委員会　1986
「茂手遺跡」　武雄市教育委員会　1986
「肥前国府跡Ⅱ」　佐賀県教育委員会　1981
「肥前国府跡Ⅲ」　佐賀県教育委員会　1985
「筑後国府跡」　久留米市教育委員会　1986
「太宰府条坊跡Ⅲ」　太宰府市教育委員会　1984
「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第5集」　佐賀県教育委員会　1983

# Ⅺ　大工田古墳群

遺跡名：大工田古墳群（略号ＤＩＫ）
遺跡所在地：多久市北多久町大字多久原字大工田

# XI　大工田古墳群

## 1．遺跡の概要

大工田古墳群は天山山系の南、飯盛山（標高184m）山裾から延びた微高地、標高38m前後の宅地に所在し、正確には多久市北多久町大字多久原字大工田にある。遺跡周辺には早くから知られていた遺跡や九州横断自動車道に係る発掘調査を実施した遺跡が多くある。東150mに今出川Ｂ遺跡、350mに原田遺跡、南東200mに今出川Ａ遺跡、南西350mに野田姫古墳、南東450mに大工田遺跡が所在する。

大工田古墳群はかなり以前から知られていたが、多久市教育委員会保管の遺跡台帳には、4基の古墳からなる古墳群で、今回調査を実施したＳＴ001、ＳＴ002古墳と北東約200mにある3・4号墳から成っていた。今回の調査中に3・4号墳の確認を試みたが存在しなかった。昭和51年2月調査の遺跡台帳には3号墳の規模について横3.7m、長さ4.4m、羨道1.1mで腰石だけが残っていたと記され、4号墳は腰石3個を残すのみの破壊古墳であったと報告されている。

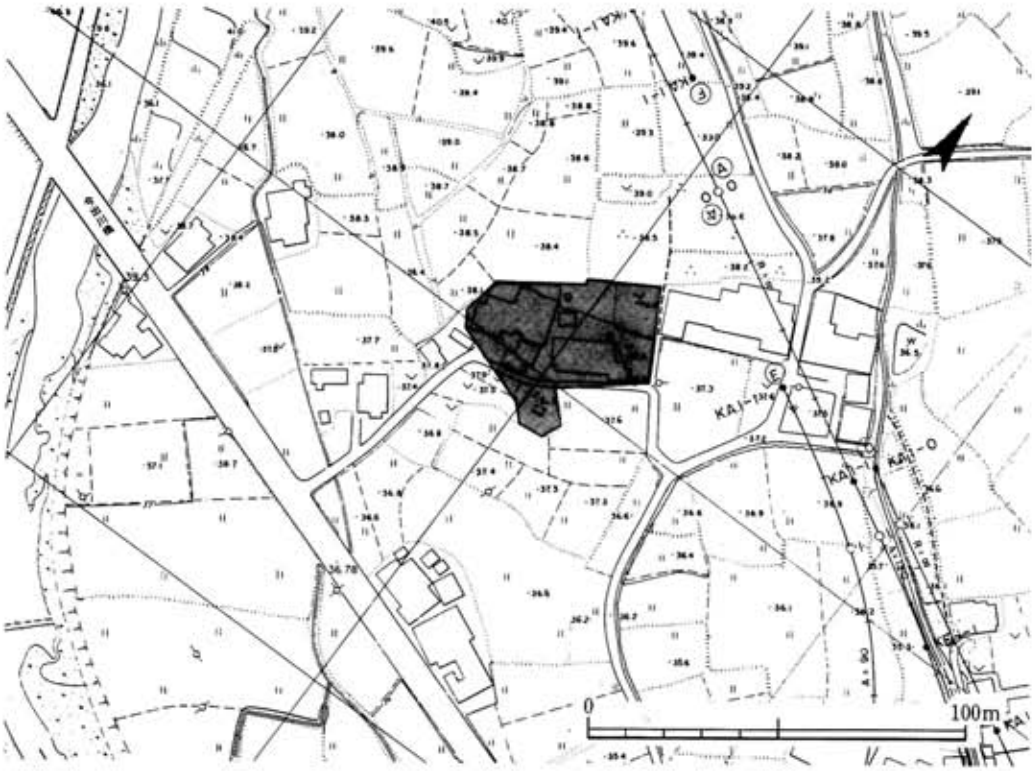



Fig. 82　大工田古墳群周辺地形図

今回の調査でＳＴ001、ＳＴ002古墳の北20mの石塚の下に存在した古墳をＳＴ005古墳とし３基の古墳が調査の対象となった。

## 2．遺　構

**ＳＴ001古墳**（Fig. 84・85, PL. 43−2・44−1・2）

ＳＴ001古墳は宅地の一角にあり、樫の巨木が古墳を覆っていた。古墳には瓦礫や廃材が山積され、相当の破壊が予想された。墳丘や石室上部は破壊され、石室前面も道に使用され羨室の約半分は削平されていた。遺物は玄室・羨室で須恵器杯、杯蓋、短頸壺などの土器と管玉、耳環の装身具、馬具、刀子、鉄鏃などの鉄器が出土した。石室前面の道に使用されている土壙か

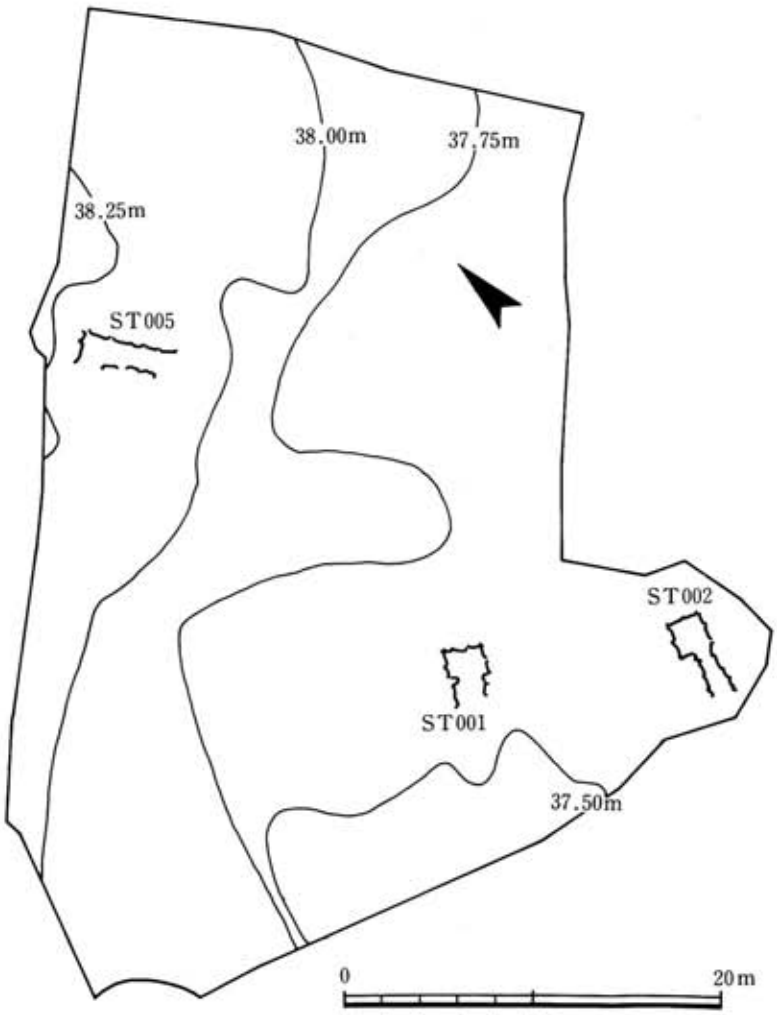



Fig. 83　大工田古墳群遺構配置図

らは須恵器杯、杯蓋、高杯、平瓶や土師器の高坏、短頸壺が出土した。出土した遺物から6世紀後半の築造であろう。

**墳丘**　人家の近くで、早くから破壊され、石室の周辺は宅地として使用されていたため、墳丘は削平され、周溝も検出できなかった。

**内部主体**　複室両袖型の横穴式石室である。主軸の方向をS40°Wにとり、南西に開口する。石室の上部は破壊されていたが、石室の遺存状況は良かった。石室の掘り方は馬蹄形で、残存する主軸長は3.8m、奥幅3.7m、前幅2.6mを測る。深さは奥壁側で0.8m、羨室側で0.5mを掘っている。石材は地元で今出川石と呼ばれている円礫の閃緑岩を用いている。玄室は中央長1.4m、幅2.1mの横長の長方形である。袖石は円礫を2段積みしている。梱石は長さ0.7m、幅0.3mの石を用い右側は小礫2石で補っている。羨室は前面が破壊され長さは不明であるが残存する長さは1.5m、幅1.7～1.8mあり、羨室の幅は広い。羨道は除去されていた。玄室から羨室までは0.1～0.3mの扁平な円礫を選び敷石としていた。石室前面の遺物出土地点との距離は残存する羨室の端から3mを測る。

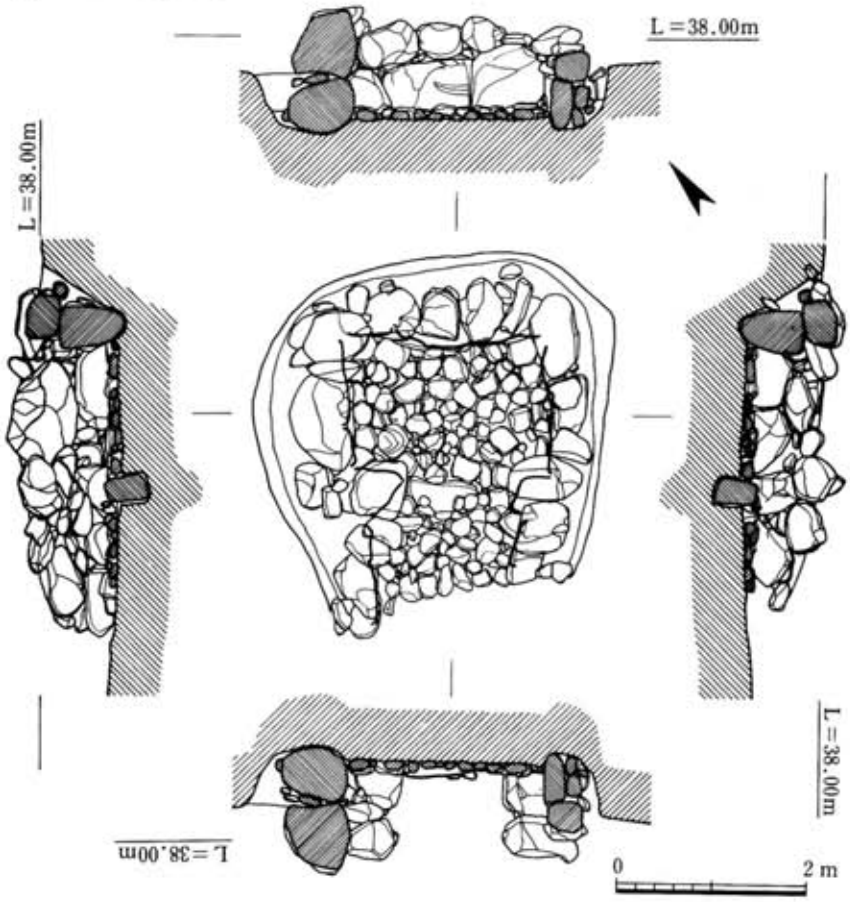



Fig. 84　大工田古墳群ST001古墳石室実測図

**石室前面祭祀遺構**　玄室奥壁から5.7m、羨室残存部から３mの石室前面にある長さ1.75m、幅1.1m、深さ0.6mの不整楕円形の土壙である。土壙内には0.1～0.3mの円礫が土壙上面に敷かれ、須恵器杯、杯蓋、高杯、平瓶、土師器の高杯、短頸壺が小破片で出土した。前庭部や墓道と呼ばれる場所であり、ＳＴ001古墳の被葬者に対する供養などが行われた祭祀遺構である。

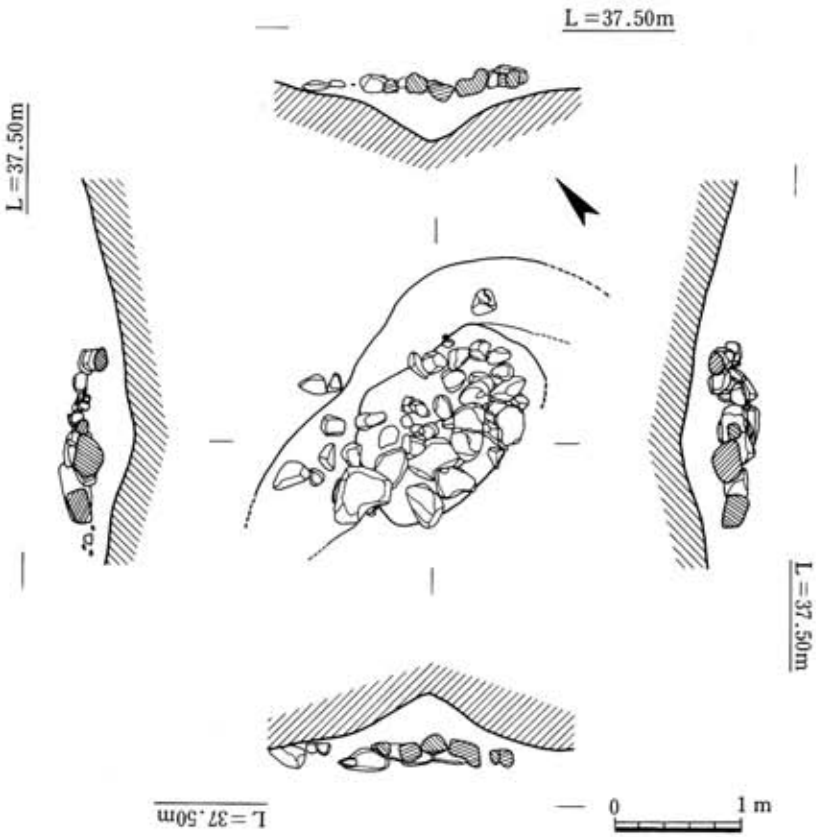



Fig. 85　大工田古墳群ＳＴ001古墳石室前面祭祀遺構実測図

**ＳＢ002古墳**（Fig. 86, PL. 45－1）

ＳＢ002古墳はＳＢ001古墳の東10mに位置し、宅地の一角、水田部との境に円形に残っていた。石室上部は破壊され、石室内は0.1～0.2mの礫が混入、敷石より上部で白磁椀や中世の土師器杯が出土。敷石上で鉄刀、鉄鏃、刀子、鉄斧、馬具が出土、羨道～石室前面で須恵器杯、杯蓋、𤭯などが出土。遺物から６世紀後半の築造と思われる。白磁などの遺物は鎌倉時代に追葬または供養が行われたと考えられる。

**墳丘**　円形に残っていた盛土は上部が攪乱され、墳丘も削ぎ取られ規模は小さくなっていた。残存する墳丘の直径は８m、高さ1.5mを測る円墳であった。盛土は部分的に版築されていた。葺石は施されていなかった。周溝は調査区内では検出できなかった。

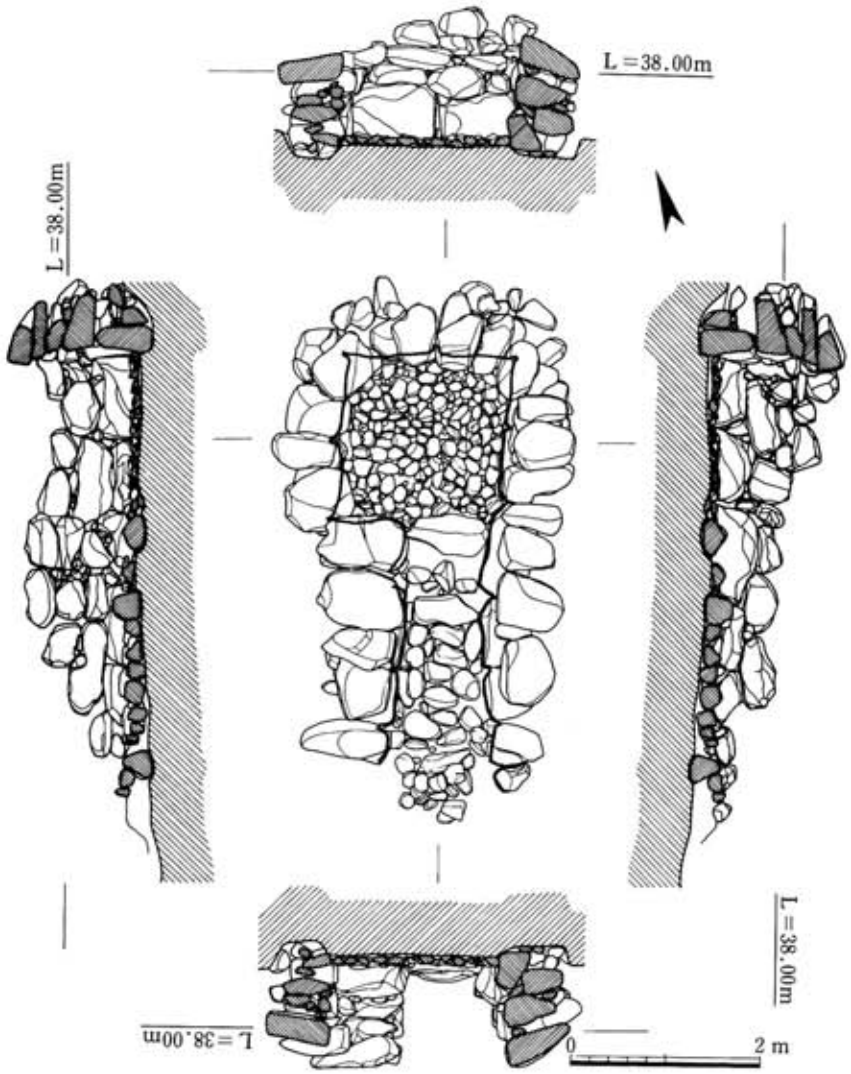



Fig. 86　大工田古墳群ＳＴ002古墳石室実測図

**内部主体**　単室片袖式の横穴式石室を有し、主軸方向をS20°Wにとり、やや南に開口する。石室の掘り方は調査区域が限定され、確認できなかった。玄室の中央長は1.7m、幅1.7mのやや歪んだ正方形である。袖石は長さ0.8m張り出す。梱石は1石を用いている。羨道は右側が玄室からほぼ直線的に延び、左側は袖石に並び、長さ2.8m、幅は袖石部で0.9m、閉塞部で1.1mとやや外に広がる。玄室内には0.1～0.2mの扁平な礫を用いて敷石を施している。羨道部～閉塞部は0.3m前後の円礫を用いて敷き詰めているが凹凸が目立ち、閉塞施設との区別は困難である。石室の石組は今出川産の閃緑岩を用いているため不安定であるが石材の選定は厳しく、角張った円礫を多く用いている。片袖型の古墳は多久市では唯一のものである。

**ＳＴ005古墳**（Fig. 87, PL. 45－2）

ＳＴ005古墳はＳＴ001古墳から北に25mの宅地の一部に所在し、北側は水田との境界となる。水田や宅地から掘り出された礫や廃材が捨てられ、古墳と判断するのに時間を要した。3基の古墳のうち保存状況は最も悪かった。遺物は玄室内で須恵器杯、杯蓋、鉄鏃、刀子が出土、羨道～閉塞部では須恵器杯・杯蓋・短頸壺・𤭯・提瓶・土師器杯・杯蓋・高杯・瓦器椀が出土した。遺物から古墳の築造は6世紀後半と思われる。

**墳丘**　宅地の一部として利用されたため、墳丘は削平され、墳形および規模は不明である。葺石、周溝とも検出できなかった。

**内部主体**　腰石は玄室の右側壁から羨道までほぼ一線に並ぶのに対し、左側壁は腰石の一部が動かされていたが、羨道部が狭くなることから梱石左の側壁腰石が袖石を兼ねていると思われ、単室片袖型の横穴式石室と判断した。主軸方向をS31°Eにとり南西に開口する。石室の掘り方は腰石部分だけを掘り込んでいる。玄室の中央長は1.8m、左側壁腰石が抜かれていたため正確な幅はわからないが約1.5m前後であったと思われ長方形である。羨道部は長さ2.9mを残し、幅は1.1～1.2mを測る。梱石は2石を用いている。敷石は玄室内に0.1～0.3mの扁平な礫を敷き詰めている。羨道では確認できなかった。

## 3．遺　物

大工田古墳群の3基の古墳から出土した遺物は古墳時代と鎌倉時代に限られる。古墳時代の遺物には須恵器・土師器などの土器類、鉄剣・鉄鏃・刀子・馬具などの鉄器類、管玉・耳環などの装身具がある。鎌倉時代の遺物は白磁椀・土師器杯・椀がある。

**ＳＴ001古墳**

遺物は玄室で須恵器杯・鉄鏃・刀子・管玉・耳環が出土。羨室から須恵器杯・杯蓋・短頸壺・馬具・管玉・耳環が出土。石室前面から須恵器杯・杯蓋・蓋付高杯、平瓶、土師器杯・杯蓋・

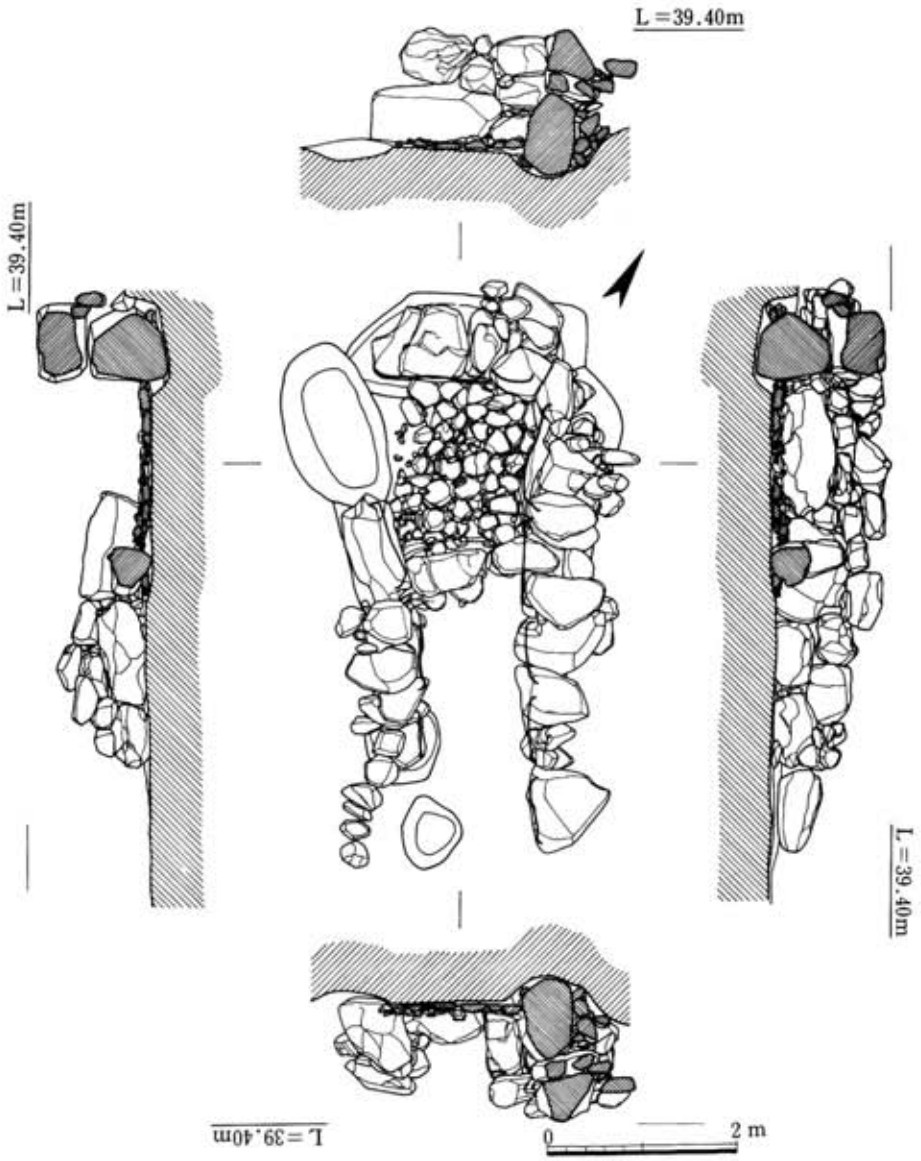



Fig. 87　大工田古墳群ＳＴ005古墳石室実測図

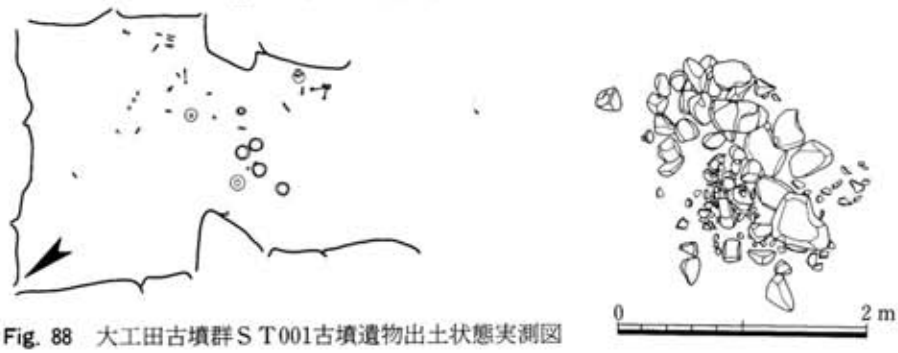



Fig. 88　大工田古墳群ＳＴ001古墳遺物出土状態実測図

高杯・短頸壺が出土した。

**須恵器**（Fig. 89, PL. 46・47）

**杯蓋**　1・2・5は天井部がやや平坦で、体部は内湾気味に開き、口縁部は直になる。3・4は天井部がやや平坦で、体部境に段を持ち、内湾気味に開く。6は天井部が丸味を持ち、内湾気味に開く。口縁部は直になる。7は天井部が丸味を持ち、口縁部は外反する。内面に垂直に尖ったかえりを持つ。20は2と同じであるが高杯の蓋である。

**杯**　8は底部が平坦で、体部は内湾しながら開く。9～19は受部を持つ杯である。9～11・

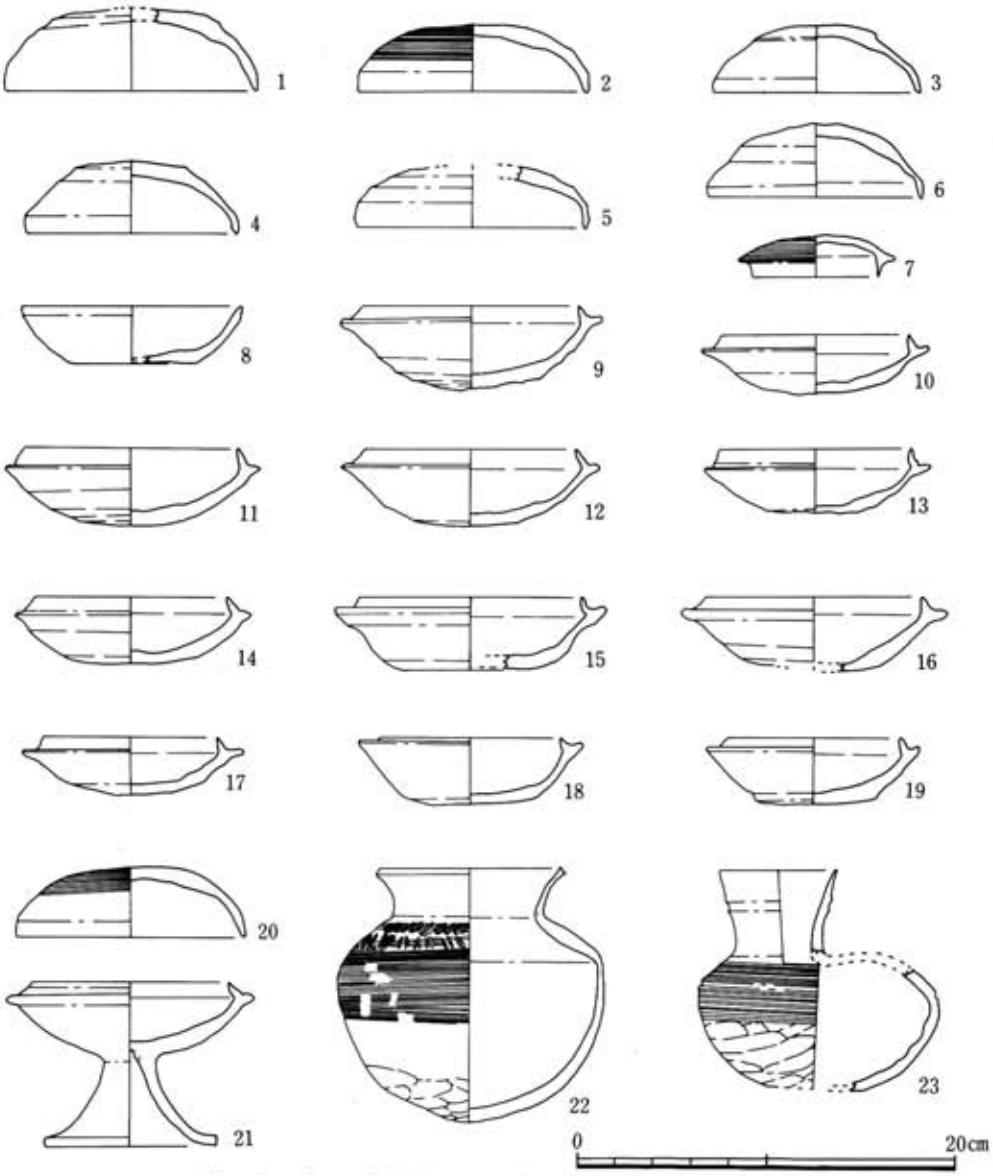



Fig. 89　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器実測図

17は底部が丸味を持つもの。12～14はやや丸味を持つもの。15・16・18・19は底部が平坦なものである。外面底部はヘラケズリ、内面は横ナデ、ロクロナデの調整が施されている。

**高杯**　21は受部を持つ高杯で、杯部は厚い。外面は全体的に横ナデ調整である。

**短頸壺**　22は頸部が外反し、底部は尖り気味の丸底である。肩部から体部にかけてカキ目を施し、肩部に櫛描列点文をめぐらしている。

**平瓶**　23は頸部が長く1条の沈線を施し、口縁部は外反する。肩部から体部にかけてカキ目を施す。体部下位から底部にかけてヘラケズリが残る。

**土師器**（Fig. 90, PL. 48－24・25）

**高杯**　24・27は杯部が内湾気味にたちあがり、口縁端部は丸味を持つ。脚部は太い。裾部は緩く屈曲して広がる、内外面に赤色顔料を施す。25・26は杯底部から体部は内湾気味に広がる。杯部外面の体部中位に1条の沈線を施し、段を持ちやや外反気味に広がる。脚部～裾部は緩やかに広がる。

**短頸壺**　28は肩部から外反気味に短くたちあがる口縁を持ち、肩部と体部の境に1条の沈線を施す。体部下位のヘラケズリ調整が沈線状に残る。底部を欠く。

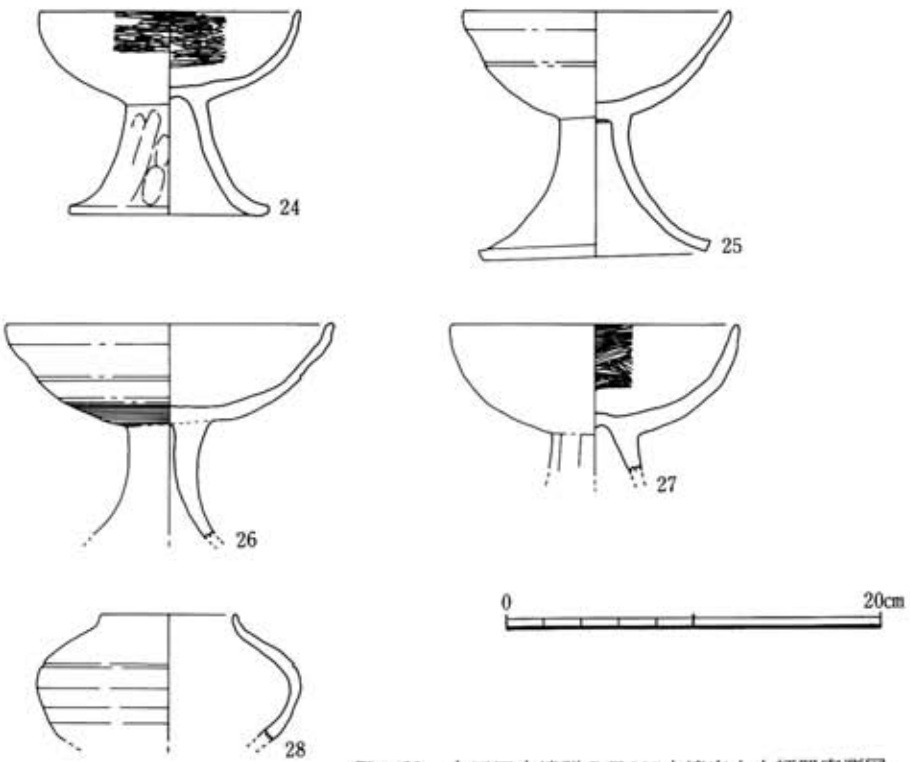



Fig. 90　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土土師器実測図

**鉄器**（Fig. 91・92, PL. 50－1・2）

**鉄鏃**　ＳＴ001古墳からは約40本の鉄鏃が出土している。29～35は平根式、36～41は尖根式で

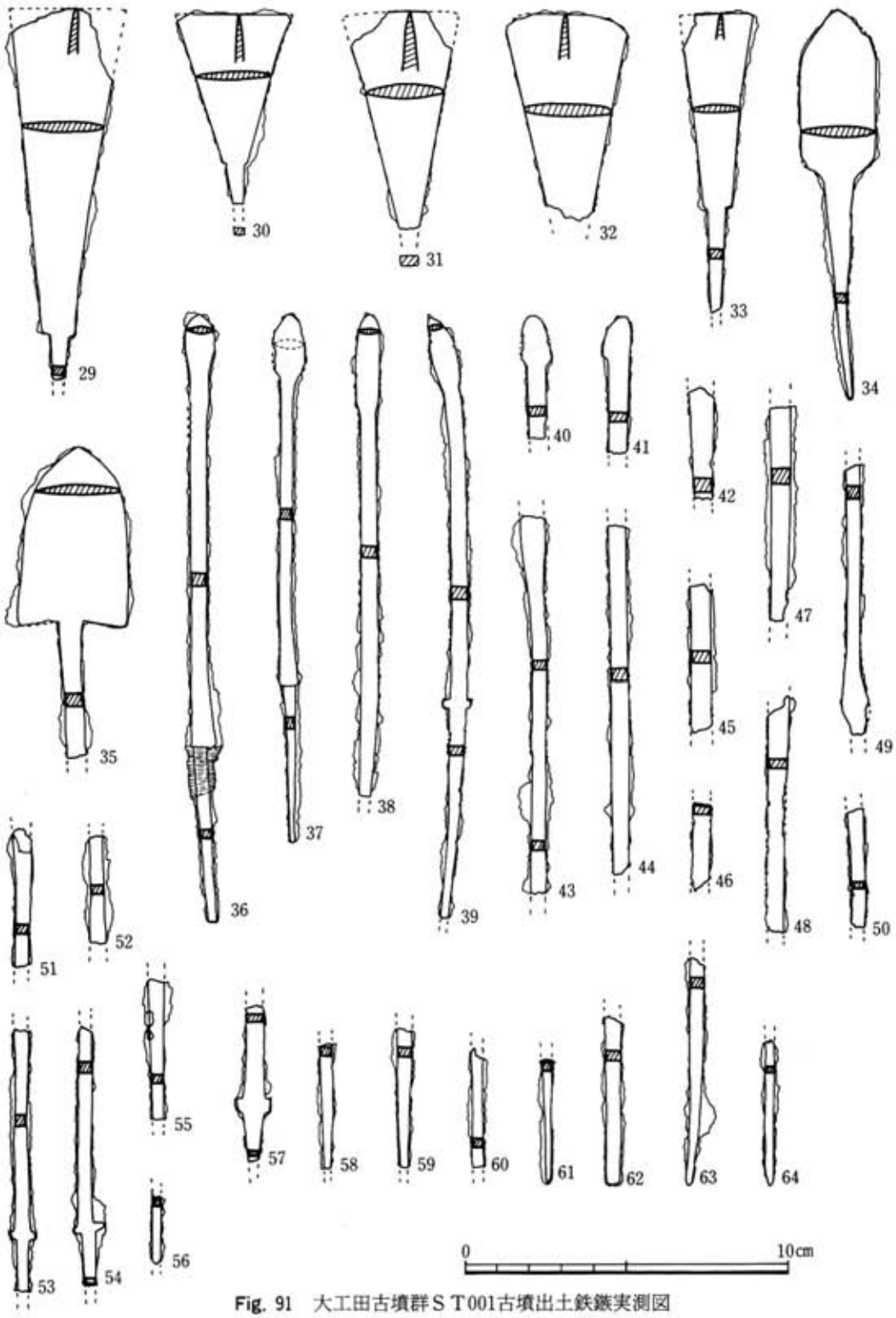



Fig. 91　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土鉄鏃実測図

ある。42～64は鏃を欠く篦被部および茎部である。29～33は平根方頭斧箭式で、鏃部最大幅2.4～3.7cm、鏃部最大長4.7～10.1cmを測る。34は平根長三角形式、36～40は尖根両丸造鑿箭式で36・38・39は関がない。37・40は関を有する。36は茎部に樹皮が残っている。36・39は19cm以上を測る。41は片関片刃箭式である。39・53・54・57は篦被部が棘篦被である。

**刀子**　65～69は残存長3.7～11.8cmの刀子である。65・66・68は片関で肩側にあり、67は関が

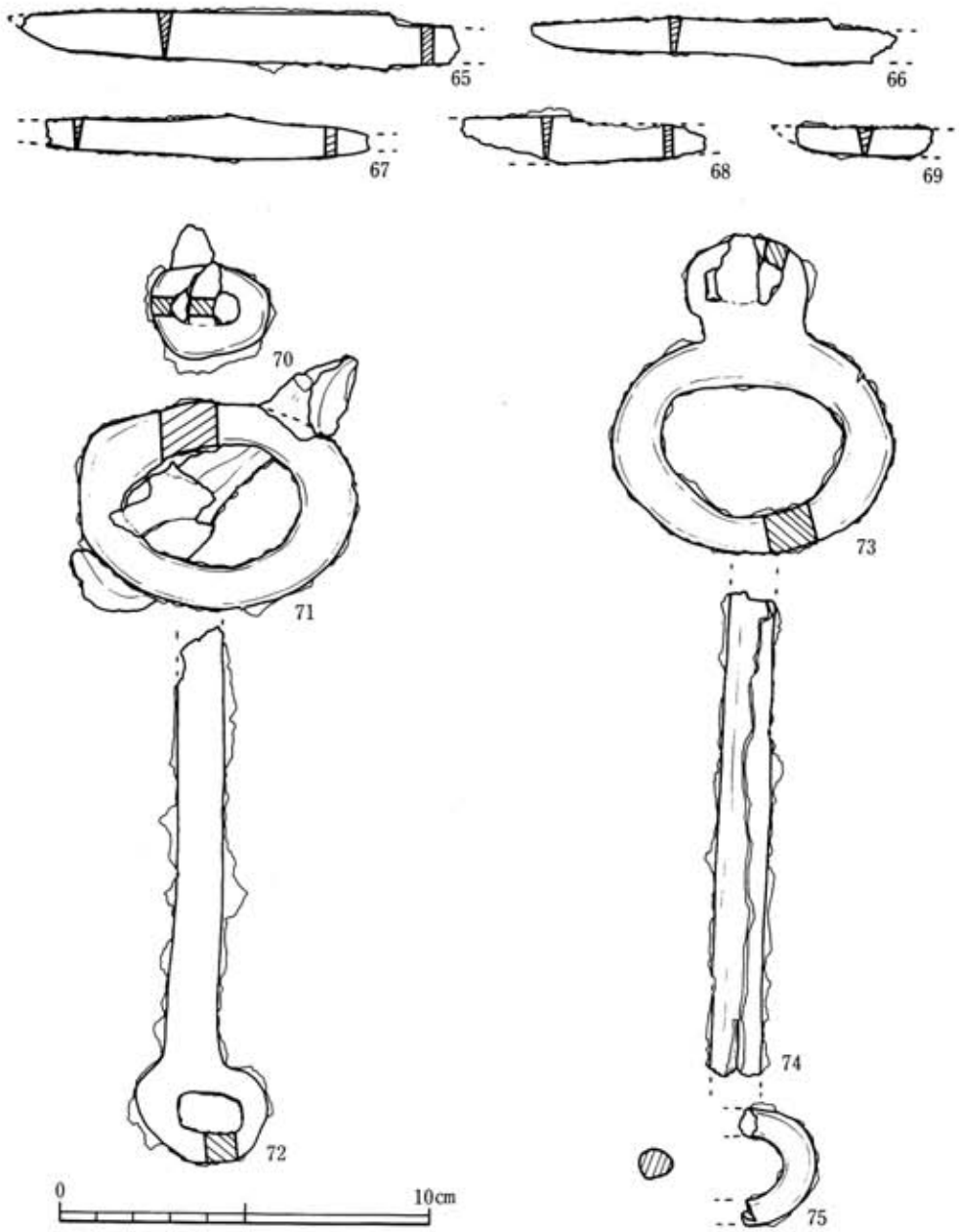



Fig. 92　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土鉄器実測図

明確ではない。

**馬具**　70～75は鉄製の轡1対分である。破損や腐蝕が著しく完全な形ではない。70の立聞中は71の鏡板の上部につき73の状態になる。71に付着する銜は破損が著しいが環が残る。72の引手の鏡板と連結する環も欠損していた。立聞中には2孔がある。鏡板は楕円形で幅7.5～7.7cm、高さ5.7～6.0cm、引手は残在長14.5cmを測る。

**装身具**（Fig. 93, PL. 52－2）

**耳環**　76～79は胴芯銀張りで76は短径2.2cm、長径2.5cm、厚さ0.7cm、77は短径2.3cm、長径2.6cm、厚さ0.7cm、78は短径2.25cm、長径2.5cm、厚さ0.75cmを測る。79は腐蝕が著しいが銅芯金張りである。短径2.3cm、長径2.7cm、厚さ0.35cmと細い。80・81は銅芯金張りである。ともに短径2.0cm、長径2.15cm、厚さ0.6cmを測る。

**管玉**　82は長さ2.55cm、径0.9cm、孔径0.1～0.2cmを測る。83は長さ2.45cm、径1.05cm、孔径0.1～0.25cmを測る。ともに片面から穿孔している。碧玉製である。

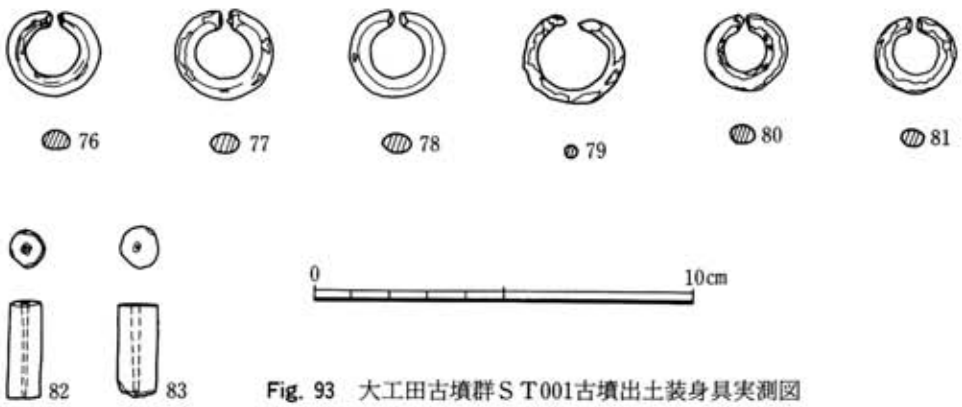



Fig. 93　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土装身具実測図

**ＳＴ002古墳**

遺物は玄室で鉄刀・鉄鏃・刀子・鉄斧・馬具が出土、玄室内の埋土から白磁椀・土師器杯が出土。羨道～石室前面にかけて須恵器杯・杯蓋・高杯・𤭯・長頸壺が出土した。

**須恵器**（Fig. 94, PL. 48－84・87・89）

**杯蓋**　84は天井部が平坦で、体部は内湾気味に開き、口縁部は直になる。天井部はヘラケズリ。体部と内面はナデ調整。

**杯**　85～87は受部を持つ。85は底部が平坦なもの。86は底部がやや丸味を持ち厚手である。87は底部は欠損しているが全体的に丸味を持つ。88は底部が平坦で体部は外反し開く。底部はヘラケズリである。

**高杯**　89は受部を持つ高杯で脚部下位と裾部を失う。杯底部は平坦で緩やかに開く。口縁端部内面は水平でたちあがりは外反気味にたつ。

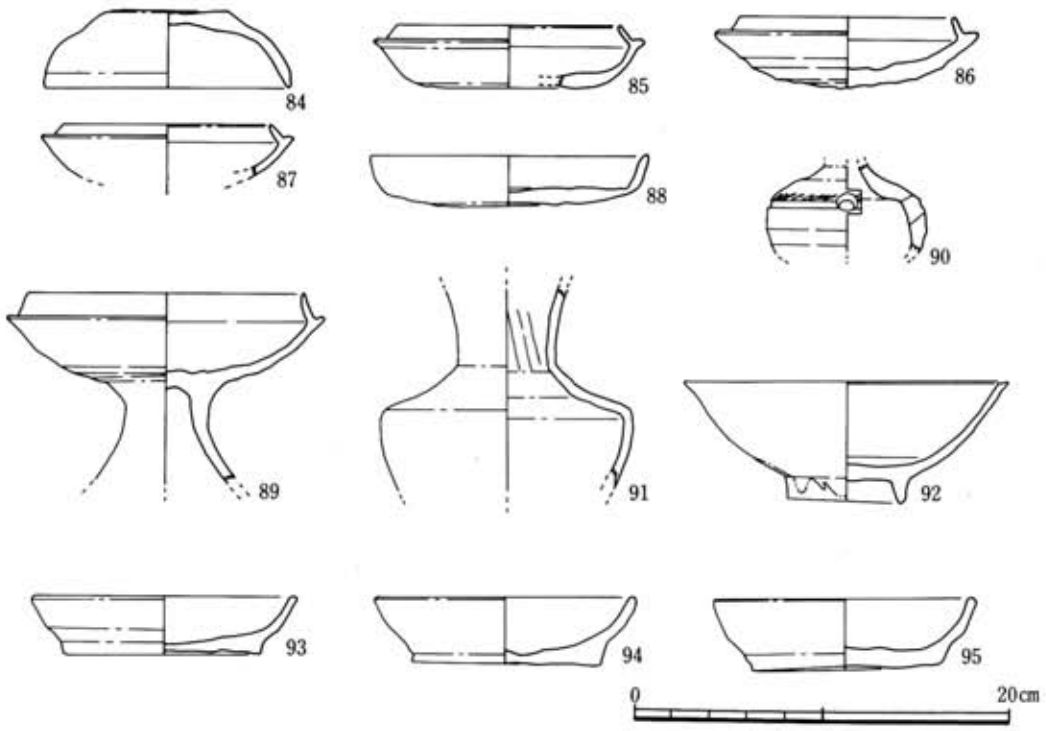



Fig. 94　大工田古墳群ＳＴ002古墳出土須恵器・白磁・土師器実測図

**𤭯**　90は頸部以上と底部を失う。肩部はやや張り気味で胴部は丸味を持つ。胴部に１条の沈線を有し、肩部との境に櫛描列点文を施す。

**長頸壺**　91は頸部と肩部、胴部の一部を残す。頸部は外反気味に開き、肩部は張り、体部は内湾気味である。

**磁器**　白磁椀が１個出土している。

**白磁椀**　92は口縁部が外反し端部は水平である。体部内面下位に沈線状の段を持つ。高台は外面を直に、内面を斜めに削り出し高い。外面体部下位の一部と高台の大部分は釉がかからない。釉は灰黄白色である。

**土師器**（Fig. 94, PL. 48－93～95）

**杯**　93～95は底部が平坦で、体部外面下位に段を持つ。底部は糸切り離しで板目痕が残る。

**鉄器**（Fig, 95・96, PL. 51－1・2）

**鉄刀**　96は刀身部分である。平造りで背は直線的である。残存長31.0cm、刃部最大幅3.7cm、背部幅1.8cmを測る。97は切先から刀身部までの22.6cm、背は直線的である。切先は弧を描き鋭く尖り、刃部は鋭角である。刃部最大幅3.0cm、背部幅0.5～0.7cm、刀身に木片が付着する。

**鍔**　98・99は卵形の無窓のものである。長さ7.7cm、幅6.5cm、厚さ0.4cm、孔の長径3.7cm、短径2.5cmである。

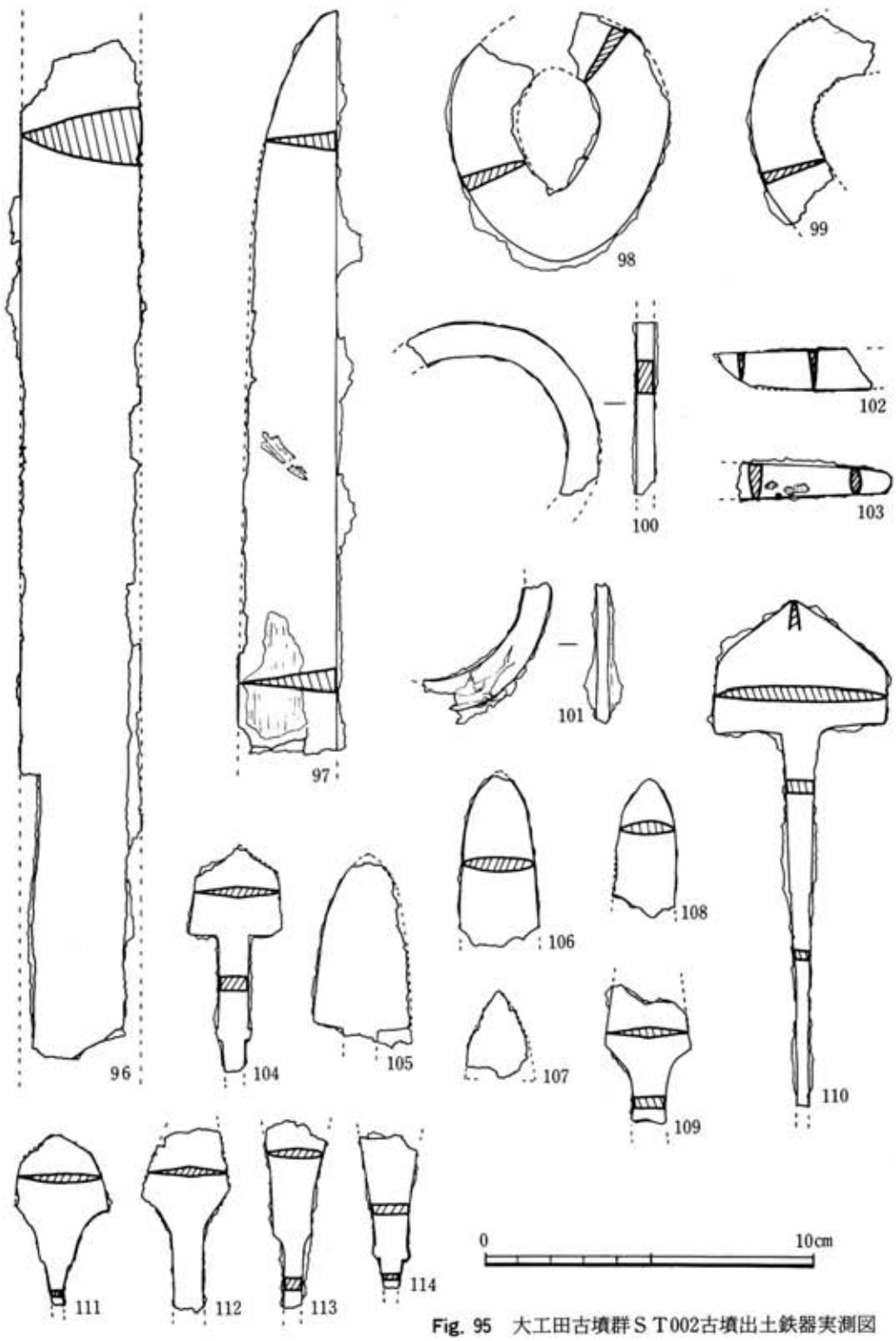
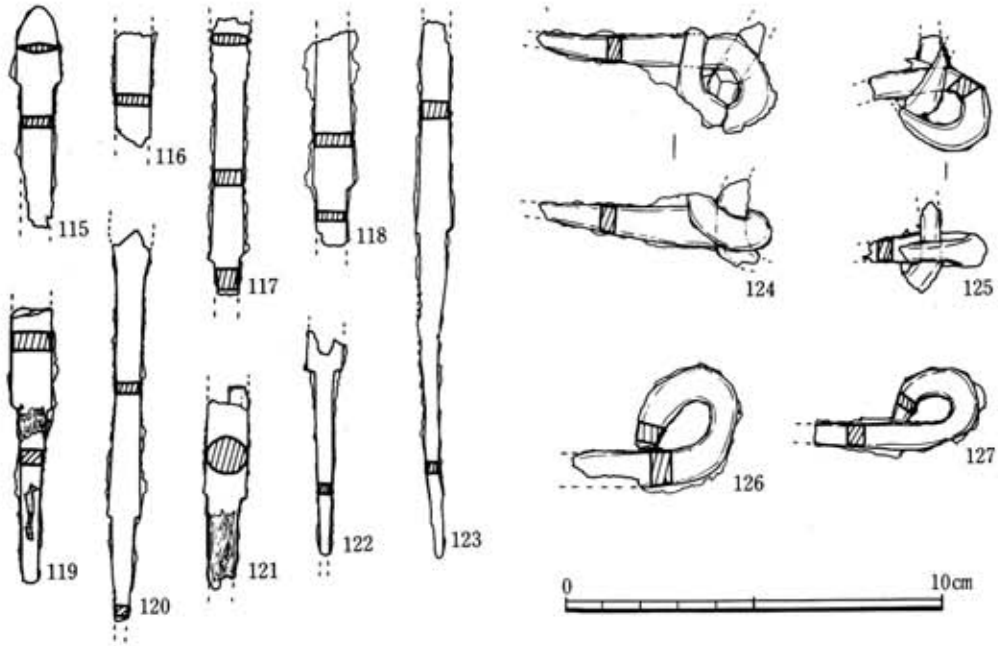



Fig. 95　大工田古墳群ＳＴ002古墳出土鉄器実測図



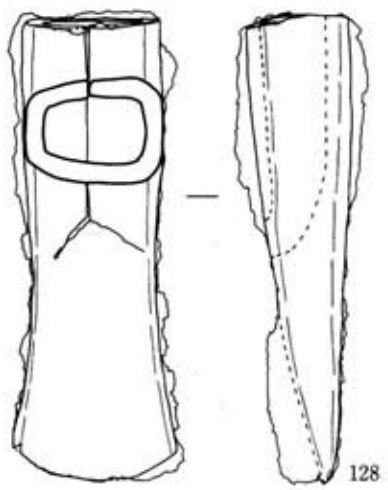




Fig. 96　大工田古墳群ＳＴ002
古墳出土鉄器実測図

**鉄鋤**　100は復元すると外径7.8cm、内径5.8cm、幅1.0cm、厚さ0.5cm、断面は長方形である。101は外径8.2～8.6cm、内径6.4cm、幅0.9～1.1cmになると思われる。厚さ0.3cm、断面は長方形である。

**刀子**　102は残存長4.7cmの刀子の刃部である。最大幅1.3cm、背部幅0.2cmを測る。103は刀子の茎部で木質が付着する。

**鉄鏃**　104～114は平根式の鉄鏃である。104・110は平根五角形式である。104は茎部に棘を持つ。110は鋒の最大幅5.2cm、残存長15.3cmを測る大型である。105は平根三角形式の鏃である。109・112は平根両丸造柳葉式。111は平根平造変形菱形式。113・114は平根方頭斧箭式になるものと思われる。114は鋒部下部に棘を持つ。106～108は三角形式か柳葉式になると思われる。115は尖根両丸造鏃箭式で関を持つ。116～123は篦被部および茎部である。119・121は茎部に木質が残る。121は断面が丸形である。

**馬具**　124～127は轡の銜の一部であろう。124・125は環と環が連結した状態である。

**鉄斧**　128は無肩式の鉄斧である。刃部は弧状である。袋部の断面は長軸3.7cm、短軸2.7cmの長方形に近い。合せ目は中央にある。長さ12.4cm、刃部幅4.1cmの完形である。

**ＳＴ005古墳**

遺物は玄室内で鉄刀・鉄鏃が出土し、羨道～閉塞部で須恵器杯・杯蓋・高杯・短頸壺・甕・提瓶・土師器杯・杯蓋・高杯・瓦器椀が出土した。

**須恵器**（Fig. 97, PL. 49－132･134･138～141）

**杯蓋**　129・130は天井部が平坦で体部と口縁部の境に段を持ち外反気味に開く。131は天井部～体部はやや丸味を持ち、体部と口縁部の境に段を持ち内湾気味に開く。132・133は天井部が丸味を持ち、体部に沈線状の段を持つ。132の口縁部はやや外反し、133の口縁部は内湾気味である。2個とも小形である。134は天井部が平坦で体部は内湾気味に開く。6個とも天井部はヘラケズリ、体部は横ナデ、内面は横ナデおよび不定方向のナデ調整である。134の内面天井部に叩きの痕がある。

**杯**　135～137は受部を持つ杯である。底部はやや丸味を持ち、体部は内湾気味に開き、口縁部は外反し水平である。外面底部～体部はヘラケズリ、体部～口縁部は横ナデ、内面の口縁部～体部は横ナデ、体部～底部は不定方向のナデ調整である。

**高杯**　138は杯部が丸味を持ち、口縁部は外反し尖り気味に開く。脚部下位に段を持ち、裾部は水平な面から屈曲し内湾する。体部と脚部にカキ目、杯底部に櫛描列点文を施している。

**短頸壺**　139は肩部から外反気味に短くたちあがる口縁部を持つ。肩部にカキ目、底部はヘラケズリである。

**甕**　140は外反した口頸外面に1条の沈線を持ち段がつく。頸部下位に2条の沈線を持つ。体部は丸味がなく上位に1条の沈線を持つ。底部は平底気味である。頸部に櫛描波状文、肩部に櫛描列点文をめぐらしている。

**提瓶**　141は肩部から頸部へく字形を描き口縁部は外反気味である。142は肩部から頸部がやや直にたつく字形である。2個とも肩部に耳がつき、左右対称である。

**土師器**（Fig. 97, PL. 49－145）

**杯蓋**　143は天井にヘラミガキを施し丸味を持つ。体部は屈曲し段を有する。口縁部は外反気味に広がる。

**杯**　144は受部を持つ杯で底部は丸味を持ち、体部はやや内湾気味に開く。口縁部は水平受部となり、外反気味にたちあがる。

**高杯**　145は杯部内外面にヘラミガキ、脚部と裾部はヘラケズリで脚部内面を除き赤色顔料を施す。杯部はやや外に開き気味である。

**瓦器**（Fig. 97）

**椀**　146は高台を持つ椀で体部は下位で屈曲し、内湾気味に開く。内外面とも横方向にヘラミガキ、内面はヘラミガキの後にナデ調整を施す。高台は比較的小さく低い。内外体部上位から外面口縁部は灰黒色である。

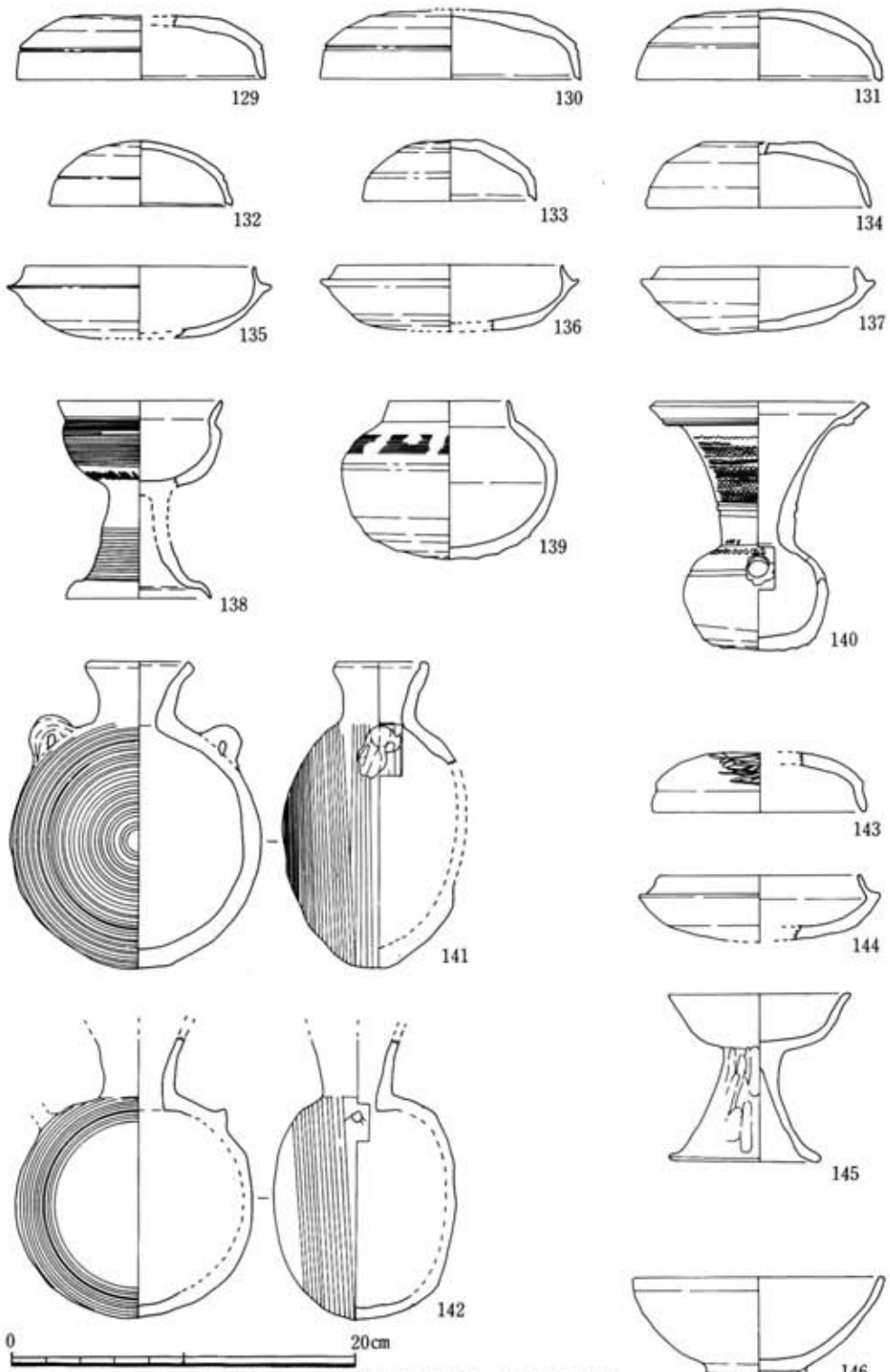



Fig. 97 大工田古墳群ＳＴ005古墳出土須恵器・土師器実測図

**鉄器**（Fig. 98, PL. 52－1）

**鉄刀**　147は刀身の一部を残す鉄刀の柄である。関から３cmの柄中央部に目釘孔がある。平造りで背は直線的である。刀身の残存長8.5cm、刃部最大幅3.4cm、背部幅0.6cm、柄の残存長10.0cm、幅1.5～2.2cm、厚さ0.3cmを測る。

**鉄鏃**　148は鋒部を欠失しているが平根式の三角形式で逆刺を持つ腸抉式である。茎部に棘を有し木質を残す。149は平根三角形式で茎部に棘を有する。150～157は尖根式両丸造鏨箭式で８点とも関を有する。153は茎部に棘を持つ。150～152は茎部に木質が付着している。

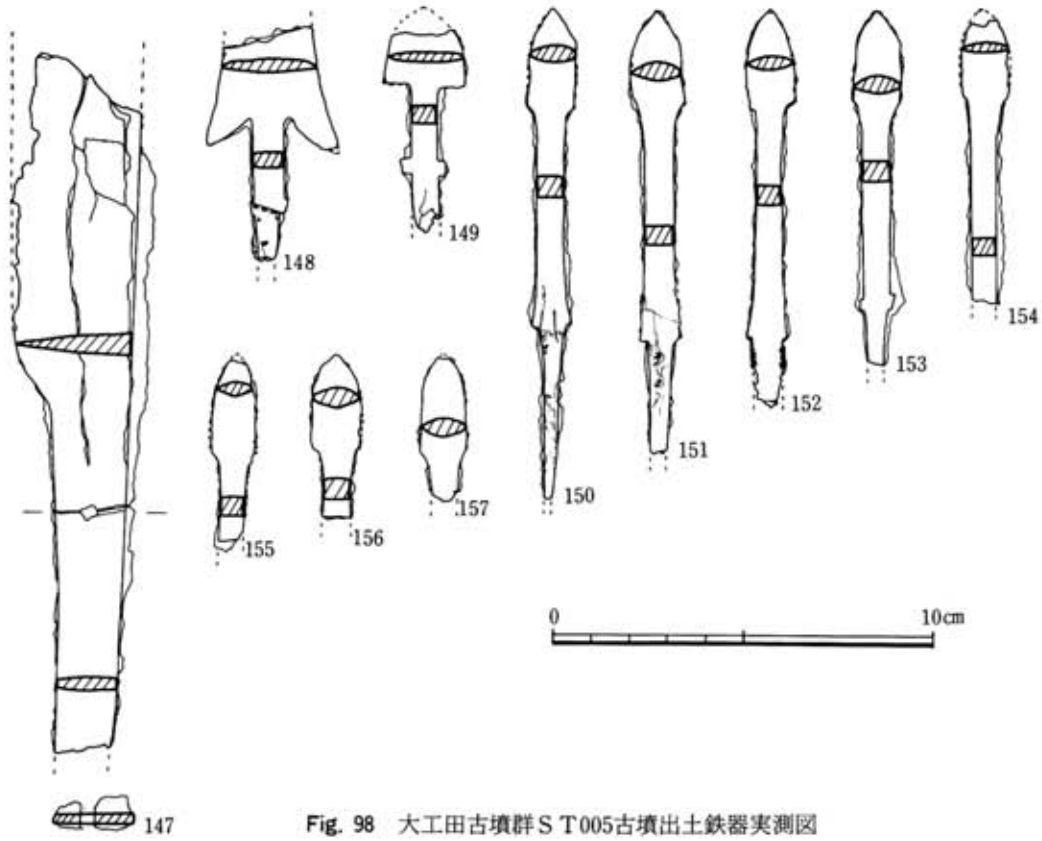



Fig. 98　大工田古墳群ＳＴ005古墳出土鉄器実測図

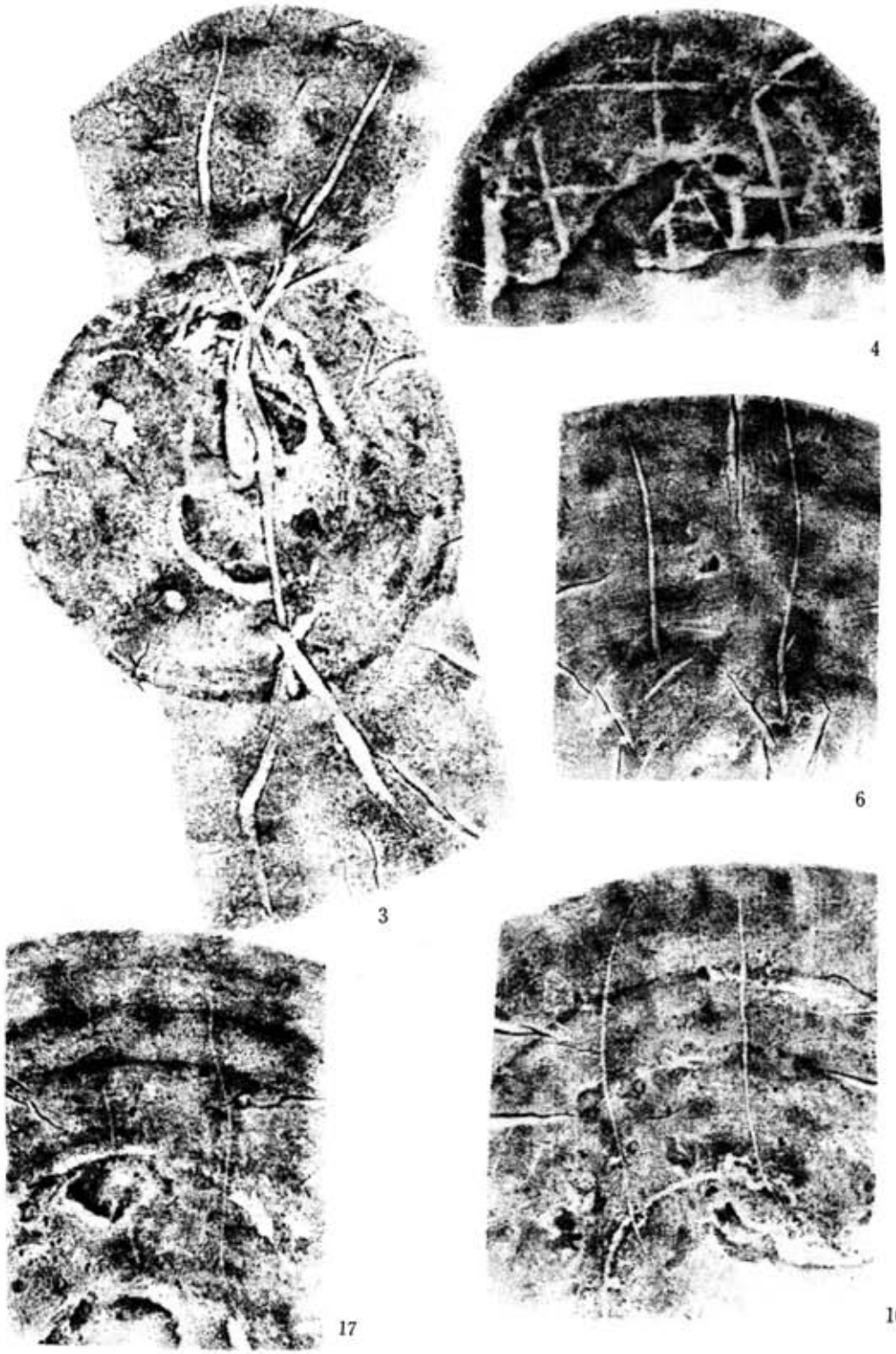


Fig. 99　大工田古墳群古墳出土須恵器ヘラ記号拓影(1/1)

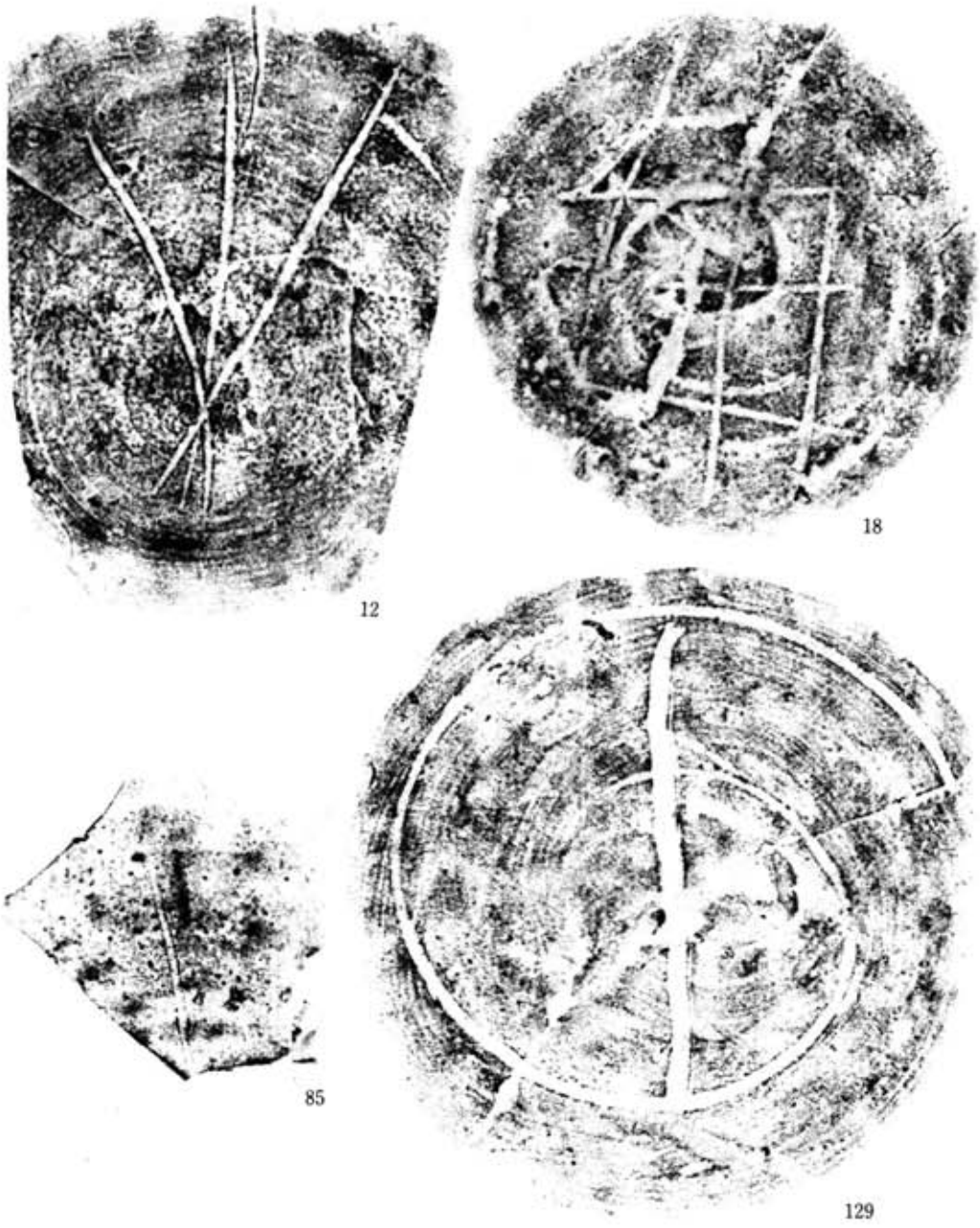



Fig. 100　大工田古墳群古墳出土須恵器ヘラ記号拓影（1/1）

## 4．小結

大工田古墳群は市内では数少ない平野部に立地する古墳である。3基とも宅地内にあり、石室はかなり破壊されていたが、遺物は良好な状態を保っていた。石室に今出川産の閃緑岩の円礫を用いていたことは興味深い。ＳＴ001古墳は石室前面に祭祀遺跡が残り、墓前祭というべき風習の存在を確認した。ＳＴ002古墳は鎌倉時代に追葬または供養と思われる遺物が出土した。ＳＴ002・ＳＴ005古墳は市内唯一の片袖式の石室を有し注目される。大工田古墳群は多久市内に散在する古墳群の中で明らかな違いがあり、市内の古墳文化を解明する上で貴重な資料となるものである。

〔参考文献〕

「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第5集」　佐賀県教育委員会　1983
「金立開拓遺跡」　佐賀県教育委員会　1984
「ガランドヤ古墳群」　日田市教育委員会　1986

# Ⅻ　十井手遺跡

遺跡名：十井手遺跡（略号ＪＵＩ）
遺跡所在地：多久市南多久町大字下多久字十井手

# XII　十井手遺跡

## 1．遺跡の概要

十井手遺跡は多久盆地のほぼ中央に位置する坊山（標高103m）の北、標高70mの小高い山から南に延びた標高35～39mの低丘陵地、多久市南多久町大字下多久字十井手に所在する。遺跡周辺にはこれまで多くの遺跡が確認されている。西800mに尖頭器や礫器が出土する長尾松隈遺跡、南西1200mには縦長剝片、石核、尖頭器が出土、昭和58・59年度調査を実施した長尾開拓遺跡がある。北東900mには今出川A遺跡や大工田古墳群などの遺跡が所在する。南600mに高野神社石棺墓、南東500mに中小路古墳、800mに中小路増富遺跡が所在する。

十井手遺跡は雑木林であったが、昭和40年頃、果樹園に開墾され、ナイフ形石器や尖頭器・石鏃・剝片などの遺物が表面採集されたことから遺跡の存在が明らかになった。

十井手遺跡の調査は4ヵ所の調査区を設定し、遺構の検出を試みたが遺構は検出できなかった。遺物はナイフ形石器・三稜尖頭器・尖頭器などの旧石器時代の石器と石鏃・石匙・石錐・

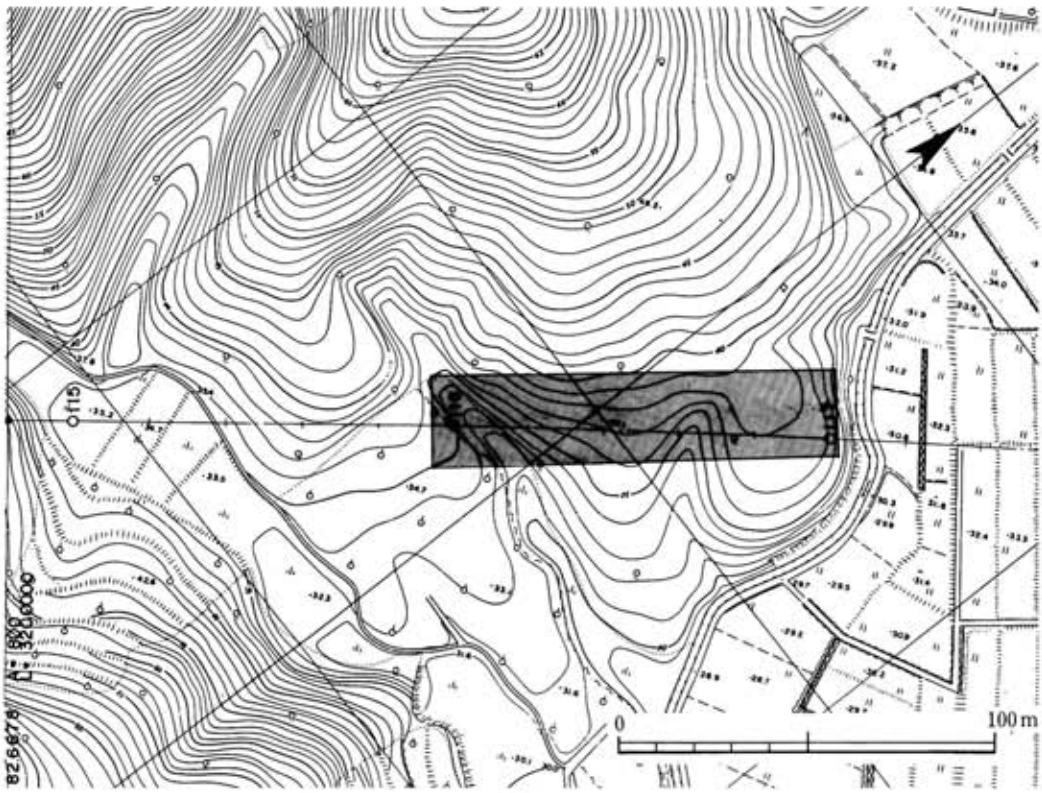



Fig. 101　十井手遺跡周辺地形図

磨製石斧など縄文時代の石器、縄文土器片が出土した。遺物を層序でとらえるため5cm堀りを実施したが、傾斜面のため、遺物・土層とも流れ、正常な層とはいえない。

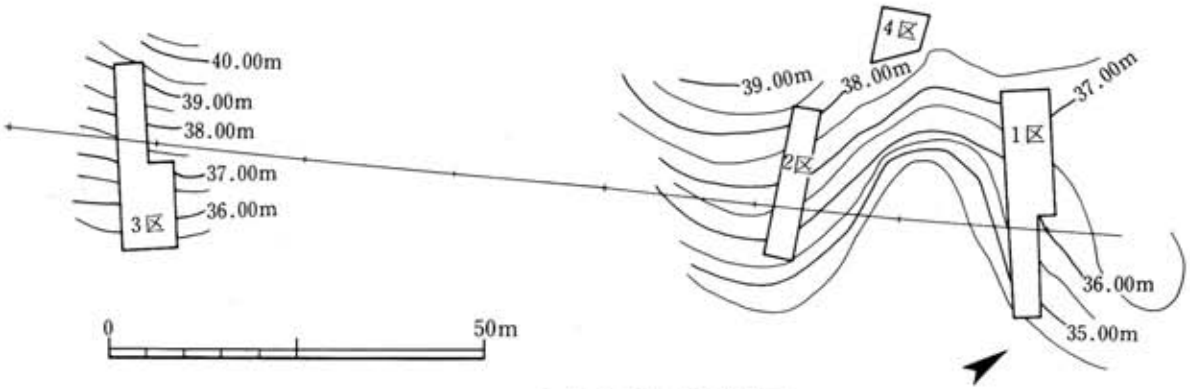



Fig. 102　十井手遺跡調査区位置図

L＝37.00m

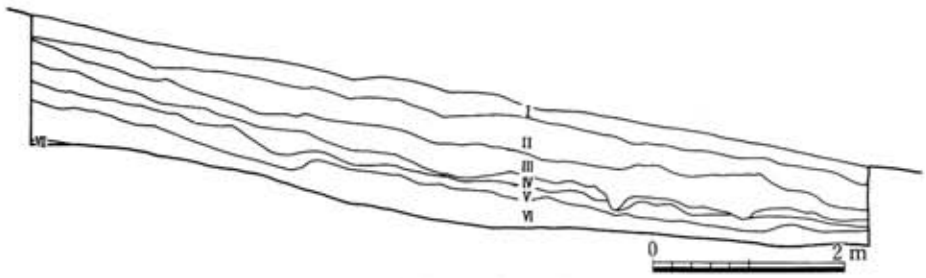



Fig. 103　十井手遺跡3区東側土層図

L＝38.90m

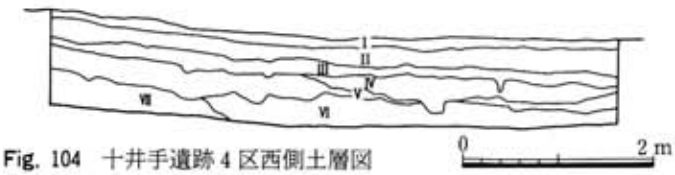



Fig. 104　十井手遺跡4区西側土層図

Tab. 5　十井手遺跡土層土質表

| | 3　区　東　側　土　層 | 4 区 西 側 土 層 |
|---|---|---|
| I層 | 表　　土 | 表　　土 |
| II層 | 黄褐色砂粒混入土　（遺物包含層） | 茶褐色腐植土 |
| III層 | 茶褐色砂粒混入土　（遺物包含層） | 暗褐色砂粒土 |
| IV層 | 黄褐色粘質土　（遺物包含層） | 褐色粘質土 |
| V層 | 黄褐色砂粘土　（遺物包含層） | 黄褐色粘質土 |
| VI層 | 黄褐色粘土 | 黄赤褐色粘土 |
| VII層 | 灰白色粘土 | 赤褐色粘土 |

## 2．遺　物

**旧石器時代**（Fig. 105・106, PL. 55－1・2）

**台形様石器**　2点が出土した。1は不定形の横長の剝片を素材とし、表面からのブランティングによって打瘤を除去し、一方のブランティングを主要剝離面から施し、断面は菱形状になる。2も不定形横長剝片を用い、表面からのブランティングで打瘤を除去しているが、打瘤の一部を残している。黒耀石製。

**ナイフ形石器**　黒耀石とサヌカイト製の2点が出土した。3は刃部を欠失しているが、縦長の剝片を用い、ブランティングによって打瘤を除去している。4はサヌカイトの縦長剝片を素材とし、主要剝離面から大きなブランティングで二側辺を加工し基部を作っている。断面は三角形である。

**三稜尖頭器**　5はサヌカイトの縦長剝片を素材とし、主に二面加工であるが主要剝離面の加工は打面、打瘤を除去するためであろう。

**尖頭器**　6～10の両面加工の尖頭器5点が出土している。7・10は多久の尖頭器の特徴的形態である圭頭形に類似し、薄手である。

**縄文時代**

**石器**（Fig. 107・108, PL. 55－3・4）

**石鏃**　1区で7点、2区で2点、3区で10点の計19点が出土。石材別には黒耀石11点、サヌカイト8点となり、他の遺跡に比べサヌカイト製石鏃の割合が高い。11～15は黒耀石製。16・17はサヌカイト製である。

**石匙**　18はサヌカイト製の横長剝片を素材とした石匙である。つまみと背部に礫面を残し、打瘤を残す。刃部にだけ両面加工を施す。

**石錘**　19は楕円形の砂岩円礫を素材とした石錘である。長軸方向に0.2cmの溝上を一周刻んでいる。重量110g。

**磨製石斧**　20は全面研磨の磨製石斧である。刃部は左右対象となり扁平である。蛇文岩製。

**土器**（Fig. 109, PL. 55－5）

土器片は総数344点が出土した。調査区別では1区171点、2区1点、3区107点、4区5点になる。ほとんど小破片であるため時期を決定できるものは少なかった。縄文時代の土器と判断できるも

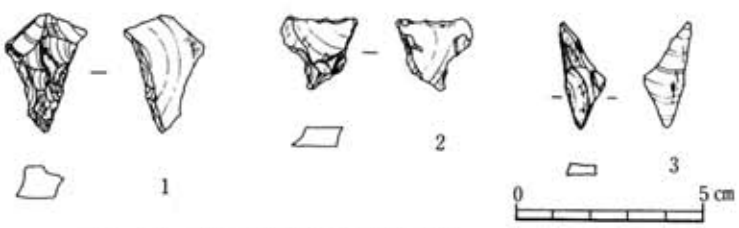



Fig. 105　十井手遺跡出土石器実測図

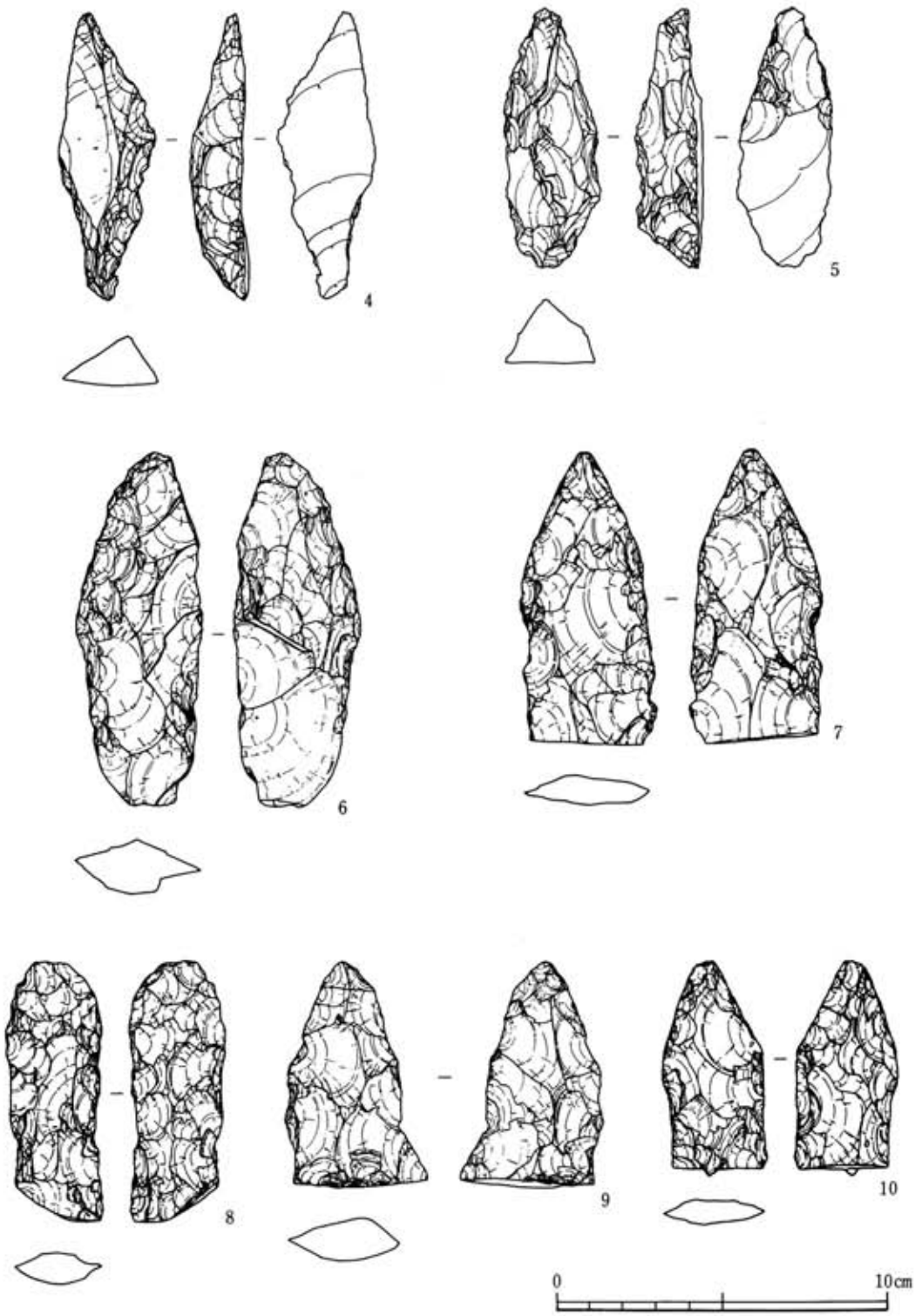



Fig. 106　十井手遺跡出土石器実測図

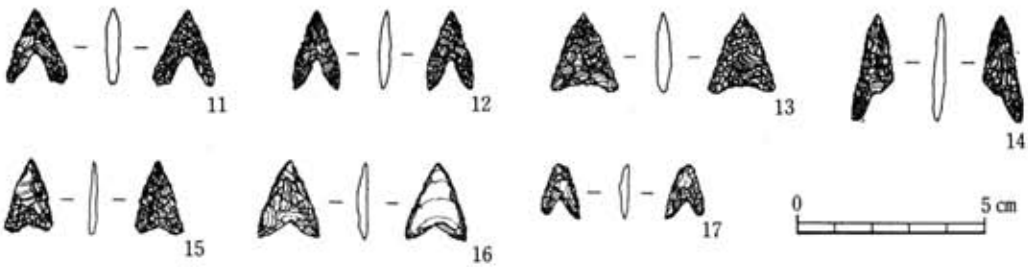
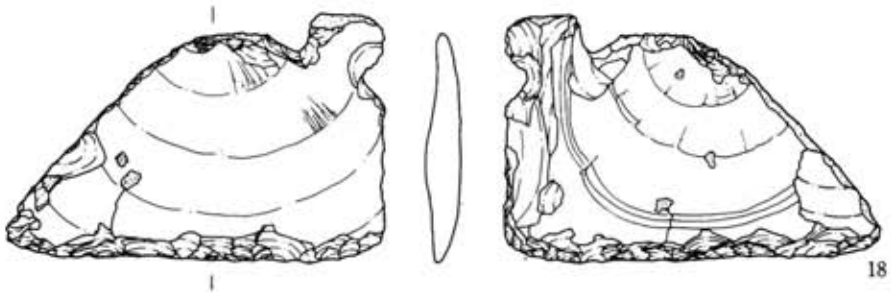
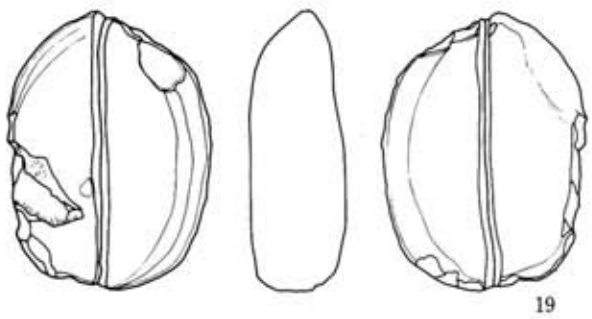



Fig. 107　十井手遺跡出土石鏃実測図



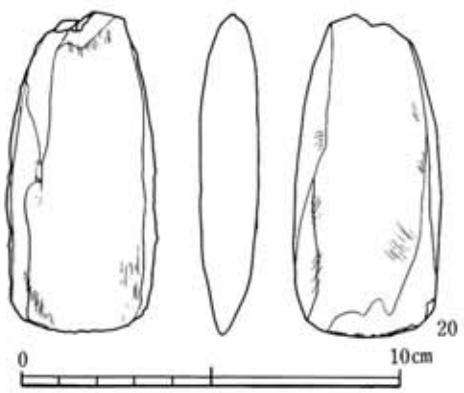




Fig. 108　十井手遺跡出土石器実測図

のは36点だけである。復元できるものは1点もなかった。図示したものは8点である。時期は器形が不明なため決定できないが、文様や口縁部から中期の阿高式土器と晩期の土器片と思われる。21は深鉢の口縁部である。口縁部は外反し、内面に2条、外面に3条の沈線を持つ。22は浅鉢の口縁部である。23・24は深鉢の頸部である。同一個体と思われる。25は浅鉢の口縁部下位の破片である。22と同一個体であろう。26～28は深鉢の胴部上位である。渦巻文・渦巻文と平行線文が組み合わされたもので阿高式土器の一文様である。21・22・25が1区で出土。23・24は4区で出土。26～28は3区で出土した。

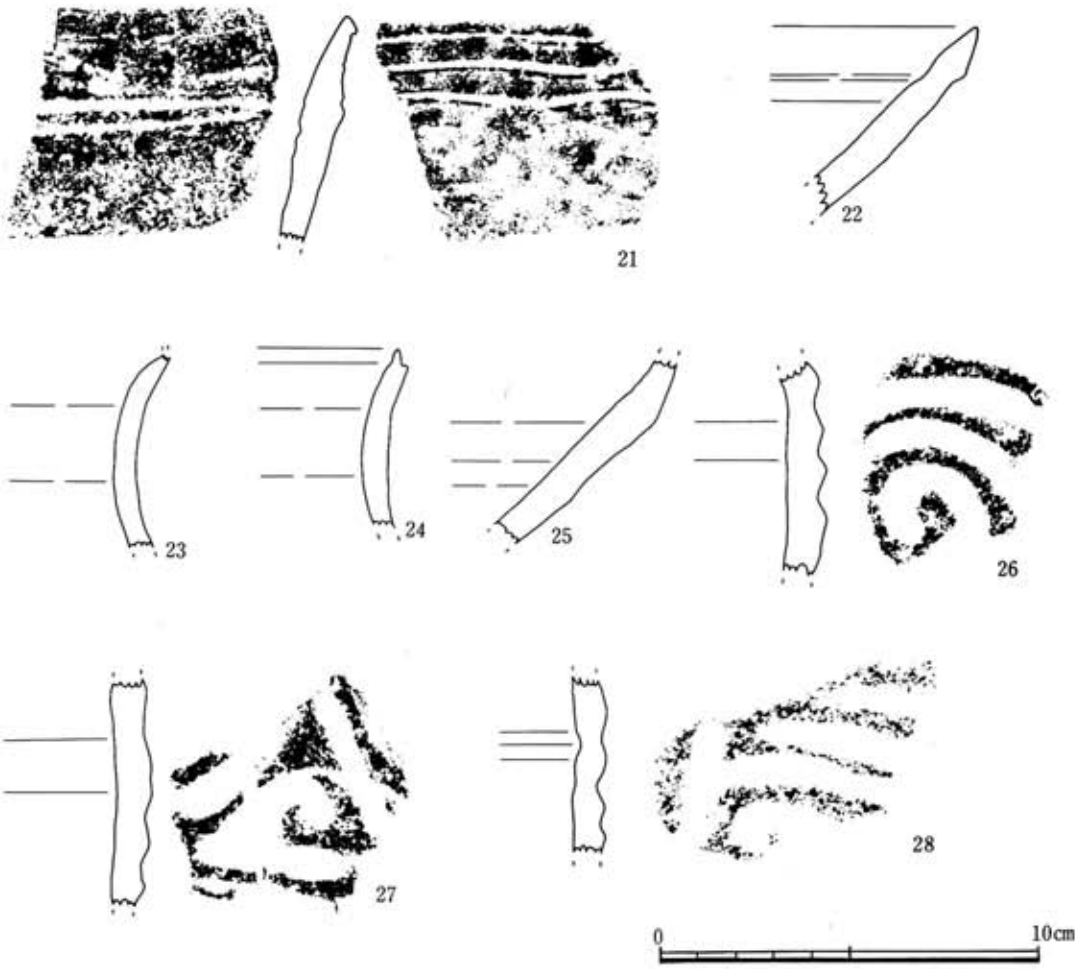



Fig. 109　十井手遺跡出土縄文土器実測図

## 3．小　結

十井手遺跡は旧石器時代～縄文時代の遺物が出土したが、特に層序的に遺物をとらえるために5㎝掘りを行った。多久の尖頭器文化の編年が現在まで空に浮いた状態であり、縄文草創期または縄文時代の石器との説を論ずる研究者も多い。尖頭器が出土する遺跡の大部分はサヌカイト原石の原産地であり、石器製作所跡的要素が多い。原産地でなく尖頭器以外の石器が出土する遺跡で層序的に遺物を把握することが急務であり、十井手遺跡はその条件を備えていた。調査の結果、ナイフ形石器や台形様石器、尖頭器が出土したが、点数も少なく、縄文時代の遺物も混入し、目的を達するに至らなかった。縄文中期の阿高式土器の出土は市内で2例目であり、貴重な資料を提供した。

〔参考文献〕

「上場の文化財Ⅰ」　佐賀県教育委員会　1981
「後川内遺跡群Ⅱ」　唐津市教育委員会　1984
「茶園原遺跡Ⅰ」　多久市教育委員会　1979
「茶園原遺跡Ⅱ」　多久市教育委員会　1980
「佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡」　杉原荘介ほか　1983
「石原貝塚・西和田貝塚」　宇佐市教育委員会・大分県教育委員会　1979

# XIII　撰分遺跡

遺跡名：撰分遺跡（略号ＥＲＢ）
遺跡所在地：多久市多久町字環町字湯町

# XIII　撰分遺跡

## 1．遺跡の概要

撰分遺跡は多久盆地の西の壁にあたる八幡岳（標高763m）、船山（標高685m）から東に延びた横峰山（標高229m）の東側山裾、撰分台地の先端～低地の水田、標高21～23mに位置し、正確には多久市多久町字環町、字湯町に所在する。遺跡の南に牛津川、北には山仁田川、中通川が流れ、遺跡の東300mと500mで合流し、牛津川となる。河川流域には30～100mの丘陵があり、丘陵上には多くの遺跡が立地する。旧石器時代の遺跡としては国内最大規模といわれ、両面加工の大形尖頭器が出土する茶園原遺跡をはじめ下鶴遺跡、東ノ原1630番地遺跡、三年山遺跡などの多久石器遺跡群は南に600～1000mの距離に所在する。遺跡の東300mからは天治元年(1124)銘の経筒が出土した山崎経塚、900mには多久最西限の古墳といわれ、約10基の古墳が築造された山崎古墳群が所在する。1300mには長尾玉ケ渕遺跡があり弥生時代中期の甕棺が出土している。北東1500mに長尾開拓遺跡、南西2200mには山王遺跡など九州横断自動車道に係る発掘調査を実施した旧石器時代の大規模な遺跡が所在する。

撰分遺跡の存在は早くから知られ、尖頭器や石鏃が表面採集されていた。昭和55年には九州横断自動車道路線の南側で耕地整理事業が実施され、路線と境界になる水路の工事中、弥生時代の住居跡と甕棺墓が出土した。

撰分遺跡の調査で検出した遺構は弥生時代～江戸時代までの各時期におよび、遺物は旧石器時代や縄文時代の石器・土器が出土した。遺跡西側の丘陵地は主に旧石器時代や縄文時代の遺物が出土。弥生時代の遺構は東側の低地で大溝や住居跡を検出。甕棺墓は東側から中央部に集中した。古墳時代の住居跡は東側から中央部に集中し、弥生時代の遺構と部分的に複合した。平安時代～鎌倉時代の遺構は中央部から西側の丘陵地裾部まで広がっていた。室町時代～江戸時代の遺構は西側丘陵地の裾部に限られた。

遺物は旧石器時代のナイフ形石器・尖頭器・細石核・細石刃などが出土した。縄文時代の遺物は晩期土器片や石鏃が出土。弥生時代の遺物は磨製石斧・石包丁・紡錘車・砥石などの石器と甕・壺・高杯・器台・支脚などの土器類が出土した。古墳時代の遺物は土師器甕・壺・杯・高杯などが出土。平安時代～鎌倉時代の遺物は青磁椀・土師器杯・皿が出土。室町時代～江戸時代の遺物は輸入磁器や国産の陶器・磁器・甕・瓦などが出土した。遺物の総数は遺物収蔵用コンテナ約400個にもおよぶ膨大な量になる。

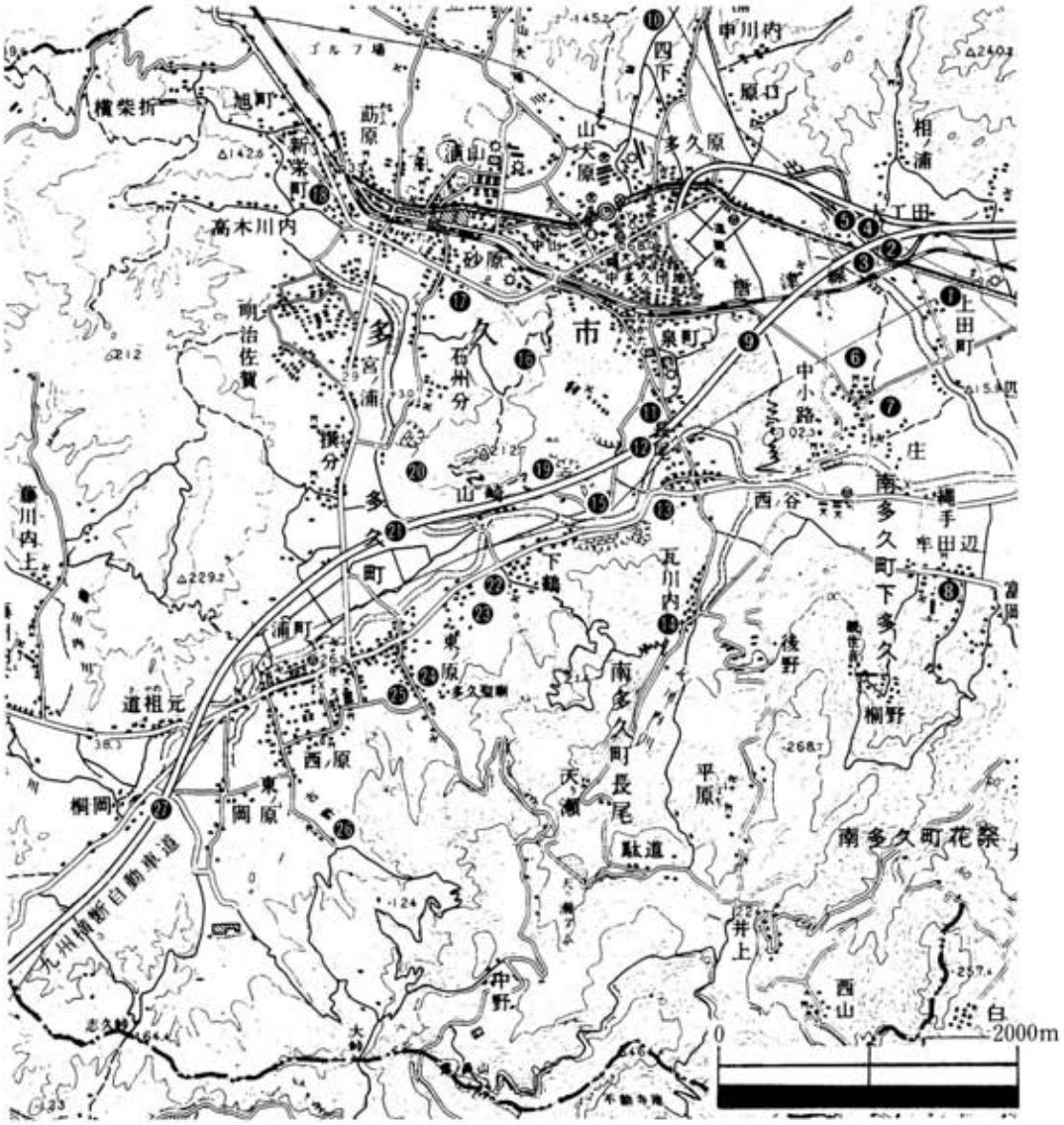



Fig. 110　撰分遺跡周辺遺跡分布図

1．大工田遺跡
2．原田遺跡
3．今出川A遺跡
4．今出川B遺跡
5．大工田古墳群
6．中小路古墳
7．中小路増富遺跡
8．牟田辺遺跡
9．十井手遺跡
10．八天山遺跡
11．長尾松隈遺跡
12．長尾開拓遺跡
13．長尾遺跡
14．瓦川内広平遺跡
15．長尾玉ヶ渕遺跡
16．陣ノ辻遺跡
17．湯端遺跡
18．経ノ峰遺跡
19．山崎古墳群
20．山崎経塚
21．撰分遺跡
22．下鶴遺跡
23．茶園原遺跡
24．東ノ原1630番地遺跡
25．三年山遺跡
26．西ノ原遺跡
27．山王遺跡

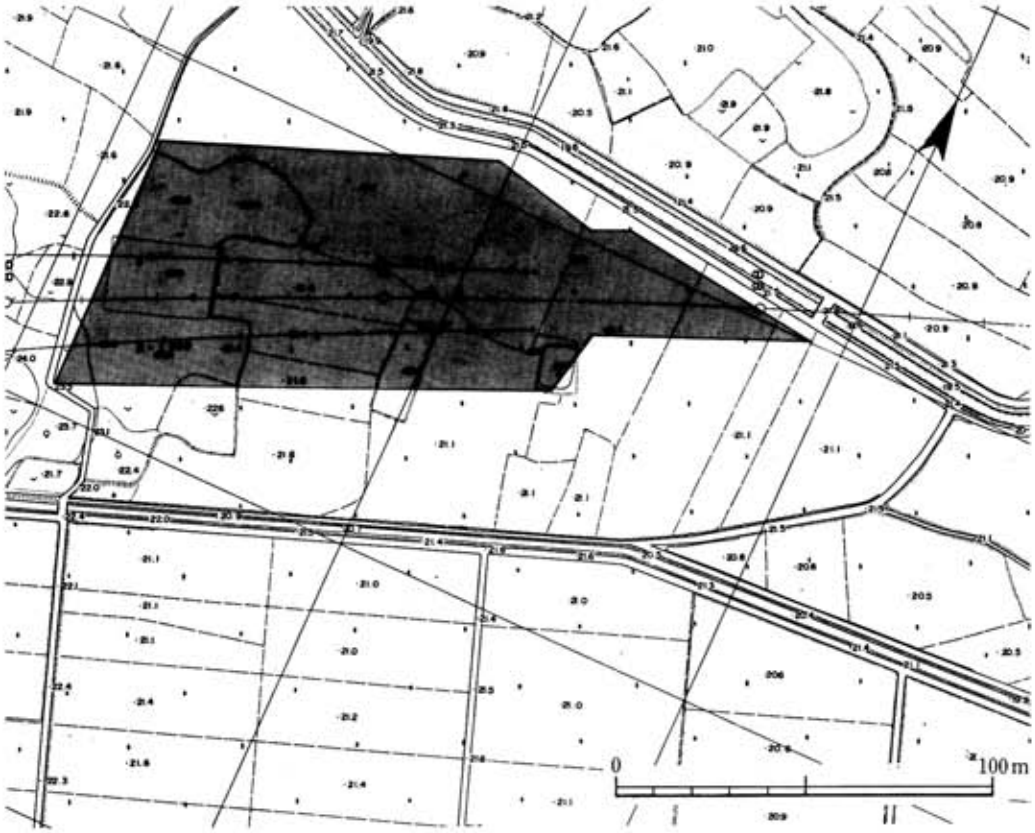



Fig. 111 撰分遺跡周辺地形図

Fig. 112　撰分遺跡遺構配置図

## 2．遺　構

### 住居跡

撰分遺跡での住居跡は調査区の東側～中央部に集中した。時代別には弥生時代の住居跡が8棟、古墳時代の住居跡が16棟の計24棟を検出した。住居跡の一部は路線用地の境界にあり、完掘できない住居跡もあった。住居域は調査区の南北に広がることが予想される。

#### ＳＢ003住居跡（Fig. 113）

ＳＢ003住居跡は遺跡の東の南側境界部にあり、昭和55年の耕地整理事業の水路工事中に確認されていた住居跡である。住居跡の中央部は工事によって削平され、残る南側は路線用地外に広がるため全面発掘はできなかった。平面は北壁側4.20m、西壁側の残存長3.90m、水路南側の断面部までの2.50mを合わせ6.40m以上の長方形の竪穴式住居跡である。床面までの深さ0.32m、西壁側に幅1.1m、床面との比高差0.1mのベット状遺構を持つ。柱穴は検出できなかった。遺物は埋土と床面から甕が出土した。遺物から弥生時代中期後半の住居跡であろう。

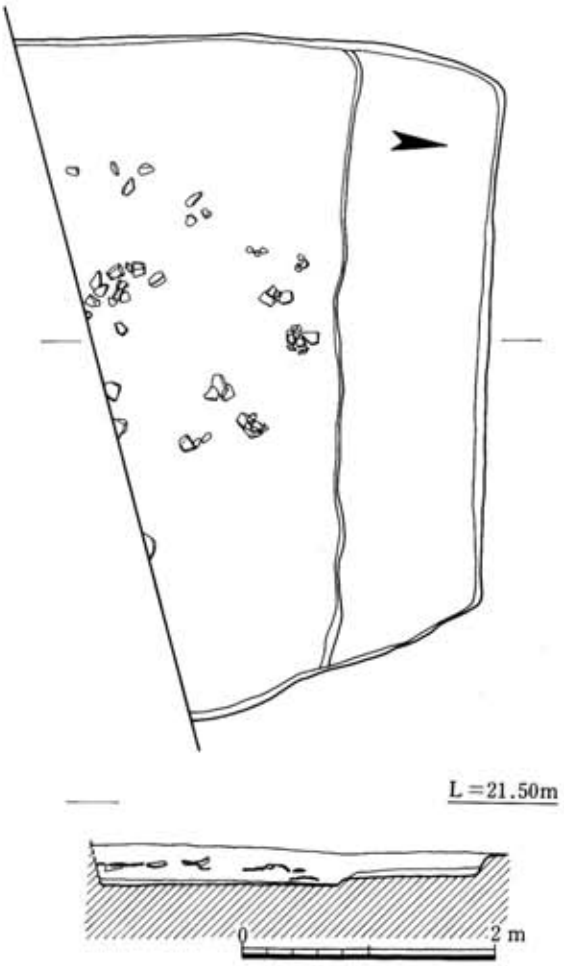



Fig. 113　撰分遺跡ＳＢ003住居跡実測図

#### ＳＢ004住居跡(Fig. 114, PL. 57－2)

ＳＢ004住居跡は調査区の北東にあり、住居跡の大部分は路線用地外に広がり全面発掘はできなかった。ＳＢ005住居跡に南壁側を切られていた。平面は中央部の東西の壁間は4.0mあり、方形に近い竪穴式住居跡であろう。床面までの深

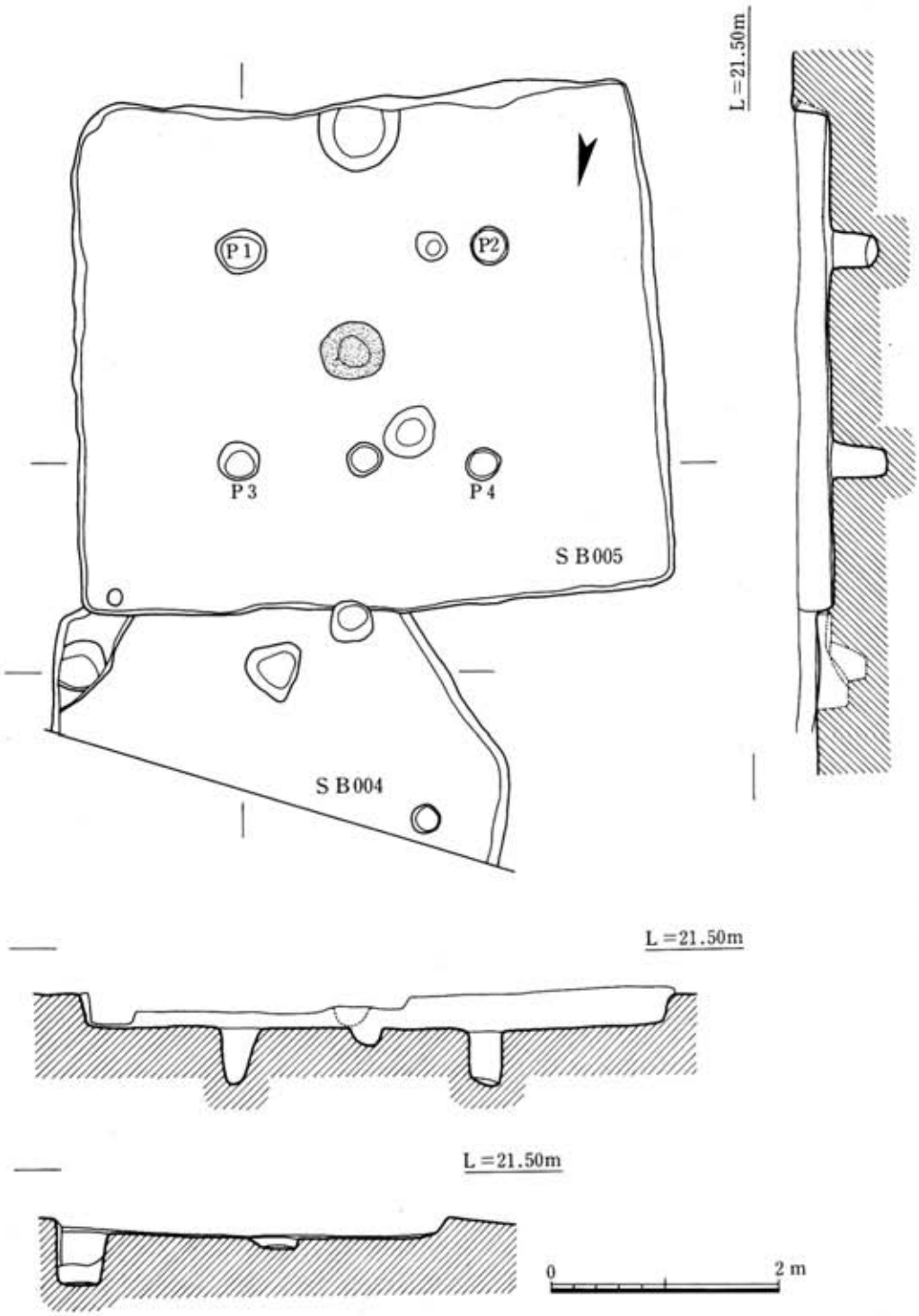



Fig. 114 撰分遺跡SB004・SB005住居跡実測図

さ0.17mを残す。南側の浅い土壙は炉跡と思われる。中央部の西にある深さ0.27mの小穴は柱穴の1個であろう。埋土から弥生時代中期の土器が出土した。

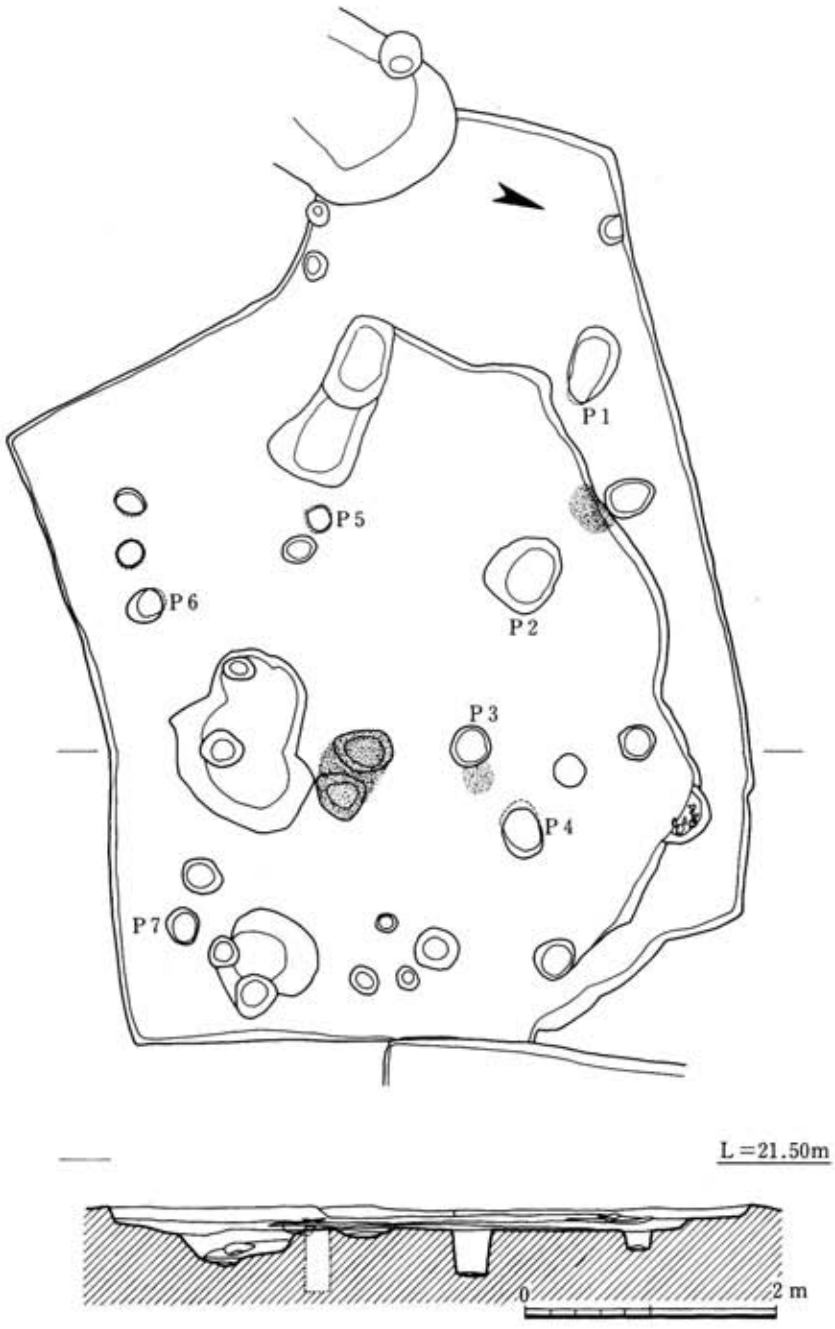



Fig. 115 撰分遺跡SB006住居跡実測図

**S B005住居跡** (Fig. 114, PL. 57－2)

S B005住居跡はS B004住居跡の南にあり、S B004住居跡を切っている。平面は長軸を東西にとる長方形の竪穴式住居跡である。長軸5.20m、短軸4.50m、床面までの深さ0.30mを測る。壁はほぼ垂直に立ち壁高0.25mを残す。南壁下の中央部に長軸0.70m、短軸0.60m、深さ0.18mの土壙があり貯蔵穴であろう。住居跡中央部に炉跡を配置している。小穴は7個あり、P 1～P 4は深さ0.46～0.49mあり主柱穴と思われる。遺物は床面から土師器杯が出土した。

**S B006住居跡** (Fig. 115, PL. 58－1)

S B006住居跡はS B005住居跡の南西に隣接し、平面は長方形に近い不整形の竪穴式住居跡である。長軸7.50m、短軸5.10m、床面までの深さ0.16mを測る。北側に床面より0.08m高い床面があり、別に住居跡が存在したとも思われる。中央部やや東側に2個の焼土穴があり炉跡であろう。P 1～P 7の7個の小穴は深さが床面から0,40m以上あり柱穴に関係すると思われる。遺物は弥生時代後期の甕が出土している。

**S B007住居跡** (Fig. 116, PL. 58－2)

S B007住居跡はS B005住居跡の西10mにあり、住居跡の北壁側は削平され、南壁側の一部

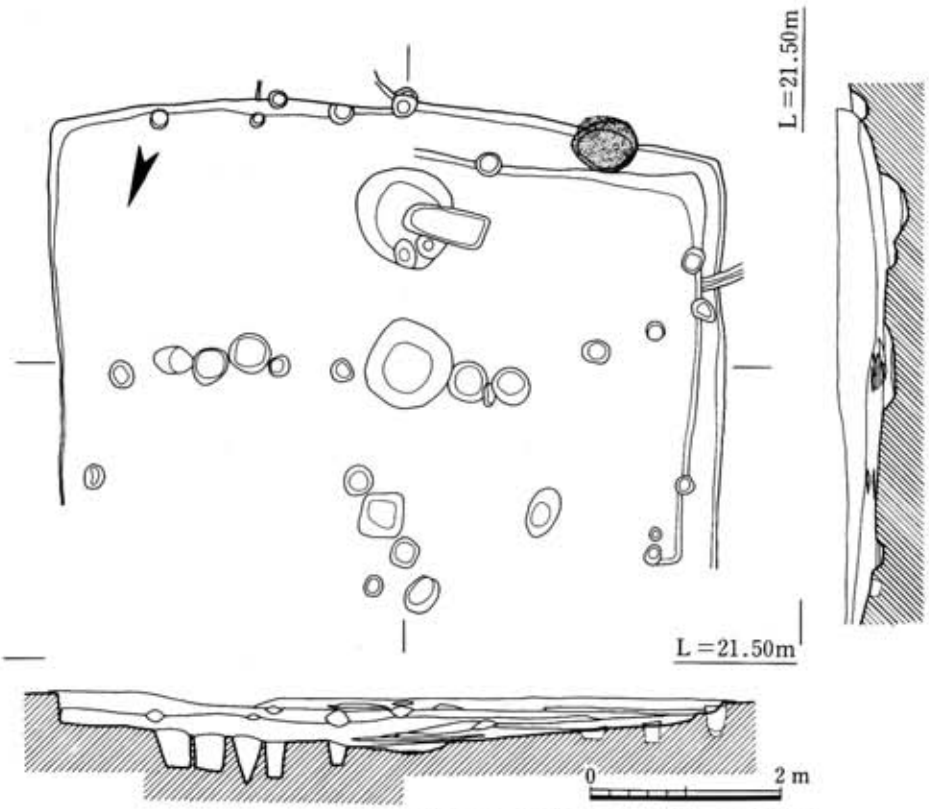



Fig. 116 撰分遺跡S B007住居跡実測図

もＳＢ028住居跡に切られている。平面は東西の長軸7.0m、南北の残存する短軸4.10mを測る長方形の竪穴式住居跡である。東壁は垂直に立ち0.30mの壁高を残す。住居跡中央部にある0.90mの隅丸方形の土壙が炉跡であろう。南壁側の土壙は貯蔵穴と思われる。壁面および住居跡内にある32個の小穴から柱穴を特定することはできなかった。南側の壁面に残る焼土穴はＳＢ028住居跡の炉跡である。遺物は埋土から弥生時代中期の甕が出土、床面から二重口縁を持つ土師器壺が出土した。遺物から古墳時代前期の住居跡と思われる。

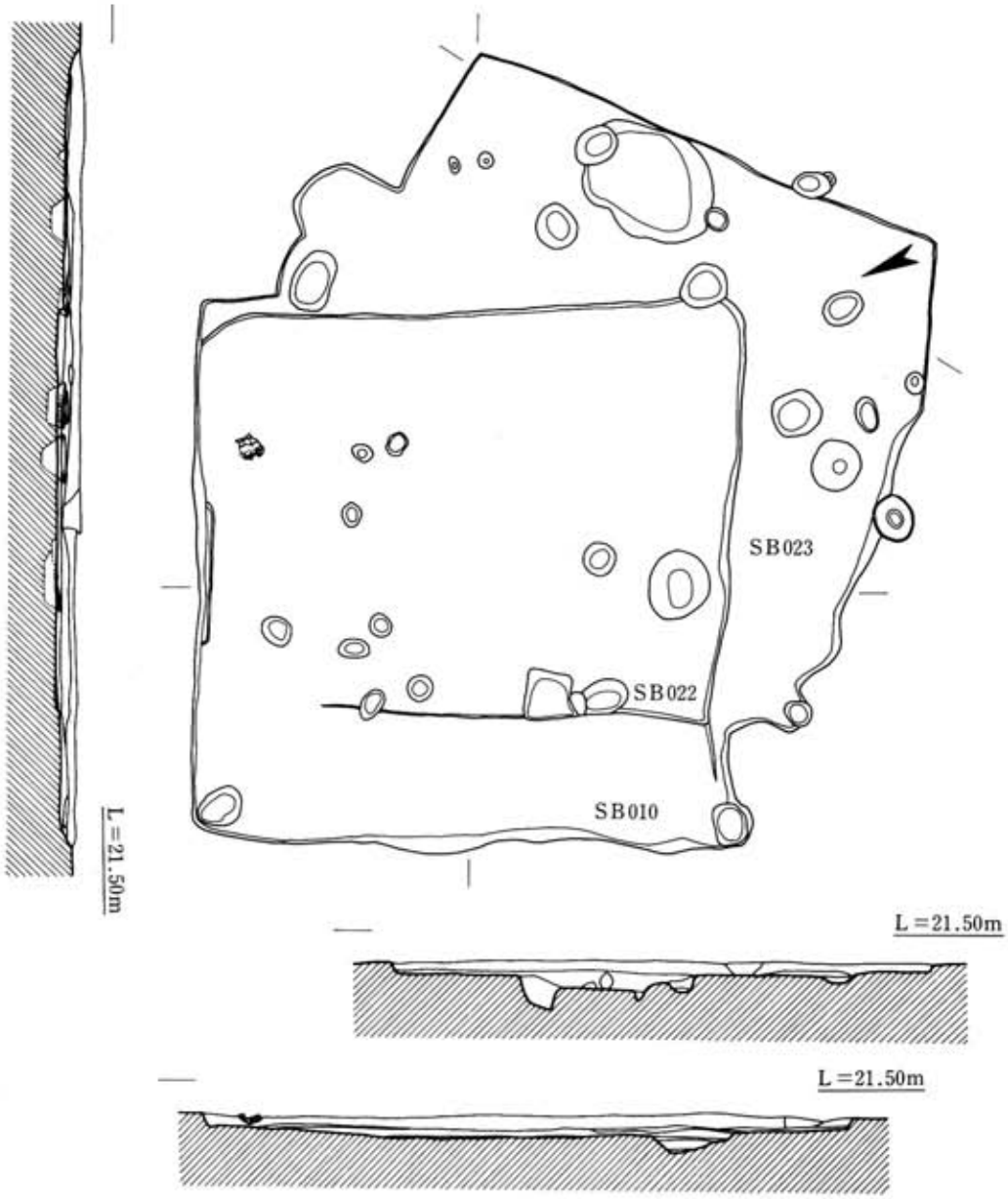



Fig. 117 撰分遺跡ＳＢ010・ＳＢ022・ＳＢ023・住居跡実測図

**S B010住居跡**（Fig. 117, PL. 59－1）

S B010住居跡はS B022・S B023住居跡と複合し、調査区東部の南側にある。S B022住居跡を切り、S B023住居跡に切られている。北東側の壁と北西側の壁を残し、平面は北東5.75m、北西6.0mを測る正方形に近い竪穴式住居跡である。壁はレンズ状の断面になり、床面までの深さ0.18mを測る。北西壁の両隅に1個ずつの小穴を持つが柱穴との関係は不明である。遺物は床面から土師器高杯が出土した。

**S B022住居跡**（Fig. 117, PL. 59－1）

S B022住居跡はS B010・S B023住居跡と切り合う複合の住居跡である。S B010住居跡内に入った状態で、S B010住居跡の床面より0.08m低い床面を持つ。S B010・S B023住居跡に切られているため住居跡の規模は不明であるが、平面は長軸5.90m、短軸3.90m以上の長方形の竪穴式住居跡と思われる。遺物は土師器甕が出土した。

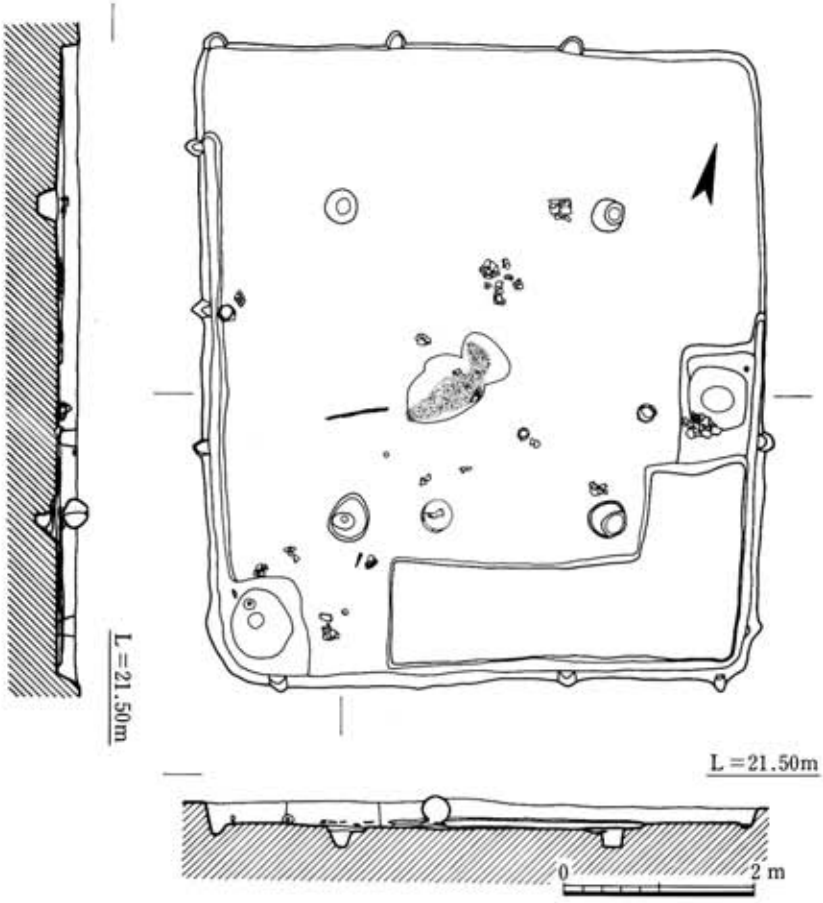



Fig. 118　撰分遺跡S B012住居跡実測図

**S B023住居跡** (Fig. 117, PL. 59－1)

S B023住居跡はS B010・S B022住居跡の南側にあり切り合う。S B010住居跡に切られ、南東壁長5.35m、南西壁長5.53mと北東・北西の壁の一部を残し、平面は方形に近い竪穴式住居跡と思われる。壁はレンズ状になり明瞭ではない。住居跡の床面は0.22mの深さあり、S B022住居跡の床面より0.08m高い。住居跡内の小穴と柱穴の関係は不明である。遺物は土師器杯が出土した。

**S B012住居跡** (Fig. 118, PL. 59－2)

S B012住居跡は調査区の東部の中央、S B010住居跡の西15mの距離にある。平面は長軸を南北にとり6.74m、短軸5.42mの長方形の竪穴式住居跡である。残存する壁高は0.20～0.22mを測り、垂直に近い。南壁側～東壁側に幅0.95～1.07m、床面との比高0.05mのL字形のベット状遺構を持ち、西壁側から南西隅の貯蔵穴に流れ込む溝と、南側のベット状遺構周辺から東壁中央部の貯蔵穴に流れ込む溝を有する。住居跡中央部の焼土穴は炉跡であろう。柱穴は住居跡内に4個あり、柱間は3.30m、2.80mを測る。壁面にも1辺に2～4個の小穴が残り、1辺に4個ずつ柱穴があったと思われる。住居跡内の柱穴は床面から0.21～0.36mの深さである。埋土は黒褐色で、床面に炭火木材が残り、火災を受けた住居跡と思われる。南側のベット状遺

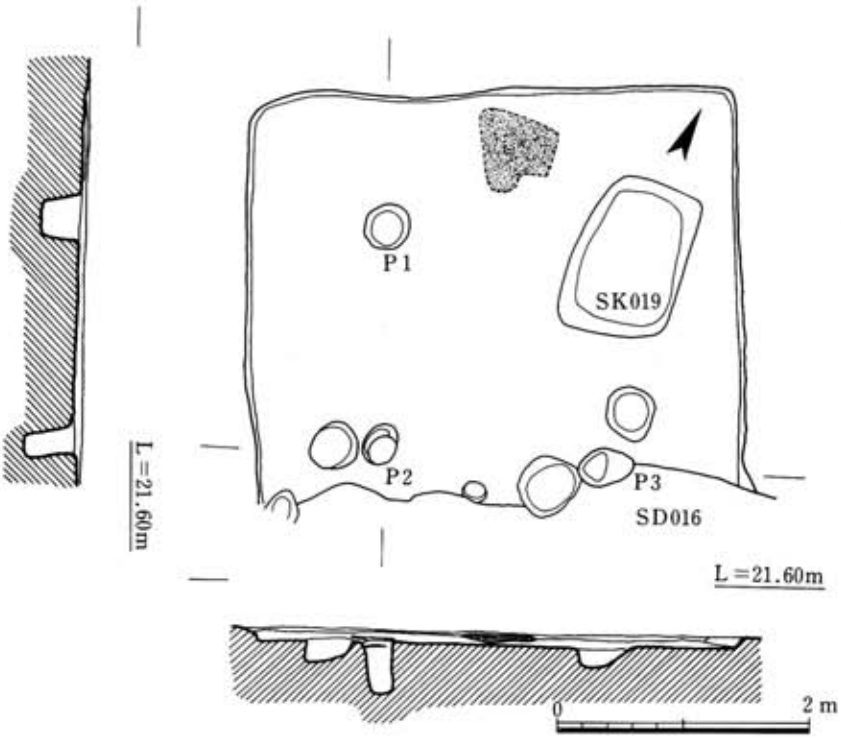



Fig. 119 撰分遺跡S B015住居跡実測図

構の下に口縁部を下に向けた完形の二重口縁を持つ土師器壺が出土し、貯蔵穴から土師器杯・高杯・床面から壺が出土した。遺物から古墳時代前期の住居跡である。

**S B015住居跡** (Fig. 119, PL. 60－1)

S B015住居跡はS B012住居跡の南25mの調査区最南にある。S D016溝に南壁側を切られ、平面は北壁と柱穴から復元し、東西軸4.0m、南西軸3.20m前後の長方形の竪穴式住居跡と思われる。床面の深さは0.10mを測る。北壁側中央部の焼土は炉跡であろう。8個の小穴のうちP1～P3は0.15～0.40mの深さを持ち柱穴と思われる。住居跡内のS K019土壙に1個は切られていよう。遺物は土師器鉢が出土している。古墳時代の住居跡と思われる。

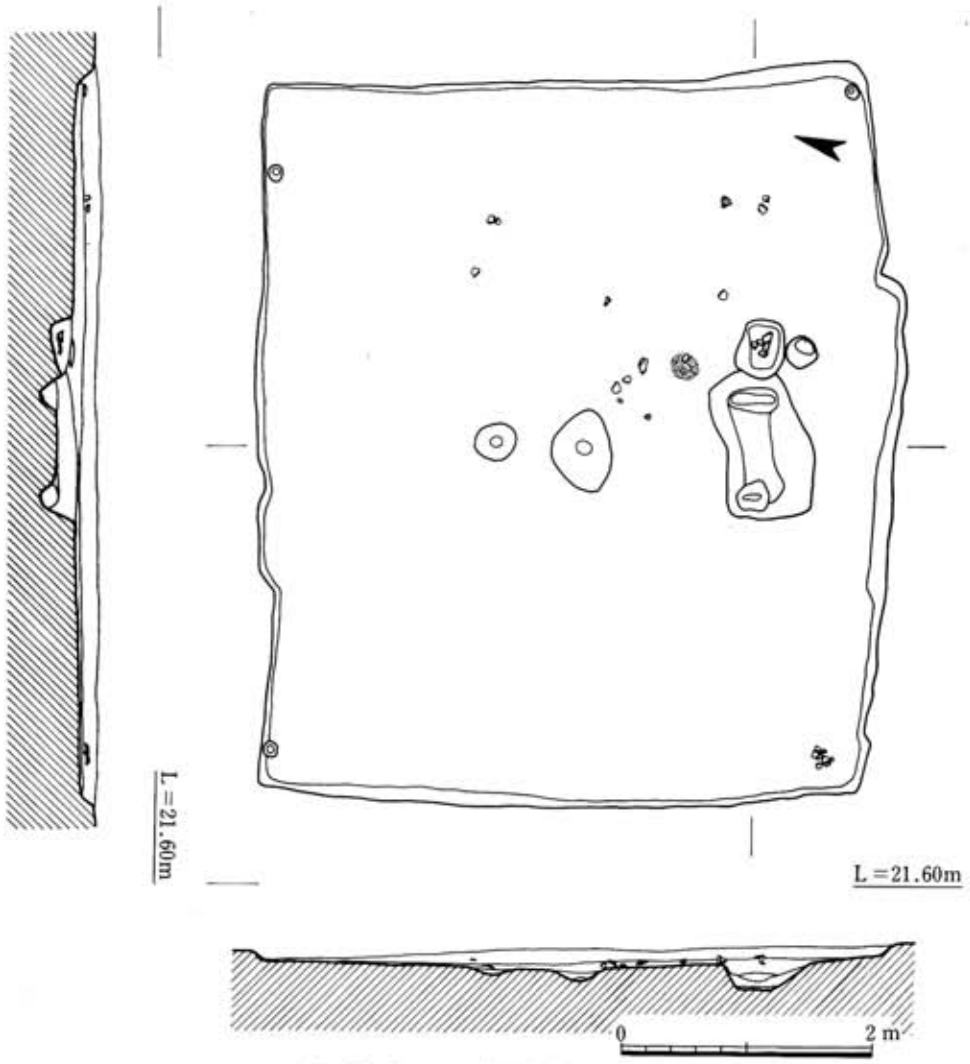



Fig. 120 撰分遺跡S B020住居跡実測図

**ＳＢ020住居跡**（Fig. 120, PL. 60－2）

ＳＢ020住居跡はＳＢ012住居跡の北西６ｍにある弥生時代後期の住居跡である。平面は東西の長軸5.82m、短軸5.12mを測る長方形の竪穴式住居跡である。床面の深さは0.12～0.22mを測る。南壁側に長さ1.20m、幅0.70m、深さ0.17mの土壙があり貯蔵穴であろう。７個の小穴と柱穴の関係は不明である。貯蔵穴北側の焼土と炉跡の関係も不明である。弥生時代中期のＳＤ024溝を切っている。床面から壺の口縁部が出土した。

**ＳＢ027住居跡**（Fig. 121, PL. 61－1）

ＳＢ027住居跡はＳＢ020住居跡の南１ｍに隣接する弥生時代中期の住居跡である。平面は南北の長径5.20m、短径4.0mを測る楕円形の竪穴式住居跡である。床面の深さ0.10～0.19mを測る。東壁側に長径0.80m、短径0.62m、床面からの深さ0.36mの貯蔵穴を持つ。住居跡中央部付近の浅い土壙は炉跡であろう。住居跡内の６個の小穴と柱穴の関係は不明である。埋土に多量の土器片が含まれ、床面直上から出土した甕は弥生時代中期中葉の時期である。

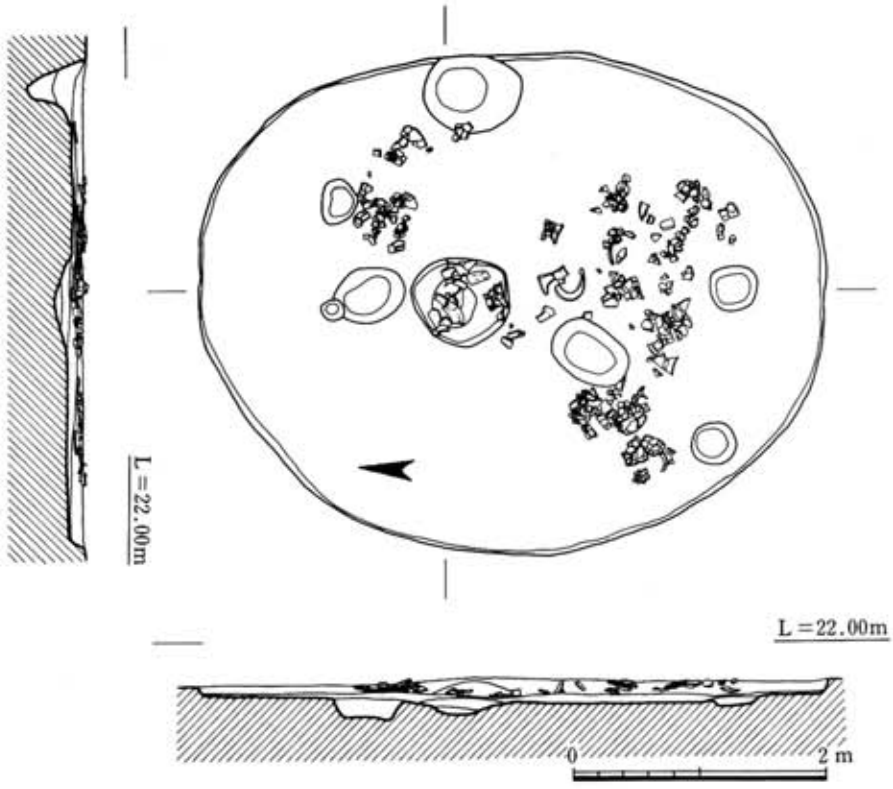



Fig. 121　撰分遺跡ＳＢ027住居跡実測図

**ＳＢ028住居跡**（Fig. 122, PL. 58－2）

ＳＢ028住居跡は調査区の東側にあり、ＳＢ007住居跡を切っている。ＳＢ007住居跡とは埋土

の土質が同じであったため遺構検出面での切り合いは確認できなかった。平面はやや南北方向に長軸をとり5.38m、短軸4.62mを測る長方形の竪穴式住居跡である。住居跡上面は削平され、住居跡中央部での床面の深さは0.10mを残す。南側壁面から北側壁面の中央部に幅約1.0mのL字形のベット状遺構を持ち、北西壁側中央部に長さ0.72m、幅0.65m、深さ0.25mを測る貯蔵穴を狭み、約1.25m四方のベット状遺構を持つ。床面との比高は約0.10mである。SB007住居跡壁面にある焼土穴はSB028住居跡の中央部にあたり炉跡である。ベット状遺構と壁面の間に幅0.10m、深さ0.07mの溝がそれぞれ北西壁下と南西壁下に延びる。住居跡内の約20個の小穴と柱穴との関係は不明である。遺物は土師器破片が床面から出土した。遺物から古墳時代前期の住居跡と思われる。

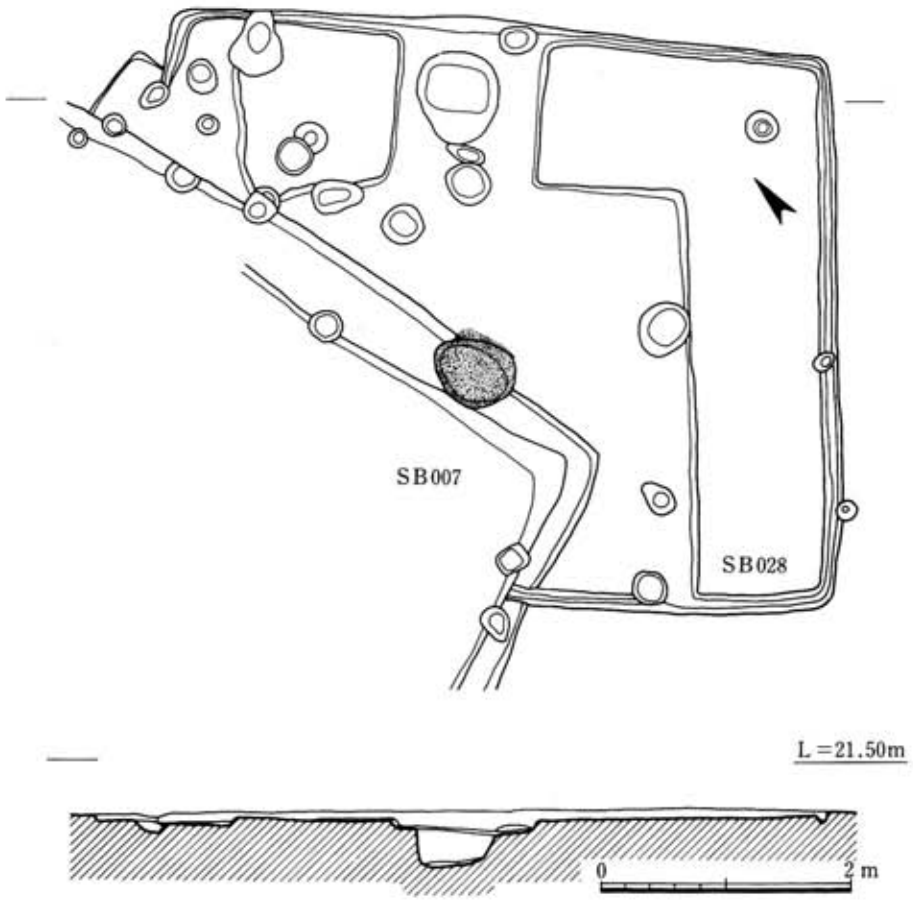



Fig. 122 撰分遺跡SB028住居跡実測図

**SB029住居跡** (Fig. 123, PL. 61−2)

SB029住居跡は調査区の北東側にあり、SB005住居跡に切られた弥生時代中期後半の住居跡である。平面は東西の長軸は不明であるが南北の短軸3.80mを測る長方形の竪穴式住居跡である。床

面は0.14～0.20mの深さを測る。南壁中央部に長軸0.58m、短軸0.35m、深さ0.45mの長方形の貯蔵穴を持つ。住居跡中央部にある長軸0.75m、短軸0.63m、深さ0.09mの穴は炉跡と思われる。住居跡内の小穴と柱穴の関係は不明である。住居跡の床面直上で甕が出土した。

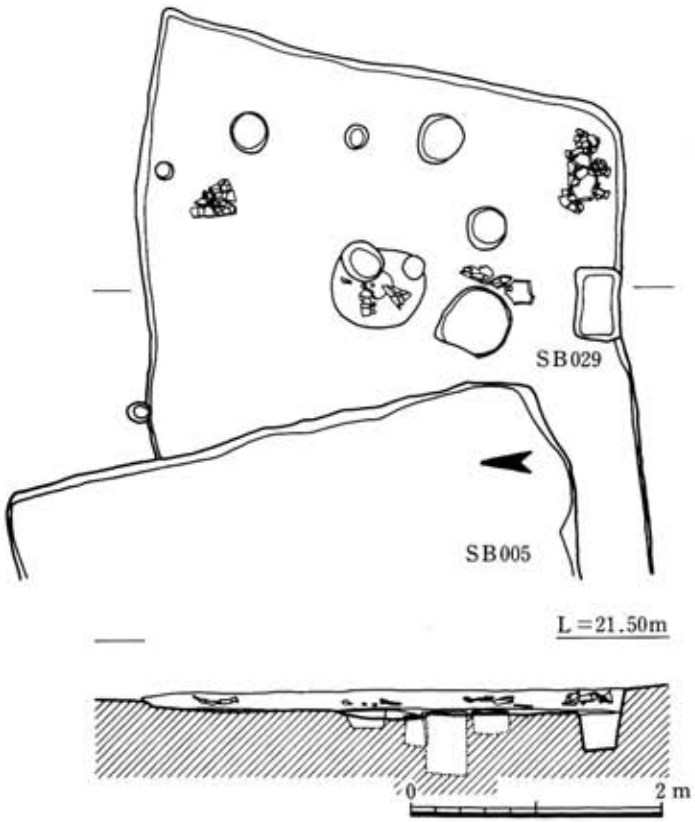



Fig. 123 撰分遺跡SB029住居跡実測図

**SB059住居跡** (Fig. 124, PL. 62－1)

SB059住居跡は調査区の中央部よりやや東側にあり、SB029住居跡の西4mにある。平面は南北方向の長径7.04m、短径6.58mを測る円形に近い楕円形の竪穴式住居跡である。壁は垂直に立ち残存壁高0.12mを測る。住居跡内には14個の小穴があり、床面からの深さはP2が0.41m、P4－0.38m、P5－0.56m、P6－0.48m、P9－0.53m、P10－0.41m、P11－0.46m、P12－0.40mとなる。残る6個は0.30m以下である。住居跡中央部に長軸0.40m、短軸0.20mの扁平な石が配置されていた。埋土から弥生時代中期中葉の甕が出土した。P1、P2の北側に長軸1.20m、短軸1.09mの不整形土壙が掘られ、2基の小児用甕棺墓が埋葬されていた。甕棺墓の墓壙は遺構検出面では確認できなかったが、住居跡床面から出土した土器と甕棺墓の時期の差はなく、SB059住居跡を放棄した直後に甕棺墓が埋葬されたと考えるのが妥当と思わ

れる。

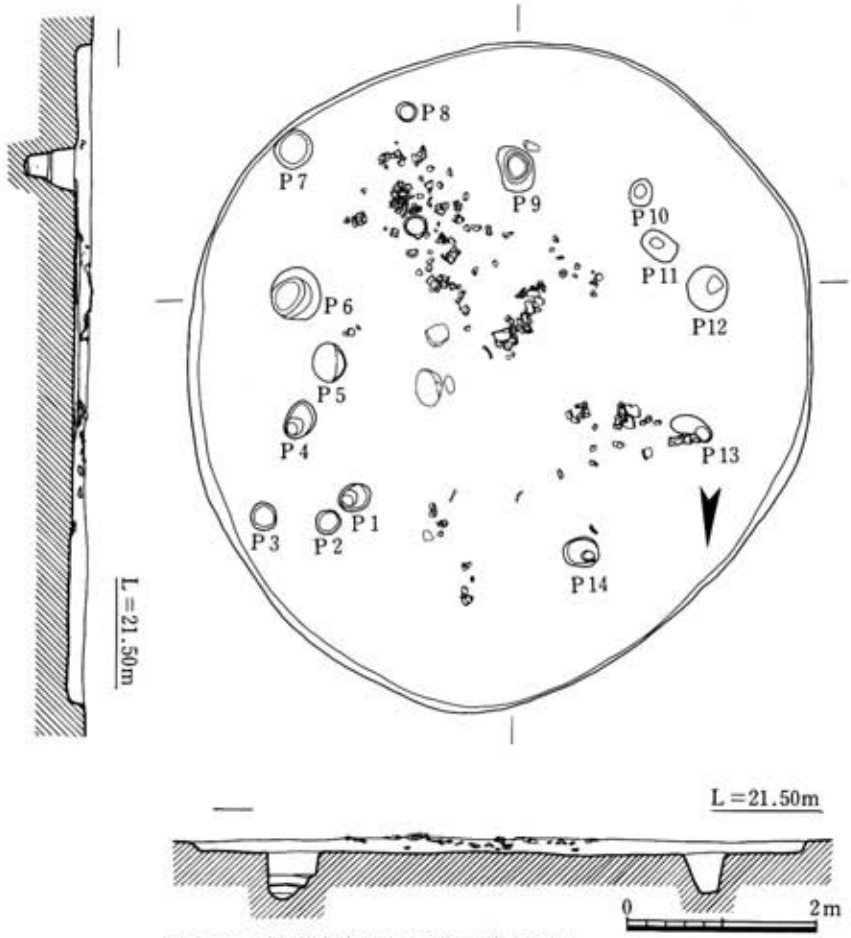



Fig. 124　撰分遺跡ＳＢ059住居跡実測図

**ＳＢ060住居跡**（Fig. 125, PL. 62－2）

ＳＢ060住居跡はＳＢ059住居跡の北西２ｍに隣接する。平面は中央部がやや幅広い長方形の竪穴式住居跡である。東西方向の長軸5.55m、短軸の中央部3.07m、幅が狭い東の短軸2.25m、西の短軸2.60mを測る。住居跡の深さは中央部で0.18mを測り断面はレンズ状に近い。中央部に長軸0.80m、短軸0.70mの凹地状の土壙があり炉跡とも考えられる。遺構内に７個の小穴があるが、柱穴との関係は不明である。埋土は全面が黒色であり、埋土中に含まれていた遺物も黒色である。住居跡以外の遺構とも考えられ、土器焼き場の可能性もある。遺物は埋土から弥生時代中期の甕が出土した。

**ＳＢ061住居跡**（Fig. 126, PL. 63－1）

ＳＢ061住居跡は調査区の中央部から北東にあり、ＳＢ060住居跡の北１ｍに隣接する。東か

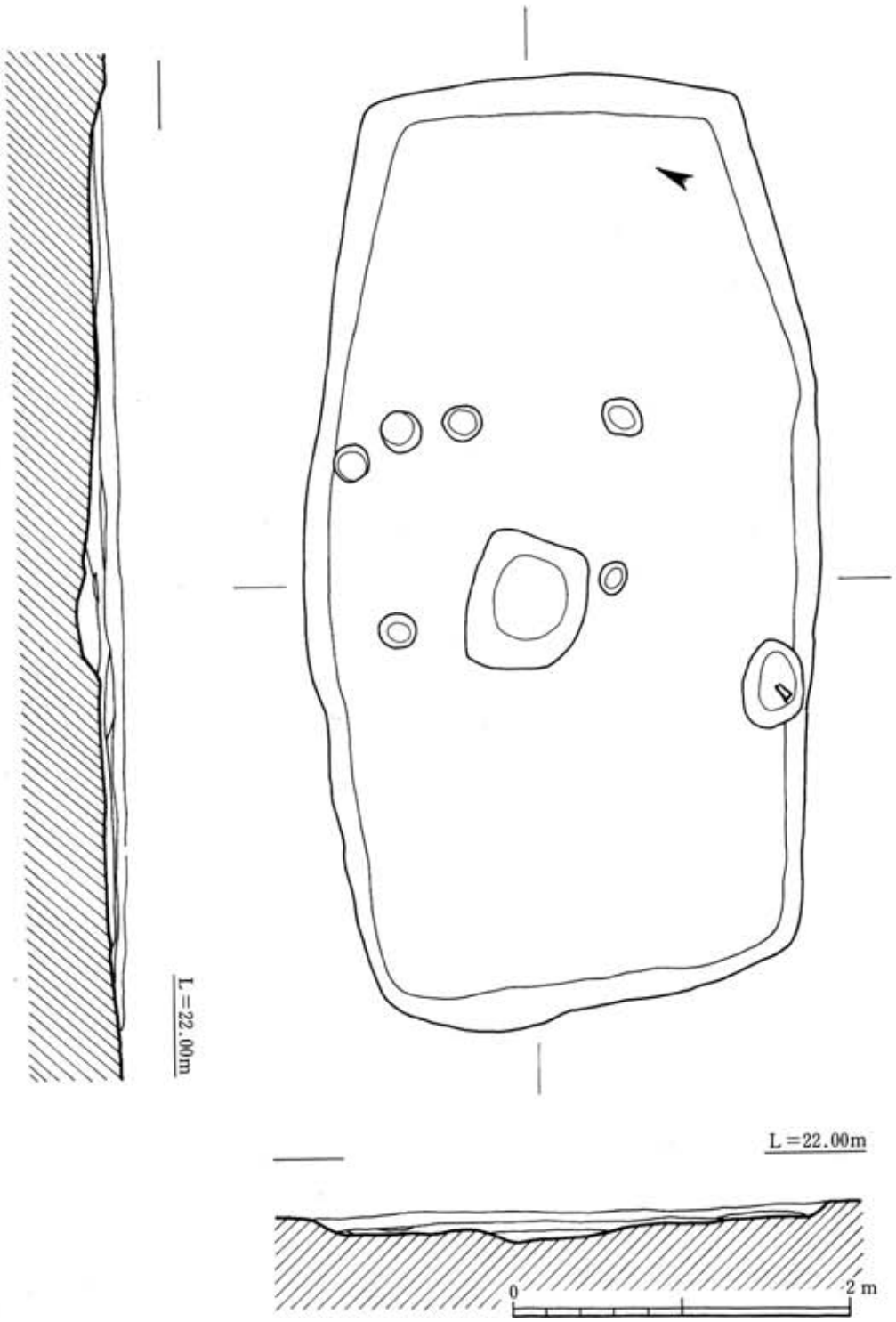



Fig. 125 撰分遺跡ＳＢ060住居跡実測図

ら西に延びる弥生時代中期のＳＤ024溝を切り、北西隅を鎌倉時代のＳＰ097土壙墓、西壁をＳＫ055土壙に切られているが、床面まで約0.50mの深さを残す住居跡であるため遺構の残存度は良好である。平面は長軸を東西方向にとり4.95m、短軸3.93mを測る長方形の竪穴式住居跡である。東壁下から南壁下の一部と西壁下から南壁下の一部に幅約1.1mのＬ字形のベット状遺構を持つ。壁面とベット状遺構の間に幅0.08～0.15m、深さ0.08mの溝をめぐらしている。住居跡中央部に焼土穴があり炉跡と思われる。住居跡内には４個の小穴があり、東側のベット状遺構上の小穴と西側のベット状遺構下の小穴は柱穴になろう。埋土は全面が黒色になり、炭火木片が混入し、火災を受けた住居跡である。東壁面と南壁面に段を持ち、火災後、住居跡面を拡張し、再使用したと思われる。埋土や床面から土師器杯・壺・高杯などが多量に出土した。遺

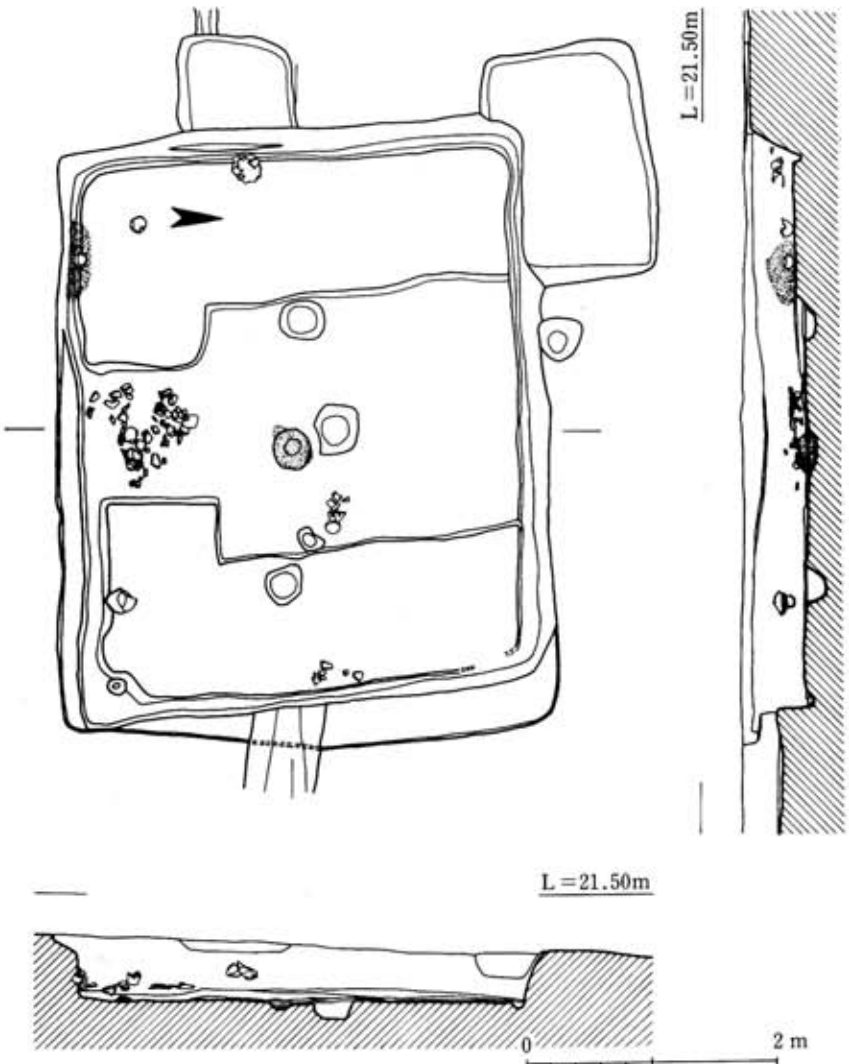



Fig. 126　撰分遺跡ＳＢ061住居跡実測図

物から古墳時代前期の住居跡である。

**S B073住居跡** (Fig. 127, PL. 63−2)

S B073住居跡は調査区の東部北側、S B020住居跡の北東1mに隣接する。S D078溝が住居跡南西壁部から北壁の中央部までを斜めに切っている。北側は削平を受け残りが悪い。平面は長軸を東西方向にとり6.17m、短軸4.85mを測る長方形の竪穴式住居跡である。南壁中央部の残存壁高0.26mを測る。西壁側から南壁側中央部までと東壁側から南壁側中央部までの2ヵ所に幅0.90〜1.10mのL字形のベット状遺構を持つ。床面との比高は0.07mである。壁面下に幅

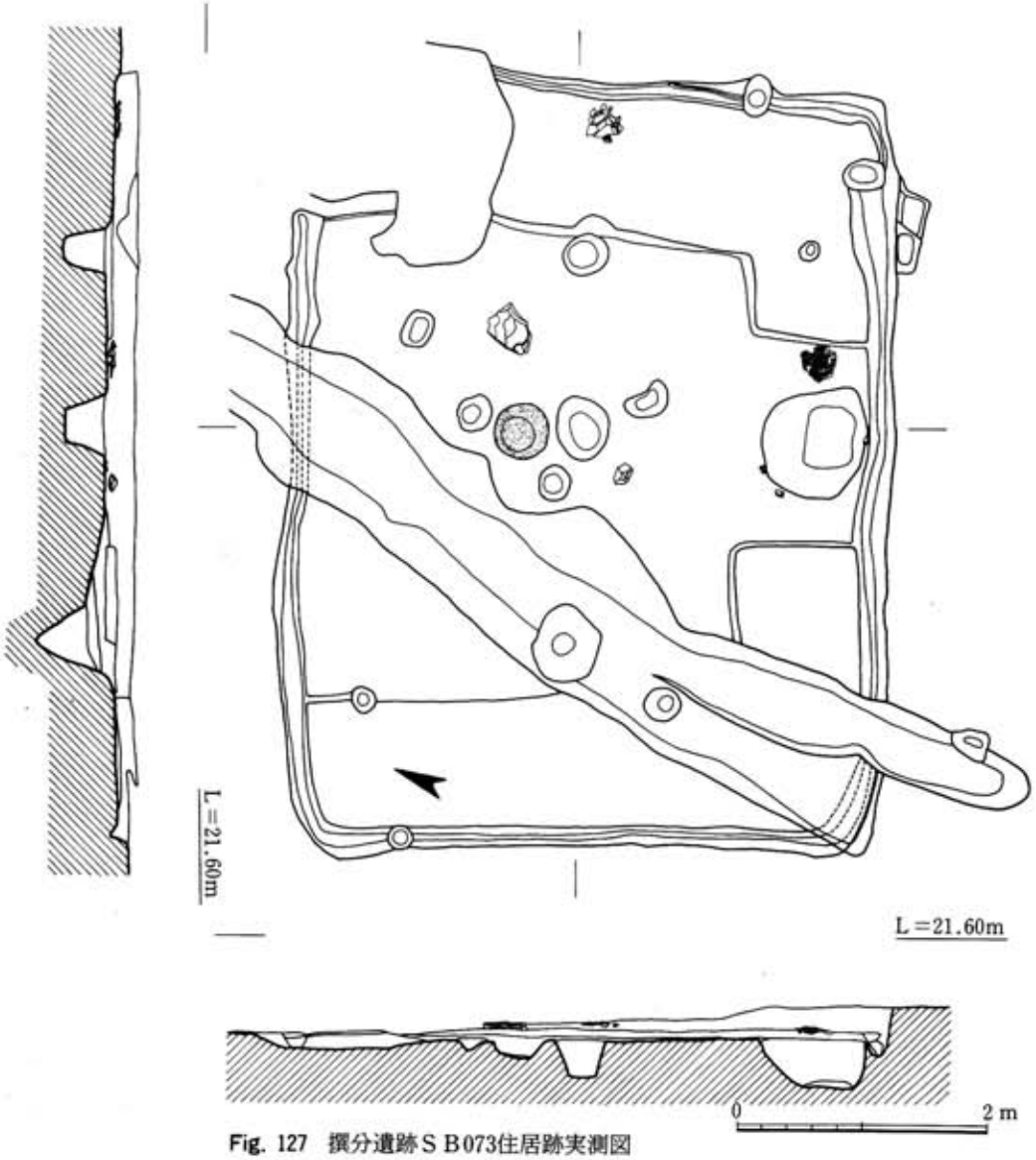



Fig. 127 撰分遺跡S B073住居跡実測図

0.10～0.16mの溝をめぐらしている。南壁中央部に長さ0.85m、幅0.83m、深さ0.40mの隅丸方形の貯蔵穴を持つ。住居跡中央部付近に直径0.45mの焼土穴があり炉跡であろう。住居跡内と住居跡壁面に0.07～0.49mまでの深さの小穴13個があるが、柱穴との関係は不明である。床面とベット状遺構上で土師器壺が出土した。遺物から古墳時代前期の住居跡と思われる。

**S B074住居跡** (Fig. 128, PL. 64－1)

S B074住居跡は調査区中央部より東の北隅にあり、S B061住居跡の西3.5mに隣接する。平面は長軸を南北にとり5.66m、短軸4.66mを測る長方形の竪穴式住居跡である。北側はやや削平を受けている。残存する壁高は北壁で0.10m、東壁0.27m、南壁0.20m、西壁0.21mを測る。北壁側に幅0.78m、長さ3.65m、床面との比高0.07mのベット状遺構と、南壁側～西壁側に幅0.92～1.05m、床面との比高0.08mのL字形のベット状遺構を持つ。南壁側には壁面とベット

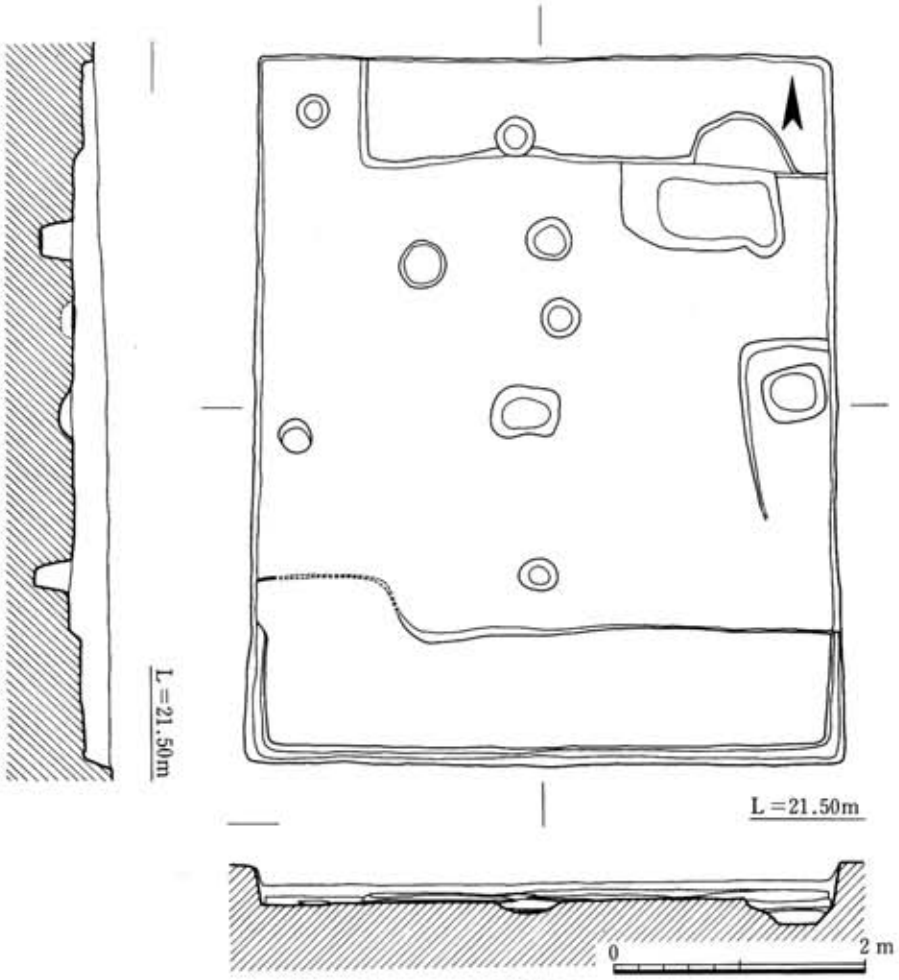
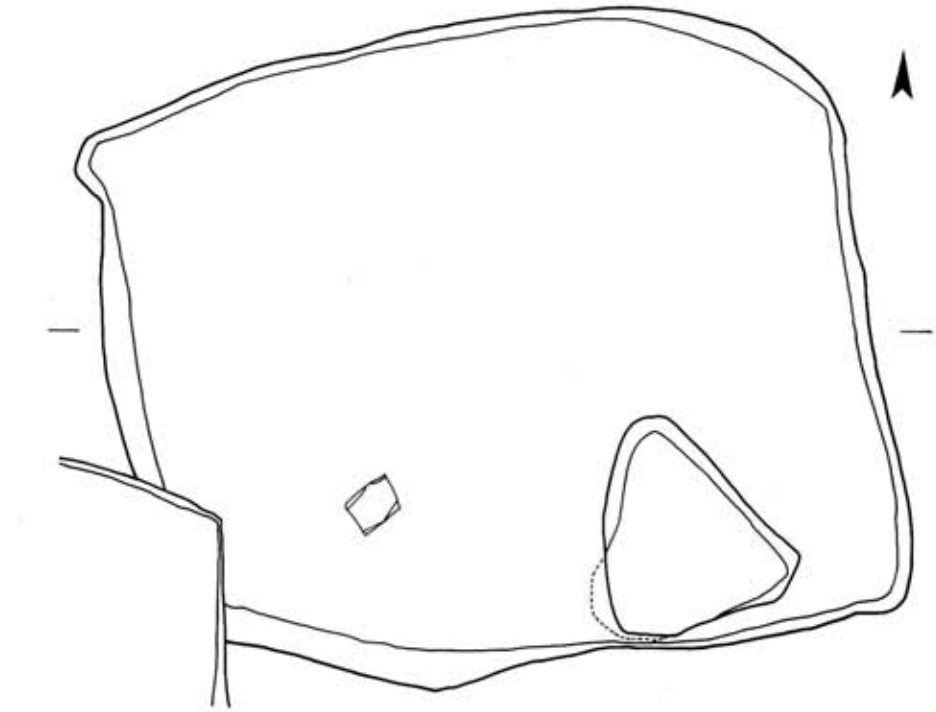



Fig. 128 撰分遺跡S B074住居跡実測図

状遺構の間に幅0.08m、深さ0.05mの溝をめぐらしている。東壁側中央部に長さ0.50m、幅0.45m、深さ0.21mの貯蔵穴と、北東側のベット状遺構下に長さ1.28m、幅0.70m、深さが0.20mの貯蔵穴を持つ。住居跡内には8個の小穴があるが柱穴との関係は不明である。遺物は出土しなかったが、住居跡の構造の対比から古墳時代前期の住居跡と思われる。

**S B075住居跡** (Fig. 129)

S B075住居跡は調査区中央部の北側にあり、S B074住居跡の南西1mに隣接する。住居跡の南西隅をS B093住居跡に切られている。平面は東西方向に長軸4.07m、短軸3.40mの長方形に近い隅丸形の竪穴式住居跡である。住居跡の全面が削平を受け、残存壁高は0.07～0.09mと



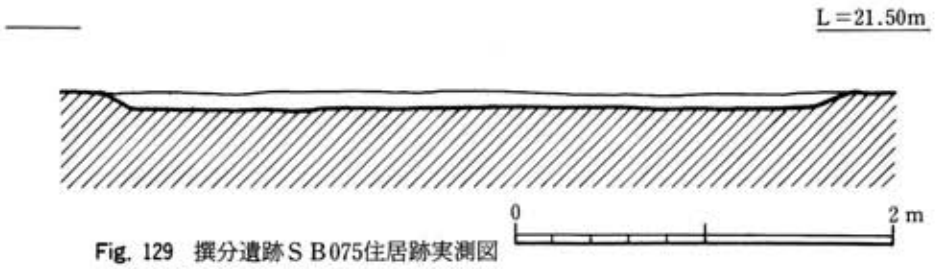



Fig. 129 撰分遺跡S B075住居跡実測図

浅く、断面はレンズ状である。南東隅に長軸1.1m、短軸0.95m、深さ0.48mの不整形の土壙があり貯蔵穴と思われる。柱穴は検出できなかった。住居跡内から遺物の出土はなかった。古墳時代の住居跡と思われる。

**S B079住居跡** (Fig. 130, PL. 64－2)

S B079住居跡は遺跡の中央部北側にある古墳時代前期の住居跡である。平面は西側に台形状の造り出しが設けられ、東西に長軸4.25～4.60m、短軸4.40mを測る長方形の竪穴式住居跡である。造り出しは幅1.50～1.83m、長さ1.0～1.70mである。住居跡は全面が削平され、床面

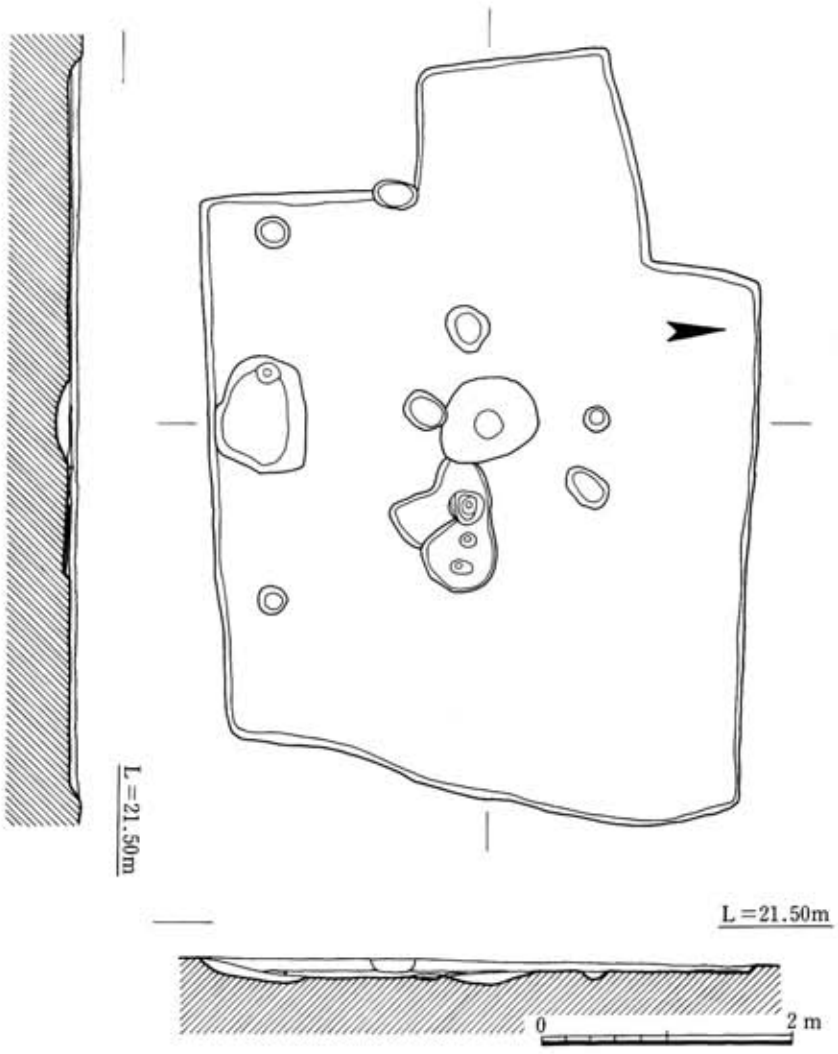



Fig. 130 撰分遺跡S B079住居跡実測図

の深さは0.05～0.08mを残す。南壁側中央部に幅0.72m、長さ0.95m、深さ0.10mの土壙があり貯蔵穴であろう。住居跡中央部に炉跡と思われる土壙がある。住居跡内の11個の小穴は深さが0.10m以下の浅い穴で柱穴との関係はわからない。住居跡床面には炭火木材が散乱し、埋土も黒色の灰土であり、火災を受けた住居跡と思われる。遺物は土師器杯が出土した。

**S B080住居跡**（Fig. 131, PL. 65－1）

S B080住居跡は調査区中央部の南側にあり、S D067溝に住居跡西壁の一部が切られている。平面は東西の長軸4.65m、短軸4.18mの長方形の竪穴式住居跡である。壁はほぼ垂直に立ち残存壁高は北壁0.35m、東壁0.38m、南壁0.37mを測る。南壁側中央部に長軸1.03m、短軸0.70m、深さ0.20mの長方形の土壙があり貯蔵穴と思われる。住居跡中央部のやや北側に長径0.54m、短径0.35m、深さ0.09mの楕円形の浅い土壙があり炉跡であろう。壁面と住居跡内に14個

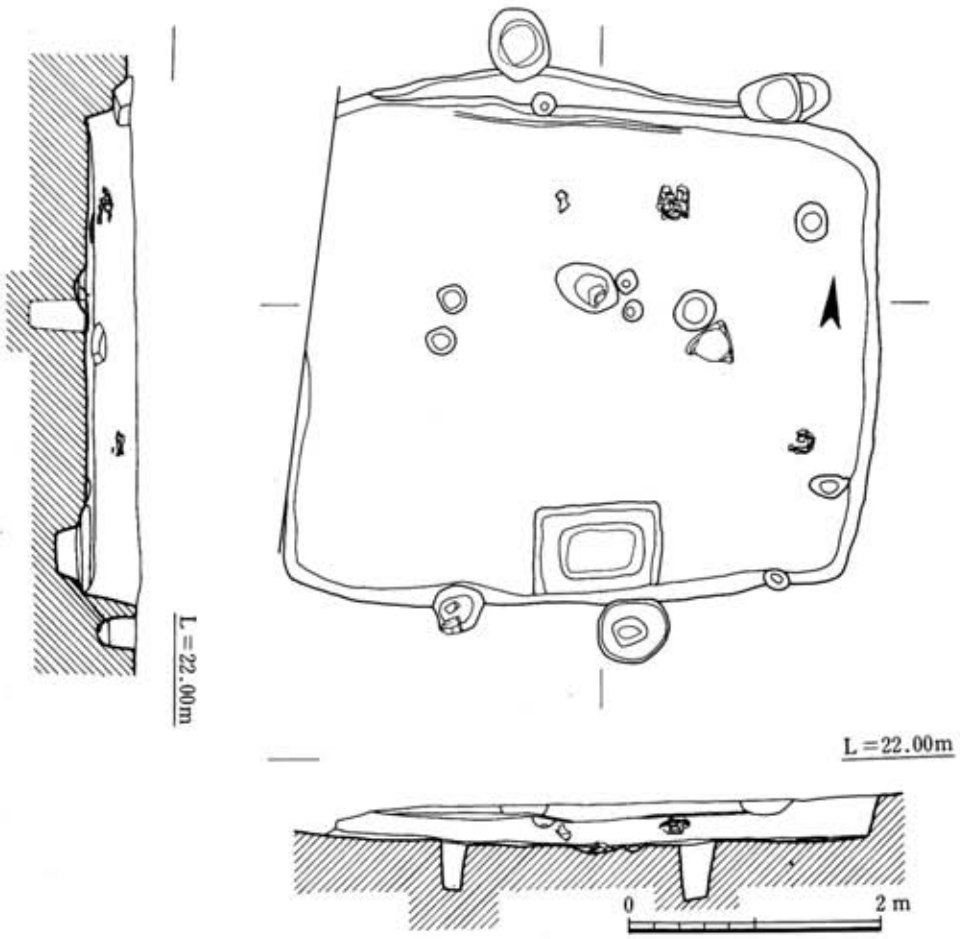



Fig. 131　撰分遺跡S B080住居跡実測図

の小穴があり、深さは0.06～0.62mと不揃いで柱穴との関係はわからない。北壁面にある段は拡張部であろうか。遺物は埋土、床面とも豊富であった。二重口縁を持つ土師器壺・丸底壺・杯などが出土した。遺物から古墳時代前期の住居跡である。

**ＳＢ092住居跡**（Fig. 132, PL. 65－2）

ＳＢ092住居跡は調査区中央部の北側にあり、住居跡の一部は路線用地外に延び全面発掘はできなかった。平面は長軸を南北にとり5.26m、短軸4.63mを測る長方形の竪穴式住居跡である。壁は垂直に近い。残存壁高は北壁0.08m、東壁0.24m、南壁0.30m、西壁0.30mを測る。南東隅の壁面下に長さ1.70m、幅1.10～1.20m、床面との比高0.06mのピット状遺構を設けている。住居跡中央部に長径0.88m、短径0.74m、深さ0.08～0.10mの楕円形の浅い土壙があり、炉跡であろう。東壁側の中央部に長径0.65m、短径0.55m、深さ0.13mの土壙があり貯蔵穴と思われる。４個の小穴と柱穴は不明である。遺物は土師器壺・高杯が出土した。遺物から古墳時代

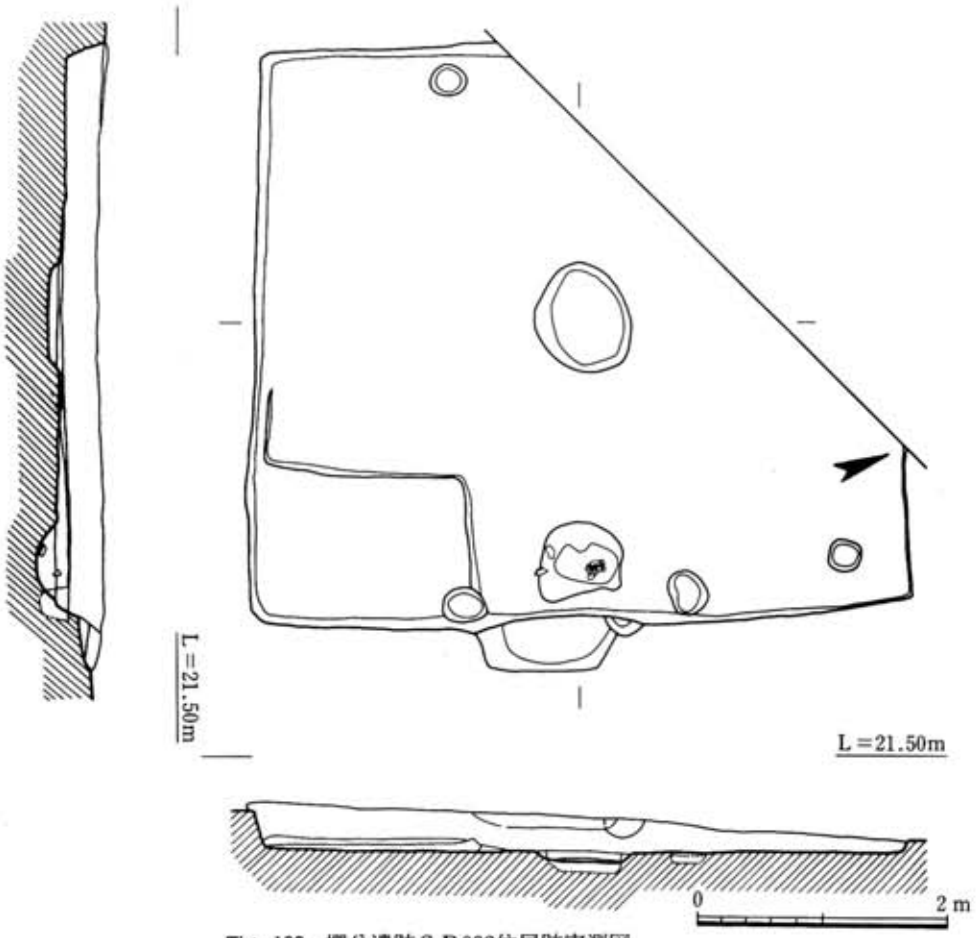



Fig. 132　撰分遺跡ＳＢ092住居跡実測図

前期の住居跡であろう。

**S B093住居跡** (Fig. 133, PL. 66－1)

S B093住居跡は調査区中央部のやや北側、S B092住居跡の南6mにあり、S B075住居跡の南西隅を僅かに切っている。平面は南北方向に長軸4.75m、短軸4.03mを測る長方形の竪穴式住居跡である。床面の深さは0.01～0.18mを測る。住居跡東壁側に長軸1.10m、短軸0.62～0.84m、深さ0.32mの不整形の土壙があり貯蔵穴であろう。中央部の長径0.87m、短径0.70m、深さ0.12mの浅い不整楕円形の土壙は炉跡と思われる。住居跡内の7個の小穴のうち床面からの深さはP 1 －0.45m、P 2 －0.34m、P 3 －0.23mを測り柱穴になると思われる。遺物は出土しなかったがS B075住居跡を切っていることから古墳時代の住居跡であろう。

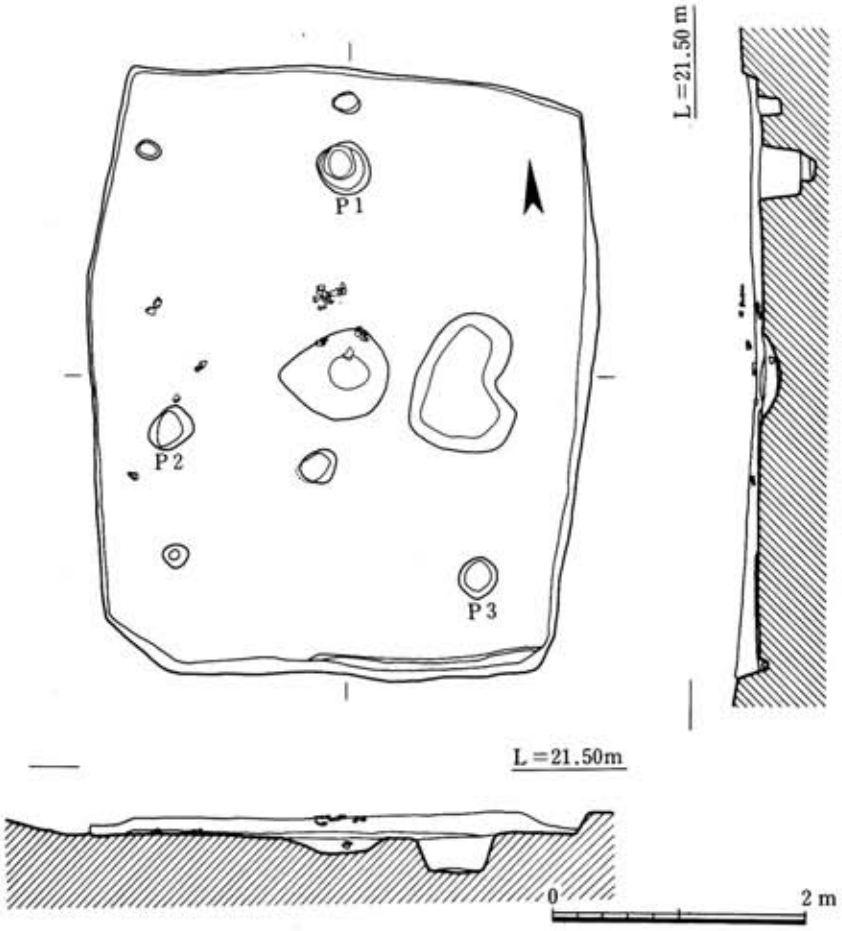



Fig. 133 撰分遺跡S B093住居跡実測図

Tab. 6 撰分遺跡住居跡一覧表

| 遺構番号 | 平面形 | 法量 | | | 時期 | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長辺(m) | 短辺(m) | 深さ(m) | | | |
| SB 003 | 長方形 | — | 4.20 | 0.32 | 弥生 | 甕 | ベット状遺構 |
| SB 004 | 方形 | — | 4.00 | 0.17 | 弥生 | 甕 | |
| SB 005 | 長方形 | 5.20 | 4.50 | 0.30 | 古墳 | 土師器杯 | |
| SB 006 | 不整形 | 7.50 | 5.10 | 0.16 | 弥生 | 甕 | |
| SB 007 | 長方形 | 7.00 | — | 0.30 | 古墳 | 土師器壺 | |
| SB 010 | 長方形 | 6.00 | 5.75 | 0.18 | 古墳 | 土師器高杯 | |
| SB 012 | 長方形 | 6.74 | 5.42 | 0.22 | 古墳 | 土師器壺・杯・高杯 | ベット状遺構 |
| SB 015 | 長方形 | 4.00 | 3.20 | 0.10 | 古墳 | 土師器鉢 | |
| SB 020 | 長方形 | 5.82 | 5.12 | 0.22 | 弥生 | 壺 | |
| SB 022 | 長方形 | 5.90 | — | 0.24 | 古墳 | 土師器甕 | |
| SB 023 | 長方形 | 5.53 | 5.35 | 0.22 | 古墳 | 土師器杯 | |
| SB 027 | 楕円形 | 5.20 | 4.00 | 0.19 | 弥生 | 甕 | |
| SB 028 | 長方形 | 5.38 | 4.62 | 0.10 | 古墳 | 土師器壺 | ベット状遺構 |
| SB 029 | 長方形 | — | 3.80 | 0.20 | 弥生 | 甕 | |
| SB 059 | 楕円形 | 7.04 | 6.58 | 0.12 | 弥生 | 甕 | 2基の甕棺墓 |
| SB 060 | 長方形 | 5.55 | 3.07 | 0.18 | 弥生 | 甕 | |
| SB 061 | 長方形 | 4.95 | 3.93 | 0.50 | 古墳 | 土師器杯・壺・高杯 | ベット状遺構 |
| SB 073 | 長方形 | 6.17 | 4.85 | 0.26 | 古墳 | 土師器壺 | ベット状遺構 |
| SB 074 | 長方形 | 5.66 | 4.66 | 0.27 | 古墳 | | ベット状遺構 |
| SB 075 | 隅丸長方形 | 4.07 | 3.40 | 0.09 | 古墳 | | |
| SB 079 | 長方形 | 4.60 | 4.40 | 0.08 | 古墳 | 土師器杯 | 造り出し |
| SB 080 | 長方形 | 4.65 | 4.18 | 0.38 | 古墳 | 土師器壺・丸底壺・杯 | |
| SB 092 | 長方形 | 5.26 | 4.63 | 0.30 | 古墳 | 土師器壺・高杯 | ベット状遺構 |
| SB 093 | 長方形 | 4.75 | 4.03 | 0.18 | 古墳 | | |

**掘立柱建物跡**

撰分遺跡で検出した掘立柱建物跡は7棟である。遺跡中央部の南側に集まる。規模は5×2間が3棟、4×2間1棟、3×2間2棟、2×2間1棟であり、棟方向は東西棟5棟、南北棟2棟で、東西棟の5棟は北軸線から東に68～77度内に振れ、南北棟は南軸線から東に14～19度振れ、東西棟の5棟と南北棟の2棟の棟は直角に近い状態で建っていたことになり、何らかの関連性があるものと思われる。

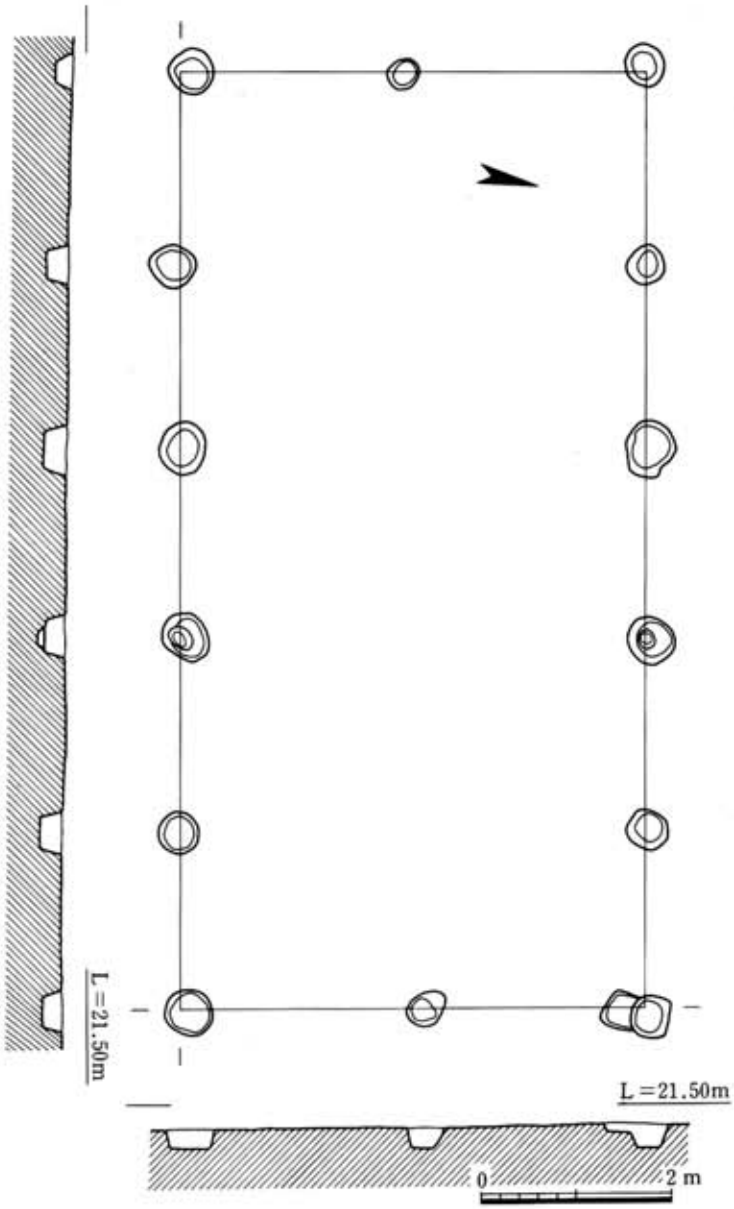



Fig. 134 撰分遺跡SB030掘立柱建物跡実測図

**ＳＢ030掘立柱建物跡**（Fig. 134, PL. 66－2）

ＳＢ030掘立柱建物跡は調査区中央部より東の南側にあり、7棟の掘立柱建物跡のうち最東部に位置する。5×2間の東西棟建物跡であり、棟方向N77°Eにとる。桁行9.94m、梁行4.92mを測り、柱間は桁行1.90～2.0m、梁行2.35～2.50mを測る。柱穴は西梁側が浅く北側から0.16、0.55、0.18mを測るが、残る11個は0.20～0.55mを測る。総面積48.90㎡。

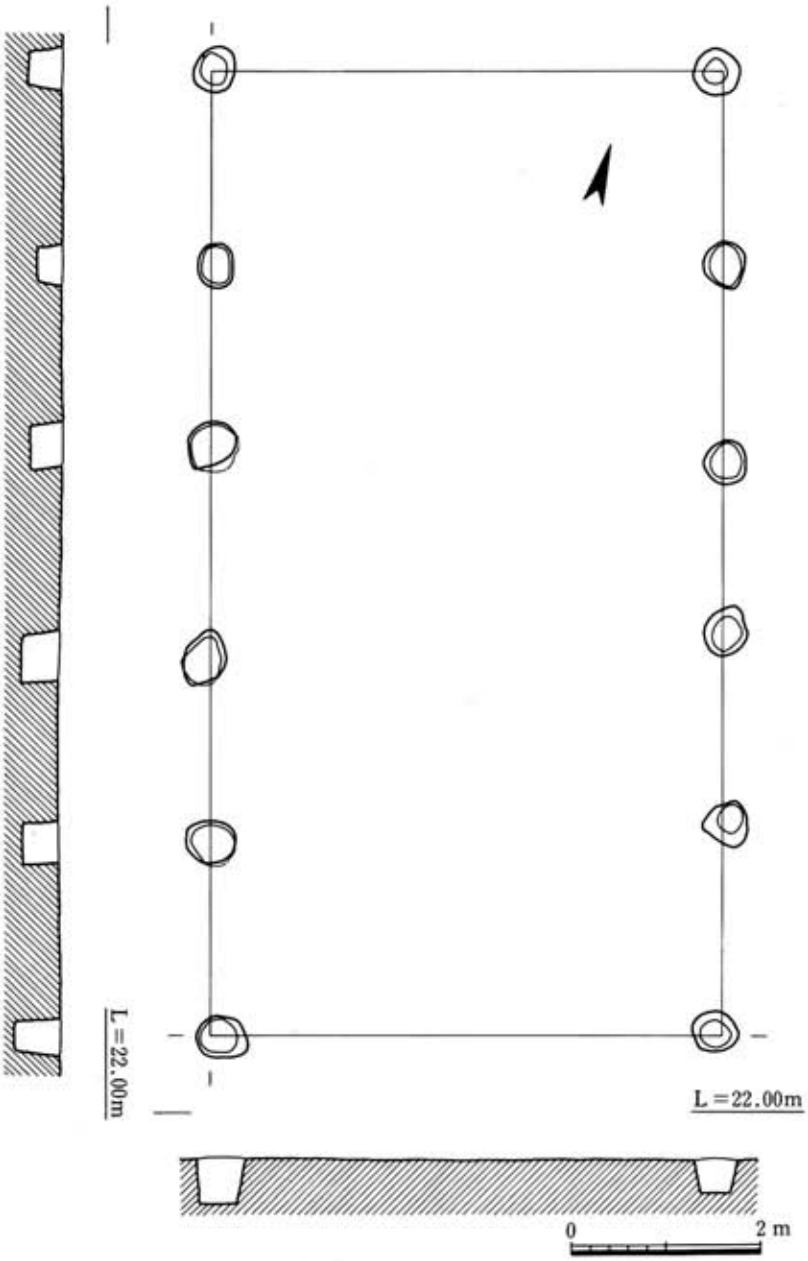



Fig. 135　撰分遺跡ＳＢ052掘立柱建物跡実測図

**ＳＢ052掘立柱建物跡**（Fig. 135, PL. 67－1）

ＳＢ052掘立柱建物跡は調査区中央部の南側にある５×２間の南北棟建物跡である。棟方向Ｓ19°Ｅにとり、桁行10.22m、梁行5.42mを測り、７棟のうち最大規模である。柱間は桁行2.0m、梁部は中間の柱がない。柱穴は径0.37～0.55m、深さ0.15～0.49mを測り、0.15mの１個を除き0.27m以上ある。総面積は55.39㎡になる。

**ＳＢ053掘立柱建物跡**（Fig. 136, PL. 67－2）

ＳＢ053掘立柱建物跡はＳＢ052掘立柱建物跡の北３mにある３×２間の東西棟建物跡である。棟方向はＳＢ052掘立柱建物跡と直角のＮ74°Ｅをとり、桁行6.92m、梁行4.40mを測る。柱間は桁行1.90～3.0mで西側の桁行は広い。梁部は中間の柱が存在しない。柱穴は径0.25～0.40mと小さい。深さは0.18～0.45mを測る。総面席30.44㎡である。

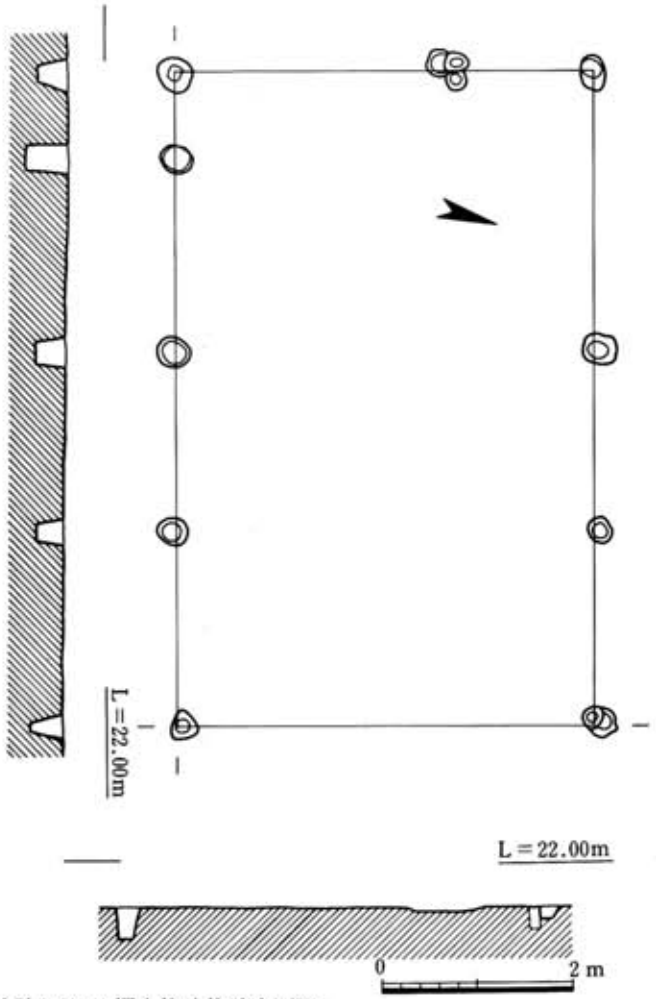



Fig. 136　撰分遺跡ＳＢ053掘立柱建物跡実測図

**ＳＢ083掘立柱建物跡**（Fig. 137, PL. 68－1）

ＳＢ083掘立柱建物跡は調査区中央部のやや東側にある３×２間の東西棟建物跡である。ＳＤ067溝が東側の遺構内を走る。棟方向はＮ77°Ｅにとり、桁行7.27m、梁行4.44mを測る。柱間は桁行2.30～2.55m、梁行2.20mを測る。柱穴は径0.30～0.50mとやや小さい。深さは0.25～0.58mあり0.40m以上のものが６個ある。総面積32.27㎡である。

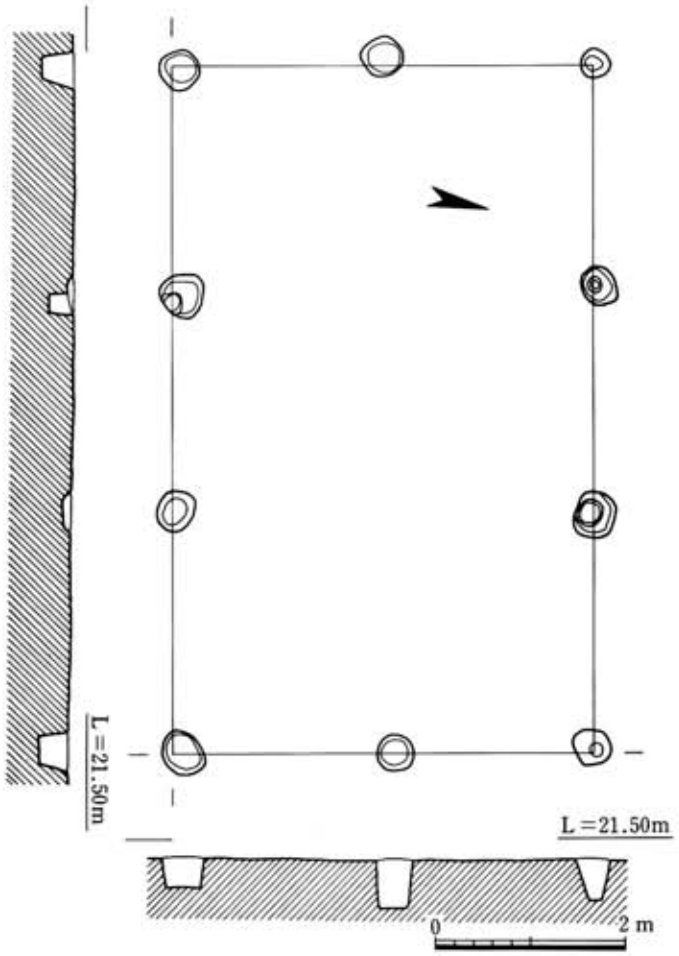



Fig. 137　撰分遺跡ＳＢ083掘立柱建物跡実測図

**ＳＢ084掘立柱建物跡**（Fig. 138, PL. 68－2）

ＳＢ084掘立柱建物跡は調査区中央部の南側、ＳＢ083掘立柱建物跡の南18mにあり、東側の桁の柱穴のすべてをＳＤ068大溝に切られている。４×２間の南北棟建物跡であろう。棟方向はＳ14°Ｅにとり西側の桁行7.95mを測る。柱間は桁行1.90～2.15m、梁行2.50mを測る。柱穴は径0.43～0.55mありやや小さい。深さ0.10～0.32mを測り、４個は0.20m以下で浅い。ＳＤ068大溝に切られている東側の桁部と西側桁部～梁中央部柱穴の柱間2.50mが同じであれば梁行は

5.0mになり総面積は39.75㎡になる。

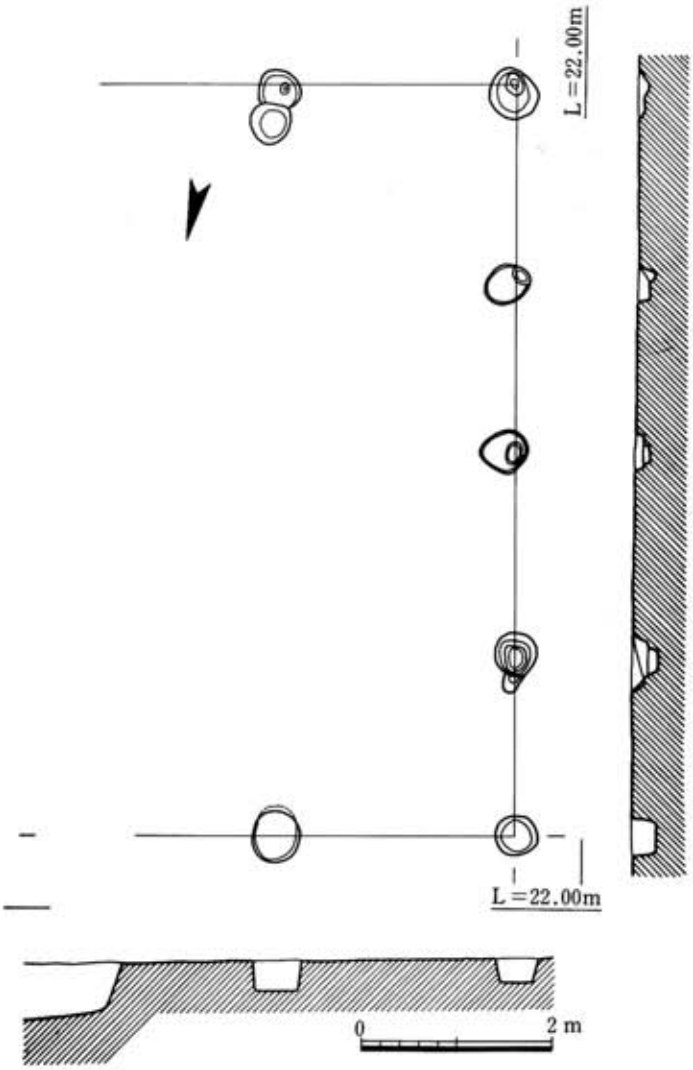



Fig. 138 撰分遺跡SB084掘立柱建物跡実測図

**SB091掘立柱建物跡** (Fig. 139, PL. 69−1)

SB091掘立柱建物跡は調査区中央部のやや南西部にあり、SB053掘立柱建物跡の東7mに棟方向を並べる細長い建物跡である。5×2間の東西棟建物跡で、棟方向はN76°Eにとり桁行10.04m、梁行4.01mを測る。柱間は桁行2.0m、梁行2.0mと等間隔である。柱穴は径0.45〜0.63mを測る。深さは0.34〜0.62mあり12個が0.40m以上あり深い。総面積40.26㎡になる。東側をSD058・SD064溝に切られている。

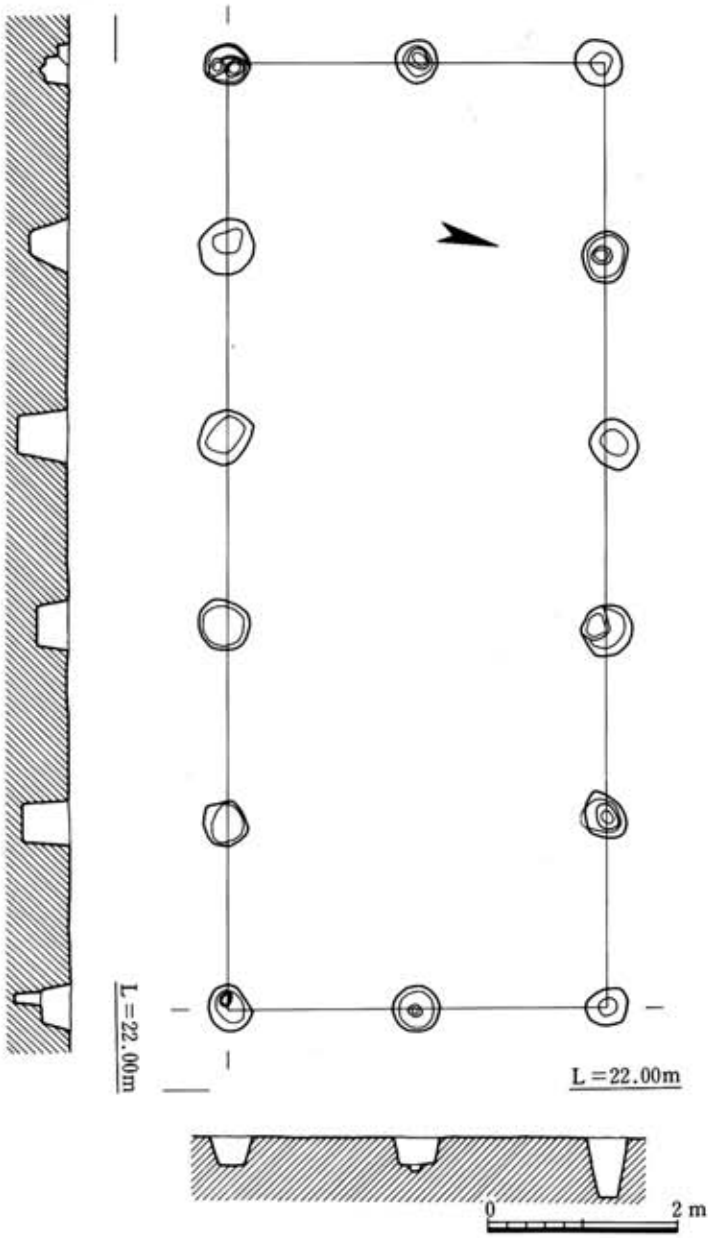



Fig. 139 撰分遺跡ＳＢ091掘立柱建物跡実測図

**ＳＢ111掘立柱建物跡**（Fig. 140）

ＳＢ111掘立柱建物跡は調査区中央部から南西にあり、ＳＢ052掘立柱建物跡の西３ｍに棟を並べる。２×２間の東西棟建物跡で７棟のうち最小規模である。棟方向はＮ68°Ｅにとり、桁行4.21m、梁行4.20mの正方形である。柱間は桁行1.86～2.35m、梁行2.05～2.15mを測る。柱穴の径は0.24～0.38mと小さい。深さは0.11～0.46mを測る。総面積17.68㎡になる。

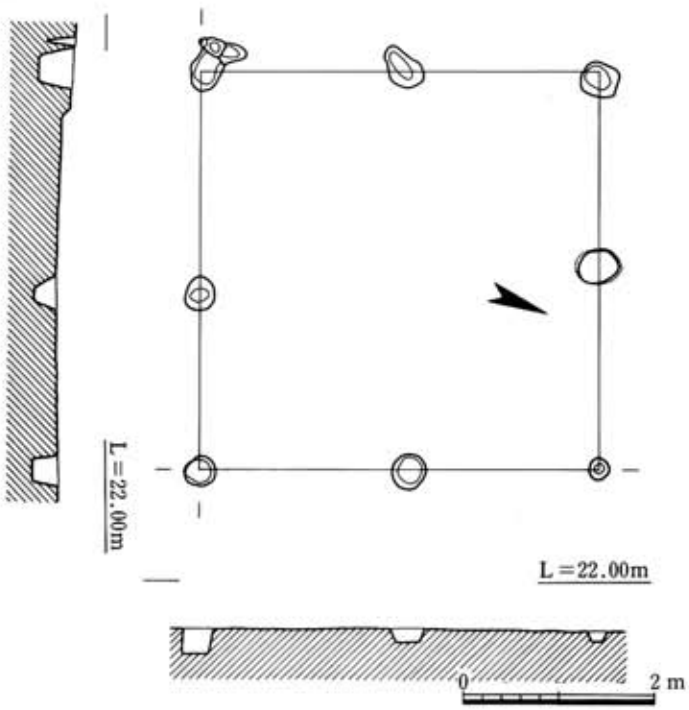



Fig. 140 撰分遺跡ＳＢ111掘立柱建物跡実測図

Tab. 7 撰分遺跡掘立柱建物跡一覧表

| 遺構番号 | 間数 桁行×梁行 | 棟方向 | 柱間 (m) 桁行 | 柱間 (m) 梁行 | 総規模(m) 桁行×梁行 | 総面積 (㎡) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＢ 030 | 5 × 2 | 東西N77°E | 1.90～2.00 | 2.35～2.50 | 9.94×4.92 | 48.90 | |
| ＳＢ 052 | 5 × 2 | 南北S19°E | 2.00 | | 10.22 ×5.42 | 55.39 | |
| ＳＢ 053 | 3 × 2 | 東西N74°E | 1.90～3.00 | | 6.92×4.40 | 30.44 | |
| ＳＢ 083 | 3 × 2 | 東西N77°E | 2.30～2.55 | 2.20 | 7.27×4.44 | 32.27 | |
| ＳＢ 084 | 4 × 2 | 南北S14°E | 1.90～2.15 | 2.50 | 7.95 | | |
| ＳＢ 091 | 5 × 2 | 東西N76°E | 2.00 | 2.00 | 10.04 ×4.01 | 40.26 | |
| ＳＢ 111 | 2 × 2 | 東西N68°E | 1.86～2.35 | 2.05～2.15 | 4.21×4.20 | 17.68 | |

### 土壙

撰分遺跡では16の土壙を検出した。時代別には弥生時代４、鎌倉時代２、江戸時代10になる。弥生時代の土壙は主に遺跡の東側にあり住居跡域と一致する。江戸時代の土壙は遺跡西側のＳＤ033溝周辺にあり江戸時代の遺構や小穴が集中している。

**ＳＫ002土壙**（Fig. 141, PL. 69－2）

ＳＫ002土壙は調査区最東部にあり弥生時代のＳＢ029住居跡の南２ｍに隣接する。東３～５ｍにはＳＪ058、ＳＪ059甕棺墓がある。ＳＫ002土壙は平面が長径1.80m、短径1.25mの楕円形である。深さは0.26mを測り断面はレンズ状になる。土壙内に直径0.40m、深さ0.21mの円形の小穴がある。弥生時代の土器片が出土し貯蔵穴であろう。

**ＳＫ019土壙**（Fig. 141, PL. 69－3）

ＳＫ019土壙は調査区の南東部にあり、古墳時代のＳＢ015住居跡内に入った状態で床面に掘られている。平面は長軸を南北にとり長軸1.30m、短軸0.88m、深さ0.37mを測るほぼ長方形の土壙である。土壙内から糸切り離しの土師器小皿が出土した。

**ＳＫ025土壙**（Fig. 141, PL. 70－1）

ＳＫ025土壙は調査区中央部のやや東側にあり、古墳時代のＳＢ012住居跡の東１ｍに隣接する。平面は長径が長い楕円形である。長径1.78m、短径0.72m、深さ0.29mを測り、埋土から弥生時代中期の甕の口縁部・底部が出土した。

**ＳＫ034土壙**（Fig. 141）

ＳＫ034土壙は調査区西部のやや南側、江戸時代のＳＤ033大溝の内側５ｍにある。平面は直径1.80～1.95mの円形状になる。深さ0.32～0.45mを測る。土壙内からは江戸時代の陶器・磁器・甕が多量に出土した。

**ＳＫ035土壙**（Fig. 142, PL. 70－2）

ＳＫ035土壙もＳＤ033大溝の内側にある江戸時代の遺構群の一つで、平面は長径1.46m、短径1.26mの不整楕円形で、深さ0.32mを測り西側が深い。土壙内から染付の長頸壺（徳利）や陶磁器の破片が出土した。

**ＳＫ036土壙**（Fig. 141, PL. 70－3）

ＳＫ036土壙もＳＤ033大溝の内側にある江戸時代の土壙の一つで、平面は長径1.72m、短径0.84mの不整楕円形で、深さ0.16～0.23mを測る。底は平坦である。土壙内から、陶磁器や甕・瓦など江戸時代の焼物が出土した。

**ＳＫ037土壙**（Fig. 143, PL. 71－1）

ＳＫ037土壙はＳＫ036土壙の東１ｍにある江戸時代の土壙群の一つで、平面は長径1.68m、短径1.03mの不整楕円形である。深さ0.20～0.26mを測り、断面はレンズ状に近く、底は平坦である。江戸時代の陶磁器・甕の破片が出土した。

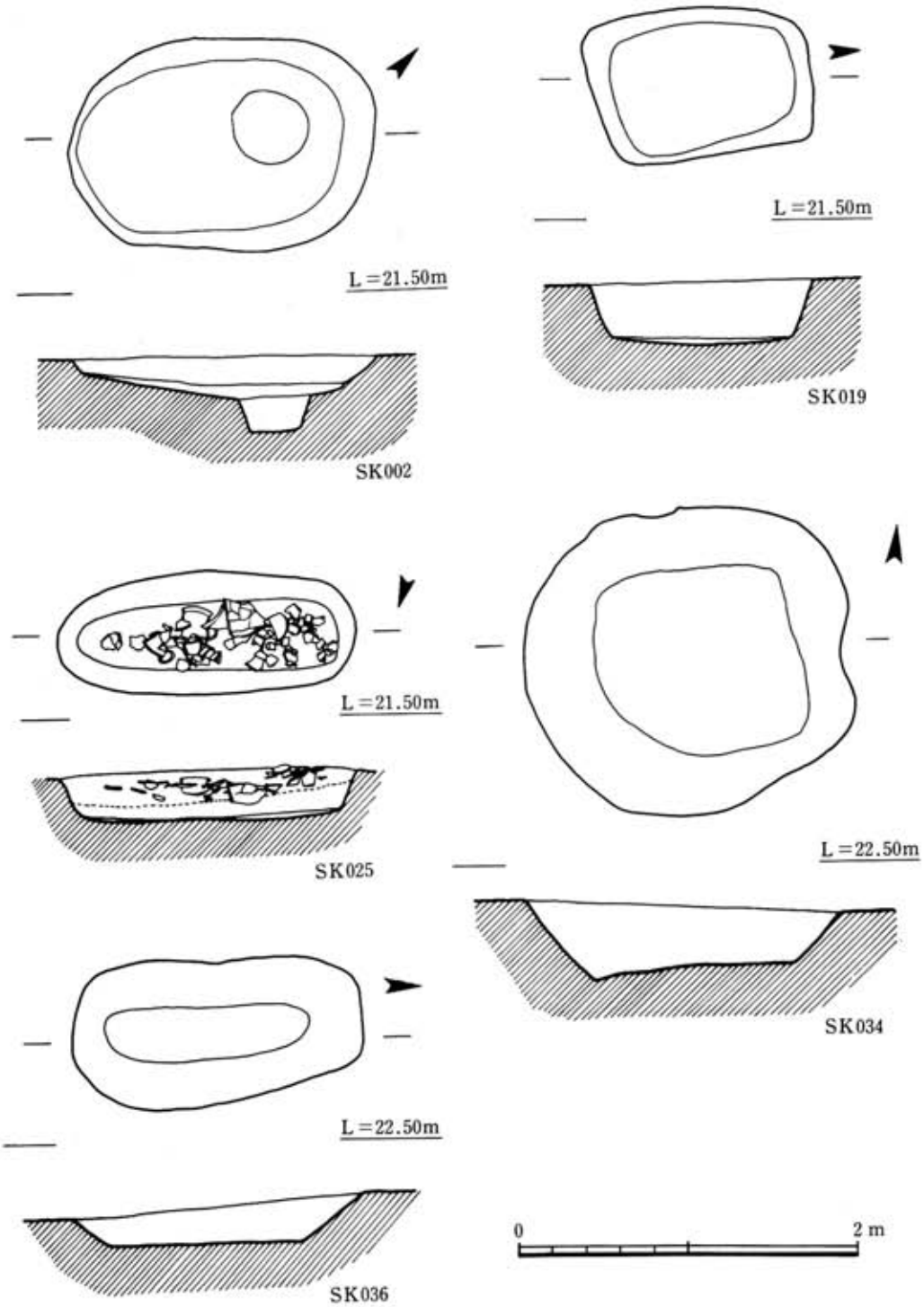



Fig. 141 撰分遺跡土壙実測図

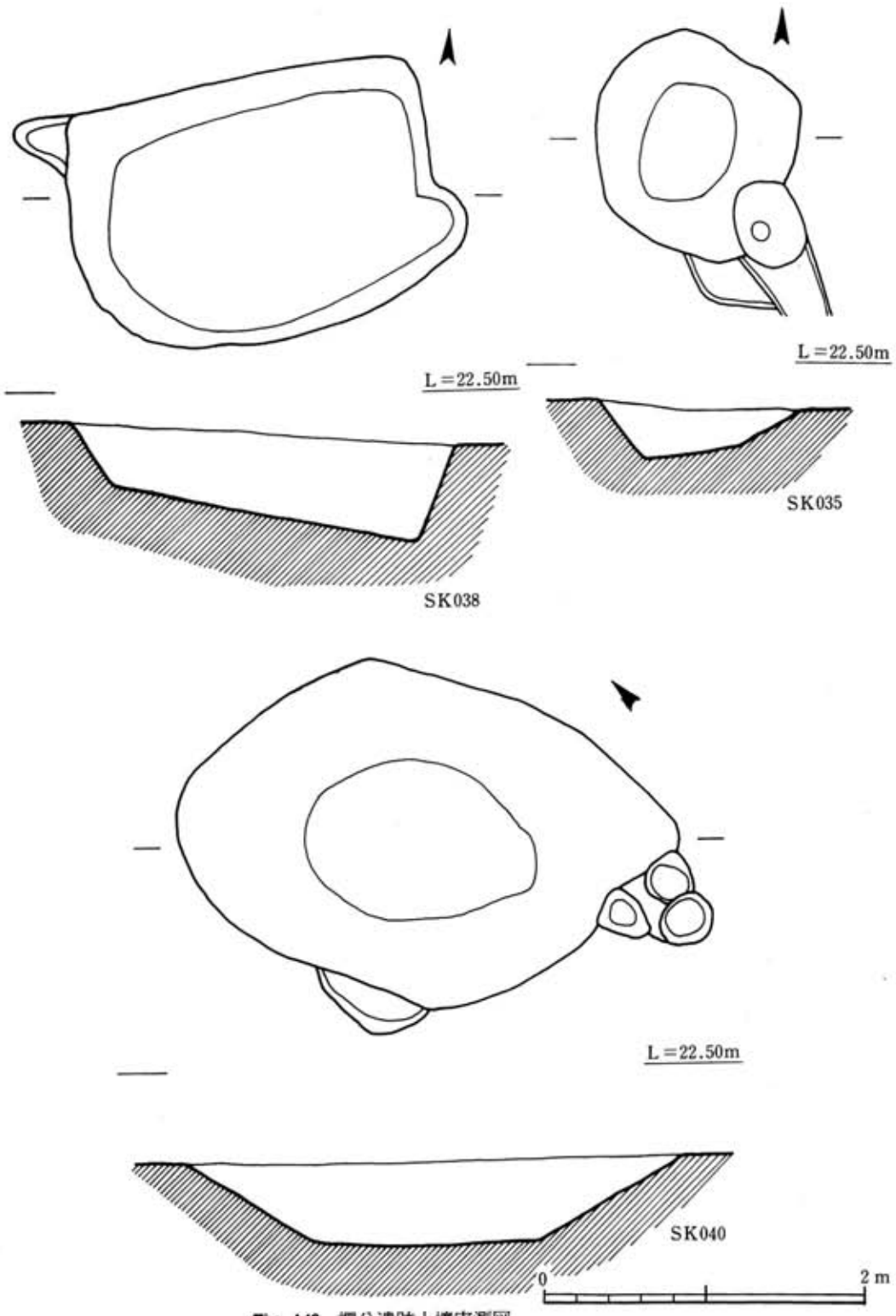



Fig. 142 撰分遺跡土壙実測図

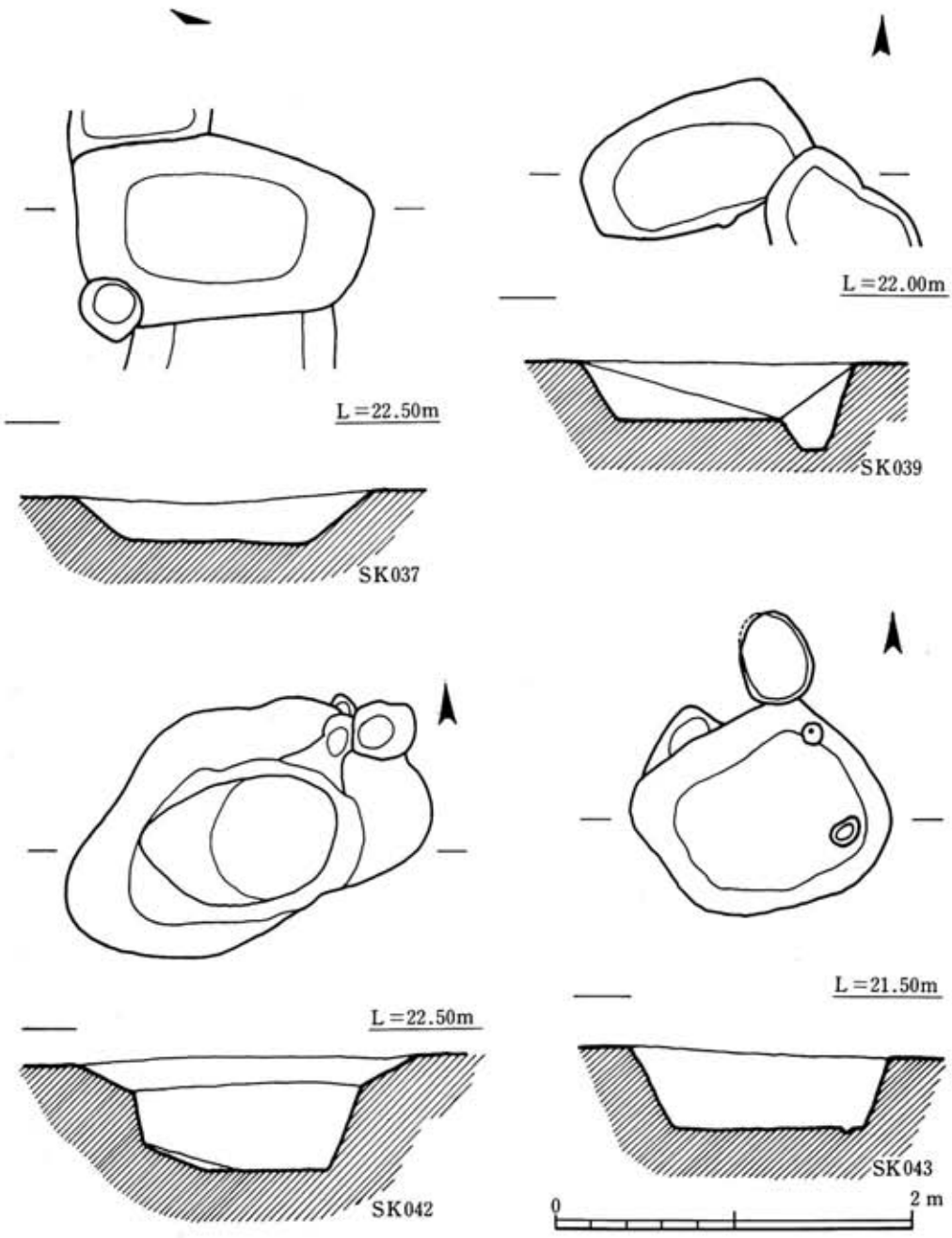



Fig. 143 撰分遺跡土壙実測図

**SK038土壙** (Fig. 142, PL. 71－2)

SK038土壙はSK037土壙の南2mにあり、SD033大溝の孤を描く延長上の南端にある。平面は長径2.46m、短径1.64mの長方形に近い不整楕円形である。深さは0.37～0.60mあり、底は西から東に傾斜する。土壙内から江戸時代の陶磁器・甕・瓦などが出土した。

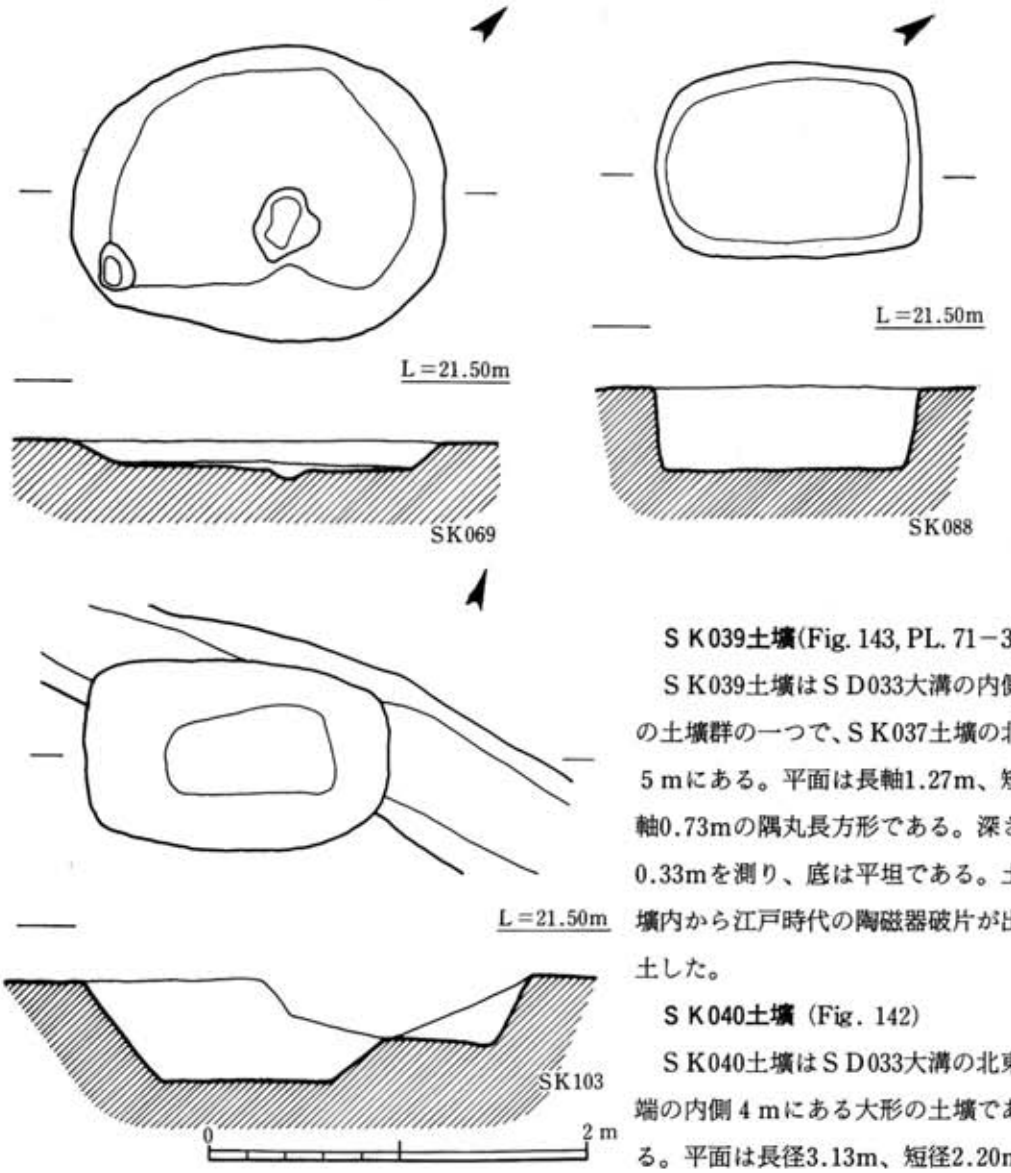



Fig. 144 撰分遺跡土壙実測図

**SK039土壙**(Fig. 143, PL. 71−3)

SK039土壙はSD033大溝の内側の土壙群の一つで、SK037土壙の北5mにある。平面は長軸1.27m、短軸0.73mの隅丸長方形である。深さ0.33mを測り、底は平坦である。土壙内から江戸時代の陶磁器破片が出土した。

**SK040土壙** (Fig. 142)

SK040土壙はSD033大溝の北東端の内側4mにある大形の土壙である。平面は長径3.13m、短径2.20mを測る不整楕円形である。深さは0.52mあり、スリ鉢状の断面を持ち、底は平坦である。土壙内から江戸時代の陶磁器や甕の破片が出土した。

**SK042土壙** (Fig. 143)

SK042土壙はSD033大溝の中央部から南東25mの距離にある。平面は長径2.10m、短径1.28mを測る不整楕円形である。土壙内は段を持ち、0.18mの深さから、壁は垂直に近い状態で掘られ、内側の土壙の深さは0.64mを測る。土壙内から磨耗した中世の土師器小皿の破片と江戸時代の陶磁器が出土。中世の土壙が江戸時代の土壙に切られたとも思われる。

**ＳＫ043土壙**（Fig. 143）

ＳＫ043土壙はＳＤ033大溝の内側５ｍにある江戸時代の土壙群の一つである。平面は長軸1.26ｍ、短軸1.15ｍを測る隅丸方形である。土壙の深さは0.40～0.45ｍあり、底は平坦になる。土壙内から江戸時代の陶磁器や瓦器、土師質の土製品が出土した。

**ＳＫ069土壙**（Fig. 144, PL. 72－1）

ＳＫ069土壙は調査区中央部のやや東にあり、弥生時代中期のＳＢ059住居跡の南３ｍに隣接する。平面は長径1.97ｍ、短径1.57ｍの楕円形である。深さ0.13～0.16ｍと浅い。土壙内から弥生時代中期後半の甕が出土した。

**ＳＫ088土壙**（Fig. 144）

ＳＫ088土壙は調査区の中央部、ＳＫ069土壙の西16ｍの距離にあり、平面は長軸1.42ｍ、短軸1.03ｍを測る隅丸方形である。土壙の深さは0.44ｍあり、壁は垂直に立ち、底は平坦である。遺物は弥生時代中期の土器片が出土した。貯蔵穴であろうか。

**ＳＫ103土壙**（Fig. 144）

ＳＫ103土壙は調査区の西側中央部、江戸時代の土壙群の北20ｍにあり、ＳＤ056溝を切っている。平面は長軸1.60ｍ、短軸1.0ｍの隅丸方形である。深さは0.53ｍを測る。遺物は青磁椀・白磁皿・須恵質土器・土師器小皿・瓦器などの破片が出土した。遺物から鎌倉時代の土壙と思われる。

**性格不明遺構**

撰分遺跡で検出した性格不明遺構は31基ある。遺物が出土しない遺構も多く、平面の形状は区々である。

**ＳＸ008遺構**（Fig. 145）

ＳＸ008遺構は調査区の東北隅にあり、平面は長径1.50ｍ、短径1.25ｍを測る不整楕円形である。深さは0.10～0.22ｍを測る。遺物は出土しなかった。

**ＳＸ013遺構**（Fig. 145）

ＳＸ013遺構は調査区東部の南側にあり、ＳＢ015住居跡の北東１ｍに隣接する。平面は長軸2.18ｍ、短軸1.62ｍの不整形である。深さは0.25ｍを測る。遺物は磨耗した土師器破片と江戸時代の陶磁器片が出土した。

**ＳＸ057遺構**（Fig. 145, PL. 72－2）

ＳＸ057遺構は調査区中央部のやや西側にありＳＤ056溝、ＳＸ065遺構を切っている。平面は長軸3.65ｍ、短軸1.70ｍの不整形である。深さは0.45ｍを測る。遺構内から青磁椀・土師器杯・須恵質土器・瓦器など鎌倉時代の土器破片が出土した。

**ＳＸ076遺構**（Fig. 146）

ＳＸ076遺構は調査区中央部の北側にあり、ＳＸ081遺構の北１ｍに隣接する。平面は一辺1.37

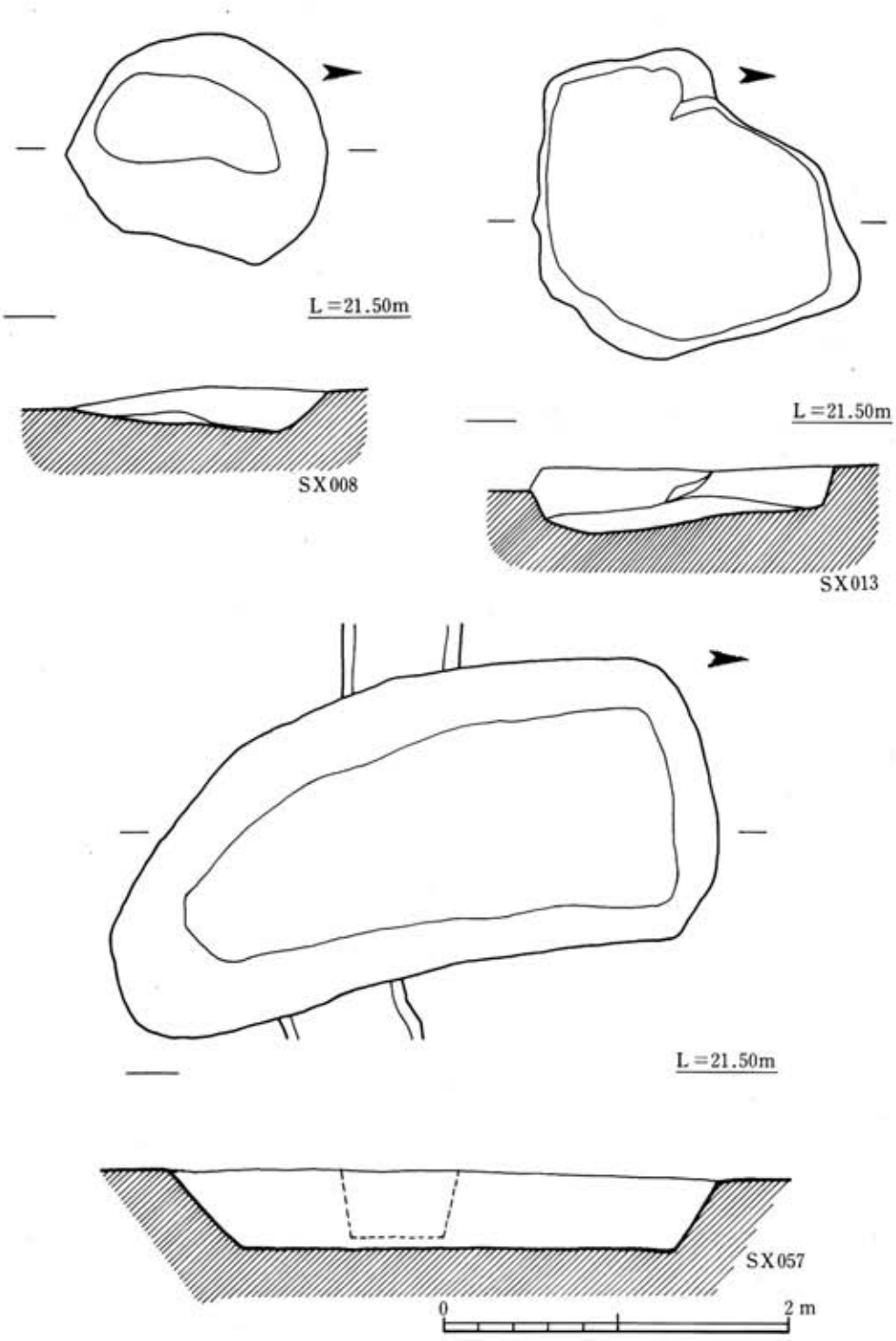



Fig. 145 撰分遺跡不明遺構実測図

mを測る正方形である。深さは0.36mあり、壁は垂直に立ち、底は平坦である。遺物は出土しなかった。

**ＳＸ081遺構**（Fig. 146）

ＳＸ081遺構はＳＸ076遺構の南１mに並ぶ。平面は長軸1.63m、短軸1.20mを測る長方形である。深さは0.30～0.35mあり、壁は垂直に立つ。底部はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。ＳＸ076遺構と同時期であろう。

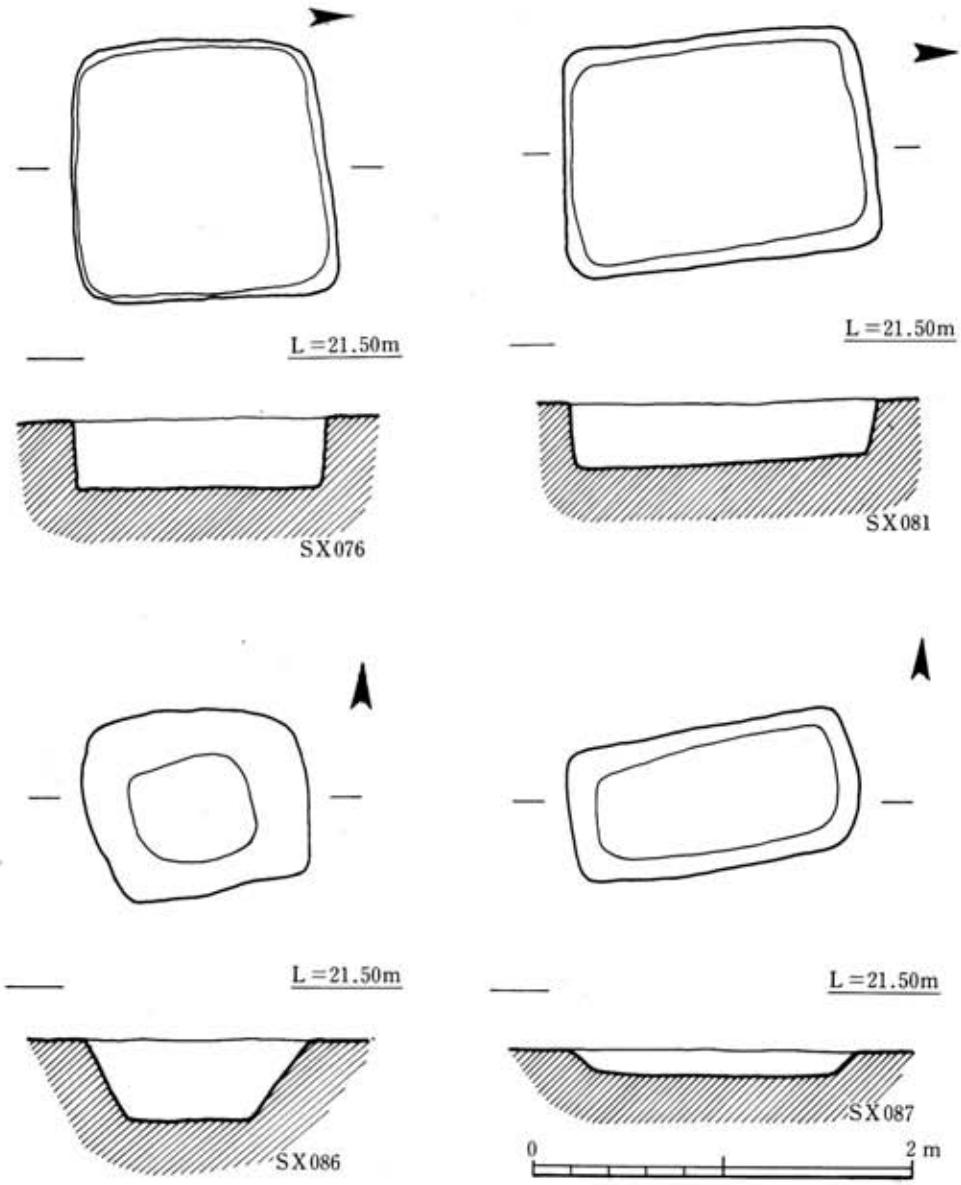



Fig. 146　撰分遺跡不明遺構実測図

**S X086遺構**（Fig. 146）

S X086遺構は調査区中央部にあり、鎌倉時代のS D085溝先端部の北２mの距離にある。平面は長軸1.20m、短軸0.97m、深さ0.42mを測る長方形である。断面はすり鉢状で底は平坦になる。遺物は瓦器と青磁椀の破片が出土した。鎌倉時代の遺構であろう。

**S X087遺構**（Fig. 146）

S X087遺構は調査区中央部、S X086遺構の東６mにある。平面は長軸1.54m、短軸0.75m、深さ0.14mの浅い長方形である。断面はレンズ状になる。遺物は黒耀石剝片１点だけで、時期は不明である。

**S X090遺構**（Fig. 147）

S X090遺構は調査区中央部の北側にあり、S X076遺構の北２mに隣接する。長径1.40m、短径1.10mの楕円形である。遺構の一部を小穴に切られている。遺構の深さは0.40mを測り、中央に長径0.55m、短径0.35m、遺構床面からの深さ0.18mの楕円形の小穴がある。遺物は弥生時代の甕の口縁部が出土した。弥生時代の貯蔵穴であろうか。

**S X096遺構**（Fig. 147）

S X096遺構は調査区中央部の北隅にある平面が長径1.66m、短径1.24mの長方形に近い楕円形である。遺構の深さ0.49mを測る。遺物は須恵器高台付杯・土師器破片が出土。奈良～平安時代の遺構と思われる。

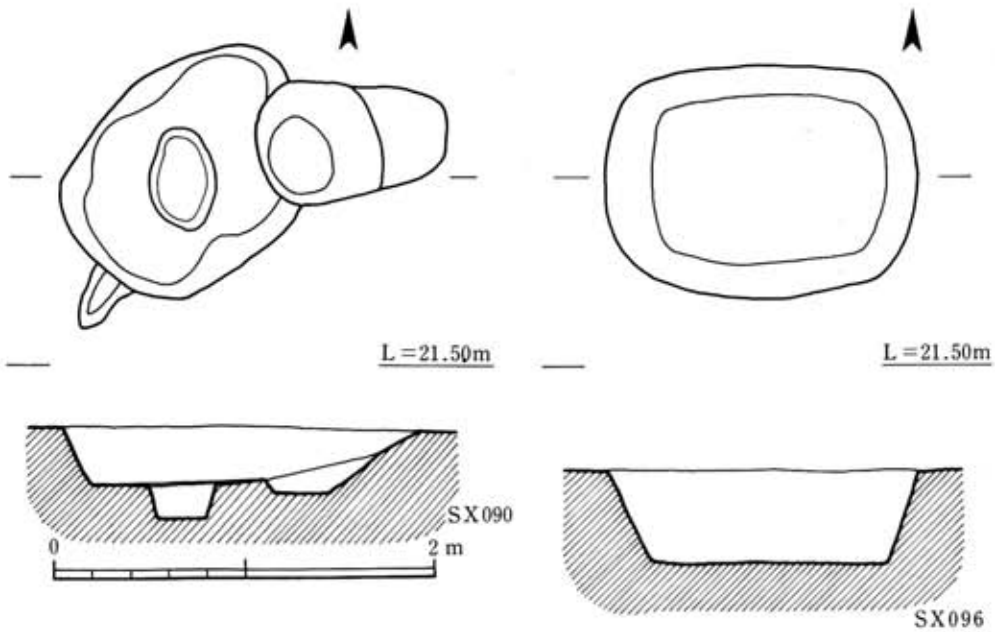



Fig. 147　撰分遺跡不明遺構実測図

**井戸跡**

撰分遺跡で検出した井戸跡は4基であった。うち2基は掘立柱建物跡の側にあり、残る2基は鎌倉時代の遺構が集中する調査区中央部より西側に所在した。

**SE045井戸跡**（Fig. 148）

SE045井戸跡は調査区西側の南にあり、SB111掘立柱建物跡の柱間で検出した。平面は円形である。径1.02m、深さ1.03mを測り、井戸底は径0.50mである。井戸枠は検出されなかった。遺物も出土しなかった。

**SE063井戸跡**（Fig. 148）

SE063井戸跡は調査区中央部よりやや南西、SB091掘立柱建物跡の南2mにあり、平面は径1.35mを測る隅丸方形に近い円形井戸跡である。深さ0.90m。井戸壁はほぼ垂直に立つ。井戸枠は検出されなかった。遺物は青磁碗・鉢・白磁碗・須恵質土器・土師器杯が出土した。遺物から鎌倉時代前期の井戸跡と思われる。

**SE066井戸跡**（Fig. 148）

SE066井戸跡は調査区の中央部からやや西側にあり、SX057遺構に接する。径1.5m、深さ0.87mを測り、井戸底は径0.64mである。井戸枠は検出されなかった。遺物は青磁碗・白磁碗・須恵質土器片口・土師器杯・小皿が出土。鎌倉時代前期の井戸跡であろう。

**SE112井戸跡**（Fig. 148, PL. 72−3）

SE112井戸跡は調査区の北西部、鎌倉時代の遺構が集中する地点にあり、平面は径1.3m、深さ1.85mの円形の井戸跡である。井戸底は0.60mあり、底付近は砂質であった。遺物は瓦器椀・黒色土器椀・土師器小皿などが出土した。遺物から平安時代末〜鎌倉時代初期の井戸跡と思われる。

**溝跡**

撰分遺跡で検出した溝跡および溝状遺構は21条を数える。出土した遺物から時代別に区分すると弥生時代6条、古墳時代1条、平安時代〜鎌倉時代10条、江戸時代1条、不明3条になる。弥生時代の溝は幅2m以上ある大溝や遺跡の北西部から南東部を走る長さ100m以上の溝もある。平安時代後半〜鎌倉時代前期の溝は幅が広く、浅い溝で、長さも10m前後のものが多い。江戸時代の溝は江戸時代の遺構群の外側に弧を描く状態で3分の1周めぐらされ、池を思わせるものであり陶磁器や甕・瓦などの遺物が多量に出土した。

**SD001溝**（Fig. 149, PL. 73−1・2）

SD001溝は遺跡の北東部から東部に流れる幅1.0〜2.20m、長さ55m以上の溝である。深さは0.68mを測り、断面はU字形である。中央部をSD011溝に切られている。遺物は弥生時代中期の甕・壺・蓋・高杯・器台などの土器と石包丁・磨製石斧・紡錘車などの石器が多量に出土した。

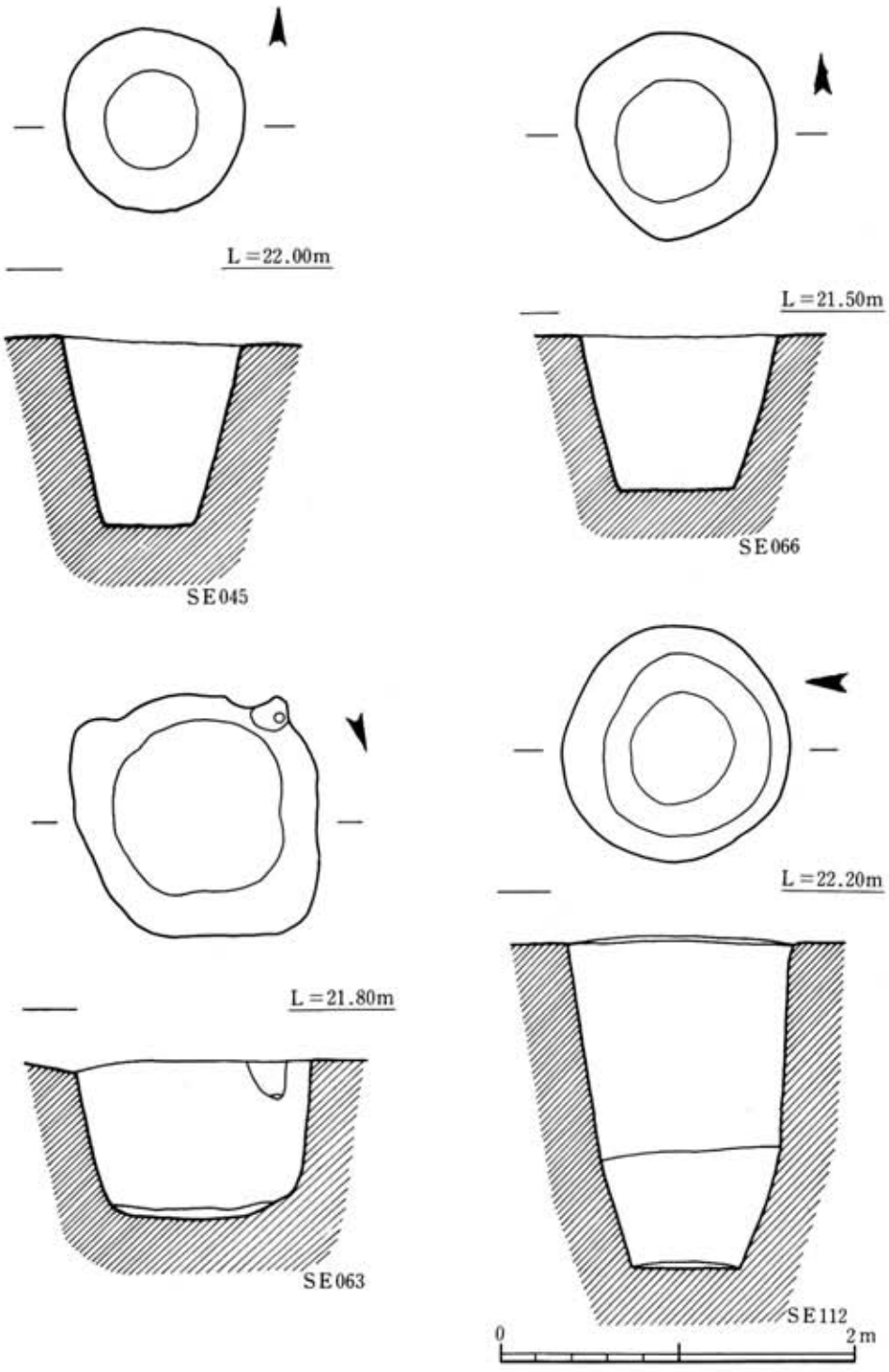



Fig. 148 撰分遺跡井戸跡実測図

**S D011溝**

S D011溝はS D001溝の中央部を北から南に切る長さ9.50m、幅1.0～1.40m、深さ0.95mの溝である。断面はU字形である。遺物は弥生時代中期の甕が出土した。S D001溝と同時期である。

**S D016溝**

S D016溝は調査区の中央部よりやや東の南隅にあり、古墳時代のS B015住居跡の南壁を切る長さ9m以上、幅0.70～1.40m、深さ0.20mの浅い溝である。断面はレンズ状になる。遺物は青磁碗・須恵質土器・土師器杯・瓦・石鍋が出土した。平安時代末～鎌倉時代初期の溝と思われる。

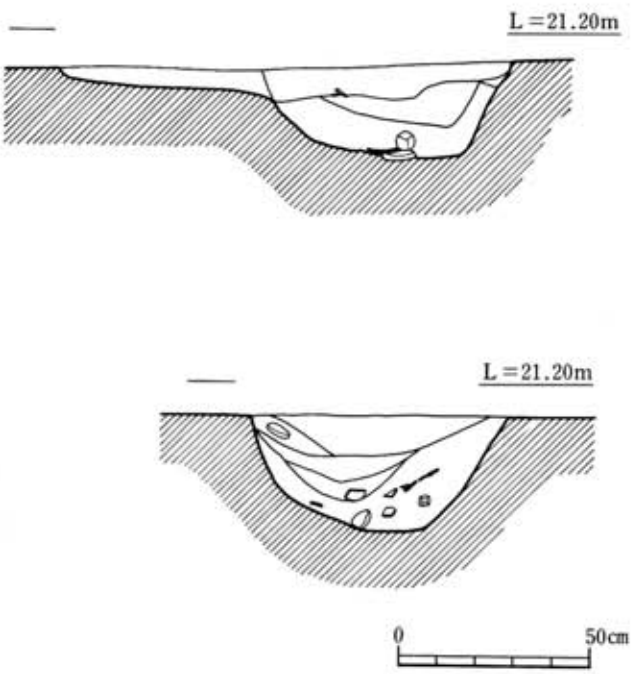



Fig. 149 撰分遺跡S D001溝断面実測図

**S D024溝**

S D024溝は遺跡の中央部北側から東南部に流れる長さ58m以上、幅0.30～0.60m、深さ0.20～0.29mの溝である。断面は逆台形になる。S B020・S B061住居跡・S P097土壙墓に切られている。弥生時代中期の甕の口縁部が出土した。

**S D031溝**

S D031溝は遺跡西側にある平面がL字形の溝である。長さ12.0m、幅1.50m、深さ0.19mの浅い溝で断面はレンズ状である。青磁椀・須恵質土器・土師器杯が出土した。遺物から平安時代末～鎌倉時代初期の溝と思われる。

**S D033大溝**（Fig. 150, PL. 73－3）

S D033大溝は遺跡西側の南にあり、江戸時代の土壙や柱穴群の外側に孤を描くように北から南西に3分の1周めぐっている。長さ約38m、幅1.0～3.0m、深さ0.70～1.24mあり、断面はやや丸味を持つすり鉢形である。遺物は染付磁器の鉢・椀・皿・唐津系陶器の鉢・椀・皿・甕・すり鉢・瓦などの焼物のほかに石臼などの生活用具が出土。出土した磁器は17世紀前半から19世紀前半までの2世紀にわたるものである。

**S D056溝**（Fig. 151）

S D056溝は遺跡の北西部隅から中央部南側に流れる長さ105m以上、幅0.40～0.90m、深さ

0.20～1.05mの溝で断面は逆台形である。SD067・SD085溝・SX057・SX065遺構・SK103土壙に切られている。遺物は弥生時代の甕の口縁部・底部が出土し、北西部ではサヌカイト・黒耀石の剝片が混入していた。

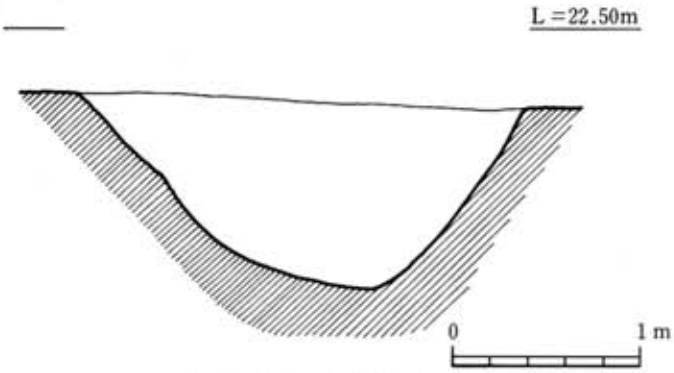



Fig. 150 撰分遺跡SD033大溝断面実測図

**SD058溝**

SD058溝は調査区の中央部からやや西側にあり、南から北に流れる溝である。南側は調査区外に延び、長さ26m以上、幅0.20～0.90m、深さ0.13mを測り、断面はレンズ状である。遺物は青磁椀・白磁椀・杯・須恵質土器・土師器杯などが出土、平安時代末～鎌倉時代初期の溝と思われる。

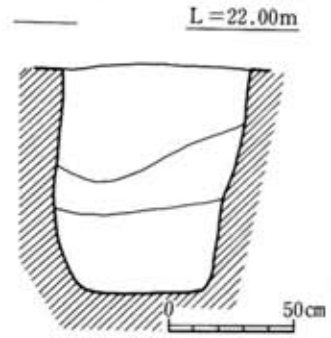



Fig. 151 撰分遺跡SD056溝断面実測図

**SD067溝**

SD067溝は遺跡中央部を南から北に流れる溝である。SD068溝・SB080住居跡を切り、長さ21.50m、幅0.50～1.40m、深さ0.25～0.70mを測り、断面はレンズ状である。遺物は青磁椀・白磁椀・瓦器椀・須恵質土器・土師器杯が出土している。遺物から平安時代末～鎌倉時代初期の溝と思われる。

**SD068溝**

SD068溝はSD067溝の南側にあり南から北に流れる大溝で、南側は調査区外に延びている。SD067溝に一部を切られ、SB084掘立柱建物跡を切っている。長さ11m以上、幅3.30m、深さ0.60mを測り断面はU字形である。遺物は青磁椀・白磁椀・須恵質土器の片口鉢・土師器杯・石鍋が出土した。SD067溝と同時期の溝である。

**SD085溝**

SD085溝は遺跡西部から中央部に流れる溝でSD056溝を切っている。西側は調査区外に延び、長さ52m以上、幅1.50～3.50m、深さ0.20～0.53mを測り、断面は壁が立ち、底は平坦である。遺物は青磁皿・須恵器高台付杯・土師器杯が出土。平安時代末～鎌倉時代初期の溝と思われる。

Tab. 8 撰分遺跡溝一覧表

| 遺構番号 | 方向 | 長さ (m) | 幅 (m) | 深さ (m) | 平面形 | 断面形 | 出土遺物 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SD 001 | 東—西 | 55 以上 | 1.00～2.20 | 0.68 | 直線 | U字形 | 壺・壺・蓋・高杯・器台 | 弥生 |
| SD 011 | 南—北 | 9.5 | 1.00～1.40 | 0.59 | 直線 | U字形 | 壺 | 弥生 |
| SD 016 | 東—西 | 9 以上 | 0.70～1.40 | 0.20 | 直線 | レンズ状 | 青磁椀・須恵質土器・土師器杯・瓦・石鍋 | 平安末～鎌倉初期 |
| SD 021 | 南—北 | 4.9 | 0.30～0.70 | 0.10 | 直線 | レンズ状 | 土師器壺 | 古墳 |
| SD 024 | 東—西 | 58 以上 | 0.30～0.60 | 0.20～0.29 | 直線 | 逆台形 | 壺 | 弥生 |
| SD 031 | 北—西—南 | 12.0 | 1.50 | 0.19 | L字形 | レンズ状 | 青磁椀・須恵質土器・土師器杯 | 平安末～鎌倉初期 |
| SD 032 | 東—西 | 5.0 | 0.50～1.00 | 0.10 | 直線 | レンズ状 | 須恵質土器・土師器杯 | 平安末～鎌倉初期 |
| SD 033 | 北—西—南 | 38.0 | 1.00～3.00 | 0.70～1.24 | 三日月形 | すり鉢形 | 染付鉢・椀・皿・陶器鉢・椀・皿・壺・すり鉢・瓦・石白 | 江戸 |
| SD 056 | 東—西 | 105 以上 | 0.40～0.90 | 0.20～1.05 | 直線 | 逆台形 | 壺・サヌカイト・黒曜石剝片 | 弥生 |
| SD 058 | 南—北 | 26 以上 | 0.20～0.90 | 0.13 | 直線 | レンズ状 | 青磁椀・白磁椀・杯・須恵質土器・土師器杯 | 平安末～鎌倉初期 |
| SD 064 | 南—北 | 3 以上 | 0.50～0.70 | 0.10 | 直線 | レンズ状 | 須恵質土器・土師器杯 | 平安末～鎌倉初期 |
| SD 067 | 南—北 | 21.5 | 0.50～1.40 | 0.25～0.70 | 直線 | レンズ状 | 青磁椀・白磁椀・瓦器椀・須恵質土器・土師器杯 | 平安末～鎌倉初期 |
| SD 068 | 南—北 | 11 以上 | 3.30 | 0.60 | 直線 | レンズ状 | 青磁椀・白磁椀・須恵質土器片口鉢・土師器杯・石鍋 | 平安末～鎌倉初期 |
| SD 071 | 東—西 | 7.2 | 1.00～1.70 | 0.10 | 直線 | レンズ状 | 須恵質土器・土師器杯 | 平安末～鎌倉初期 |
| SD 077 | 南—北 | 4.0 | 0.25 | 0.10 | 直線 | レンズ状 | 須恵質土器 | 平安末～鎌倉初期 |
| SD 078 | 南—北 | 7.6 | 0.80～1.30 | 0.13 | 直線 | レンズ状 | 壺 | 弥生 |
| SD 085 | 東—西 | 52 以上 | 1.50～3.50 | 0.20～0.53 | 直線 | 長方形 | 青磁皿・須恵器高台付杯土師器杯 | 平安末～鎌倉初期 |
| SD 098 | 南—北 | 4 以上 | 0.50～0.80 | 0.22 | 直線 | レンズ状 | 壺 | 弥生 |
| SD 101 | 南—北 | 15 以上 | 0.30～0.50 | 0.10 | 直線 | レンズ状 | | |
| SD 102 | 南—北 | 23 以上 | 0.20～0.30 | 0.10 | 直線 | レンズ状 | | |
| SD 105 | 南—北 | 13 以上 | 0.30～0.50 | 0.10 | 直線 | レンズ状 | | |

**甕棺墓**

撰分遺跡から検出した甕棺墓は9基である。甕棺墓の分布は調査区東部に4基、中央部からやや東側に3基、中央部から西側に2基がある。弥生時代のSD001溝北側の2基は弥生時代後期中葉、南側の2基と残る5基は中期中葉に比定されよう。

**SJ050甕棺墓**（Fig. 152, PL. 74－1）

SJ050甕棺墓は調査区東部の南側にあり、上面を削平された合口式の小児用甕棺墓である。上甕は口縁部の一部を残し、下甕も約2分の1は破壊されていた。墓壙の上面は不明であるが、横穴は甕に合わせて掘っている。傾斜角度は21°を測り水平に近い。主軸方位はS86°Wにとる。

**SJ052甕棺墓**（Fig. 153, PL. 74－2）

SJ052甕棺墓はSJ050甕棺墓の西16m、調査区の東南部に位置する。上面は削平が著しく、上甕の有無は不明で、残った甕も胴部と底部の一部を残すだけの小児用甕棺墓である。墓壙は不明であるが横穴は甕に合わせて掘っている。傾斜角度は40°、主軸方位はS3°Eにとる。

**SJ053甕棺墓**（Fig. 154, PL. 74－3）

SJ053甕棺墓は調査区の中央部からやや東側の南隅にあり、上面を削平され上甕の口縁部の一部と下甕を残す合口式の小児用甕棺墓である。墓壙上面は不明であるが横穴は甕に合わせて掘っている。傾斜角度46°を測り、主軸方位はN89°Eにとる。

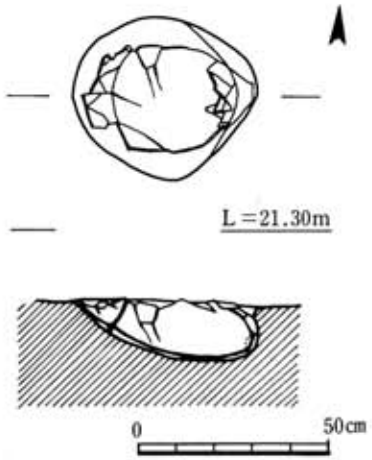



Fig. 152　撰分遺跡SJ050甕棺墓実測図

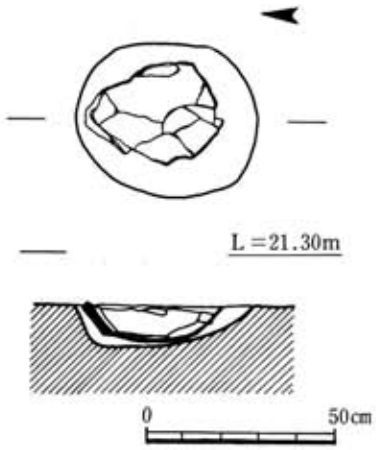



Fig. 153　撰分遺跡SJ052甕棺墓実測図

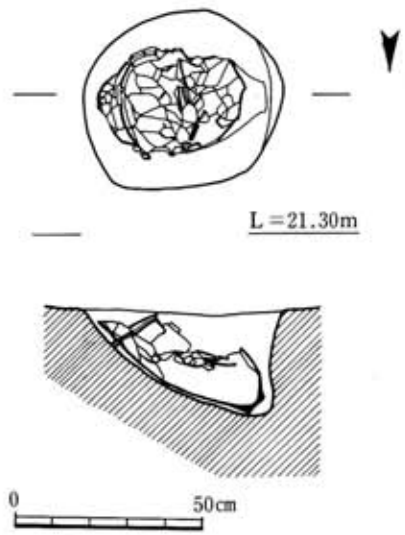



Fig. 154　撰分遺跡SJ053甕棺墓実測図

**ＳＪ054甕棺墓**(Fig. 155, PL. 74－4)

ＳＪ054甕棺墓は調査区中央部から南西のＳＢ052掘立柱建物跡の中にある。上部は削平が著しく上甕の有無が不明な成人用甕棺墓である。墓壙はわからないが横穴は甕に合わせて掘っている。甕胴部下位に穿孔がある。傾斜角度32°を測る。主軸方位はＮ90°Ｗにとる。

**ＳＪ055甕棺墓** (Fig. 156,PL. 74－5)

ＳＪ055甕棺墓はＳＪ054甕棺墓の南西２ｍ、ＳＢ052掘立柱建物跡の中にある。上面が削平され上甕の一部と下甕の２分の１を残している合口式の成人用甕棺墓である。墓壙上面は不明であ

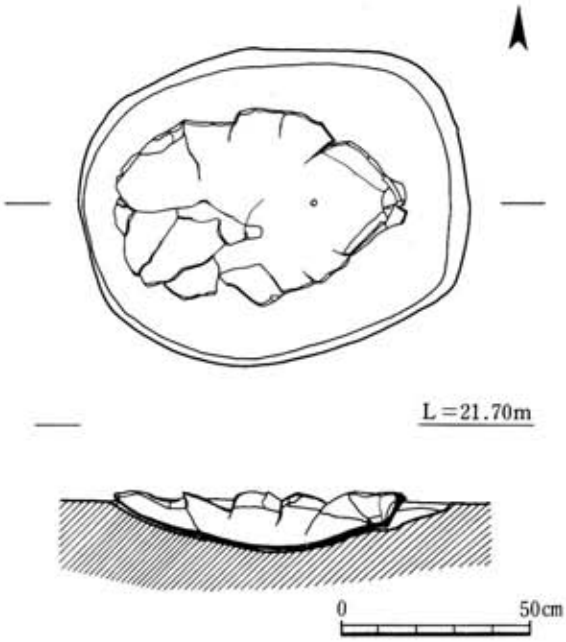



Fig. 155　撰分遺跡ＳＪ054甕棺墓実測図

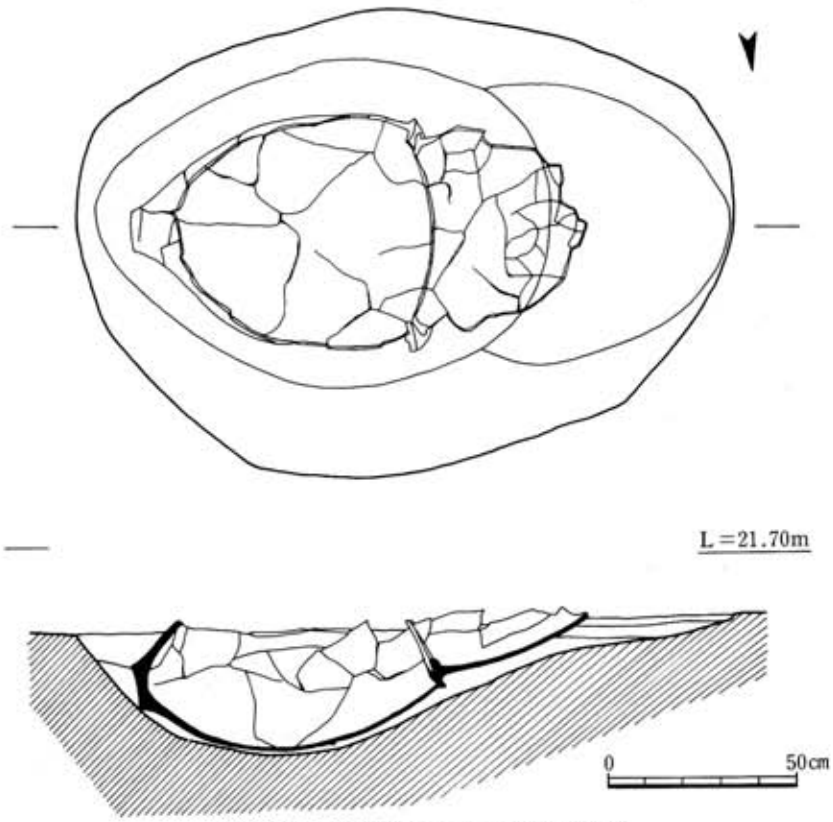



Fig. 156　撰分遺跡ＳＪ055甕棺墓実測図

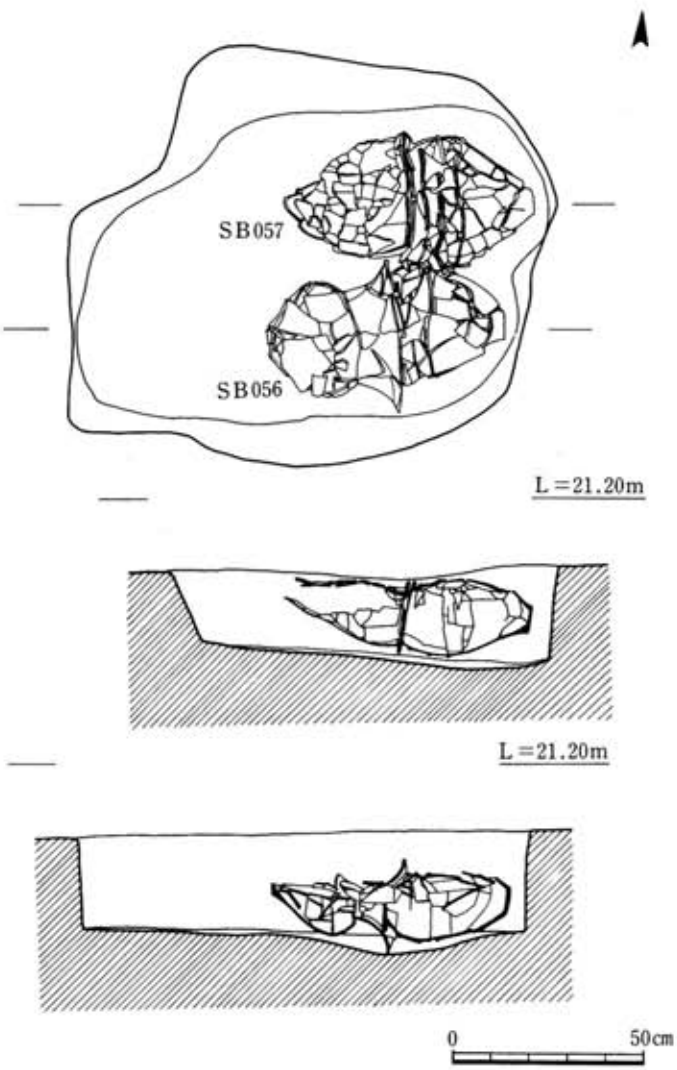



Fig. 157 撰分遺跡SJ056・SJ057甕棺墓実測図

るが、横穴は甕の規模に合わせて掘っている。傾斜角度は16°とほぼ水平である。主軸方位はN81°Wにとっている。

**SJ056甕棺墓** (Fig. 157, PL. 74－6)

SJ056甕棺墓は調査区中央部からやや東北側の弥生時代のSB059住居跡の床面下にSJ057甕棺墓と並んで埋葬されていた覆口式の小児用甕棺墓である。SB059住居跡を放棄した後に埋葬されたもので、墓壙の平面は住居跡床面で長軸2.45m、短軸2.20mの不整形である。上甕に広口壺を用い、上甕、下甕とも赤色顔料が施されていた。傾斜角度はほとんどない水平である。主軸方位はS81°Wにとる。

**SB057甕棺墓** (Fig. 157, PL. 74－6)

SB057甕棺墓はSB056甕棺墓と同じ墓壙内に埋葬された合口式の小児用甕棺墓である。下甕には赤色顔料が施されていた。ほぼ水平に埋葬され、主軸方位はS85°Wにとる。

**SB058甕棺墓** (Fig. 158,PL. 75－1)

SB058甕棺墓は遺跡最東端にあり、弥生時代のSD001溝の北側に位置する。単棺の小児用甕棺墓である。甕の口縁部付近は黒色土に覆われており、木蓋が用いられていたと思われる。墓壙は南西側を径0.40mの穴に切られているが、復元すると平面は長径1.20m、短径0.90mの楕円形であったと思われる。横穴は長径0.69m、短径0.55m、深さ0.12mが掘られている。胴部下位に穿孔が施されている。傾斜角度は15°を測りほぼ水平である。主軸方位はN52°Wにとる。

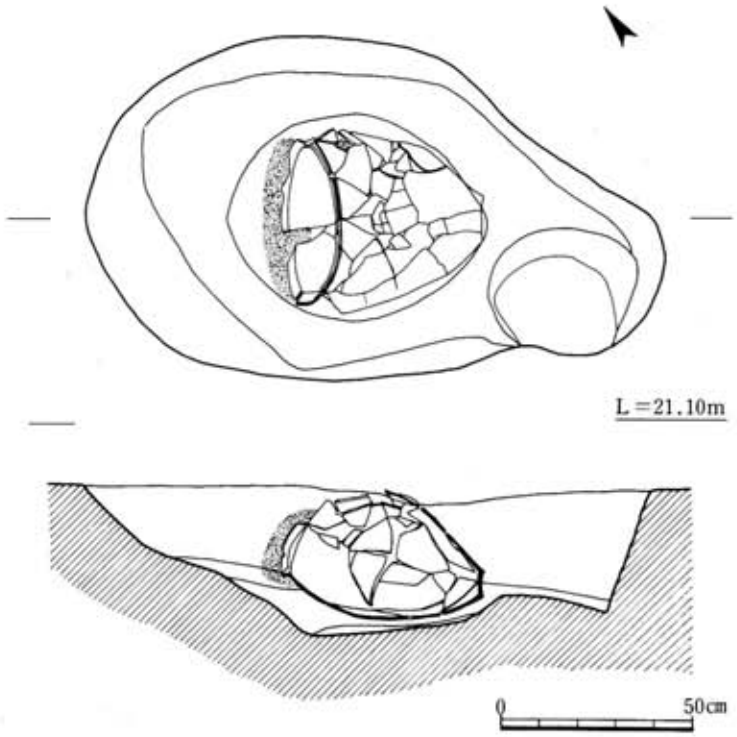



Fig. 158　撰分遺跡ＳＪ058甕棺墓実測図

**ＳＪ059甕棺墓**（Fig. 159, PL. 75－2）

ＳＪ059甕棺墓はＳＪ058甕棺墓の西１ｍある覆口式の小児用甕棺墓である。墓壙の平面は長径0.88m、短径0.58mを測る不整楕円形である。墓壙の深さは0.35mあり、横穴は長径0.51m、短径0.46mの不整楕円形に掘られ、深さは下甕底部で0.18mを測り段を持つ。傾斜角度は45°を測る。主軸方位はＳ89°Ｗにとる。上甕に鉢を用いている。

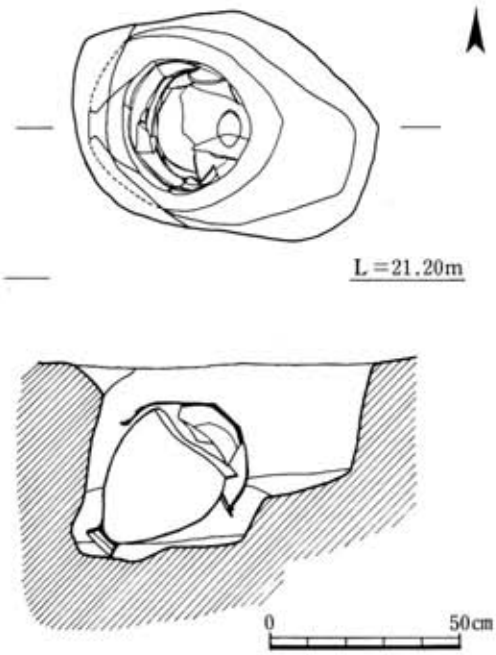



Fig. 159　撰分遺跡ＳＪ059甕棺墓実測図

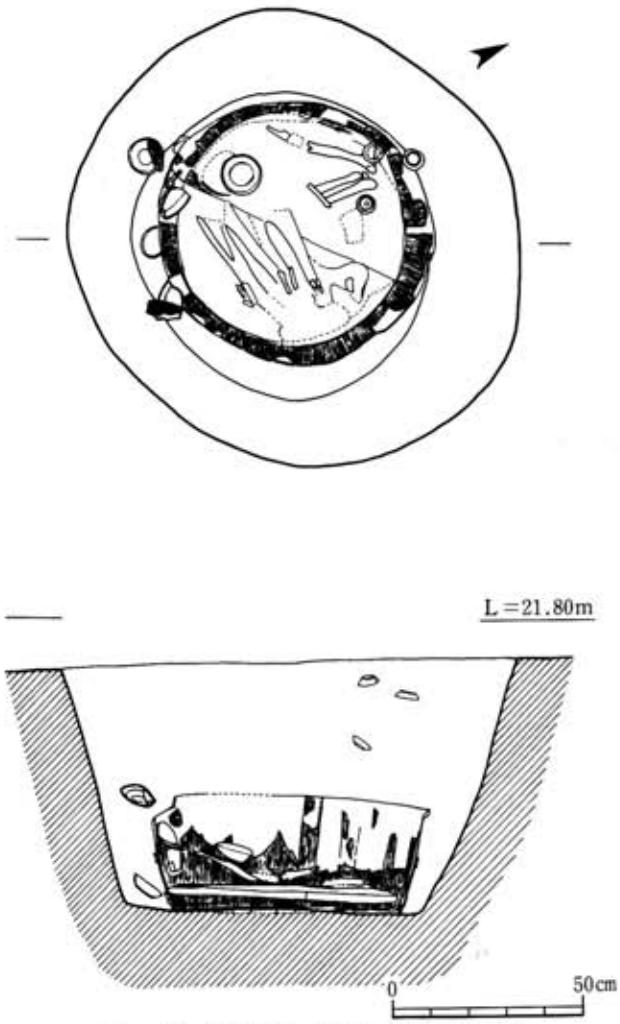



Fig. 160 撰分遺跡ＳＰ082木棺墓実測図

**木棺墓**

撰分遺跡で検出した木棺墓は１基である。木棺は盥または半切の形状である。木棺内から荘年女性人骨１体分と輸入染付絵皿、土師器杯が出土した。墓壙の埋土からは土師器小皿が出土。染付絵皿から室町時代後期の木棺墓と思われる。

**ＳＰ082木棺墓**（Fig. 160,PL. 75－３・４・５）

ＳＰ082木棺墓は調査区北西部の平安時代末～鎌倉時代初期の遺構が集中する微高地で検出した。墓壙は平面が長径1.23m、短径1.14mの円形である。墓壙底は長径0.82m、短径0.80mの円形で平坦になる。墓壙壁は69°～73°の傾斜で立つ。墓壙の深さは0.61mを測る。墓壙上面から0.35mの深さに木棺墓の口縁部がある。木棺は口径0.68m、底径0.61m、高さは外面0.30m、内面0.25mを測り、上底状になる。木棺の材質は杉または桧の柾目材を用いている。

**土壙墓**

撰分遺跡で検出した土壙墓は６基である。所在する場所は１基を除き、調査区北西部の微高地にある。時代別には鎌倉時代初期前後に限定される。

**ＳＰ094土壙墓**（Fig. 161）

ＳＰ094土壙墓はＳＰ082木棺墓の北８mの微高地にある。平面は長径0.80m、短径0.70mを測る楕円形である。土壙は２個の小穴に切られている。断面はレンズ状になり深さ0.10mを残す。小穴から青磁椀が出土し、青磁椀が鎌倉時代前期の時期であることから、小穴より古い土壙墓である。

**S P097土壙墓**（Fig. 162, PL. 75−6）

S P097土壙墓は調査区中央部のやや東南にあり、古墳時代のS B061住居跡の北東壁の一部を切っている。土壙墓の平面は長軸を東西方向にとる長方形である。長軸1.90m、短軸1.30m、深さ0.20mを測る。土壙底は平坦である。床面から青磁椀・土師器小皿・鉄剣が出土した。遺物から鎌倉時代前期の土壙墓と思われる。

**S P099土壙墓**

S P099土壙墓は調査区北西部の微高地にあり、S P094土壙墓の南4mに位置する。土壙墓の平面は長径1.85m、短径1.72mのほぼ円形である。断面はすり鉢状に壁が立ち、深さ1.20mを測る。遺物は土師器杯・小皿が出土した。鎌倉時代の土壙墓と思われる。

**S P113土壙墓**

S P113土壙墓はS P099土壙墓の西12mにある。平面は長径1.30m、短径1.10mの楕円形である。土壙の深さ0.83mを測る。遺物は埋土から土師器小皿・高台付杯・瓦器高台付杯・石鍋などが出土した。遺物から平安時代末〜鎌倉時代初期の土壙墓と思われる。

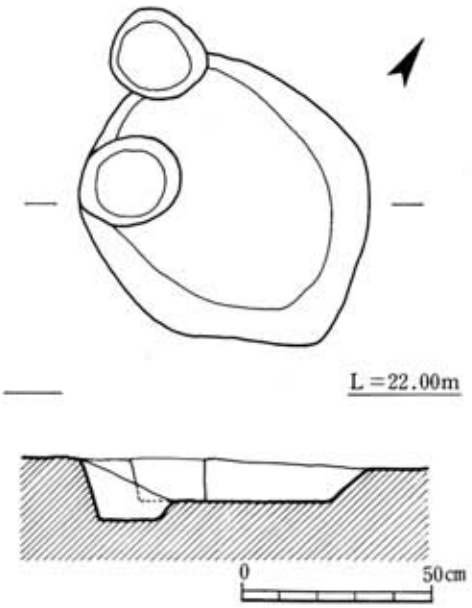



Fig. 161　撰分遺跡S P094土壙墓実測図

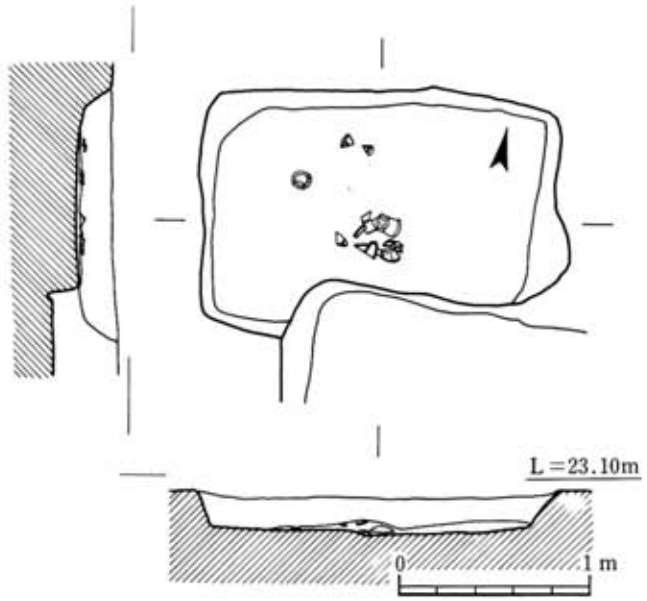



Fig. 162　撰分遺跡S P097土壙墓実測図

## 3．遺　物

### (1) 旧石器時代（Fig. 163～165, PL. 76－1～4）

ほとんどが遺構検出中に出土したものである。遺跡西側の丘陵地および丘陵裾部からの出土が多かった。ナイフ形石器・台形様石器・細石核・細石刃・石核・尖頭器・剝片など器種が多い。石材は黒耀石・サヌカイトに限られた。

**ナイフ形石器**　1～5は黒耀石製のナイフ形石器である。1・3は縦長剝片の打面側を刃部に用いている。打面および打瘤を側辺背部のブランティングによって除去し、二側辺加工によって基部を作っている。2・4は打面側を基部に用いている。ブランティングによって打瘤を除去し、基部を作っている。二側辺にブランティングを施す。5は縦長剝片の打面および打瘤を残し基部に用いている。一側辺背部だけにブランティングが施されている。

**台形様石器**　6は基部を欠失しているが、横長の剝片を素材にした台形様石器である。剝片が厚味を持っていたため両側辺のブランティングも大きい。断面は台形になる。

**細石核**　7～10は黒耀石の細石核である。細石刃剝出面の反対側の背縁部の整形調整は片面

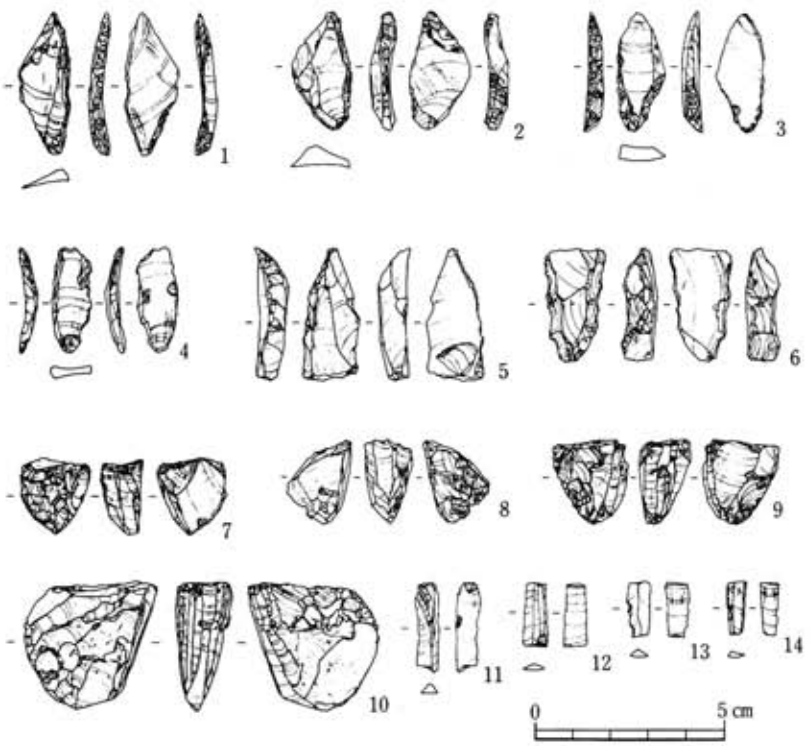



Fig. 163　撰分遺跡出土石器実測図

は丁寧であるが、片面は粗雑であり、礫面を残すものもある。打面調整は打面の片側側縁と細石刃剝出面の両方から行われている。

**細石刃**　11は打面および打瘤を残す頭部である。12～14は両端が折れた中間部である。14は使用痕が著しい。

**石核**　15は遺跡西側の丘陵裾部のP606小穴から出土した黒耀石製の石核である。打面調整は三面から行い、四面とも打面になり、縦長の剝片を剝離している。縄文時代後期の石核とも考えられる。

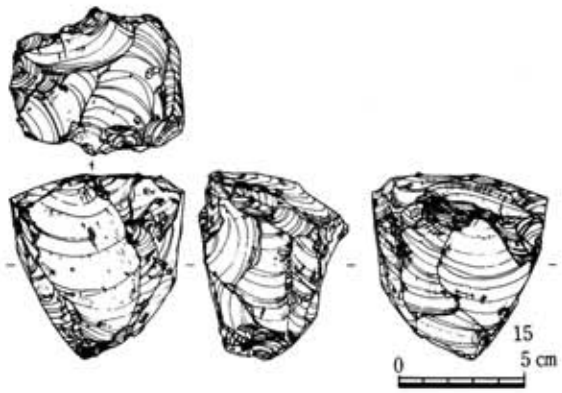



Fig. 164　撰分遺跡出土石器実測図

**尖頭器**　16～19はサヌカイト製の両面加工の尖頭器である。4点とも折損している。16・17・19は遺構検出面から出土し、18は小穴の埋土から出土した。16・17・19は石器の中央部より上位に最大幅を持ち、やや肩部が張り出す特徴を持つ圭頭形と呼ばれる尖頭器の一群である。17・19は石器の幅に対し厚手である。17は中央部付近に抉り込みの加工がみられる。折損後、折損部に剝離を加えている。再使用のためであろうか。茶園原遺跡周辺の多久石器遺跡群から持ち込まれ、使用されたと思われる。ほかに7点の尖頭器が出土したがすべて折損し、磨耗が著しいため図化を省いた。

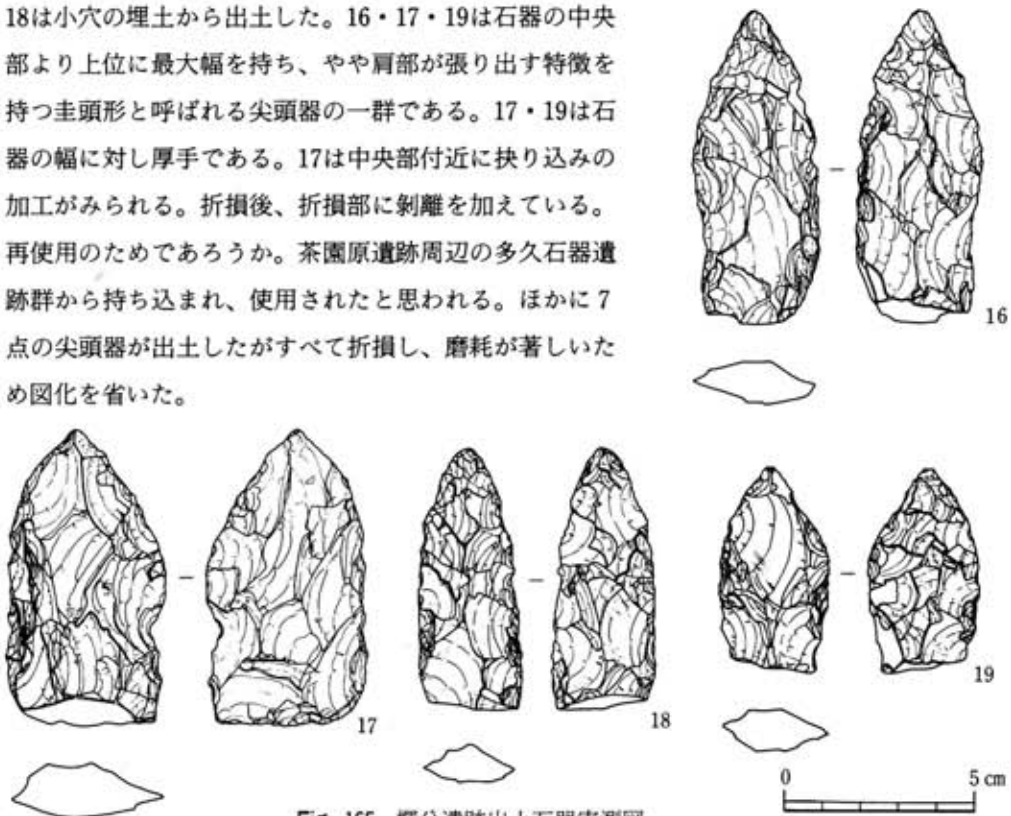
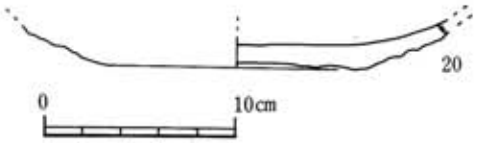



Fig. 165　撰分遺跡出土石器実測図

### (2)　縄文時代（Fig. 166, PL. 77－5）

縄文時代の遺物は石鏃が10点と滑石粉末を混入した土器片２点と底部に網目文を持つ土器片が出土したが遺構に伴う遺物ではない。

**網目文土器**　20は底部に網のような繊維の文様を残す平底状の土器底部である。約３cm間隔に結び目を持ち、10本前後の線が交叉し、放射状に広がり文様の単位となる。縄文時代晩期の土器と思われる。



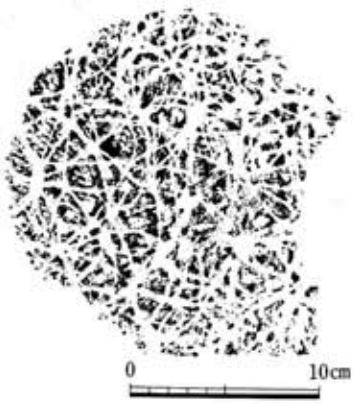




Fig. 166　撰分遺跡出土縄文土器実測図・拓影

### (3)　弥生時代

**石器**（Fig. 167・168, PL.76－5・6，77－1～4）

**石包丁**　石包丁は４点が出土した。２点は弥生時代の遺構から出土したが、２点は古墳時代の住居跡の埋土から出土した。21は弥生時代のＳＢ060住居跡から出土した。半月形で２ヵ所に穿孔がある。背部は平坦である。安山岩製。22は古墳時代のＳＢ010住居跡の埋土から出土した。半月形で３ヵ所に穿孔があり、孔の部分で折れている。背部は平坦である。安山岩製。23は弥生時代のＳＤ001溝から出土。大型の石包丁で未製品。３ヵ所に穿孔があり両側の孔の部分で折れている。背部は礫面を残し、刃部は主に片面から打ち欠いている。研磨はしていない。24は古墳時代のＳＢ061住居跡の埋土から出土。石包丁の中央部だけを残し両側は折れている。１ヵ所の穿孔を残す。背は平坦である。安山岩製。

**紡錘車**　25はＳＤ001溝から出土した紡錘車である。両面から穿孔している。頁岩製。26・27は弥生時代のＳＢ020住居跡から出土した紡錘車の未製品である。26は片面に穿孔途中の跡が残り、27は穿孔していない。磨痕が残る。安山岩製。28は砂岩製の紡錘車である。約３分の２を欠いている。厚さは1.20cmと厚味を持つ。穿孔は片面からである。古墳時代以降の紡錘車とも思われる。

**砥石**　29～32は砥石で29・30は砂質頁岩、31は軟質砂岩、32は砂岩を用いている。29～31は４面を使用している。古墳時代以降の砥石とも思われる。

**打製石斧**　33～35はサヌカイト製の打製石斧である。33は礫面を残し、使用痕も認められないことから未製品であろう。35・36は先端に著しい使用痕を残している。３点とも古墳時代の住居跡の埋土から出土した。別に10点のサヌカイト製打製石斧が出土した。

**磨製石斧**　磨製石斧は13点が出土したがＳＤ001溝から出土した４点を除き、江戸時代や鎌倉

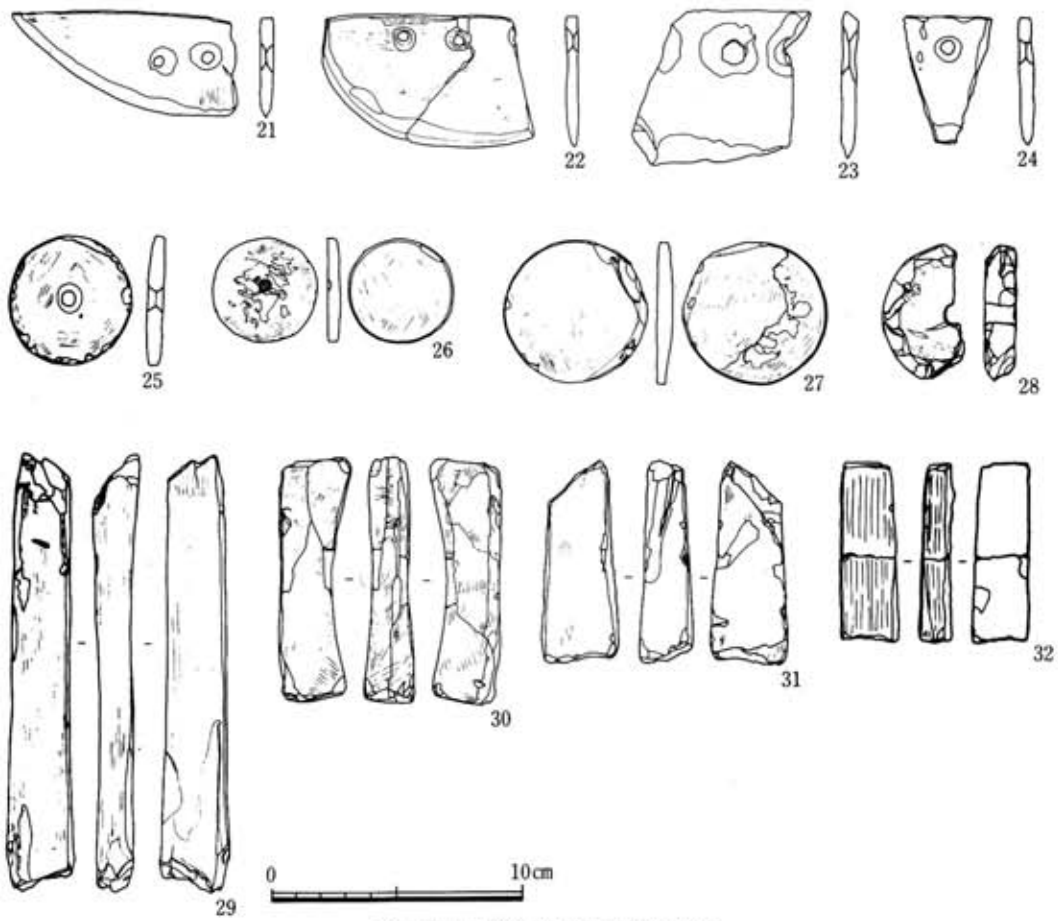



Fig. 167 撰分遺跡出土石器実測図

時代の遺構の埋土からの出土である。時代別には縄文時代5点、弥生時代8点になる。36・37は乳棒状で厚味を持ち、体部の全面に敲打痕を残す。刃部は両刃で幅が広い。石材は安山岩を用いている。縄文時代の石器であろう。39は刃部の幅が広い撥形である。体部の全面に敲打痕を残す。頁岩製である。縄文時代の石器であろう。38は頁岩製の磨製石斧であるが刃部および体部の2分の1を欠く。41は小型の石斧である。刃部の一部を欠き、体部は風化が著しい。両刃である。頁岩を用いている。40・42は断面が方形の石斧で、刃部を失っている。四面とも研磨されている。砥石とも考えられる。40～42はSD001溝で出土。弥生時代の石器である。

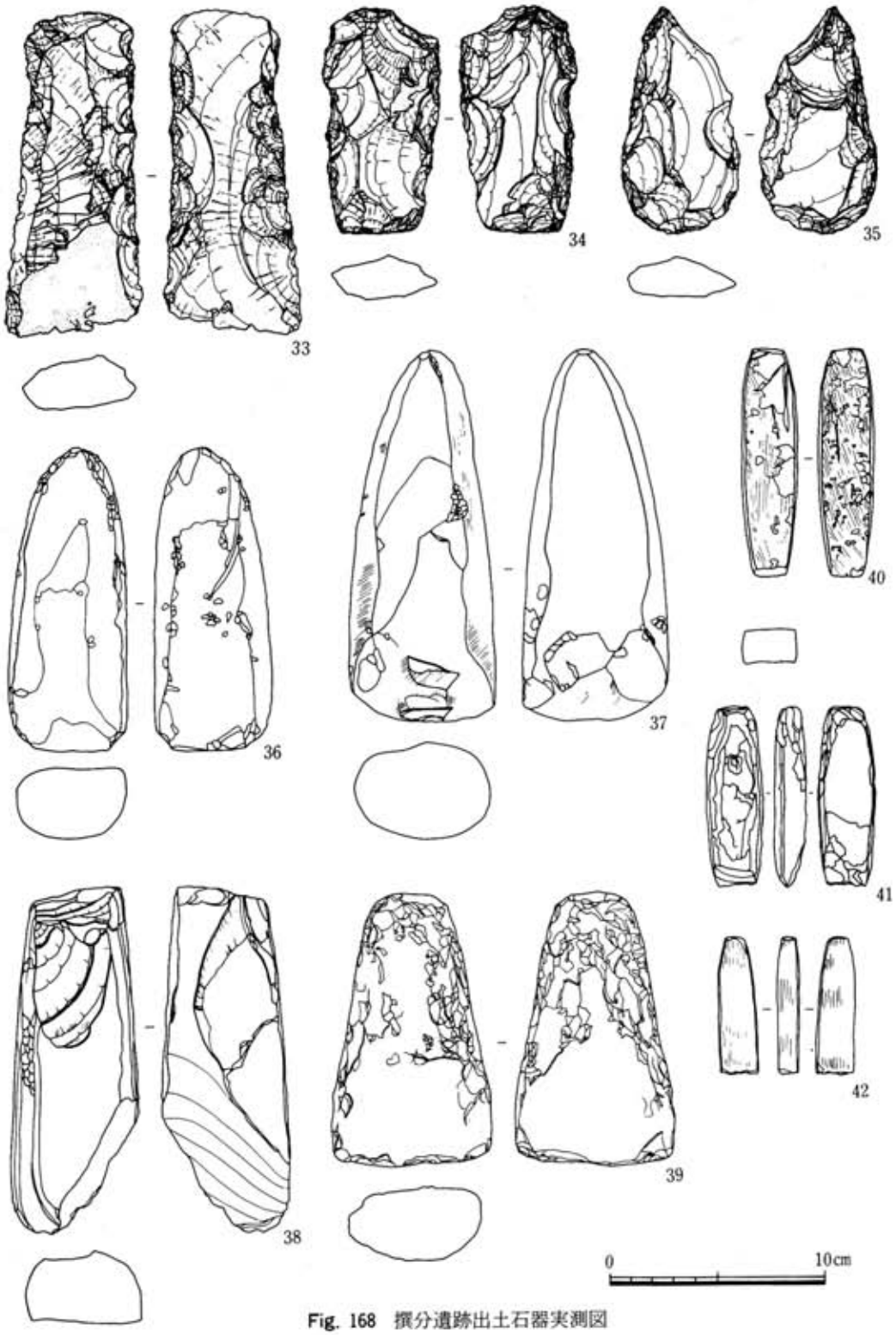



Fig. 168 撰分遺跡出土石器実測図

**土器**（Fig. 169～173, PL. 78～83）

弥生時代の土器の器種は甕・壺・蓋・高杯・器台・支脚が出土した。遺物は膨大な量であるが甕棺墓を除いて、出土状態は悪く、実測できるものは少なかった。その中で遺構の時期を決定する土器を選んで図示した。

**甕**　43～49、55～62は甕の口縁部である。43～46・58・61はＳＤ001溝から出土した。56はＳＢ005住居跡、57はＳＢ006住居跡、49はＳＫ025土壙、47はＳＢ027住居跡、48・55・60はＳＢ029住居跡、59はＳＢ059住居跡、62はＳＢ060住居跡で出土した。43・44は口縁部が直角に屈折し、逆Ｌ字形になり、口縁下部に三角形の突帯を有し、口縁内側が張り出している。45・46・49・55～57は口縁部が直角に屈折し、逆Ｌ字形になり、口縁下部に突帯を持たず、口縁内側が張り出している。47・62は口縁部が直角に屈折し、逆Ｌ字形になり、口縁下部に三角形の突帯を有するが、口縁内側は張り出さない。48・59・60は口縁部が直角に屈折し、口縁内側は張り出さない。61は口縁部は逆Ｌ字形であるが、口縁内側は丸味を持つ。58は口縁部がＴ字形になり、口縁下部に三角形の突帯を持つ。50～54・63～74は甕の底部である。50・54・71は平底である。51～53・65・66・70はやや上底気味になる。63は円盤状の底部である。64はやや上底気味で外反して開く。67～69は平底で底部の径が大きく、やや外反気味に開く。72～74は台付甕の底部である。

**壺**　75～82は壺の口縁部である。75・79・80・82はＳＤ001溝から出土、76・77はＳＢ060住居跡、78はＳＢ020住居跡、81はＳＢ007住居跡から出土した。75はＴ字形に近い口縁部を持ち、頸部は外反する。76の頸部は外反し、口縁端部に沈線状の段を有し、口縁内面が張り出す。77は頸部から口縁端部まで外反し、口縁内面はく字形に張り出す。内外面とも黒色に焼けているが暗文が施されている。78・79・81は袋状口縁の壺である。78は口縁部がやや内湾気味に立上がり、頸部は直角に屈折する。79・81は口縁部は内湾しながら内傾し、コ字状に近い。80は外反しながら立上がる頸部からさらに外反する口縁部を持つ。82は無頸壺で胴部下位に最大径を持つ。

**蓋**　83は小型の甕の蓋である。外面天井部は尖り、赤色顔料が施されている。紐かけの孔を２孔ずつ４孔を有する。ＳＤ001溝から出土した。

**高杯**　84は高杯の杯部である。内湾気味に開き、口縁部は逆Ｌ字形で、口縁内側が張り出す。85は脚部である。脚部内面上半にシボリ痕が残る。２点ともＳＤ001溝から出土した。

**器台**　86～88はＳＢ007住居跡から出土、89はＳＤ001溝から出土した器台である。86～88はくびれが上方にあり裾部はやや内反気味に広がる。89はくびれが中央部にあり、口縁部と裾端部の径はほぼ同じである。90・91もＳＢ007住居跡から出土した。上面は平坦である。

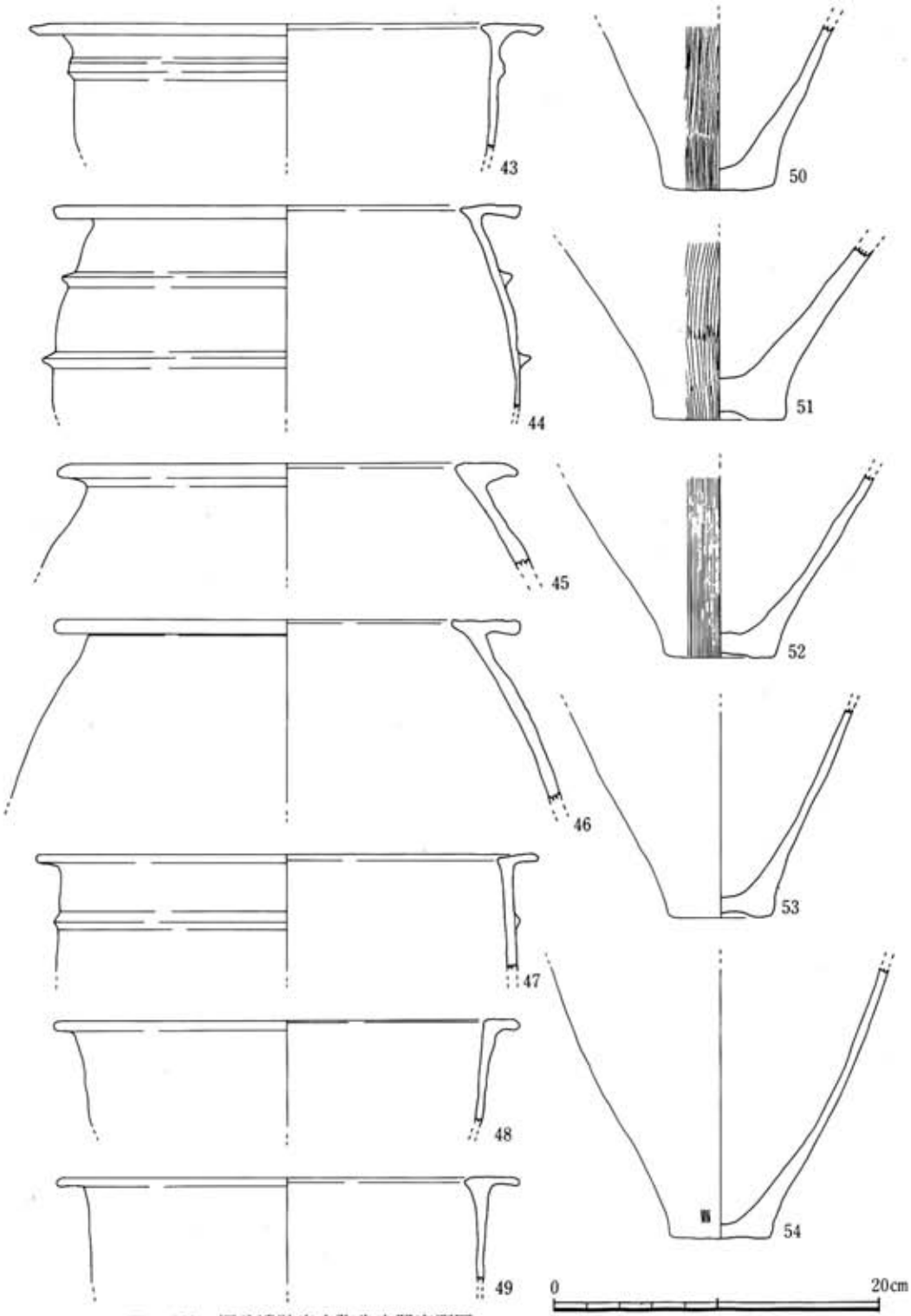



Fig. 169 撰分遺跡出土弥生土器実測図

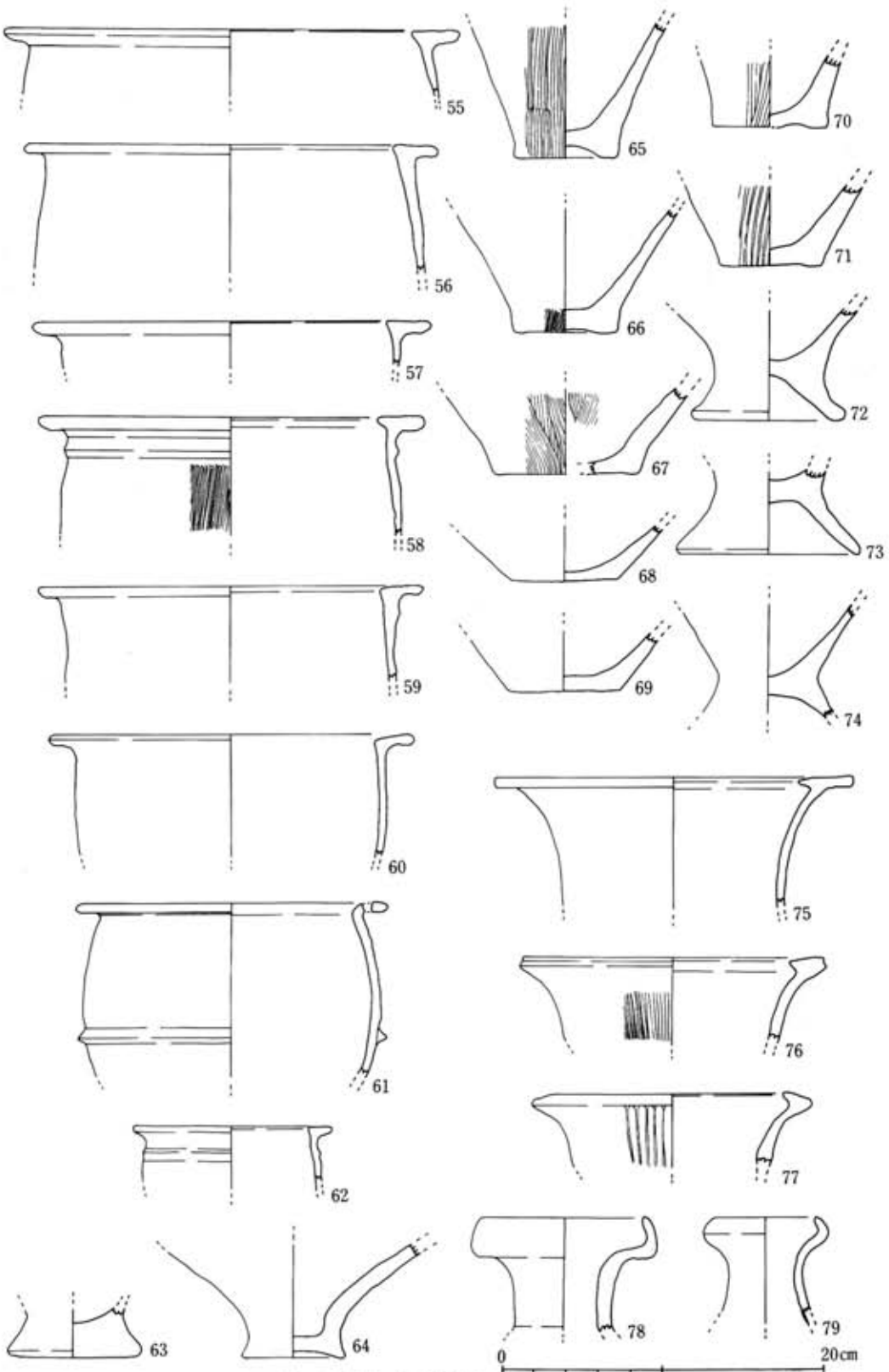



Fig. 170 撰分遺跡出土弥生土器実測図

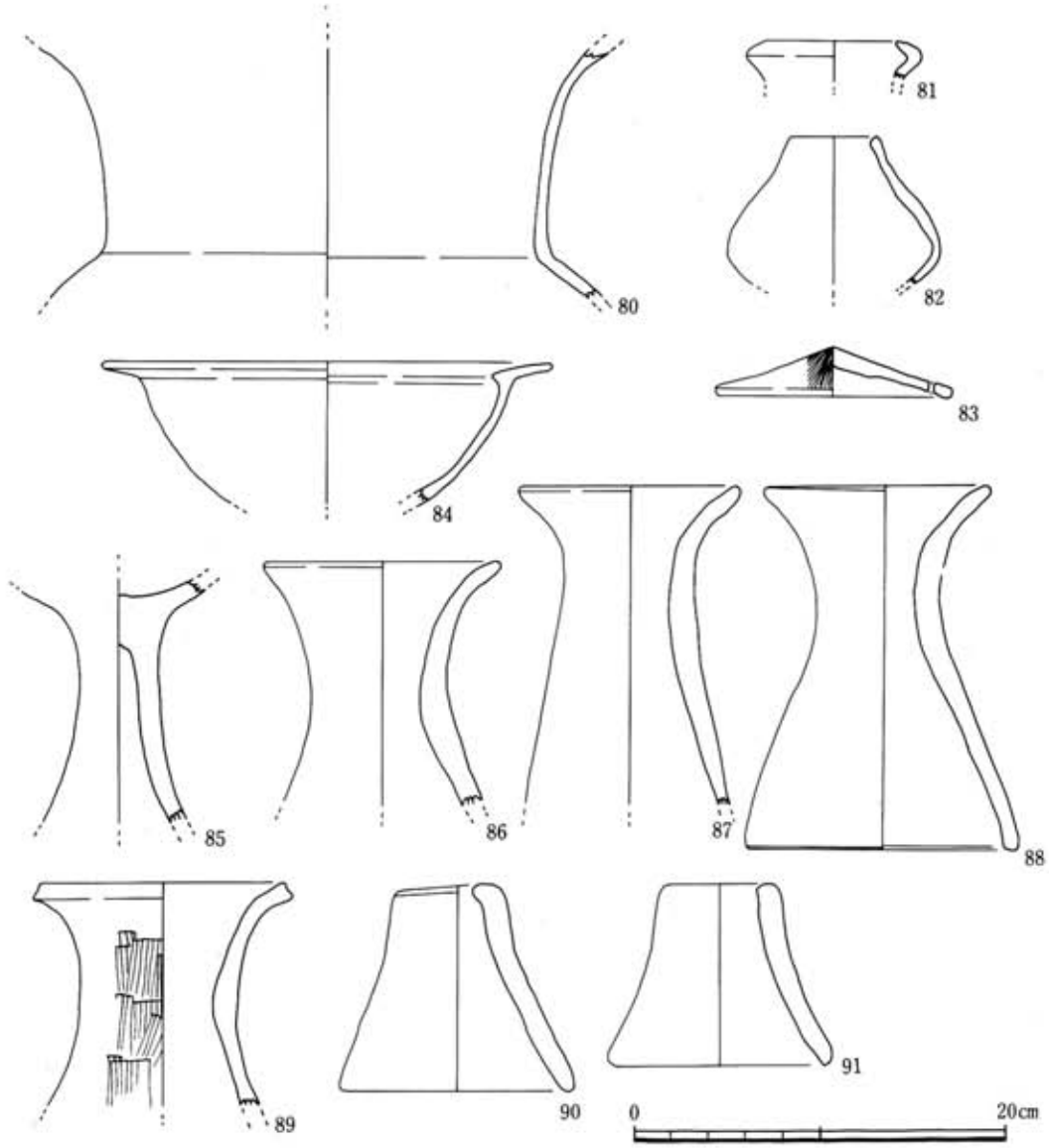



Fig. 171　撰分遺跡出土弥生土器実測図

**甕棺**　甕棺墓９基から検出した埋葬用土器は14点である。その内訳は甕11点・鉢２点・壺１点となる。これを形態別に分類すると甕が７類、鉢が２類、壺が１類になる。

**大甕**　97はＳＪ054甕棺墓で約３分の１を残す。器体は砲弾形で、器体上部は僅かに内傾し、Ｔ字形口縁がつく。胴部中央部に三角形の突帯を１条めぐらせる。98は截頭卵形の器体で、器体上部はやや内傾し、Ｔ字形口縁を持つ。口縁内面は内側に突出する。胴部中央部に三角形の突帯を持つ。

**小甕**　93・96・101は砲弾形の器体で、器体上部は僅かに内傾する。93・96は口縁部が逆Ｌ字

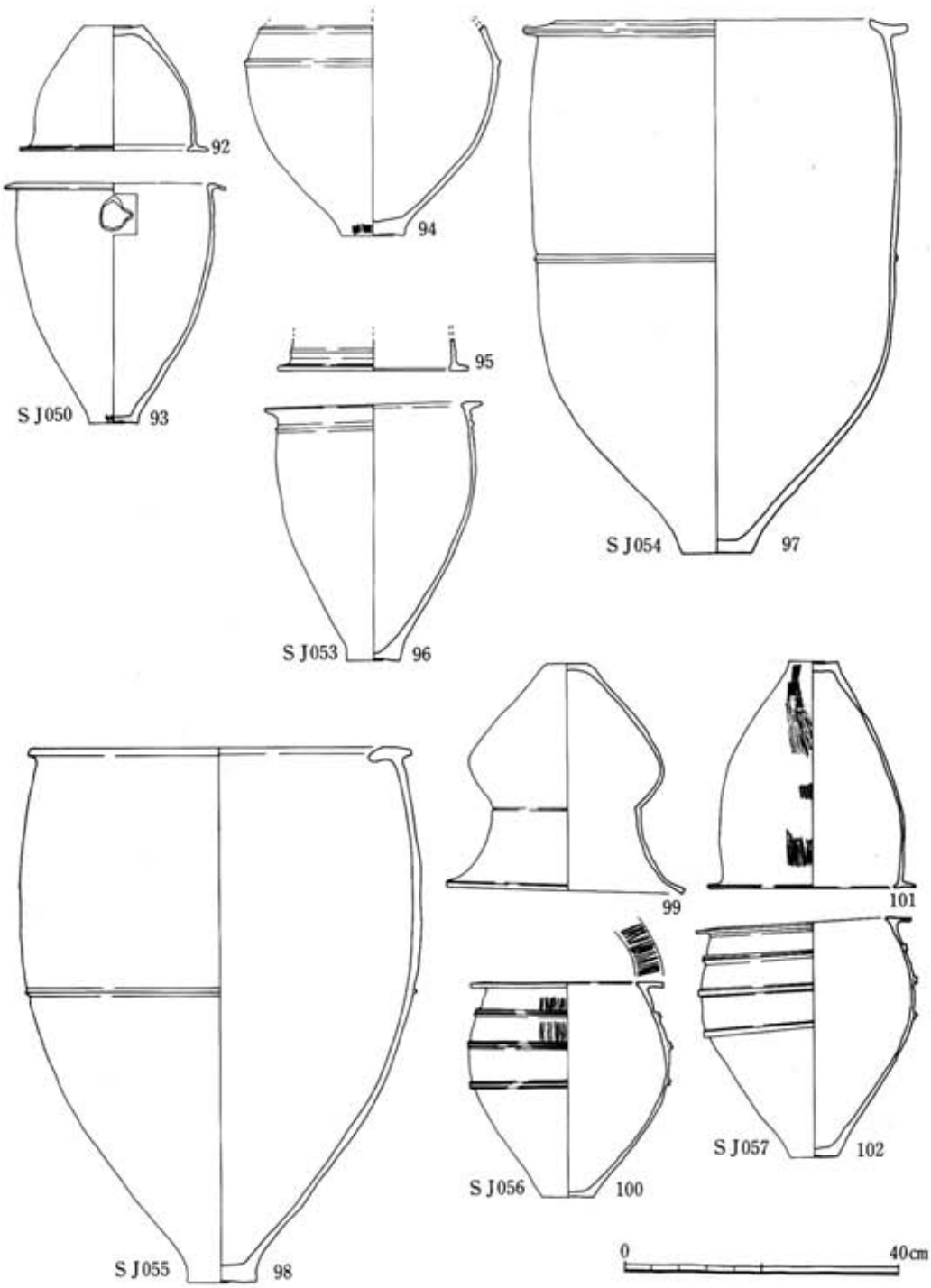



Fig. 172 撰分遺跡出土甕棺実測図

形になり、101は内面が張り出しT字形に近い。96は口縁下部に三角形の突帯を持つ。94は口縁部を欠く截頭卵形であるが胴径が大きく球形に近い。胴部中央部に最大径を持ち、胴部中央部と器体上部に三角形の突帯を有する。100・102は截頭卵形の器体で、体部中央部から大きく内傾する。逆L字形口縁を持ち、内面が張り出す。胴部中央部から上位にコ字形の突帯を3条めぐらせる。100は赤色顔料、暗文が施され、102は赤色顔料が施されている。103はいちじく形に近い器体を持ち、胴部上位で内傾し、口縁部はく字形になる。口縁下部に三角形の突帯を持つ。105は台付甕で器体はいちじく形に近い。胴部上位で内傾し、口縁部はく字形に開く。

**鉢**　92はＳＪ050甕棺墓の上甕に用いられた鉢である。胴部上位で僅かに内傾し、口縁部はT字形になる。104はＳＪ059甕棺墓の上甕で105台付甕を覆っていた。器体は椀状に開き、やや内傾し、口縁部はく字形に開く。口縁下部に三角形の突帯を持つ。

**壺**　99はＳＪ056甕棺墓の上甕に用いられた壺である。底部が窄んだ球形の胴部を持ち、頸部は外反し、口縁部もさらに外反する。胴部の最大径よりも口径が大きい。外面と内面頸部まで赤色顔料が施され、外面に暗文が施されている。

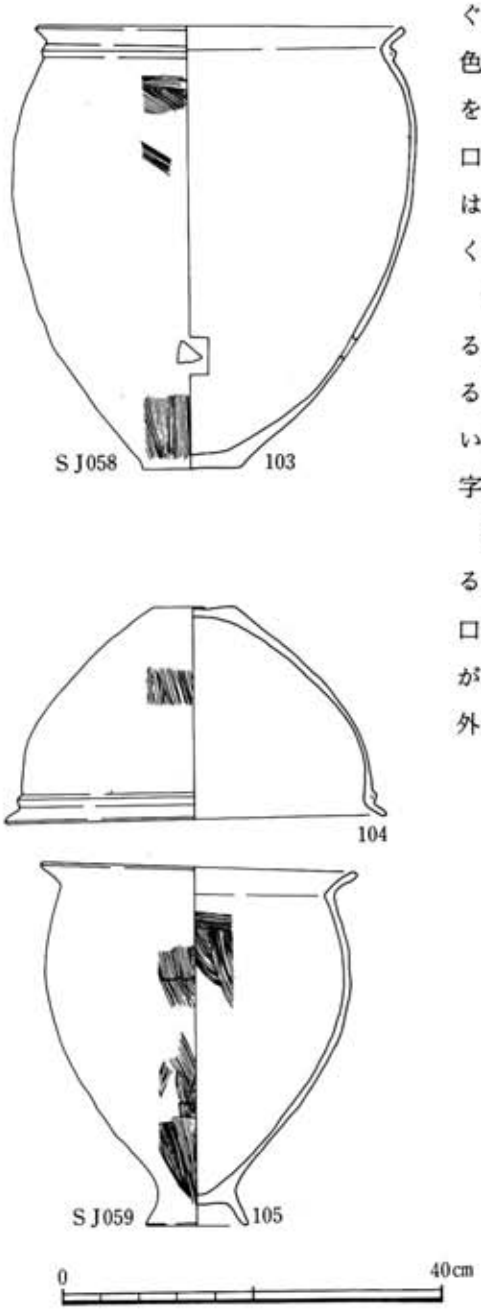



Fig. 173　撰分遺跡出土甕棺実測図

(4) **古墳時代** (Fig. 174～178, PL. 84～88)

**土師器** 土師器は主に古墳時代の住居跡から出土した。器種は壺・丸底壺・杯・椀・手捏ね土器・台付椀・高杯などが出土した。

**壺** 壺は106～139があり、106～118は複合口縁壺である。106はＳＢ012住居跡で出土、107～111・119はＳＢ080住居跡、112・118・120はＳＢ007住居跡、113はＳＢ060住居跡、114はＳＢ010住居跡、115・116はＳＢ068住居跡、117はＳＢ092住居跡で出土した。106は長く反り気味に外反する口縁部を持ち、擬口縁は著しく外反し頸部と直角になる。肩部から胴部上位は膨み、球形になる。最大径は胴部中央部にあり、内湾しながら底部に窄み、底部はやや尖り気味である。口縁部は内外面とも横ナデ、擬口縁の内外面と頸部内面はナデツケ、頸部外面はナデ、肩部から胴部上位外面はハケ目調整、内面は横、右下りのヘラケズリ後、ナデ調整を施す。胴部外面は磨耗が著しく不明である。115は外反気味の口縁部を持ち、口唇部は厚味を持つ。111・116も外反する口縁部を持ち、114・117は僅かに外反する口縁部を持つ。113はやや外反する口縁部を持つ丸底壺で肩部から擬口縁はく字形になる。胴部は膨みを持ち球形である。口縁部、擬口縁の内外面とも横ナデ、胴部下位外面は縦、横、斜めのハケ目調整である。内面の胴部下位に指おさえの痕が残る。107～110も113に類似する形態を持ち大型である。118は頸部に有軸羽状文が施されている。119はやや外反する口縁部を持つ大型の壺である。口縁下部に三角形の突帯を持つ。120は大型の壺で口縁下部の三角形の突帯に×印の連続文が施されている。121は長く反り気味に外反する口縁部を持ち、肩部から胴部中央部に張り出し最大径を胴部中央部に持つ。122・124・127は外反する短い口縁部を持つ。123・129は緩やかに外反する短い口縁部を持ち、肩部から胴部にかけて緩やかに内湾し、胴部は細身である。125・126・128・130～134・136～139は内湾気味に開く口縁部を持つ。137は肩部に波状の沈線が施されている。ほとんどが口縁部はナデ、胴部はハケ目調整である。135は外反する口縁部の端部が尖り気味である。

**丸底壺** 140は口縁部が外反気味に開き立上がる。胴部はやや膨み、胴部上位に最大径を持つ。外面はハケ目、内面はヘラケズリである。ＳＢ080住居跡から出土した。

**小型丸底壺** 141～144があり、141・142はＳＢ080住居跡から出土、143はＳＢ061住居跡、144はＳＢ012住居跡で出土した。141・142・144はく字形に外反する口縁部を持ち、143は短い口縁部を持つ。

**鉢** 145～147は小型の平底鉢である。145はＳＢ010住居跡で出土、146はＳＢ012住居跡、147はＳＢ005住居跡から出土した。

**手捏ね土器** 148・150がある。148はＳＢ010住居跡から出土。150はＳＢ080住居跡から出土した。

**ミニチュア土器** 149はＳＢ010住居跡で出土した。

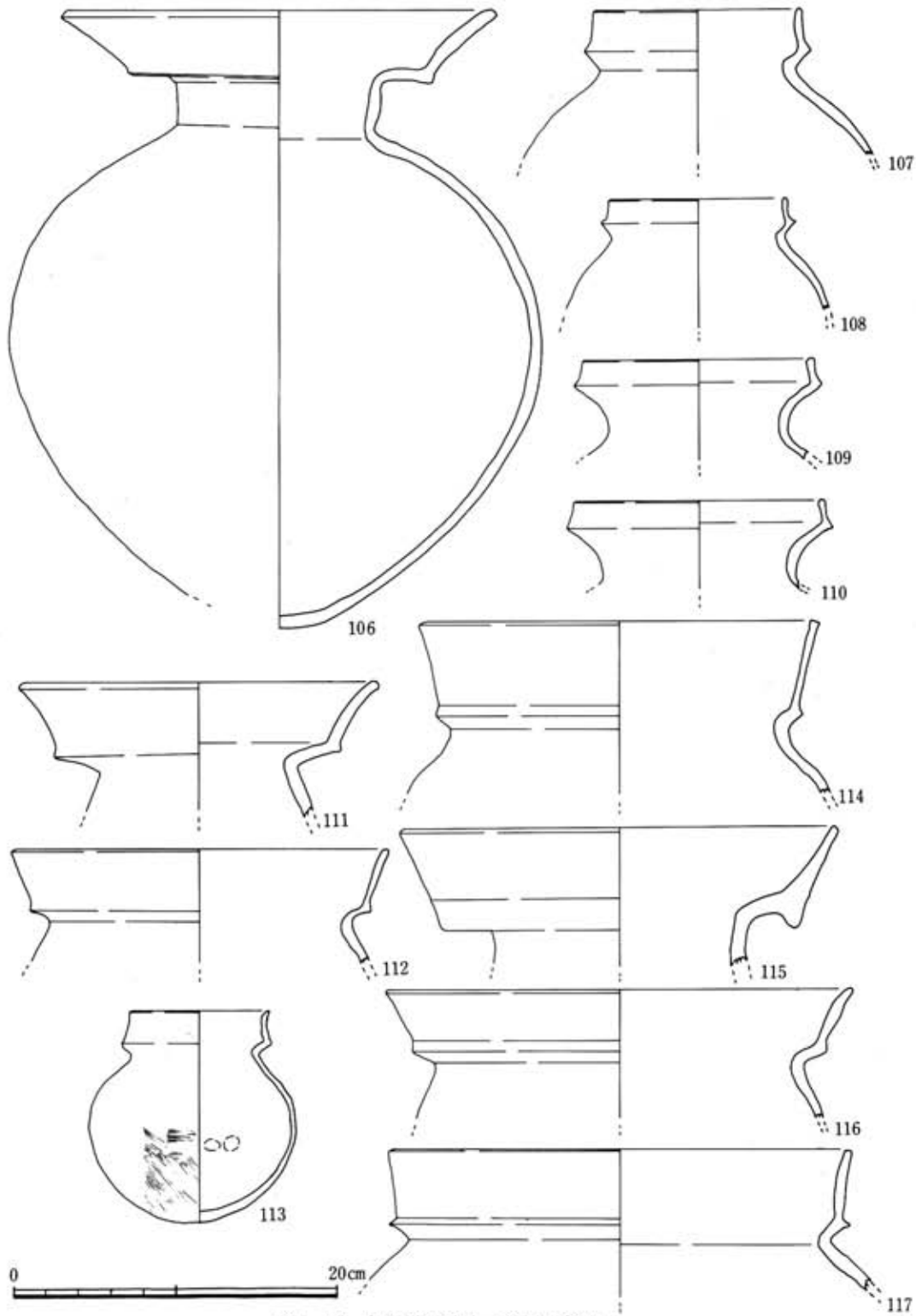



Fig. 174 撰分遺跡出土土師器実測図

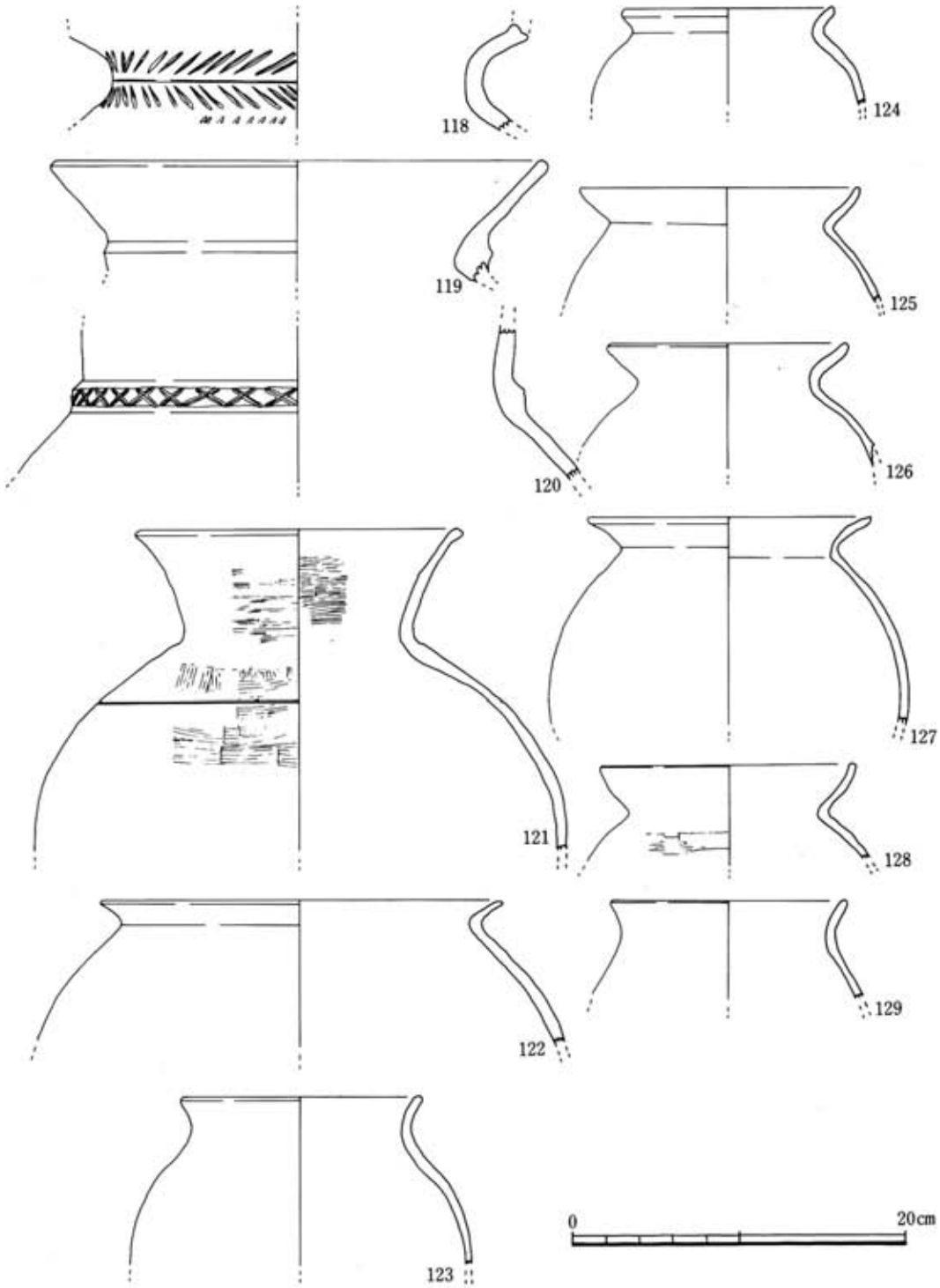



Fig. 175　撰分遺跡出土土師器実測図

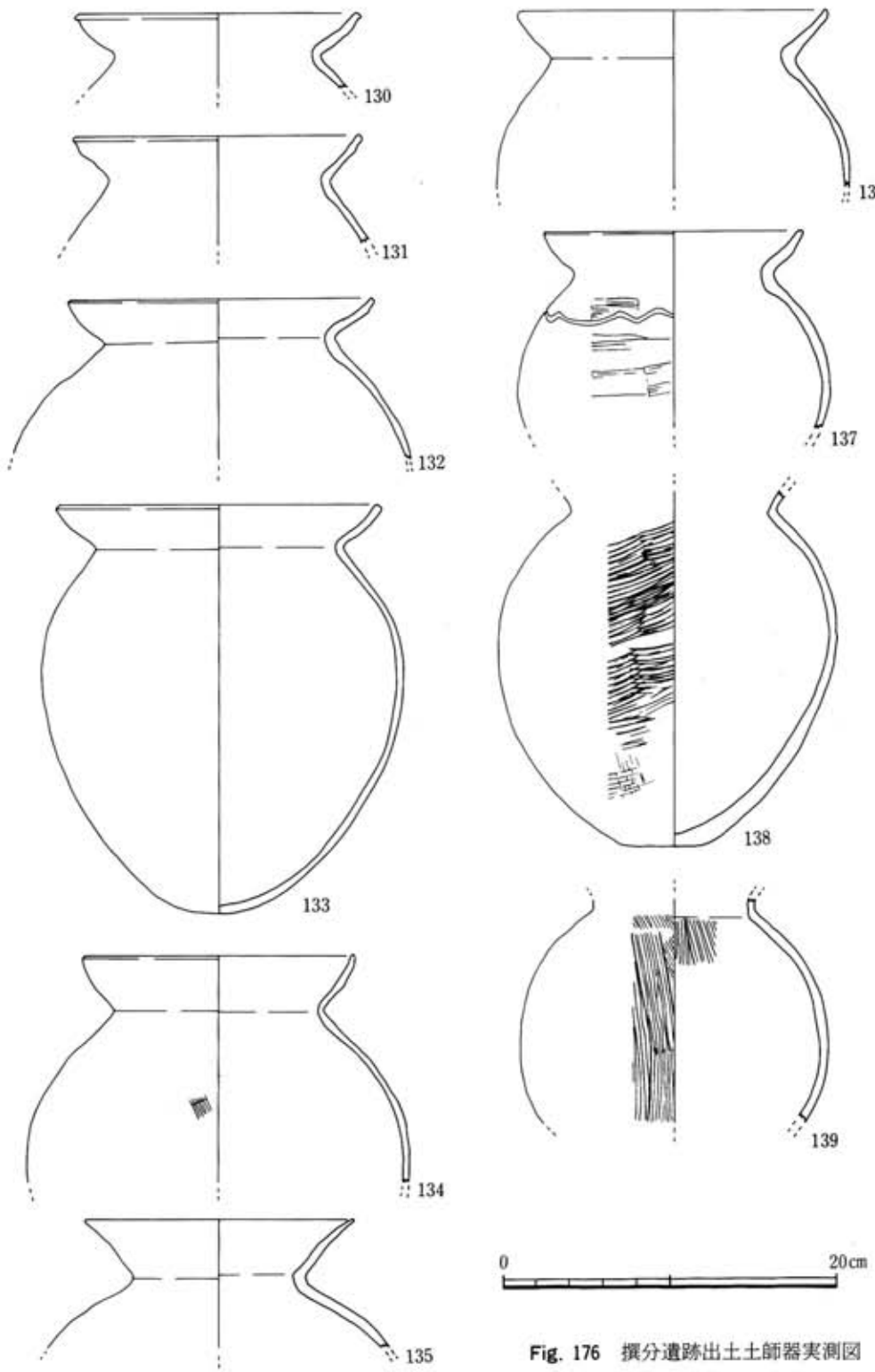



Fig. 176 撰分遺跡出土土師器実測図

**杯**　151～156がある。151・153はＳＢ061住居跡から出土した。152はＳＢ079住居跡で出土、154はＳＢ012住居跡、155はＳＢ005住居跡、156はＳＢ080住居跡で出土した。

**台付椀**　157・158がある。157はＳＢ092住居跡、158はＳＢ061住居跡で出土した。脚部を欠く。椀部は内湾気味に開く。短い脚部を持つ。

**高杯**　159～165がある。159・164はＳＢ010住居跡から出土。160・162・165はＳＢ061住居跡から出土。161はＳＢ012住居跡で出土。163もＳＢ012住居跡で出土した。159は脚部が上位から外反気味に開き、脚部中央にやや太めの孔を３ヵ所あけている。160・165は柱状部がやや長く、裾部は直線的に開く。160は裾部上位に３ヵ所の小孔を持ち、165は裾部中央部に４ヵ所の小孔を持つ。163は短かい脚部から裾部が直線的に開く。脚部と裾部の境に３ヵ所の孔をあける。161は短かい脚部から裾部は内湾気味に開く。162は脚部をほとんど持たず、杯部境から裾部が内湾気味に開く。164は脚部の径が大きく、安定感を持つ脚部から内湾気味に裾部が開く。

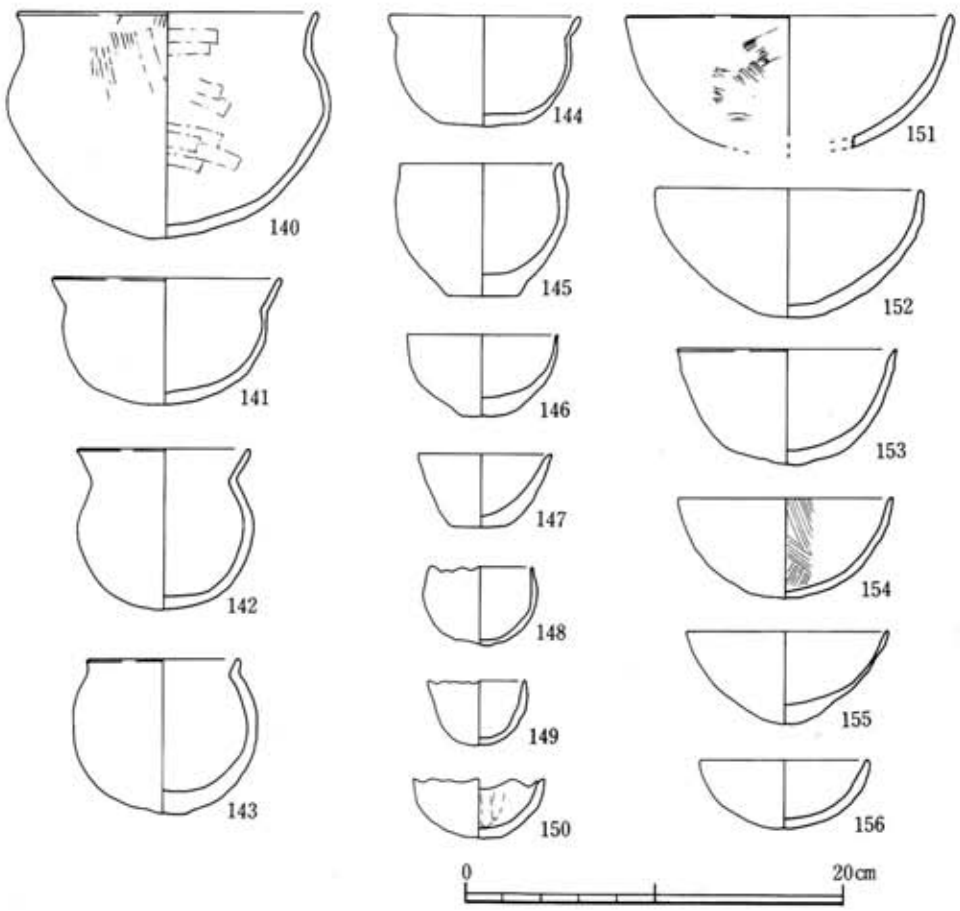



Fig. 177　撰分遺跡出土土師器実測図

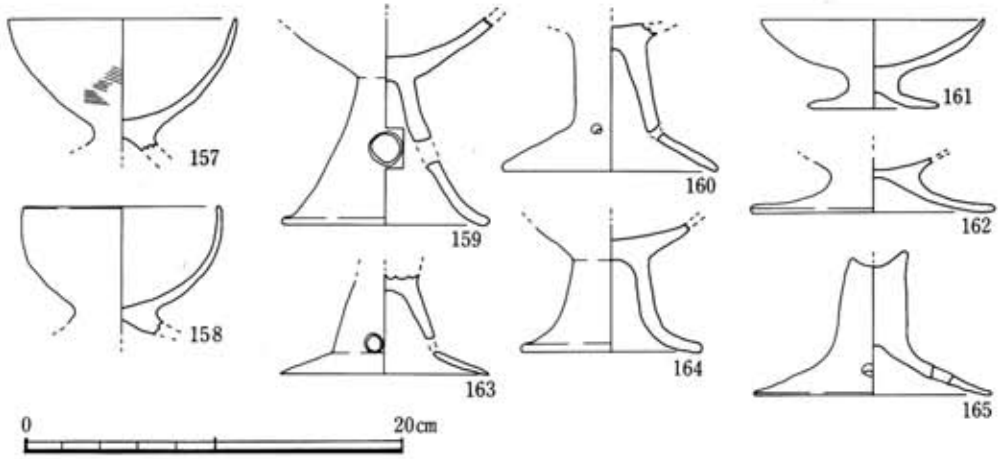



Fig. 178 撰分遺跡出土土師器実測図

### (5) 歴史時代 (Fig. 179～182, PL. 89～94)

**土師器** 平安時代～鎌倉時代の土壙、井戸跡、溝、小穴、土壙墓などの遺構から小皿・杯・椀が出土した。

**小皿** 166～192がある。166はSE112井戸跡から出土。167・182・187・188はSP082木棺墓および埋土から出土。168～172はSP097土壙墓から青磁椀とともに副葬品として出土した。173・176はSD033溝の埋土から出土した。174・177～180・192は小穴から出土。181はSK038土壙から出土。184～186はP188穴から出土。189～191はSD068溝から出土した。167・168はヘラ切り離しで板目痕を残す。体部は内湾気味である。168～172は糸切り離し、板目痕を残す。口径8.9～9.4cm、器高1.1～1.45cmを測り、体部は外反気味に開く。177・178・189・190は底部と体部の境が明瞭でやや外反気味に開く。口径は8.3～10.4cm、器高は1.25～1.55cmを測る。糸切り離し、189は板目痕がある。173～176・190・191は底部と体部の境に角を持ち外反気味に開き、やや厚味を持つ。口径7.4～9.45cm、器高1.2～2.1cmを測り、糸切り離しである。179・180・183は口径に対し、器高が高い。底部と体部の境が明瞭で内湾気味に開く。口径5.95～7.25cm、器高1.6～1.75cmを測る。糸切り離しである。184～186は底部が上底気味の平底で、体部は内湾気味である。口径は6.4、6.3、6.25cm、器高1.3、1.2、1.3cmと3点とも同じ大きさである。184・186は底部中央部が穿孔されている。182・187・188は底部内面は丸味を持ち内湾気味である。外面は底部、体部とも凹凸が著しい。口径5.7～6.35cm、器高1.4cmを測る。糸切り離しである。181は口径6.25cm、器高1.45cmを測り薄手である。内外面とも灰黒色に焼けている。糸切り離しである。

**杯** 193～224がある。193・194・198・217・219は小穴から出土した。195・221・222はSP082木棺墓から出土した。196はSD056溝、197・203・223はSD068溝から出土、199はSD033溝、200・205はP1871穴、201はSD067溝から出土。206～209・212・215はSD031溝から出土。

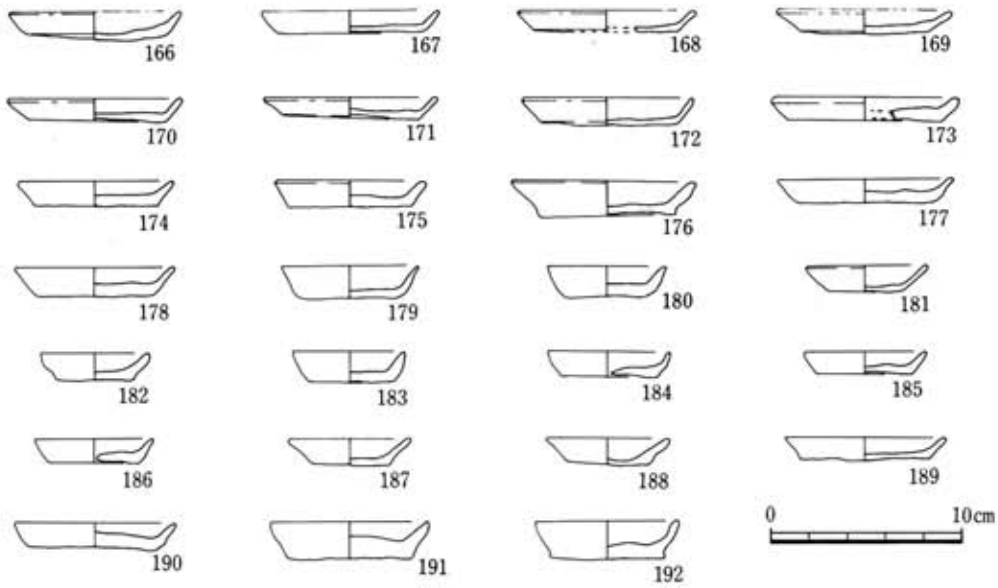



Fig. 179　撰分遺跡出土土師器実測図

202はＳＰ111土壙墓から出土、204はＳＸ087遺構で出土、210はＳＫ039土壙で出土。211・220・224はＳＸ054遺構で出土、213はＳＤ016溝、214はＳＤ085溝、216・218はＰ1148穴から出土した。193・217は底部は平坦で体部は外反気味に開く。口径に対し器高が高い。194・197・204は底部が平坦で体部は内湾気味に開く。203・216・223は底部が平坦で体部は外反気味に開く。195・221・222は底径に対し口径が広く、器高も高い。196は底部が平坦で体部は内湾気味に開く。器高が高い。198は底部と体部の境は明瞭でなく内湾気味に開く。199・201・210は底部がやや厚手で内湾気味に開く。内面は底部が平坦で屈曲して体部は開く。200・205は底部は平坦で体部との間に段がつき内湾気味に開く。206～209・211・212・215は底部外面がやや上底気味に反り、体部は内湾気味に開く。底部と体部の境に段がつく。202は底部が平坦で底径と口径の差が小さく体部は外反気味に開く。213・214は底部は平坦で体部との境に段を持ち内湾気味に開く。底径に対し、口径が広い。216・218は底部は平坦で段を持ち、体部は外反して開く。底部に板目痕を残す。220は底部が平坦で体部は外反して開く。内面の底部中央部が盛り上がる。底部外面に板目痕が残る。224は底部が平坦で体部は内湾気味に開く。底部と体部の境に段がつく。杯のうち193・195・217・221・222の小型の５点は時期的に新しく、室町時代の杯と考えられ、５点を除く杯はほぼ同一時期のものと思われ、平安時代末～鎌倉時代初期に嘱するものであろう。

**椀**　225はＰ1946小穴から出土した椀である。丸底気味の底部を持ち、体部は内湾しながら開き、口縁部は短く外反する。高台は高く、下外に延びる。内外面ともロクロナデ調整である。

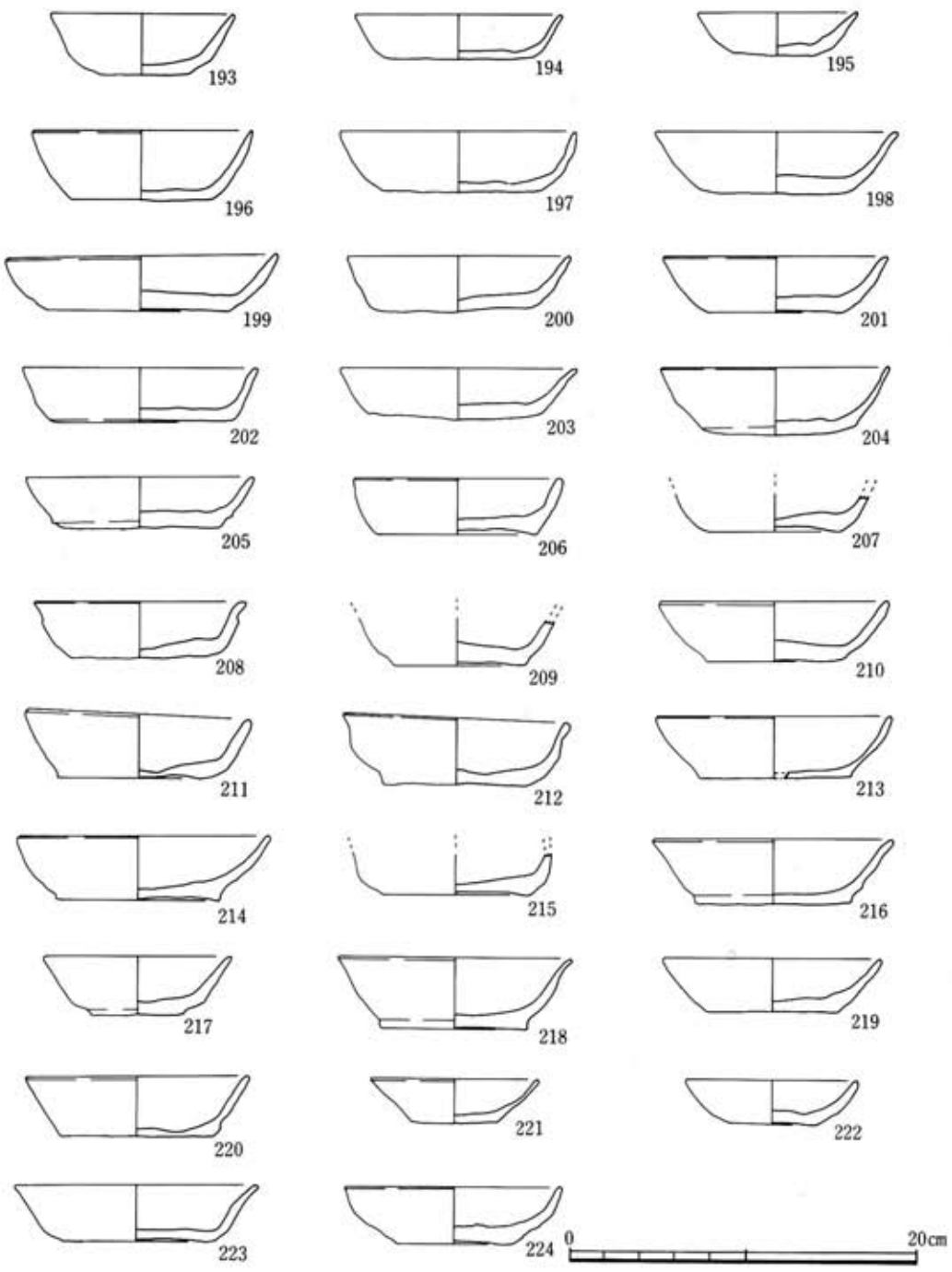



Fig. 180 撰分遺跡出土土師器実測図

**瓦器**

**椀** 226～228はＳＥ112井戸跡から出土した。226は底部は丸味を持ち体部は内湾気味に開き、口縁部は外傾して立つ、はりつけ高台である。体部外面に指頭圧痕が残る。227は丸底気味で体部は内湾気味に開く。はりつけ高台で、高台の断面は三角形になり低い。228は内黒の椀である。底部は丸底で体部は内湾して開く。体部外面上部と内面は横方向のヘラ磨きである。はりつけ高台である。

**青磁**

**椀** 青磁椀は破片を含めるとかなりの点数になるが復元できるものは少なかった。229はＳＰ097土壙墓から出土した。底部は平底で厚い器壁を持つ。内湾気味に開く体部とやや外反する口縁部を持つ。高台は垂直に立つ。内外面とも無文であるが内面上部に沈線状の細い線が２条施されている。230・231は龍泉窯系の青磁椀の底部破片である。ＳＸ062土壙から出土した。232は小型の椀で体部外面に蓮弁文を施している。口径11.1cm、器高4.4cm、龍泉窯系のものである。高台外面まで施釉している。

**白磁**

**皿** 233はＳＸ057遺構から出土した口禿の皿である。平底で外反する体部からさらに小さく外反する口縁部を持つ。見込み部に沈線状の段を有する。釉は灰黄白色で全面に施釉している。

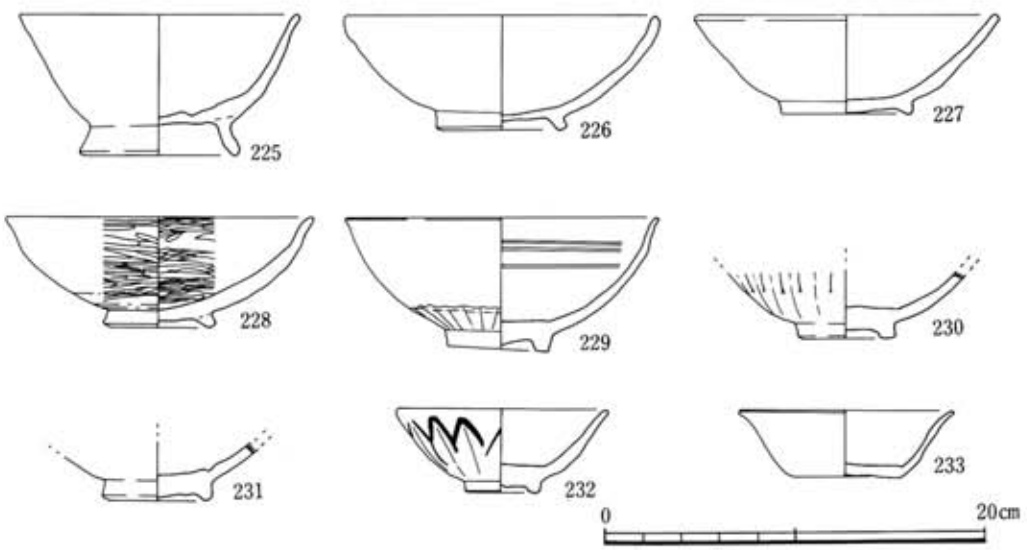



Fig. 181 撰分遺跡出土瓦器・青磁・白磁実測図

**磁器**

**皿** 234・235はＳＰ082木棺墓から出土した小皿である。内面中央部から見込部の円内に女性の立像を染付ている。口縁部内面に圏線を描き、斜交叉文を連続させている。外面は口縁部に

Fig. 182　撰分遺跡出土輸入磁器実測図

1条、体部下位と高台の境に2条の圏線を描く。国産品ではなく、中国華中の明代の景徳鎮窯系で焼かれ、16世紀中葉に輸入された皿と思われる。236は遺構検出中に出土した紅皿状の小皿である。内面と外面の高台部まで薄青色の釉を施している。南ベトナム地方の窯で焼かれた皿といわれ、16世紀後半に輸入されたものと思われる。

**人骨**　人骨はＳＰ082木棺墓より1体分の人骨が出土した。人骨についていは長崎大学医学部[註1]松下孝幸氏の教示を簡単に報告する。人骨は骨組織の2分の1以上を失っていた。性別は女性で、年令は30才代の荘年である。特徴は大腿骨は男性を思わせる骨格であった。骨盤から女性と判明した。

### (6)　江戸時代（Fig. 183～189, PL. 95～106）

**陶磁器**　江戸時代の遺物は遺跡西側のＳＤ033溝と周辺の土壙から陶磁器・甕・瓦などが多量に出土した。

**陶器**　鉢・皿・椀などが多量に出土した。武雄系唐津、絵唐津といわれるものが主流である。

**鉢**　237～240は大皿状の鉢である。237は三島唐津系の鉢である。内面上部に唐草文の象嵌を施し、下部の圏線内に縦の波状の刷毛目文が施される。内底に砂・胎土目の目跡がある。外面は高台外面まで施釉している。238は内面に波状の刷毛目文をめぐらせている。内底に砂・胎土目の目跡がある。外面は口縁下部まで釉を施し、体部の上部以下は施釉しない。239は内面に乳白色釉の波状の刷毛目文をめぐらす。内底に砂・胎土目の目跡がある。238同様、外面は口縁部下部のみ施釉している。240は内面に白色の釉を施す。内底に見込蛇ノ目釉ハギが施される。砂・胎土目の目跡がある。外面は体部中央部の一部と高台畳付部を除き施釉している。17世紀後半～18世紀前半の時期に属すると思われる。

**皿**　241は唐津系青緑釉皿である。見込蛇ノ目釉ハギを施す。17世紀後半～18世紀前半に属する。242は唐津系刷毛目皿である。内面に波状の刷毛目文を施す。内底に見込蛇ノ目釉ハギを施す。外面は高台畳付部を除き施釉する。243・244も唐津系刷毛目皿である。

**椀**　245・248・256は唐津系刷毛目椀である。内面または外面、内外面に刷毛目文を施す。246・247・254は絵唐津系の椀である。250は外面に笹を描いている。253・255は半焼状態である。249は天目釉を施しつまみを持つ椀である。ほとんどの椀が17世紀後半から18世紀中葉の時期に属すると思われる。

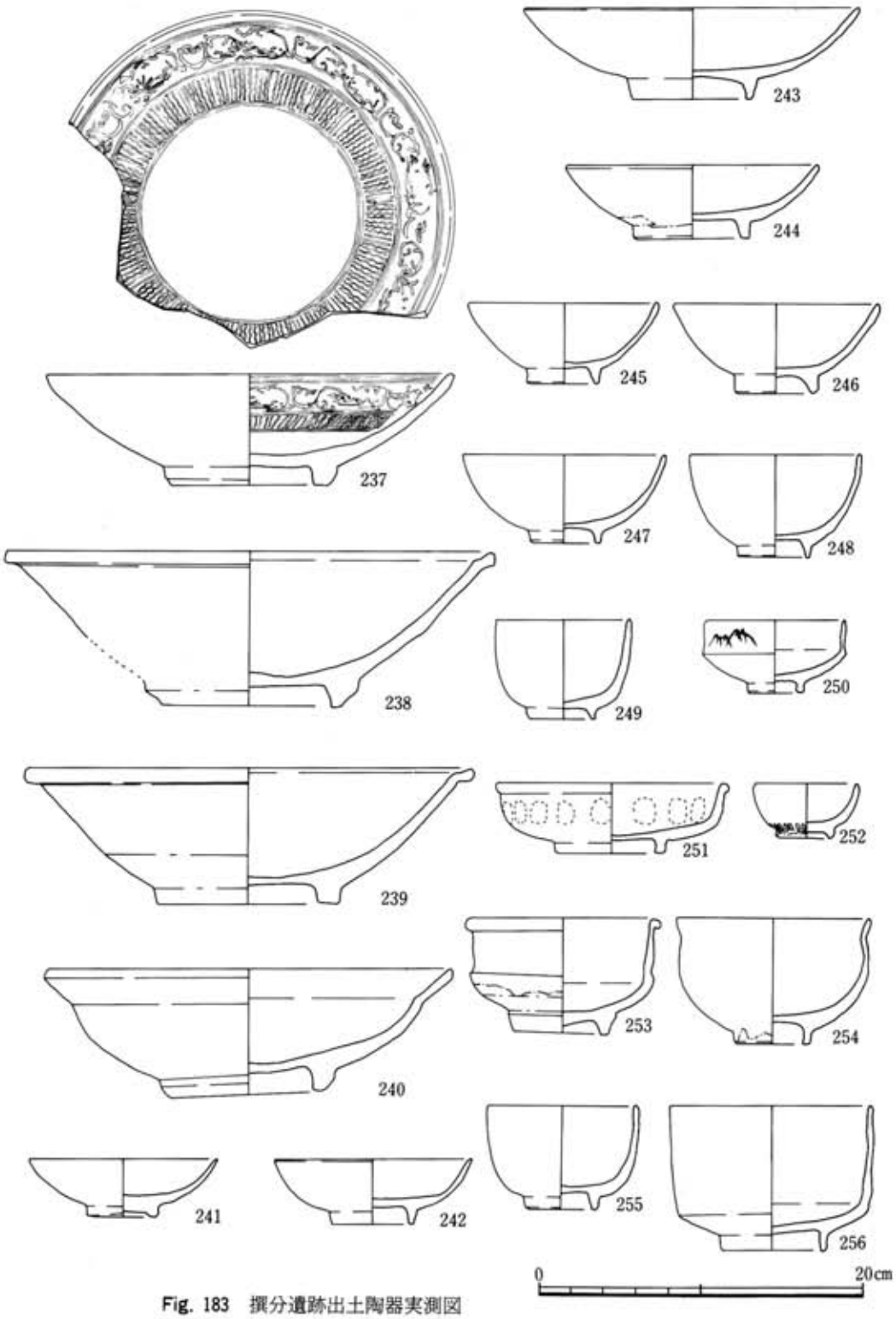



Fig. 183　撰分遺跡出土陶器実測図

**磁器**

**色絵**　色絵を施した磁器は5点ある。

**鉢**　257は外面に染付、内面に色絵を施す鉢である。17世紀後半（1660～1680年）に編年されている。

**椀**　258・259・261は色絵を施す椀である。258は内面に果実文を施し、外面は無文である。259は外面に花鳥文を施し、内面は無文である。261は内外面に赤絵の同心円文を描いている。17世紀後半に編年されている。

**小鉢**　260は外面の染付の上に赤絵と錦絵を施し、内面口縁部下部に圏線をめぐらせている。貫入が著しい。17世紀中葉の時期であろう。

**皿**　291は伊万里色絵皿である。内面染付の上に色絵を施す。内底に見込五弁花のコンニャク判を施す。1700～1750年代に編年されている。

**染付**　椀・皿・鉢など日用磁器が多量に出土した。年代的には17世紀前半から18世紀前半におよぶものである。

**椀**　263～279がある。263・267・271・272・276は17世紀後半～18世紀前半に編年される椀である。264・268・273・277は1700～1750年代に編年される。265・266・269・270・278・279は1700～1780年代に編年されている。

**小皿**　14cm以内の口径を有するものを小皿とする。281～290・293がある。281・282は口縁部に鉄錆を塗った口錆が施され中央に人物を配した小皿である。1640～1650年代に限定して編年されている。283・286・287は内底の見込五弁花文はコンニャク判である。283は高台内に圏がみられる。1700～1750年代に編年されている。284・285・288～290も同時期であるが下限を1780年代におく。290は見込蛇ノ目釉ハギが施され、見込五弁花文はコンニャク判である。293はやや古く17世紀後半の時期であろう。

**大皿**　口径15cm以上のものを大皿とした。292・309～316がある。309～311は芙蓉手文を持つ大皿である。17世紀後半に編年されている。312も同時期であろう。313・314は1700～1750年代、292・315・316は1700～1780年代であろう。

**長頸壺**　396・398・399がある。396は伊万里染付徳利である。17世紀後半と思われる。298・299は18世紀中頃であろう。

**高杯**　300は仏飯器である。1700～1750年代と思われる。

**小鉢**　301・302・307がある。301・302は1700～1760年代、307は1800年代であろう。

**杯**　303は受部を有する杯である。17世紀後半と思われる。304は盃である。18世紀中頃のものと思われる。

**中鉢**　317・318は椀よりやや大型の鉢である。317が古く17世紀後半～18世紀前半、318は1700～1750年代で、見込五弁花文はコンニャク判である。

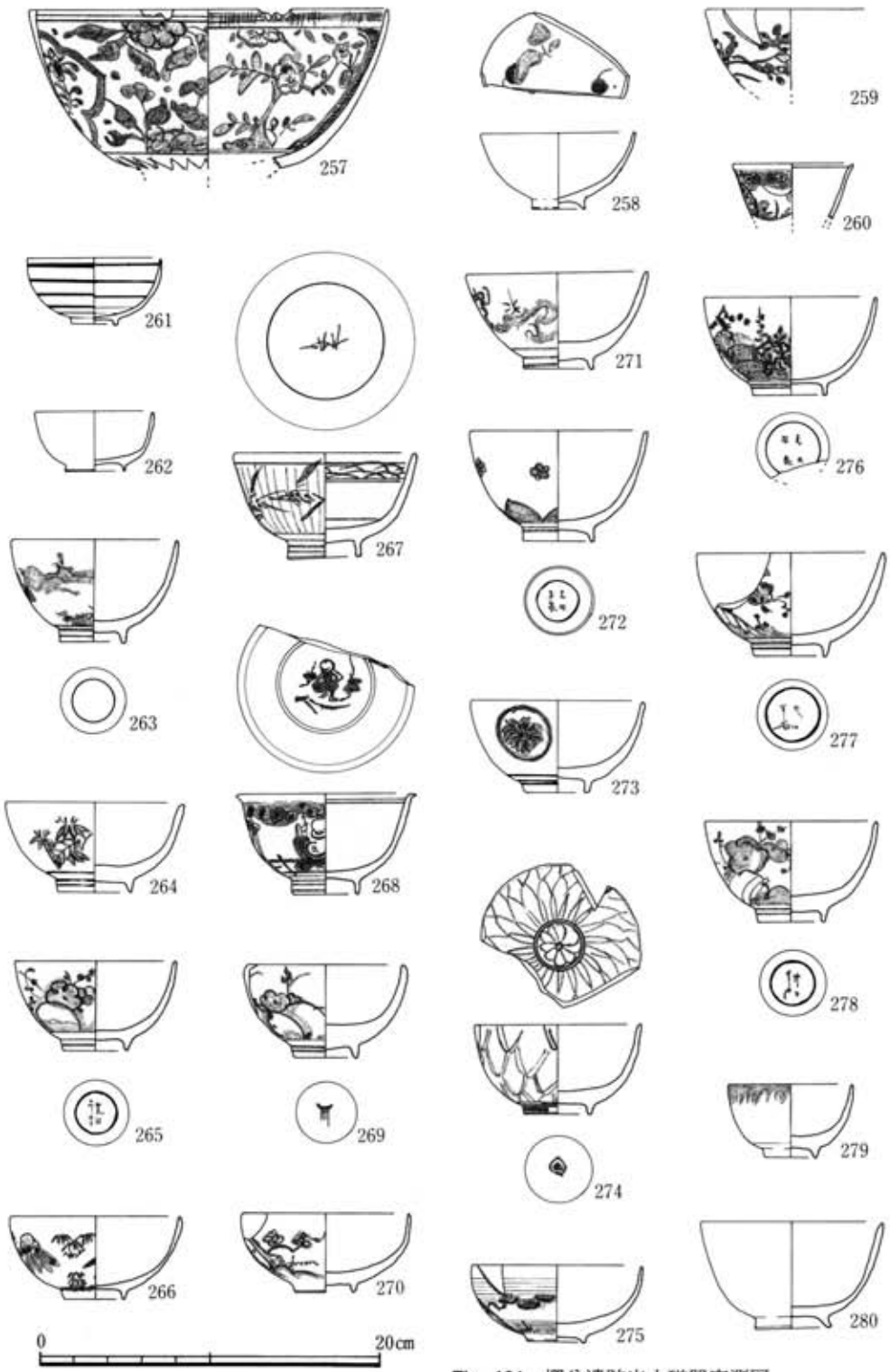



Fig. 184 撰分遺跡出土磁器実測図

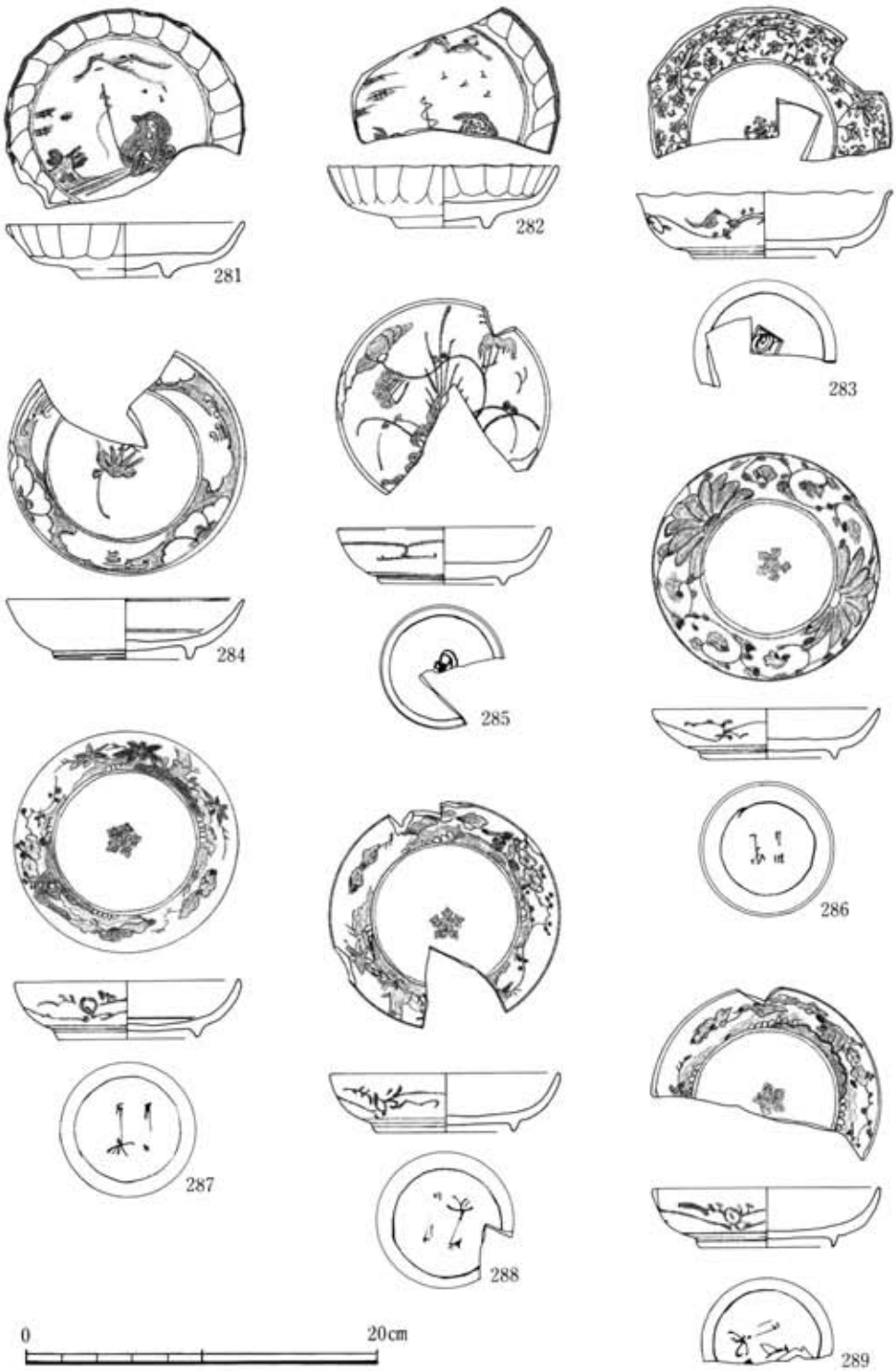



Fig. 185 撰分遺跡出土磁器実測図

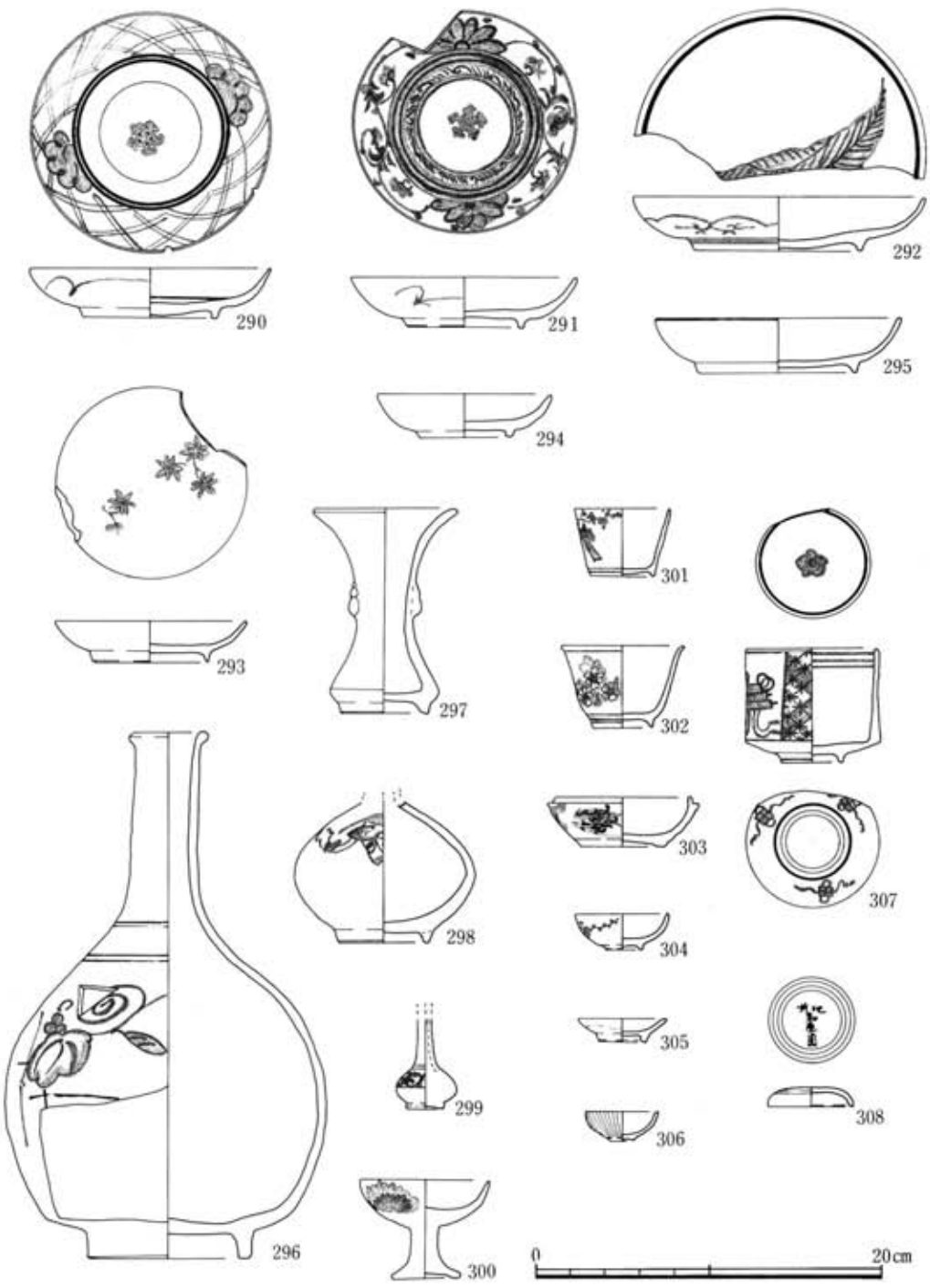



Fig. 186 撰分遺跡出土磁器実測図

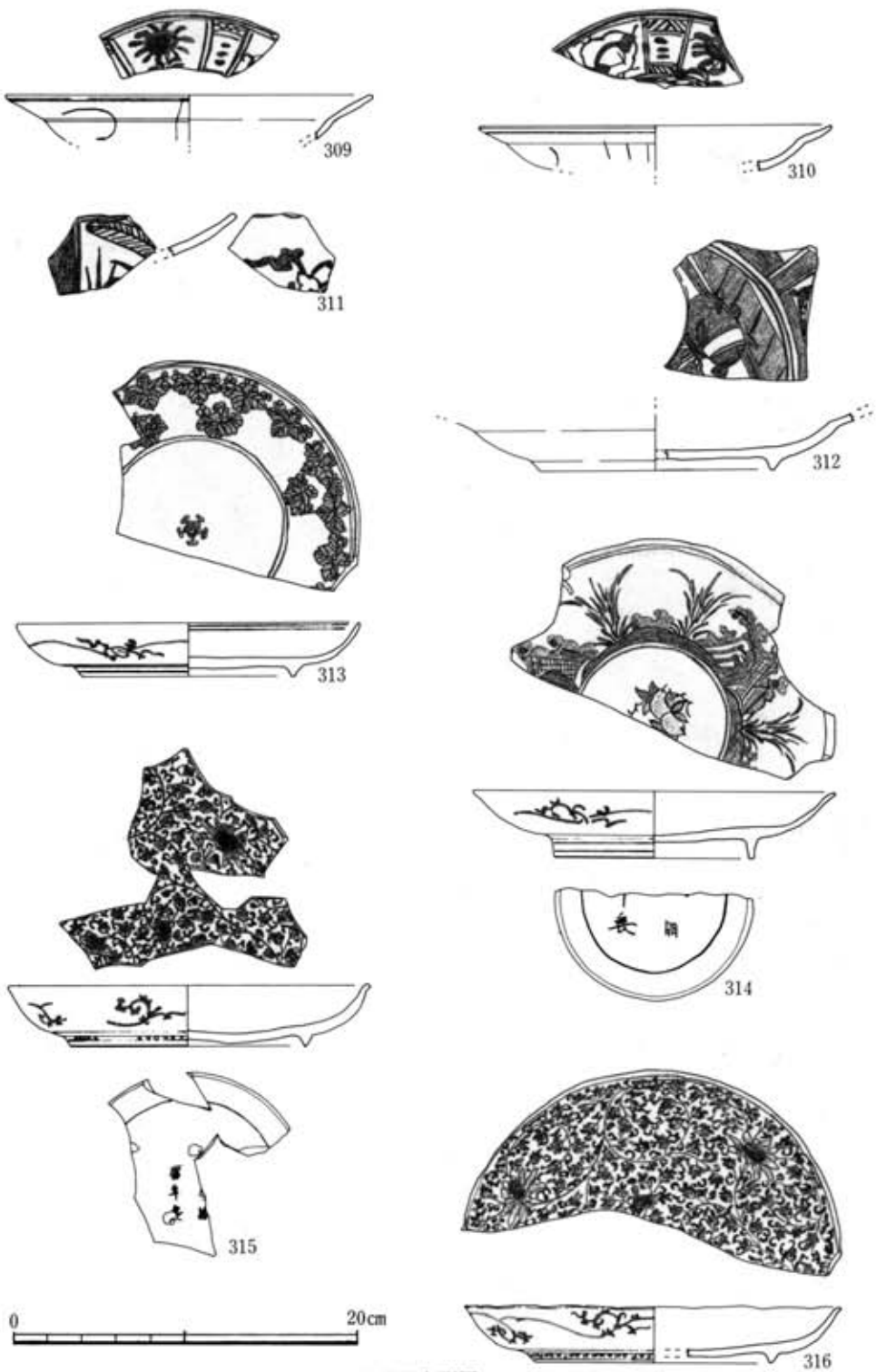



Fig. 187　撰分遺跡出土磁器実測図

**白磁**　染付が施されていない磁器は椀・皿・紅皿がある。

**椀**　262・280がある。17世紀後半から18世紀中頃のものと思われる。

**皿**　294・295がある。295は鉄銹を口縁部に塗った口銹が施されている。1650年代に編年される。

**紅皿**　305・306があり、緑白色の釉を内面と外面の体部上位まで施している。器形は305の体部が外反気味に対し、306は内湾している。ともに18世紀前後のものと思われる。

**蓋**　308は薬瓶の蓋である。外面天井部に肥前鳥犀圓[註2]の文字が呉須で書かれている。手書きの文字は寛政年間に限られ、18世紀末の蓋である。

**青磁**　青磁は1点が出土している。

**青磁瓶**　297は伊万里青磁瓶である。胴部中央部が最小径になり耳を持つ。外面は高台畳付部を除き施釉され、内面は胴部上位までと底部に釉を施している。1640～1690年代に編年されている。

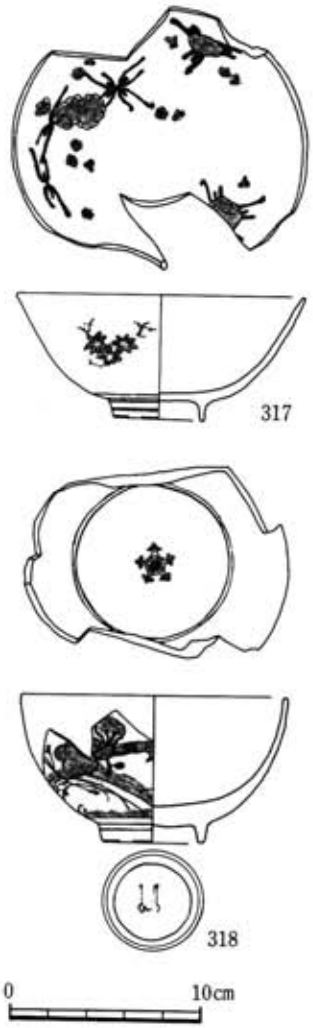



Fig. 188　撰分遺跡出土磁器実測図

**瓦器**　319・320がある。319は楕円形状の盤である。底部は平坦で器壁はやや外反気味である。底部は1.4cmと厚手である。320は円形で口縁部はしぼみ気味である。内面は指頭痕が残る。2点とも用途は不明である。17世紀前後のものであろう。

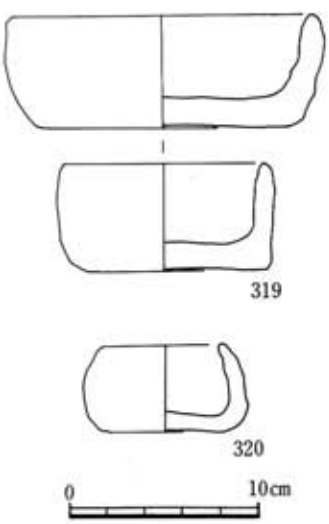



Fig. 189　撰分遺跡出土瓦器実測図

## 4．小　結

撰分遺跡は旧石器～江戸時代までの遺構・遺物が検出された大遺跡であった。旧石器時代や縄文時代の遺構は検出できなかったが、弥生～古墳時代の住居跡が27棟、平安～鎌倉時代の遺構群、膨大な陶磁器類が出土した江戸時代の大溝など注目されるものばかりであった。特に古墳時代前期の土師器は県内でも最古級の土器として注目される。平安時代の遺構・遺物は隣接する山崎経塚との関連性を知る手がかりとなろう。武雄系唐津焼、多久町保四郎窯跡の陶器・瓦、伊万里染付の磁器など江戸時代の遺物も肥前陶磁器の研究上、欠くことができない資料となった。遺跡はさらに南北に広がることが予想され、集落の規模など今後に問題を残す面もある。多久の歴史の空白部を埋めるのに充分すぎる資料を提供した大遺跡といえよう。

註1　長崎大学医学部解剖学第二教室、松下孝幸氏の教示による。
註2　野中鳥犀円本舗、野中萬太郎氏の教示による。

〔参考文献〕

「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第6集」　佐賀県教育委員会　1983
「茶園原遺跡Ⅰ」　多久市教育委員会　1979
「茶園原遺跡Ⅱ」　多久市教育委員会　1980
「佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡」　杉原荘介ほか　1983
「上場の文化財Ⅰ」　佐賀県教育委員会　1981
「後川内遺跡群Ⅱ」　唐津市教育委員会　1984
「田尾遺跡群磯道遺跡」　肥前町教育委員会　1981
「田尾遺跡群田尾遺跡磯道遺跡（そのⅡ）」　肥前町教育委員会　1982
「二塚山」　佐賀県教育委員会　1979
「みやこ遺跡」　武雄市教育委員会　1986
「茂手遺跡」　武雄市教育委員会　1986
「塚堂遺跡Ⅰ」　福岡県教育委員会　1983
「塚堂遺跡Ⅱ」　福岡県教育委員会　1984
「塚堂遺跡Ⅲ」　福岡県教育委員会　1984
「霊仙寺跡」　東背振村教育委員会　1980
「景徳鎮と伊万里」　九州陶磁文化館　1982
「国内出土の肥前陶磁」　九州陶磁文化館　1982

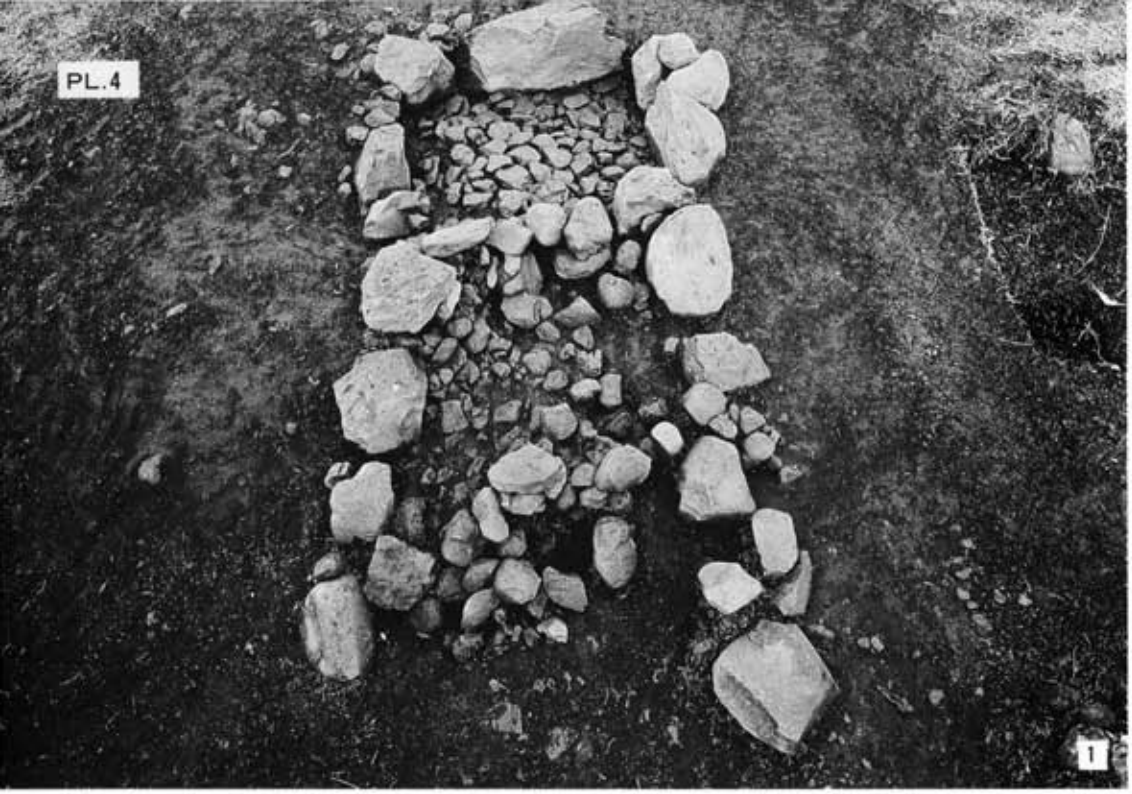
# 山の上古墳群

1．山の上古墳群遠景〈南から〉
2．　同　　〈航空写真〉

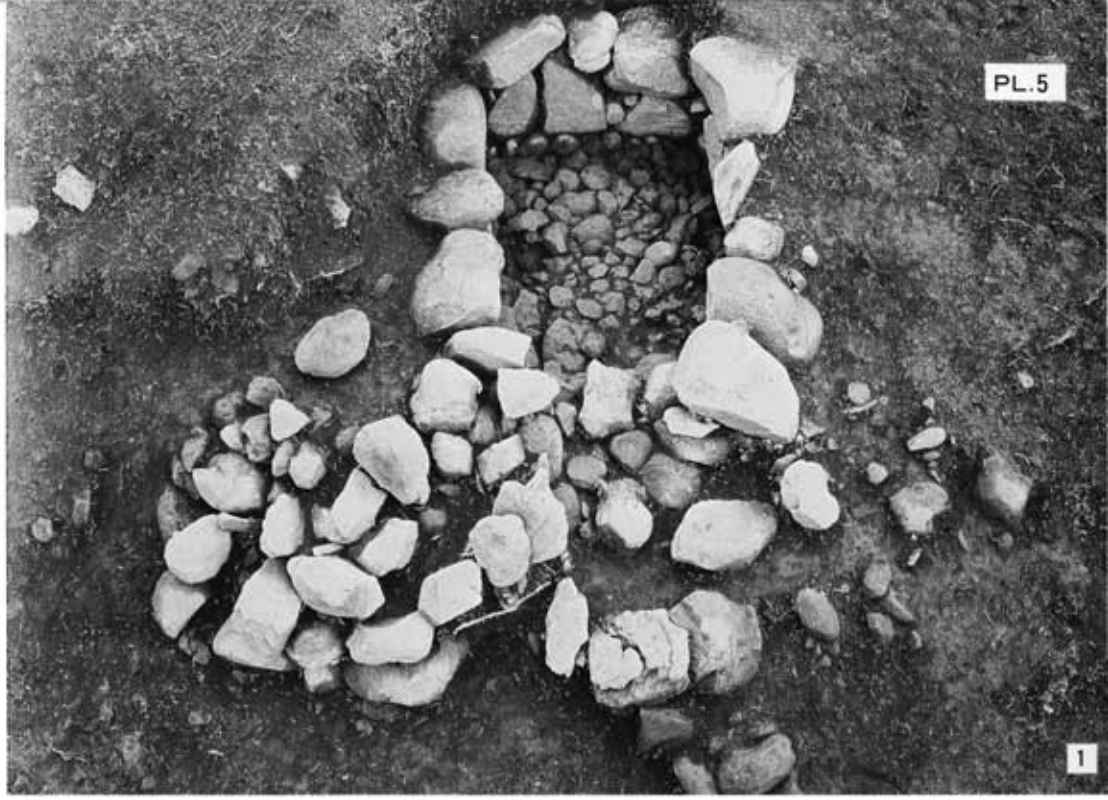
PL.2

1. 山の上古墳群ＳＴ001古墳全景（調査前、西から）
2. 　　同　　（南から）

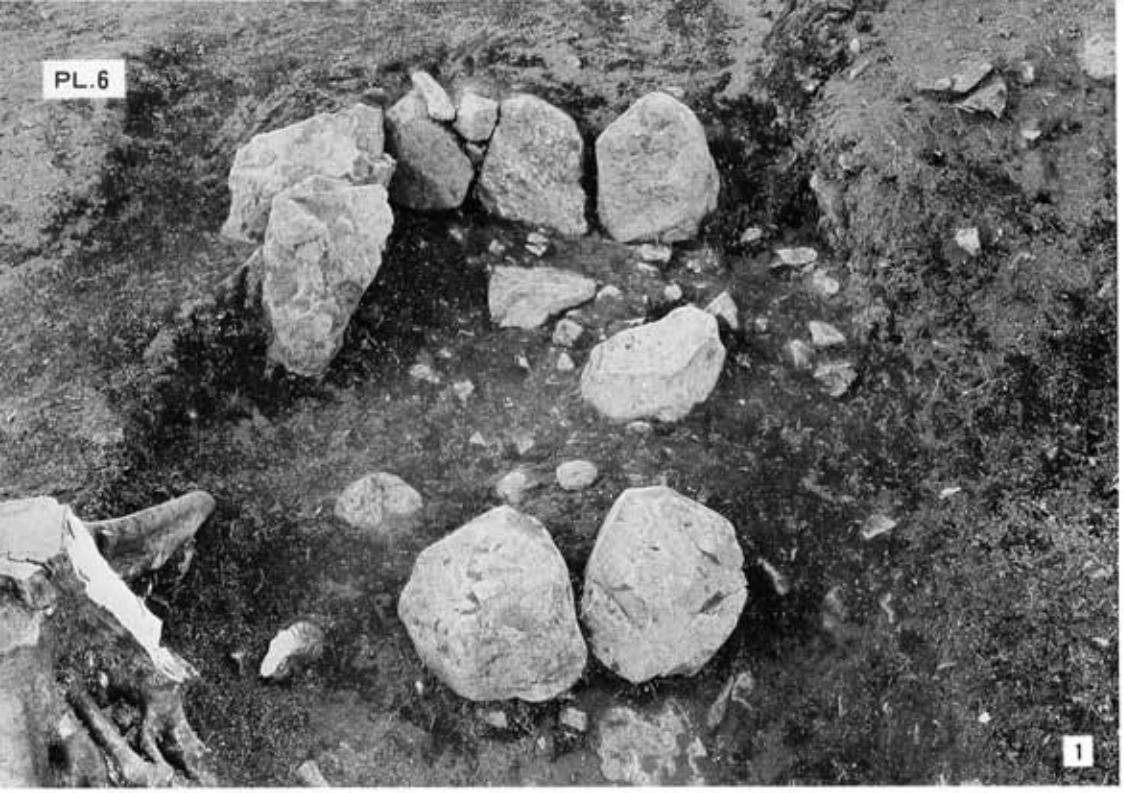
1．山の上古墳群ＳＴ001古墳葺石状態（南から）
2．　同　　遺物出土状態



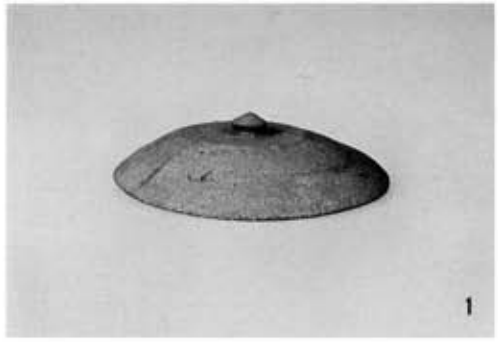
1．山の上古墳群ＳＴ002古墳石室（南から）
2．　同　　ＳＴ003古墳石室（南から）

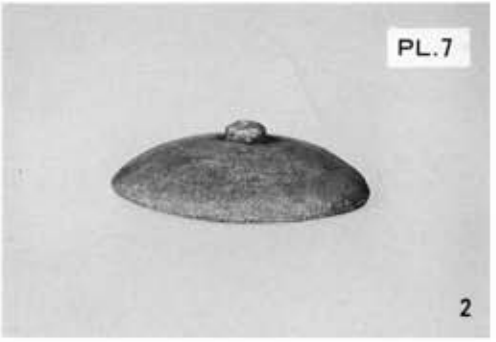


1. 山の上古墳群ＳＴ004古墳石室（南から）
2. 　同　　ＳＴ005古墳石室（南から）

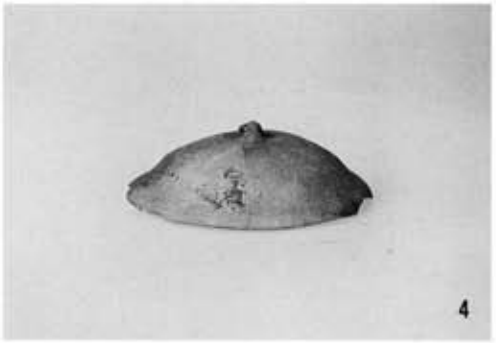


1．山の上古墳群ＳＴ006古墳石室（南から）
2．　同　　ＳＴ007古墳石室（南から）


1


2

3


4

5

6

7

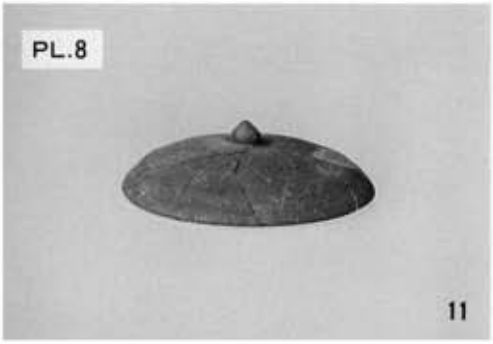
8

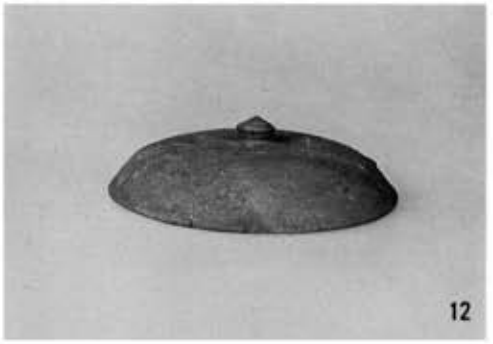
9

10

1～10.
山の上古墳群ST001
古墳出土須恵器

PL.8


11

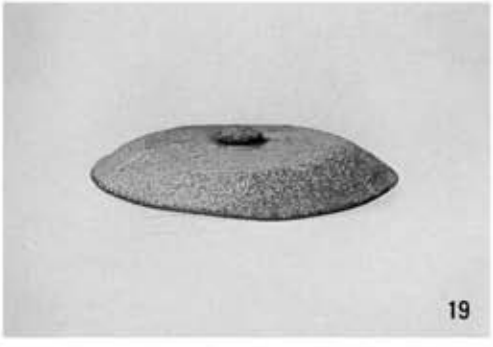

12

14

15

16

18


19

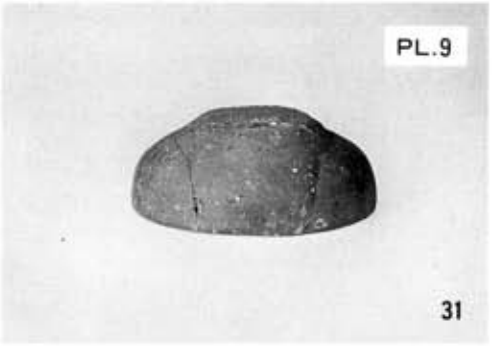
20

24

27

11・12・14～16.
18～20・24・27.
山の上古墳群
ST001古墳
出土須恵器

26


31

32

33

34

35

36

37

26・31～39.
山の上古墳群ＳＴ001古墳
出土須恵器

38

39

PL.10

40

41

42

43

44

45

46

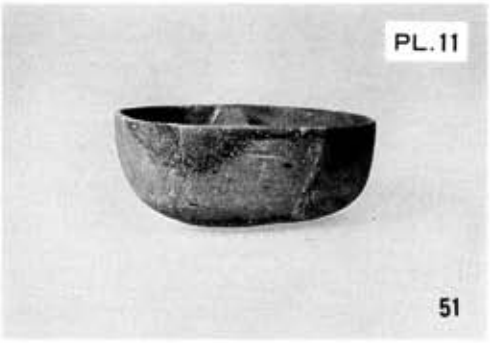
47

48

49

40～49.
山の上古墳群ＳＴ001古墳
出土須恵器

50


51

52

53

54

55

56

57

50～59.
山の上古墳群ＳＴ001古墳
出土須恵器

58

59

PL.12

69

70

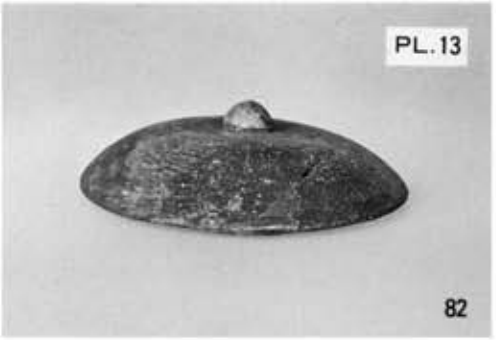
68

71

79

68～71 山の上古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器
79 同 土師器

81

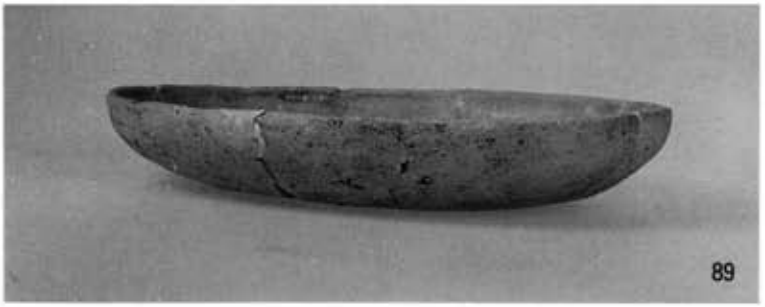

82

84

85

87

88


89

81・82・84・85．山の上古墳群ＳＴ002古墳出土須恵器
87～89　　同　　土師器

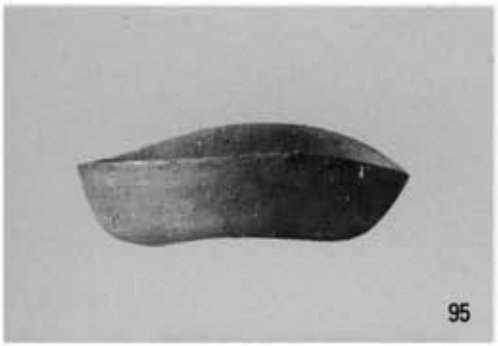
PL.14

90

92

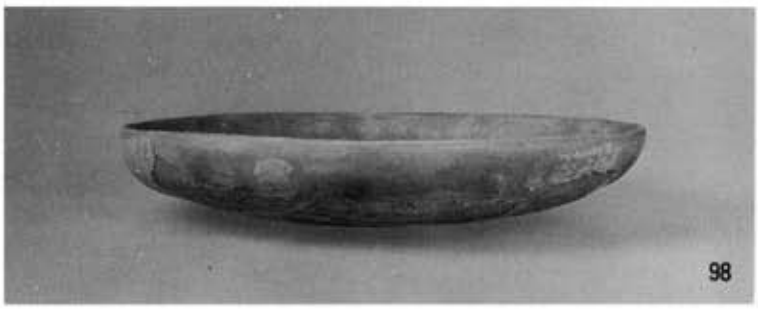
93

94


95

96

97


98

90・92～96 山の上古墳群ＳＴ003古墳出土須恵器
97・98　　同　　土師器

99　　山の上古墳群ＳＴ005古墳出土須恵器
100・102　　同　　ＳＴ007古墳出土須恵器

# 中 村 谷 遺 跡

1

2

1. 中村谷遺跡ＳＴ001古墳墳丘（南から）
2. 　　同　　石室

PL.17

1

2

5

6

7

8

9

10

11

12

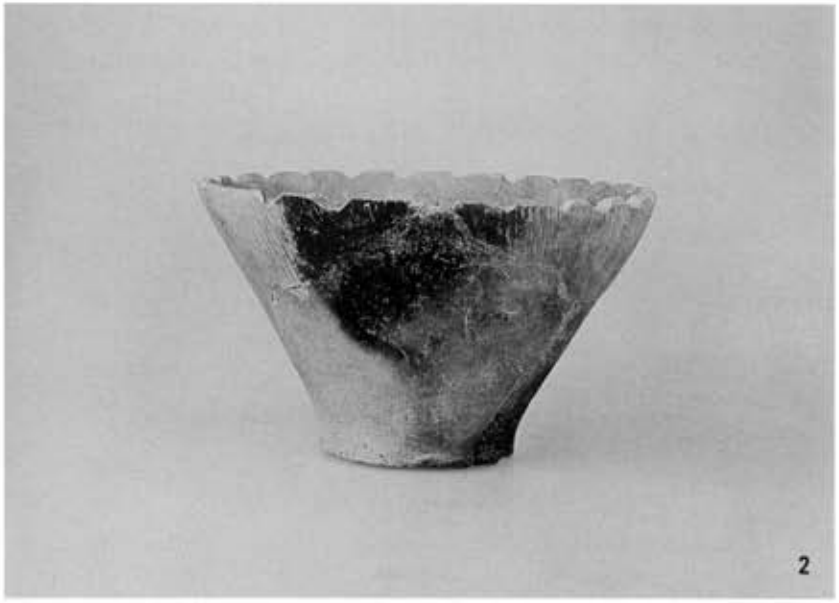
1・2・5～11 中村谷遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器
12 同 土師器

# 出口A遺跡

1．出口A遺跡全景（航空写真）
2．　同　　SX005土壙遺物出土状態

PL.19

1

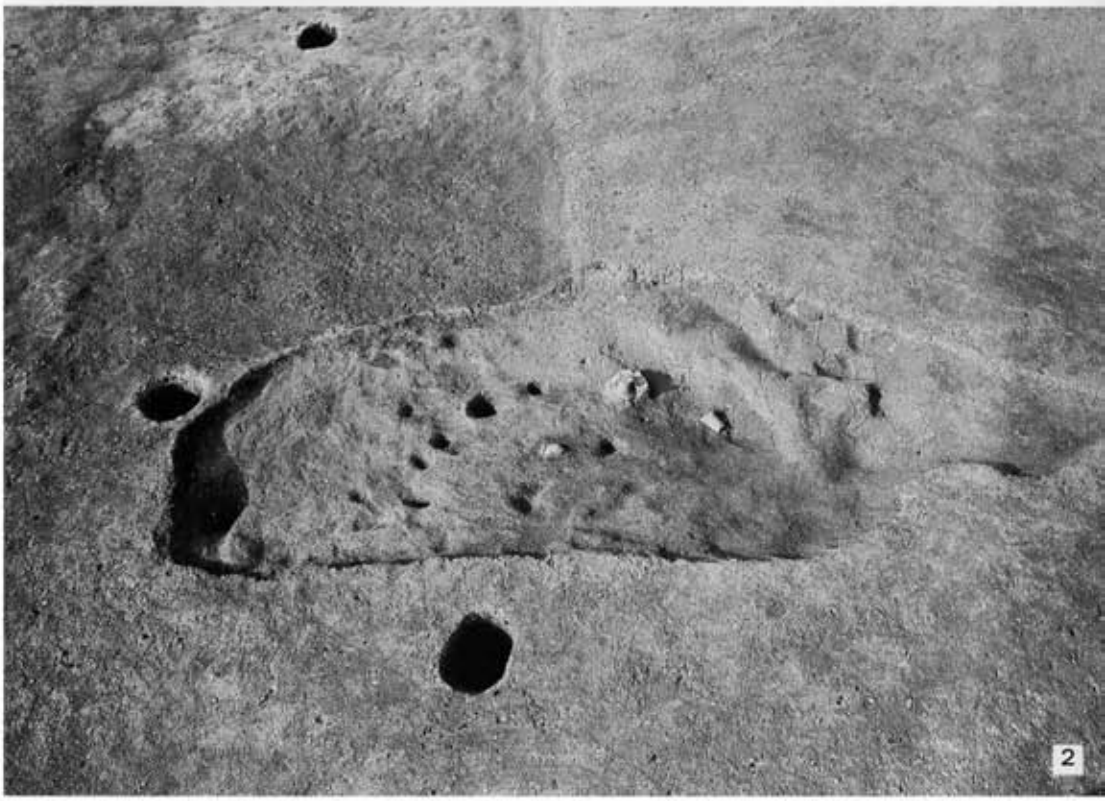


2

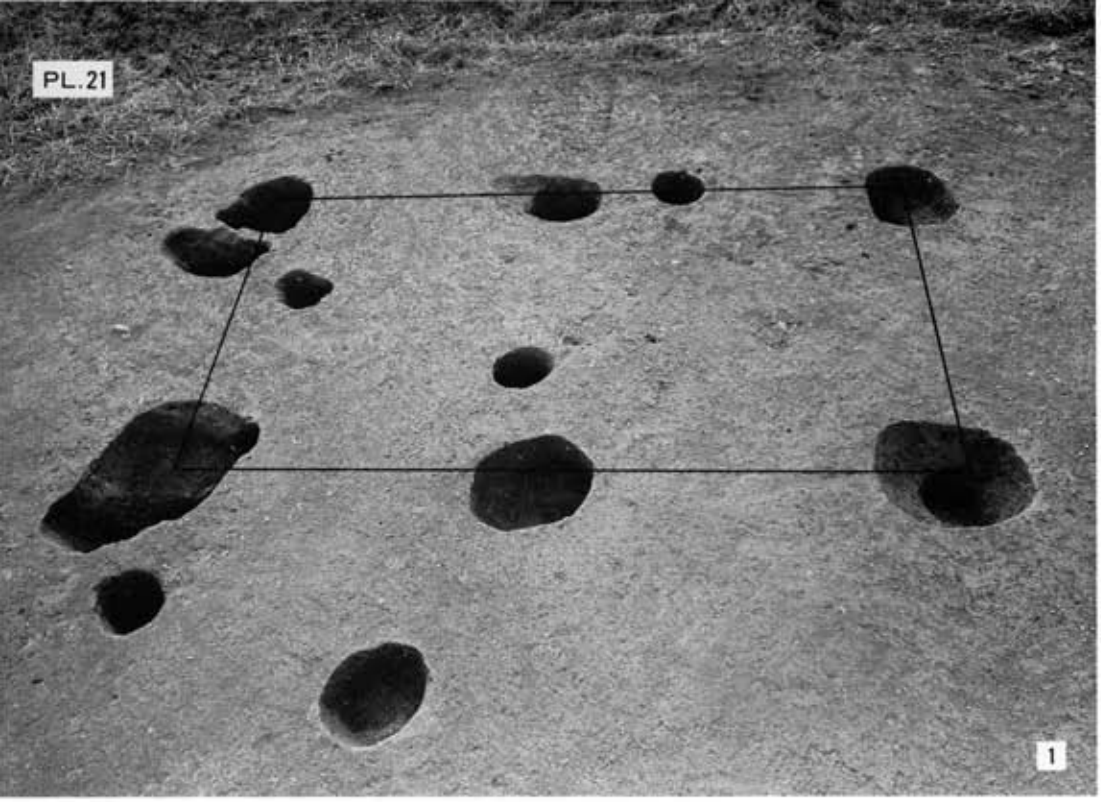
3

1～3
出口A遺跡出土弥生土器

# 西出口遺跡



1．西出口遺跡全景
2．　　同　　SK002土壙



1

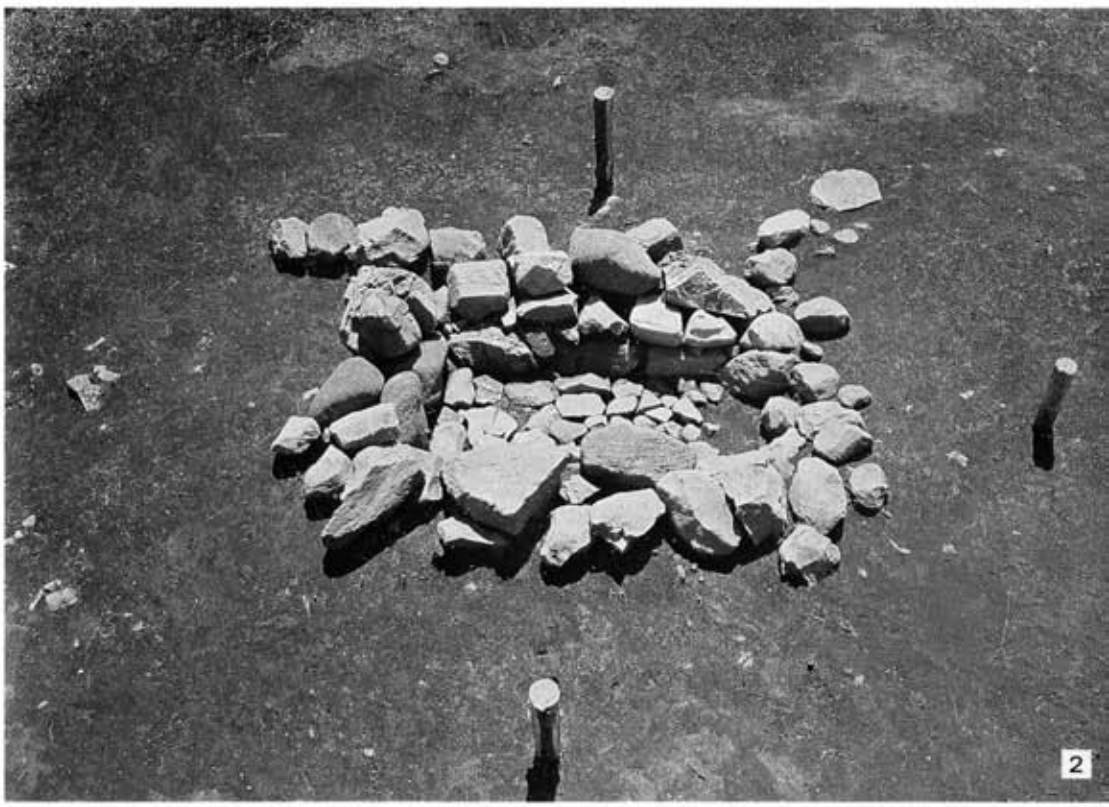
2

1．西出口遺跡ＳＢ004掘立柱建物跡
2．　　同　　ＳＫ002土壙出土土師器

# 鴻ノ巣遺跡

1. 鴻ノ巣遺跡遠景 （西から）
2. 　　同　　ＳＴ001古墳

1．鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳墳丘（東から）
2．　同　　墳丘土層



1．鴻ノ巣遺跡ＳＴ002古墳石室
2．　同　　ＳＴ003古墳石室

PL.25

1

3

7

9

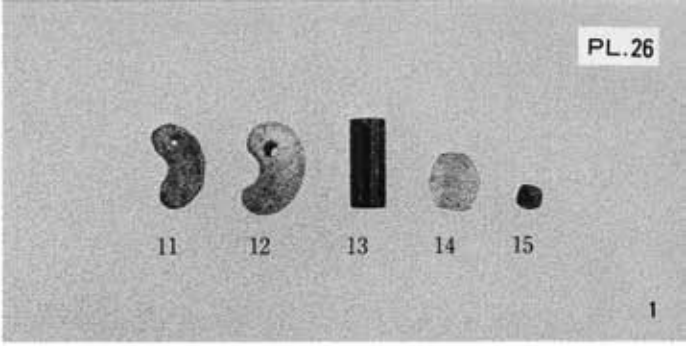
2

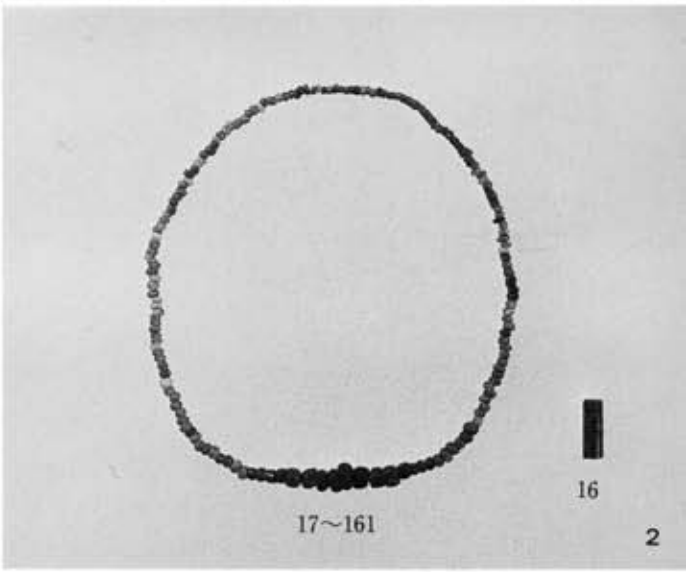
4

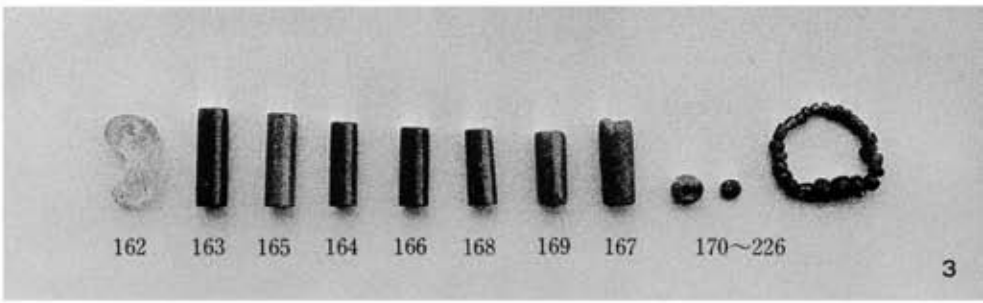
8

6

1～4・6～9 鴻ノ巣遺跡ＳＴ001古墳出土須恵器



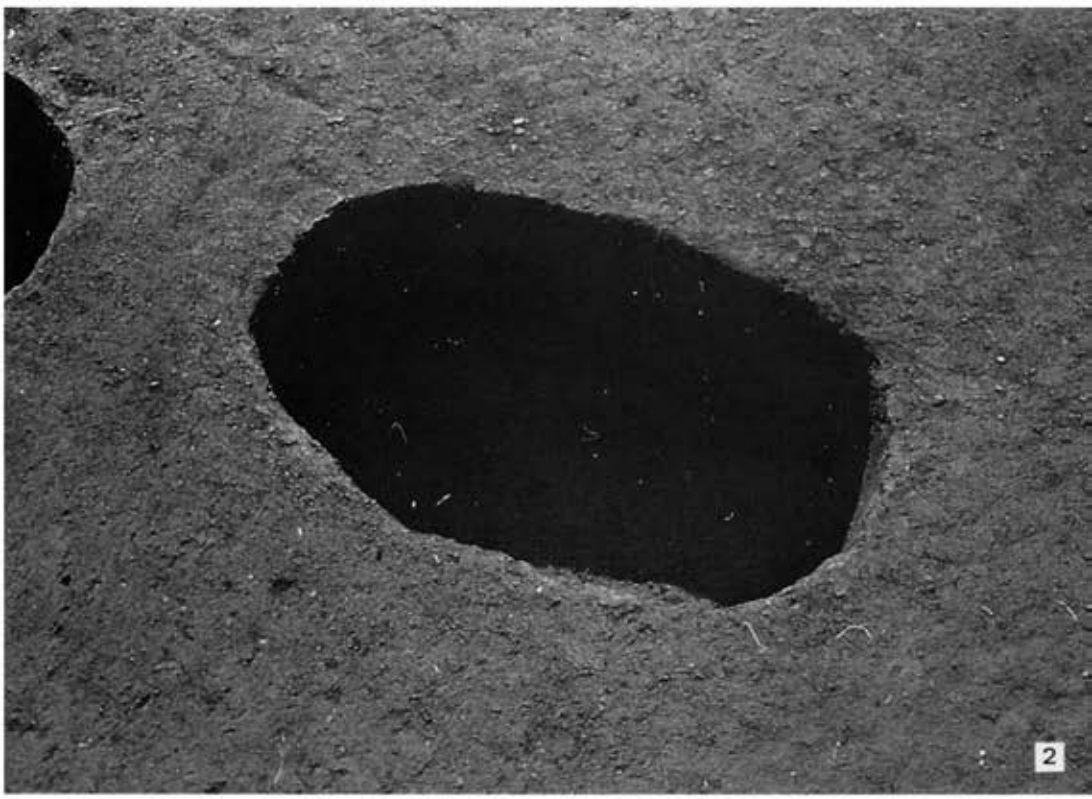




1．鴻ノ巣遺跡ＳＴ001古墳出土玉類
2．　同　　ＳＴ002古墳出土玉類
3．　同　　ＳＴ003古墳出土玉類

# 原　田　遺　跡

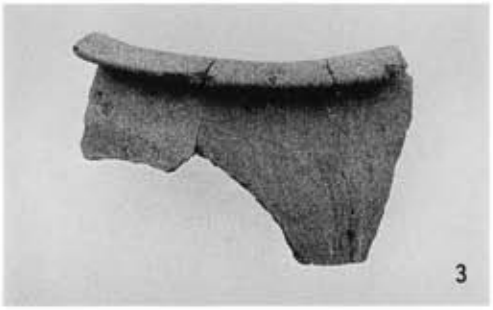
1. 原田遺跡全景
2. 同　　遺構出土状態

1．原田遺跡ＳＪ001甕棺墓
2．　同　　ＳＪ002甕棺墓



1．原田遺跡ＳＲ004祭祀遺構
2．　同　　ＳＲ005祭祀遺構

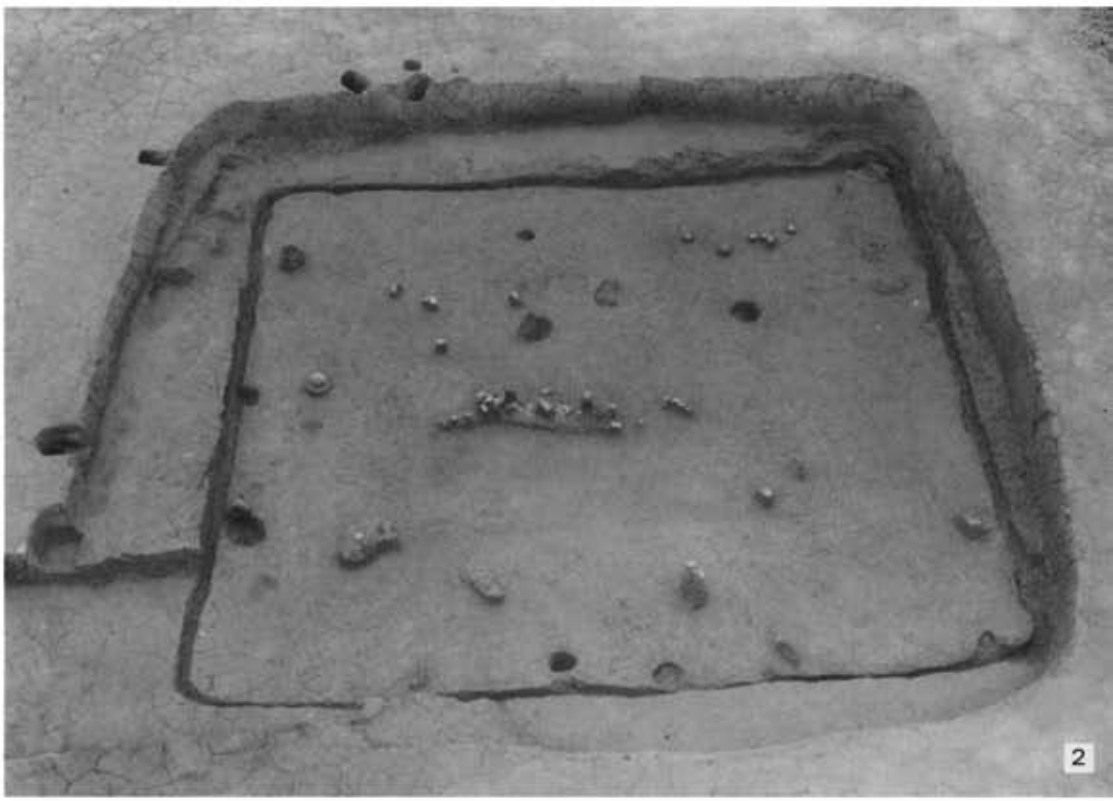
PL.30




1～3．原田遺跡出土弥生土器

4･5．原田遺跡ＳＪ001甕棺　6･7．原田遺跡ＳＪ002甕棺

# 今出川A遺跡



1．今出川A遺跡遠景
2．　同　　SB001・SB002住居跡

1．今出川A遺跡SB003住居跡
2･3．　同　　SB001住居跡遺物出土状態

1

2

7

6

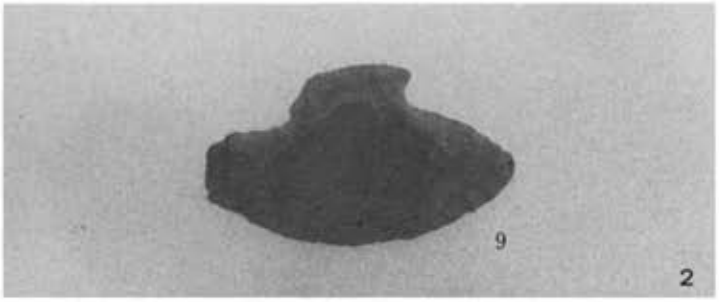
3

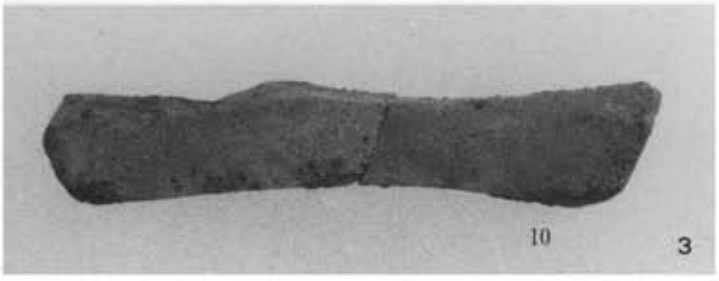
4

5

1～7．今出川A遺跡SB001・SB002住居跡出土土師器

PL.34



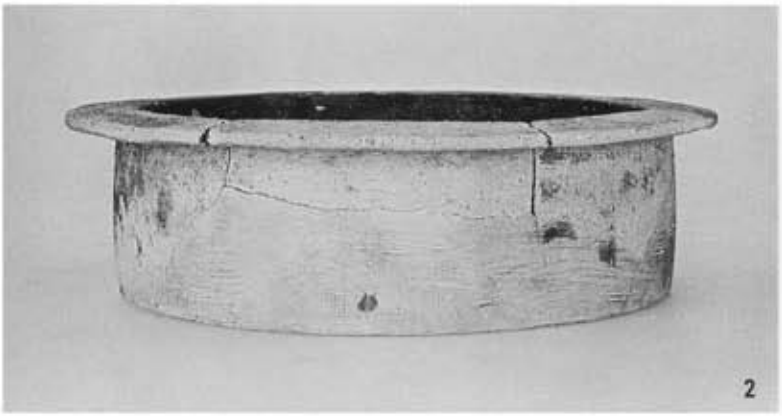

1．今出川A遺跡SB003住居跡出土土師器
2．　同　　出土石匙
3．　同　　出土砥石

# 今出川Ｂ遺跡

1．今出川Ｂ遺跡全景（航空写真）
2．　同　　遺物出土状態

PL.36

1

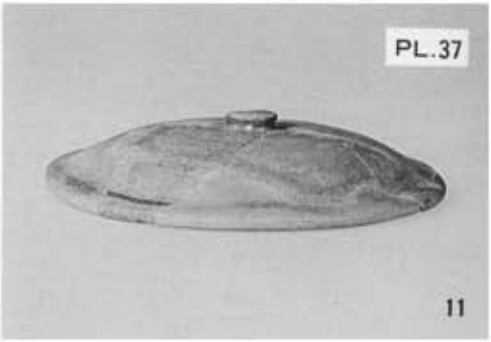

2

4

5

1・2・4・5
今出川B遺跡出土弥生土器

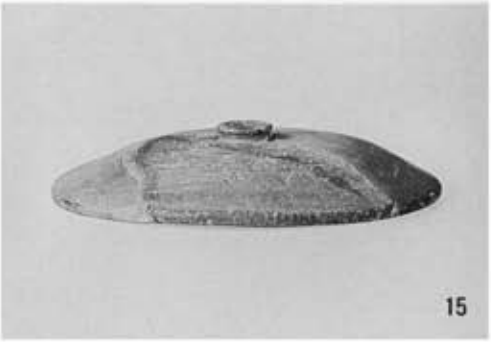
10

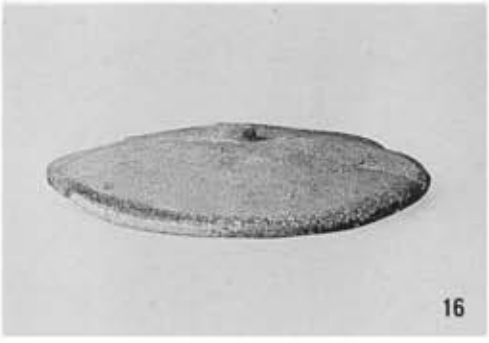

11

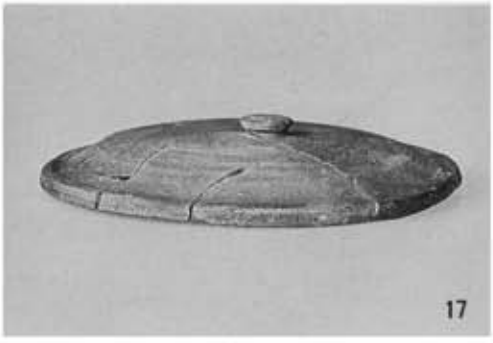
12

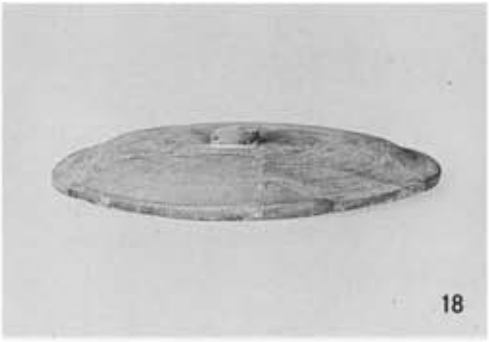
13

14


15


16

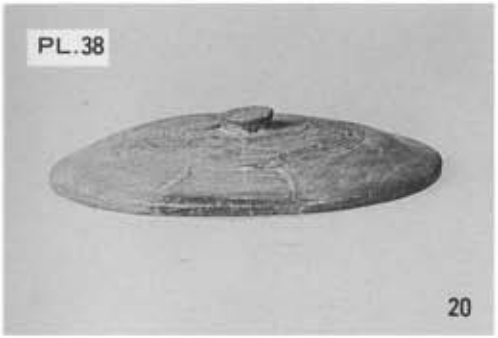

17

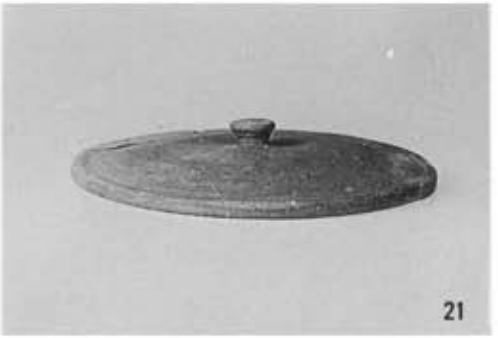

18

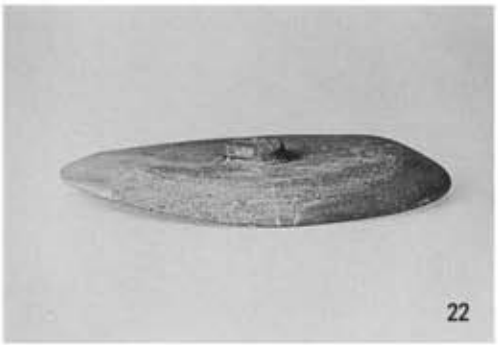
19

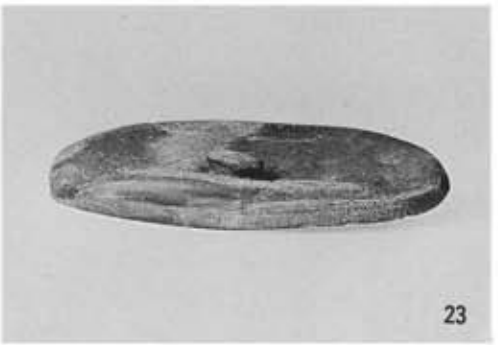
10～19．今出川B遺跡出土須恵器

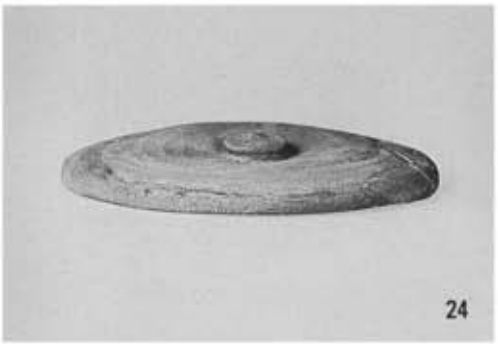
PL.38

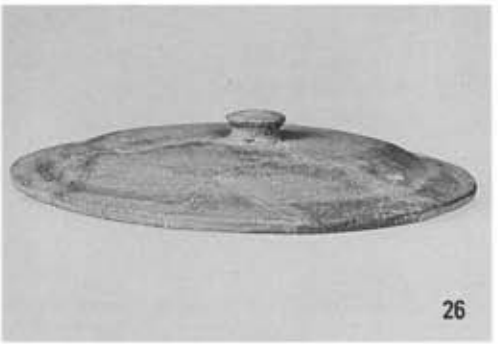

20


21


22


23

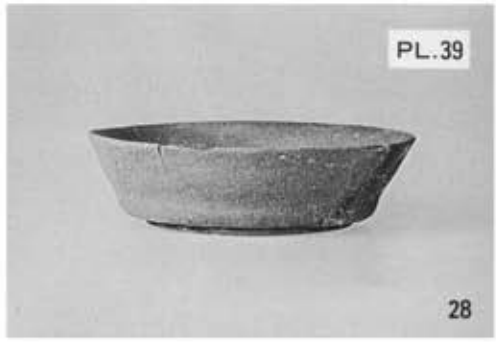

24


26

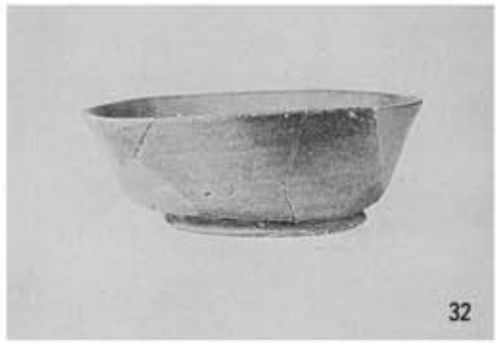
25

20～26．今出川B遺跡出土須恵器

27


28

29

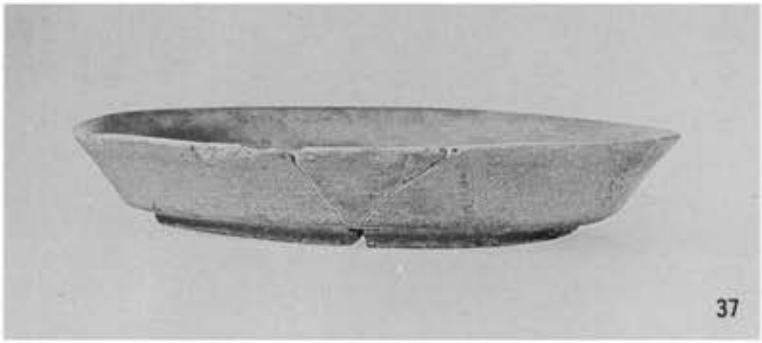

32

33

34

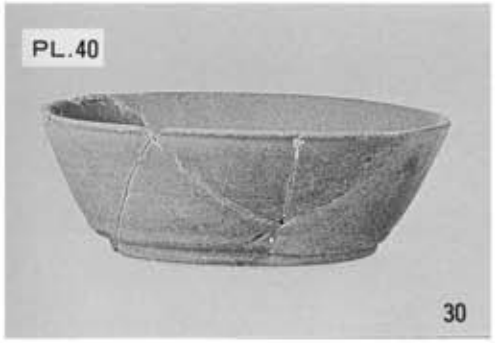
35

36


37

27～29・32～37．今出川B遺跡出土須恵器

PL.40


30

31

39

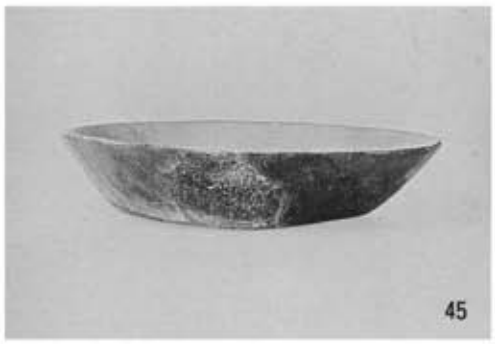
40

41

42

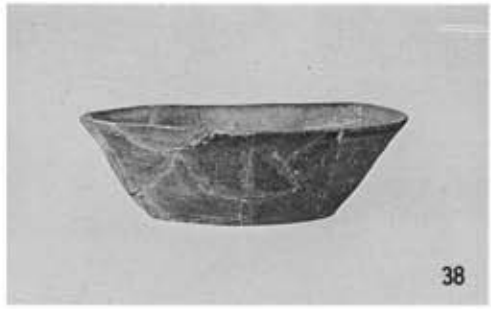
43

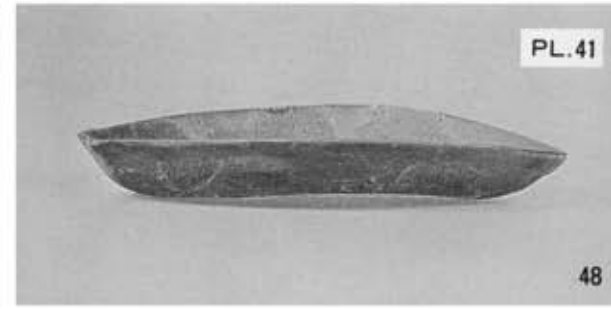
44

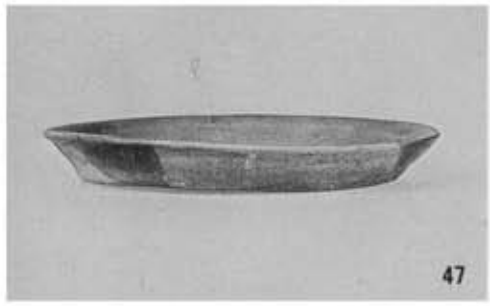

45

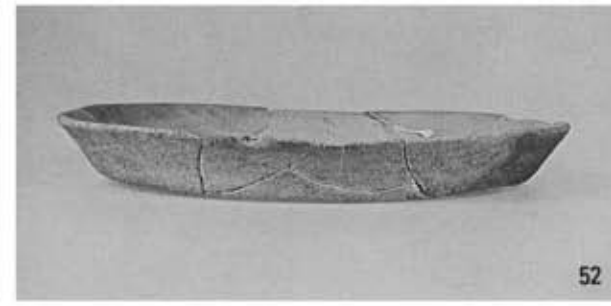
46

30・31・39～46．今出川B遺跡出土須恵器


38


48


47

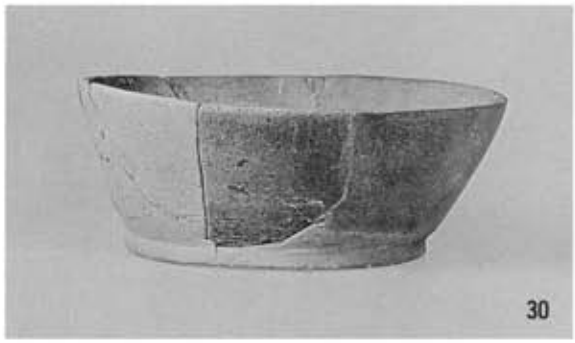

52

54

55

56

58


30

61

30・38・47・48・52・54～56・58・61．今出川B遺跡出土土師器

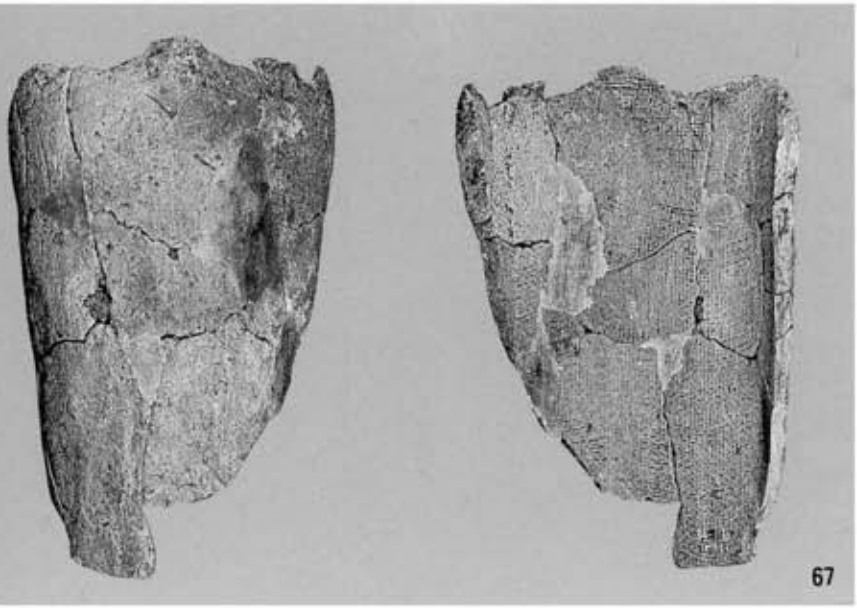
PL.42

59

63

53

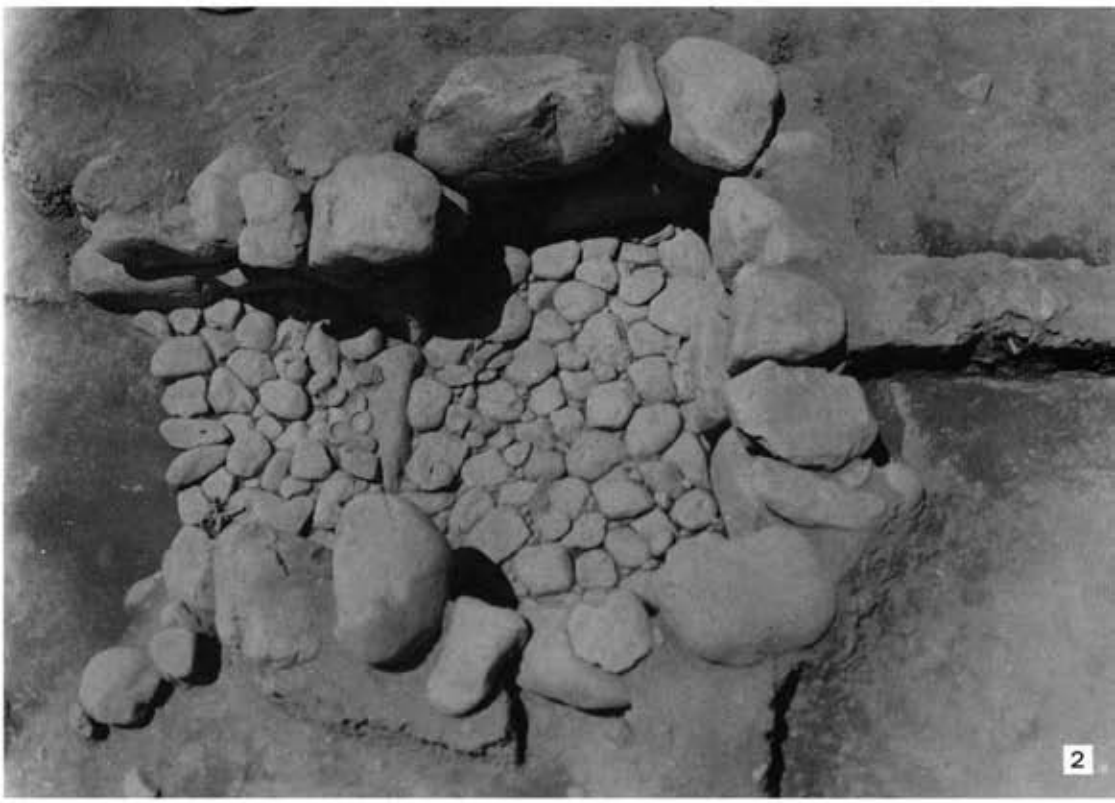
65



67

59・63．今出川B遺跡出土土師器
53　同　須恵器
65　同　ふいご羽口
67　同　円筒形土器

# 大工田古墳群



1．大工田古墳群遠景
2．　同　　ST001古墳石室

1. 大工田古墳群ＳＴ001古墳石室遺物出土状態
2. 同　石室前面遺物出土状態

1．大工田古墳群ＳＴ002古墳石室
2．　同　　ＳＴ005古墳石室

PL.46

1

2

3

4

5

6

7

8

9

13

1～9･13．大工田古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器

14

15

17

18

19

20

21

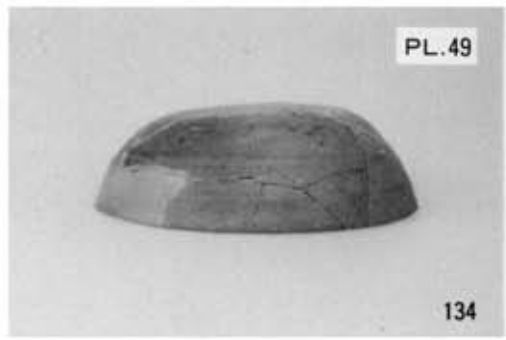
22

14・15・17～22．大工田古墳群ＳＴ001古墳出土須恵器

PL.48

24・25.　大工田古墳群ＳＴ001古墳出土土師器
84・87・89.　同　ＳＴ002古墳出土須恵器
93～95.　同　土師器

132


134

138

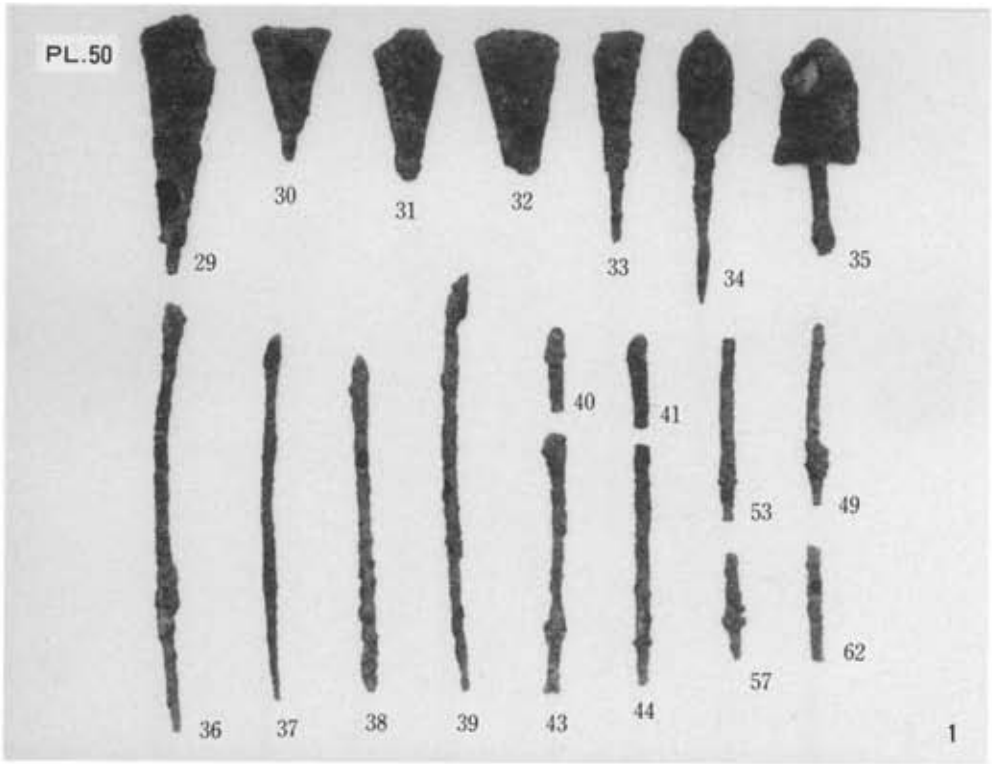
139

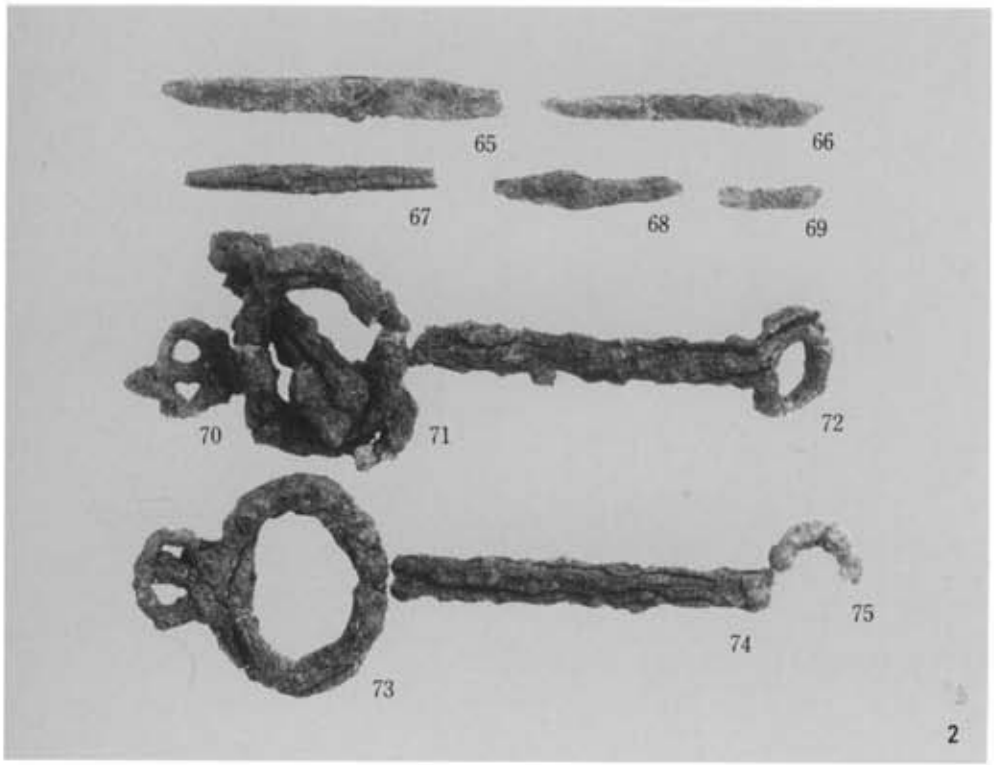
140

141

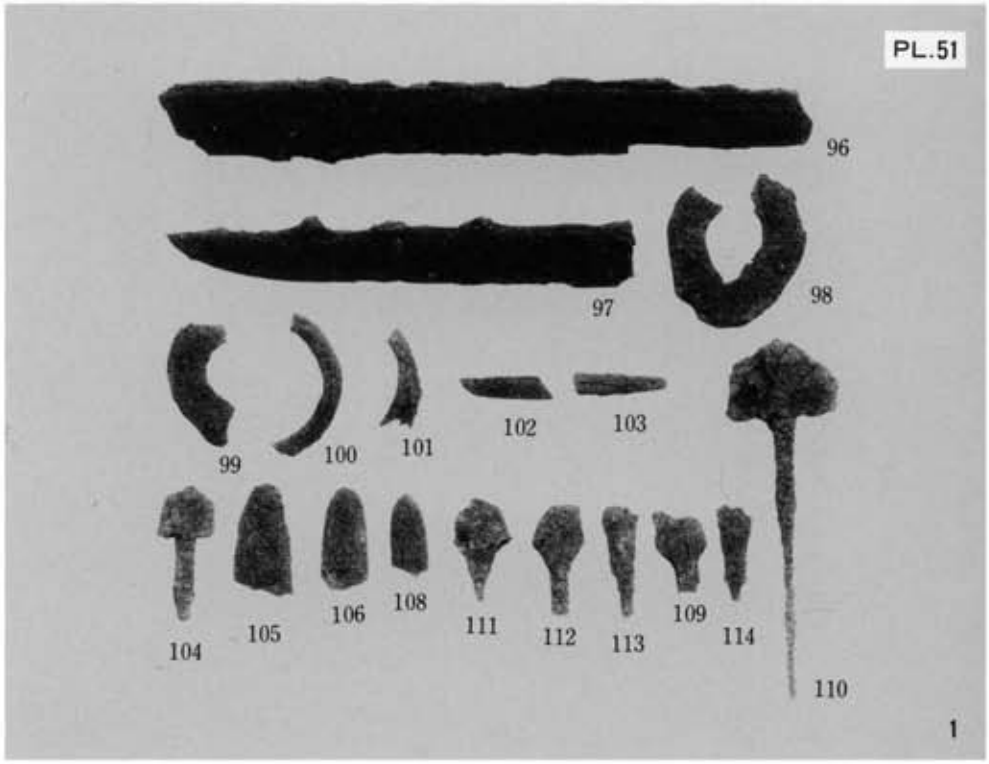
145

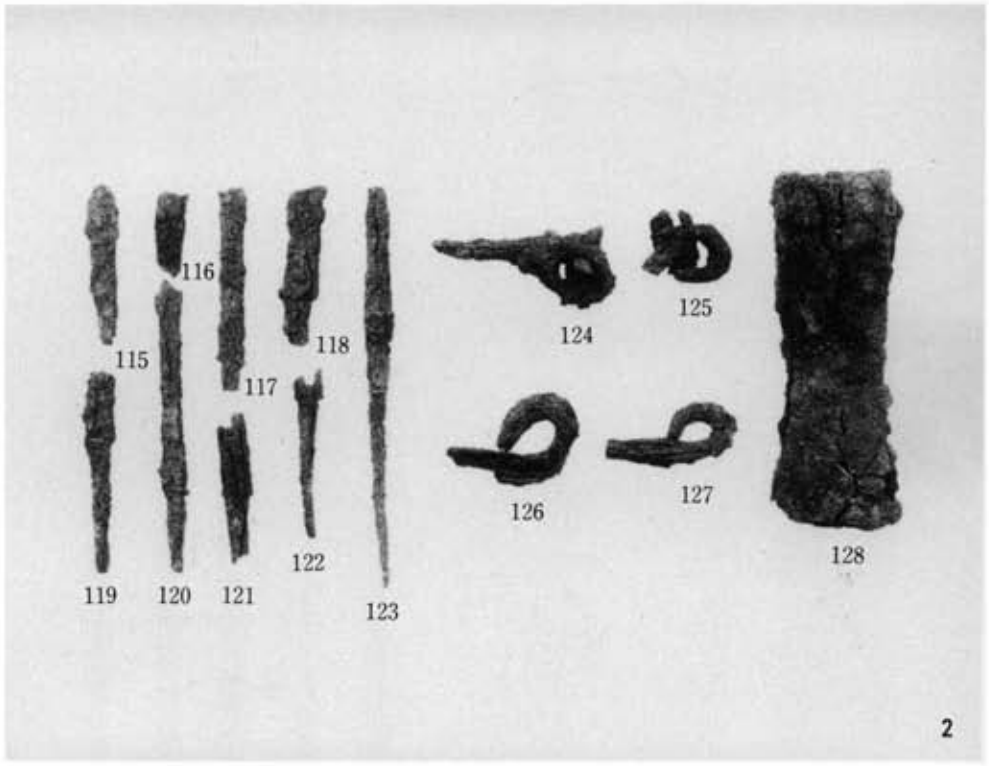
132・134・138～141 大工田古墳群ＳＴ005古墳出土須恵器
145. 同 土師器



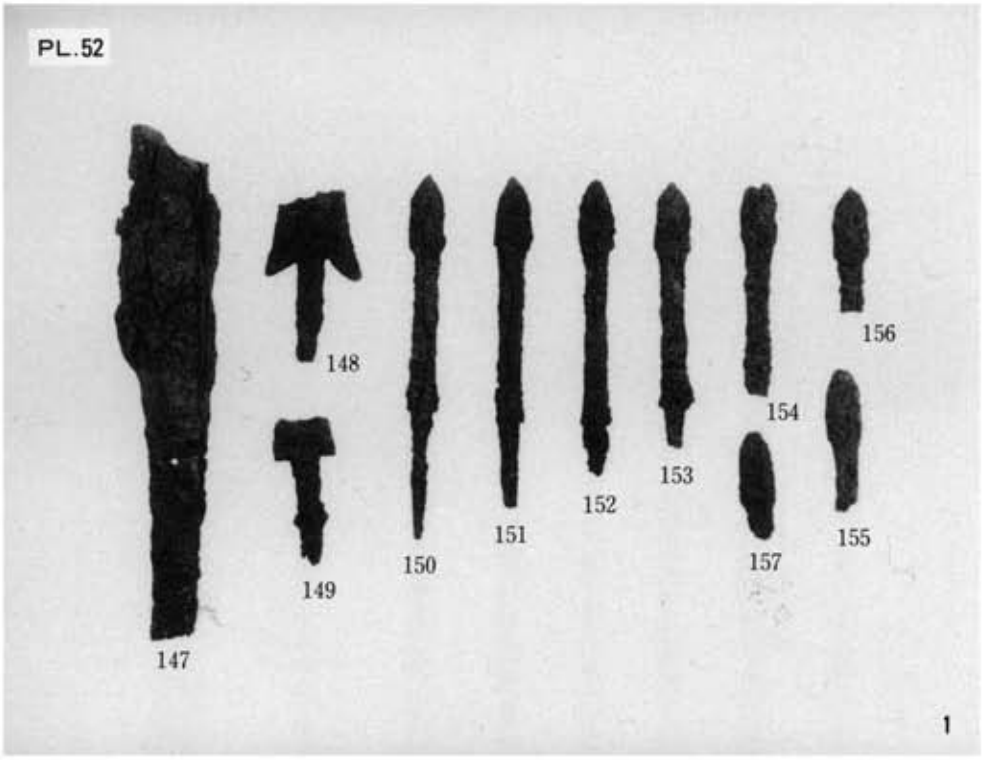

1・2．大工田古墳群ＳＴ001古墳出土鉄器

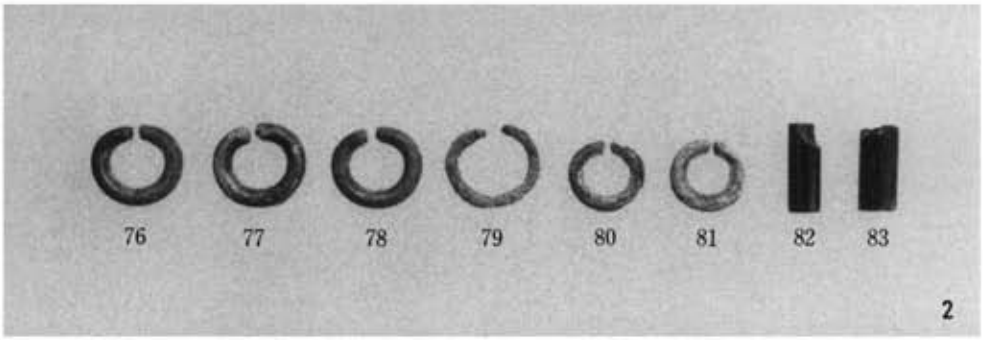



1·2．大工田古墳群ＳＴ002古墳出土鉄器

PL.52

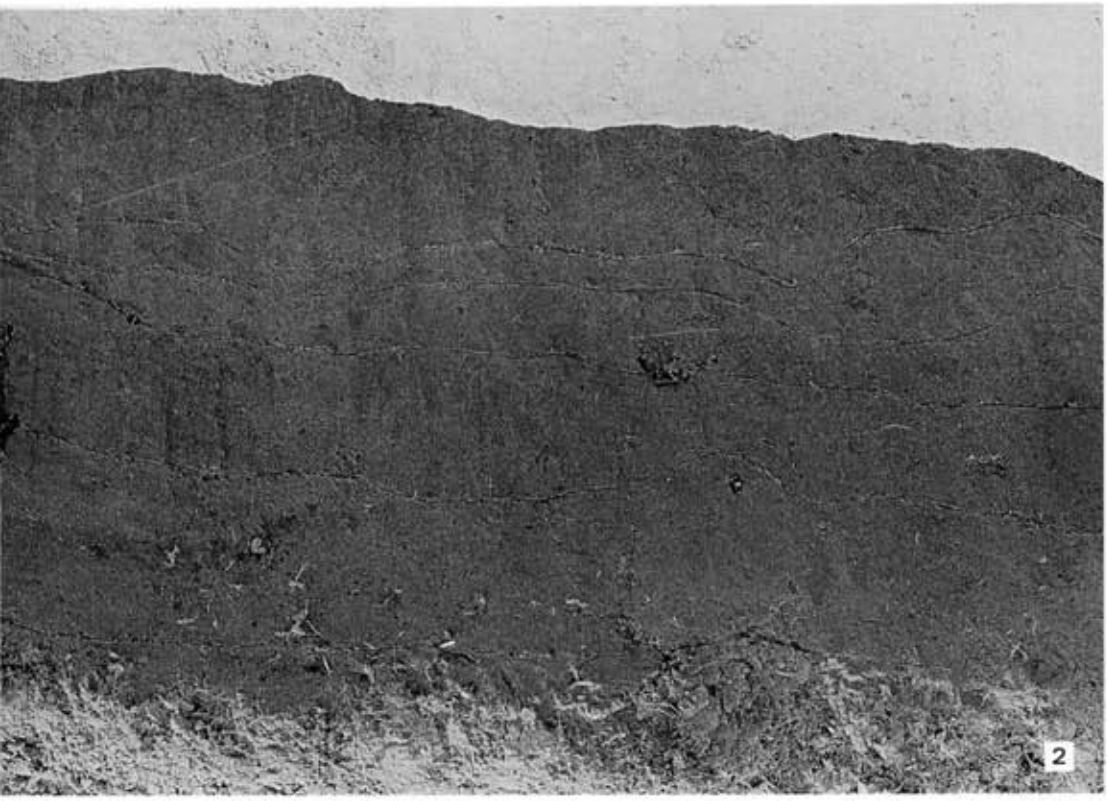


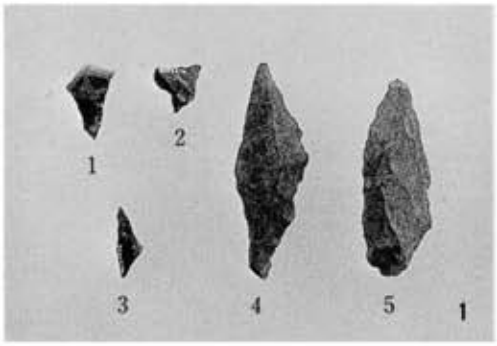

1．大工田古墳群ＳＴ005古墳出土鉄器
2．　同　　ＳＴ001古墳出土装身具

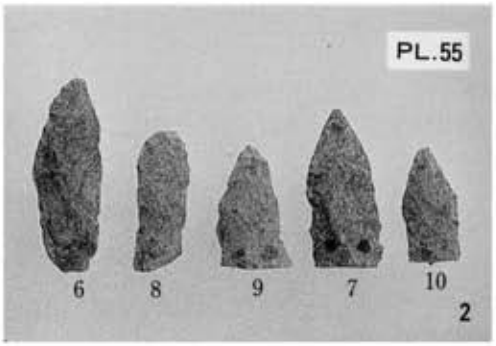
# 十 井 手 遺 跡

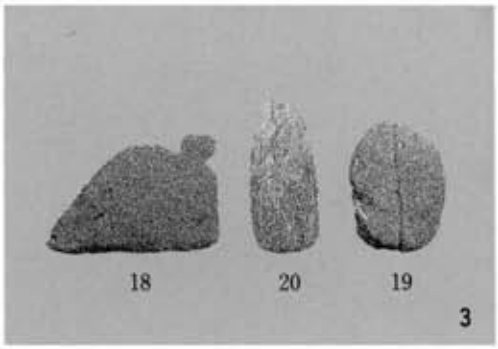
1. 十井手遺跡遠景（東から）
2. 　同　　調査区全景（西から）

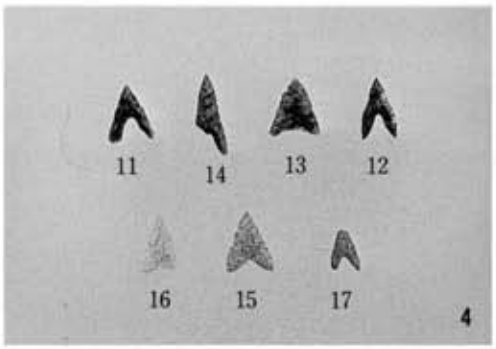


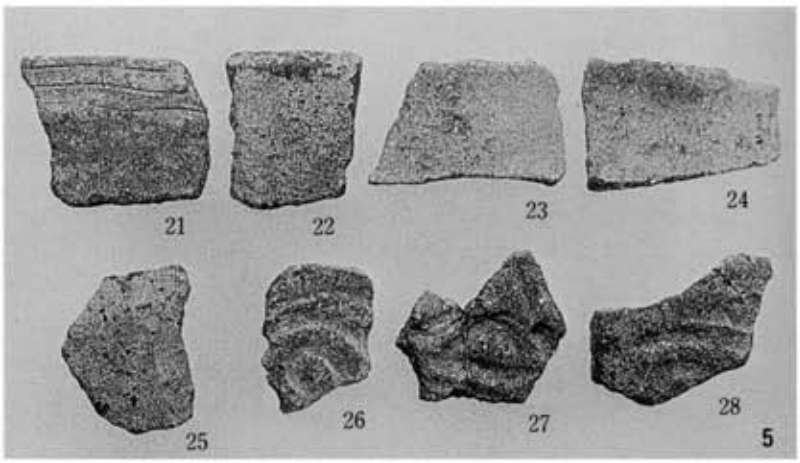
1．十井手遺跡第3区遺物出土状態
2．　　同　　第4区土層



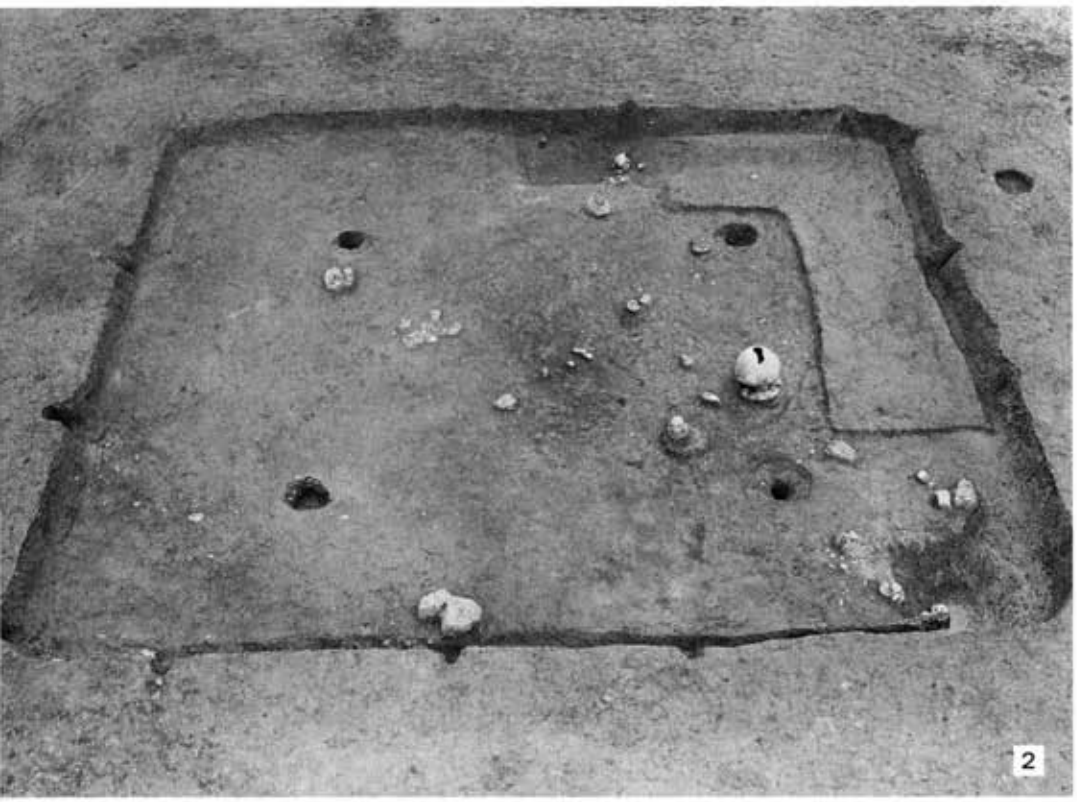

1・2. 十井手遺跡出土旧石器時代石器
3・4. 同 縄文時代石器
5 同 縄文土器

# 撰分遺跡

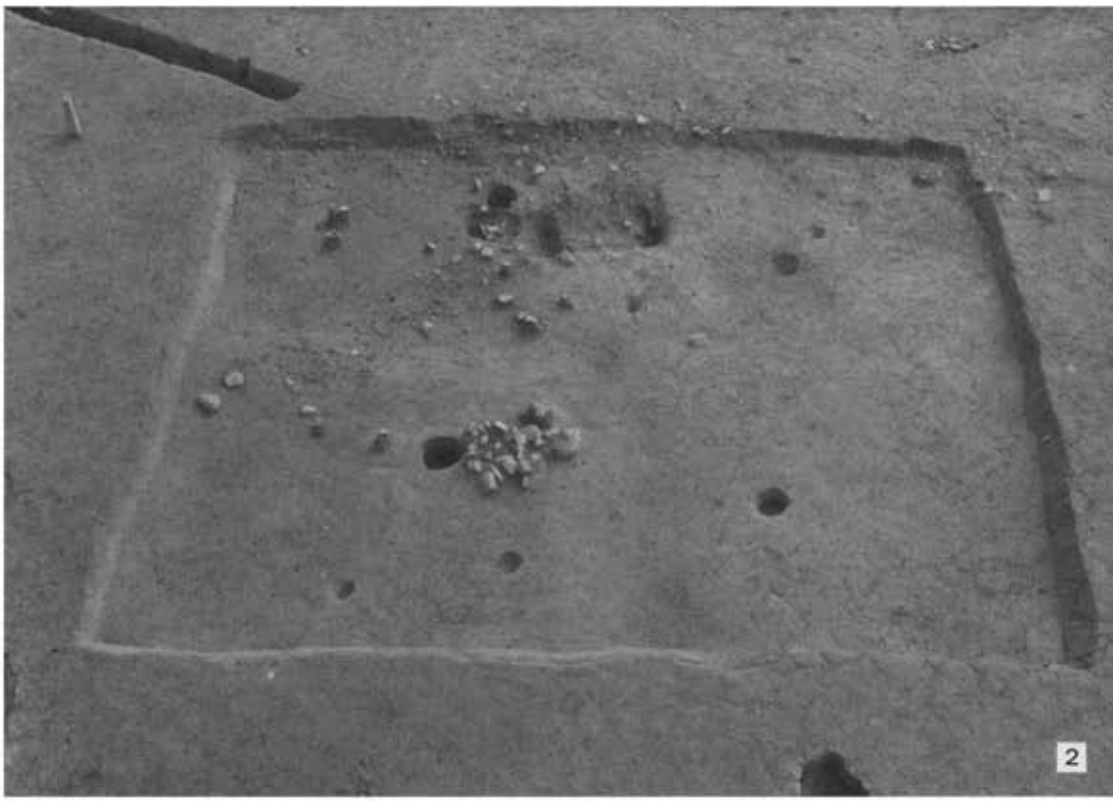
1. 撰分遺跡遠景（山崎山から）
2. 同　　全景（東から航空写真）

1．撰分遺跡全景（西から航空写真）
2．　同　　SB004・SB005住居跡

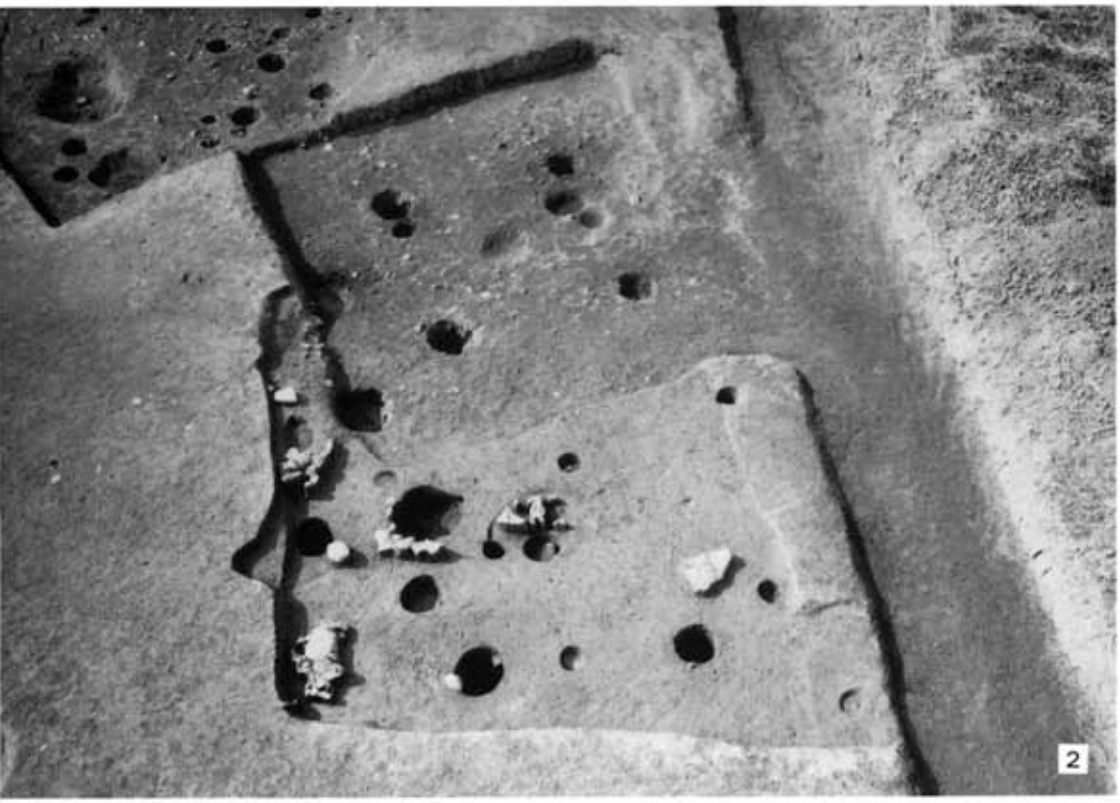
1．撰分遺跡ＳＢ006住居跡
2．　同　ＳＢ007・ＳＢ028住居跡



1. 撰分遺跡ＳＢ010・ＳＢ022・ＳＢ023住居跡
2. 同　ＳＢ012住居跡

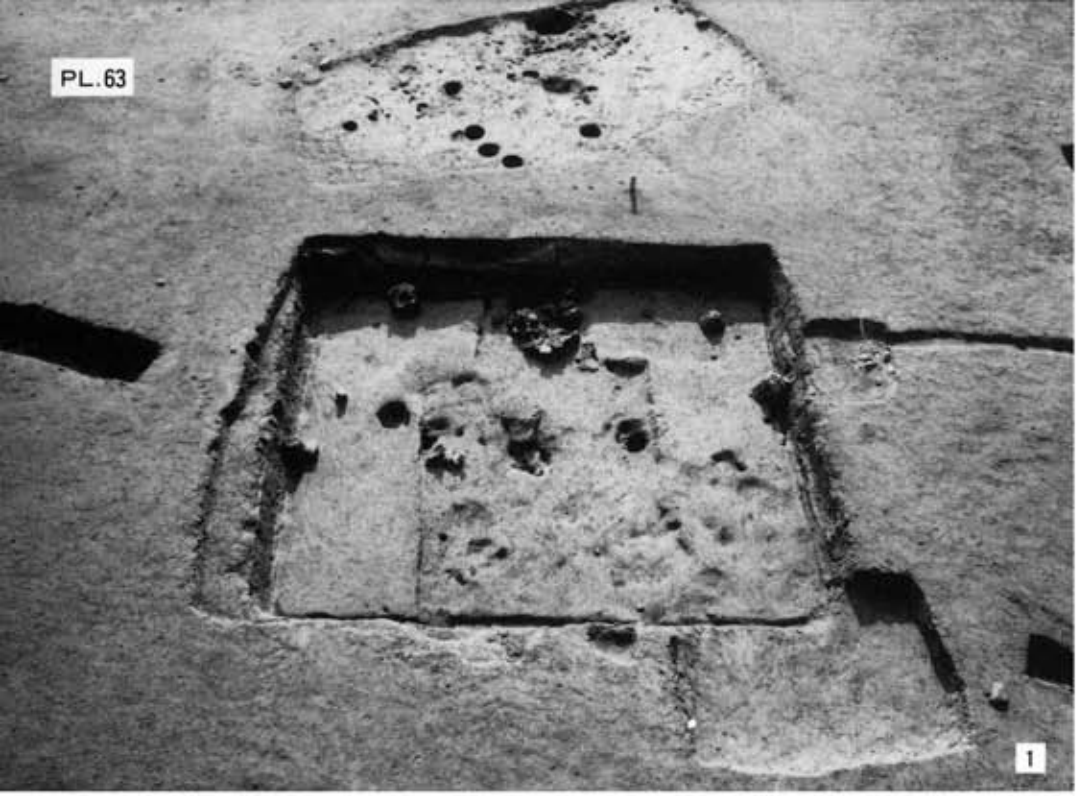


1．撰分遺跡ＳＢ015住居跡
2．　同　　ＳＢ020住居跡



1．撰分遺跡ＳＢ027住居跡
2．　同　　ＳＢ005・ＳＢ029住居跡

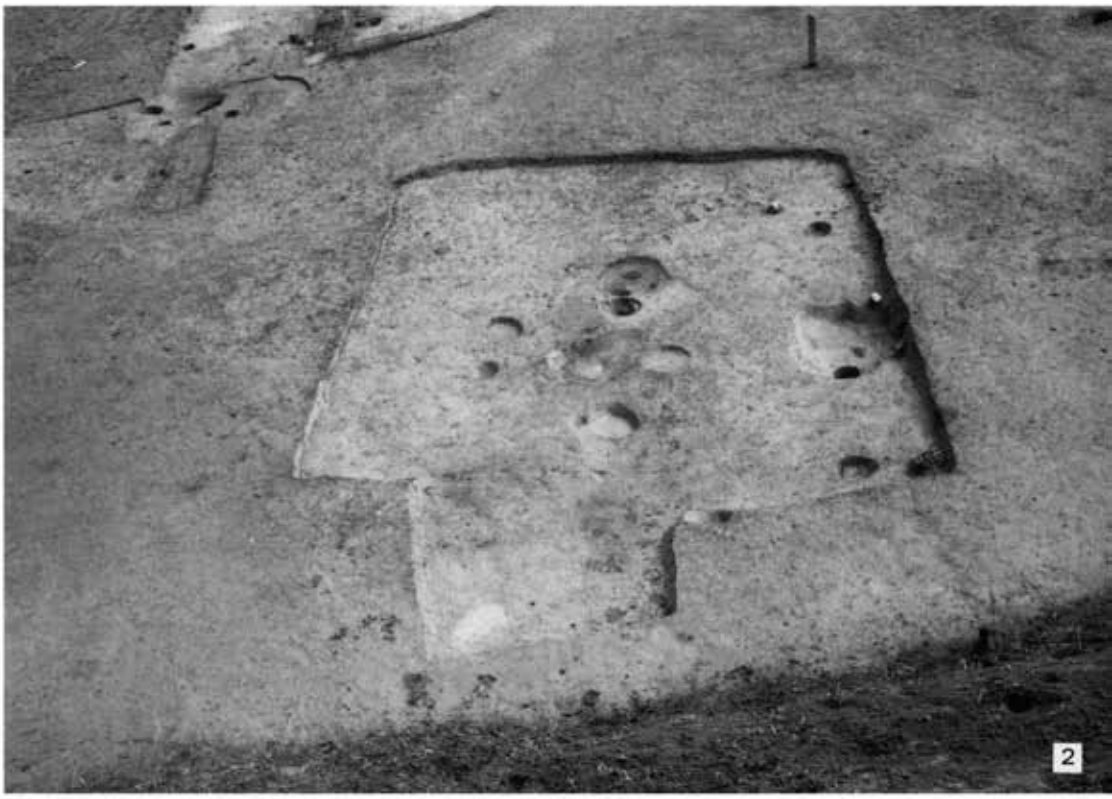
1．撰分遺跡ＳＢ059住居跡
2．　　同　ＳＢ060住居跡



1

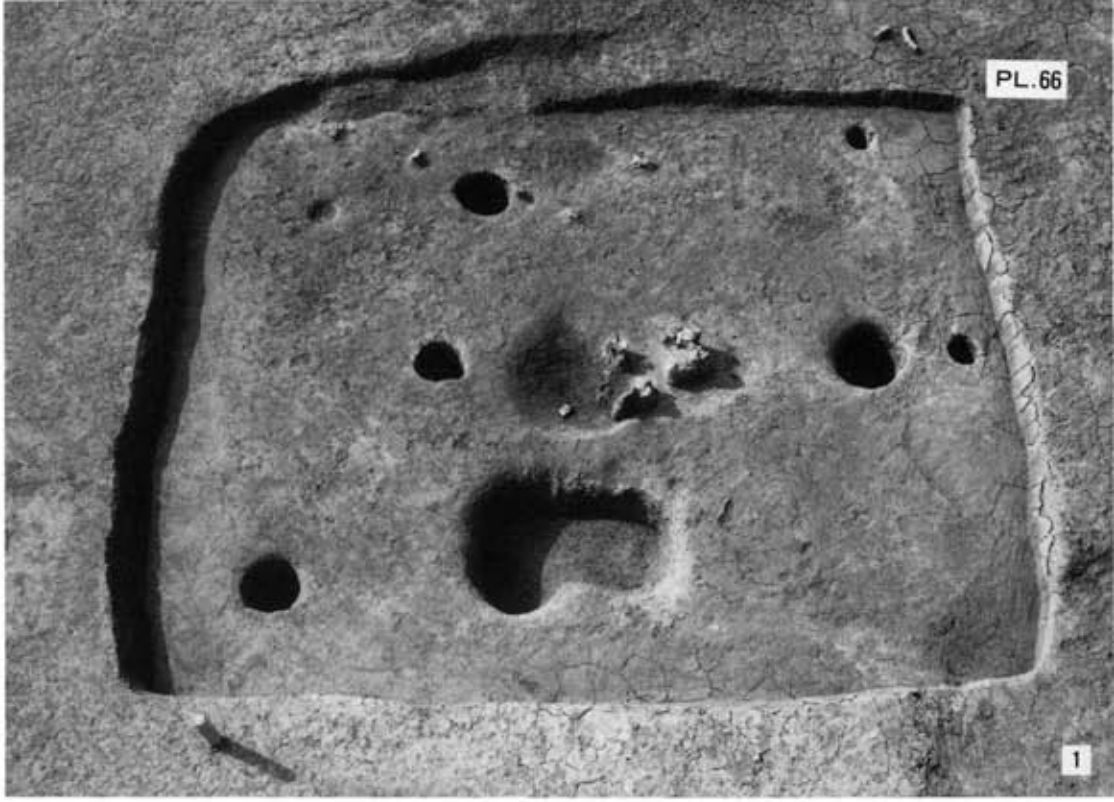
2

1．撰分遺跡ＳＢ061住居跡
2．　同　　ＳＢ073住居跡

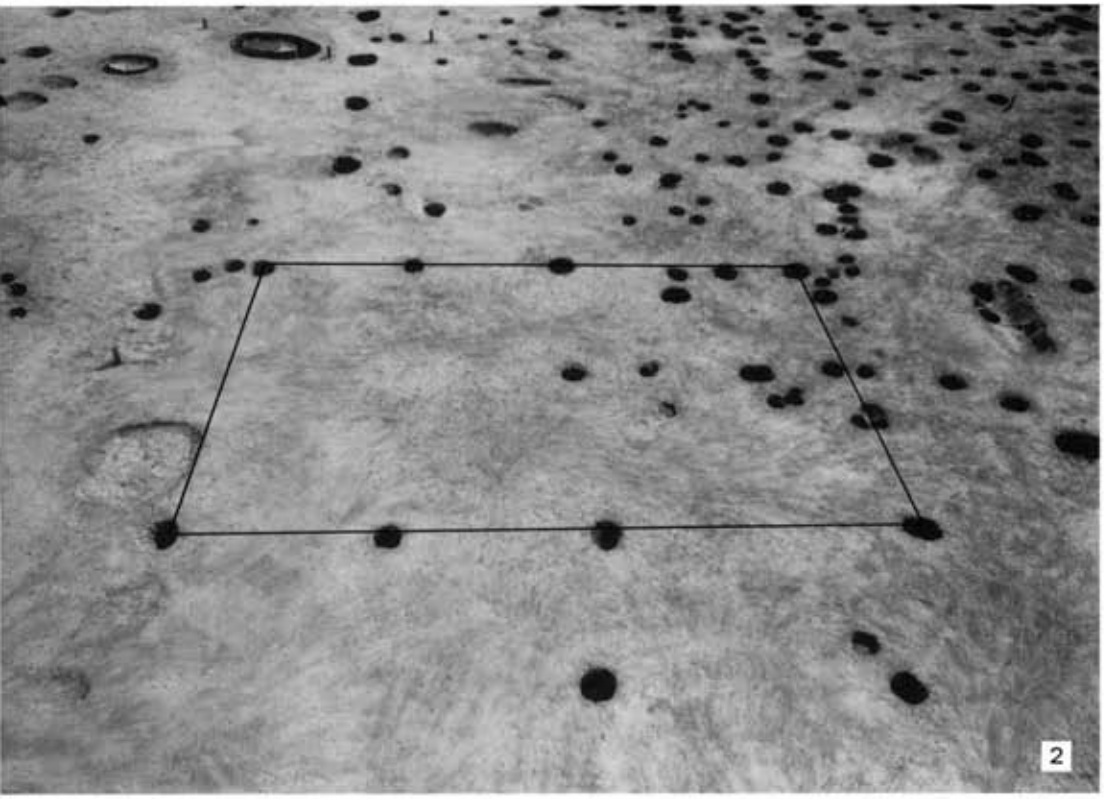


1．撰分遺跡ＳＢ074住居跡
2．　同　　ＳＢ079住居跡

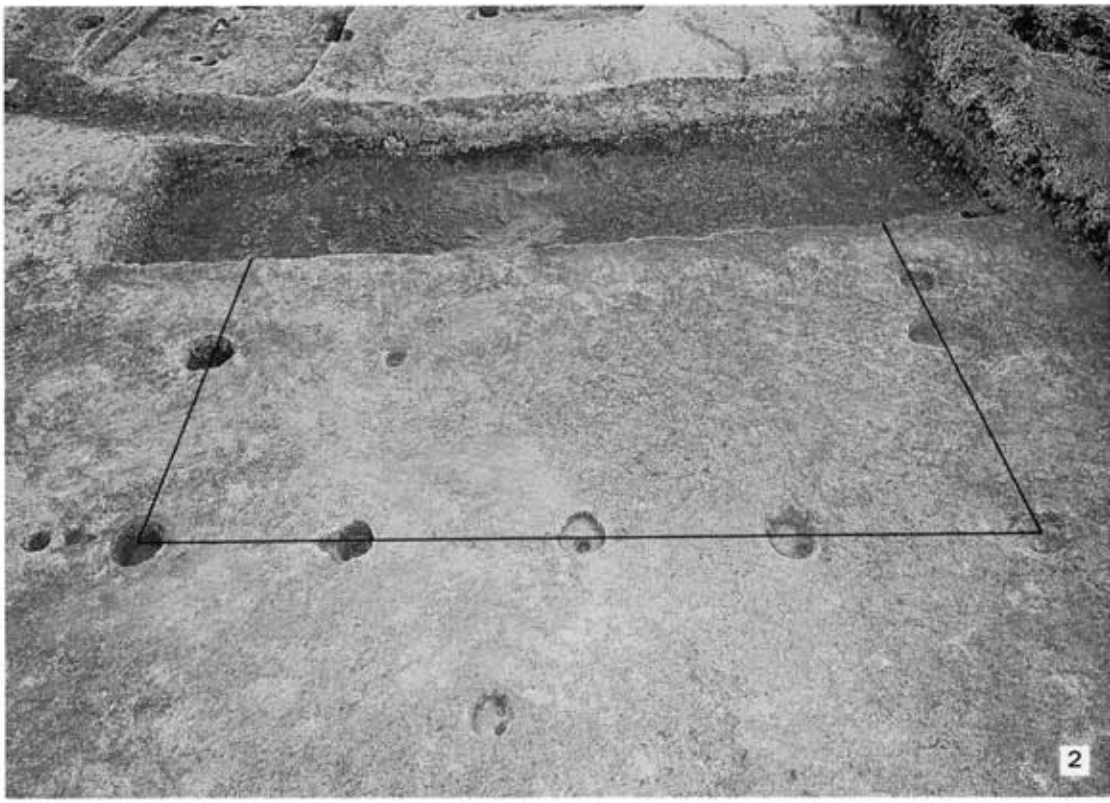
1．撰分遺跡ＳＢ080住居跡
2．　同　　ＳＢ092住居跡



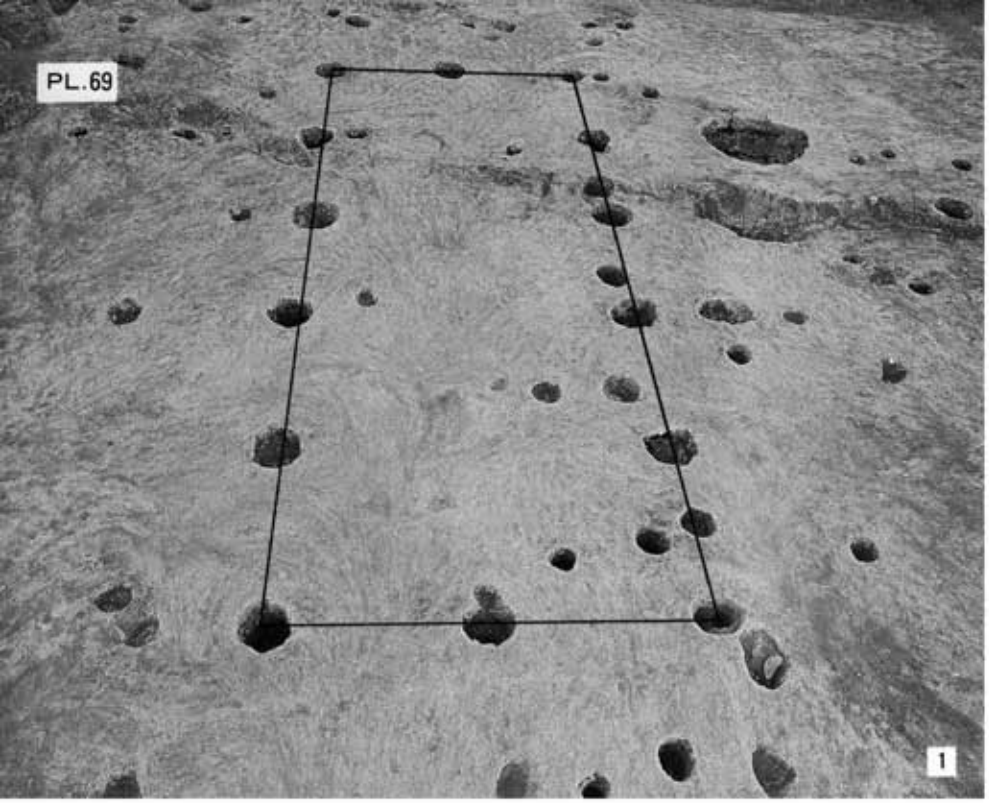
1．撰分遺跡ＳＢ093住居跡
2．　同　　ＳＢ030掘立柱建物跡

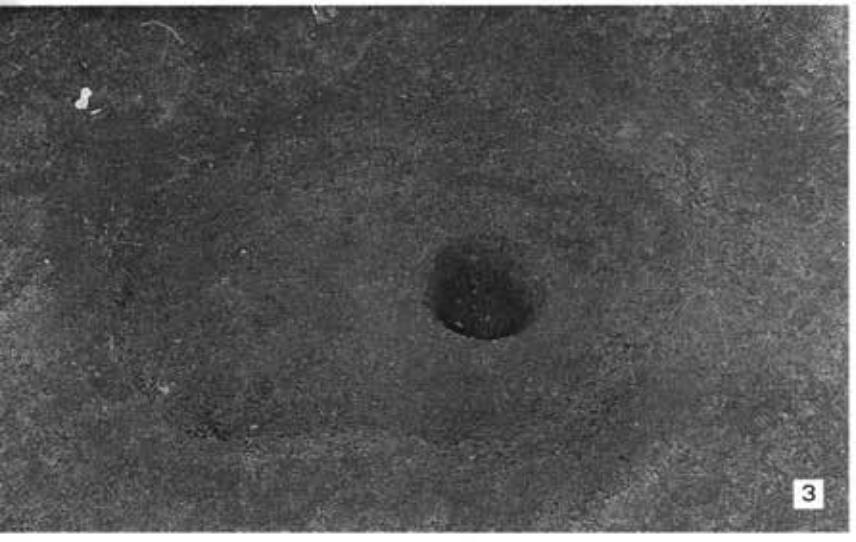


1．撰分遺跡ＳＢ052掘立柱建物跡
2．　同　　ＳＢ053掘立柱建物跡

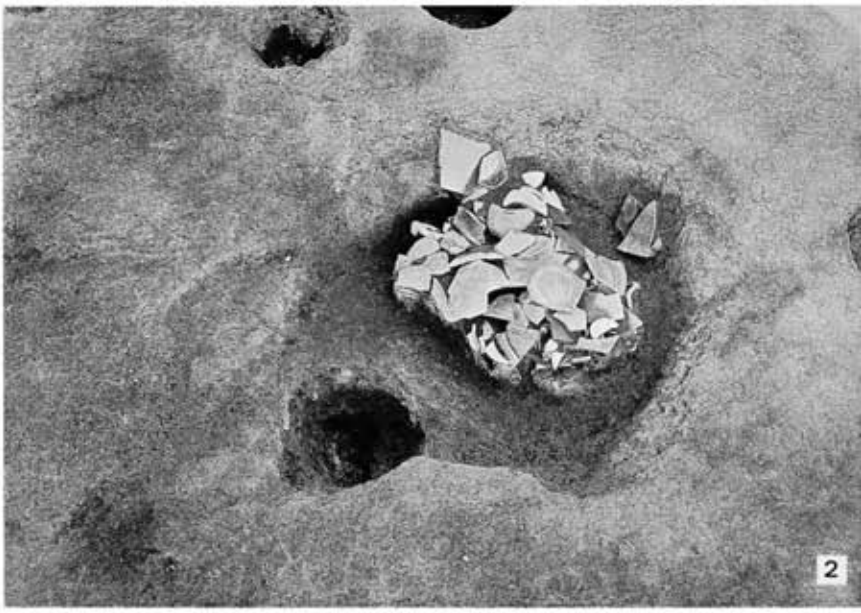


1．撰分遺跡ＳＢ083掘立柱建物跡
2．　同　ＳＢ084掘立柱建物跡



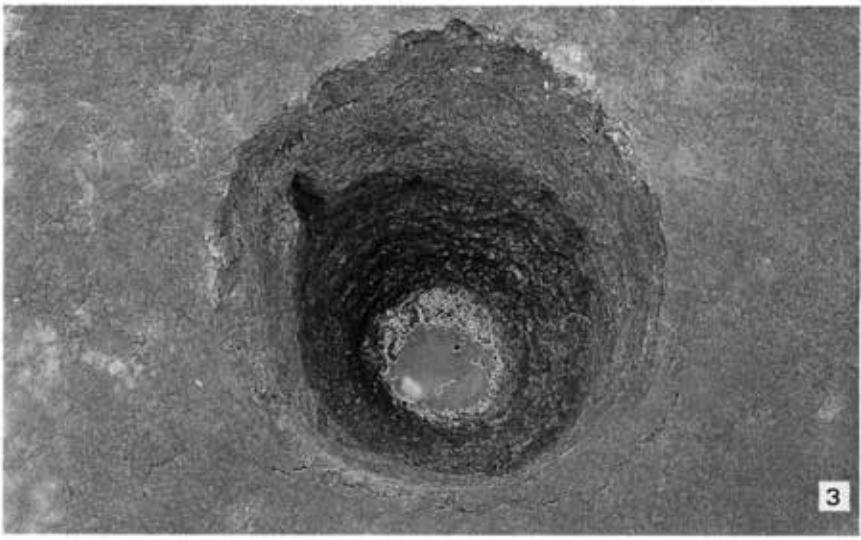



1．撰分遺跡ＳＢ091掘立柱建物跡
2．　同　　ＳＫ002土壙
3．　同　　ＳＫ019土壙

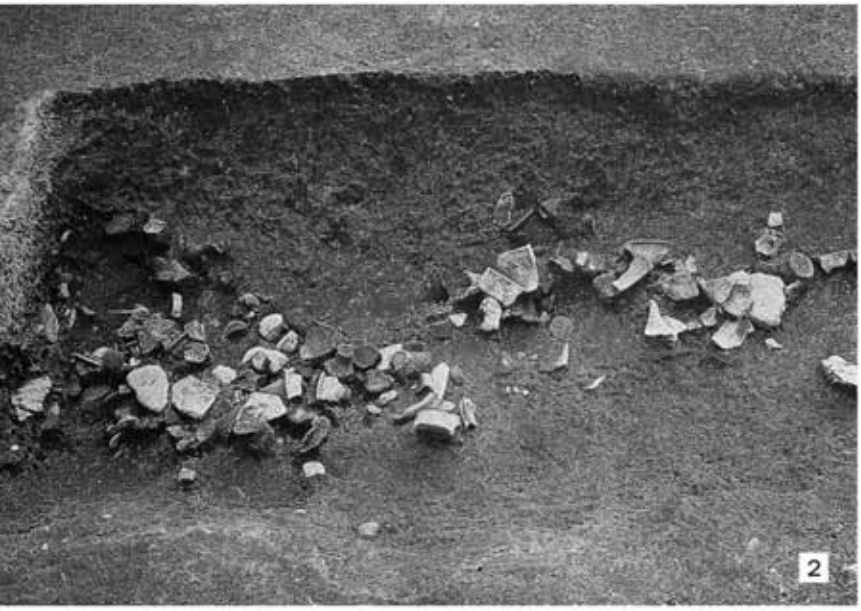


1. 撰分遺跡 SK025土壙
2. 同 SK035土壙
3. 同 SK036土壙

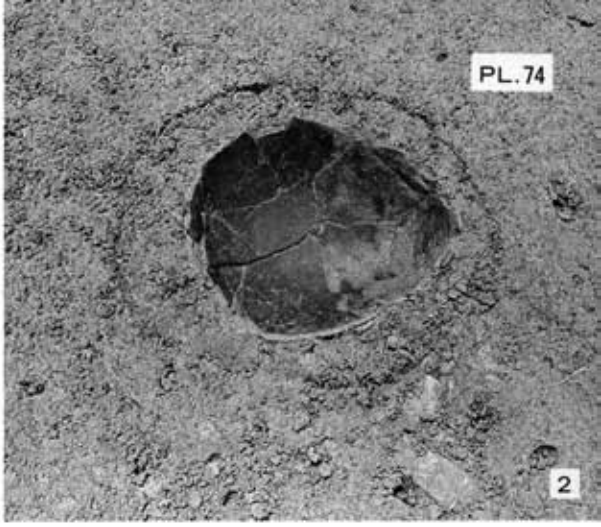
1．撰分遺跡ＳＫ037土壙
2．　同　　ＳＫ038土壙
3．　同　　ＳＫ039土壙

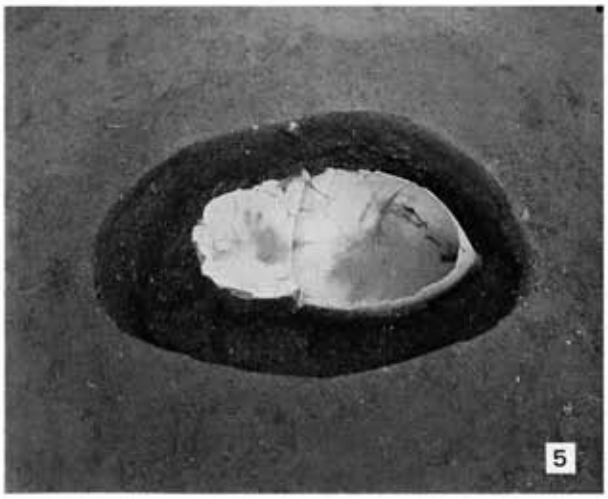


1．撰分遺跡ＳＫ069土壙
2．　同　　ＳＸ057不明遺構
3．　同　　ＳＥ112井戸跡



1. 撰分遺跡ＳＤ001溝
2. 　同　　ＳＤ001溝遺物出土状態
3. 　同　　ＳＤ033大溝

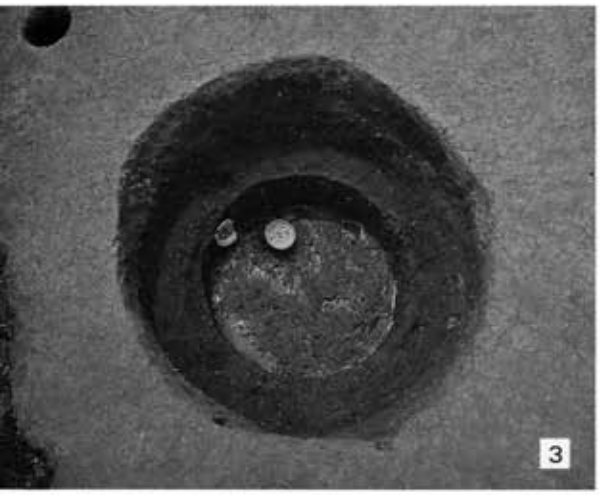


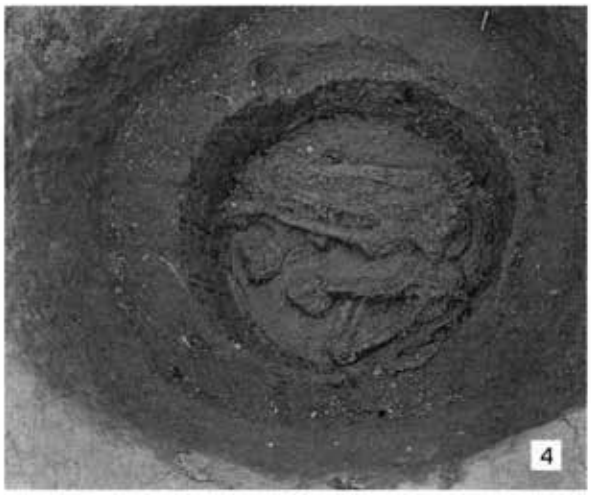


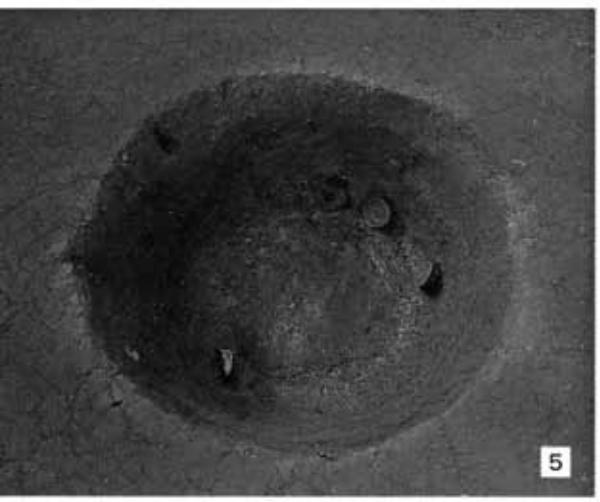
1. 撰分遺跡ＳＪ050甕棺墓
2. 同　ＳＪ052甕棺墓
3. 同　ＳＪ053甕棺墓
4. 同　ＳＪ054甕棺墓
5. 同　ＳＪ055甕棺墓
6. 同　ＳＪ056・ＳＪ057甕棺墓

1

2

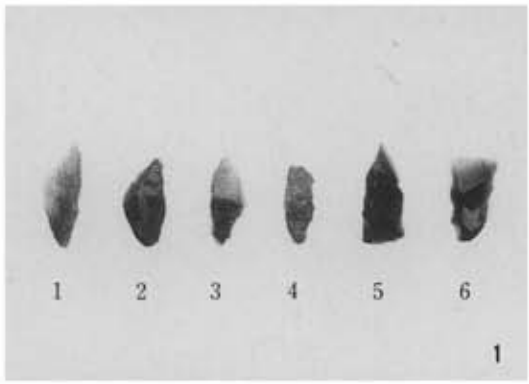

3

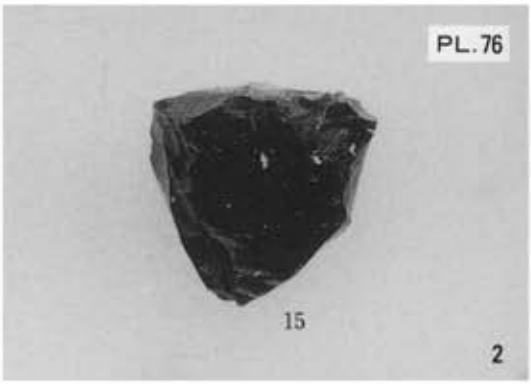

4

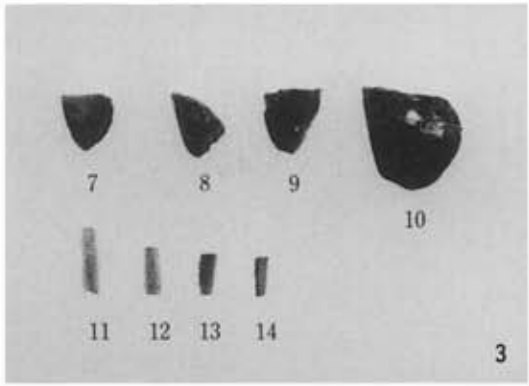

5

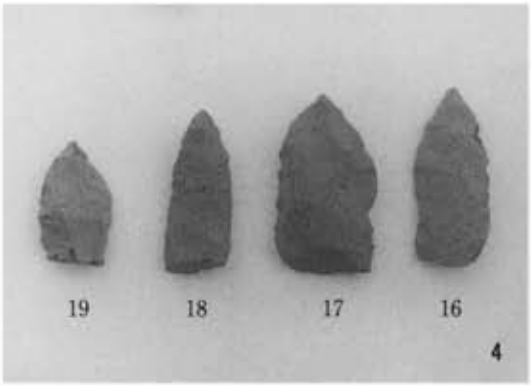
6

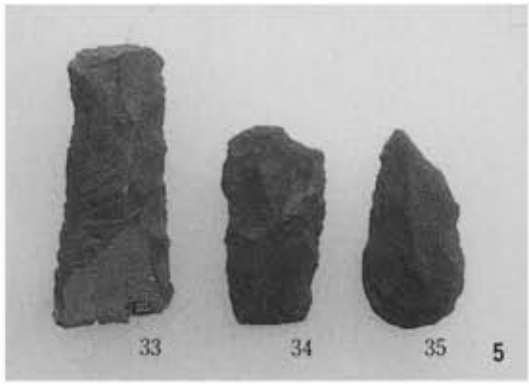
1. 撰分遺跡ＳＪ058甕棺墓
2. 同 ＳＪ059甕棺墓
3･4･5. 同 ＳＰ082木棺墓
6. 同 ＳＰ097土壙墓

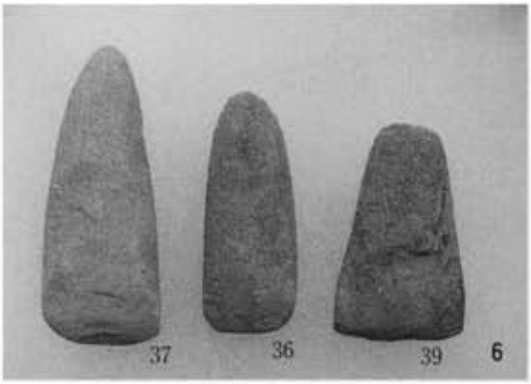


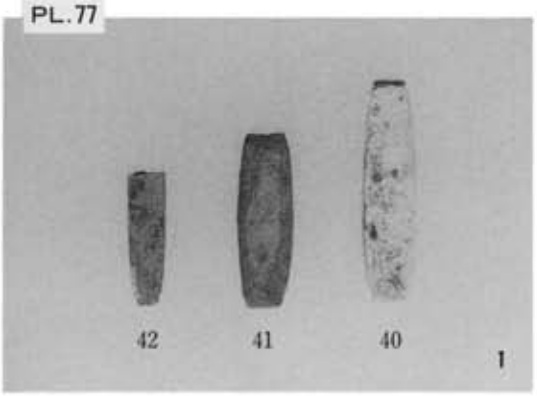



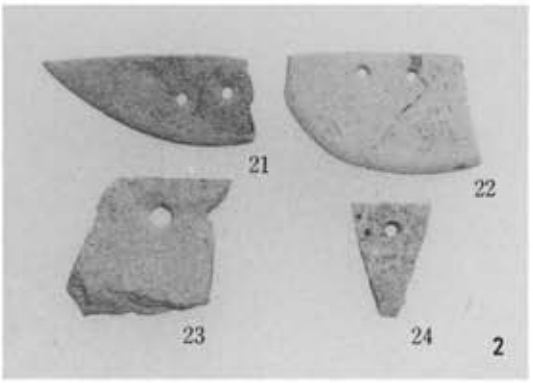



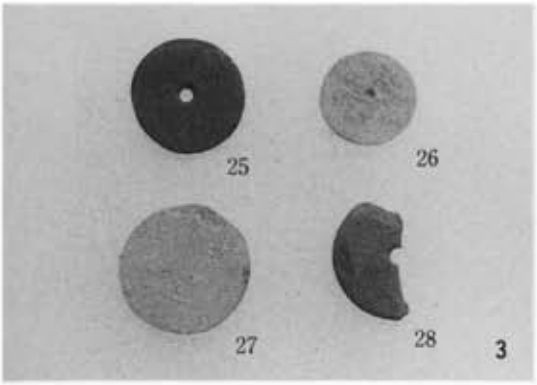



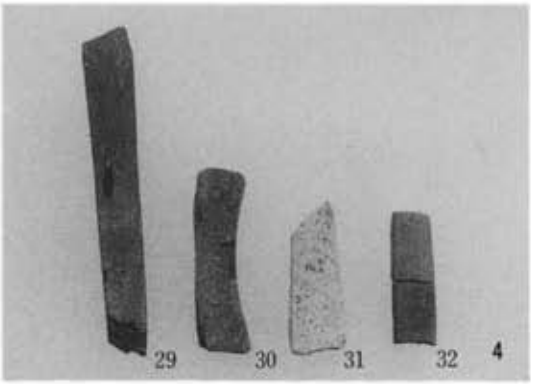

1. 撰分遺跡出土 ナイフ形石器
2. 同 石核
3. 同 細石核・細石刃
4. 同 尖頭器
5. 同 打製石斧
6. 同 磨製石斧

PL.77

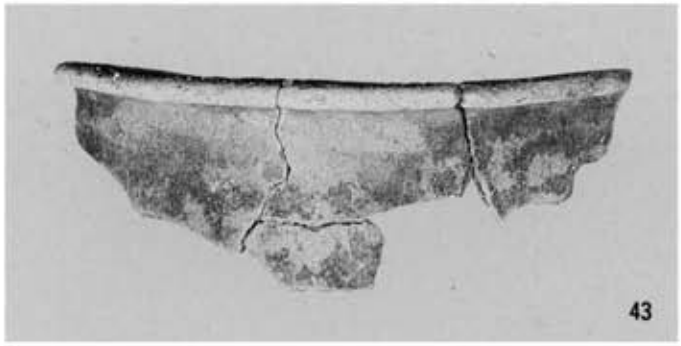


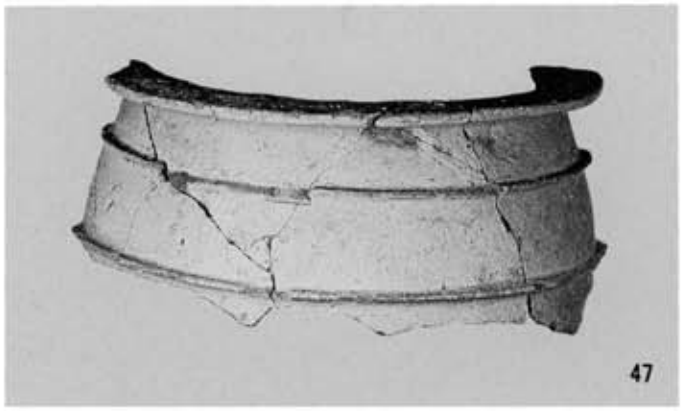



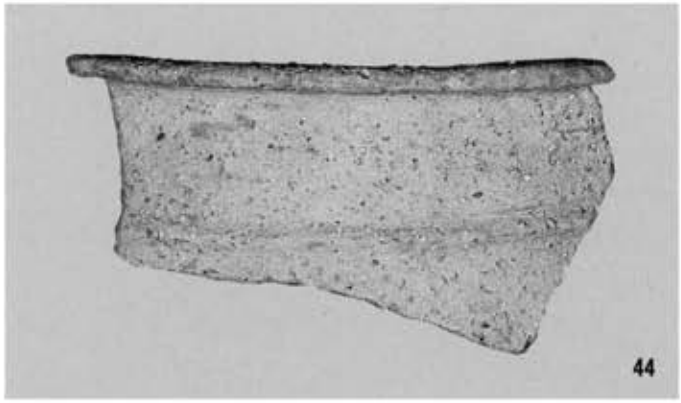



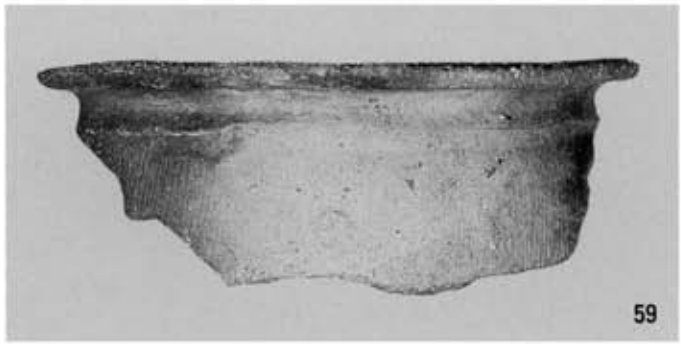



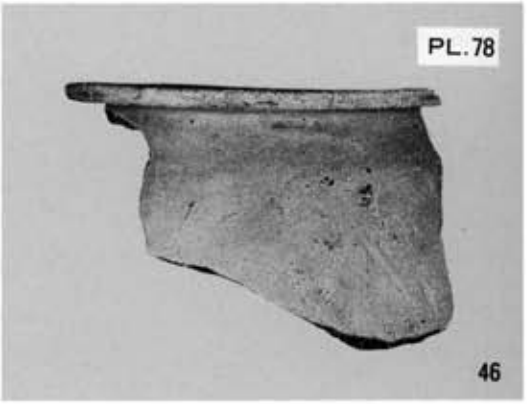
1. 撰分遺跡出土 磨製石器
2. 同 石包丁
3. 同 紡錘車
4. 同 砥石
5. 同 縄文土器


43

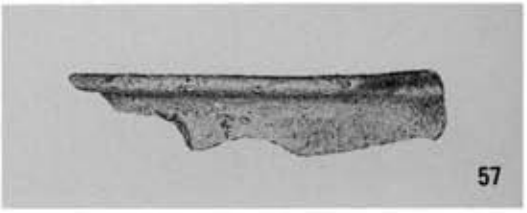

47

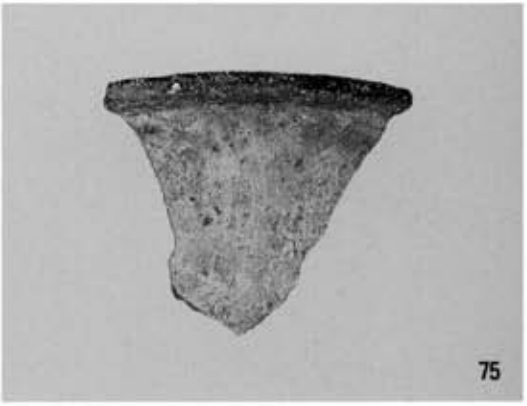

44


59


46

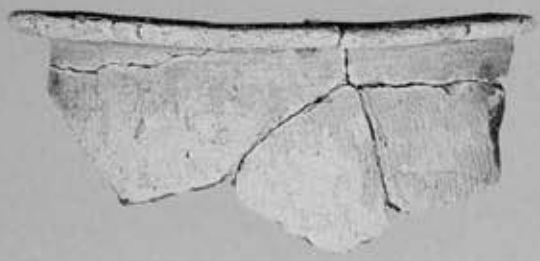
61


57

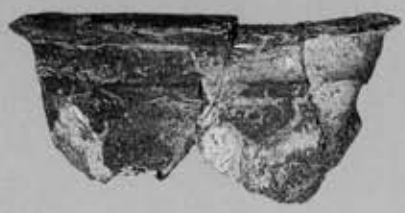

75

43・44・46・47・57・59・61・75 撰分遺跡出土弥生土器

PL.79



56



62

76

79

78

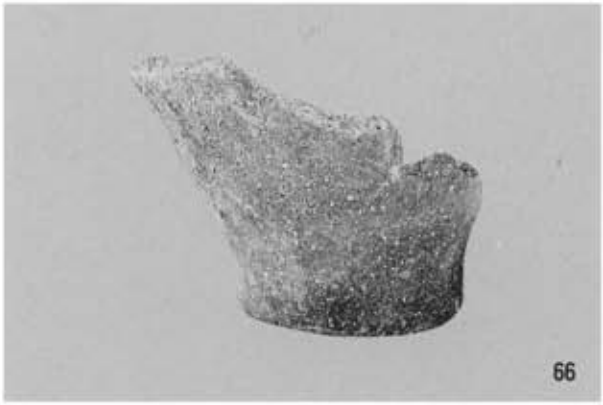
82

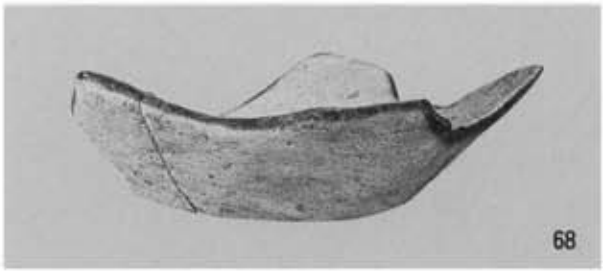
81

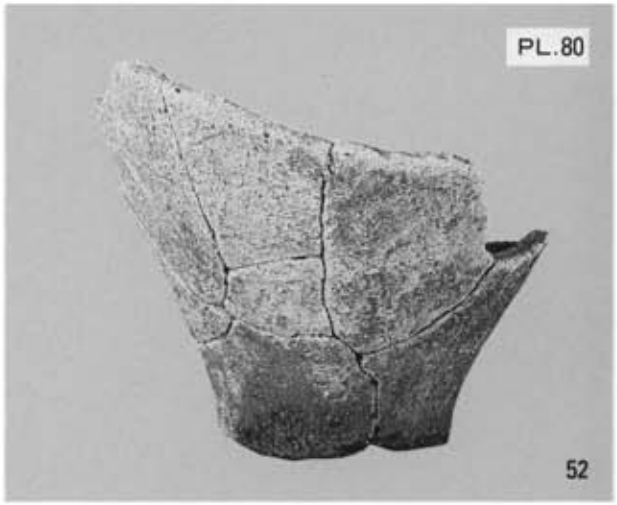
56・62・76・78・79・81・82　撰分遺跡出土弥生土器

63

70

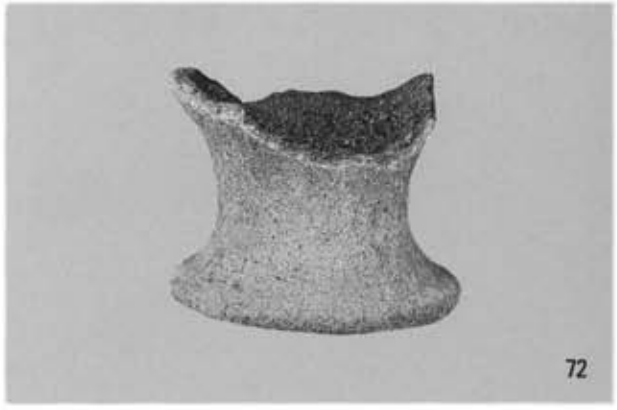

66


68


52

50

64


72

50・52・63・64・66・68・70・72　撰分遺跡出土弥生土器

PL.81

77

84

83

86

88

89

77・83・84・86・88・89　撰分遺跡出土弥生土器

92

93

101

102

92・93．撰分遺跡出土ＳＪ050甕棺
101・102．　同　　ＳＪ057甕棺

PL.83

99

96

100

105

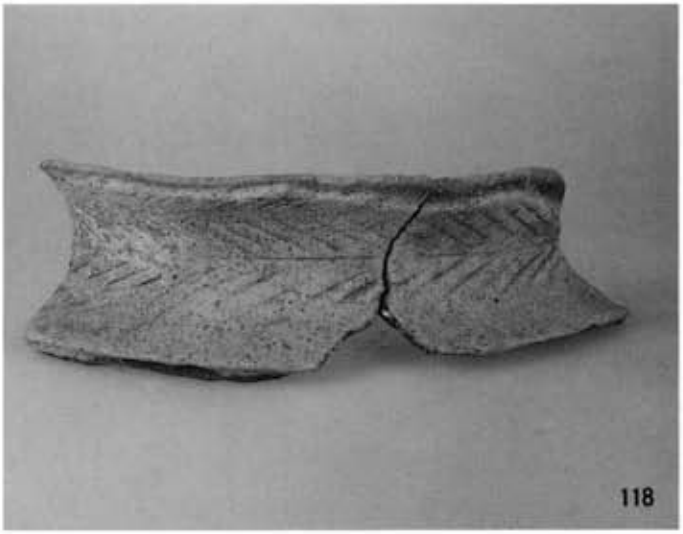
96. 撰分遺跡出土ＳＪ053甕棺
99•100. 同 ＳＪ056甕棺
105. 同 ＳＪ059甕棺

106

PL.84

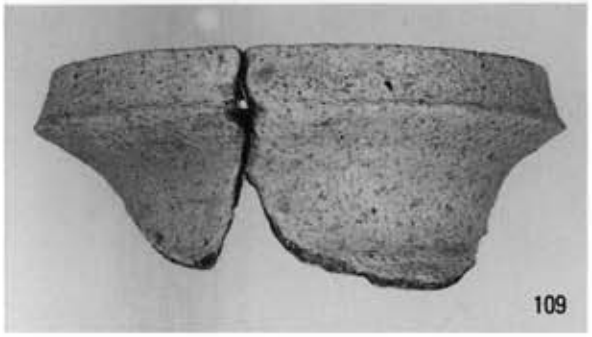
111

115


118

113

108


109

107

106～109・111・113
115・118

撰分遺跡出土
復合口縁土師器

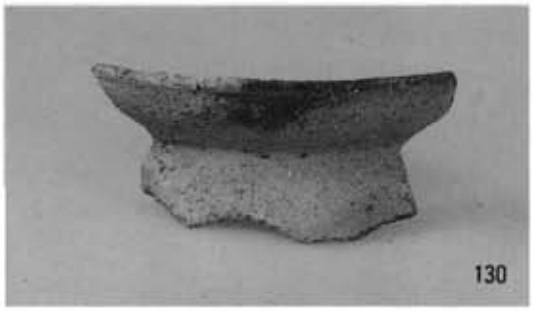
PL.85

132

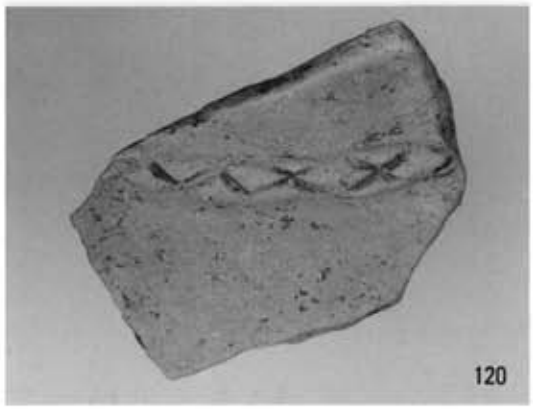
131

121

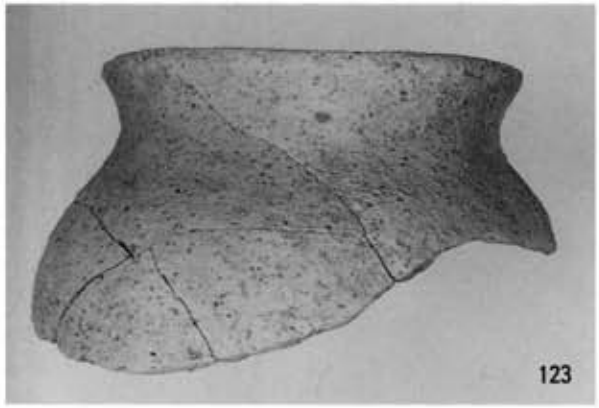
128

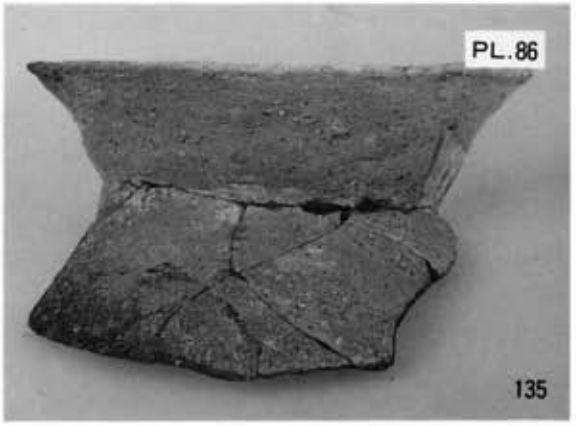

130

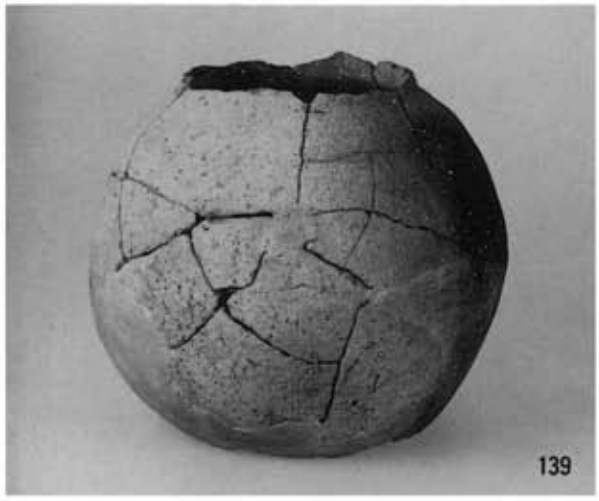
138

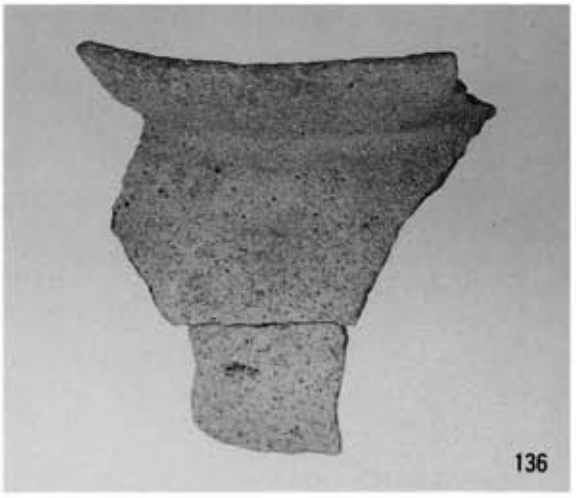

120

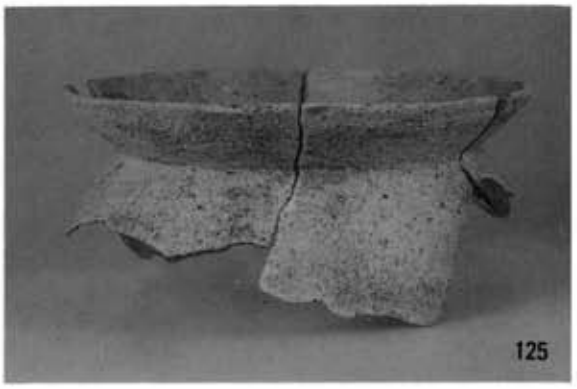
120・121・128・130～132・138．撰分遺跡出土土師器






123・125・ 135～137・139．撰分遺跡出土土師器

PL.87

140

142

141

144

143

145

148

149

140～145・148・149
撰分遺跡出土土師器

151

155

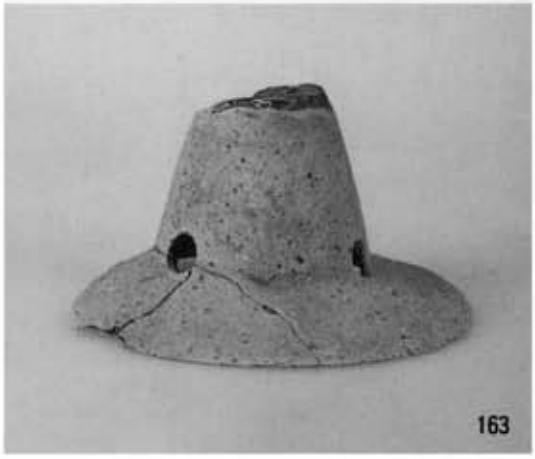
153

147

158

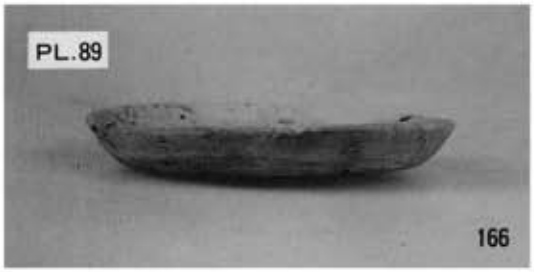
161

162

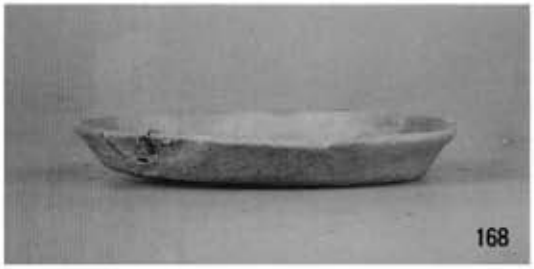

163

147・151・153・155・158・161～163　撰分遺跡出土土師器

PL.89

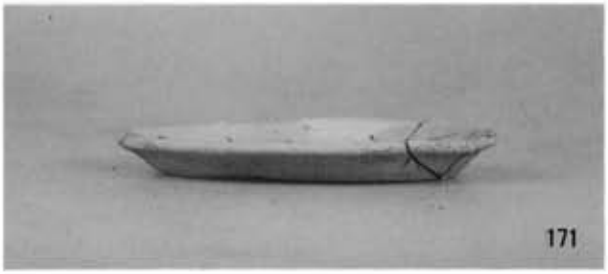

166

167

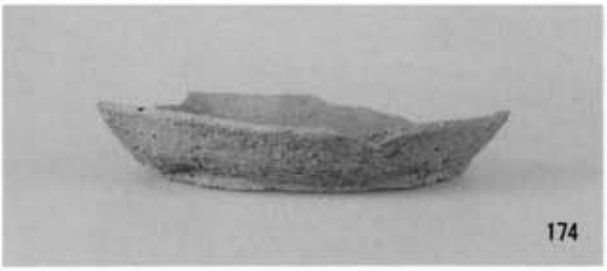

168

169

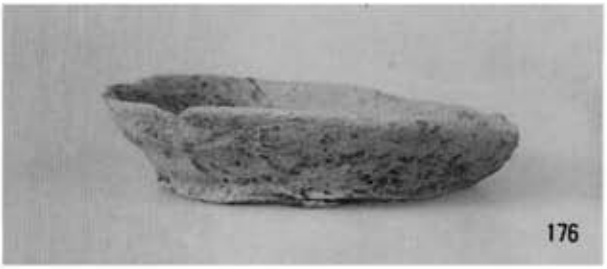
170


171

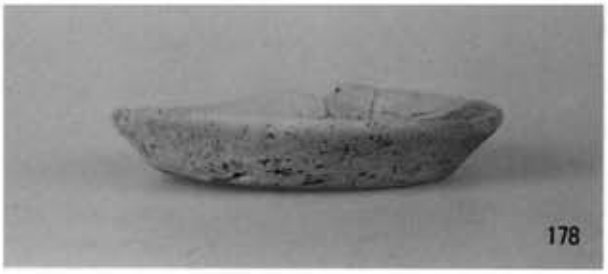
172


174

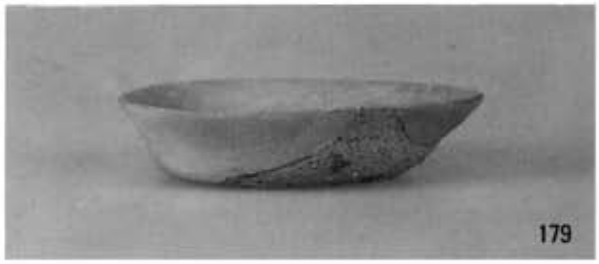
175


176

177


178

166～172・174～178 撰分遺跡出土土師器


179

180

181

182

183

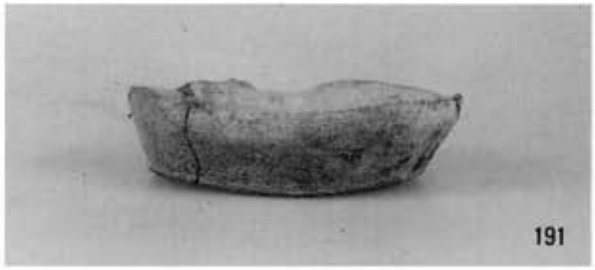
185

187

188

189

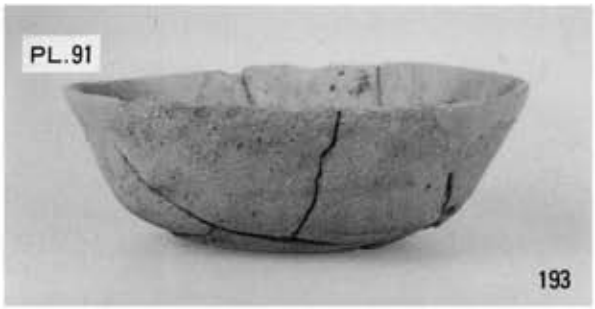
190

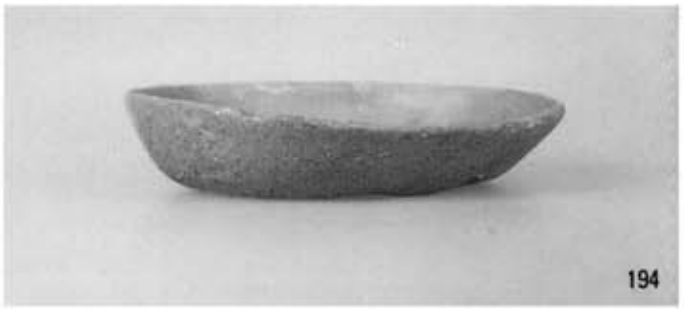

191

192

179～183・185・187～192　撰分遺跡出土土師器

PL.91

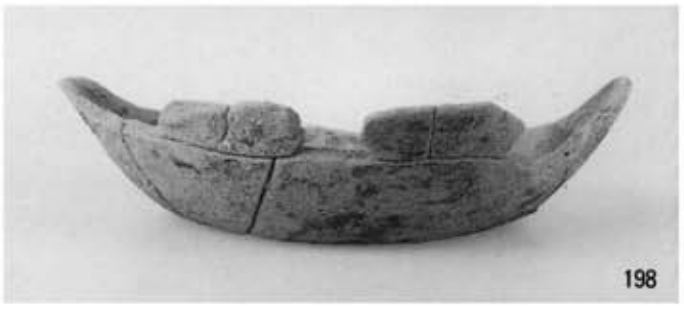

193

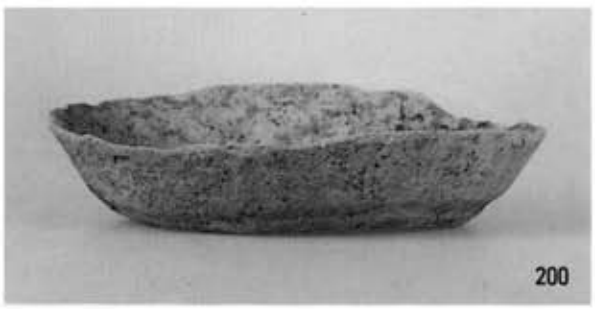

194

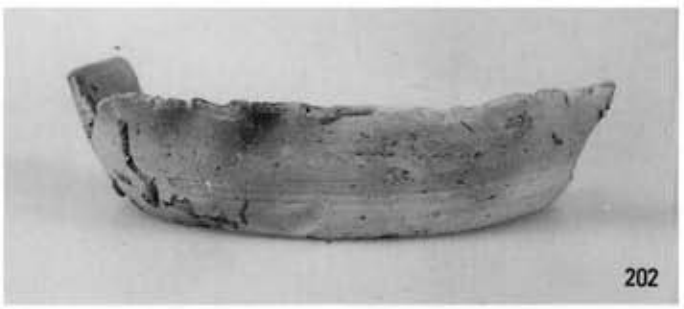
195

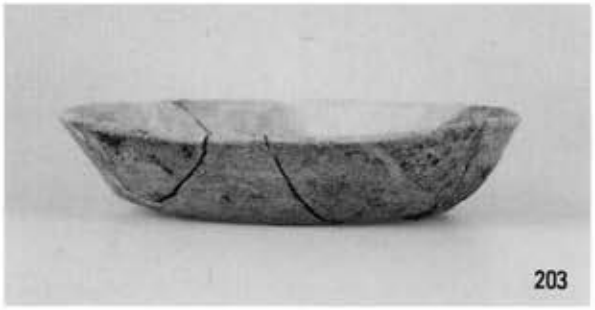
197

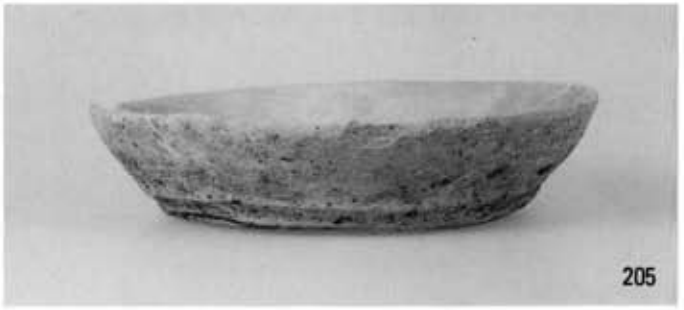
199


198


200

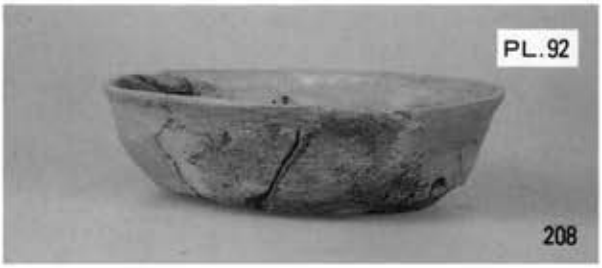

202


203


205

193～195・197～200・202・203・205　撰分遺跡出土土師器

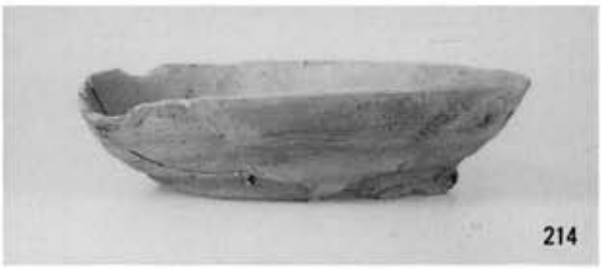
206

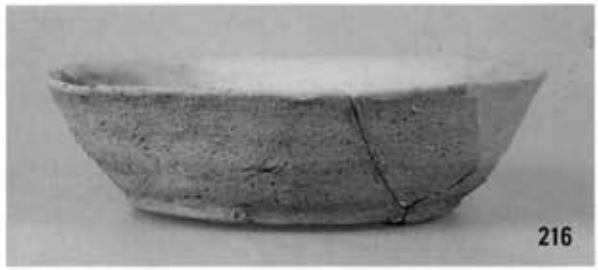

208

210

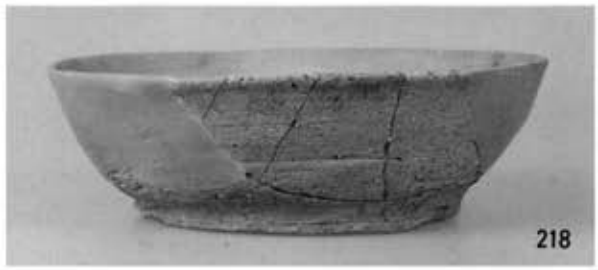
211

212


214


216

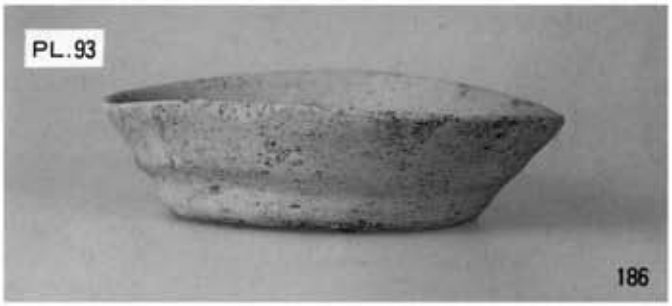
217


218

219

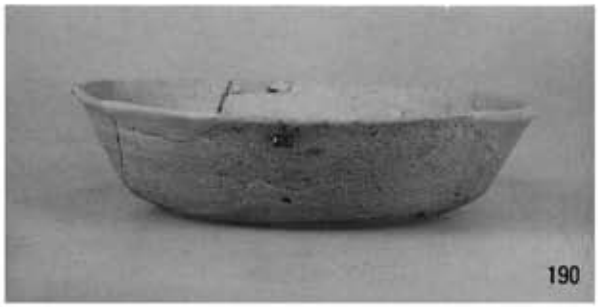
206・208・210～212・214・216～219　撰分遺跡出土土師器

PL.93


186

187

189


190

225

227

226

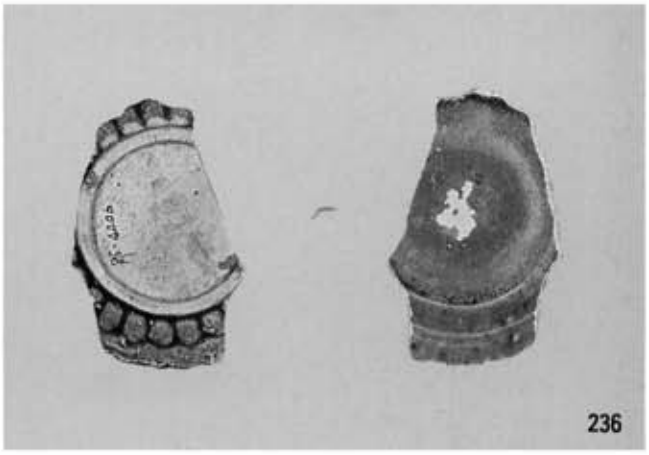
228

186・187・189・190・225. 撰分遺跡出土土師器
226～228. 同 瓦器

233

232

229


236

234

235

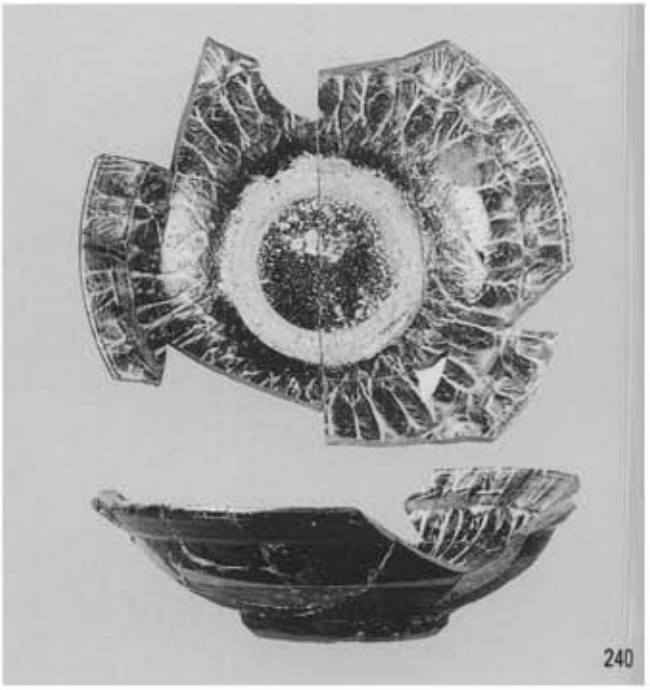
229·232. 撰分遺跡出土青磁
233　　同　　白磁
234～236.　同　　輸入磁器

PL.95

237

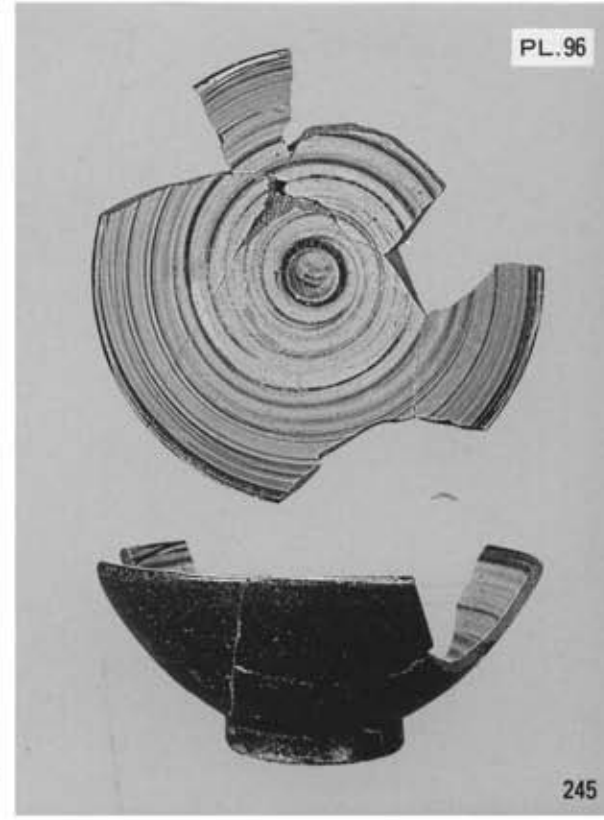
239

238



240

237～240．撰分遺跡出土陶器



241・242・244～246．撰分遺跡出土陶器

PL.97

251

248

253

254

247

249

247～249・251・253・254　撰分遺跡出土陶器

250

252

257

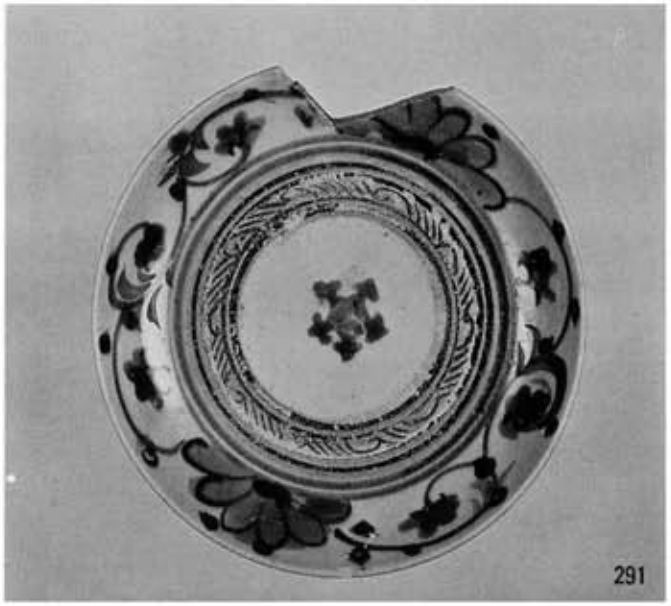
258

259

250・252．撰分遺跡出土陶器
257～259　同　　赤絵磁器

PL.99

261


291

263

266

264

265

261・291．撰分遺跡出土赤絵磁器
263～266．　同　　染付磁器

267

271

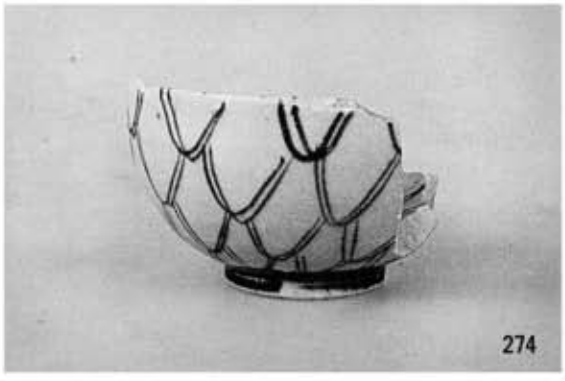
272

268

269

273

270


274

267～274．撰分遺跡出土染付磁器

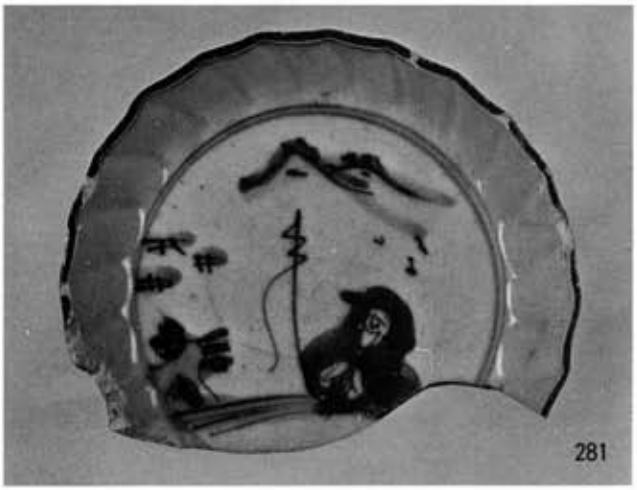
PL.101

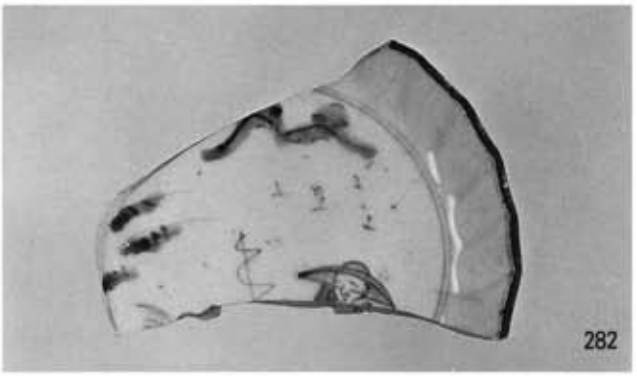
279

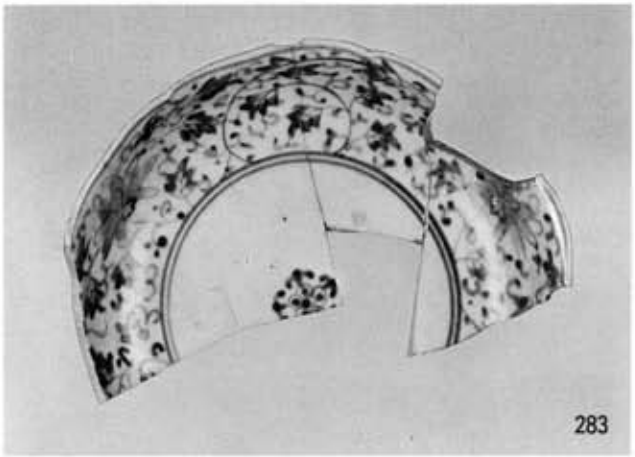
276

277

278

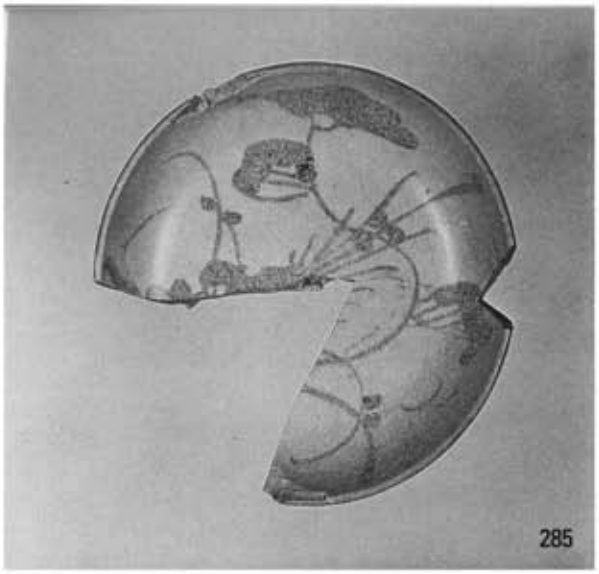

281

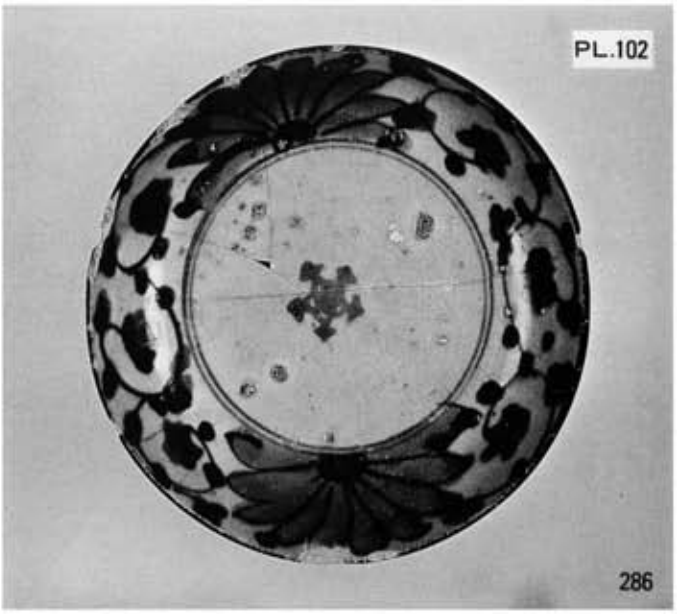

282

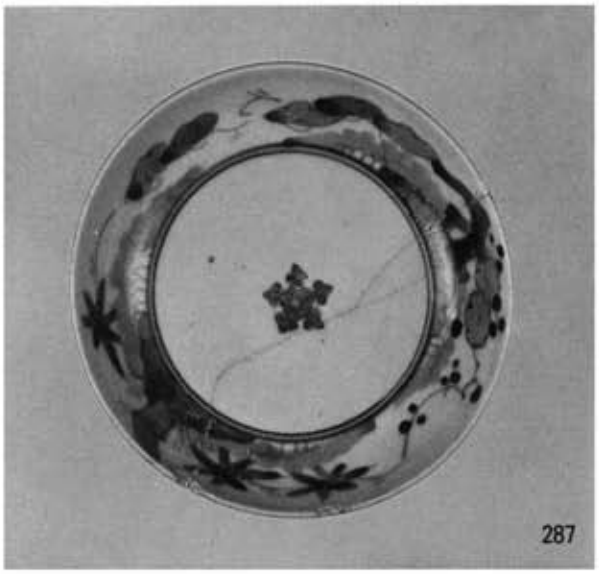

283

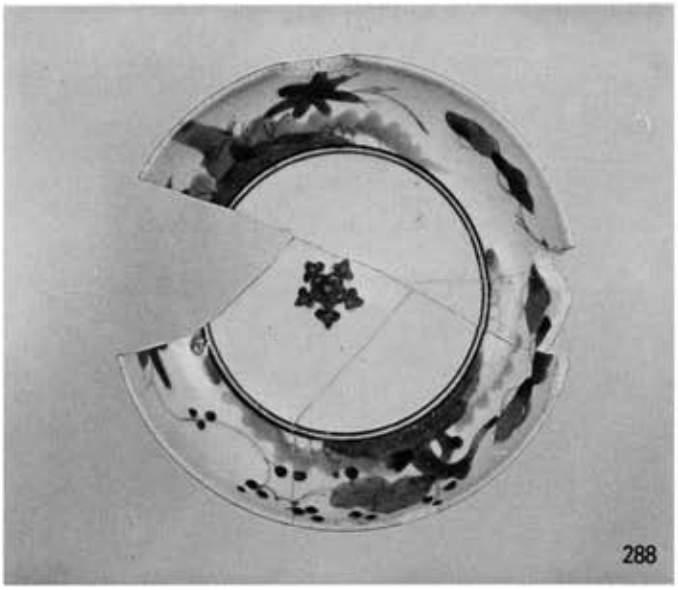
284

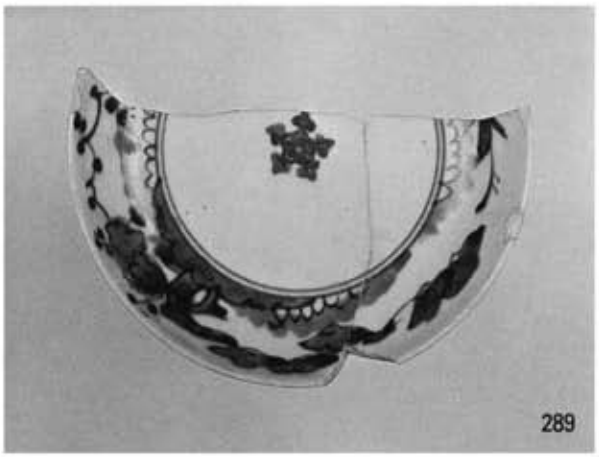
276～279・281～284　撰分遺跡出土染付磁器

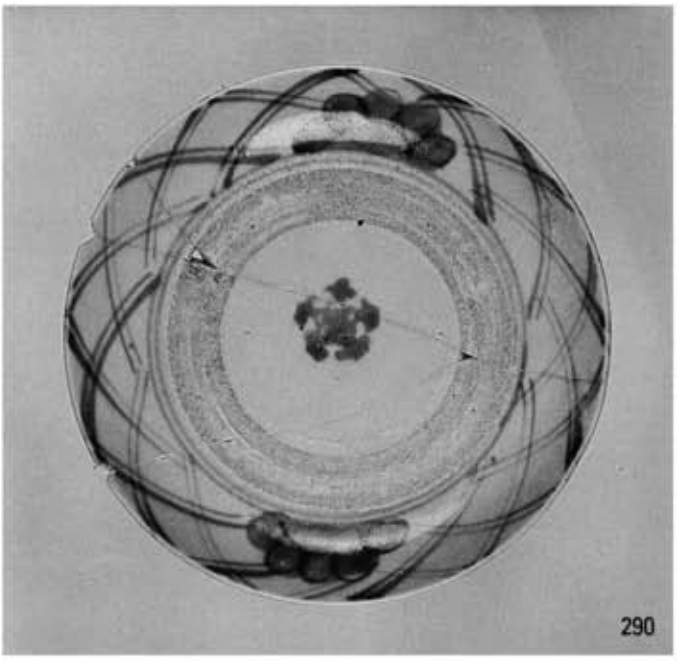

285


286


287

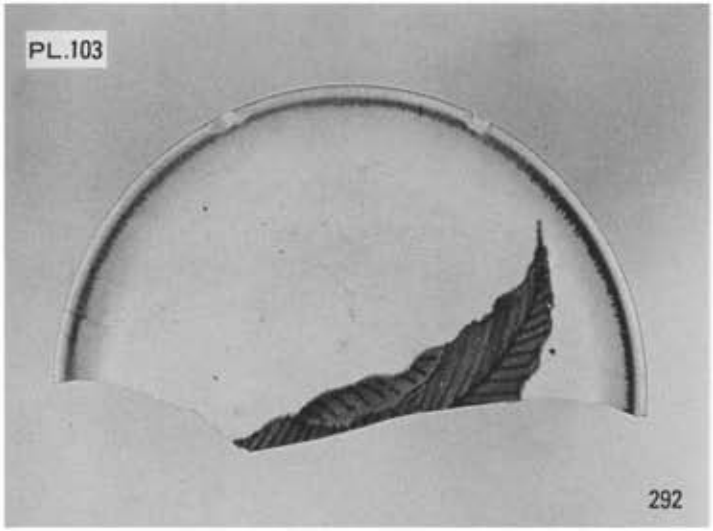

288

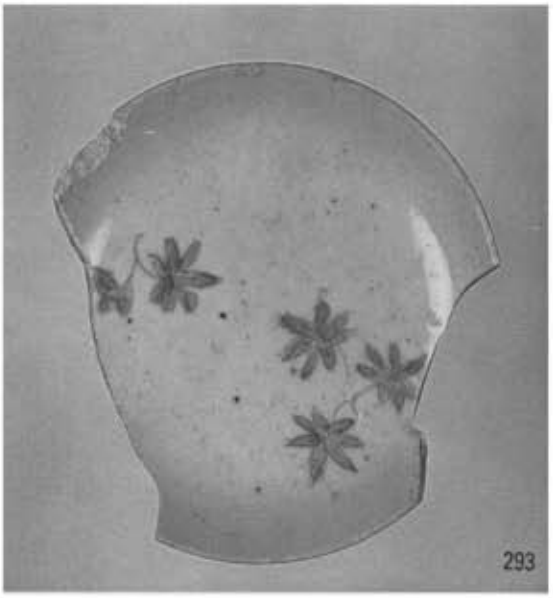

289


290

285～290　撰分遺跡出土染付磁器

PL.103

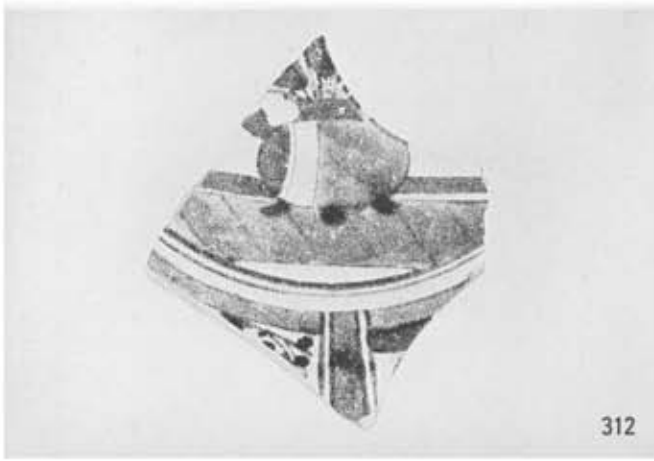


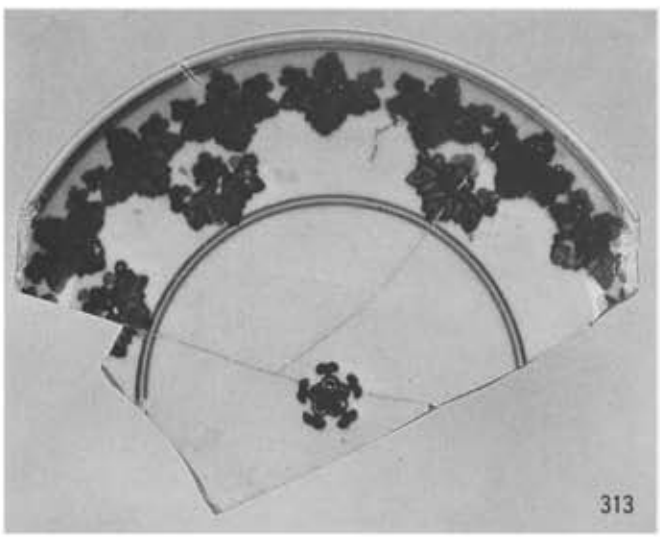



292・293・298～300．撰分遺跡出土染付磁器
297　　同　　青磁

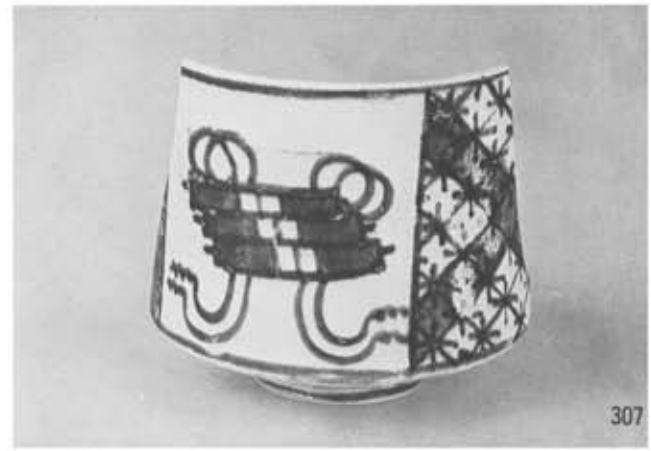
301

304

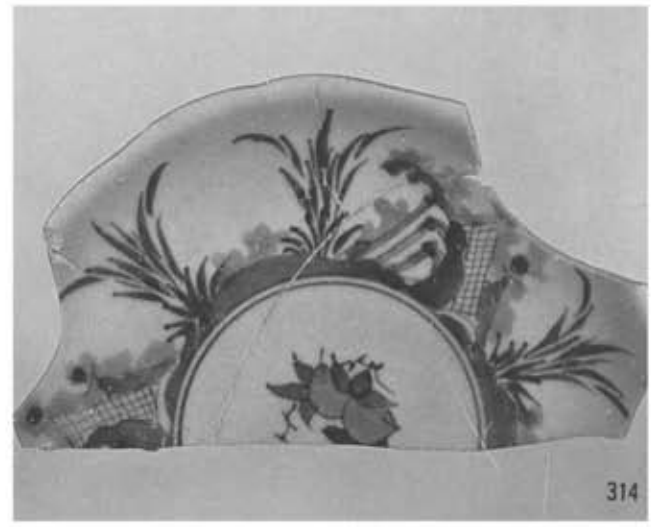

312


313

302


307

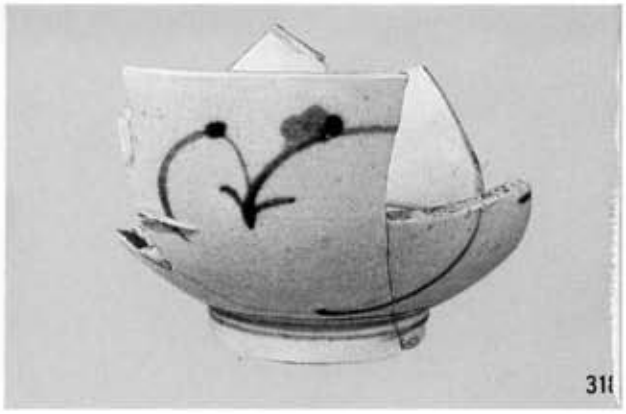
316

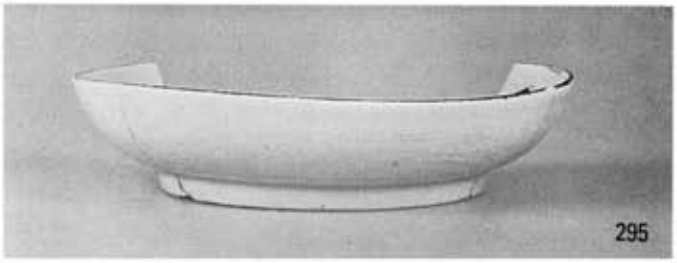

314

301・302・304・307・312～314・316
撰分遺跡出土染付磁器

PL.105

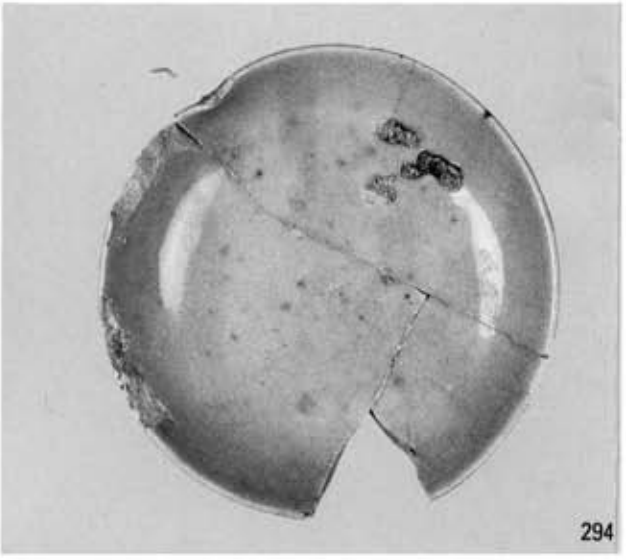
317


318


295

262

280

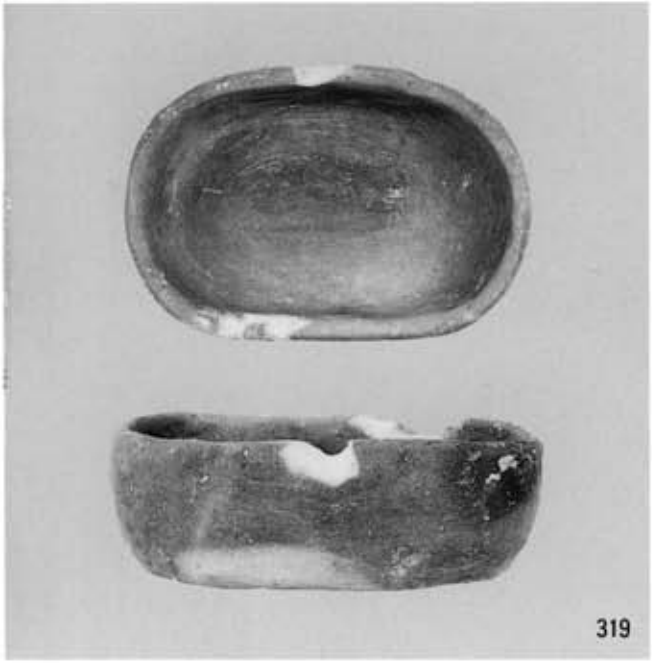

294

305

306

308

262・280・294・317・318
撰分遺跡出土染付磁器
295・305・306・308
同　　白磁



319・320．撰分遺跡出土瓦器

佐賀県文化財調査報告書第87集

# 撰分遺跡

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書 (7)

昭和62年3月31日　印刷

昭和62年3月31日　発行

編集
発行　佐賀県教育庁文化課
佐賀市城内1丁目

印刷　日之出印刷㈱
佐賀市高木瀬町長瀬大和工業団地